

---

# 止むことのない雨の下で

銀翠

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

止むことのない雨の下で

### 【Nコード】

N5311E

### 【作者名】

銀翠

### 【あらすじ】

この世界では起きるはずがなかった第三次世界大戦、その戦争で心傷ついた主人公やヒロインは、戦後一応平和になった世界で何を思い何をしていくのか・・・

## 始まり1

この物語の舞台は、我々が住む地球・・・ただし歴史等、本来起こりえたことが起こらず、起こらないことが起きてしまったいわゆるパラレルワールドのようなものである。

西暦1989年、第二次世界大戦から落ち着いていた国々は、またも悲しい戦争を起こしてしまう。

前大戦の傷跡からいち早く立ち直り、先進国となった日本が好景気の財力を生かし、新たな兵器を生産した。

前大戦終了の時から、敗国となっていた日本は、勝国に虐げられ続けてきた怒りと憎しみを忘れることはなかった。

そしてその怒りと憎しみが引き金になった。新たに開発された兵器はすぐに、アメリカ・イギリスなど連合軍の主となっていた国に放たれた。そして日本の攻撃に呼応するかのように、虐げられてきた敗国は即座に日本側としてその戦いに参戦した。

人々は戦争の悲しさ・辛さを忘れ、またしても武器を手に取り立ち上がってしまった・・・。

日本軍側の先制攻撃・・・むしろ完全に予期していなかった奇襲を受けた各国は、なんとか事態の混乱を收拾し、武器を手に取り戦いを始めた。

しかし、奇襲の傷跡は深く、前大戦の勝国は徐々に押され始めていた・・・。

西暦1997年、第三次世界大戦勃発より8年の月日が経過していた。日本の新兵器と憎悪による兵士の士気の高さにより、なんとか持ち応えていたものの、前大戦時勝国は完全に窮地に立たされていた。

しかし、この年にて勝国側は怒涛の攻めを見せる。

当時5歳のアメリカの少年が、日本国内に攻め入り、重要な施設を破壊し、日本の戦力を大きく削いだからだった。その少年に名前はなかった、アメリカ軍ではInfinitiインフィニティと呼ばれていた。

西暦1998年、前大戦時勝国は日本軍側を圧倒し、第三次世界大戦は幕を閉じた。その影には、インフィニティ、彼の存在がはつきりと示されていた。

西暦2008年春、桜の花びらがゆらゆらと舞う道を、二人の男女が歩いていた。

「高校生か、なんか制服違うと違和感あるよなあ」

灰色のスラックスをはき、白いYシャツの上にブレザーを羽織、ネクタイをつけてる少年が、隣の少女にそう呟く。

身長は160程、髪は黒くて短めでさっぱりしている。肌は白めで、一見貧弱そうに見えるが、実際に筋肉もあまりついていない貧弱君だ。

「そうかなあ？私は新鮮でいいとおもっけど」

青いスカートをはき、白地で襟や袖の部分に青の模様が入ってるセーラー服を着ている少女は、隣を歩く少年にそう答える。

身長は150あるかないか、髪は色素の薄い黒・・・どちらかといえば茶色よりだろう。髪は長めで、今は後ろで一本に縛り、ポニーテールにしている。小柄で細いので、実際の身長よりは小さく見える。

「新鮮か・・・慣れればそれもなくなるだろうけどな」

少年は何かを思い出すかのように、歩きながら晴れ渡っている空を見る。桜の花びらが、空を流れている。

「そうだけど、やっぱりそーゆうのって大切にしたいと思わない？」

「・・・そうだな。ま、服が変わっても楓かえでの中身は何も変わらずが

きだもんな」

真剣味のあつた顔を崩して、隣の楓と呼んだ少女に笑いかける。

「月夜つぎやに言われたくないよ、私よりよっぼど子どもだもん」

呆れ顔で隣の月夜と呼んだ少年を見る。

「育つところもろくに育つてないやつにいわれたくな・・・」

「何か言つた？」

重々しいオーラを放ちながら笑顔で言う楓、もちろん目は笑つてなかつた。

月夜はとっさに走り出した、だつて殴られるのは誰だつてごめんだからだ。

「ほら、さつさと行かないと遅刻するぜ！」

「待ちなさーいーい！」

二人が走り去つた後も、桜の花びらはゆらゆらと舞っていた。

「そうか、分かつた・・・いつでも軍を動かせるようにしておきたまえ」

暗い部屋に二人の男がいた。一人は椅子に座り、もう一人の金髪の青年はその横に立っていた。

「また、戦争がおきるんですか？」

「分かんよ・・・しかし、厄介なことになつてるのは確かなことだろうな」

椅子に座つてる男は、さつきまで話していた電話を置き、横に立つ男にそう返答する。

「どうしてあの国は戦いたがるのですかね・・・」

立っている男は溜め息をつき、頭を悩ませる。

「分かんよ。だが、やるからには負けるわけにはいくまい・・・あちらの首尾は任せたまぞ」

「はい、お任せください・・・それでは失礼します」

立っていた男は一礼をし、部屋から出て行った。

「国を護るために多くの国民を犠牲にするなど、とんだ皮肉だな．．．」  
男は一人、そう呟いていた。

春の日差しを受けながら、窓際の席に座っている月夜は物思いにふけていた。

平和だよなあ．．．平和、か

窓の外を見れば、どこでも見れるような風景が広がっている。家々が建ち並び、木々はそよ風をうけてそよそよと揺れている。

あの頃とは大分違うこの景色を、月夜はいつ見ても好きだった。

(ずっとこのままなら．．．いいのにな)

「月夜くん」

「え？」

とっさに声をかけられ振り向くと、そこには先生が立っていた。

「暖かくて気持ちがいいのは分かるけど、今は授業中ですよ？」

「あ．．．すいません」

クスクスと笑う声がクラスに響く。月夜は少し赤くなって、教科書を広げた。

いまだに桜の花びらが舞う帰り道を、月夜と楓は歩いていた。

「もう月夜ってば、何ぼーっとしてるのよ」

月夜の隣を歩く楓が、からかうように言う。

「窓際は暖かいんだからしょうがないだろ．．．気づいていたなら楓が言ってくればいいのに」

楓と月夜は同じクラスになり、席も隣同士だった。

「私は月夜の保護者じゃないもの」

「いつもは何かと口出してくるくせにな．．．」

ぼそりと呟く月夜。

「何か言った？」

「いや、なんも」

二人は幼い頃から一緒に、今でも仲良くやっている。いわゆる腐れ縁と言うやつだろう。

不意にうるさい音が聞こえ、それは徐々に大きくなっていった。上を見上げて楓が月夜に言う。

「月夜・・・あれ」

「ああ、飛行機だね」

その飛行機はうるさい音をあげているので、見なくても分かる。

「うん・・・また、戦争・・・なのかな？」

「あのなあ・・・飛行機が飛んでるからってなんでも戦争にするなよ」

楓は少し震えている。

「だって・・・月夜にも分かるでしょ？」

「分かるけどさ・・・」

戦争により親を亡くし、孤児として育ってきた楓には戦争に関わる全てのものが恐怖の対象だった。

同じく孤児として育ってきた月夜だが、彼にはまた違ったある種の恐怖があった。

「ほら・・・帰ろう」

止まって震えている楓の手を握り、月夜は歩き出す。

「うん・・・」

そのまま少し歩くと、楓が少し笑ってぽつりと言った。

「月夜は、本当に変わらないね」

「ん？どういう意味だよ」

「子どもの時から、私が震えてる時は手を握ってくれたよね」

「なら楓も全く変わってないってことだよな」

「そうだね」

月夜は少し赤面しながら、楓は穏やかな笑顔のまま、二人は手をつないで帰っていった。

月夜と楓が帰ってくる少し前、一軒の家の前に黒塗りの車が止まった。

いかにも怪しげな車から降りてきたのは、いかにも怪しげなおっさん・・・ではなく、20代中盤に見える好青年だった。

金髪で顔立ちはいかにも優男といった感じだ。

「ここにいるのか・・・あいつは」

昔を懐かしむように頬を緩め、一瞬笑顔を作るが、すぐに表情を変えろ。

(懐かしんでる場合じゃないか、この任務の成否によって、祖国の運命が大きく変わるのだから)

ジャケットの内ポケットに入っている銃を握り、気持ちを落ちつかせてから男はドアの前の呼び鈴を鳴らす。

数秒たった後、「今行きます」と、ドアの向こうから老人の声が返ってきた。

「どちらさまでしょうか？」

ドアを開けて出てきた老人は、柔和な笑顔を浮かべ、優しく微笑んでいる。

「こちらに、月夜という少年がいるでしょうか？」

柔和な笑顔を崩さないまま、しかし目つきが少し鋭くなった老人が答える。

「なんの御用でしょうか？」

男は単刀直入に言った。

「彼にお会いしたい、今はいますか？」

「残念なことに・・・月夜は今学校に行っておりません。あと少しで帰ってくると思います・・・良ければあがってお待ちしております」



なりますか？」

老人の顔からは本意は読み取れない、だからなおのこと、青年はそれを断った。

「いえ、目を空けてからまたお邪魔させてもらいますよ。月夜には、兄が来た、とおっしゃっていただければ結構です」

初めて驚くような顔を見せる老人、青年はそれ以上何も言わずに車へと戻った。

「時間がないというのに・・・あの御老人、なかなか隙がないじゃないか」

戦場で敵と対峙したような感覚をひきずったまま、青年は車を発進させていった。

「ただいま」

「ただいまー」

月夜と楓が家に着くと、家の中はしんと静まり返っていた。

「あれ？父さんとみんなはどこいったんだろうな」

「さあ？散歩にでも行っちゃったのかな」

二人は各自自分の部屋に戻り、鞆を置いて着替えてから庭に出た。

後から来た楓は、先に庭に出ていた月夜が、固まっている様子を見て不思議に感じた。

「どうし・・・きゃー！」

楓はとつさに大声をあげた。

「そんな・・・なんで、こんな」

月夜も言葉がうまくつながらない。

庭に広がっていたのは、老人によって拾われた孤児達の死体だった。

「ど・・・どう・・・して？」

楓はその場にへたり込んでしまい、がくがくと震えている。

「分からない・・・俺にも分からないよ」

月夜の頭に、思い出したくない過去が鮮明によみがえる。

血まみれになつて倒れている人々、辺り一面壊し尽くされ、そこにただ一人・・・立つていた自分の姿を。

「みんな・・・みんなああ」

楓と月夜にとつては、老人に拾われた孤児達は自分の兄弟のようなものであつた。親は違つても、彼らは同じ戦争の被害者として一緒に歩んできた。それが今、無残に全てが壊されていた。

「竜彦・・・春子・・・みんな・・・」

出来ることならみんなの側に駆け寄りたい、二人はそう思つても体が動かなかつた。涙が重力に引かれ、ただ流れ落ちる。

「月・・・夜・・・」

「!?!」

月夜と楓は微かに声がした方を振り向いた。

「父さん!?!」

「ぱぱ!?!」

月夜は座り込んでいる楓を支えて立ち上がらせ、一緒に走つた。

声の方に向かうと、茶室と呼ばれているその部屋から声が聞こえた。

二人は顔を見合わせてから、ゆっくりと頷いて部屋の障子を開けた。

「父さん!大丈夫!?!」

「あつ・・・ああああ」

そこにいたのは、腹部から血を流し倒れている老人だった。

「月夜・・・楓・・・二人とも・・・無事だったようだね」

喋るのも辛い、といったような声を絞り出す老人。

「すぐに、病院に・・・」

「いい・・・もう助かりは・・・しないよ」

「そんなの・・・やだよぱぱあ!」

楓は老人に駆け寄り、手を握り締める。

「何が・・・何があつたんです・・・?」

「歳は・・・とりたくないものじゃな・・・睡眠薬でも・・・使われたんじやろうて・・・子ども達は・・・子ども達は無事かろう?」

二人はつい黙ってしまった、はつとして、とつさに月夜が言った。

「ええ、みんな無事です・・・少し怪我をしまして・・・今手当てをしていますよ」

「月・・・」

月夜は楓の口に手を当てて塞いだ、そしてその手で人差し指を一本立てた。

「そう・・・か・・・良かった・・・よか・・・」

楓が握るその手がどんどん冷たくなっていく。

「ばばあ！」

「・・・つき・・・や」

最後の力を振り絞るように老人は言った。月夜はそれを聞き逃さないように耳を近づける。

「おにい・・・さん・・・が・・・きた・・・よ・・・」

「兄貴が・・・？」

「・・・」

「ばば・・・？ばばあああ！」

老人は安らかに微笑み、そのまま動かなくなった。月夜は深々と礼をした。

「父さん・・・今までありがとう・・・」

「ね・・・月夜」

「・・・何？」

月夜は庭にみんなのお墓を作り終え、大分暗くなった庭で椅子に座って楓と虚ろな瞳でそれを見ていた。大小、8本の枝がささっている。

「ごめんね・・・私手伝えなくて・・・」

「・・・しょうがないよ、男の俺だつてきつかった」

人が入る穴を掘って、そこに一人ずつ埋めていく。それ自体が重労働だというのに、兄弟みたいなものだった彼らの無残な死体を、楓が耐えられるわけがないのだから。

「また・・・私一人ぼっちになっちゃったよ・・・」

「一人じゃないよ・・・俺がいる」

月夜も心に相当の傷を負ったが、楓の前では気丈に振舞うように心がけた。

「月夜・・・」

楓は横に座っている月夜に寄り添った、その小さな体は震え、月夜の腕にしがみついている。

「何があっても・・・楓は俺が護るから・・・」

「うん・・・うん・・・」

(楓を護るためなら、また過去の自分に戻ることもあったとしても、かまわない・・・)  
そう、心に強く誓った月夜だった。

「今日は色々あったから・・・もう寝ようか？あ、それとも、何か食べる？」

月夜の部屋に二人はいた。時刻はもう11時をまわっており、お互い疲れ果てていた。

「いい・・・食欲ないから」

楓はふるふると首を振る。楓はあれからずっと、月夜の腕にしがみついたまま、じっとしている

「楓・・・」

月夜は楓にかける言葉がなかった。むしろ、彼にはその権利がなかった。

「私達も・・・死んじやうのかな・・・？」

魂の抜けたような言葉を、ぽつりと呟く楓。

「俺が護るって言っただろ・・・」

「うん・・・でも、私を護るために死んじやだめ・・・だよ？」

「死なないよ、かえ・・・」

月夜は不自然に言葉を区切った、楓は月夜の顔を覗き込む。

「・・・何？」

「なんでもないよ」

(楓の泣く姿は、見たくないから……。なんとなく、気恥ずかしくて言えないな……。)

「ご飯はともかく、睡眠はとらないと……。体もたないよ?」

多少の気恥ずかしさから話題を変える月夜。

「寝るなら……。ここで寝る」

「ここで……?」

「一人は嫌なの……」

「分かった……。じゃあ布団は楓が使えよ」

不安な気持ちの楓を、月夜は一人で部屋に帰す気にはなれなかった。何より、何が起きてるか事態がつかめない今は、側にいることが一番安全なのだから。

「うん……。月夜は?」

「俺は服でも被って寝るさ」

「それじゃ悪いよ……」

「だからって一緒に布団で寝れないって……。俺のことは気にするなよ」

申し訳なさそうな顔をする楓。

「ごめんね……。おやすみなさい」

「ああ、おやすみ」

楓は布団に入って横になる。楓が寝付くまで、彼女の泣き腫らしてしまった瞼を切なさうに見つめ、月夜はずっと側で手を握っていた。

「寝ちゃったか……。あれだけ色々あったら誰でも疲れるか」

月夜は適当な服を選んで、自分の上にかける。楓とは距離を置いた場所に横になって、今までの事を頭の中で整理しはじめる。

(あれだけの人間が殺されたのに、家がほぼ無傷……。単なる殺人鬼の犯行とは思えないし、やっぱり軍……。なのかな)

自分の知らないところで起きた事態に、歯がゆく思い、頭をかきむしる。それらのこともあるが、実際月夜が一番引っかかっていたの

は・・・。

(父さんが最後に言っていたあの言葉・・・兄貴、か。)

どうしてもその一点が引つかかっていた。

月夜の覚えている限りでは、あの人はあんなことをする人ではない。だがしかし、それならなぜ今頃になって日本に来たというのだ？

その一点に説明がつかず、月夜は悩んだ。そしていきなり、自嘲気味に笑った。

「あんなことがあったのに、どうして俺はこんなに落ち着いているんだろうな・・・」

楓のため？もちろんそれもある、でも何よりも決定的に彼女と違うことがある。

「俺は人間なのかな・・・？誰か・・・教えてくれよ」

月夜の小さな呟きは、暗闇の中に溶けて消えた。

「どうしたんだ？x x」

「海を見てるんだ」

座っている黒髪の少年の隣に、話しかけた金髪の少年が座る。目の前には夕焼けに照らされ、金色に輝く海が見える。

「相変わらずだな、最近は調子どうなんだ？」

「どうでもない」

質素な答えしか返さない少年にあきれる様子もなく、金髪の少年は話かける。

「お前も大変だよなあ」

「別に」

はは、と金髪の少年は笑う。

「海を見ているのもいいけど、そろそろ仕事の時間だよ」

「分かった」

金髪の少年は立ち上がり、「先行ってるよ」と言い残して去った。

「ただ、壊せばいいだけ」

その瞳には光がなく、暗い暗い闇を封じ込めたかのような瞳をした少年。

「そう、それだけ」

少年は立ち上がり、海に背を向けた。

「なかなか・・・最悪な目覚めじゃないか」

いつの間にか寝てしまっていた月夜は、さっきまで自分が見ていた夢を思い出した。今とは全く違う、遠い過去の話を・・・。

それから逃れるように、月夜は頭を振った。そして、布団の中でいまだに寝ている楓の寝顔を眺める。

「楓・・・」

(ごめんな・・・本当は、俺に君を護る権利なんてあるはずもないのにな・・・)

苦々しい思いを心に宿したまま、月夜は立ち上がる。

さすがに学校に行く気にはなれないので、せめて顔ぐらいは洗おうと部屋を出る。

その時、家の呼び鈴が鳴った。とっさに身構えてしまう月夜。

「朝から・・・誰だ？」

警戒をしたまま、玄関から声をかけてみる。

「どちらさまですか？」

ドアの向こうからは、月夜にとって懐かしい声が出た。

「昨日訪ねてきた者ですが、月夜くんはいますか？」

数秒の間、月夜はどうしようかと戸惑ったが、迎え入れることにした。ドアを開けると、金髪で優男風の男が立っていた。

「久しぶりだね・・・兄貴」

金髪の男は驚いた顔を見せた。

「ああ、久しぶりだなティー・・・いや、今は月夜だったな」

月夜は相手をとっさににらんでしまう。

「何の用で来たの？」

「それは追々な・・・中にあがってもいいのかい？」

月夜はあがつていい、と仕草で示し、男に背を向けて歩き始める。

「つれないところは変わってないな」

男は苦笑しながら、その後ろについていった。

月夜は庭にある椅子に腰をおろし、相手に隣の椅子を勧める。

「これ・・・お墓か何かか？随分数があるけど」

男は椅子に座り、少し前にあるお墓に目をやる。

「ああ・・・昨日俺が作ったんだ」

「昨日・・・？何かあったのか？」

男は怪訝そうな顔で月夜を見つめる。

「俺らがいない間に、一家惨殺・・・っていう感じかな」

月夜は隣に座っている男に目を向ける。

「本当なのか・・・？なんだその目は、言っとくが僕は何もしていないぞ。・・・ということは、昨日の老人も死んでしまったのか？」

月夜はお墓に目を戻し、哀しそうに頷く。

「そうか・・・くえない老人ではあったが、いい人そうだったのにな」

「父さんは、元軍人だからね」

自分が拾われた時のことを思い出す。その時彼は、軍服をまもっていた。

「何があつたのか知らないけど、こちらあまり時間がなくなてな、用件だけは伝えておく」

男は少し間をあけてから、切り出す。

「軍人としての僕・・・ランス＝レンフォードは、君を我が軍に復隊させるために来た」

「断ると言ったら？」

月夜は、かつて兄と慕った軍人、ランスに向けて冷たい視線を投げ



つける。

「その時はもちろん」

ランスはゆっくりとした動作でジャケットの内ポケットから銃を取り出し、月夜に向ける。

「こういうことになるな」

自分に向けられた銃を、月夜はまるで他人事のように見つめた。

「やっても無駄だってわかってるだろ？ そんな子どものおもちゃじや、俺は殺せない」

「はは、分かってるさ。こういうのは形が大事だろ？」

笑いながら、ランスは内ポケットに銃を戻す。

「また日本軍に動きがあつてね・・・近いうちに戦争になるかもしれない、君の母国がまた焼かれることになるかもしれないんだ」

「あんな国、母国でもなんでもないさ」

月夜は吐き捨てるように言う。

「じゃあこの国が、今の君には大切なのか？」

月夜は少し考え、口を開く。

「俺に大切な国なんてないさ・・・ただそれでも、護りたいものがある」

「そうか・・・しかし、お前も大分変わったな」

今までの重々しい口調を切り捨て、ランスはとってかわった様に口を開く。

「大分喋るようになったし、感情も豊かになったんじゃないか・・・あの頃は、護りたいものなんてなかっただろ？」

「まあね、誰一人何も教えてくれなかったしね・・・兄貴以外は、さ」

月夜は、険しくなっていた表情を緩め、過去を懐かしむかのように笑う。

月夜にとっては思い出したくない過去のほうが多いが、兄、ランスとの思い出は別だった。

「最初は、単なる興味本位で話しかけただけだったんだけどな・・・」

でも質素な態度とられると、そいつと仲良くなりたいたってなんとなく思わないか？」

「普通思わないと思うよ、兄貴がマゾだからじゃない？」

「誰がマゾだ誰が・・・外れてもいないが」

二人は、はは、と笑い合う。国とか軍人とか関係なしに、二人の間には絆みたいなのが確かにあった。

二人が話し合っていると、ドタドタ、と家の中から音を響かせて少女が一人走ってきた。

「月夜！どうして起こしてくれなかったの、遅刻しちゃうじゃ・・・ってあれ？」

飛び出してきたのは、言うまでもなく楓だった。

「お客さん？」

ランスに気づき、言葉を止めて彼を指差す。

「初めまして、ランス＝レンフォードです。一応月夜の兄をやつてます」

「血つながつてないけどな」

ぼつりと呟く月夜、横から「言うな言うな」と笑いながらランスにつつかれる。

「初めまして、楓です。それより月夜、学校行かないと！」

昨日のことなど忘れたかのような楓の振る舞いに、月夜は少し違和感を感じた。

「俺は今日に行く気ないかな・・・」

「どうして？・・・あっ」

楓は二人がいる場所より少し奥のお墓に目を留めた。そしていきなり、へたり込んでしまう。

「夢じゃ・・・なかつたんだよ・・・ね」

力なく呟く楓は、糸の切れた操り人形のようにだった。

「ああ・・・夢なら、どれだけ良かったかな・・・」

しんみりとする雰囲気の中、突如玄関の方から爆音が響いた。

「なんだ!？」

三人そろって音がした方を見やる。だがしかし、庭からは玄関の様子は見えない。

「最悪の事態つばいな」

「・・・そうだな」

微かに漂う火薬の匂いをかぎ、月夜とランスはなんとなく状況を把握する。

「何・・・？何が起きてるの・・・？」

一人状況が分からなくて立ち尽くす楓の腕をつかみ、月夜は駆け出す。

「逃げるよ！兄貴も早く」

「分かった。全く・・・これだから日本は好きになれない」

三人は庭の垣根を乗り越え、家とは逆側に走る。

走り続けてから5分程、今まで月夜に腕をひっぱられて走っていた楓が、足を止めた。

「楓？どうしたの・・・」

「分からないよ・・・もう何がなんだかわからないよ！」

楓はその場に座り込み、泣いてしまう。

「無理もない話だな・・・彼女は僕らとは違うんだから」

楓を必死で泣き止まそうとする月夜の横に立ち、冷静にそう言い放つランス。その顔つきは兄としてではなく、軍人としての彼だった。「分かってる！でも、今は逃げないと」

「自分だけが助かりたいのなら、彼女を置いて逃げればいい」

「・・・本気で言ってるのか？」

立ち上がり、兄を・・・ランスをにらみつける。

「ならどうするんだ？逃げないで、ここの全員が無事に助かる方法なんて一つしかないだろ？」

月夜の中で何かが切れた、ランスに向かい、その拳を振り上げる。

しかし、その拳はするりとかわされ、逆に足をひっかけられて派手に転ぶ。

「甘いんだよお前は、力があるのならば戦わない？ 護りたいものがあるならば逃げる？」

上から見下ろし、そう強く問いかける。

「・・・分かってるさ」

小さく呟く月夜。

「そんなこと分かってんだよ！ 生きるためには、護るためには戦わないといけないってことを！」

あの頃の自分には、生きるための戦いなんて知らなかった、護るための戦いなんて分からなかった。それを教えてくれたのは父であり、兄弟たちであり・・・そして楓だった。

遠くから何人かの声が聞こえる、追ってきた連中が近づいてきている。

「月夜・・・」

最初は泣いたまま二人の行動を見ていた楓だったが、立ち上がって月夜に手を差し述べていた。

「ごめんね・・・ついて行くから・・・理由は後で話してくれればいいから・・・」

まだ震えが残ってる楓だったが、彼女なりに強く言った。

「だから、そんな哀しそうな顔をしないで」

ランスは暖かい目でその光景を見ていた。そしてある決心を決めていた。

追ってきたやつらの声はもうすぐそこまで来ている。今から逃げる間に合わないだろう、と思いつつも、月夜は楓の手をとり立ち上がった。

「うん・・・逃げるよ！」

二人は声の聞こえる方の逆に走ろうとした。しかし、ランスはその場に固まったままだった。

「ランス？」

「さっさと行け、ここは僕がなんとかするさ」

軍人としての冷たい雰囲気の中に、一片の暖かさ・・・兄としての

優しさを彼は醸し出していた。

「ランスさん……」

「楓ちゃん、月夜を支えてやってくれよ？」

「兄貴……」

「ほれ、さつさといきな」

手で追い払うような仕草をして、二人に背を向ける。

「ごめん……ありがとう！」

二人は駆け出した。二人の足音を背中では聞きながら、僕も甘いな、と小さく呟きを漏らしていた。

肉眼で確認出来た3人が、二人一組、そして残り一人と分かれた。

「隊長、やつらは二手に分かれたようですが？」

一番前を走る隊長と呼ばれた男に、その後ろからついてきた男が問いかける。

「気にするな、狙いは一人だ。そちらを優先的に追う」

「了解しました」

軍服姿の男たちは歩を緩めずに走り続けた。

家と家の間、横幅1mもないすきまに飛び込んだランスは、一人息を殺していた。隠れる意味はなかった、ランスがこの場所に飛び込んだのはもう相手には見えていたからだ。

「さて、二分の一だ……いや、もう少し分は悪いかな？」

冷静にそう呟くランス、右手には銃を持ち、家と家のすきまから通りに狙いを定める。左手には、手のひらサイズの黒く縦長の丸いものを握り締めていた。

足音が近づいてくる。ランスは一瞬の緩みも見せずに、一点だけを見つめる。

数秒後、すきまから男を一人肉眼でとらえた瞬間、ランスの指は動

いていた。

「ぐあ！」

突如後ろから上がった声に、一番前を走っていた男は振り向いた。

「何が起きた!？」

自分の後ろを走っていた男が一人、わき腹から血を流してしゃがみこんだ。

「撃たれたか・・・くそ、今は見逃してやろうと思ったが、やはり殺すしかあるまい」

男たちは先ほど金髪の男が逃げ込んだすきまに近づいていった。手には、ナイフや銃をにぎっていた。

標的を追うことに冷静さを欠いていた彼らには、男が撃たれた瞬間にすきまから投げられた小さな黒い物体には気づくことができなかった。

ランスは、入ってきた通りとは逆方向に全力で走っていた。間もなく、後ろから爆音が聞こえる。

「やっぱり狙いは月夜だったか、やれやれ」

昨日のことも今日のこと納得がいったという様に頷き、ランスは走り去っていった。

「また爆発・・・? 兄貴・・・」

走りながらも自分の兄を心配する月夜、そんな月夜を励ますように、後ろから楓が声をかける。

「きつと大丈夫だよ、月夜のお兄さんなら」

「うん・・・」

今は逃げることを優先としている月夜には、他のことを考える余裕

もそこまではない。

「この通りを抜けて森の方まで行けば、身を隠すところはたくさんある。そこまでがんばれる？」

「うん」

いまだに目が赤い楓だったが、しっかりと月夜についていく。

走り続けて20分程、辺りはさっきまでいた町ではなく、光りがうつすらとしか届かないような森の中だった。

「ふう・・・ここに来るのも久しぶり、かな」

（こんな形でまたここに来るなんて・・・皮肉としか言えないな）

「はあ・・・久しぶりだね」

肩で息をつきながら、楓もそう答える。

「あの洞穴まだあるかな・・・？」

月夜はそう言いながら、楓の手を握って歩を進める。楓のことを気遣って、走らずに歩いた。

「ここは変わらないね・・・あの頃と同じように」

「だね、俺らが変わりすぎたのかもね」

環境も状況も・・・そして二人自身も、時の流れにより変わっていた。

「あつたあつた」

月夜は洞穴を見つけ、自然と笑顔がこみあげてくる。

「懐かしいなあ・・・」

楓も顔を綻ばせ、頷く。

「入り口、こんなに小さかったんだね・・・」

「あの時は大きく感じたのにな、ってゆっくりしてる場合でもないか」

月夜は慎重に洞穴の中へと入っていく、楓もそれに続き入っていく。

「足元危ないから注意して・・・ってうわ」

楓に注意を促す最中に、月夜が岩につまずいて転びそうになる。

「月夜は全然変わってないね、前も同じことしてたよね」  
笑いながら足元に注意し、ゆっくり歩を進めていく二人。

「ん、一番奥まで来たみたいだね」

今までの狭い洞穴の中とは若干違い、多少開けた場所に二人は出た。

「いつも思うよね、どうしてここだけこんなに広がってるんだろう」

「さあ？人間が手をつけた後もないし、自然になったんじゃないか？」

二人は開けた空間の最奥にある岩に腰をかけた。岩の割にはあまりとがってはいなく、椅子に近い形をしている。

「みんなのこと、思い出しちゃうね・・・」

しんみりと、そしてせつなそうに楓は呟く。

「そうだな・・・父さんがよく、連れてきてくれた場所だもんね」

「でもここは、二人の秘密だったよね」

「うん・・・」

なんとなく気恥ずかしげに頷く月夜。二人にとって、一番の思い出の場所はここだと言っても言いすぎではないものだったからだ。

楓が一呼吸置いてから、切り出した。

「月夜は、なんでこんなことになったのか知ってるの？」

「完全に理解してるわけじゃないけど、なんとなく予想はつくよ」

月夜は説明するのをためらった。予想とはいえ、自分のせいでみんなが犠牲になったなど楓には言いづらいことだった。

月夜は少し間を空け、決心したように口を開く。

「父さんやみんなを殺したのは、多分日本軍なんだと思う。違っても、それに関係する何かだと思うんだ」

「どうして・・・？どうして日本軍に日本人の私たちが殺されなきゃならないの？」

「俺が・・・俺の、せいだから」

その呟きはか細くて消えてしまいそうなほど小さかった。しかし、しっかりとその言葉は楓に伝わる。

「月夜のせい・・・？そんなわけないよ！月夜は・・・だって月夜



は・・・」

「初めて会ったときのこと、覚えてる？」

月夜はいきなりそう切り出し、楓を混乱させる。

「え？・・・覚えてるけど、それがどうかしたの？」

月夜は哀しそうに顔をゆがめ、自嘲気味に笑っている。

「じゃあ俺らの初めての出会いは、いつだった・・・？」

「何・・・言ってるの？月夜がばばにあの家に連れてこられた時でしょ？」

「違うんだ、違うんだよ楓」

月夜は片手で顔の半分を覆い隠し、わなわなと震えている。

「出会わなければ良かったんだ、そうすれば楓は幸せでいられたかもしれないんだ！」

月夜の脳裏にあの時のことがよぎる。

「どうしたの月夜？変だよ・・・！」

狼狽する楓を見つめ、月夜は言った。

「辺り一面焼け野原の風景を、今までそこが町だった場所の風景を俺は覚えてる。一人の子どもを抱き締めたまま、死んでしまった女性も覚えてる。・・・その子どもがなんで生き残っていたのかはわからない、でも泣いていたんだ、とても・・・哀しそうに」

「・・・嘘、だよな？」

「子どもは俺に言ったんだ。人殺し、ままとばばを返してよ、って・・・」

「もうやめて！・・・そんなの聞きたくない！」

月夜は最後に、消えそうに呟いた。

「俺は・・・人間じゃないんだ」

楓はほほを涙で濡らし、耳を塞いで顔を振る。月夜の瞳は、もう誰も見ていなかった。見る事が出来なかった。

私は幸せだった。裕福な家に生まれたわけでもなく、貧しい暮らし

を日々送っていたが、優しいばやまに育てられ、毎日が幸せだった。

自分の人生が全て変わってしまうなんて、あの時の私には理解していなかった。

ある日、警報が私の住んでいる町に流れた。その警報は空襲などの時によく使われるもので、私はその音がすごく嫌いだった。

戦争なんてなくなればいいのに……。その時の私はずっとそう思っていた。

ままが私を抱き上げて、家の地下に作られていた防空壕に逃げようとした、その時だった。

さらさら、と川の水が流れるような、そんな音が聞こえた。そして、一瞬にして私の視界は真っ白に染め上げられた。

「何が……。起きたの？」

真っ白になっていた視界が開き、外に広がっていた世界が私の目に入ってきた。そしてその世界は全てが……。なくなっていた。

地面と空以外何もない世界。近くにあった公園、お友達の千代ちゃんの家、私が住んでいた町……。全てが、なくなっていた。

「どう……。なってるの？」

その時5歳だった私には何も分からなかった。いや、きっと今でも分かっていないままなんだと思う。

呆然としていた私を現実に戻したのは、上から垂れてくるドロリとした何かだった。私はおそるおそるさつきまで私を抱き上げていたままを見上げる。

そこには、頭から血を流して動かなくなっただまがいた。

「ま……。ま……。？」

何が起こってるのか分からなかった。かくかくと震えながら、体を動かす。ぴちゃり、と血が体にまとわりつく。全身から血を流していたまの血だった。

私は半狂乱になって、言葉にならない声をあげた。

「やつ・・・ひぐ、あああああ!!」

涙が込み上げ、その恐怖から逃げるように私は叫び続ける。全てが怖かった、全ての現実から逃げ出してしまいたかった。

狂ったように叫ぶ私の前に、私と同年代ぐらいの男の子が空から降りてきた。実際に空から降りてきたのか、歩いてきたのかは、正常じゃない私には分からなかった。

「全部壊したはずなのに・・・」

無感情に、無表情にそう呟く少年の姿は、私の目には悪魔に見えた。実際その少年は黒い羽を生やし、底の見えない黒い瞳で私を見ていた。

「ひ、人殺し！私のままとぱぱを返してよ!!」

私はとつさに叫んでいた。恐怖におびえつつも、震える声が勝手に出ていた。

「まま？ぱぱ？」

少年は聞いたことのない単語の様にその言葉を口にした。少年は不思議そうに、壊れてしまったおもちゃを見るような目つきで私を抱き締めているままを見る。そして再び私の方に視線を戻し、少年は問いかけてくる。

「それがままとぱぱ？」

私が出なかつた。少年の言っている意味が分からなかった。だから、私はその少年をにらみつけた。それしか出来なかつたから。

「変なやつ、でも初めて、すぐに壊れなかつたやつ見た。だから、お前壊さない」

無機質に響くその声が、私には人でないものに聞こえた。

「仕事終わったから帰る、また」

言いたいことを一方的に言ってから、その少年は帰っていった。私には何が起きたのか全く分からなかった。それからしばらく、その場で呆然としていた。

## 始まり1（後書き）

国とか軍に対する微妙な表現とか出てきますが、パラレルワールド内なのでその辺は・・・気にしないであげてください（つ　Ｔ）  
—  
—  
—  
—  
—  
—  
—

## 始まり2

西暦1989年、第三次世界大戦勃発。日本軍側は初回から圧倒的な攻めを見せ、短期決戦になると誰もが思っていた。

しかし、物量では勝っている国、前大戦勝国はなんとか持ち直し、戦争は長々と膠着状態に陥った。

西暦1992年に、それはこの世に生を受けた。前大戦勝国の筆頭であったアメリカ軍は、その実験を秘密裏に進めており、そして長い実験の後にそれが生み出された。

その実験とは、男と女の生殖器により、人工的に抽出されたそれを媒体とし、薬物や電気などの外界のエネルギーを混じり合わせ、人の形として生まれてきたそれに、ありとあらゆる強化作用のある薬物を与えて、生物でありなおかつ兵器である人を作ると言うものだった。

最初の段階では人の形にすらならなかったものが、最終的には人の形として存在し、生物としての常識をはるかに超えた赤ん坊が完成した。

その赤ん坊は3歳まで普通の生活を送っていた。ただ一つ、薬物投与があるということだけは除いて・・・。

3歳からは、軍事訓練を受けた。初めは訝しげにその実験の結果を見ていた軍人や、科学者達はただただ驚くことしか出来なくなっていた。

3歳にして銃器を操り、人とは思えないほどの俊敏性・跳躍力・判断力、全てにおいて人を超えていた。

しかし、彼らはその生物の力をまだ完全には理解していなかった。4歳になったそれは、軍事訓練の最中に突如一对の大きな羽を背中から生やした。漆黒の闇が羽になったかのようなその羽は、色に似合わず美しく、不思議な違和感を人々に抱かせた。

そして次の瞬間には、周辺にあった町や軍事施設が、一瞬にして消

し飛んでいた。その生物は何が起きたのか分からず、ただ呆然と辺りを見回す、遠く広がる荒野を見つめながら、何も言わず、何も行動せず、ただそこに超然と立っていた。

一年間の間に、その生物はその力を使いこなせるようになっていた。好きな時に破壊し、好きなところを破壊できる力を……。

二人の少年と少女が、薄暗い闇の中に座っていた。少年はうつむいている、光りの宿っていないその黒い瞳には、何も映ってはいなかった。

少女は目元を押さえている、涙が流れているわけでもないが、泣いているようにしか見えなかった。

月夜が話を終えてから約2時間、二人は何もせず、何も話さずにつとそこにいた。

（何が……何が護るだ……楓をこんなに苦しめてしまったのは俺じゃないか……）

月夜は悩み、苦しんでいた。罪悪感に苛まされ、まず死ぬことが出来ないこの体が崩れて消えてしまいそうなほどだった。

（もう……何もわからないよ……ぱばに会いたい、ままに会いたい……）

楓もまた、悩み、苦しんでいた。両親を殺した憎い相手が目の前にいる。しかし……彼女にはどうすればいいかわからなかった。

長い長い沈黙の中、月夜が言葉を発した。

「……楓は、生きたい？」

その声はとても弱弱しく、今にも消えてしまいそうなほどだった。

「……死にたくない、でも……本当は分らない」

死ねば両親に会える、こんな辛い現実から抜け出せる。そう思いつつも、心の中でやはり生きたいと楓は思っていた。しかし、それが巧く言葉にすることが出来なかった。

「死にたくないなら、今だけ・・・今だけでいいから、俺についできて欲しい」

長い沈黙の間に、月夜は自分なりの答えを出していた。楓を護りたい、と。

(なんて身勝手なんだろうな・・・俺は)

自分を心の中で嘲笑い、楓の答えを待つ。

「・・・一つだけ約束して」

「何？」

楓は顔をあげて、月夜を見た。

「もう誰も殺さないって・・・」

楓のその言葉は、月夜の胸を深く切り刻むには十分な言葉だった。

少しの間をあげてから、月夜は答える。

「分かった、もう誰も殺さない」

月夜も顔をあげて、楓の目を見つめる。闇から開放されたその瞳は、しつかりと楓を見つめていた。

「・・・じゃあ、ついていくよ」

楓自身、うまく笑えたか分からない、でもその顔には、少しながらも笑顔があった。

「・・・うん、行こう」

月夜もなんとか笑い返すことが出来た。月夜は立ち上がり、入ってきた方向に歩き出す。

「終わらせなきゃいけないんだ・・・戦争なんて、もう誰も殺さない、殺させない・・・」

自分に言い聞かせるように、月夜は呟く。楓にその声は届いていなかった。

「月夜！」

楓は立ちあがり、先を歩く月夜の背中に声をかけた。

「何？」

肩越しに楓に振り返る月夜、その様子は、いつも通り楓が知っている月夜だった。

「・・・なんでもない」

「・・・そっか、行こう、間に合わなくなる」

前を向きなおし歩いていく月夜、それに楓はついていく。

(ひどいこと言っちゃったな・・・私。月夜は、約束なんかしなくてももう誰も殺さないはずなのに・・・)

楓自身もなぜそう思うのか分からない。しかし、楓にとって月夜は大切な家族であり、一番身近な人間である。だからこそ、彼のことをよく知り、そして・・・一番信頼している。

(ぱばとままを殺したのは憎い・・・でも、月夜は月夜なんだよね・・・馬鹿で、優しくて・・・そんな月夜が私は、)

「どうしたの？」

足を止めてる楓を見て、月夜は言う。

「なんでもないなんでもないよ」

楓にも気づかないうちに、彼女の足は止まっていた。

(ほんと・・・馬鹿・・・)

歩くのを再開し、月夜の後ろをついていく。複雑な感情が楓の胸をしめつけていた。

「そっいえばどこに行くの？」

無言で前を歩いていく月夜に、少し気になって楓は声をかける。洞窟を出た二人は、さっき通ってきた道を戻っている。

「まずは兄貴を捜さないといけないから」

と言いつつも、月夜は捜しているというよりは、目的の場所へと歩いてるだけという感じに見える。

「そうなんだ・・・そろそろ暗くなっちゃうし、見つかるかな？」

「大丈夫だよ、どこにいるかはもう分かっているから」

それはただ単に親しいからどこにいるのか分かるという意味ではなく、人間からはかけ離れた月夜が持っている能力により、もう見つかったらという意味だ。それを知らない楓は、「そうなんだ」と納得した。



(今考えれば・・・破壊と殺戮以外にも色々使えるんだな)  
幼き頃から破壊と殺戮に使われてきたその力・・・今の月夜にとって、その力は忌み嫌うものであったが、使い方によってはかなり利便性のあるものだ。と月夜は理解した。

二人は歩きながら色々考えていた。喋ることはあまりなかったが、それでも二人が考えているのは同様に相手のことだった。

(私はどうしたいんだろう・・・月夜が憎いのかな・・・？ううん、そんなことない・・・でもそう思うのは、月夜が言ったことを信じてないから・・・なのかな？分からないよ・・・全部終わって、また日常に戻れたら・・・月夜とゆっくり話したいな)  
前を歩く月夜を見つめながら、楓は後ろからついていく。

(嫌われたかな・・・？嫌われてないわけないか、両親の仇だもんな俺・・・今だけでもいい、死んだってかまわない、今は・・・楓を護りたい)  
後ろにいる楓の顔をなるべく見ないように、月夜は前を歩き続けた。お互いがお互いを想いあっているのに、二人はそれを口に出すことはなかった。

ランスが身を隠していた廃屋に、月夜と楓の二人が入ってきた。

「兄貴、無事だったみたいだね」

無事だったのは分かっていたが、一応そう言う月夜。

「なんとかな・・・で、答えは出たのか？月夜」

「なんでもお見通し・・・ってわけか」

「答えて？」

二人の会話に入れずに楓は困ったが、なんとか疑問を投げかけてみる。

「楓ちゃんにちゃんと言っていないのか？全く・・・いつもながら困ったやつだ」

「護るとは言ったよ」

護るとい言葉の奥に、深い意味を込めて月夜は言う。

「それだけじゃ分からないだろ・・・」

はあ、と溜め息をついて、ランスはその場に寝転がる。

「なんのことなの？」

いまいち状況を理解できてない楓は、月夜に問いかける。月夜は少し悩んでから、口を開いた。

「楓に説明するほどのことでもない。それより兄貴、楓のこと、よろしく頼む」

「ああ、そこは任せとけ・・・結果として、お前の行動が僕の祖国を救うことにもなるんだからな」

「兄貴には俺の考えること・・・ほんとばればれだな」

「もう！二人して勝手に話進めて、私にも分かるように話してよ！一人会話から置いてかれていた楓が、二人に対して怒る。」

「楓の気持ちは分かるけど・・・とにかく兄貴、後は任せた」

月夜は逃げるように廃屋から駆け出して行った。それを追いかけてうとする楓の腕をつかんで、ランスは止めた。

「あいつも馬鹿だからさ。だから、今は待つててあげて」

「月夜は何をしようとしてるんですか！？」

ランスは言っているものか悩み、口を開いた。

「月夜は護るって言ったんだよね？」

楓は縦に頭を振って肯定する。

「そのまんまの意味だよ、君らは誰に命を狙われてたんだっけ？」

「日本軍ですよ？・・・もしかして！？」

さすがにありえないと楓は思った、そんな無茶なことが出来るわけがないと思った。

「月夜からあいつのこと聞いたんでしょ？月夜は人間離れしてるから、まあ死にはしないよ・・・死ぬことを望んでなきゃね」

「月夜が死ぬのなんて・・・私は嫌・・・」

楓は弱弱しく首を振って、そう呟く。

「なら信じて待つてればいい、あいつがわざわざ君を僕に任せたのも、危険なことに巻き込みたくなかったからだろうしね」

「大切な人がいなくなるのは・・・もう耐えられないよ」

（いつもそう、自分の知らないところで何かが起こり、自分の目の前で大切な人たちが死んでいく・・・そんな思いもうしたくない・・・）

ランスはと言えばいいか悩み、言葉を発する。

「なんにせよ、君が行ったら月夜の気持ちが無駄になるよ・・・自分の嫌いな姿、君に見せたくないだろうしね」

「・・・私って、本当に何も出来ない」

ランスに聞こえないようにそう呟いて、楓は座った。今日も色々あり、疲れていた楓は気づかないうちに横になり、寝てしまっていた。「辛いだろうけど、がんばれよ・・・二人とも」

ランスは立ち上がり、そう言って自分の上着を楓の上にかけてあげた。

「ふ・・・楓はついてきてない、よな？」

何度か後ろを振り返りながら、走る月夜。

「楓に言ったら、止められそうだもんなあ・・・嫌われてるなら、止めるわけないか」

自嘲気味に笑いながら、月夜は目的地を目指して走る。月夜はのんびりと走っているつもりだが、その実、道路を走っている車をゆうに追い越し続けている。

「本気出して、さっさと行くとするか」

月夜は走ったまま地面を強く蹴飛ばし、空に跳ぶ、そして重力に引かれ落ちるはずが・・・月夜の背中から突き出した小さな漆黒の羽根が緩やかに羽ばたくと、月夜はそのまま空を飛んでいった。その速度は音速に近く、一瞬にして月夜は目的地まで着いた。

「やっぱり出すの嫌だな・・・羽ちゃんとしまっところ」

背中から生えた羽は、元通りまた背中へと戻っていった。

「日本軍基地」、と書かれた門をくぐりぬけ、月夜は中に入っている。門にいた門番の兵士には、少しの間眠っておいてもらった。

「総司令部さえ抑えちゃえばいいんだっけ」

特に緊張した様子もなく、月夜は基地内を歩き回る。

警報が鳴り、軍服を着た男たちが月夜の周りに集まってくる。しかし、彼らは銃を構えるものの撃とうとはしない。

「撃たないのか？・・・戦場だったら、とつくに死んでるよお前ら」  
月夜の瞳の色が変わる、元の薄い黒から、光りさえ通さないほどの漆黒の瞳に。

月夜は兵士がいる空間を見つめ、軽く力を込める。何が起きたか分からないまま、兵士たちは次々へと倒れていった。

「殺しはしない、約束だから・・・」

（とは言え、やっぱりこういう空気はまずいな・・・昔に戻っちゃまいそう怖い）

自分を抑えつつ、ゆっくりと歩を進める月夜。

歩き回っている内に、月夜はそれを見つけた。白い扉に「総司令部」と書いてある部屋を。月夜はその部屋から、どことなくプレッシャーを感じるような気がした。

「何かいる・・・？」

そう思いながらも、その扉に手をかける。すんなりと開いたその扉の向こうには、三人の人間がいた。

「初めまして、こうやって君と顔を合わせるの初めてかね、漆黒の悪魔、月夜君」

真ん中で椅子に座っている人物が、月夜にそう喋りかけてきた。両脇に立っている二人の男女は、姿勢を崩さずただ月夜を見ている。

「あんたが、軍のトップか？」

「そうとも、君自ら出向いてくれるとは恐縮だね・・・先ほどはうちの兵士達が粗相を働いたようだ、手を出すな、と命令はしておい

たのだがね」

白髪その青年は、軍のトップとは思えない程に若い容貌だった。外見は30代といっても問題はない。落ち着いたその様子は、とても軍人には見えない。

「ここに来たのはあんたらの手伝いをしに来たわけじゃない、戦争をやめさせるためだ」

青年は笑いながら月夜を見つめる。

「はははは、今まで多くの人間を殺し、破壊してきた君が戦争を止めさせるとはとんだ茶番だと思わないか」

「戦争になんの意味がある？ 罪のない人々を戦場に送り出し、罪のない人々を数多く殺してしまう戦争なんかに！」

月夜は叫ぶ、彼も戦争によって生み出された、被害者なのだから。

「人は争わなくては生きてはいけないのだよ、誰かを憎み、敵を作り上げることによって人は一致団結するものだ」

「もういい・・・俺は戦争を止めさせにきたんだ、日本が馬鹿な真似をしなければ、アメリカは何もしないはずだ」

その言葉を聞き、白髪の青年は人が変わったように猛り叫ぶ。

「何を言うか！！アメリカは我が国を滅ぼそうとしているんだぞ、だからこそ先手をとって戦争に勝ち、日本の力を各国に見せ付けなければいけないのだ！！」

机を叩き、一気にまくしたてる。月夜はそれを冷たい目つきで見ている。

「人間の命に比べれば、国なんてちつぽけなもんさ・・・国のために人間がいるんじゃない、人間のために国があるんだ」

あんたには分からないだろうけどな、と月夜は付け足す。青年は大きく息を吐いてから、髪をかきあげる仕草をする。

「ふう・・・つい取り乱してしまっただね。くだらない話はもう終わりにするでしょう」

「そうだな・・・あんたに戦争を止めさせようとするなら、実力行使しかないみたいだな」

月夜は目の前にいる相手を見据える。（殺しはしない、でもただじゃ済まさない）

臨戦態勢に入ってる月夜を見て、青年は立ち上がり口を開く。

「君の相手は私ではない。紹介しよう、君と同じ生物兵器のアダムとイブだ」

青年は両脇に立つ二人、赤い髪をしたアダム（男）と青い髪をしたイブ（女）を指し示し、ごく自然にその言葉を発する。その言葉に月夜はかたまった。

「俺と、同じ・・・？」

全身の毛が逆立ち、血液が沸騰するような怒りを月夜は感じた。

「お前らは・・・どうしてそんなことが平然と出来るんだ！！」

月夜は怒りに任せて青年に飛び掛る。そんなことをしなくても遠距離からでも相手を殺せる力を持っている月夜だが、相手に対する怒りにより自然に体が動いていた。

すさまじい速度で青年に向かう月夜、何もなければ一瞬にして肉塊に変わってしまう青年はいやらしい笑みを浮かべそれを見ていた。

次の瞬間、月夜は吹っ飛ばされていた。入ってきたドアを突き破り、さらにその後ろにあった壁をいくつか突き破り、月夜の体は外に放り出された。

「なっ！？」

月夜は何が起きたか分からずに、背中から地面にたたきつけられる。そして追いつきをかけるように、さっきの男女、アダムとイブが上から襲い掛かってくる。

「くそ・・・」

月夜はなんとか身をひねってその攻撃をかわし、その勢いで立ち上がる。しかし相手は攻撃を休めることなく、襲い掛かってくる。

二人のコンビネーションは見事なものだった。片方の攻撃をかわす度に、もう片方が着実に隙をついて攻撃をしかけてくる。

一般人よりはるかに運動神経も良く、肉弾戦もそれなりに慣れている月夜だったが、自分より慣れた動きで襲い掛かってくる二人に

は反撃のいとますらなかつた。

「我が軍の兵器はいかがかね？」

一足遅く建物から出てきた青年が、笑いながらそれを満足気に見ている。

「てめえ！・・・うわっ」

青年を見て生じた月夜の一瞬の隙が、命取りとなった。今までうまく受け流し攻撃を軽くしてきた月夜だったが、その隙をつかれてわき腹への横蹴りを直にくらい、吹き飛ばされる。そして吹き飛ばされた先には、いつの間にかそこに移動していたイブがいた。

やばい、と思つた月夜だが、吹き飛ばされてる状態では思うように体が動かない。待ち受けていたイブに下から蹴り上げられ、月夜の体はかなりの高さまで上にあげられる。

(さすがに死ぬかも、なあ)

死ぬ、という実感が全く湧かない月夜には、その感覚が他人事のように感じられた。

月夜が上に来るのを待ちわびてたかのように、跳躍していたアダムが思いっきり両腕を振り下ろした。その一撃は無防備な月夜の背中に叩きつけられる。ぐしゃあ、という嫌な音が響いた。

その音を他人事のように聞く月夜。(折れたかな？いや、くだかれた・・・?)

体に力が入らず、月夜は叩きつけられた衝撃と重力により、地面に激突した。

「くくくくく・・・ははは、あーっはっはっは」

その成り行きを見ていた青年は、身震いしながら笑っていた。

「まさかこれほどとはな、この二人に君を倒せるほどの力があるなら、やはり君は我が軍には不要だな」

これで日本は勝つ、と付け足しながら、青年はうつぶせに倒れている月夜を見下ろしていた。

「アダム、イブ、とどめをさしたまえ」

冷静に、且つ楽しそうに青年は命令を下す。

倒れている月夜をアダムが片手で持ち上げ、もう片方の手で月夜の額に狙いを定める。

「どこん、どこん」と鈍い音が空気を震わせる。アダムは月夜の額には直接触れてはいない。アダムの手から何かしらの力が働き、空気を通して月夜の額に驚異的な破壊力をもたらしている。

音が響く度に月夜の額からは血が飛び散り、肉片が舞っていく。

どれだけそれが続いたかは分からない、アダムが持ち上げていた手を放すと、月夜は地面に崩れ落ちた。身震い一つせず、月夜はそこに倒れていた。

月夜の血によつて赤く染められた地面が、さらにその範囲を延ばすように広がっていく。

静寂がその空間を支配していた。青年は一人、感極まってるように震え、アダムとイブは倒れている月夜をただ見下ろしている。

静寂を破ったのは、もはや頭部は人の形をしていない月夜の呟きだった。

「死にたいか？」

月夜はそばに立っているアダムとイブに、問いかけた。青年はその声を聞いて、顔色を変えた。生きているはずがない、と思っていたものが喋るその様子はあまりにもおかしく感じたからだ。

「しぶといやつだ！アダム、イブ、完全に破壊しつくせ！」

アダムとイブは動かない。そして再び月夜の呟きが聞こえた。

「死にたいか？」

微かに、アダムとイブが頷いたように見えた。

「お前ら、何をして・・・」

「分かったよ、きっと痛みはないはずだから」

青年の声を遮り、月夜の声が響く。次の瞬間、青年は何が起きたか全く分からなかった。

倒れている月夜の背中から、漆黒の羽が大きく広がり、その羽から細く伸びてきた黒い線がアダムとイブの頭部と胸部を破壊し、二人が崩れ落ちる。一瞬の出来事だった。ありがとう、月夜にはそう聞



こえた気がした。

「な・・・な・・・!?」

狼狽する青年の前で、月夜は立ち上がった。黒い漆黒の羽が月夜とアダムとイブを包み込み、羽が消えると同時に月夜は傷のない完全な状態に戻っている。アダムとイブはマジックのように消えてしまっていた。

そして、月夜は独り言のように静かに呟いた。

「殺したくなかった・・・」

初めて出会った月夜と同じ二人、姿形は人間だったが、強さもその内にある哀しさも、月夜と全く同じだった二人。同じ痛みを知っている戦争の被害者だからこそ、月夜は手を出しにくいと思っていた。でも・・・死にたかつたんだよ・・・な?」

誰に問いかけるわけでもなく、月夜は呟く。人によって生み出された兵器としての生物、人の手ではまず死ぬことが出来ない宿命を持つていた二人、薬で自我を消されていたのなら尚更自分の意思で死ぬことはかなわず、ただ殺し続ける兵器・・・。

「俺と同じだから・・・よく分かるよ」

月夜は虚しくて哀しい想いに駆られ、空を仰ぐ。

「ば、化け物め!」

呆然と立ち尽くしていた青年が、我を戻すやいなや、月夜にそう叫ぶ。ゆっくりとした動作で、青年に目を向ける月夜。

「それを生み出したお前は・・・じゃあなんだよ?」

月夜は青年との距離を一瞬で詰め、胸倉をつかみ持ち上げる。

「ひあつ!」

「戦争の道具に人を使い、自分の地位を守るために人を犠牲にするためえらはなんなんだよ!」

月夜はあいている片方の手で青年の腹に拳を突き入れる。

「げほお・・・や、やめ!」

「人間を・・・俺らをなんだと思っただけだ!」

情けない声を出して懇願する青年を無視し、感情に流され何度も何

度も腹に拳を突き入れる月夜。青年の吐いた血を顔に浴びても、月夜は止まることなく殴り続けた。

「てめえらみたいいな人間はみんな死ねばいい！」

「だめだよ月夜！」

後ろからかけられた声に、月夜は手を止める。

「かえ・・・で？」

月夜はつかんでいた手を放し、後ろに向き直る。青年は意識を失い、倒れていた。

「なんで・・・ここに？」

一番見られたくない相手に見られた月夜は、声がかすれていた。楓の隣にいるランスが、口を挟む。

「行くつて聞かなくてな・・・寝た瞬間起きるとは僕も思わなかったんだよ」

楓は月夜が行った後すぐに寝てしまったが、やっぱり月夜が心配な楓はすぐに起きてランスに無理やり連れてきてもらっていた。

「月夜・・・約束したよね・・・？もう誰も、殺さないって」

「・・・約束した、でも・・・俺があいつを殺さないと・・・何万人もの人がまた犠牲になるかもしれないんだ！」

楓の目を見ることが出来ない月夜は、視線を下に向けてそう強く言った。

「だめだよ・・・殺しちゃったら・・・だめだよ」

月夜は胸が切り裂かれるような思いで叫んだ。

「偽善なんだよ、所詮はきれいごとなんだ！幸せや平和を望むなら、誰かが犠牲になるのは仕方ないんだ！！」

自らが犠牲になり、そして数多くの人を犠牲にして、月夜は自分の生まれ育った国を護ってきた。自分の意思とは関係なく、成り行きだったとはいえ彼は確かにあの国を護ってきた。

「そんなこと分かってるよ！・・・でも、月夜が・・・月夜が人を殺すのは嫌なの！」

月夜は言葉に詰まった。楓がただ単に、人が死ぬのが嫌だと言う理

由でそれを約束したわけではないと、気づいたから。

「そうやって・・・月夜は傷ついてきたんだよね？月夜が・・・傷つくのはもう見たくないよ・・・」

月夜の胸に熱い何かが入み上げた、今まで凍っていたかのような心が、今初めて溶けたような、そんな感じがした。

「確かに戦争が起きるのは嫌・・・人がたくさん死ぬのも嫌・・・でも・・・」

言葉に詰まっている楓に背を向けて、月夜はしゃがんで、倒れている男の顔をはたいた。

「月夜！？」

ランスが楓を抑えて、「黙って見てたほうがいい」と楓に呟いた。気を失っていた青年が目を開けると、月夜はその顔を覗き込んで言った。

「おい、もしまた戦争なんて起こそうとしたら、この程度じゃすまさねーぞ？」

「わ、分かった、約束する！」

瞳を微かに黒く染め上げた月夜の目を見て、青年はかなりうるたえ、おろおろとそう答えた。

「手回しはすぐにやれよ？」

そう言い残してから、月夜は立ち上がり後ろを振り向いて楓とランスの方に歩いて行く。

「ただいま、二人とも」

言いたいことはたくさんあったが、月夜は最初にそう言って笑みを見せた。

「・・・おかえり、月夜」

「ああ、おかえり」

楓は月夜に飛びついて、涙を流しながら強く抱き締めた。

「さあ、帰ろうか」

おろおろする月夜を見て笑いながら、ランスは二人を車に促した。

それから一カ月後、あの忙しかった二日間が嘘だったかのように、  
楓と月夜は平凡に暮らしていた。

普通に学校に行き、高校で新しく出来た友達たちと一緒に遊んだり、  
相変わらずぼーっとしながら授業を受けたり、世界を見れば決して  
平和とは言える世の中ではない世界で、二人は幸せに普通の生活を  
送っていた。

「おかえり、今日の夕飯は焼肉だぞー」

そんな二人の家には、なぜかいまだにランスがいた。

「ただいま・・・兄貴さあ、いつまでこの家にいるんだ？仕事しろ  
よ社会人」

「ただいまー、いいじゃない月夜、お兄さん料理上手だし」

学校から帰ってくると、二人は必ず玄関でランスに迎えられていた。  
「月夜のおかげで大分暇も出たことだしな、事後処理なんか他のや  
つらに任せて、僕はゆっくり休暇をとったんだよ・・・って何回言  
わせるんだお前は」

二日に一回は同じやりとりをしてる二人を見て、楓は笑っていた。

「相変わらず仲良いね・・・ちよつと嫉妬しちゃうかも？」

「大丈夫大丈夫、俺の中じゃ楓と兄貴は天と地ぐらいの差があるか  
ら」

「言いすぎじゃないか・・・？」

そんな馬鹿話を毎日のようにしながら、三人は楽しく暮らしていた。  
楓はたまに、家族だったみんなのことを思い出し、寂しそうな顔を  
見せるところもあるが、基本的に大分明るくなってきている。

月夜は大分心に余裕が出来たようで、大人になっている感があるが、  
やはりランスの前ではまだまだ弟と言った感じだった。

ランスは天然的なぼけをよくかましている。軍人としては冷静沈着  
で度胸もあるのに、なぜか普通の生活で抜けてるところが多い。

危惧していた戦争も行われる様子がなく、三人は幸せに暮らしてい

た。

微かな光りしかない暗闇の中、月夜は庭の椅子に座っていた。後からやってきたランスが、隣の椅子に座る。

「こんな時間になんの用だ？」

「今更だけど、ちょっと気になってたことがあってね・・・」

月夜はランスの方を見ずに、奥にあるいくつかの墓を見ながらそう呟いた。

「気になってたこと・・・か」

ランスは月夜が言いたいことを理解していた、しかしそれを表情には出さなかった。

月夜はゆっくりと言葉を紡ぎ出す。

「この前の事件でさ、日本の軍人やあの白髪のやつを見て思ったんだけど」

すぐには次の言葉を吐き出さず、ゆっくりと間を置いて月夜は喋る。

「なんかさ、手際がすごく悪かったと思うんだよね・・・」

「そうだな・・・」

ランスはそれに同意し、頷く。月夜はそんなランスを見ないまま、続けた。

「でも一つだけおかしいって感じた点があるんだよね・・・本当に、なんとなくではあるんだけど」

「要するに、何が言いたいんだ？」

月夜が言いたいことを分かっているランスは、単刀直入に言うことを求めた。ゆっくりと月夜は、ランスに顔を向ける、その瞳は翳りを帯びていて、少し暗い。

「・・・父さんやみんなを殺したのは、兄貴・・・いや、ランス、お前だろ？」

その瞳を見ながら、特に緊張した様子もなくランスは言う。

「よく気づいたな・・・やったのは僕自身じゃなくて、連れてきて

いた部下だったんだけどね・・・命令したのは僕だけだ」

「もし日本の軍人だったら、家ごとぶっ飛ばしてると思ったんだよね・・・睡眠薬を使ったり、家自体を殆ど荒らさないで何人も殺すなんて、俺がこの前見た限りでは日本の軍人じゃありえないと思っただ」

「それだけの理由で僕を疑ってたわけか？」

「そうだな、後は・・・勘ってところかな。ランスが俺のことを知っているように、俺もランスのことを知っているからね」

血はつながってはいないが、二人は兄弟のようなものだ。お互いが理解しあっていることは、少なくともはない。

「ばれるとは思ってた。それでも、僕のシナリオ通りに事はうまく運んだし、今のところ戦争も回避はされた・・・必要悪、というものだろうか？」

月夜は無言でランスを見つめる。その瞳に、殺意や敵意は感じられない。

「それで、どうしようって言うんだお前は、僕を殺すかい？」

月夜はゆっくりと首を振る。

「殺さないよ、俺はもう誰もね・・・それに、実は結構ね、感謝してるんだよこれでも・・・」

「憎まれる覚えはあっても感謝される筋合いはないと思うぞ・・・」

「確かにさ、誰かの犠牲で作られる幸せや平和なんて、嫌だとは思うよ・・・でも、俺も色々気づかされたよ、今回のことだね」

月夜は溜め息をつきながら、複雑な顔をする。

「もしあの時何もしないまま戦争がまた起きてたら・・・俺はどうしてたんだろうって最近思う」

ランスは無言で、その話に耳を傾けている。

「楓たちを護るために、また昔のように多くの人を殺していたかもしれない・・・昔に戻るのを嫌がって、目の前で大切な人たちが殺されても、何も出来ない自分になってたかもしれない」

「・・・やっぱり最善の道だったのかもしれないな、僕はお前に殺

される覚悟ぐらいはもってたんだけどね」

そのランスの言葉に、月夜は自嘲気味に笑う。

「最善の道ってのはないよ、結局は誰かが犠牲になるんだ・・・数とかの問題じゃないさ」

二人はしばし沈黙する。静かな空間を風が吹き、緑の木々をゆつくりとしならせる。

「・・・なんで人は争うんだろうな？」

月夜の小さな呟きが、沈黙を破る。

「そうだな・・・簡単に言ってしまうえば、闘争本能みたいなものだ。誰かを蹴落として、自分が上に行きたい。それが人間の・・・いや、生き物の真理だろ？」

「なるほどね・・・難しく言うとな？」

ランスはしばし考え、口を開く。

「生きたいから、何かを護りたい・・・からかな？」

「それも十分簡単じゃない・・・？」

「なんで争うかなんて人類の命題みたいなもんだ、そんな簡単に答えなんて出るわけないだろう」

ランスははぐらかすように、月夜から視線をそむける。

「それもそうか・・・さて、明日も学校だし俺はそろそろ寝るとしようかな」

月夜は立ち上がり、一度だけお墓に頭を下げたから、ランスに向き直る。

「兄貴はどうするんだ？というか、いい加減帰れよ」

さきほどまでの暗い雰囲気ではなく、いつもの月夜の雰囲気ですにそう言う。

「兄はもう少し敬うものだと思うぞ・・・そうだな、僕も寝るとしようかな」

ランスも立ち上がり、深くお墓に頭を下げた。数秒の間、ランスはずっとそうしていた。

「汚れ役演じるのも楽じゃないね」

月夜が苦笑混じりにそう言うと、頭を上げたランスは視線を星空に向けて言う。

「平和に犠牲はつきものさ、罪もなく死ぬ人間も、罪を負って生きていく人間も・・・な」

ランスにも月夜と同様に思い出さたくない過去がある。軍人としての彼は、罪を背負いながらも強く生きていく道しかなかったのだから。

「おやすみ、兄貴」

「ああ、おやすみ月夜」

二人が去った後の庭は、暗い静寂に包まれていた。



## 始まり2 (後書き)

・・・戦闘シーンがしょぼいのは作者の能力が低いからです。精進  
していかなければ——

## 嵐

春の日差しが徐々に熱を帯び、夏に変わろうとしている五月、強くなってきた日差しが燦爛と照らす中、楓と月夜とランスの三人は玄関の前にいた。

「本当に空港まで見送りに行かないんでいいんですか？」

車の横に立つランスに、楓がそう聞く。

「ああ、かまわないよ・・・さすがにこれ以上面倒かけるわけにもいかないしな」

「そんな、面倒なんて・・・」

月夜はそんな二人のやりとりで口を挟まず、空を見上げてぼーっとしている。そんな月夜を、楓は横からつついた。

「月夜！お兄さんに何も言わなくていいの？」

「ん？ん・・・」

今更特に言うこともない月夜は、少し考えてから口を開いた。

「さっさと帰って仕事してこい」

楓は肩を落として呟く。

「全く・・・素直じゃないんだから」

「相変わらずお前は容赦ないというかつれないというか・・・ま、いいとしようか。夏休みにでもなったら、一度こっちに遊びにおいでよ」

ランスは月夜の態度に苦笑しながら、そう言う。

「あんまり行きたくないな・・・嫌なこと思い出しそうだし」

アメリカに兵器として生み出された月夜には、あの国は嫌な場所ではないという思いがある。

「遊びに来る分にはいいところだと思うよ、海で泳げるし買い物するところもあるし、何より日本よりは規模が大きいからな」

ランスにとっては、愛する母国を嫌われたまま、というのはあまり良い思いではないようだ。

「海割ったり町吹っ飛ばしたり基地吹っ飛ばしたり・・・確かに広いから出来ることだったような気もする」

最悪なことを思い出したかのように、月夜は遠い目をする。

「うっ・・・それはほら、力が使いこなせてなかっただけで、今は平気だろ？とにかく、一度こっちにも顔見せに来いよ、楓ちゃんと一緒にさ」

「私は・・・行ってみたいかな、戦争とかあったから確かに良い気はしないけど、日本じゃ見れないようなものとか見てみたいもん」

「ほら、楓ちゃんもこう言ってるし・・・な、月夜」

楓に助け舟を出してもらったランスは、なんとか月夜の落ち込んでいる雰囲気を変えようとはがなばる。

「・・・考えとくよ」

楓のことになるといまいち弱くなる月夜は、あいまいな返事をランスに返した。

「よしよし、来たら色々案内したりするよ」

ランスは一度笑ってから、急に顔色を変える。

「そうだ、急がないと飛行機に間に合わなくなる・・・落ち着いて話出来なくて悪いね、楓ちゃん、月夜のこと頼むよ」

あの日、楓に言ったことをまた繰り返し、ランスは自分の車に乗り込む。窓を開けて、「またな」、と言い残し、ランスは急いで車を発進させていった。

その車の後ろ姿が見えなくなるまで、二人はそれを見ていた。

「面白い人だったね、ランスさん・・・月夜も、もう少し素直になればいいのに」

「俺らはいいんだよ、ずっとこんな感じのままだね」

気持ちが伝わりあっているからこそ、お互いがそんな感じの二人。

楓はそんな二人を、羨ましく思い、そして少しだけ嫉妬した。

ランスを見送った後、二人は家に帰り楓が作ったお昼ご飯を食べていた。

「楓が作るご飯食べるの久しぶりだなあ」

月夜はそう言うが、実際は一ヶ月程しか日はあいていない。

「ランスさんがいる間は、ずっと彼が作ってくれてたもんね」

楓はエプロン姿のランスを思い出す。なぜか非常に似合っていて、料理も上手だった。ランスという人間に似合わないその不思議なバランスに、楓は今でも思わず笑ってしまう。

そんな楓に気づかず、楓と対面側に座って黙々と食べていた月夜が口を開く。

「確かに兄貴の料理はおいしかったけど、楓の作ったやつの方が安心する」

子どもの頃にランスが作った料理で、色々苦労した月夜がそれを意味して言った言葉だったが、それを知らない楓は顔を赤らめて、「そ、そうかな?」、と嬉しそうに微笑む。

それから黙々と食べている月夜を、楓は嬉しそうに眺めながら自分の分を食べていた。

「ごちそうさま、洗い物は俺がやるから、食べ終わったら流しに置いておいていいよ」

自分の分の食器を流しに置いてから、月夜はテーブルの近くの窓際の絨毯に寝転がる。

「うーん・・・暖かいなあ」

日差しを受けて暖かくなっている絨毯は、ご飯を食べ終わった月夜にとって最高の睡眠道具だった。

「食べてからすぐ寝ると牛になるよ。ああ・・・でも月夜は少し脂肪つけたほうがいいかもね」

月夜はあまり脂肪がなく、筋肉も控えめな貧弱君だ。女性にとっては羨ましい体形ではあるが、男性としては少し頼りなさそうにも見える。

「あんまり太らない体質なんだよね・・・ふわあ」

欠伸をしながら、ポカポカ陽気に眠気を誘われる月夜。

「寝る前にちゃんと洗い物してね？ごちそうさま」

楓は自分が使い終えた食器を、流しに置いてくる。

「分かってるよー」

月夜は立ち上がり、ゆっくりと流しへと歩いていく。

基本的に、楓が作って月夜が洗う。この形はみんなが生きている時からそうだった。

「二人分だと、洗うのも楽だよなあ・・・」

それを楽に思うときもあるし、反面哀しくも思う月夜だった。

洗い物を終えてさっきの絨毯に戻ると、楓がそこに横になっていた。

「食べてから寝ると・・・なんだっけ？」

多少の皮肉をまじえて、月夜が楓にそう問いかける。

「私だつて太ってるほうじゃないから気にしないもん・・・」

そう反論する楓の横に、月夜も寝転がる。

(平和だなあ・・・俺がいて、隣には当たり前のように楓がいて・・・変わっちゃったこともあるけど、こんな平穏がずっと続けばいいな)

うつらうつらとそう考える月夜に、楓が口を開く。

「月夜のさ、昔のこと教えてよ」

「・・・昔って？」

「アメリカにいた時の話・・・あ、嫌ならいいよ？でも、私だつて月夜のこともつと知りたいから・・・」

ランスと話している月夜は、楓にとっては違う月夜なのだ。だからこそ、それを教えて欲しいと楓は思っていた。

「だめ、かな？」

少しの間月夜は無言だった。楓が、「やっぱりいいよ」、「と口を開きそうになった時、月夜が口を開いた。

「なんていうのかな・・・感情のない子どもだったと思うよ」

とつとつと語りだす月夜の言葉を、楓は静かに聞いていた。

「俺はさ、あの国にとっては単なる兵器だったと思うんだ・・・普

通の人よりも、より破壊することに長け、より使い勝手の良い物、多分その程度だったと思うんだ」

自嘲気味に喋っている月夜の手を、楓がぎゅっと握り締めた。月夜は微笑み、続けた。

「子どもの時はさ、上手く力を使えてないときがあって・・・その時に何人も人を巻き込んだと思う」

ゆっくりと言葉を吐き出していく月夜。

「力が使いこなせるようになって、周りの人間は俺のこと危険物扱いしてたよ・・・当たり前なんだろうけど」

「月夜は・・・そんなんじゃないよ」

楓が呟く、その言葉には力がこもっていた。

「今は、ね。あの時は感情もなかったし、別に何も感じなかったけどね」

月夜はその頃を思い出すように、喋り続ける。

「人間には避けられるし、よく哀れみのような目で見られた時もあったけど・・・兄貴だけは違ったなあ」

（最初に話しかけて来たのはいつだったかな・・・）

知らず知らず月夜は微笑む。楓はそれを見て、少し複雑になった。

「色々なことを教えてくれたし、色々なことを一緒にしたよ・・・」  
そして月夜は呆れたように声を出す。

「木登りして一緒に落ちたり、沖にあった離れ島探検してる時に嵐があつて遭難したり、基地内の火薬庫で遊んでて爆発したり・・・つてろくな思い出がないな」

（よく兄貴死んでないよな・・・）

一緒にやった色々なことを思い出して、月夜はそれを不思議に思う。「楽しかったんだね」

「うん・・・他には特に思い出もないしね。あそこにいた五年よりも、兄貴といた半年ぐらいのほうがよっぽど充実してたかな・・・つて、こんな話でいいの？」

特に何も無い・・・わけでもない話をした月夜としては、楓が聞き

たがってたことに答えを出せてたか分からなかった。

「どんな話でも月夜のことを聞きたかっただけだからいいの・・・  
ランスさんずるいなあ」

「そっか・・・ん？何が？」

楓が不意にこぼした言葉の意味を、月夜は尋ねた。

「私もそんな風に、子どもの頃の月夜と遊んでみたかったなあ、つて」

月夜はその言葉の意味がよく分からなかったが、そんな楓に言った。

「楓も俺とよく遊んだだろ？兄貴と一緒に間楓はいなかったけど、  
楓と一緒に間兄貴はいなかったんだよ？」

「そっか・・・そうだよな」

自分が一緒にいれなかった時間を月夜と共有していたランス、そのことに少し嫉妬をしていた楓だったが、月夜に言われてその逆もある、という事に気づいた。

「楓はどうなの？俺と会う前はさ」

月夜は楓にそう聞く。月夜自身その話題には触れることを好ましく思っていないかったが、その場の空気聞いてみた。

「私は・・・そうだね、優しいっぱとままがいて、毎日幸せだったかな。友達とよくいたずらして怒られたりしてたけど・・・」

過去を思い出して微笑む楓を見て、月夜は胸が締め付けられた。その楓の幸せを壊したのは、月夜なのだから。

そんな月夜の気持ちを探したのか、楓は言葉を紡ぐ。

「でもね、今も幸せだよ？大切な人がたくさんいなくなつて、とても苦しい想いもしたけど・・・学校に行つて友達と遊んだり話したり、月夜とこうしてゆっくりしたり・・・無くしたものは戻らないけど、新しく手にしたものもたくさんあるから」

月夜の顔を見て笑う楓、その笑顔はとてもきれいだつた。

「楓は・・・強いな」

月夜は心からそう思った。力とか頭の良さとか、そういったものではない心の強さが、楓にはあつた。

「そうかな？でも私は・・・忘れはしないよ、絶対に。幸せだった、一つ一つの大切なことを」

（人は忘れていく、戦争の辛さを、生きてきた幸せを・・・だからこそ、また銃を取り撃ち合う。もしみんなが楓のように生きていけたら、戦争なんてなくなるかもしれないな・・・）

月夜は静かにそう思いながら、楓に微笑みかける。

「これからも、色々作っていけたらいいな、大切な思い出とかをさ」「そうだね、たくさん作っていこうよ」

二人は笑い合う。ポカポカと暖かい日差しが、優しく二人を照らしていた。この後に待っている嵐を、二人は知る由もなかった・・・。

薄暗くなった部屋で、月夜は目を覚ました。

「ああ・・・寝ちゃったのか」

隣に寝ている楓を見ながら、肌寒さで震える。

「なんだ・・・？なんかやたら寒いような気がする、それにすっごく嫌な予感がする・・・」

五月とはいえど、夜になるとたまに寒くなる時もある。しかし、その時月夜が感じた寒さは異常なように感じた。

月夜は変な違和感を持ったまま立ち上がって、自分の部屋から毛布を持ってくる。それを寝ている楓の上にかけてあげた。

「なんだろうなあ、この変な感覚は・・・」

月夜の悪い予感は大抵当たる。一般人よりは感覚が鋭くなってるせいか、何かしらが起きる前は大体変な感じの違和感が体にまとわりつく。

月夜は薄暗い部屋の中、注意しながら周りを見回す。人の気配は全くない、「取り越し苦労ならいいんだけどね・・・」、と月夜は呟く。

月夜は集中したまま、薄暗い中じっと待った。五分・・・十分・・・何かが起きるような気配はない。



「気のせいか・・・」

ふう、と溜め息を吐く月夜。気を抜いた瞬間、いきなり玄関の呼び鈴が鳴った。ビクツ、と体を震わせて、玄関の方に目をやる。

その部屋からでは玄関は見えない。しかし、月夜は確実に何かが来るのを察した。楓を起こして逃げている時間はない、気を引き締め、月夜は玄関に向かった。

相手を殺さないように戦闘不能にすることくらい月夜には簡単だが、今は楓を護らないといけない立場の月夜としては、厄介ことはごめん被りたかった。

「どちら様ですか？」

ドアを開けずにそう聞く。もちろん返事はなかった。月夜は一息ついてから、ドアノブを回し、ドアを開ける。

「!？」

ドアを開けた瞬間、黒い覆面を被った人間が銃で月夜を狙っていた。とっさに月夜は避けようとしたが、相手の指は銃の引き金を引いていた。そして・・・ぽんつ、と景気の良い音とともに、ひついに君も高校生と書かれた小さな旗が銃の先端から出てきた。

「驚いた？」

覆面の下で笑いながら、その人間は月夜に聞いてきた。声は女性のものだ。

「・・・相変わらず悪趣味だね、茜姉さん」

「月夜も相変わらずノリが悪いわね・・・」

茜と呼ばれた女性はその拳銃をいそいそとバッグにしまい、覆面もとってそれも中にいれる。

「久しぶり、月夜」

にこやかに笑う茜、月夜はそれを見ながら自分の悪い予感が当たったことを確信した。

茜姉さんは一言で言えば美人だ。整った顔立ちに、腰ほどまである

さらさらとした長い髪がより一層可愛さを際立たせている。清楚なお嬢様と言った感じではあるが、出ているところは出ていて引き締まっているところはしまっている。正に楓とはちが・・・

月夜は横に座っている楓に頭をはたかれた。

「・・・痛いって、いきなり何するんだよ」

「なんとなく不愉快なこと言われた気がしたの」

「誰も何も言っていないんだけど・・・」

「二人は相変わらずね」

対面側に座っている茜は、くすくすと笑いながらそれを見ている。

月夜はそこまで痛くもない頭をさすりながら、茜に聞いた。

「で、急にどうしたの？」

「特に用事があるわけじゃないんだけど・・・そうね、なつかしの我が家の様子を見に来たってところかしら」

「相変わらず茜お姉ちゃんも急だね・・・それなら連絡ぐらいくれればいいのに」

茜は何食わぬ顔で言う。

「だって、それじゃ面白くないじゃない？」

正直迷惑な話だった。月夜は頭を抱えたい気分からられたが、なんとか言葉を吐き出す。

「それで、いつぐらいまでいるの？」

「そうねえ・・・って月夜、そんなにうちがいるのは迷惑なことなのかしら？」

言い方は普通だが、明らか言葉以外の無言の圧力がかかっていた。

月夜は、うん、と言いたかったが、後々恐ろしいので言えなかった。

「そんなことはないよ、でも・・・まあいいか」

実際この姉に何を言っても無駄だということを、月夜は悟っていた。

「そう言えば、他のみんなやお父さんはどうしたの？」

月夜と楓は固まる。視線を下げて、月夜が落ち込んだように言う。

「ちよっと色々あってね・・・俺と楓以外生きてないよ」

なんとかさそう声を出す月夜、さすがの茜も目を伏せる。

「そうなの・・・じゃあもう今日は、飲みましょう」

「「は？」」

楓と月夜の声が重なる。二人は茜の顔を見た。

「弔い酒よ弔い酒、お父さんはお酒が好きだったじゃない・・・ぱ  
ーっと飲んでみんなを送りましょう」

「ちよつと姉さん、それは・・・」

「何か文句ある？」

茜が椅子から立ち上がり、月夜の後ろに回りこむ。

「いや、つていうか何しようとして・・・むぐーっ」

後ろからチヨークスリーパーをかけられる月夜、腕がいい感じに首  
に極まつていて、普通の人間なら数秒で落ちてしまいそうだった。  
それよりも何よりも月夜が、一番焦ったのは。

「胸・・・胸あたってる、やめれー！」

なんとかそう叫ぶ月夜、そんなことお構いなしに茜は続けてくる。

「もー！おねーちゃんやめてっ」

止めに入る楓も茜に巻き込まれ、場が騒然となる。第三者がそれを見たらこう言うだろう。「浮気現場？」

「大丈夫月夜？」

「普通の人間なら意識とんでると思うよ・・・本当にもう、あの人は」

月夜の部屋に二人はいた。楓の部屋は帰ってきた茜により奪われていた。首をさすりながらうなだれてる月夜と、それを心配して寄り添う楓。二人は先ほどの茜の言葉を思い出す。

「今六時だから、七時半にリビング集合ね！遅れたら大変なことになるわよー」

両手を怪しくにぎにぎさせてる辺り、もう何をされるのか二人には大方予想はついていた。

「ほんと変わらないというか・・・悪化してる？」

「確かに、前よりひどくなってるよな、お酒好きなのも変わってない」

月夜と楓はあの頃を思い出す。茜がまだこの家にいた時のことだ。

月夜と楓が茜に初めて会ったのは、二人がまだ十歳の時だった。

「初めまして、よろしくね」

父により孤児として拾われてきた茜。当時十七歳だった茜は、その時から歳に似合わずに落ち着いた雰囲気を持ち主だった。

「は、はじめまして」

外見とその落ち着いている雰囲気魅せられ、月夜の初恋と相手となったのが茜だった。そしてそれがすさまじい早さで散ったのも月夜は覚えていた。その時一緒にいた楓は挨拶はしたものの、月夜の態度を見て茜に対して多少の嫉妬を覚えていた。

新しい家族の一員となった茜は、その外見に似合わず傍若無人、自分勝手、自己中心的、などの暴走を繰り広げ、兄弟の中で一番迷惑な存在となっていた。

兄弟の中でも特に被害を受けていたのは、月夜と楓の二人だった。なぜか茜に一番気に入られていた月夜は、よくおもちゃにされ遊ばれていた。それを止めようとして入ってきた楓もまた、茜に巻き込まれ良い様に遊ばれていた。

ここまでならぎりぎりとはいえ、やんちゃな姉、ぐらいで済んでいい話だが、何よりも一番たちが悪かったのが酒癖の悪さだった。

おおらかだった父はよく未成年の茜と一緒にお酒を飲んでいて、飲んだときの茜はいつもの数倍は暴走度が増していた。

周りの目を気にせず脱いだり、そのままプロレス技をかけたたり等の子どもの教育上よろしくない暴走っぷり、中年のおっさんたちは喜びそうなものだが、実際ほぼ完全に決まっている技をかけられる月夜たちにとっては良い迷惑だった。

しまいには本気で押し倒されそうになった月夜や楓たちだったが、さすがに父が止めて事なきを得た。

そんな姉が、久しぶりに二人の前に来たのだった。

「やっぱり良い思い出がない・・・殴られはしなかったけど俺何回絞め落とされたっけか」

「私もだよ・・・飲んだときなんてセクハラしてくるし、酔っ払いの親父級のたちの悪さだね」

二人は心から溜め息をついた。

「黙ってればきれいなになぁ・・・いて」

ぼつりと呟く月夜の頭を楓がはたく。

「黙ってないから迷惑なんでしょうが」

楓には月夜をはたいした理由は色々あるが、今はそれだけを言っておいた。

「なににせよ、早く帰ってもらわないと俺らの体力がもたない、というか何をされるか分かったもんじゃない・・・」

月夜も一応人間であり男だ。年上の女性に対して理想なんてものも持っていたが・・・いと簡単にそれを壊してくれた茜はさすがに苦手だった。

「もう月夜がドカーンってやつたりチュドーンってやつたりして帰ってもらえばいいんじゃない？」

さりげなく恐ろしいことを言う楓、それほど茜のことが苦手なのだ。「さすがにそれはまずいって・・・気持ちに分かるけど」

それが出来たらどれだけ楽かな、と月夜は一人呟く。今の時間は七時、二人にはもう三十分しか猶予は残されていないかった。

「気になったんだけど、俺らも飲まされるのかな・・・？」

「あの人ならやると思う・・・未成年の時から飲んでたぐらいだし茜が父と飲んでいたのは一度や二度ではなかった、むしろ週三、四で飲んでいたほどだった。」

「一応明日も学校休みだし・・・明後日までには帰ってもらわないと」

「家に置いとくのも心配だけど、お姉ちゃんがいたら次の日学校行

けるかどうか……」

しばしの沈黙……二人は今日一日耐える覚悟だけは決めておいた。「行こうか、遅れたらすつごくやばそうだし」

時間はまだ七時を十五分まわったところだったが、早く行くにこしたことはない。月夜は気だるげに立ち上がり、一度だけ深呼吸をする。

「そうだね、時間にはうるさい人だし」

楓も嫌々立ちあがり、気を引き締める。

(月夜に手出しさせないようにしないと)

そう心に誓い、二人は部屋を出て行った。

「二人ともくおせいぞろい」

月夜と楓がリビングに行くとき、そこにはもう一升瓶片手に飲んでいる茜がいた。見た感じ、もう酔いがまわっている。

「六時半って言ったでしょ」

茜はふらふらと二人に近づき、酒臭い息を吐きかける。

「う……姉さん七時半って言ったじゃん、というかあんまり近寄らないで……」

お酒はあまり好きではない月夜は、茜から一步距離をおく。

「うちが六時半って言ったなら六時半なの……時間守れない子はおきだ」

一升瓶を床に置いて、茜は月夜に向けてダイブしてくる。両腕を顔の前に左右し、言うなればフライングクロスチョップを月夜にくらわす。

「ぐは……」

避けたら直で地面に落ちる茜のことを考えた月夜は、さすがにそれを避けることが出来なかった。

ばき、ごん、ぐしゃ、という景気の良い音が響く。後ろに吹っ飛ばされ、後頭部を床に強打し、さらに茜がそのまま落ちてくるという

コンボをくらい、さすがの月夜も多少のダメージを負った。

「銃弾よりいてえ……って！何してんだ……！！」

倒れた月夜の上に乗っていた茜は、すりすり顔と顔を服にこすりつけてくる。主に胸や肩の部分に。

「うふふ〜うぶな月夜は何もかわってないのね〜」

ひきはがそうとする月夜だが、要所要所が自分の体に触れ、耐性のない月夜は力が入らなかった。

「いい加減にしろ……！！！！」

今まで黙ってみていた楓が、茜の頭を思いっきりはたきとばす。グーではなくパーだったのがせめてもの手加減だった。

スパーンという音が部屋に響く、一瞬動きが止まった茜がゆるやかに立ち上がり、楓を見て一言。

「楓ちゃんもしてほしいのね〜？」

間髪いれずに茜が楓に飛び掛る。月夜と同様に吹っ飛ばされる茜、ただ一つ違ったのは、月夜が倒れそうになった楓を支えていた。

「きゃー……ってだから何してんのよ……！！」

月夜に支えられている楓に抱きつき、すりすり顔を服にすりつけてくる茜。主に胸やお腹の部分に。

「楓ちゃんが成長してるわあ〜〜」

「やーめー……てー……」

楓は容赦なくはたくが、ものともせず擦り続けてくる茜。月夜は頭を抱えなくなつて一言呟いた。

「やっぱりただですむわけなかった……」

その後、なんとか楓から茜をひきはがした月夜。三人は一度テーブルの椅子に座った。

「おね〜ちゃんね、も〜っと月夜と楓と仲良くしたいのよ〜」

「分かった、分かったから顔を近づけるのはやめて……酒臭い」  
けらけらと笑いながら手に持った一升瓶を煽る茜、よく見ると同じ

ような空の瓶がいくつか床に落ちていた。

「何本飲んでるのよ・・・」

楓は瞼に手を当てながら俯く、さすがに頭が痛いようだ。

「おね〜ちゃん寂しいわぁ〜昔はもつと慕ってくれたじゃな〜い」  
確かに二人が茜を慕っていた時期はあった。月夜は心惹かれていたし、楓は楓で嫉妬している部分もあったが、誰が見てもきれいな茜は楓にとって目標でもあったからだ。その二人の気持ちも出会って一週間と経たずになくなっていったが。

「うちだつて〜寂しいのよ〜たまにはいいじゃないね〜」

「分からなくもないけどさぁ・・・」

茜は迷惑な姉ではあるが、一年ぐらいでこの家を出て働き、毎月少ないながらも仕送りをしてくれていた。二人ともそれなりに感謝はしているのである。

「出会いもないし〜・・・うつつ、うちだつて誰かに甘えたいのよ〜」

泣き出す茜を見て、さすがに二人も同情の念が湧いたのか、物腰柔らかに言葉をかける。

「姉さんならすぐにいい人できるって」

「そうだよ、お姉ちゃんきれいだし」

内面を考えなければ、という一点だけは口にしなかったが、実際に二人はそう思っていた。しかし、二人はこの後後悔せざるをえなかった。優しい言葉なんてかけなければ良かった、と。

茜は涙目のまま月夜を見つめ、その後楓を見つめる。そして口を開いた。

「じゃ〜あ、楓ちゃん、月夜ちょうだい」

「は？」

異口同音に疑問を投げかける二人・・・正確に言つと楓に、茜は追いつちをかける。

「楓ちゃんが月夜好きなの知ってるんだよ〜？」

「な・・・いきなり何を言うのよ!？」

立ち上がってテーブルを叩く楓、その顔は赤くなっており、一目で



図星だと分かっってしまう。一方月夜は、なぜか遠くの彼方を見つめるように遠い目をしていた。

「あー・・・今日も天気がいいなあ」

目が泳いでいた、顔は笑ってなかった、何より月夜が見ていたのは天井の隅っこだった。

「楓ちゃんばかりずるいのよ〜子どもの時から・・・うちだって月夜がほしいの〜!」

空になった瓶を床に放り投げて、足元にあった新しい瓶を開けながら茜は言う。

「私と月夜はそんな関係じゃないの!!」

正直今更な楓の言い訳だが、それを聞いている月夜の目はどこまでも遠くを見ていた。今までのことからそんなことはないと言っていたが、楓自身の口からそう言われると切ない。しかも今までそう思ってた自信も揺らいでいた。

(確かに付き合ってるわけじゃないけど・・・なあ・・・)

「じゃあ〜うちがもらってもいいのよね〜?」

茜も立ち上がり、楓を挑戦的な目で見つめる。

「だめに決まってるでしょ!?!」

「どうしてだめなの〜?」

大人の余裕、とでも言う様な笑みを浮かべ、茜はそう問いかける。

「そ、それは、わた・・・月夜が決めることだし!」

危うく口を滑らしそうになった楓、月夜はもう完全に二人の会話を聞かないように自分の世界に入っていたのでそれは聞こえていなかった。

「じゃ〜、月夜に決めてもらえばいいのね?」

茜は月夜に視線を向ける。もちろん月夜は気づかない、というか気づいてないようにしていた。

「う・・・それならいいよ!」

一度止まった楓だったが、茜には負けない自信があった。街頭インタビューのような初見の人は茜を選ぶだろうが、茜の内面を知って

いる月夜は自分を選んでくれる、と自信を持っていた。

「月夜！」

二人に名前を呼ばれて、さすがに空気でいられなくなった月夜は二人に顔を向ける。

「・・・何？」

実際殆ど聞いていた月夜としては、迷惑この上なかった。楓もすっかり茜のペースにのせられている。

「月夜はうちの方がいいよね？うちの方がスタイルいいし」

「な・・・人間は外見じゃなくて中身でしょ！？そくだよね月夜？」

「分かった、わーかったから落ち着け二人とも・・・」

「どつち！」

迫る楓と茜、正直月夜は逃げ出したい気分だった。

（ああ・・・兄貴、なんでこんな最悪なタイミングで帰っていつちやっただらうなあ）

月夜の気持ちは決まっているが、こんな形で言わされるのだけは正直動弁してほしかった。

「そうだな・・・俺が選ぶとしたら・・・」

「私だよな！？」「うちよね！？」

「第三の選択肢かな」

月夜は人間を凌駕した速度で椅子から立ち上がり、すごい速度でリビングから逃げ出す。その動きについていけなかった二人は、少し呆けた後、「まちなさーい！」「と二人で追いかけてきた。

数分後、家の中を逃げ続けて精神的に疲れた月夜は、椅子に座った。二人はまだ走り回っているのです、すぐにここにも来るだろう。

「なんで俺がこんな目にあうかな・・・喉渴いたしさあ」

月夜はのろのろと立ち上がり、冷蔵庫を漁る。めぼしい飲み物は冷やされていた紙コップの中の液体しかなく、月夜は仕方なくそれを一気飲みした。

「どこいったのよ月夜は・・・もう!」

(答えてくれてもいいじゃない・・・私だって月夜のこと・・・)いきなり鳴り響いたドカーン!という音が、楓の思考を中止した。「何?・・・リビングのほうだわ」

楓はすぐにリビングに向かった。

楓がリビングに入ろうとすると、入り口のところに茜が呆然と立っていた。

「・・・どうしたの?」

「・・・」

茜は無言でリビングの中を指差した。楓は怪訝顔で中を見ている。

「・・・え?」

テーブルと椅子があつた場所に、大量の木の破片が落ちていた。それだけではなく、置いてあつた何本かの瓶が割られて床に飛び散っていた。

「え?え?何が起きてるの?」

楓も茜と同様に、呆然と立ち尽くした。

「んー?どうしたの二人とも」

月夜がリビングの奥から出てくる。

「どうしたのって・・・何があつたの月夜?」

多少の冷静さを取り戻した楓が、月夜にそう問いかける。

「よく分からないんだよねえー、なんか体が火照ってるー」

そう言いながら、「あはは」、「と笑う月夜の周りで小さな火花がいくつも起きる。

「月夜!?!・・・まさか酔ってるの?」

「冷蔵庫にあつた水飲んだだけだよー?」

くるくると、倒れそいで倒れない様に月夜が回る。ばちばち、と火花が音をたてている。

「もしかして・・・紙コップに入ってたやつ?」

茜がそう聞くと、「それだねえ」、「と月夜は答える。

「・・・あれ度数が強い日本酒なんだけど」

茜もすっかり酔いが醒めているようだ。楓は一人、静かに逃げるように玄関の方に向かって歩く。

「ちよつと、どこ行くのよ！月夜が危ないんじゃないのあれ？ねえ、楓！」

楓は声をかけられた瞬間に走っていた、逃げた方が良い、と本能が告げていたからだ。逃げる楓の後ろから、ばちばちばち、と火花が散る音が聞こえる。

玄関から楓が出ると、家の中からドカーンとかチュドーンとか多種多様の爆発音が聞こえてきた。

「修理費いくらかかるかな・・・ぱぱの貯金減らしてばっかりで申し訳ないなあ」

茜が出てこない玄関を眺めながら、頭を抱えたい思いでそう一人呟く楓だった。

結局、月夜が倒れて寝るまでその暴走は続いていた。約一時間、警察を呼ばれないかはらはらしながら外で待っていた楓は、音が止んで数分してから家に戻った。

楓が思っていた程よりは被害が少なく、リビングにあるテーブルやら椅子やら先ほど壊れていたものが散乱しているだけだった。

「明日の休みの半分は片付けで潰れるかなあ・・・でも被害少ないみたいで良かった」

リビングを見渡しながら溜め息を吐く楓、寝息をたてて倒れている月夜と多少服がこげて倒れている茜はとりあえずほつといた。

次の日の朝、片付けに忙しく動いている月夜と茜の二人を楓は見ている。

「きびきび片付けなさいよー」

「・・・なんで俺が片付けしないといけないんだ・・・というか昨

「日何があつたの？」

「なんでうちまで・・・楓もやりなさいよ」

それぞれが思い思いの言葉を吐く。

「誰のせいでこんなことになつたと思つてるの！」

「楓もノリノリだつたじゃない・・・あいた」

「ぺちん、と楓に頭をはたかれる茜、今日の楓はやけに強気だつた。

「口を動かす暇があるなら手を動かさなさい！月夜もー！！」

しぶしぶと片付けに戻る二人。なんか様子がおかしいよなあ、と月夜は呟きながらせかせかと働く。

二人は気づいていなかった、楓の頬が仄かに赤くなっていることに。

その日一日、楓はやたら上機嫌だつたり、かと思えばいきなり不機嫌になつたりと、多種多様の顔を見せていた。

こうして、楓と月夜の休みは嵐の如く過ぎていったのだつた。

## 嵐（後書き）

ゆったり(?)とした日常編です。日常に潜むドキドキやワクワクも、ファンタジーには必須ですよねえ)、)、(SFだけど)

## 切ない想い

季節の変わり目の五月、気温はだんだんと上がり、春の風は夏の風へと変化をし始める。月夜たちの高校では、日々の気温差を考えて五月中旬から六月末までは冬服・夏服どちらを着用しても良かった。薄手で長袖のYシャツにスラックスという夏服・冬服の中間の格好をした月夜が苦々しく呟く。

「結局姉さん帰らなかったね・・・家あらされてないと良いけど」  
月夜の隣を歩く楓。楓は長袖のセーラー服から半袖の夏服に切り替えていた、スカートも生地が少し薄手の夏服仕様だ。楓も月夜と同じように、苦々しく呟く。

「結局色々うやむやのまま終わっちゃったもんね・・・うう、頭が痛い」

楓の頭の痛さは、茜のことではなく昨日楓がつい飲んだものに原因があった。

「俺も頭痛いんだよなあ・・・」

月夜もまた、楓と同様の理由だった。

「やっぱりお酒は飲んじゃだめだよね・・・うん」

「ん？何か言った？聞こえなかった」

小さく呟く楓の声は月夜には届かなかった。元より、月夜には聞かされたくないから小さく言ったのだろう。

「なんでもない・・・うー」

学校が好きな楓としても、さすがに調子が悪い時に喜んで行けるほど能天気ではなかった。そのまま気だるげに歩く二人、そういえば、ときなりの何かを思い出したように楓が口を開く。

「この前の続き、月夜は私とお姉ちゃんどっちがいいの？」

しつこいと思えるほどの楓の発言だが、楓自身にとってはやっぱり気になる場所であり譲れないことだった。

「まだ言うか・・・秘密、と言いたいところだけど、楓は納得しな

さそうだな」

月夜は隣の楓をちらりと見る。もちろんその横顔は納得がいかない！という顔だった。

「・・・言わないでも分かるだろ？」

はあ、と溜め息混じりに答える月夜。

「月夜の口から言ってくれないと意味がないの！」

譲れないという感じの楓。楓はこう見えて結構頑固なところがあり、こうなったら中々ひかない。月夜は、仕方がないといった感じで諦めた。そして逃げた。

「あつ、こら、まちなさーい！」

「待てと言われて誰が待つか！大体から・・・そんな恥ずかしいことが言えるかー！」

月夜を追いかけて走る楓。今までの態度と言葉から十分に楓への気持ち暴露し続けてきている月夜だが、面と向かって言うのはやっぱり恥ずかしい初心な月夜だった。

今日も一日学校が始まる。楓は多少痛む頭をおして授業に臨んでいた。一方月夜は、相変わらずばーっとしていた。

月夜は一日に一回は先生に怒られている、それだけ授業中に寝ているかばーっとしているかをしている。それでも指されて問題を出されても、十二分な答えを出すことが出来ていた。

楓はそんな隣の席の月夜を見て、「うー」と漏らしていた。

午前の授業が終わり、昼休みが始まった。

「どうして月夜が勉強出来るんだろうね・・・」

深刻にそう呟く楓。

「どうして楓は本人を目の前にしてそんなことが言えるんだろうな・・・」

隣の席から言われた月夜は、さらに深刻にそう呟く。とはいえ、今



までに何度も言われてる月夜としては、そこまで気にする問題でもなかった。

「お二人さんっ、相変わらず仲良いね」

「そうね、朝も仲良く一緒に登校していたわよね」

そんな二人の会話の間に、二人の男女が割り込んできた。

男の方は、一言で言うなら軽そうないメージがある人間。髪は茶髪で立てている。本人いわく、「毎日ワックスでセットしてるんだぜ、寝癖じゃないんだ!」、らしい。顔はそこそこかっこいいが、面白い人として女子に格付けされているためでもない。名前は飛驒利樹ひだとしき。女の方は、一言で言うなら歩く生徒手帳、といった感じの人間。言葉の意味どおり、真面目で頭が良く、模範的生徒なのである。知的な眼鏡がそれに輪をかけていた。髪は黒で、首の少し下ぐらいの長さの髪を一本に後ろでまとめている。本人曰く、「眼鏡は体の一部」、らしい。顔は可愛いというよりもきれいといった感じで、密かに男子内での人気は高い。名前は木曾根紫きそね ゆかり。対照の位置にいるようなこの二人だが、なぜかよく一緒にいて仲が良かった。そしてこの二人は、高校で一番仲が良くなった楓と月夜の友達なのだ。

「よう二人とも。仲の良さならお前らのほうが上だろ?」

「やほ。そうだよ、いつも一緒にいるもんねえ」

にやにやと笑う月夜と楓。そんな二人に利樹と紫は焦って反論する。

「ばっ、何言ってるんだよ!俺はもっと理想高いつつもの」

「そ、そうよ、私だってこんな軽い男なんて」

月夜はそんないつもの光景を見て、笑いながら言う。

「はいはい分かった分かった、昼飯食べに行こうぜ、時間なくなるしよ」

椅子から立って歩き始める月夜の横に利樹が並び、肩に腕を回して月夜にだけ聞こえるように呟く。

「本当に違うんだからな・・・むしろ俺はお前が羨ましい、楓ちゃんみたい可愛い子と仲良くしゃがって」

(やれやれ・・・こいつも素直じゃないな、それにしても)

「楓がいいとか、お前も大分物好きだよな」

自分のことを棚に上げまくって、月夜はそう呟き返した。

そんな前の二人を見ながら、後ろからついてきている楓と紫もこそと喋っている。

「紫ももう少し素直になつたほうがいいんじゃないの？」

「だからまだそんな関係じゃないって言ってるじゃない」

紫が無意識の内に言ってしまった言葉は、楓にしっかりと聞かれていた。

「まだ、つてことはその内なんだね」

含みのある笑みを浮かべながら、楓は隣の紫を指でつつく。紫は少しかだけ顔を赤くして、口元を抑える。

「だから・・・」

「大丈夫、利樹君が素直になれない内は言わないでおくから」

「もー！」

そんな会話をしながら購買部に向かう四人。全くもって人のことを言えた立場じゃない楓と月夜の二人は、人をからかう時だけやたら似ていた。

購買にてパンとジュースを買った四人は、屋上に向かった。四人は雨が降ったりなどしなれば、いつも屋上で昼食をとる。高校に入ってからまだそこまで経ってない月夜だが、彼はこの屋上が好きだった。

「そう言えばよー、最近こころ辺で誘拐が多いらしいぜ」

利樹はパンの包み紙をはがしながら、唐突に切り出す。

「そうね、今朝もニュースでやってたわよね」

同じようにパンの包み紙をはがしていた紫が答える。そんな中、月夜と楓は頭にハテナマークを浮かべていた。

「そうなのか？俺新聞とかニュース見ないから知らなかった」

「右に同じ・・・物騒な世の中だねー」

そう言いながらも、楓はのほほんとパンをかじっている。誘拐が多

いと言つても、対岸の火事ぐらいにしか思っていないのだろう。

「お前らなあ・・・結構近くの学校でも被害にあつてるやつ多いんだつてよ、今度の全校集会でも話ぐらいはあると思うぜ」

溜め息混じりに言う利樹。彼は結構情報通で、外見に合わず真面目な人間でもある、軽いことを除けば。

「そうなんだ・・・私も気をつけないと」

「大丈夫大丈夫、誰も楓なんか誘拐しないつて・・・つぶ！」

楓に頭をはたかれた月夜は、口に入っていたパンを吐き出してしまった。

「汚いわよ、月夜君」

「今のは俺のせいじゃないだろ・・・楓、そうぼんぼん人の頭はたくのやめようよ」

「月夜が悪いんですよ」

ふん、と顔を背ける楓。紫と利樹はそれを見ながら、「いつも通りだなあ」と笑っている。「そういえば」と利樹が思い出した様に言う。

「楓ちゃんに限ったことじゃないけど、被害者はみんな女性らしいぜ・・・後変な噂があるんだよ」

「「変な噂？」」

楓と月夜は利樹に視線を集める。利樹は焦らすように間を空けてから。

「実はな・・・」

「神隠しかもしれない、つてやつですよ」

紫の言葉に利樹が肩を落とした。

「俺が言おうとしたのに・・・まあそれは置いていて、とにかくそういうわけらしいんだわ」

「神隠しなんてあるわけじゃないじゃない、単なる噂ですよ」

「可能性だよ可能性、もしかしたらつてこともあるだろ？」

「そんな非現実的なことが起こるわけないのよ」

言い争いを始める利樹と紫を見ながら、話についていけない楓と月

夜は困っていた。

「だから！実際起きてるんじゃないかよ」

「それは誘拐であって神隠しじゃないでしょ！」

「はいはいストップストップ！！」

これ以上二人で白熱されては困ると思った楓が、二人を止めた。

「で、神隠しってなんだよ？」

楓によつて止まった二人に月夜が疑問を口にする。一応落ち着いた利樹が口を開く。

「ああ、この事件さ、確か三回……いや四回だったっけか」

「五回よ」

「そうだ五回だ。今まで五回誘拐があつたらしいんだけど、一回も事件現場の目撃者がいないんだってさ」

紫のフォローを受けながら、利樹は説明した。

「へー、それはすごいなあ……それでなんで誘拐って分かるんだ？単なる行方不明かもしれないだろ？」

誰もが思いそうな疑問を口にする月夜。

「俺も最初はそう思ったんだけどさ、誘拐された人の私物が必ずそこに一つはおつこちてるんだってさ」

「付け足すと、落ちていた物は全部その人の身分を証明するものらしいわよ」

その話を聞いた月夜と楓は頭をかしげた。

「なんで必ず一つ、なんだろうな……」

「なんか怖いね……確かに神隠しって言っても不思議じゃないね」

「だろだろ？まあ実際のところはどうか分からないけど、気をつけないとなあ」

「楓は月夜君と一緒にだし、安心よね」

そう言いながら横目でちら、つと利樹を見る紫。紫と利樹は家が逆方向だから、一緒に登下校することはまずない。

「紫も利樹君に送ってもらえば？」

そんな紫の気持ちを察したのか、何気なく楓が言う。

「家逆だからめんどくさいんだよなあ・・・紫がどうしても、って言うなら送ってやっても良いけど」

利樹のその言い方にかちんときた紫は、反論するように言う。

「利樹に送ってもらわなければならないわよ！それに、利樹と一緒にの方が危なさそうなもの」

「なんだとー！」

またしても言い争いを始める二人。楓はそれを見て、どうしてもこころなんだろう、と頭を抱えなくなつた。月夜はそんな楓の横で、気にしない、といった感じで一人でパンを食べ続けていた。

昼休みが終わり、教室に戻ってきた四人とその他の生徒たちはいつも通りに五・六時間目を受け終えて放課後となつた。昼休み終了から放課後までの間、利樹と紫は何かを考えているような顔をしていた。

「さて、帰ろうか楓」

「そうしよっか、私たち帰宅部だしねー」

学校が好きな二人がなぜ部活に入っていないのかは永遠の謎だった。

「なんだ、もう帰るのか？」

二人に近寄ってきた利樹がそう問いかける。

「やることもないしな、お前は部活だろ？」

「そうしたいのもやまやまんだけどさ、今のところは当分部活休みになりそうだし」

そう言つて肩をがっくり落とす利樹、彼は部活（軽音楽部）が好きだからこの反応は当たり前なのだろう。

「どうして？」

楓がそう問いかける。利樹は忌々しげに呟いた。

「誘拐事件のせいで、明るいうちに早く帰れ、ってとこなんだろ・・・夕方ぐらいまでは良いと思うのになあ」

そう言いながらギターを引く真似をする利樹、でも実はドラム志望

だったりする。

「女の子は危ないからじゃない？利樹君も、つかかかってばっかないで紫を送ってあげなよ」

「分かってるよ、言い争いはいつものことだしな・・・それじゃな手をひらひらと振ってから、帰り支度をしている紫のところへ利樹は歩いていった。その後姿を見ながら、楓は呟く。

「なんだかんだで、仲いいんだよねえ」

「けんかするほどなんとやら、だろ？」

相変わらず自分たちのことは棚にあげている二人だった。

「「ただいまー」」

「おつかえり〜」

月夜と楓が家に入ると、顔を赤くしている茜が二人に抱きついてきた。

「姉さんっ？」

「お姉ちゃんっ！」

「二人がいなくて寂しいかったわよ〜寝ている間にどっか行っちゃうなんて〜！」

月夜と楓はなんとか茜を振りほどき、呆れて口を開く。

「だから俺らは学校だ、って昨日も言っただじゃん」

「全とお姉ちゃんは・・・うちで飲んだくれてないでさっさと自分の家に帰りなさいよ、そして仕事をしなさい」

どこかの誰かが自分の兄に言っただようなことを、楓はさらりと言う。茜のことになると楓は容赦がなかった。

「む〜二人とも冷たい・・・いいんだ〜いいんだ〜どうせうちなんて〜」

ふらふらとした足取りでリビングに歩いていく茜、それを見て月夜は呟く。

「ちょっと言いすぎたかな？」

楓は気にしてない、という風に月夜に言う。

「お姉ちゃんは優しい言葉をかけるとすぐに調子乗るからだめよ」

「そうなんだけどねえ・・・なんか可哀想な気もする」

「気にしない気にしない、今日も疲れたなっ」と

先に歩いていってしまう楓を、月夜は悩むような面持ちで見ている。

「姉さん、入るよ?」

コンコン、とドアをノックしてから、月夜は相手の返事が聞こえてくるまで待っていた。

「どうぞ〜・・・」

落ち込んでいるような小さな声を聞いてから、月夜はドアを開けた。部屋の中はお酒の匂いとタバコの匂いが充満している。

「うわあ、ちゃんと換気しないとだめだよ姉さん・・・体に悪いよ?」

「いいのよ・・・別に」

布団の上につつぶせになり、枕に顔を沈めている茜の隣に月夜は腰をおろす。この部屋は死んでしまった兄弟たちの部屋の一つだった。昨日楓により部屋を追い出された茜は、しょうがないので空いている部屋に移動したのだった。

「何しに来たのよ〜」

茜は顔をあげずに、そのまま月夜に問いかける。

「特に用はないんだけど・・・何してるのかなって」

(心配といえば心配だしね)

月夜は本心は言わずに、差し当たりのない言葉を言う。

「誰もかまってくれないからあ、することなんてないも〜んだ」

いじけるようにそんな声を漏らす茜。月夜は少し胸が痛んだ。確かに迷惑な姉ではあるが、月夜としては落ち込んでいる家族を放っておくことも出来なかった。人を励ますのはいまいち苦手な月夜だが、ゆっくりと考えながら口を開く。

「楓もさ、あんな言い方してるけど、実際姉さんのこと嫌ってるわ

けでもないと思うんだよ。俺もそうだからね、だからなんていうの  
かな・・・仕事大変だったり寂しかったりしたらいつでも帰ってき  
てくれていいし、気晴らしに何かするんだったら付き合うし・・・  
とにかく、あんまり落ち込まないでよ」

異性云々迷惑云々ではなく、大切な家族に対する月夜なりの精一杯  
の励ましの言葉だった。それを聞いた茜は、ゆっくりと顔を上げて  
月夜を見る。いつもの元気さはなく、弱弱しい言葉で茜は言う。

「うん・・・ありがとう、弟に心配かけてちゃだめだよね」

茜は茜なりに苦労しているのである。いつも元気ではちゃめちゃな  
茜だが、その元気さの裏にはそれと同じ重さの闇がある。そのはち  
やめちゃぶりが月夜たちにとって迷惑ではあるが、そんな気持ち  
がなんとなく分かる月夜もいまいち対応に困っていた。

「家族なんだから、心配するのは当たり前だろ？」

それでも月夜にとってそれが当たり前前で、本心だった。

「・・・月夜のばかちん」

「は？」

唐突にそんなことを言う茜に、月夜はついそんな言葉が出ていた。

「・・・なんでもない、なんでもないよ」

「なんでもないって・・・別にいいけどさ」

何かを誤魔化そうとする茜に、月夜は特に追及をしなかった。

「ありがとね・・・もう遅いから、部屋に帰って寝なさいよ」

「うん。とにかくそんな気にしないで元気出してね、それじゃおやすみ」

時刻はもう午後十一時をまわっていた。楓は自分の部屋でもう寝て  
いる。月夜も寝るために、立ち上がって部屋を出て行く。「おやす  
み」、という声を背中中で聞きながら、月夜は自分の部屋に戻っ  
ていった。

月夜が出て行った後、一人部屋に残っていた茜は、小さく独り言を  
もらしていた。

「優しいから・・・優しいからつらいんだよ月夜・・・」



茜は過去にこの家にいた時のことを思い出す。素で元気な茜だが、何か悩みがある時などは特に騒いでいた。みんなが迷惑がる中で、月夜ももちろん迷惑そうにしていたが、それでもいつもそういう時、「何かあったの?」、と聞いてくれたのは月夜だけだった。「帰って来たのは失敗だったかな・・・? だめだつて分かってる・・・でも」

( 楓から月夜を奪っちゃいたい・・・ )

そう思っても茜はそれをしなかった。二人が未熟ながらも相思相愛であることを知っていたし、何より可愛い妹と弟には幸せになつてほしいといつも思っている。

誰にも知られることなく、ひっそりと涙で枕を濡らしながら、茜は眼を閉じた。

次の日、着替えを済ませて朝食をとるためにリビングに入ってきた月夜と楓は驚いてそこにいる茜を見た。

「おはよう、朝ごはん作っておいたからね」

「おはよ、姉さんが朝早いなんで珍しいね・・・どこか出かけるの?」

「おはよう、今日の天気予報晴れ・・・だよな?」

月夜は茜の足元に置いてあるバッグを見ながらそう聞いた。来た時に持ってきていたバッグである。

楓は茜の顔を見ながらそう聞いた。結構失礼なことを言っていた。

「自分の家に帰ろうと思ってね、仕事もしなきゃいけないし・・・お世話になつたわね」

仕事というのは嘘だった。普段の休みと有給休暇を合わせて五日程休みをとっていた茜は、明後日まで仕事は休みだった。

「随分と急だなあ・・・でも仕事じゃしょうがないか、またいつでも顔出しに来てよ」

「次来る時はちゃんと連絡ぐらいちょうだいよね? そうじゃなきゃ

おもてなしできないんだからね」

なんだかんだで優しい月夜と楓の言葉を聞きながら、茜はリビングを出る。茜を見送るために二人が後ろに続いた。

「またその内来るわよ、あんまりゆっくりしていると・・・月夜のこともらっちゃうからね、楓」

後ろからついてくる二人に、からかうように茜はそう言う。

「もー！」

そんな二人のやり取りを見ながら、月夜は一人溜め息をついていた。玄関を出て、茜は二人に向き直る。

「それじゃ二人とも、風邪ひいたりしないように、体に気をつけるんだよ？」

「姉さんも飲みすぎ吸いすぎには注意しなよ？」

「お姉ちゃんも痴漢に注意したほうがいいかもね」

それぞれが思い思いに相手を気遣う言葉を口にする。茜はそんな二人を優しい眼差しで見つめた後、二人に背を向けた。

「また、ね」

「また」

「またねー」

想いが残っているような言葉を置いて、二人の言葉を背に茜は歩いていった。月夜と楓は気づかなかったが、茜の臉は少しだけ赤く腫れていた。

茜を見送った二人は家に戻り、用意されていた朝食をとる。

「姉さんの作ったご飯食べるのも、かなり久しぶりだよなあ」

「うん、懐かしい味だよね・・・」

月夜と楓の二人はしみじみそう言いながら箸を進める。茜の料理の腕は実際かなりのものだった。楓が作るご飯も相当なものだが、元よりその楓に料理を教えたのは茜なのだ。

「なんか・・・静か、だよな」

「うん・・・やっぱりなんか寂しいね」

ポツリと呟く二人。昨日の食事の場には茜がいた、食べている時も何かと騒がしい茜だが、いなければいけないでやっぱり寂しい。

茜に対して冷たく当たっていた楓も、ころなしか元気がなかった。「みんながいなくなっただけから、少しは慣れたと思ったのにな……思い出しちゃうよ」

楓は血がつかなくていない家族のことを思い出し、少し涙ぐんだ。数ヶ月前は確かにここにいた家族達……食事時は特に騒がしく、それをうるさく感じた時もある楓だが、おいしいおいしい、と楓が作ったご飯を食べて言ってくれたことは今でも楓の記憶に残っていた。

「そうだな……俺のせいで、みんなが巻き込まれた……」  
人の死に多少慣れている月夜ではあるが、大切な人たちが死んでしまった理由が自分にある、その罪悪感と哀しさだけは今も心に残っていた。

「月夜のせいなんかじゃないよ！……暗い話ばかりしてたらだめだよ、今日も学校がんばろうよ」

気持ちを切り替えて楓が言う。月夜もそれに賛同した。

「うん……そうだな、急いで食べちゃわないと……ん？」

おかずが入った皿を持ち上げた月夜は、紙のような肌触りを感じて怪訝顔をした。そして、皿の裏にある何かに気づいた。

「なんだろ？これ」

おかずをこぼさないように慎重に皿を上を持ち上げて、それを下から覗き込む。そこには、「月夜へ」と書かれている紙が貼っていた。

「どうしたの？」

「手紙っぽいのが貼ってある、楓の皿にもあるんじゃない？」

「お姉ちゃんかなあ……」

そう言いながら、楓も自分の皿の裏を確認してみる。月夜と同様に、「楓へ」と書かれている紙があった。二人は慎重にそれをはがし、折られている手紙を開いて見てみた。月夜への手紙と楓への

手紙は書いてあることが違ったが、出だしはどちらも同じだった。

『注：自分一人で読んでね』

二人はハテナマークを浮かべながら、学校のことを忘れて読み始めていった。

・・・数分後、手紙を読み終えた月夜は、驚いた顔をしながら少しだけ赤面し、切なそうに手紙を強く握り締めた。楓は呆れ半分といった感じだったが、月夜と同様に少しだけ赤面していた。

「全く、お姉ちゃんってば・・・月夜はなんて書いてあったの？」  
楓はなんとなくそう聞いてみた。だめと言われると逆に気になる、それが人間だからだ。

「た、大したことじゃないよ・・・楓のほうは？」

明らかに動揺してる月夜、なんとかそれを誤魔化そうと聞き返した。「私の方も大したことじゃないよ、でも月夜が教えてくれないなら教えてあげない」

月夜と違って楓は、至って普通にそう答えた。しかし、月夜の動揺を察した楓は、どうしてもその内容が気になっていた。

「教えてよ月夜」

「だめだつてば・・・つて、もうこんな時間じゃん！」

時計を見た月夜は、時間への焦り半分、場を流すための口実半分になんぞ叫んだ。時刻は八時五分、教室に八時半にはいなければ遅刻なのだ。そして、月夜たちの家からは学校まで歩いて三十分はかかる。

「あ、やば！急がないと」

「だろ？遅刻はまずいぞ」

二人は残っていたご飯を急いでかきこみ、食器はそのままに玄関へと駆け出す。

「学校で教えてよね！」

「だからだめだつてば！」

二人は急いで外に走り出しながら、そう叫びあっていた。

ちなみに、茜からの手紙の内容はこうだった。

『月夜へ、これを読んでるってことはもううちはその場にいないよね？いたら恥ずかしいんだけどね。急に来て急に帰るなんて、やっぱり迷惑な姉だよねうち・・・まあそれはおいといて。月夜は気づいているか分からないけど、月夜のことを本当に好きだったよ。弟としてじゃなくて、一人の異性としてね？いつも心配してくれた月夜が、好きだった。その優しさが姉弟としてのうちに向けられていることは分かっていたけど、それでもやっぱり月夜に惹かれてみたい・・・こんなこと言われたら迷惑だよ。でもどうしても最後にそれだけは伝えたかったの。冗談や酔ってた勢いでは言えたのに、本気で月夜に言えなかったことを少し後悔してるかな。でも、月夜には楓がいるもんね、きつと言っても無駄だったんだろうね・・・こんな形で本気で気持ちを伝えるのも、なんか情けない気がするよ。でも・・・もう一度、最後に言わせてね？大好きだよ、月夜。ちゃんと楓のこと護ってあげないとだめだよ？うちの可愛い妹を泣かせたらお仕置きだよ！。それと、この手紙は読んだら捨てちゃっていいよ。楓に見られるのはなんか嫌だしね・・・。この手紙のこととは忘れていいから、きつともうこの家に戻ってくることはないと思うけど、また会える時があったら・・・その時もちゃんと、姉弟として仲良くしてね？それじゃ、そろそろお別れかな。ばいばい、月夜。』

追伸：最後まであなたの姉としていられなくてごめんなさい・・・  
愛しい月夜、どうか幸せに。

茜姉さんより』

『楓へ、見ないうちに大分成長したね・・・でも素直じゃないところは全然かわってないね。そこが楓の良いところでもあるんだけど・・・月夜は鈍感だから、きつと口に出さないと分からないよ？お姉ちゃんとしては、二人の子どもを早く見せて欲しいわあ・・・って、

早すぎるかな、あははー。楓は素質がいいから、後二、三年もすればうちより美人になると思うよ、それまでに月夜に逃げられないようにしなきゃだめよ？そんなことはまずないかー・・・だって二人は相思相愛だもんね。お姉ちゃん嫉妬しちゃうつ、うちも早くいい人見つけて、幸せになれたらいいな・・・でもやっぱり、姉として、可愛い妹と弟が幸せになるのがうちの一番の幸せだよー。事情は聞いてないから分からないけど、みんなが死んでしまつて辛かったり、寂しかったりすることもあると思うけど、二人一緒に力を合わせてがんばってね！もうこの家に戻ってくることはないかもしれないけど、離れてても二人はうちの可愛い弟と妹だよ？幸せを願ってるよ。そろそろお別れかな、ばいばい、楓。

追伸：胸はもんでもらうと大きくなるよ。うち試したことないけどね、あははー。

茜お姉ちゃんより』

どちらの手紙も、茜の本心を綴ったものだった。月夜の手紙にはいくつもの水の跡がついており、時折文字がにじんでの箇所があった。こうして茜は、二人の元を去っていったのだった。

## 切ない想い（後書き）

読者数伸びないのはやっぱりへこむよねえ・・・とか思いながらも、  
一応書いてみた。

へたれ文だけど、誰かの心に響けば幸いかな

## 異変

茜が去ってから一週間、月夜と楓には平穩の日々が流れていた。茜がいなくなつてからは物足りなさを感じていた二人だったが、気づけばそれが二人にとつての日常へと戻り始めていた。誘拐や神隠しなどの事件もいまだに起こつてはいるが、当事者ではない二人にとつては対岸の火事といったものだった。そう・・・今日、その日が始まるまでは・・・。

「甘いものが食べたい」

今では見慣れた学校への道のりを歩いている時に、楓の隣にいる月夜が、いきなりそう呟いた。楓は、「え?」、とそんな月夜に返す。「たまあぁーに無性に甘いものが食べたくなる時がある。楓はそういうのないか?」

「あるにはあるけど・・・さすがにそこまで突然食べたくなることはないかな。大体から私は甘いもの好きだから、いつでも食べたいと思つてるよ・・・太らなきゃね」

最後の部分だけは月夜に聞かれないうちに、ぼそりと呟くように楓は言った。そんな楓に気づかない月夜は、一人続ける。

「こつ・・・なんていうのかな、食べなきゃ死ぬつてわけでもないんだけど、うん、食べなきゃ死ぬ」

全く矛盾してるようなことを言う月夜。楓は呆れたように口を開く。「そこまで言うなら、自分で買って食べればいいじゃない・・・お金はあるでしょ?」

二人には、死んでしまった父が残しておいてくれた貯金がかなりあった。実際は残しておいてくれたわけではなく、お金の持ち主がいなくなつてしまったので自動的に二人に流れてきただけなのだが・・・。楓の言葉に、それはだめだなぁ、と言うように月夜は口を開く。



「姉さんや兄貴の手作りお菓子に慣れてる俺が、市販品なんて・・・」  
かなり贅沢でわがままなやつである。だが実際に、ランスや茜が作るお菓子は絶品だった。楓はもはや溜め息しか出ない。

「市販品だって十分おいしいわよ・・・というか何？お姉ちゃんもランスさんもないのに、一体どうする気なのよ？」

「そうなんだよなあ・・・うーん」

変なこだわりを持つ月夜としては、市販品で済ませるということは許せないようだ。考えに考え、月夜は言った。

「楓、作ってくれ」

ぺちーん、という良い音を響かせ、楓が月夜の頭をはたいた。

「どうしてそうなるのよ！しかもそれが人にものを頼む態度なの！？」

言ってることはもつともだが、最近の楓はやたら手が出るのが早かった。月夜ははたかれたところをさすりながら、「じゃあどうすればいいんだ！？」と逆ギレする。

「そんなの知らないわよ！お姉ちゃんでもランスさんでも、呼び出して勝手に作ってもらえばいいでしょ！！」

もはやお互い言ってることが無茶苦茶だった。

「さすがにそれは無理だって！兄貴はアメリカだし、姉さんは・・・」

「危うく続きを口にしそうになった月夜は、焦って言葉を止める。楓は不審顔で、問いただす。」

「お姉ちゃんは、何？」

先ほどとは違い、幾分かは落ち着いている楓の声だが、その内に秘められているものは月夜には想像のし難いものだった。月夜は気まぐげに呟く。

「姉さんは・・・仕事だし、な？」

茜から月夜宛ての手紙の内容は知らない楓だったが、なんとなく察するものはあつただろう。だからこそ、楓は冷たく言った。

「仕事でもなんでも、月夜が言えば作ってくれるんじゃないの？可愛い弟のためだものね」

さすがにそんな風に言われると、月夜もむっとして言い返す。

「子どもじゃないんだから、仕事が大変なことぐらい分かるだろ？何より、あんな手紙をもらった後に、いきなり呼び出してお菓子を作ってもらうなど、茜に対して残酷とも言えるようなまねは月夜には出来なかった。

（そんな風に思うこと自体が・・・残酷なのかもしれないけど）

月夜はやり切れない想いを胸に抱き、拳を握り締めた。そんな月夜に気づかない楓は、子どものように（実際まだ子どものだが）月夜に文句を言う。

「そんなの知らないわよ！それなら月夜がお姉ちゃんのところに行けばいいじゃない！！」

「お前・・・分かったよ、もういい、楓には頼まないから」

冷たくもなく、反面怒っているようでもなく、月夜は普通にそう言った。もはや無関心、と言ったような月夜の言葉を聞いて、楓はひどく胸が締め付けられた。その後二人は一緒に歩いているものの、学校に着いても一言もしゃべることはなかった。

「俺の言い方も悪かったと思うよ？でもさぁ・・・そこまで言う必要はないとおもわね？」

「わざわざそんなことを聞かせるために、お前は俺をさばらせたのかよ」

月夜の隣に座る利樹は、溜め息をつきながら月夜を見る。

「そんなことって言うなよ、俺にとっちゃ大問題なんだよ」

月夜は屋上の柵に寄りかかり、青く晴れ渡っている空を見る。

「ばっか、けんかなんて俺と紫は日常茶飯事だぜ？」

胸を張ってそんなことを言う利樹に、月夜は呆れた顔で言った。

「お前らはな・・・それに小さいけんかはあっても、口をきかなく

なる程は今まで一度もないんだよなあ」

どうすればいいかなあ、と溜め息と共に月夜は付け足す。利樹は笑いながら、そんな月夜をこづく。

「けんかする程なんとやら、だろ？それによ、そんなにこのままの状況が嫌なら、正直に言っちゃえばいいんじゃないの？」

利樹の言葉に顔を赤くする月夜は、それを知られないようにそっぽを向いて言う。

「ば、ばかやろう、言えるわけねーだろ!？」

「大体から、言い回しがおかしすぎるんだよ、そんなの誰だってきづかねーよ」

やれやれ、と言った感じで利樹はそう言った。月夜はうつむき、へこんだ様に声を出す。

「だってさあ・・・俺なりに精一杯考えたつもりなんだよ？」

「それで精一杯考えたと言ってるようじゃ、小学生でももつとまじな答え出してくれるぜ？」

追い討ちをかけられた月夜はただうつむいて黙るしかなかった。さすがにそんな月夜を見て、可哀想に思えてきたのか利樹は口を開く。「まあほら、楓ちゃんなら大丈夫だろ、多分。教室に戻ったら、どこ行つてたのよ!とか言うに決まってるぜ」

「それならいいんだけどなあ・・・素直に感情を出すのは苦手だよ俺は・・・」

護るとは言った。しかし、月夜は一言も楓に好きとは言っていないかった。もちろん楓もそんなことは一言も言っていないわけだが。とにかく、破壊や保護は得意とする月夜だったが、恋愛こゝろことに関しては今時の小学生にすら負ける月夜だった。

「なるようになるんじゃないの？簡単に切れるような腐れ縁じゃねーだろ、お前らは」

「壊れるのはあつという間なんだよ・・・どんなものでもな」

絆でも物でも、例えば人でも。月夜はそれをよく理解していた。そんな月夜の事情を知らない利樹は、「かつこつけてるんじゃないよ」、「

と肩をばしばし叩いた。そんなことをしている間に、一時間目終業のチャイムが流れた。

「やれやれ、完全にさぼっちまったな・・・二時間目からはしっかり出るぞ、つーかホームルームすら出させてもらえなかったからな、学校自体さぼりか休みだと思われてそうだ・・・」

嘆く利樹に月夜は呟く。

「悪かったな・・・今度昼飯おごるからチャラにしてくれよ」

「そいつはいい、精々高いものを食べさせてもらおうとするか」

よっ、と立ち上がりながら人の悪い笑みを浮かべ、利樹は言った。

「千円超えたら死刑な」

利樹に続き立ち上がる月夜。笑いながら言っているが、目は全然笑っていないかった。

「任せとけ、しっかり九百九十九円でとめてやるぜ」

「むしろそんなことできる方がすげーつつの・・・」

利樹は笑いながら、月夜は溜め息をつきながら二人は教室に戻って行った。

「月夜、利樹君、どこいったのよ!？」

利樹の言ったことは正解だった。教室に戻るなり、二人を見つけた楓がそう叫んでいた。

「な、大丈夫だったろ?」

「お前にはたまーに驚かされるよ、マジで」

楓に聞こえないように呟き合う二人の前に、楓が走ってきた。そして、心底焦っているように口を開く。

「大変なんだよ!紫が・・・紫が・・・」

その動揺ぶりを感じ取った二人は、ただことじゃないことを悟った。

「紫ちゃんがどうしたって?」

「紫がどうかしたのか?」

「紫が・・・神隠しにあったって!」

楓のその言葉に、二人は口を開くことができなかつた。止まっている二人に、楓は口早に伝える。

「今朝ホームルームで……って利樹君!？」

楓が言い終える前に、とっさに利樹は動いていた。その速さに呆気にとられていた月夜と楓は、状況の深刻さに気づきすぐに利樹の後を追つた。

「待てよ利樹！」

二人が追いついた時には、もう利樹は学校の下駄箱にいた。その速さには陸上選手ですら舌を巻いただろう。それほど、利樹は必死だつた。

「ばかやろう! 待つてなんていられるか!!！」

利樹はそう叫び、靴を履き替えてすぐに外へと走っていく。

「あいつ、我を忘れてやがる……俺らも急ごう、楓」

「うん、もちろんだよ！」

先ほどのけんかがなかつたことのように、二人は急いで靴を履き替え利樹を追いかけた。

なんとか校門を出る前に利樹に追いついた月夜。本気は出さなかつたとはいえ、月夜自身も追いつくのにここまでかかるとは思わなかつた。

「落ち着けて！」

「落ち着いてなんかいられるかよ！」

月夜の手を振り払つて今すぐにでもまた走り出してしまいそうな利樹、それを止めたのは後から追いついてきた楓だつた。

「居場所も分からないのに、どうやって捜すつもりなの!？」

はあはあと肩で息をしながら、楓がそう叫ぶ。それを聞いた利樹も叫び返す。

「そんなもん走つてればいつか……」

月夜の平手打ちが、利樹のその言葉を遮つた。

「何す・・・」

「少しは冷静になれ！心配なのは何もお前だけじゃないんだ！」

利樹はそこで初めて気づいた。月夜も楓も、険しい表情をしていることに。利樹は叩かれた頬をさすりながら、「じゃあどうすればいいんだよ・・・」、「と弱弱しく呟いた。

「月夜、なんとか出来ないの？」

「任せろよ、こんな時にこそ使わないと、俺は本当にただの・・・兵器、と言いつうになつたのを月夜はなんとか止める。事情の知らない利樹がいたし、何より、もう楓の前で自嘲する自分を見られたくはなかった。

「・・・お前ら何を？」

訳が分からず問いかける利樹を、楓が手で制する。

「絶対大丈夫だから、月夜なら・・・」

月夜と楓の間にあるものは信頼という言葉では表せないほどだった。何より、楓は月夜を破壊兵器だと思ったことは一度もないのだから。「木曾根紫・・・身体条件全て確認、索敵モードオン・・・」

うつむきながらぶつぶつと呟き始める月夜。瞳が闇に染まっていき、纏っている雰囲気人間味を失っていく月夜を二人は固唾を飲んで見守った。

「いた・・・！」

ぶつぶつと言いだしてから数秒後、月夜は顔を上げてそう叫ぶ。

「ここから走って十分もかからない場所だ、行くよ二人とも」

先頭を走り出す月夜、それについていく二人。後ろの二人を置いていかないように、スピードをうまく調整しながら月夜は駆け出している。

数分ほど走った三人の前には、数週間前に廃止されて以来使われていない工場があった。

「こんなところに・・・？」

利樹が不思議そうに呟く。

「ああ、確かにここだ・・・紫ちゃん以外にも何人かの生命反応が感じられる」

「紫は無事なの？」

膝に手をつき、荒い息をなんとか抑えようとしている楓が月夜に聞く。

「どこにも外傷はないよ、ただ眠らされてるみたいだ・・・」

「そんなことはいいから、早く中に入るうぜ！」

利樹は閉められている工場の扉に手をかける。しかし、鍵がかけられているのか、扉は押しても引いても殴ってもびくともしなかった。

「どいてる利樹・・・うらあつ！」

利樹を後ろに下げ、掛け声と共に扉に跳び蹴りを放つ月夜。鉄製の扉がひしゃげて工場内へと飛んでいく。

「だ、誰だよお！？」

弱弱い男の声が、光りの差し込んだ工場内から響いた。奥にいるのか、男の姿は見えなかった。

「奥だ！」

利樹が叫び、全力で声のした方向に走っていく。月夜と楓がそれに続いて走っていく。

「だ、誰なんだよ！？こつちにくるなよお！」

叫ぶ声がどんどん近くなっていく。月夜は変な違和感を感じた。

(こんな気の弱そうな声を出す男が犯人なのか?)

月夜は釈然としない気持ちを抱えたまま、三人はいくつかの角を曲がり、工場の最奥に着いた。そこには眼鏡をかけている太った男がいた。誰が見ても、気の弱そうな男だ、と言いつつその男は、突然やってきた三人に狼狽していた。

「おいお前！お前が誘拐犯か！？」

利樹がそう叫ぶ、利樹もやはり疑問に感じていたのだろう、こんな男が本当に？、と。

「ぼ、ぼ、僕じゃないよお！」

否定する男に、月夜が叫ぶ。

「じゃあなんでこんなところにいるんだ！？それに・・・そのテントの中になんで何人も女性がいるんだよ！？」

男の横には大きめのテントが張られていた。だが、一般人にはそこに女性がいるなどと分らないだろう。

「な、な、な、な、なんのことがな、僕は何もしらないよお」

明らかに狼狽している男、誰が見てもその姿は本当の焦りに見えただろう。月夜ですら、気づかないほどに。

「なめやがって・・・このくそやろう！」

利樹が真っ先に走り出し、その男に飛び掛ろうとした。その瞬間、月夜は悪寒を越える肌寒さを感じ、とつさに叫んだ。

「利樹！危ない！！」

「なんだ・・・え？」

走り出していた利樹の額に、いきなり横一線の切り傷が出来ていた。鋭利な刃物で切られたかのようになっている傷口から、血が滴り落ちる。

「ざあんねえん、はずしちゃったあ」

いつの間にか利樹の目の前に立ち舌つたらずで喋りだす男、先ほどのまでの弱弱しさなど微塵も感じられなかった。

「な・・・何が起きたんだ・・・？」

尻餅をつき、自分の額に手を当て何が起きたか分からない、といった風に利樹は声をもらす。

「まあいいかあ・・・ひゃひゃひゃあつ・・・ああ！？」

「うるせえんだよてめえ」

人の目ではとらえられない程の速さで動いた月夜の蹴りが男の顔面にめり込み、男は後ろへと吹っ飛ばされる。

「大丈夫！？利樹君」

今まで固まっていた楓が走って利樹の元に寄る。

「大丈夫だ、傷はそこまで深くない」

混乱して声を出すことが出来ない利樹の代わりに、月夜が楓にそう告げる。楓は安堵の息をもらしながら、常備しているハンカチを利



樹の額に当てる。

「問題は・・・こつちだよ」

月夜は微かに闇に包まれた瞳を、先ほど吹っ飛ばした男に向ける。置いてあつたいくつかのコンテナを突き破り吹き飛んでいった男、普通の人間ならば、まず死んでいるだろう。

「そおのとおりい」

月夜にそう返したのは、先ほど吹っ飛ばされた男だった。自分の上に乗っていたコンテナの残骸をなぎ払い、男は超然と立ち上がった。それを見た楓と利樹は、信じられないようなものを見た顔をしていった。

「嘘・・・」

「化け物かてめえ・・・？」

先ほどの衝撃で眼鏡をなくした男は、その顔を歪め笑った。

「ひゃっひゃっひやはあ、化け物？化け物！？違う、僕は神になつたんだよあ！見るよおほらあ、あの程度じゃあ傷一つつかないんだあ！」

「だからうるせえ、って言うてんだろ？」

男の頭上に月夜が跳び上がり、頭を狙って全体重をこめたかかと落とし。それを見ていた楓と利樹、月夜すらも終わりだと思っていたが、そのかかと落としは狙った頭ではなく、男の腕によって止められていた、ただの一本の腕に。

「なっ・・・」

そして月夜は上に弾き飛ばされた。十メートルはありそうな工場の天井を突き破り、青空の下に晒される月夜。

「はは・・・良い天気じゃないか」

全く焦りのないその言葉。落ちていく感覚すら、月夜には心地の良いものだった。再度天井を突き破り、今度は下に落ちていく月夜。工場の地面に叩きつけられ、地面に小さな穴を開ける。

「月夜あ！！！」

「ひゃっはっはっはあああ、よわあい、弱いなあ」

楓の叫びを聞き、男は笑いながら、月夜が落ちた地点を見た。

「そう心配すんなって・・・言つたる？護るって」

小さな穴の中から、月夜の声が出た。

「それより、お前ら無事か？」

「こつちは大丈夫だから・・・無理しないで」

天井の破片に巻き込まれないように、楓と利樹は工場の端に移動していた。

「おい、何がどうなってるんだ!？」

全く状況についていけない利樹は、そう叫ぶ。楓は額にハンカチを当てたまま、「後で」、と呟いた。

「あれでえ、しななあいなんてやるじゃないかあ、でも君はあしぬんだよあ!」

男が動く、いまだに動かない月夜がいる小さな穴に飛び込み両腕をたたきつけようとした。が、その瞬間、月夜がいる小さな穴から火柱が立ち昇った。天まで届きそうな炎が男を包み込み、その姿を消し去る。

「ぎゃーぎゃーうるせえつってんだろが・・・三回も言わせやがって」

月夜は立ち上がり、ぼろぼろになった制服に目を落とす。

「あちゃあ、こりゃクリーニング出してもだめだな」

「月夜あ!」

ぼろぼろの月夜に楓が泣きながらとびつく、とは言っても、ぼろぼろなのは服だけだが。

「楓、怪我不いか？利樹も、浅い傷とはいえ病院は行けよ？」

利樹は、自分を見た月夜を恐怖の目で見た。

「なんなんだよお前ら・・・」

かろうじて、それだけが声に出た。月夜はその利樹の目を見ながら、切なそうに言った。

「単なる兵器さ・・・人の形をしたな」

「そんなのじゃない・・・月夜は兵器なんかじゃない!」

楓が必死に叫ぶが、月夜は続ける。

「いいんだよ、兵器として生まれても、こうして誰かを助けることが出来る。それで嫌われても、恐れられても、俺はかまわない」

凜とした瞳で利樹を見つめる月夜。その瞳は、もういつもの月夜に戻っている。

「さて・・・帰ろうか、紫ちゃんは連れていくとして・・・他の人は警察にでも任せたほうがいいかな？」

「・・・たすけてえ、しにいたあくなあいよあ・・・」

弱弱しい声が、三人の間に流れる。月夜は至って普通に、楓と利樹は驚いた顔で声のした方向を見た。そこには、火に焼かれ黒くなっている男がうつぶせになってこちらを見ている。

「月夜・・・あいつまだ生きてる・・・」

楓が月夜にしがみつく。そんな楓に、月夜はなんでもないので口を開く。

「そりゃ殺す手前まで威力抑えたしね、むしろ生きてないと俺が困るよ」

「え？」

月夜の言葉の意味が分からない楓は、ただ月夜を見たまま固まっていた。

「・・・事件の真相、とかか？」

大分冷静さを取り戻してきた利樹が、月夜に言葉を投げる。「ん・・・」、「月夜は困ったように後頭部をかく。

「それもあるんだけどさ・・・」

月夜は自分にしがみついている楓の顔をちらつ、と見てから言う。「楓が言ったこと、だろ？」

ぼんぼん、と楓の頭を軽く叩く。楓は少し考え、そして口を開いた。「もしかして・・・誰も殺しちゃだめ、って言ったやつ？」

「そうそう、忘れてたのか？結構手加減するの難しいんだよ？」

どうやら楓は忘れてたようだ。その証拠に、申し訳なさそうにうつむいてしまった。

「おまえらぁ・・・むしいしないでえ、たあすけてえ」

なんとも情けない声で男は言う。その舌つたららずな喋り方が、より一層男を惨めにしていた。

「死にはしねーよ・・・それで、お前は何者なんだ？なんでこんなことをしたんだ？」

月夜は冷たい目で男を見下ろした。男は月夜の声が聞こえてないかのように、一人呟き始める。

「うう・・・いたいよぉ・・・あいつう、うそついたなぁ・・・何が・・・なにがあ手をかせばぁ、神にしてくれるだぁ・・・」

「あいつ・・・？手を貸せって、なんのことだよ」  
男は独り言を続ける。

「後はぁ好きにしてえ、いいつていつてたのにい・・・お前、お前さえ、殺せばぁ・・・ぎゃぁぁぁぁあつ！？」

慎重に聞き逃さないように男の声を拾っていた月夜は、突然起きた事態に目を見張った。倒れていた男の背中に、いつの間にか現れた何本もの光の矢が降り注いだのだ。男はもがくように、助けを求めるように、片手を少し上げ、そして絶命した。

「いや・・・いやぁぁぁあつ」

「月夜・・・お前が、お前がやったのか！？」

男が無残に死体になる姿を目の当たりにし、泣き叫ぶ楓。同様に青ざめた顔をしながら疑問を叫ぶ利樹。月夜自身、何が起きたのか全く分からなかった。

（いつの間にか・・・とんでもない事件に巻き込まれた・・・ってわけか）

月夜は体にまとわりつく嫌な感覚を拭うことが出来ず、しばらくの間そこに立ち尽くした。

「覚せい剤により狂った青年の犯行、発見された女性たちは眠らされていたが、全員怪我もなく無事保護され、帰路に着いた。しかし、

その時のことは全員覚えてないという・・・か」

月夜はジューズをすすりながら、一人、学校の屋上で新聞を広げていた。昨日自分の身に起きた事件を、月夜はゆっくりと考えていた。(最後にあいつが言っていた言葉・・・誰かがあいつに力を与えたのか？手を貸す・・・どういうことだろう)

物事を順序良く並べ、なんとか整理しようと試みる。しかし、どうにも不明な点が多すぎて正確な答えを導き出すことはなかなか出来なかった。

「お前さえ殺せば・・・か、俺を狙った誰かの罠だったことかなあ」  
(必ず残されていた一つの身元を表す品・・・誰かによって力を与えられた男・・・待てよ？最後に誘拐されたのが紫ちゃんだとすると、事件性を見せつけ俺を誘う罠だったのか・・・?)

どうにもうまくまとまらない月夜だったが、一つ分かったのは、月夜の命を狙っているのは、月夜と同じか、もしくはそれに似通った何かであることは間違いなさそうだった。

「あーもー・・・ただ俺は、平和に暮らしたいだけなのにな・・・」  
柵に寄りかかり、広々とした青い空を眺める。

(空を飛んでいる鳥は自由なのに、なんで飛べる俺は自由になれないんだろうな・・・)

元より、真の自由なんてないことが分かっていた月夜だったが、今はそれがあると思いたかった。

「月夜！」

「うわっ!？」

不意なことに驚く月夜。いつの間にか側には、楓と紫、そして利樹の三人が立っていた。

「やれやれ・・・またさぼりか？お前は」

「勉強出来ると言っても、授業に出ないと進級できないわよ？月夜君」

「留年したら、ちゃんと楓先輩って呼ぶのよ？」

「って、ここにいてってことはお前らもさぼりじゃないのか？」

各々に好き勝手言う三人に、月夜はぼやく。

「もうお昼休みだもん、私たちがいてもおかしくないんだよ。朝からいなかった月夜と違ってね」

「うぐっ・・・色々考えてたんだよ」

「それなら学校休めばいいだろうが、まあいい・・・ちょっとこっち来いよ」

利樹は楓と紫に、先に食べててくれ、と言い残し、月夜の腕を引いて二人とは離れた場所に腰を降ろした。

「それで、昨日のこと説明してくれんのか？」

額の部分に包帯を巻いた利樹が、自分の額を指差しながら月夜にそう問いかける。

「言っても信じるかどうか・・・」

「信じる信じないは俺の勝手だろ？」

信じる信じない云々ではなく、月夜自身、自分のことを語るのが嫌だった。

「一言で言うなら・・・そうだな、生物兵器みたいなもんだよ」

一番分かりやすく言うと、その言葉が一番しっくりとくる。

「生物兵器・・・？よくわかんねーけど、要するに人間じゃないってことか？」

さらりと利樹は言うが、つい月夜は反応してしまう。人間じゃない、という言葉に。

「さあね、俺もよく分かってないんだ・・・俺のこと怖いと思うなら、近づかない方がいいよ」

自嘲気味に笑いながら、月夜は言う。

「何やら誤解があるようだな・・・別に怖いなんて思っちゃいないさ」

いつもの飄々とした態度で、利樹は続ける。

「あれから色々考えたが・・・月夜は月夜だしな。本当のところはよ、紫を助けてくれた礼を言おうと思ってたんだよ、それに俺も助けられたしな」

「礼？言われるようなことはしてないさ」

謙遜ではなく、それは月夜の本心だった。自分のせいで巻き込まれたのなら、むしろ非は自分にある。と月夜は思った。

「お前がいなかったら、紫がどうなっただか分からなかったさ・・・あのヘンタイヤローに何されてたか・・・」

月夜はその言葉に激しく同意した。確かにあの男はヘンタイっぽかったからだ。

「だから、助けてくれてありがとう」

丁寧に頭を下げる利樹を見て、月夜は微笑んだ。

「お前にはそーいうのにあわねえよ、それに、一番必死になってたのはお前だろ？」

「似合わないとはなんだ・・・まあいいか。もう少し、素直になってみるかと、本気で思ったよ」

月夜と利樹は、横目で楓と紫を見る。

「失ってからじゃ、遅いよな・・・」

「ああ・・・後悔してからじゃ、遅いんだよな」

「戻るか、利樹」

「だな」

今回のことで少し成長した月夜と利樹は、自分たちを待つ二人の元へと帰っていった。

「しかしまあ、昨日は色々あったよなあ・・・」

料理を作る楓の後姿を眺めながら、月夜は話しかける。

「そうだねえ・・・そういえば、利樹君に何か言われた？」

どうやら楓は、ずっとそれを心配していたらしい。今日は帰りも四人一緒だったので、中々言い出せなかったのだろう。

「礼を言われたよ、友達つていいもんだよな・・・」

先ほどの屋上での利樹を思い出し、月夜は微笑む。

「利樹君がお礼を言うなんて・・・柄じゃないね」

楓も、ふふっ、と笑う。

「そっぴゃあ……あいつ病院行ったのかな、なんか聞いてない？」  
月夜は思い出したかのように、楓に聞く。

「行ってないらしいよ、お母さんに包帯巻いてもらったらしいし」  
「あんな傷親に見せたら、何か言われるだろうに……」

とは言いつつも、母親に包帯を巻いてもらっている利樹を想像したら、笑いが出てしまう月夜だった。楓は料理をお皿に盛り付けて、月夜の前に並べていく。

「病院行っても何か聞かれるでしょ？結局一緒だと思うよ」

「それもそうか……紫ちゃんには、何も言っていないだろ？」

お皿を並べ終わった楓が月夜の対面側に座り、口を開く。

「もちろん言っていないよ、覚えてない方がいいこともあるしね」

「もつともだ……利樹にはばれたけど、知らないほうが安全だと思う」

いただきます、と二人で言ってから食べ始める月夜と楓。

「そっぴゃあ……」

「ん？どうしたの？」

月夜は言いにくそうにしながら、それでもしつかりと口を開いた。

「昨日はごめんな？わがまま言って」

「いきなりどうしたの？悪いものでも食べた？」

みもふたもない楓の物言いに、月夜は言い返すまねはせず自分の気持ちを伝える。

「いや、楓のこと傷つけたかな……つてさ、ほんとごめんな」

「……私もひどいこと言っちゃったから、私こそごめんな」

お互いに謝る二人。そして月夜は、回りくどい言い方をしないで、直球で楓に言うことを決めていた。

「本当はさ……ただ、楓の作ったお菓子が食べたかっただけなんだ」

言いながら顔を赤くしている月夜。それにつられて、楓も顔を赤くする。



「実はね・・・私お菓子の作り方知らないんだ、クッキーとかケーキとか」

楓も自分が作れないことを告白する。だからこそ、茜やランスの話が出てきたときに楓は気を悪くしたのだった。

「そうだったんだ・・・それなら言ってくれば良かったのに」

「だって悔しいじゃない・・・お姉ちゃんは、お菓子の作り方だけは教えてくれなかったし」

女としてライバル的存在だった楓に、茜としてそこは譲れないところだったのだろう。

「そんなもんかなあ・・・でもさ、甘い物食べたいのは本当なんだよね。楓の手作りで」

話がややこしくならないように気をつけながら、月夜は楓に言った。「うー・・・がんばってみようかな？」

料理自体は好きな楓としては、自分のレパートリーが増えるのも嬉しいし、月夜が喜んでくれるのは嬉しかった。

「じゃあ俺と一緒に作るうか？一緒に勉強しながらさ」

「楽しそうだね、がんばっておいしいの作れるようになりたいね」

まるで新婚のような二人は、その後も色々な話をして楽しんだ。

これからも、自分を狙った事件が増えるかもしれないと月夜は思ったが、楓を護りながら、ずっと一緒に歩んでいきたいと強く心に誓った月夜だった。

## 異変（後書き）

ああ・・・戦闘シーンがへぼい、へぼいよ・・・  
人はどれだけ不器用だったら、こんな行動とるのが全く分からない、  
不可思議な月夜君でした。

## それぞれの過去〜番外編〜

僕は父が嫌いだった。軍人の父は、僕を父と同じ軍人にするために、物心がついた時から厳しい訓練や戦術の勉強などを僕に強要した。僕は軍人になつてなりたくなかった、僕は戦争なんてしたくなかった。人を傷つけるのは嫌だったし、誰かが死ぬのも嫌だった。でも、父に反論すると殴られるから、僕は仕方なく訓練や勉強をしたんだ。あれはいつのことだっただろうか・・・僕が初めて彼に出会った日、自分の中で何かが変わるきっかけとなつた、あの短い日々のことを・・・。

西暦1997年、春。

人気のない朝の海岸を、一人の少年が歩いていた。金色の髪をしていて、その顔にはまだまだ幼さが残っている。歳は八歳前後といったところである。少年は特に何をするわけでもなく、傍に広がる青い海を見ながらゆっくりと海岸を歩いていた。

「きれいな海だよね・・・今もどこかで、戦争が起きてるなんて忘れちゃいそうだ」

一人、そう呟きながら歩いていく少年。その声には、沈痛の色が含まれていた。今は戦争の真っ只中である。彼がいる地域は比較的安全な場所ではあるが、いつ巻き込まれるかは分からない。

少年が歩いていると、一つの小さな人影を見つけた。

「・・・？」

その人影は動くことなく、砂浜に座り海を見ている。少年は不審に思い、その人影に近づいていった。近づくにつれ、はっきりとその人影が確認出来るようになった。黒い髪をしている少年で、金髪の少年よりは背が低く、その横顔は感情を知らないかのような顔だった。

「こんなところで何してるの？」

金髪の少年が横に並び、その声をかける。黒髪の少年は横目でそちらを一瞥し、「海を見てる」と一言だけ答えた。

「僕と一緒に・・・」

黒髪の少年の横に座り、金髪の少年も同じように海を見る。黒髪の少年は隣に座った少年を特に気にせず、海を見ていた。

「君の名前はなんていうの？」

金髪の少年は、何の気なしにそう聞いてみる。黒髪の少年は、顔を海のほうに向けたまま聞き返した。

「名前って何？」

そんな答えを予想していなかった金髪の少年は、困ったように頬に人差し指を当てた。

「何って・・・？難しく言うと、個人や個体を分類するためにそれにつけられたもの。簡単に言うと、周りの人から呼ばれる時に使われるもの・・・かな」

金髪の少年はそう答える。黒髪の少年は、少年の答えに特になんの素振りも見せずに口を開く。

「インフィニティー」

「インフィニティー・・・？すごい名前だなあ、あれと同じ名前だなんて。僕はランス、ランス・レンフォード。よろしく、ティー」

インフィニティーと名乗った少年は、そこで初めて隣に座っているランスに顔を向けた。

「ティー？」

「インフィニティーじゃ長いから、ティーじゃ気に入らない？」

インフィニティーは無表情で何かを考えた。数秒の間の後に、「それでいい」と小さく呟いた後また海に視線を戻した。

「じゃあティーで決まりな・・・僕同じ年代ぐらいの子とはほとんど話さないから、良ければ友達になろうよ」

ランスは物心がついた時から、ランスの父やその周りの軍人ぐらいとしか面識がなかった。だからこそ、歳が近いティーにはなんとなく

く親しみを感じていた。

「友達って何？」

「それも知らないのか・・・友達っていうのは、一緒に遊んだりすることかな、仲良くしたりさ」

ランスにも友達の定義はいまいち分かってはいなかった。勉強はしていても、実際に友達がいたことはなかったからだ。

「よく分からない・・・けど、いいのかそれ？」

「うーん・・・楽しくなると思うよ、一人よりも二人」

説明するランスの言葉を聞きながら、ティーは首をかしげる。

「やっぱりよく分からない・・・でも、お前とは、その友達ってやつになれそう」

無感情に言うティー、ランスはその言葉を訂正した。

「お前、じゃなくてランスだよ」

「ランス」

ランスは笑いながらティーを見る。

「変なやつだなティーは、お前となら仲良くなれそうだよ」

ティーはその言葉を聞いてランスに視線を動かす。

「お前、じゃなくてティー」

無感情にそれを言うティーに、ランスは笑わされっぱなしだった。

ランスがティーの正体を知ったのは、その出会いから一週間後のことだった。それを知ったランスは、さらに親しみを覚えはしたものの恐怖の念などは抱かなかった。軍人として生まれ育てられるランス、兵器として生まれ育てられるティー、差があるとはいえ二人は同じ境遇の元生まれ育ったのだから。

ランスは朝に海岸を散歩するのが日課になっていた。今日もティーの隣に座り、海を眺めながら他愛のない話をする。

「しかしティーも毎日いるよなあ、することないのか？」

「ランスも毎日来てる、暇なの？」

ランスとティーが会ってから一週間、相変わらず無感情的なティーだが、多少の変化が間違いない。彼にはあった。ランスは苦笑しながらそんなティーに返す。

「僕はこう見えて、結構忙しいんだよ・・・父さんが戦争に出てるから、まだゆっくりしてられるけどね」

父がいない間でも訓練や勉強は怠ることが出来ないランス、父の存在は彼のそばにいてもいつも彼を縛っていた。

「ふーん・・・ランスはその父さんってやつが嫌いなのか？」

「嫌いだね、僕は軍人なんてなりたくないのに・・・いつもいつも自分のことを押し付けてくる」

ランスはティーによく愚痴をこぼしていた。周りの大人に言えない自分の本音を、正直にティーに言えることがランスは好きだった。

「嫌いとか、感情はよく分からない。でも、嫌いなら殺せばいい」

淡々と言うティーに、ランスは困った顔をした。

「そんなことは出来ないよ、一応父親だからね」

「なんで？ランスが嫌なら、殺せばいいだけ」

ティーはいつもこんな感じだった。そんなティーを、ランスはいつも複雑な心境で見ている。

「ティー、人が人を殺すのは、悪いことなんだよ」

「だって戦争だろ？味方も敵も関係ない、殺すのは同じ人間」

ランスは胸が痛んだ。ティーのような人間を作ってしまった戦争が、何より彼は嫌いだった。

「それでも・・・人が人を殺すのは悪いことなんだ。たくさんの人が、悲しむよ」

「俺は悲しまない、感情なんて分からない」

ランスは少し考えて、口を開いた。

「じゃあ、僕も殺すのか？ティー」

「殺さない」

何も考えていないかのように即答するティー。

「どうして？」

「友達だから」

ランスは、ティーのそんな当たり前の返事を聞いてしばし啞然とした。しばらくしてから、ランスは苦笑しながら言った。

「なら、みんなと友達になればいい、そうすれば誰も殺さないですむよ」

「そんなこと不可能だろ」

そう、確かに不可能だった。そんなことが出来るのなら、戦争なんて起こるはずがないのだから。

「それでも、誰も殺さない世界、殺されない世界、そんな世界を僕は見てみたい」

「・・・ランスの言うことはいつもよく分からない。でもそんな世界があつたら、きつと俺はいららない」

何を言うにしても無感情なティー、確かにその言葉も無感情ではあつたが、ランスにはどことなく哀しさや虚しさがその言葉には含まれてるような気がした。

「どんな世界でも、ティーは必要だよ。僕は友達がいなくなるのは寂しい」

「そうか、俺もランスがいなくなつたら・・・やっぱり寂しく思うのかな」

いつも感情なんて分からないと言っているティーだが、その言葉は感情を知っている人間のものだった。ランスは微笑みながら、言う。「そういう気持ちが大切なんだよ、だからこそ戦争なんていらなんだ」

戦争なんてない方がいい、とその時のランスは強く思っていた。

一カ月後、父が死んだ。実際にはそれを見たわけではなく、軍の人からそう聞いたものだった。それを聞いたとき、ランスは何も思わなかった。父が人を殺してきたように、父もまた、誰かに殺されただけに過ぎなかったのだから。

「・・・」

ランスは自分の部屋の隅に一人、座って黙り込んでいた。

(哀しくなんてない・・・哀しくなんてないのに・・・どうして・・・?)

何かから自分を護るように、がくがくと震える膝を抱いて座っているランス。力の抜けた目からは、涙がしきりなしに流れていた。

(どうして・・・涙が止まらないんだろ・・・)

理由の分らない涙が止まらないランス、彼はしばらくの間泣いた後、瞼を赤くしたまま立ち上がった。

「ティーに・・・会いに行こう」

誰かに言うわけでもなく、そう呟いた後ランスは自分の部屋を後にした。

「やあ、ティー」

いつもの海岸、いつもの砂浜、そこにはいつも通りティーが座っていた。ランスは声をかけた後、ティーの隣に座り、一緒に海を眺めた。

「・・・どうかしたのか？」

ティーのその言葉に、びくりと体を震わせるランス。少しの間をあけてから、ランスは絞るように声を出した。

「父さんが・・・死んだ」

「それで、ランスは哀しんでるのか？」

ランスは首を振った。哀しいなんて、一度も思わなかったからだ。

「じゃあどうして、泣いてるんだ？」

「泣いてなんかない！」

とっさに口調が荒くなるランス。確かにランスは今泣いていなかった。多少瞼は赤くなっているが、涙はもう出ていなかった。

「哀しいことがあると涙が出るって、教えてくれたのはランスだろ？」

そんなランスを気にすることなく、ティーはいつも通りの口調でそ



う言う。ランスは視線を落とし、虚ろな瞳で答える。

「哀しくなんて・・・ない、泣いてなんか・・・いない」

「よく分からないけど・・・ランスは泣いてる、俺の肌がそう感じてる」

それはティーにしか分からない程の感覚だった。ランスは虚ろな瞳のまま、ティーに語りかける。

「・・・そうだな、泣いているのかもしれない・・・」

哀しくなんてないと強く思っていたランスだったが、本当のところは自分自身分かつてはいなかった。胸に穴が開いているような感覚が、ランスを悩ませた。

「慰めの言葉なんて、俺は分からないから出来ないけど・・・泣けばいいんじゃない？泣きたい時に泣けるのが、人間なんだろ？ランスが教えてくれた」

ティーの言葉は、今のランスにとどめをさすには十分すぎるほどだった。ランスは先ほどのように、膝を抱え泣いた。

「誰かのために泣けるのは、正直うらやましい」

人間の感情がいまいち分からないティーには、哀しみも涙も関係ない話だった。しかし、この時ティーはランスをうらやましいと心から思った。

泣いているランスの隣に座り、無言でいるティー。ランスはひとしきり泣いた後、口を開いた。

「・・・僕は戦争をなくしたい」

「ランスがそう望むのなら、やればいいと思う」

ランスの中で何かが変わり、強い意志を抱かせた。周りから見たら子どもの戯言だったかもしれないが、この時、ランスは心からそう願った。

この後、ランスは自主的に訓練や勉強に励んだ。戦うためではなく、戦争を失くすための力と知恵を欲したからだ。その反面、遊ぶことにも力を入れていた。ランスはティーを連れて、色々なところで一

緒に遊んだ。人との交流なしでは、戦争をなくせる人間になてなれるわけないと、ランスは思っていたからだ。実際、ティーから学ぶことは多かつたし、ティーに教えることも多かつた。色々な理由があつたが、何よりランスはティーと一緒にいるのが楽しかつた。その楽しい時間も、一年とたたずに幕を閉じることになった。

西暦1998年冬後半、その年の昨年のティーの活躍により無事戦争を終えることが出来たアメリカは、ティーを監禁しようとした。戦争での英雄も、実際に戦争が終わってしまえば単なる大量殺人犯のようなものだ。特にティーは生物兵器であり、野放しにしておくのは危険だとアメリカは判断した。

「本当に行つちやうのか？ティー」

「まーね、戦争も終わったことだし・・・わざわざ監禁されてまでこの国にいる気はないよ」

ランスは心配そうにティーを見る。そんなランスに、ティーは笑いながら言った。

「俺がいなくなつて寂しい？」

ランスは苦笑しながら、答えた。

「生意気言つてるなよ、別にお前がいなくなつてやっていけるさ」  
一年足らずの絆だが、二人の間には友達を超える何かが芽生えていた。

「相変わらず素直じゃないなあ・・・なあ、今更だけど、これからは兄さんって呼んでいい？」

「いきなりどうしたんだ？」

ティーは気恥ずかしげに言う。

「色々教えてもらつたり、世話になつたしね・・・ほんとに、兄のような存在だつたからさ」

「僕もティーには感謝してる、ティーがそう呼びたいならそう呼べばいいさ」

しばらく視線を合わせあう二人・・・先に口を開いたのはティーだった。

「平和な世界が訪れることを、どこかで願ってるよ・・・またね、兄さん」

ティーはランスに背を向けて、歩き出す。その背に、ランスは声を投げた。

「ありがとう、またどこかで会えるといいな」

その言葉にティーは言葉を返さなかった。その言葉を背に受け、ティーは頬に涙を流しながら颯爽ととびさっていった。

ティーがいなくなってから、ランスは色々と忙しかった。訓練や勉強。また、父が軍人として高い地位にいたため、歳若くして軍に抜擢されたランスは、軍務などに圧迫され、悩まされていた。

「こうして軍にいると・・・よく分かるな」

自分が望んでいることへの実現・・・ティーや子どもの頃の自分などの犠牲者を増やしたくない、だからこそ戦争をなくしたい。しかし、夢を追うには現実はあまりにも厳しかった。戦争が終わったとはいえ、前のように豊かな国に戻るには時間と手間がかかるし、何より日本側は未だに戦闘意欲がなくなっておらず、油断は許されなかった。

忙しい日々にも身を置き、気づけばランスは十九歳になっていた。その間にやってきたことは、皮肉にも彼が叶えたいと思っていたことの逆だった。第三次世界大戦時敵国の反乱勢力の鎮圧や、自国内の暴動の鎮圧、そんなことを繰り返す内に、ランスの子どもの頃の夢は消えていた。どうあがいても、人は争い、誰かを傷つけてしまう。思い通りにいかない日常に、ランスの心のジレンマは爆発寸前だった。

「無理なのか・・・？戦争や争いをなくす、なんてことは・・・」

いつしか、ランスは自分の夢を捨てた。軍の上位に立ち、兵を指揮する立場のランスに、甘えや同情は許されなかった。戦争はしたくない、だからといって自分のそんな甘い幻想で自分の部下たちを死なせるわけにはいかなかった。

「あいつが一緒にいたときは・・・なんでも出来る気がしたのにな」  
ランスはいつも隣にいた少年の顔を思い出す。

（今も元気でやっているかな？）

そんなランスの心中を察するかのように、国の最高権力者・・・大統領より任務が下された。

「日本が不穏な動きをしている、彼・・・インフィニティーに助力を願ってきてはくれないか？」

こうして、皮肉なことに、ティーと久しぶりの再会をするのはランスではなく、軍人としての彼となったのだった。

しかし、ティーが力を貸さないことなど分かっていたランスは、軍人として最善の計画を密かに練っていた。

「汚れ役でも憎まれ役でもかまわない・・・また戦争が起きるぐらいなら、最低限の犠牲で終わらせるにこしたことはないんだ」

そう力強く心に決め、ランスはティーがいる国・・・日本へと飛び立っていった。

それぞれの過去〜番外編〜（後書き）

ほぼ全キャラ過去話考えてますが、とりあえずメインキャラのこの人でいってみました。次話も過去話だったりするわけなんで・・・  
本編は少し待ってね（あ

## それぞれの過去2

裕福な家に生まれたわけじゃなかった。特別な人間だったわけでもなかった。でも、うちはとつても幸せだった。

小学校の頃から、朝早く起きて母の新聞配達を手伝ったり、家事を手伝ったりしていた。母はよくうちに、「ごめんね、家が貧乏で」と泣きながら言っていたけど、うちはそんなの全然気にならなかった。毎日が楽しかったし、母と父の笑ってくれる顔が好きだったから、うちは友達とあまり遊ばないでがんばってきた。こんな幸せが、ずっと続けばいいと願ってた。でも・・・終わるのは突然だった。

うちが高校進学を間近に控えていた時、父が倒れた。原因は過労と・・・癌だった。うちは進学を諦めて母に、「うちも働く」と言っただけど、母は辛い顔をしながら、「お母さんがんばるから・・・高校は絶対に出なさい」と言ってくれた。父の代わりに母は一生懸命働いていた。うちはそれをいつも辛い気持ちで見ていることしかできなかった。

父が倒れてから一カ月後、父は・・・亡くなってしまった。学校が終わった後、いつものように父が入院している病院に行った時、父の周りに何人かの看護婦や医者がいた。最初は何が起こったのかわからなかった。その時の、部屋の入り口で呆然と立ち尽くすうちを見る医者たちの目を忘れることが今でも出来ない、同情するような哀れむような目を・・・。うちは結局、お世話になった父を見送ることが出来なかった。

たくさん泣いた、母と一緒に、涙は止まることを知らないかのようにあふれ続けた・・・。お葬式はやらなかった、お金がないのもあったし、父が残っていた遺書に、やらないで欲しい、という言葉も書き残されていたからだ。

父が死んでから二日後には、うちはしっかりと学校へ行った。必死に働いてくれている母のために、死んでしまった父のために・・・

学費を無駄にすることなく、うちはちゃんと勉強をした。思い出すたびに、学校で何度も泣きそうになってしまったけど、それも我慢した……。

父といううちの幸せの半分はなくなってしまったけど、残された半分の幸せ……母がいるからうちは辛くてもがんばれた。でも……幸せの形は、半分になってしまったら、もう半分もすぐに消えてしまふことを、うちは知らなかった……。

夏休み手前の日頃、いつものように早朝から仕事に行った母が帰ってこなかった。次の日も、その次の日も……母は帰ってこなかった。うちは倒れてしまいそうな程の不安を胸に、それでも学校へ通い続けた。それでも……母が帰ってくることはなかった。

ニュースや新聞に、母の姿を見ることは出来なかった。死んでいるのか生きているのかさえ分からず、不安な気持ちのまま夏休みはすぎさってしまった……。どんなに待っても帰ってこない母を思い、うちはようやく理解出来た。うちは捨てられたんだ……。

うちは少しの間、何もすることが出来なかった。学校に行くことも働くことも、食事さえ喉を通らず、寝ることすらままならなかった。そしてうちは、学校を辞めた……。生きる気力が完全になくなっていたうちは、ただ一人、死ぬことを望み、家で何もせずに横になっていた。

……なんとなくだった。動く気力が全くなかったのに、うちは家を出て、公園のベンチに座り、眩しい太陽を眺めた。本当に、ただなんとなくだった。でも、ここに来なければいけない、と頭の中で何か命じられたかのように、うちはここにきた。

小さな男の子と女の子が、公園の中を走り回っていた。歳は七、八歳ぐらいだったと思う。それを不意に見てしまったうちは、その頃の自分と子どもたちを合わせてしまった。涙がこみあげてくる……。どうしてこんなことになったんだろう？と、自分は幸せの中にいた。でも……今は？

涙が止まらなかった。頬がこけ、痩せ細り、ミイラのようになって

しまった自分でも、まだ幸せを望んでいることが理解できた。うちはまだ、死んでいなかっただんた……。

とめどなく流れる涙と止まらない嗚咽を出し続けるうちに、いつの間にか近くに来ていた男の子が声をかけてきた。

「どうしたの？大丈夫？」

うちはその顔を今でも覚えている、あどけない瞳の奥に、何か重たい物を持っていたその少年を……。うちは言葉を出せずに、ただ泣いていることしかできなかった。

「何か辛いことがあったんだね……。大丈夫、俺がお姉ちゃんを護つてあげるよ」

その少年は子どもなりに、うちを励まそうと必死だったのだろう。小さな少年の根拠のないその言葉に、うちはすがりついてしまいそうになった。それ程、追い込まれていた……。うちはなんとか、声を出した。

「……本当に？」

「うん、だから泣かないで」

少年はうちの横のベンチに立ち、うちの頭を抱き締めてくれた。涙や鼻水がつくのもためらわずに、少年はそうしてくれた。

「辛いことも、哀しいことも多いけど……。死んでしまった人の分、俺らは生きていかなきゃいけない……。独りでじゃない、支えあって」

少年の言葉には重さがあった。まるで、戦争を体験したことがあるかのような言い方だった。うちはしばらくの間、少年の温もりを感じながら、泣き続けた……。

「ごめんね、いきなり……」

やっこのことで涙が止まったうちは、少年から顔を離して謝った。

少年は微笑みながら言う。

「誰だって、独りじゃ折れそうになる時もあるよ……。辛かったら、また助けるよ」



どうしてこの少年の言葉が胸に深く響くのか、その時のうちには分からなかった。今も・・・きっと分かってはいない。

「ありがとう・・・君の名前は？」

「俺は・・・」

「こらー！」

少年とうちの間に、さっき少年と一緒にいた少女が割り込んだ。少女は、むー、というような顔をして、少年の腕を引っ張った。

「おトイレから帰ってきたらいないし・・・何やってたのよ、早く遊ぼう」

少女の目は、明らかうちに対して敵視しているような目だった。少年は困ったように、最後に言う。

「ごめんね、また・・・」

少年は少女に引っ張られるように、うちから離れていった。それを見ながら、つい微笑んでしまった。

「可愛いお年頃・・・だね。さてと・・・」

気分は晴れ渡っていた。父の存在と母の存在が幸せの全てだと思っていたうちは、今頃気づいた。うち自身の存在の幸せは、自分が作っていかなきゃいけないことに・・・。

名前を聞くことが出来なかった少年が去っていった後を少し見てから、うちは公園を後にした。

それからすぐに・・・というわけにはいかなかったけど、少しだけ残っていた貯金を切り崩して使い、体力や体調を戻すのに一週間。

再度精神を落ち着かせるのに三日程かかった後、うちは働きに出た。家から近くの工場で、年齢的に高校生のうちは雑用や雑務などのめんどくさい仕事をたくさん押し付けられた。大変だったけど、とても充実していたと思う。気がつけば、あれから一年間が過ぎていた・・・その間、母が帰ってくることはやっぱりなかった。

「茜ちゃん、今日も可愛いねー」

「大変だろうけど、がんばるんだよー」

工場には色々な人がいる。中年のおじさんもいれば、中年のおばさんもいる。それぞれ分かれてはいるけど、うちはたくさんの人に応援されて今でもここががんばっている。

「もう、何言ってるんですか」

「大変でもないですよ、楽しいですから・・・がんばりますよ」

それぞれの人の言葉に返し、うちは仕事を進めていく。誰かに応援されたり必要とされたりするのは、すごく嬉しかった。

「茜ちゃん」

「あ、鈴代さん・・・」

今声をかけてきた人は鈴代さん。鈴代さんはうちの好きな人だ。うちが入って間もない頃から、よく世話を焼いてくれたり、心配してくれたりした。

「どうしたんですか？」

「いや、特に用はないんだけど・・・あー・・・んー・・・」

うちはよく分からないまま、そんな彼を見ていた。決心したかのように、鈴代さんが口を開いた。

「今日仕事終わったらさ、食事にも行かない？」

「え？」

胸が高鳴った、それはもしかして・・・？

「デートのお誘い、ですか？」

「それ程大げさなものでもないんだけど！・・・うん、そうなるかな」

そんな風に焦る彼を見て、うちはつい笑ってしまった。鈴代さんは口をとがらせて、うちに言う。

「あんまり笑うなって、苦手なんだよこういうの・・・好きな子なら尚更だろ？」

「え？え？もう一回言ってください」

焦るのはうちの番だった。相手も気になってくれてるとは思っていたけど、そう言われるとすごい照れてしまう。

「二回も言うか！・・・そんなわけだから、今はお互い仕事がんばろうな」

「はい！仕事の後、楽しみにしてますね」

顔を赤くしながら去る彼の姿を見送ってから、うちは気合をいれて仕事をする。すごく・・・嬉しかった。多分、今まで生きてて一番幸せを感じていたと思う。

頑張って仕事をしている最中に、工場長に届け物を頼まれた。電車で二駅分程の、違う工場へのお届けだった。うちはそれを快く受けた。届け物なんて比較的めんどくさいことは、普段はあんまりやる気がしないけど、今日は別だった。全てのことを楽しく思えて、全てのことが幸せに感じた。・・・でも、でもね？不安もあった、失うことの哀しさは知っているから・・・そして、それが消えるのも突然だつて分かっているから。

お届け物を終えたうちは、帰りの電車に乗って工場へと帰った。そして・・・人生なんてそんなに甘くないことを、うちは身をもってまた痛感させられた。

「・・・どうして？」

さつきまで工場があつたはずの場所は、瓦礫の山と化していた。燃えていて、全てが見る影もないほど無残な姿に変わっていた。うちが立ち尽くしている中、その周辺に集まっていた人々が、口々に言っている言葉が聞こえた。

「ガス爆発かねえ・・・」

「いや、もしかしたらテロリストによるものかもよ？作っていたものが作っていたものだしなあ・・・」

「兵器に使われる部品でしたっけ？怖いわねえ」

「なににせよ、あれじゃ中で働いてた人は助からんじやろうに・・・」

その言葉全てが、うちの耳に、心に突き刺さった。気づかない内に、体が動いていた。

「お嬢ちゃん？そつちは危ないよ！」

「離して・・・離してよ！！」

燃えている瓦礫の山に走ろうとしたうちは、その場にいた何人かの  
人に止められた。死んだってかまわない、だから・・・だから・・・

「鈴・・・代さん！」

「ここの工場のお嬢ちゃんか、危険だから止めなさい！」

「止めないで、止めないでよ！！・・・わあああ」

何がなんだか、もううちには分からなかった。その後、どう家に帰  
ったか分からない。止められた後、うちが何をしたのかも分からない。  
気がついたら家において、一人、膝を抱いて泣きながらうずくま  
っていた。

「どうして・・・？どうしていつも・・・」

うちはがんばってきた。辛いことが多い中で、それでも必死にやっ  
てきた。大きな幸せなんて望んでいなかった、小さな幸せでも・・・  
うちが幸せと思える幸せを、望んでいた。ただそれだけなのに・・・  
どうして？どうして神様はこんな不公平なんだろう・・・うちは人  
並みの幸せすら望んではいけないのだろうか・・・？もう・・・何  
も分からない、分からないよ・・・。

どれだけの時間、そうしていただろうか。一瞬にも思えた、永遠に  
も思えた。うちは立ち上がり、家を出た。

外は雨が降っていた。その中を傘もささずにうちは歩いていく。あ  
の日、うちを護ると言ってくれた少年の面影を追うように・・・。  
うちは公園のベンチに腰をおろす。部屋で一人悩んでいる時に、あ  
の子の顔が浮かんだ。また会えるとは思っていなかったけど、あの  
日、うちに生きる気力を与えてくれた彼にもう一度だけ会いたかつ  
た。

あの日見た太陽は雲に覆われ、その姿を見せることはない。彼に会  
うことが出来ないのなら、このまま雨に打たれ続けて死んでもいい

と思った。

何時間、そこにいたのかは分からない。不意に、上から声をかけられて顔を上げた。

「こんなところにいたら、風邪を引いてしまうよ?」

その声はとても落ち着いていて、貫禄を感じさせる声だった。感じたとおり、声の主は老人だった。うちは相手の顔を見たまま、何も言わずに座っていた。

「泣いているようだね・・・理由は分からないが、良ければ家に来るといい」

うちは静かに首を縦に振り、老人についていくことにした。人攫いでもなんでも、実際はどうでも良かった。

お風呂を貸してもらい、冷えた体を温める。老人が一人で暮らすには広い家だと感じた。それでも、うちにはどうでも良かった。ただ、何を考えるわけでもなく、何をするわけでもなく、死んでしまいたかった。

お風呂から上がり、洗面所に用意されていた服に着替える。なぜ女性物の着替えがあるのかは、深くは考えなかった。

家の中を迷うこともなく、電気がついている部屋、リビングのような場所にうちは行った。そこには先ほどの老人が椅子に座り、一人でテレビを見ている。うちは声をかけることなく対面側の椅子に座った。

「この近くの工場でテロの爆発があったそうだね・・・全く嫌な世の中だと思わないかい?」

テレビからこちらに顔を向けて、老人が唐突にそう切り出した。うちは顔を伏せて、あの時のことを思い出す。

大切な場所、大切な人たち、大好きだったあの人・・・うちの人生から、全てが一瞬に切り捨てられたあの光景。涙は枯れることなく、今もあふれそうになっている。

「どつやら辛いことを思い出させてしまったようだね・・・すまない」  
うちを心配してくれているような老人の温かみのある言葉、それでもうちは顔を上げることが出来なかった。

「何があつたのかは聞かないよ・・・泣きたい時は泣いた方がいい、哀しい時は哀しんだ方がいい。明日につながる涙は、決して無駄にはならない」

その言葉にうちはカッとなった。当たり前だ、どんなに泣いてどんなに哀しんで・・・がんばって行こうと決めたって全てが一瞬で消えてしまう。うちには明日につながる涙なんてなかった、今も先にもうちの涙はつながらない、ただ過去にしがみつきたいだけの涙にしか過ぎなかった。だから、ついとっさに怒鳴っていた。

「例え明日につながっても、大切なものはまたすぐに消えるじゃないですか！あなたに何が分かるんですか！？」

怒鳴ってから気づいた。それが単なる八つ当たりにはかすぎないことに・・・それでも老人は、落ち着いた声で言う。

「分かる、とは言えない。でも、それを知らない人間はきっとこの世にはいないよ」

「じゃあなんで人は生きるんですか・・・大切なものをすぐに失ってしまうこんな哀しい世界で」

なんでこんなことを言っているのかうちには分からなかった。うちはただ知りたかっただけなのかもしれない、大切なものが何も無い自分が辛い中生きていく理由を・・・。

「哀しいことだけだったかい？」

「え・・・？」

「生きていて、哀しいことしかなかった？大切なものがあつたということは、楽しいこともあつたはずだよ」

「哀しいことだけ？違う・・・失ってしまったけど、あの時のうちは確かに幸せだった。」

「人間は忘れてしまつんだ、哀しみに流され楽しかった頃を、楽し

さに流され哀しかった頃を・・・」

「でも・・・でもうちは、今辛くて、どうしようもなくて・・・」

老人の言っていることは正論だった。それでも、今は辛い。今が・

・辛い。だからうちは、反論するしかなかった。

「苦しくて哀しくて・・・過去も未来も見れなくて・・・消えちゃえばこんな想いしなくてすむのに！」

うちは叫ぶように言っていた。胸の中に渦巻いていたものが、全て吐き出された気分だった。本当はただ・・・誰かに話を聞いて欲しかっただけなのかもしれない・・・。老人はうちに落ち着いた声で言う。

「生きていれば良いこともある、なんてことは言わない、そんなきれい事を言う気もない・・・しかし、死んでしまったら何も残らない。君が死んだら、哀しむ人もいるはずだよ」

「うちには誰もいない、哀しむ人なんていてくれない！」

大切な人が死ぬ、いなくなる。うちは散々それで哀しい想いをして来たのに、うちが死んでも誰も哀しんではくれない・・・胸が、痛い。

「わしが哀しむよ・・・だめかね、それじゃ？」

偽善的ともとれる言葉を聞き、うちは初めて顔をあげた。老人は優しく、しかし哀しそうに笑っていた。

「出会って間もないのに・・・なんで哀しむの？」

単純にそう思った疑問を口にした。いつの間にか、うちはこの老人の雰囲気にも飲まれていたのかもしれない。

「時間なんて関係のないものだよ。一度しか顔を見たことが無い者一度も会ったことが無い者・・・わしは戦争で彼らが死んでいくのを見て、幾度となく泣いたものだ」

辛い過去を振り返るように、老人は哀しそうな顔をする。うちは分かった気がした、この人が言っているのはきれいな事でも偽善でもなく、自分が歩んできた道の辛さを理解してるからこそその言葉だと。

「強要はしない、する権利もない。だが、死んではだめだ」

そんな言葉の矛盾に、うちは少し笑ってしまった。どうして、あの男の子やこの人は誰かのために励ましの言葉を言えるのだろうか？

「・・・厳しいんですね。辛いのに、哀しいのに生きるなんてきつと笑えてたと思う。不恰好かもしれないけど、ゆがんでいたかもしれないけど・・・きつと笑えていた。そんなうちを見て、老人は安心したような顔をした。

「もう大丈夫、かね？そんな素敵な笑顔が出来るのなら」

今も辛くて哀しい、でも・・・大丈夫な気がした。なぜかは分からない、それでも心は晴れたような気がした。

「辛かったらこの家に来るといい、部屋は空いているから。賑やかだから、悩んでいる暇すらなくなってしまうよ」

その言葉を聞いて不思議に思った。この人以外に人がいる気配はないのに・・・。

「他にも誰か住んでいるんですか？」

「子どもが何人かいるよ、今は学校に行っているから静かなものさ」「そうなんですか・・・奥さんはいないんですか？」

そう言うてから、自分が聞いてはいけないことを聞いたようなばつの悪さをうちは思った。しかし、老人は気にした様子も無く答える。

「妻は何年も前に、ね。わしら夫婦の間に子どもはいなかったがね」

「え？それじゃどうして」

「戦争の孤児を引き取った、ただそれだけですよ」

ここで初めて、うちはこの老人の哀しさだけの表情を見た。なんとか話題を変えようと、誤魔化そうとしてみる。

「そうなんですか・・・そう言えば、名前はなんていうんですか？老人はすぐに、というわけでもないけど、表情を変えて答えた。

「如月朔次郎です、今更かもしれないけどよろしく。君は？」

優しく微笑む老人は、うちに握手を求めて手を出す。それを握りながら、口を開く。

「向日葵苗です、こちらこそ今更ですがよろしくお願いします」



その後は少しだけ他愛のない話をしてから、家に一度帰ることにした。大丈夫と思えても、一人ではやっぱり寂しいと思う気持ちがあ  
る。だから、この家に住ませてもらうことにした。

「それでは、一度帰りますね。近いうちにこちらに来ると思うので、  
近いうちではなく、明日にでもここに来ようと決めていたけど、そ  
れは言わなかった。老人は玄関まで見送りをしてくれた。

「気をつけて帰ってね、最近は何騒だから」

「大丈夫です、それでは、また」

老人の優しい笑顔を背に、うちは家を出て行った。外はさっきまで  
の雨が嘘のように、晴れ渡っていた。

この家に引越してきた時、最初はすごく驚いた。あの時、辛いう  
ちを助けてくれた男の子がこの家に住んでいたからだ。覚えている  
かな？と期待はしていたけど、彼は気づいた様子もなかった。しよ  
うがない・・・かな？あの時のうちは今とは全然別人のようだった  
から・・・。だから、うちも初めて会ったかのように挨拶した。

「初めまして、よろしくね」

その時の照れた顔をしていた月夜の顔を今でも覚えている。隣でそ  
れを見て複雑な顔をしていた楓のことも覚えている。うちの新しい  
生活が、ここでまた始まった。

とはいえ、うちがこの家で過ごしたのは約一年程だった。その間に  
色々なことがあった。

お酒が飲めるようになったし、大分明るくなれたと思う。ちょっと  
やりすぎて、兄弟からは迷惑がられていたと思うけど・・・それで  
もうちは、幸せで充実した日々を送っていた。そんな幸せを自ら手  
放した理由は・・・月夜と楓の二人を見ているのが辛かったから。  
落ち込んでいた時、誰も気づいていない中月夜だけはうちを励まし  
てくれた。兄弟としての心配する気持ちだったのだからうけど、うち

はそんな月夜にいつの間にか惹かれていた。でもだめだった・・・月夜には楓がいて、楓には月夜がいた。大切な家族の幸せを壊したくないから・・・ううん、本当は辛くて、きつと我慢出来なくなるからうちはあの家から逃げた。幸せな日々を捨てるのは怖かったけど、うちはそこまで壊れることなく自立できたと思う。

それから・・・一人暮らしで、ずっと働いた。寂しく思うときもあつたけど、がんばれた・・・少しは大人になったのかな？

新しく働き始めても、うちは誰かに恋することが出来なかった。失う怖さもあつたし・・・月夜のこと忘れられなかったから。何度も家に顔を出そうか悩んだけど、ずっと我慢してきた。

家を出てから五年、女々しいかもしれないけど・・・うちは今でも月夜のことを想っていた。でも、そんなことじゃいけないと思つた。だから、休みをとつて家に帰ることに決めた。・・・本当に、本当に嫌で汚い考えだけど、もしかしたら月夜と楓が一緒じゃなくなつてるかもしれない、と淡い期待を抱いて、うちは自分の恋に決着をつけるために、家に帰つた。

でも、気持ち的に普通に帰るなんて出来なかった。だから、ちょっとした遊びを含めて、自分の照れくさい気持ちを隠そうと思つた。入学祝い用の変な銃を買つたり、黒い覆面を買つたり・・・ドキドキしながら、家の前で準備したり・・・何やってるんだろ、なんて自分でも思つたりしたけど、やっぱり照れくさかつたし、普通に月夜に会うことなんて出来なかつた。準備はすぐ終わった、銃を持つて家の呼び鈴を鳴らす。最初に何を言おうか迷つたけど、それは顔を見たら決めればいいと思つた。呼び鈴を鳴らしてから少しして、家から顔を出したのは・・・大分成長していた月夜だった。今こそ、この長年の想いを終わらせたい・・・終わらせよう。

それぞれの過去2（後書き）

果たしてこれは番外編扱いなのかどうか・・・？

## 夏休み編

雨がしとしとと降り、多量の湿気により人々を暗鬱とさせる六月。先月の誘拐事件以降、今のところ月夜と楓に事件らしい事件は起こらず、平穏な日々を送っていた。しかし、事件はなくとも日常に違和感を感じている者が一人、いた。

「最近、様子が変わらない月夜？」

いつもの登校路をいつものように歩いている月夜と楓。楓のそんな一言に、月夜はぎくつと身を震わせた。

「何言ってるんだよ、俺のどこが変わって言うんだ・・・変な楓だなあ」

「月夜は元々変だけど、最近特におかしいような気がする」

楓のさりげなくひどい言葉に、月夜はいつもの子どものような反論をすることはなかった。

「おかしくなってる・・・」

あくまで否定する月夜に、楓は心配するような言葉を口にする。

「本当に？すごく疲れてるように見えるよ、大丈夫？」

月夜がいつも通りの子どものような反論をすれば楓もいつも通り怒るが、今日は勝手が違った。いつもと様子の違う月夜を、楓はひどく心配していた。

「疲れてないから、大丈夫だよ」

楓に心配させないようにと微笑む月夜だが、その顔からはありありと疲れが読み取れる。目の下には隈が出来ているし、顔色も良くない、まるで一足遅く五月病になった新入社員のような風体だった。

楓としては、自分の知らないところでまた何か事件に巻き込まれているかもしれない月夜が心配で、そしてそれを秘密にされていることが胸を苦しめた。

「最近どこに行ってるの？帰りも遅いし・・・何かあるのなら、私

だつて力になりたいよ」

最近の月夜は確かにおかしかった。六月が始まった頃から、学校から帰ってすぐに家を出て、大体帰るのは十時過ぎ、遅い時は午前二時をまわっていた。それが週に三回も四回もあれば、楓じゃなくたっておかしいと思う。月夜は言葉を濁すように言う。

「んー・・・まあ大したことじゃないよ」

「私に言えないことなの？」

辛そうな楓の言葉を聞き、月夜は目を伏せながら言う。

「・・・そうだな、楓には言えない」

「そつか・・・分かった、もう聞かないから」

けんかをしているわけでもないのに、押し黙る二人。色々なものが混ぜ合わさった嫌な雰囲気の中、セミのうるさい声だけが響いていた。

今日の月夜は、いつにもまして授業中ぐだぐだしていた。授業の半分は寝ているし、最初は注意していた先生もはや諦めていた。体育で走りながら寝ていた時は、さすがに楓もまわりも呆気にとられていた。

「どうしたんだよ月夜、なんかやたらお疲れのようだな」

昼休み、いつものように利樹と紫が月夜と楓の席に来る。うつぶせになっっている月夜は、気だるそうに顔を上げて利樹を見た。

「色々な・・・飯食うのも億劫だよ」

「授業中にあれだけ寝てたのに、まだ眠いの？」

紫は呆れ七割心配三割といった感じで、言う。月夜は再度机に突っ伏し、投げやりに言った。

「眠い・・・飯いらさないから、三人で行っていいよ」

「おいおい、昼飯もろくに食べないで元気出るわけないだろ？・・・ま、無理強いしても仕方ないか」

「そうね、寝かせておきましょう。・・・どうしたの楓？」  
三人が話している中、一人ぼーっとしていた楓はその言葉にはつと  
なる。

「なんでもないようん、ご飯食べに行こう」

慌てて立ち上がった楓は、その反動で座っていた椅子を盛大に倒し、  
更に慌てるように椅子を直した。その様子を見ていた利樹が、いや  
らしい笑みを浮かべながら口を開く。

「ははぁ・・・二人ともお疲れってますか、若いねえ・・・い  
つてえ！」

「何下品なこと言ってるのよ。それに・・・そ、そんなことは私た  
ちが口出すことじゃないでしょ？」

利樹をはたく紫だが、実際に言っていることは大差なかった。楓は  
よく分からない、といった感じで口を挟む。

「なんのこと？それより、早く行かないと時間なくなっちゃうよ」

「それもそうだ、行こうぜ」

「そうね・・・うるさくしたら月夜君も眠れないだろうし」

気遣うような紫の言葉に、うつぶせになっている月夜が口を開く。

「全くだ・・・うるさいぞ、利樹」

「俺限定かよ！つたく・・・」

そんな月夜を置いて、利樹と紫は教室を出るために歩き出す。月夜  
のそばに一人残っている楓を、変に思った紫が振り返って声をかけ  
る。

「どうしたの楓？」

「うつん、なんでもないよ・・・先行つてていいから」

「お熱いことで、それじゃ先行ってるぜ」

利樹と紫が教室を出て行くのを見送ってから、楓は月夜に声をかけ  
る。

「本当に・・・大丈夫？」

「ん・・・大丈夫、でもないか・・・」

うつぶせになったまま、弱弱しい声を出す月夜。楓はそんな月夜が、

とても心配だった。

「そんなに疲れてるなら、学校休めばいいのに・・・」  
楓のそんな言葉に、月夜は少し沈黙してから言いにくそうに口を開く。

「学校ぐらいは来ないと・・・その、あれだよ・・・」

楓は頭にハテナマークを浮かべて、月夜の言葉の続きを待つ。

「・・・楓と一緒にいる時間、なくなっちゃうだろ？」

やっと吐き出された月夜の呟きは、楓の顔を赤くさせるには十分すぎるほどだった。言っている月夜本人も、耳が赤くなっているのが分かる。

「でも・・・無理したら嫌だよ」

「大丈夫大丈夫、心配かけてごめんな・・・でも、やっぱり言えないんだ」

いつもはのほほんとしている月夜だが、結構頑固なところがあった。月夜の気持ちを少なからず理解した楓は、それ以上口を出すことをやめた。うつぶせになっている月夜の頭を撫でながら、楓は言う。

「私も心配してばかりでごめんね、おやすみ・・・行ってくるね」  
多少の不安を残して、楓は教室を出て行く。一人残された月夜は、すぐに夢の中へと誘われていった。

学校を終えた月夜と楓の二人は、特に何かに巻き込まれることもなく無事家に着いた。下校中も眠そうにしていた月夜だったが、顔色は大分良くなっていた。

「今日はお出かけないの？」

部屋で制服から着替えてリビングに来た楓は、同じく自分の部屋で着替えて来て先に椅子に座っている月夜に声をかける。

「ん？今日はお出かけないよ」

新聞紙を広げながらテレビをつけている月夜はそう返す。月夜が新

聞紙を逆さまに持っていることに、楓は特に何も言わなかった。対面側の椅子に座り、楓はテレビを見ながら口を開く。

「通り魔事件だって、物騒だね・・・この付近じゃないこれ」

「だなあ、戦争も怖いけど、身近な事件のほうがよくぼど危ない」  
新聞をたたくでテーブルに置いてから、月夜もテレビに目を向ける。  
テレビには、事件があつた場所が次々と映し出されている。

「被害者六名、その内の四人が殺されていて犯人は未だ分からず・・・か。楓も気をつけるよ？」

「月夜が一緒なら安全でしょ？」

「そうだけど、一人歩きとか危ないからな」

実際のところ、楓が一人で出歩くことはあまりない。登下校はほぼ月夜と一緒にだし、買い物なども荷物持ちとして月夜と一緒にいる。

遊びに出歩くこともあまりしなかったため、楓は帰宅後は大抵家にいる。

「うーん、そうだね・・・気をつけるよ」

特に何も無い会話だったが、楓は嫌な不安を少しだけ感じていた。  
なぜなら、今まで通り魔事件が起きている日に月夜は外出している。  
しかも時間帯は深夜。事件が起きてないときにも月夜は外へ出ているが、楓は小さな不安を拭えなかった。月夜がそんなことをするわけがないと楓は分かっているが、なんとなく嫌なものが残る夕方のことだった。

「そろそろ、私は部屋に戻るね」

「おー、俺も少しゆつくりしたら戻るかな」

ずっとリビングにいた二人は、そのまま夕飯をそこで済ませた。洗い物を終えた楓は、そう言い残してから部屋に戻る。楓が部屋に戻ったのを確認してから、月夜はリビングにある電話機に手をかけた。覚えている番号を入れて、相手が出るのを待つ。

「どうした？」

「例の件、どんな感じ？」

月夜は少しだけ真剣な表情をして、受話器の向こうにいる相手に問



いかける。相手は自身満々に言う。

「最高のステージを見つけといた、後はお前次第だよ」

「恩に着るよ、あまりない機会だからね・・・やれるだけやってやるさ」

「あまり気負いすぎないようにな・・・失敗したら笑わないぞ？」

「ばれないようにやるさ。用件はそれだけ、じゃあまた」

「ああ、またな」

月夜は受話器を置いてから、疲れを滲ませた顔を緩ませ、そして微笑んだ。そんな限りなく怪しいやりとりを、楓は知る由もなかった。

そんなやりとりから早一ヶ月。特に事件も起きないまま、もう夏休み前へと季節は流れていた。相変わらず月夜は疲れ気味のようにだったが、そんな月夜を大分見慣れた楓は内心心配しながらも口を挟むことはしなかった。

「そうそう・・・俺昨日見ちゃったんだよ」

唐突にそう切り出す利樹。今は昼休み中で、月夜を除いたいつもの三人がいつものように屋上で昼食をとっている時のことだった。

「何を見たの？」

紙パックのいちご牛乳をストローですすりながら、楓が問いかける。紫も怪訝顔で利樹を見やる。

「見間違いかもしれないんだけど・・・昨日の午後七時ぐらいだったかな？部活終わった後帰ってる時にさ・・・」

言いにくそうに楓のことを盗み見てから、利樹は続ける。

「月夜がパトカーに乗せられてたんだよね」

「え？どうして!？」

利樹に食いかかるように楓は声をあげる。利樹はそれを手で制しながら、

「待て落ち着けて!・・・遠くて暗かったし、はっきり見たわけ

でもないんだよ。でも月夜っぱかったんだよなあ」

「嘘……」

「本当に月夜君だったの？妄想とか目が曇ってたとかじゃなくて？」  
「明らかかな動揺を見せる楓をなんとかフオローしよう」と紫がそう言う。  
利樹は、紫のいつも通りのひどい口調を気にもせずと言っ。

「俺視力1.5超えてるんだぞ？」  
「というか妄想で月夜を見る意味がわかんねーよ」

利樹もいつものような軽い口調ではあるが、多少の焦りが混じっていた。だから、しっかりと付け足す。

「とはいえ、他人の空似だったのかもしれないしな……確証があるわけでもないし、月夜には言わないでおいたほうがいいかもな」  
「重苦しい雰囲気か辺りに漂う、葬式場でご飯を食べているかのよう」  
「に辛気臭そうにパンを口に入れる紫と利樹。楓は心中穏やかではなく、その後物を口に入れることが出来なかった。」

下校時、月夜と楓は一言も喋らなかった。楓は口を開くことをためらっていたし、そんな楓の話しかけにくい雰囲気か月夜も無言にさせた。

家に着き、いつものように各自の部屋に分かれて着替えを済ませる。リビングに行くと、先に着替え終わっている月夜が椅子に座ってテレビを見ていた。楓は対面側の椅子に座り、何かを言いたそうにしながらかも言えずに、ただテレビを見ていた。

しばらくの間沈黙が続いていたが、痺れを切らしたように月夜が沈黙を破った。

「何かあったの？昼休み終わってから様子が変だよ」

テレビから楓に視線を移し、落ち着いた感じで月夜は言う。楓はとつさに顔を伏せ、月夜と視線を合わせないようにする。

「言いたいことがあるなら言って欲しいんだけど……」

落ち着いた口調では言うものの、月夜は内心、ばれたのか？という

不安があった。楓は多少の間をあけてから、決意したように顔を上げて口を開いた。

「私に隠していること、あるよね？」

「それは誰だつて隠し事の二つや二つは……」

「誤魔化さないで！」

当たり前前の理屈で言い逃れようとする月夜を、楓が叫んで止める。

隠していたことを怒っているのではなく、月夜のことを心配してるからこそその焦りだった。

「利樹君がね……見たんだって」

そう呟く楓を見ながら、月夜は残念そうな顔をして口を開く。

「ばれちゃったのか……上手く隠し通せると思ってただけだな

あ

「どうして……？なんのためにそんなことしたの？」

楓は泣きそうな顔をしながら、言う。月夜は頬を人差し指でかきながら、単調に、なおかつ何か決意があるように言った。

「お金が必要なんだよ、隠してたことは謝るけどさ……」

「お金のために……？やっつけていいことと悪いことがあるでしょ！？」

そう叫ぶ楓に、月夜は罪悪感に顔を曇らせ、言った。

「だから隠してたことは謝るって……でも、仕方なかったんだよ」

「だからって罪を犯してもいいの！？関係のない人を巻き込んで……」

・月夜はそんなことしないで信じてたのに！」

月夜は気まずそうに、楓から視線を外す。

「確かにさ……年齢偽って深夜バイト入ってたよ、ばれたら周りに迷惑かかることも分かってたさ！」

この月夜の言葉に、楓はハテナマークを浮かべた。そんな楓に気づかない月夜は、一人続ける。

「でもどうしてもお金が必要だったんだよ、特に楓には秘密に……って、どうしたんだ楓？」

様子がおかしい楓にやっと気づいた月夜は、怪訝な顔を向ける。楓

はハテナマークをつけたまま月夜に聞いた。

「バイト・・・？通り魔とか強盗じゃなくて・・・？」

「ちよつと待て、一体何を勘違いしてるんだ・・・？なんで俺がそんなことしないといけないんだよ」

月夜は気づいた、楓が何かとんでもない勘違いをしていることに。

「え、だってでも・・・昨日利樹君がパトカーに乗せられてる月夜を見たつて・・・」

焦って言う楓に、月夜が盛大な溜め息を吐いた。そして、新聞を取って楓に見せる。

「ここ見てみ？」

月夜が指し示したニュース欄を、楓はまじまじと見る。

「十数件もの通り魔事件の犯人を逮捕。田村容疑者は昨日の午後七時頃、女性に襲いかかるうとしているところを通りかかった勇敢な少年に取り押さえられ、現行犯逮捕となった・・・え？通り魔事件の犯人捕まったの？」

新聞の文を読んでいた楓が、驚いて声をあげる。そんな楓を見ながら月夜が付け足すように、言う。

「まあ通りかかったのは俺なんだけど、その後事情聴取するために近くの交番までパトカーに乗せられた、つてわけ。理解した？」

その言葉を聞いた楓は、体の力が抜けたように椅子の背もたれによりかかり、安堵の溜め息を吐き出した。

「そうだったんだ・・・良かった」

「間が悪いところを見られたとはいえ、そんなに信用ないのか俺は・・・？」

安心した楓とは逆に、月夜は落ち込むようにうな垂れる。

「そんなことないよ！ただ心配しちゃったから・・・でも月夜も悪いんだからね、内緒にしてこそそそバイトなんてしてたんだから」  
そんな月夜に楓はフォローを入れつつも、文句を言った。ふと気になつたように、楓は月夜に問いかける。

「そつういえば、どうしてお金が必要な？欲しいものがあるとか？」

ぎくり、と動揺の色を見せて月夜は早口で言う。

「いや別に欲しいものがあるとかじゃなくてやっぱりお金は大切だし俺もいつまでも父さんの貯金頼りにしていくのもどうかと思ってだからそういうわけで特に深い意味があるとかないとかそんなことも全くないわけでもないんだけど」

後半は何を言っているのか分からなかった。誰がどう見ても怪しい月夜を、楓は怪訝顔で見る。一息ついてから、月夜は呟く。

「大体から、お金なんてそれを達成するための物にしか過ぎないし・  
・俺が欲しいのはお金じゃ買えないものだしなあ」

と、そこまで言うてから月夜はまずい、といった感じで口を紡ぐ。

楓は興味津々で月夜に聞く。

「月夜がそこまで言う欲しい物って何？」

「なんでもない、なんでもなーい！」

無理やり流そうとする月夜に、楓は意地の悪い笑みを浮かべて追い詰める。

「すごく心配したのになあ、月夜が秘密でバイトなんかしてたせいで」

「待て待て、顔と台詞が合っていないぞ！そんな顔で切なそうに言うんじゃないー」

それから小一時間は、楓に振り回され続けた月夜だった。

そんな調子で、ついに夏休みが始まった。結局月夜のバイトの理由とははぐらかされてしまった楓だったが、疲れていても活き活きとしている月夜を楓は見ているのが好きだった。そのバイトの理由が、まさか自分自身にあるとは、楓は思ってもいなかったし、すっかり忘れてもいた。

夏休みが始まってから十数日後、月夜と楓の二人はランスに招待さ

れアメリカに来ていた。

「うわー、すごく広いね・・・海がきれいだし、太陽が熱いー」  
ランスの後ろを歩いている月夜と楓。楓は幼い子どもの様にあつちを見たりこつちを見たりとはしゃいだ。

「恥ずかしいってば、楓・・・」

「いいじゃないか、初めて来る場所っていうのはやっぱり心躍るものじゃないか？」

はしゃぐ楓を止めようとする月夜を、ランスが言葉で制した。それもそうか・・・と月夜は呟き、隣の楓を楽しそうに見た。

三人は今、アメリカ国内にあるハワイにいた。現実のハワイは有名なりゾート地で日本人も多いが、未だに日本がアメリカを強く敵視しているこの世界では、日本人がここにいることは珍しいことだった。それ故に、周囲の視線は自然と三人に集まるが、彼らは敵対している者を見る目をしてはいなかった。ただ、珍しいものを見る程度の視線でしかなかった。

「私初めて海見た・・・こんなにきれいで素敵なものだったんだね」  
「へえ、そうなんだ。俺は物心ついた時から何度も見てたからなあ」  
楓は生まれも育ちも近くに海がない場所だった。本やテレビでは見たことがあるが、実際に見たことはこれが初めてだった。だからこそ、それを素直にきれいだと、素敵なものだと思った。一方月夜は、海は好きだったが幼い頃よりよく見ていたので、愛着はあるもの。そこまでの感動は感じなかった。

「来て良かっただろ？」

「はい、すごく・・・ありがとうランスさん」

とても嬉しそうにしている楓を見て、最初は嫌悪していた月夜も来て良かったと心から思った。何より、計画もあることだし、ね。

「それにしても兄貴、なんでこんなところに別荘なんて持ってる？」

「私もそれ気になる・・・ランスさんってお金持ち？」

月夜と楓はそれぞれの疑問を口にした。ランスは困ったように笑い、返答した。

「僕自身はそんなにお金を持ってないよ、ここの別荘は父さんが所有していたものでね・・・実は、僕は父さんが生きている間一度もここに来たことなかったんだけどね」

ランスの事情を知っている月夜は、苦々しくその言葉を聞いていた。楓にもなんとなく分かったのだろう、少しだけ視線を落としてテンションを下げていた。そんな二人を見て、ランスは笑う。

「気にすることはないよ。そろそろ別荘に着くし、荷物置いたら觀光にでも行こう」

空港を出てから約二十分、三人は歩き通しでやっとランスの別荘に着いた。その別荘は、外観でも大きいものだど理解することが出来た。最初は車で空港まで迎えに行く予定のランスだったが、歩きながらのんびりと辺りを見るのもいいだろう、と考えたランス、それ故に三人はのんびりと歩いていった。

ランスを先頭に、後に続いて入る二人。楓は驚きの声をあげ、月夜はふうん、といったような顔をしていた。

「ひろーい!？」

「まあまあ、だね」

別荘とは言うものの、実際は豪邸に近いレベルのものだった。入り口がある広間は、大きなシャンゼリアがついていて、二階へと上がる階段や一階の各部屋につながるドアがあった。そこから見える範囲でも、部屋が十数個あるのは見て取れる。メイドや執事などがいとも不思議ではない空間だった。

「父さんはこういうところにお金を使うのが好きだったからね、僕の実家は平凡なものだけど・・・」

(平凡・・・?)

ランスの家を何回か見たことのある月夜としては、少なくとも日本的一般家屋とは比べようがない気がした。

「すごいなあ・・・私もこんな広い家に住んでみたい」

首をきよるきよると動かして辺りを見回す楓。そんな楓に月夜がほそりと呟く。

「広くても掃除するのめんどくさいだけじゃないか・・・？」

「月夜の言うとおりだね。掃除もそうだけど、維持費も中々お金がかかるものだよ・・・来ないのに」

ランスは軽く頭を抱える。

「まあそんなことはおいといて、荷物どこに置けばいいんだ？」

楓やランスに任せておいてはいつまでたっても話が進まないのので、月夜がそう言った。それを聞いてランスが二人に聞く。

「上の階と下の階どっちの部屋がいい？」

「私は上でお願いします！」

「それじゃ俺も上、かな」

それぞれ答える二人に、ランスが嫌味つ気のない微笑みを見せながら言った。

「どっちも上か、それじゃ二人で仲良く同じ部屋でいいね」

「「なっ!?!」」

月夜と楓は次の言葉がつなげず、明らかに動揺を見せて口をぱくぱくさせる。それを見ながら、ランスは残念そうに言う。

「部屋はいつぱいあるんだけど、すぐに使える部屋自体はほとんどなくてね・・・でも二人なら同じ部屋でも平気だろ？」

「待て待て待て、さすがにそれは洒落にならないぞ！」

「そ、そうだよ！一緒の部屋なんて・・・」

お互い顔を赤くし、気まずそうに視線を合わせないようにしている二人にランスがとどめをさす。

「一つ屋根の下で暮らしてるんだから、今更だと思っただけど」

「そういう言い方すんなー！ー」

明らかに狼狽を見せている二人を前に、ランスが唐突に笑い出す。

「ははは、ちょっとした冗談だよ。ちゃんと部屋はあるから、心配するなよ」



「あーにーきー・・・笑えない冗談はやめてくれ・・・」

「ほんとですよ、もう・・・!」

お互い否定はしているが、まんざらでもない二人を見ながら溜め息をつくランス。

「分かった分かった、全くお前らは・・・」

(本当に何も進展しないやつらだよなあ、もつと素直になつたほうがいいと思うのに・・・高校生なんてそんなもの、か)

ランスはランスなりに、兄貴として月夜の心配をしているわけだが、不器用な恋愛もありか、と一人納得するのであった。

熱い太陽に照らされながら、砂浜にひいたシートに座りながらランスは海ではしゃいで遊んでいる楓と月夜を眺めていた。その様子は、第三者から見たら恋人そのものだった。

「それぞれー」

「やったな、このー」

水のかげ合いをしている二人を、ランスはほのぼのと見ながら一人言葉を漏らす。

「青春だねえ・・・僕も学校行つてればあんな感じだったのかな・・・?」

自分が選んだ道は自分で決めたもの、だから辛くはない。でも・・・やっぱり羨ましいなあ・・・。と思いつつ、ランスは二人に叫ぶ。

「あんまり沖の方に行くなよ!深くなつてるからなー!」

「大丈夫だよ!兄貴もこいよー」

「みんなで遊びましょー!」

離れた場所からランスを呼ぶ二人に、ランスは叫び返す。

「荷物番がいなかったら危ないだろー!僕のことはいいからゆつくり遊んでな!」

えー、と二人は不満気に漏らしたが、ランスはおかまいなしにシートに横たわり、目を細くして熱く光り輝く太陽を眺める。

「暑いな・・・日に焼けそうだ」  
こんなことならパラソルでも持って来るべきだった、とランスは虚ろに思いながら、目を閉じて腕で光を遮断する。いけないと思いつつも、遠くで騒いでる二人の声を聞きながらランスの意識は遠のいていった。

「・・・ス・・・ラン・・・ス」  
誰かが僕の名前を呼んでいる、うるさいなあ・・・。

「ランス！授業中に居眠りとはいいい度胸だ！」

びくっ、と体を震わせて、ランスは体を起こす。辺りには、見知らぬ風景が広がっていた。

「全く、すっかりと授業を受けたまえ」

「え・・・？」

「いつまで寝ぼけているんだ！それと、よだれを拭きたまえ」

「あ、すみません」

袖で口元を拭ってから、ランスは今まで自分が座っていた椅子に座る。周りからは、くすくすと小さな笑い声が生じた。

(これは・・・夢か？)

授業を再開する教師に気づかれないように、ランスは周りを見渡す。整然と並べられている机や椅子、そこに座っている数十人の生徒たち、黒板や掃除用具入れなどなど。夢に見るほど月夜たちを羨ましいと思っていたのか僕は・・・。と小さく嘆息し、また怒られないうちに授業に集中する。学校など行ったことが無く、見たこともないランスだったが、なぜかその夢の中ではリアルに学校というものが構成されていた。

少ししてから、急に警報のようなものが教室中に響き渡る。周りにいる生徒たちは驚いて立ち上がり、教師も狼狽しておるおるとして。そして、黒板の上に設置されているスピーカーから声が発せられる。

「空襲警報！空襲警報！教師らの指示に従い、生徒は直ちに避難せよ！」

慌てふためく周囲をよそに、ランスは一人考えていた。

「空襲・・・？戦争、なのか？」

夢の中でもか、と小さく付け足してからランスは立ち上がり、壁に寄り添って窓の外を盗み見る。そしてランスはぎよっとした、夢の中とはいえ、ありえない数の飛行機が空にひしめいていたからだ。窓の外を見やっっているランスに、教師から声がかげられる。

「ランス！何をしているんだ、早くお前もみんなと避難するんだ！仕方ないのでランスはその指示に従い、先に廊下に出て行っている生徒たちの後を追う。」

「月夜も、こんな気分なのかな」

苦笑しながらそう呟くランス。夢の中だから死ぬことはない、そう、現実の月夜も死ぬことはまずない。だからこそ、ランスは落ち着いていることが出来た。生徒たちはみな混乱していた、泣き叫ぶ者、自暴自棄になっている者、狂ったように逃げようとする者・・・各人それぞれの反応だが、思っていることは一つなのだろう。そう、死にたくない、と。

夢の中とはいえ、あまりにもリアルすぎるこの世界で人が死ぬのをランスは見たくなかった。自分が走り過ぎた場所が、次々と破壊され、校舎が崩れていく。まるで、ランスを狙っているかのように。

「きゃあ！」

ランスがたつた今抜かしたばかりの女生徒が、足をもつれさせて倒れてしまった。ランスは不意に立ち止まり、その女生徒に手を貸そうとする。

「大丈夫か？」

その時のランスは、自分が死なないから、などと考えて行動したわけじゃなく、ただ単にとつさの行動だった。

「ありがと・・・」

その女生徒は、言葉を最後まで言えずに、そしてランスの手をつか

むことも出来なかった。ランスの目の前で、その生徒は落ちてきた廊下の天井に潰された。確認するまでもなかった、もちろん即死だろう……。

「なんだよ……？これ……？」

ランスは、瓦礫の下から突き出ている一本の細い手を見る。先ほどまで彼がつかもつとしていた手……ランスはその細い手を両手で握り締める。

「夢の中でも……僕は一人救えないのか……？」

助けることが出来なかった生徒のその手にすがりつき、ランスは涙を流す。月夜は死なない、そして強大な力を持っている、だが、今のランスは自分が死なないだけだった。忘れていた自分の力の無さが、今になってはつきりと示されたことがランスに深い傷を負わせる。

「辛いでしょう？苦しいでしょう？力が無いということは」

突如響いた声に、ランスははっとして顔をあげる。今まで学校の廊下であったはずの場所が、何もない暗い空間としてそこに存在していた。そして、ランスの前に雪のような白さを持つ少女がいつの間にか立っていた。

「……辛いさ、何も出来ないことが出来ない……どんなにがんばったって、僕は人を助けることが出来ない……！」

「ならあなたは望むの？誰かを助けられる力を」

あどけなさの残る声だが、その声は凜としていてランスの胸に染み渡る。

「欲しいさ、力が欲しい……本当は、月夜が羨ましいんだ僕は……！」

夢の中にいるということさえ忘れて、ランスはただ叫ぶ。少女はくすりと含みのある笑みをこぼし、超然と言い放つ。

「今はその時じゃない、時機が来ればあなたは大きな力を手に入れることが出来るわ」

ただし、大切なものと引き換えにね。と、付け足した少女の言葉は

ランスには届かなかった。

「君は・・・一体？」

「私の名前はクリス、クリス＝ステイア。必ず、いつかまた会うことになるわ」

クリスと名乗った少女は、ゆっくりと姿が薄くなっていき、そして消えた。ランスは呆然としたまま、少女がいた空間を凝視していた・・・。

「っ・・・なんなんだ、今の夢は・・・？」

目を覚ましたランスは、変な体の重さと先ほどの変な夢のせいで頭がぼーっとしていた。だから、気づいていなかった。

（それにしても・・・なんか体が重いような気が・・・）

「っって、何してるんだ!？」

ようやく気づいたランスは、自分の両隣にいる月夜と楓に叫ぶ。重いはずだった、なぜならランスは首から上以外を砂に埋められていたからだ。

「だっって呼んでも起きないから、ちよっとした遊び心？」

「私はこんなことする気なかったんですよ!？月夜がやるうっつていうから仕方なく・・・」

なみなみと海水が入っているどこで拾ってきたか分からないバケツを持っていく楓は、説得力なしにそう言う。

「起きなかったのは悪かったけど、子どもじゃあるまいし・・・ってまだ子どもか」

はぁ、と溜め息をついて体を起こそうとするランス。しかし体は全く持ち上がらなかった。

「月夜・・・どれだけ積んだんだこの砂？」

「教えてほしい？」

「ああ、ぜひと」

「しょうがないな」

月夜は一呼吸置いてから、簡潔に述べた。

「覚えてない」

月夜と楓に掘り出され、なんとか砂から出ることが出来たランスは、月夜の頭をはいた。そして、気になったことを聞く。

「シートどうしたんだ？」

「もちろんどかしたに決まってるだろ、シートが砂まみれになっちゃうだろ!？」

なぜか逆切れっぽく叫ぶ月夜、熱さと楽しさで大分テンションがハイになっているのが分かる。そんな月夜の横で申し訳なさそうにしている楓。

「すいません・・・もう少しで完成だったんですけど」

もはや何に対して謝っているんだか分からない楓、どうやら楓の方も大分ハイになっているようだった。

「お前らなあ・・・埋めるぞこらあー!」

珍しく怒っているランスを前に、月夜と楓は一目散に逃げ出した。

そんな二人をランスは追いかける。

「まーてーてー!!!」

待てと言われて待つ人間は少数派だろう、そして月夜と楓も例外なく待たない多数派だった。そんな調子で、初日の昼は過ぎていったのだった。

夏休み編（後書き）

殺伐と戦闘もいいですが、やっぱりマツタリが好きなのだなあ・・・  
と思う今日この頃です

## 夏休み編2

広いキッチン、広いリビング・・・それを見るだけでも、その家自体がどれだけ豪邸であるか分かるような場所で、月夜と楓とランスの三人は夕食の準備に動いていた。

「今日は僕が作るから、楓ちゃんはゆっくりしていたら？」

「そういうわけにもいきませんよ、色々してもらってます・・・せめてこれぐらいはお手伝いしないと」

「それじゃ、よろしく頼もうかな」

キッチンで和気藹々と料理をしている二人を、月夜は遠めに眺めながら溜め息をついていた。

「仲のいいことで・・・俺も料理覚えるかなあ」

リビングにいる月夜は、一人食器出しやテーブル拭きに励んでいた。一人仲間はずれにされたような気分で、どうも落ち着いていない様子だ。

「アメリカの食材もあることだし、日本じゃ作らない物でも作ろうかな・・・」

「勝手が分からないので、指示出してもらえると助かります」

「まずは・・・」

楽しそうにしている二人を寂しそうに見ながら、月夜は自分の仕事をさくさくとこなす。そこまで時間がかかる仕事ではなく、十分そこから終えた月夜は椅子に座りすることもなくだらーとしている。

「俺がキッチン入っても邪魔になるだけだもんなあ・・・」

自嘲気味に一人呟きながら、テーブルに突っ伏している月夜だった。

料理が出来たのはそれから約三十分程のことだった。待ちくたびれた月夜は、テーブルと同化しているかのように突っ伏したままだった。

「ほら月夜、危ないぞ」



「熱いからきをつけないとだめだよ」

「おー・・・暇すぎて危うくこの別荘の装飾品の一つになるところだったぜ」

体を起こして、並べた食器に次々と料理が並べていかれる様を見ている月夜。遊びつかれてお腹が減っているせいも、料理の良い匂いにつられてつまみ食いしそうになる。そんな月夜を、ランスが言葉で制した。

「並べ終わるまで待つてろって」

しぶしぶと椅子に寄りかかりながら待つ、程なくして料理が並べ終えられ、ランスと楓が椅子に座り夕食と相成った。

「いただきます」

そう言うてからすぐに食べ始める月夜。ランスと楓の料理の腕は一流なので、もちろんその料理の味も一流だった。

「いっぱいあるからたくさん食べるといい、さて僕も・・・」

「私もいただきます」

ゆっくりと食べていくランスと楓を尻目に、一人ではくぱくと食べていく月夜。小柄な体格に似合わず、月夜は結構大食いなのだ。

「おいしい？月夜」

「うんうん、おいひーよ」

「良かったあ、作ったことないものだったからうまく手伝えたか分からなかったから・・・」

「十分うまくやれてたと思うよ？・・・それにしても月夜、口に物を入れながら喋るなよ」

口の中の物を飲み込んでから、月夜はランスに言う。

「そう年寄りくさいこと言うなって」

「誰が年寄りだ！マナーとかそういう問題だって」

「だめですよランスさん、月夜にマナーを求めるだけきつと無駄ですよ」

「さりげにひどいこと言うなって・・・」

そんな風に笑いながら料理を食べている三人。実はこの中で一番何

も考えていなさそうに食べている月夜が、明日のことを一番悩んでいるとは楓には思いもしなかった。

夕食を終えた三人は、後片付けを終え少し談笑した後、部屋に戻って休むことにした。

「さて、それじゃ各部屋に戻って休むとしようか・・・明日は色々あるし、な、月夜？」

意味ありげにランスがそう言い、月夜の肩をぽんぽんと叩く。そんな二人のやり取りを見て、楓がハテナマークを浮かべる。

「何かあるの？月夜」

「ほら、遊んだりとか観光したりとか・・・色々あるだろ？」

余計なこと言うなよ、とランスにだけ聞こえるように小さく呟く月夜は、なんとか動揺を見せないようにしていた。

「悪い悪い、うまくやれよ？」

ランスも月夜だけに聞こえるようにこっそりと言った後、

「それじゃ解散」

と言って一人さっさと部屋に戻っていつてしまった。残された二人、月夜は多少気まずそうに、楓は煮え切らなそうにハテナマークを増やしていた。

「俺らも戻るとしようか」

「うーん・・・気になるけどいつか」

二人は豪華な階段を上り、廊下で自分の部屋へと分かれていく。

「おやすみ、また明日」

「おやすみー」

この後楓と月夜は、自分たちの身に起こる事件を、まだ何一つ知ることがなかった。

月夜と別れて自分の部屋に戻ってきた楓は、部屋の灯りを消してから大きめのベッドに飛び込む。

「んーふかふか・・・疲れてるしすぐ寝れちゃいそう」

布団をかけて寝ようとする楓だが、部屋に響いた小さな音にびくつと体を震わせた。

「な、何？」

起き上がり周囲を見渡す、うつすらとした暗闇の中、特に変化が起きていないような物はなかった。

「気のせい、かな？」

だがそれは気のせいではなかった。こつこつ、と机を爪で叩いているかのような小さな音が、断続的に部屋に響き渡る。楓は飛び起きて、部屋の灯りをつける。

「だ、誰かいるの……？」

「しくしくしく……」

その楓の言葉に反応するように、部屋にあつた鏡台付近から女性のすすり泣くような声が聞こえる。楓は怖くなり、部屋から逃げ出すとする。その時、楓は背筋に悪寒が走るのを感じた。見てはいけない、見たらだめ……と思いつつも、楓はゆっくりと振り返る。

「きゃー！！！」

部屋の窓の外に、白い少女がぼんやりと浮かび上がっていた。ここは二階であり、外にベランダなどはなく、人が立てるような場所はない。

「しくしくしく……」

と部屋に響く小さな声を聞きながら、必死に部屋から逃げ出す楓。部屋から出ると、その声を聞いて来ていた月夜がそこにいた。

「どつした楓!？」

「窓に……声が……うえーん」

支離滅裂なことを言いながら、楓は月夜に抱きついて泣く。月夜は何が起きているのか分からずに、赤くなりしどろもどろしている。

「落ち着けて！何があつたんだ……？」

「だからね窓の外に声がいて少女が鏡台で」

早口でまくしたてる楓。全く意味が分からない月夜は、仕方なしに落ち着かせるために楓を抱き上げてそのまま自分の部屋へと運んだ。

その間楓は、泣きながら月夜の服にしがみついていた。

「……で、少しは落ち着いた？」

月夜の部屋のソファーに二人は隣り合って座っていた。楓は少しの間混乱していて、その間ずっと月夜の服を握り締めていた。

「うん……あのね、女の人の泣く声が聞こえたの……」

ゆっくりと小さい声で切り出す楓。

「空耳とかじゃなくて？」

「違うよ！ちゃんと聞こえたもん……それでね、窓の外に女の子がいたの……すごい怖かった」

楓はまたすぐにでも泣き出してしまいそうだった。それもそのはず、楓は幽霊の類がかなり苦手だったのだから。いまだに震えている楓に、月夜は落ち着いた声で言う。

「んー……俺が見に行こうか？」

「だめ！私は行きたくないし……一人で残るのもやだ！」

「さいですか……」

（さてさて、どうしたもんか……）

月夜は悩んだ、怯えている楓を部屋に帰すわけにもいかないし、かといって同じ部屋で寝るというのも抵抗がある。

「それで、どうするんだ？」

「……ここで寝る」

月夜の悩みなんておかまいなしに、楓がそう言う。

「はぁ……仕方ないか、ベッドは楓が使っているよ、俺はソファ

ーで寝るし」

「……やだ」

控えめだが、強く楓は言う。さすがに月夜も焦る。

「まさか一緒に寝るとか言わないよな……？」

楓はその言葉に何も言わなかったが、小さく頭を縦に振っている。

「待って待って、それはだめだ、さすがにだめだ、色々まずいし……  
・やっぱりまずい」

月夜は否定の言葉をあげまくるが、楓は頑なになって譲ろうとしない。月夜は溜め息をついて、楓を抱き上げた。

「全く・・・子どもじゃないんだから」

楓をベッドに降ろし布団をかける、そして月夜はベッドの脇に座りこんだ。

「楓が寝付くまでここにいるから、安心して寝ろよ」

「手・・・握って」

「はいはい」

月夜は布団から出ている楓の手を握り、そういえば前にもこんなことがあったような？と思い出す。

「前にも・・・あったよねこういうの」

月夜と同じことを考えていた楓が、小さくそう呟く。

「ああ、そうだな・・・楓は全く変わってないよな」

「月夜もね・・・いつも私を護ってくれる、ありがとう」

「きにすんなよ、それより早く寝たほうがいい・・・俺も一応疲れてるしね」

「うん・・・ごめんね？おやすみ」

「ああ、おやすみ」

その後はお互い沈黙していた。数分後、楓がちゃんと寝付いたことを確認した月夜は、起こさないように握っていた手を離し、ソファに横になりそのまま目を閉じた。

夜が明け、当たり前のように朝が来る。しかし一日たりとも同じ日が来ることはない。特に月夜にとって、今日は特別な日だった。

月夜はソファアの上で体を起こし、目をこすりながら考え事をする。（兄貴のところへ行って一応最終確認だけしておくか・・・朝になつたし、楓はもう大丈夫かな？）

いまだにベッドの上から動く気配のない楓をちらりと見てから、

「よし」

と小さく呟いて月夜は部屋をあとにする。

「起きてる？」

月夜はランスの部屋のドアを軽くコンコンとノックしながらそう問いかける、数秒の間をあけてから返事がくる。

「今起きたよ・・・鍵あいてるから、入ってくれ」

その言葉に従い、月夜はドアを開ける。ベッドの上で体を起こし、欠伸をしながら大きく体を伸ばしているランスがいた。

「おはよう、随分と朝早いんじゃないか？」

「おはよう、そう言えば時間見てなかったなあ・・・今何時？」

ベッドの近くに来た月夜に、ランスはすぐ近くにある時計を見て答える。

「六時半だな、休みの時ぐらい寝かせて欲しいところだよ」

「それは悪かったな・・・とはいえ、目が覚めちゃったんだから仕方ないだろ？二度寝する気にもなれなかったしな」

月夜は立ったままそう答える。そんな月夜の心中を察したのか、ランスは苦笑いしながら言う。

「あんまり気負うなって僕は言ったはずだぞ。で、あれの話かい？」

「そう、場所はあそこでいいんだよな？お金も足りるよな？」

心配そうに聞く月夜に、ランスは溜め息をつきながら答える。

「お前今までで何回確認してるんだよ・・・少しは落ち着けて、気持ちには分かるけど」

「しょうがないだろ、こんなことしたことなかったんだから・・・」  
口をとがらせて言う月夜を見て、笑いながらランスは言う。

「僕もしたことはないけどね。月夜も大分成長したんだなあ・・・

あの頃とは比べようがない」

「そりゃまあ、一応人間だからね。成長もするし変わりもするさ」

「変に真面目なところは変わってないけどな。・・・とにかく、やるからには思いっきり喜ばせてやれよ」

「言われなかったってそうするさ、この日のためにバイト頑張ってきて

「ただだから」

月夜の肩を叩きながら、

「がんばれよ」

と言うランス。この後二人は軽く話をしてから、月夜は部屋を出て行った。それを見送ったランスは、一人呟く。

「ほんと、そんなお前が羨ましいよ、月夜」

小さく、しかし切なさの混じった呟きはすぐに空気に溶けて消えていった。

「今日是用事があるから、二人で遊んでくるといいよ」

朝食時にいきなりそう切り出すランス。楓は、

「えーっ」

と不満気に声をあげる。一方月夜は、

「ふーん、そうなんだ」

と素っ気無く返す。月夜はそれを分かっていたし、理由も理解していたから特に何か言うこともなかった。

「ちゃんと楓ちゃんをエスコートするんだぞ月夜」

意味深にそう言いながら、ランスは月夜にウィンクする。それを横で見ていた楓は、

「二人で隠し事？ずるいずるいー」

と他人事のように声を漏らす。今日のために月夜がバイトをしていたことなど、全く知らない楓は、むー、とふくれる。

「その内分かるさ、な、月夜？」

「もー！教えてよー」

ランスと楓の二人を交互に見ながら、一人でパクパクと食べる手を進める月夜。

「その内ね」

それにしても、なんで忘れてるんだらうなあ……、と小さく呟きながら月夜は、人知れず溜め息をついた。

朝食を終えた月夜と楓は、

「片付けは僕がやるから遊んでおいで」

と、同じく朝食を終えたランスに追い出されるように家を出された。

「なんか変な感じ、何を隠してるの？」

「さーてね、俺には兄貴の意図は分からないなあ」

わざとらしく言う月夜に、楓は溜め息をつきながら食い下がるのをやめた。

日本の太陽より幾段もじりじりと焦がすように熱いハワイの太陽、それでも不快さはなく、たまに吹く風が心地よい。

「ところで、こんなのあるんだけど」

あてもないようにぶらぶらと歩きながら、ポケットから出した長方形の紙を見せて月夜が突然隣の楓にそう言った。

「何それ？・・・遊園地のチケット？」

まじまじと紙を見ながら呟く楓に、月夜は飄々と言う。

「そ、行ってみる？」

「んー・・・そうだね、ハワイの遊園地なんて滅多に行けなさそうだし、行きたい」

「それじゃ決まり」

楓の返答に、嬉しそうに言う月夜。その遊園地は距離的にそう遠くなく、月夜が意図してそちらの方へ歩いていたのではないかという程だった。

「そういえば、どうしてそんなの持ってるの？」

遊園地を目指し歩いてる最中に、楓が純粹な疑問を月夜にぶつける。月夜は内心に多少の焦りを感じたが、それを顔に出すことはなく平然と答える。

「兄貴がくれたんだよ、観光もいいけどそれだけじゃつまらないだろう、ってね」

実際のところ、初めて来た観光名所なら見て回るだけで一週間ぐら



いは潰れそうなものだ。要するに、この月夜の言葉は単なる言い訳にすぎなかった。そんな意図を知る由もない楓は、この場にいないランスを褒める。

「招待してもらっただけでも十分なのに、本当に良い人だね」

「だねえ、用事がなきや兄貴も一緒に来れたのに」

ランスを褒める楓に、月夜は複雑な思いをしながら、心にもない言葉を吐く。

「その分……って言ったら失礼かもしれないけど、たくさん楽しまないとね！」

「だな……金もかかったしね」

後半の呟きは楓に聞こえないように小さく言う月夜。そんなことを露知らず、楓は笑顔で勇み足に遊園地へと向かっていった。

「ひろーい！」

「まさかここまでとはなあ……」

二人は今遊園地内にいた。入り口でチケットと交換でもらった一日フリーパスの札を首から下げ、きよるきよると首を動かす二人。

「まずどれに乗る？これだけあると迷う」

「うーん……ジェットコースターとか！」（注：現実のハワイの遊園地にはジェットコースターはないそうです、世界観違うのでお察し）

迷っている月夜の手をとって、意気揚々と歩き出す楓。今更手を握るぐらい普通の二人だが、月夜にはデートのような状況になっている今の場合は勝手が違っていた。多少の緊張を感じている月夜に、楓は気づく素振りすら見せない。

「ジェットコースターだけでもたくさん種類があるし、全部乗るしかないよね」

「お化けとか苦手なくせに、ジェットコースターは好きなんだな」

ひきずられないように早足で歩く楓の隣に並びながら、月夜が言う。「好きかどうかは分からないけど……テレビで見て、すごく楽し

そうだったから。私遊園地って初めてだもん」

「そうだったんだ・・・じゃあ、今日は遊びまくるか」

月夜は忘れていたわけでもなく、知らないわけでもなかった。孤児として小さい内にひきとられた彼らは、遊園地など遊びに行ったことはなかった。もちろん、月夜自身も初めての遊園地であった。

「あんまり人いないね、テレビとかだと何時間待ち、っていうのもあったのに」

「結構地元の名所とかあっても、あんまり行かないもんじゃないか？もしくは、行き過ぎて飽きた、とかね」

この世界でも観光名所と謳われているハワイだが、実のところそこまで人の出入りが多いわけでもなかった。日本人が減多にいないのはもちろんのことだし、かといって他の国からの観光客が多いというわけでもない。観光名所というよりは、アメリカ国民の休養と遊びの場、といったような風体だった。しかし、遊ぶ分には人が少ないのは好都合だった。二人は待ちで時間を潰すことなく、色々まわって遊んだ。

「あ・・・疲れた」

「うん、でもすごく楽しい！ジェットコースター怖いけどすごく良かったー」

昼時まで目一杯遊んだ二人は、今は昼食をとるために売店の前に並んでいる椅子に座りながらパンをつつついている。

「すつごい声あげてた割には、大分気に入ったみたいだね」

「自然と声が出ちゃうんだもん、しょうがないでしょー」

ジェットコースター系をメインに午前を遊び倒した月夜は、心なしか少しぐったりしているように見える。一方、月夜と同じことをした楓は疲れを知らない子どものように、今もまだ元気な状態だ。

「まあ、昼食後はゆつたりとしたの乗ろうよ。ご飯食べたばかりでジェットコースターなんて乗ったら、大変なことになりそうだ」

「えー、まだまだあるのに・・・でもそうだね、ご飯後はまずい

かも」

軽く想像してしまった二人は、苦々しい顔をしながら残りのパンをつついていった。

「なあ・・・で、なんでこれなんだ？」

対面側に座っている楓に、月夜は問いかける。楓は問題なさそうに平然と返す。

「ジェットコースターじゃないよ？」

二人が乗っているのは、大人四人ぐらいなら座れそうなスペースを持つているカップの形をした乗り物だった。席の真ん中には、太めの皿のようなものがカップの下から突き出ている棒に支えられている。動き出したばかりで、ゆっくりとそのカップは回りだす。

「いやさ、俺が言いたいのはそういうことじゃなくて・・・」

「質問はうけつけませーんっ」

楓は早々と真ん中にある太い皿のようなものを回し始める。それに比例して、カップの回る速度が上がっていく。

「待て待て、待てー！・・・うっ」

ご飯を食べたばかりの状態で、くるくると高速で回る人間は少数派だろう。もちろん月夜もそんな趣味はなく、多数派だ。しかし、自分の意思とは裏腹にカップは回る速度を速めていく、周りの景色がすごい速さで横に流れては一周してまた回っていく。

「きゃー、まわるー！」

そんな悲鳴じみた言葉をあげながら、それでも回し続ける楓。

「とーめーろー！」

月夜の悲痛な叫びが、カップが止まるまで延々と遊園地にこだましていた。

ぐったりとしながら、月夜はベンチにうなだれていた。なんとか最悪の事態は免れたものの、気持ちの悪さは今までにないものであった。いまだに世界が回っているような嫌な感覚を感じながら、月夜

はうめいていた。

「あー・・・うー・・・」

ぐったりとしている月夜に飲み物を飲ませるために、楓は今売店へと行っている。月夜と同じことをしているはずの楓だが、なぜかそれほどぐったりとはしていなかった。むしろいまだに元気だった。

「どうかしたの？お兄ちゃん」

突然走り寄ってきた見知らぬ少女を見て、月夜は弱弱しそうに言葉を発した。

「大丈夫だよ・・・ありがとうね」

やたらぐったりとしている自分を見て心配になったのだろう、と月夜は思い、心配かけまいとなんとか見知らぬ少女に元気な素振りを見せる。

「ほんとに？顔色悪いよ？」

（そんなに見た目で調子悪そうに見えるのか今の俺は・・・だけだなあ、）

「大丈夫大丈夫、早く戻らないと親御さんが心配するよ？」

「無理はしちやだめなんだよ、おかーさんがそう言ったの。分かった？お兄ちゃん」

自分よりは五、六歳は下っぱい子どもに教えられてる自分の不甲斐なさに頭を悩ませながら、月夜は辛いながらも笑顔で答える。

「分かったよ、心配してくれたんだね、ありがとう」

「うん、それじゃ・・・またね、お兄ちゃん」

元気に走り去っていくもう出会う機会のなさそうな少女の背中を見ながら、

「またね、か・・・」

と小さく嘆息した。

「くす、また会おうね、お兄様」

少女は誰に言うまでもなく呟き、十歳そこらの少女が見せるような笑みではない表情をこぼし、さっきまで話していた少年を一度だけ

ちらりと見てから、少女は走り去っていった。雪のように肌が白く、雪のように白く長い髪をし、そして氷のように冷たく尖った瞳をした少女だった。

「お待たせー、ってどうしたの？なんか情けない顔しちゃって」

「いや、別になんでもない・・・」

否定する月夜に、楓はハテナマークを浮かべながら買ってきたジュースを渡した。楓は月夜の隣に座り、自分の分のジュースをストロ―ですする。

「大丈夫？ちよつと無理に振り回しすぎちゃったかな・・・？」

（これは俺を振り回した、もしくはカップを回しすぎた・・・どっちの意味なんだろうな？まさかうまいこと言いました、とかいうオチじゃないだろうな・・・）

なんてことを考えながら、月夜はストローでジュースをすする。そして、口を開いた。

「今日は楓が楽しければいいよ、俺もそれに付き合おうし」

「それじゃだめだよ！月夜も楽しまないと意味がないじゃない！」

月夜の言葉に怒るように反論する楓。そんな楓をしばしばかんと見てから、楽しそうに笑う月夜。

「もー、どうして笑うの！？」

「悪い悪い、そうだな、俺も楽しませてもらうとするよ」

楓のそんな気持ちを嬉しく思いながら、月夜はジュースを一気に飲み干した。

二人はその後も遊園地を遊び倒した。楓は月夜のことを気遣うように、絶叫系を避け、緩やかな乗り物や歩きのアトラクションなどを選んだ。しかしそれも二時間程のことで、気をつかわせていることを理解した月夜が楓の手をとり絶叫系へと誘導し始めた。乗るたびに多少の体調不良を起こしていた月夜だったが、その顔はとても楽しそうだった。無論、楓もだ。

沈む夕日に照らされながら、二人は隣ベンチに座っている。

「んー・・・疲れたね」

全身を伸ばす楓。さすがに疲れを顔に滲ませてはいたが、その顔はとても晴れやかな笑顔だった。

「だなあ、でも楽しかった」

同じく月夜も、楓と同様の顔をしていた。

「そろそろ、帰る？もう暗くなっちゃいそうだし」

言葉とは裏腹に、まだここにいたい、と思いつながら楓は月夜に聞く。

「そうだな・・・でも、遊園地の最後といえはあれに乗らないと」

遊園地に来たこともない月夜は、ある意味間違っているようで間違つてはいないことを言いながらそれを指差す。楓はその指の先にあるものを見て不思議そうに口を開く。

「観覧車？」

「こそ、夕方少し過ぎてるぐらいがちょうどいいらしいよ」

実は利樹からの入れ知恵なのだが、月夜はそれを楓には言わないことにした。

「そう言えば、今日一度も乗ってなかったね、乗ってみたい」

楓は笑顔で言う。月夜はそんな楓を見ながら、立ち上がり手をとった。

「行こうか」

「うん！」

来た時と同じように、人が少ない遊園地を二人は歩いていった。

「少しずつあがっていつてるね・・・なんかわくわくする」

楓と月夜の二人を乗せた観覧車は、ゆっくりとゆっくりと高度を上げていく。

「揺らすと結構怖いな、まあ落ちても俺が助けるけど」

「不吉なこと言わないの！」

月夜は苦笑しながら、怒るように言う楓を見ている。向き合うよう

に座り、狭い個室のようなもので二人の距離はそこまで離れてはいない。

「そういえば、どうして最後が観覧車じゃないとダメなの？」

景色を見ていた楓が、不意に月夜に質問する。

「外を見てればその内分かるよ」

もちろん、これも利樹から聞いたことだった。高度が上がるにつれて、月夜はなんとなく落ち着かない気持ちになっていった。景色を見ている楓の横顔が、夕日に照らされ輝いている。月夜が楓を好きだということを、再認識するには十分すぎるほどだった。そんな月夜をそよに、楓がいきなり感嘆の声をあげる。

「うわー・・・すごいね」

その言葉につられて、月夜も楓から目を離し外の景色へと目を向ける。

「なるほどね・・・聞いてた以上だ」

月夜は楓に聞こえないように小さく呟きながら、その景色に目を奪われた。沈んでいく夕日が、街や海をオレンジ色に染め上げている。その美しさは言葉では表せないほどだった。

「きれい・・・世界が違って見えるよ」

「だね、こんな世界があるなんて・・・初めて知った」

ちょうど二人は観覧車の頂上部分にいた。そこから見える景色に気をとられ、月夜は自分が為すべきことを危うく忘れそうになっていたことに気づいた。

「そうだった、これ・・・」

月夜は自分のポケットを探り、手のひらほどの大きさの小さな紙袋を取り出す。その紙袋を、楓に手渡した。

「何これ？」

楓は紙袋を開けて、中を覗きこむ。そこには、黄緑色の小さな宝石がついている星の形をしたペンダントが入っていた。

「え？どうしたの、これ？」

月夜の意図を理解できていない楓は、ハテナマークを浮かべて聞く。

月夜は小さく溜め息をつきながら、逆に質問する。

「今日は、何月何日？」

「八月八日だよね……って、あれ？」

自分で言っただけで楓はやっと思いついた。そう、八月八日は、

「誕生日おめでとう」

照れくさそうに、月夜は言う。顔が少し赤くなっていたが、オレンジ色の夕日がそれを隠していた。楓は自分の誕生日を完全に忘れていたようで、あたふたと慌てる。

「え、え？……覚えててくれたんだ」

そして、嬉しそうに満面の笑みを浮かべる。自分でも忘れていたことを、月夜が覚えていてくれたことが楓には何より嬉しかった。

「ありがとう、ありがとう月夜」

星型のペンダントを大事そうに握り締め、楓は目の端に涙を浮かべる。今度は月夜が慌てる番だった。

「な、泣くなつて！嫌だったか？」

「ちが……だって、すごく嬉しくて……」

楓はふるふると首を横に振りながら、小さく呟く。月夜は人差し指で楓の涙を拭い、言う。

「つけてみて」

「うん……」

楓はたどたどしい手つきで、星型のペンダントを首に下げる。

「似合う？」

「うん、すごく」

楓はペンダントの宝石部分に指で触れながら、月夜に問いかける。

「この石って、本物の？」

「一応ね、八月の誕生石はペリドット、太陽の宝石って意味があるんだっただけかな？」

「こんな高価な物……本当にいいの？」

おどおどとそう聞いてくる楓に、月夜は答える。

「なんの為に俺が最近バイトしてたと思ってる？楓にそれを受け取



つて欲しいからだよ」

「・・・ばか、恥ずかしいよ」

赤くなっている二人を、夕日が静かに赤く照らしていた。

「二人ともおかえり、その様子じゃうまくいったみたいだね月夜」

観覧車から降りた二人は、今までとは違った雰囲気を醸し出しながら手をつないで帰宅した。そして出迎えてくれたランスの第一声がそれだった。

「おかげさまでね」

「やっぱりランスさんも共謀者だったんですね」

「共謀者って・・・ただ僕は良い場所探しをしたただだよ、遊園地のチケットも月夜のお金で買った物だし」

月夜はとっさにランスの頭をぺちんとはたいていた。

「だー！それは言わなくていいんだよ！」

「そうだったんだ・・・本当にありがとう、月夜」

そんな楓を見て、うつ、と顔を赤くする月夜。ランスは笑いながら、  
「結果オーライだろ？」

「全く・・・まあ、いいか、兄貴にも感謝してるしね」

「はは、ついでにもう一つしかけが・・・あ、」

笑顔で言ったランスが、唐突に言葉を止める。そして一気に、まず  
い、といったような顔になる。

「どうしたんですか？」

楓はそんなランスの言動にハテナマークを浮かべる。一方勘の良い  
月夜は、何かを理解したかのようにぼそっと呟く。

「幽霊」

「昨日の夜のことなんて僕には分からないな」

即座に返すランス、軽く目が泳いでいる。昨日の夜のことをランス  
は知らない、だからこそ、その単語に反応するということは・・・

「お前の仕業かああ！！」

月夜は怒鳴る。昨日の夜、何かを楓の部屋に仕掛けて自分の部屋に来るように仕向けたのはランスだった。ランスは全く反省の色を見せずに、笑う。

「ちよっとしたお茶目だよ、砂に埋められた仕返しとかじゃないぞ、二人のことを想ってだなあ」

よく状況を理解できていなかった楓が、ようやく理解して口を挟む。  
「じゃあ女性の声とか白い女の子はランスさんのせいだったんですか!?!」

楓の言葉を聞いて、ランスは頭をかしげる。

「白い女の子? 僕が仕掛けたのは女性の声だけだったはずだけど・・・」

「え? でも、窓の外に女の子が・・・」  
「往生際が悪いぞ兄貴」

月夜と楓の言葉に、ランスは本当に知らない、というように返す。

「それは僕じゃないよ・・・ということは」  
「待て待て、それ以上言うな・・・!!」

月夜の制止の声も意味を成さずに、楓はふるふると震えている。

「本物・・・? 月夜あ!!」

「しがみつくなつて!!」

「だってだって、幽霊だよ!?! 家に戻るまで月夜の部屋で寝るー!!」

「あーもー!!」  
そんな二人のやりとりを見ながら、ランスは一人だけ考え込んでいた。

(白い女の子・・・まさか、な)

ランスはその時感じた不快な感覚を、彼は一生忘れることが出来なかった。

## 夏休み編2（後書き）

・・・変だな、と気づいた時には色々手遅れになってました。

この話UPする前に、間違えて次の話をあげていたわけで・・・

— —  
いや、ほんとうごめんなさい。

## 一夏の思い出

夏休み・・・それは学生にとって長い休暇であり、どこかへ遊びに行くのには絶好の機会だ。しかし、いくら夏休みといえども過ぎ去るのは早いものだった。特に、どこかに出かけて遊んでいる場合などは更に時の流れを早く感じる。例外なく、月夜もそれを実感していた。

「もう一週間か・・・早いもんだなあ」

ハワイに来てから一週間、時の流れの早さを感じながら月夜はそう呟いていた。

「あつという間だったね、楽しかったから私は大分満足だけど」

月夜の隣に座っている楓がそう返す。その首元には、黄緑色の宝石がついている星型のペンダントをつけている。

「後三日か・・・そう考えると、何をするか迷うよな」

元々十日の予定で来ていた月夜たちは、小さく溜め息をもらす。

「そうだよねえ・・・でもやっぱり私は、日本が恋しいかな」

「ホームシックみたいなものか？まあ確かに、ずっとここにいたら肌には悪そうだけど」

月夜は自分と楓の肌の黒さを見ながら苦笑する。連日外で観光やら海やらで遊んでいた二人は、強い太陽の日差しに焼かれ真っ黒になっっていた。

「ホームシックっていうか、日本の食べ物とか空気？みたいなものとか、ちよっと恋しくなるよ。日焼けに注意しなかったのは、もう諦めたよ・・・」

不注意を教師に怒られたかのようにしょんぼりとする楓、どうやら日焼けはしたくなかったらしい。そんな風に会話している二人の元に、ランスがやってきた。

「どうしたどうした？二人そろって暗い顔して・・・いや、黒い顔

か

盗み聞きをしてたかのように話題に沿ったランスの言葉に、月夜は溜め息をつきながら返す。

「黒いのも暗いのも否定はしないけど・・・ところで兄貴はなんで日に焼けてないんだ？」

「そういえばそうですね、どうして肌が白いままなんですか？」

ん？と小さく咳きながら、ランスは二人が座っているソファアの対面側に座って口を開く。

「僕は元々日焼けしにくい体質みたいでね、一応日焼けにも注意してるし。皮膚癌で早死になんてしたくないからさ」

その言葉が耳に痛そうに、月夜と楓は頭を垂らす。ランスは二人の行動に、おや？といった感じで口を開く。

「どうしたんだ？」

「いや、なんか負けたような気分になった・・・癌とか考えたこともないから」

「私も・・・むしろ女なのにランスさんより肌につけてない私って・・・」

深い溜め息をついている二人を苦笑しながらランスは見て、ぽつりと小さく口を開く。

「若いんだからそんなの気にしてる人の方が少ないと思うぞ、日焼けも夏休みの思い出みたいなものだろ？」

うらやましいもんだよ、と二人に聞こえないように嘆息するランス。「それもそうか、大体から俺は癌になるかどうかすら不明だしな」

嘲笑混じりに言う月夜。そんな月夜をスルーして、ランスが話題を変える。

「ところで、二人とも今日の予定は決まってる？」

「特には、いつもみたいにその辺ぶらぶらしてるだけでも面白いしね」

「そうだね、行ってないところにも行ってみたいかなあ」

「それなら、連れて行きたい場所があるんだけど、どうかな？」

二人の返答に、ランスがそう切り出す。二人は特に断る理由もなかったたので、二つ返事でOKをする。

「それじゃ、早速行くとしよう。十分後に玄関前な」

「うい」

「はい」

各自、集まっていた部屋から自分の部屋に準備をしに行つた（夜は月夜の部屋にいる楓だが、それ以外はちゃんと自分の部屋に戻る）。

玄関前に一番最初に来たのは月夜だった。次いでランス、楓の二人が十分を少しオーバーしてから来た。

「遅いつつうの、特に言いだしっぺの兄貴が遅れるのはどういいうわけだ？」

ドアに寄りかかりながら、二人を待っていた月夜は口をとがらせて言う。ランスは笑いながら、

「来る途中に、足の悪い老人が困っていたから病院まで案内していたのさ」

月夜は額に手を当てながら、ツツコミどころが多すぎてつつこめないランスの言葉に声が出なかった。

「そうなんですか？実は私も・・・」

さりげなくランスのノリに合わせて口を開こうとしている楓を月夜が制止させる。

「分かつた分かつた、理由はもうなんでもいいから・・・行くなら行こうじゃないか」

さっさと玄関のドアを開けて外に行こうとする月夜の背中に、

「冷たいな月夜、少しはつつこんでくれてもいいだろ？」

「そうだよー、私は迷子になっている子どもの親を探してあげたっていおうとしたのに」

二人の不満気な声が届く。月夜は頭を抱えそうになりながら、振り返って呆れた顔をする。

「俺が悪いのかよ・・・馬鹿やってないで行こうぜ、兄貴が一番前

じゃないと道が分からないし」

「それもそうだな、それじゃ行くところか。ちなみに、移動は車だからランスは月夜の横を通り過ぎて、外へ出る。その後からついてきた楓は、月夜の横に並んだ。家の敷地内に止めてある車に乗り込み、月夜はどつと疲れたように椅子の背もたれに体を預ける。

「それじゃ出発」

「おー」

そんな二人の言葉をうつろに聞きながら、月夜は一人考え事をしていた。

（最近の兄貴はなんかおかしいような気がするよなあ・・・それともあれが素なのか？そういえばまだ十九歳なんだよなあ・・・兄貴なりに、今まで出せなかった自分を出したいだけなのかもな）  
ランスの事情を知っている月夜としては、なんとなく切ない気分になった。仕方ない、と思いつつも、次はのつてやるか、と思つた月夜だったが、その日のランスの暴走っぷりにその考えが甘かったと理解するのは、まだ先のことだった。

別荘を出てから三十分程、三人を乗せた車が到着したのは、学校のような場所だった。というか、学校だった。指定の駐車場に車を止め、降りる三人。

「着いたぞ、広いから僕から離れると迷子になるぞ」

確かにその学校は広かった。見える範囲でも三つの棟があり、一つ一つが日本の学校の校舎の二倍はありそうな大きさだった。

「学校？こんなところで何をやる気なんだ？」

「すごい広いねー、こんなところに通つてたら迷子になっちゃうよ。素直に疑問を投げつける月夜と、きよるきよると辺りを見回しながら感嘆の声をあげる楓。ランスは歩き出しながら、喋る。

「ちよつとな、僕も学生生活っていうやつを満喫してみたくなつたんだ・・・」

その声は切なそうに響く。置いてかれないようについていく二人は、その言葉に返す言葉がなかった。

「変な話かもしれないけど、僕は学校に行った記憶なんてものがない。小さい頃から軍に入っていたしね、だからこそ同年代の人間とはあまり交流がないんだ」

「・・・それで、どうするんだ？今は夏休みだし、部外者の俺らが入っているのか？」

緑の木々が両脇に生い茂る通路を歩きながら、ランスは楽しそうに言う。

「知り合いから聞いたんだけど、この高校は夏休みに体験入学が出来るらしい、期間は決まっているけどね。期間内なら、年齢問わずに誰でも参加出来るらしいんだ」

「そうなんですかー、アメリカってすごいですね」

「確かに、日本にはないよね、そういうの」（注：現実じゃアメリカにもないと思う、お察しください）  
感心するように納得している二人に、ランスは意気揚々と喋りかける。

「だから今日は体験入学を試みようと思ったんだ。つき合わせて悪いとは思っけど、なんか一人じゃ気恥ずかしいといつかなんといつか・・・」

照れ笑いのようなものを浮かべながら、ランスは頭をかく。その様子は、いつもの冷静・冷淡軍人のランスではなく、歳相応の青年のものだった。そんなランスに、

「別にかまわないよ、兄貴には貸しがあるし。それに・・・たまには兄貴にも羽伸ばしてほしいところだしね」  
と、ランスの心情を察するように言う月夜。

「たくさんお世話になってますから、私に出来ることならいくらでも」

と、気軽に言う楓。ランスは振り返って、いつもより数段温かみのある笑顔で、



「ありがとう、二人とも」と礼を言った。

その後三人は事務所のような場所で受付をし、月夜・ランスと楓の二組に分かれて更衣室で各自制服に着替える。二人は、白いYシャツに赤と銀色の縞々ネクタイをつけてその上に紺色のブレザーを着る。ズボンは灰色のスラックスで、靴下は紺一色、そして黒いローファーをはいた。格好は一般の高校生といったところだろう。月夜は特に何も思わなかったが、ランスは感慨深げに等身大鏡でその制服を着た自分の姿を眺めている。

「おー、月夜、似合ってるかな？」

鏡を見ているランスの姿を横から見ながら、月夜は正直な感想をもちます。

「そういう格好していると、学生にしか見えないね」

服装に関わらず、いつものように落ち着いている雰囲気をしているランスは決して二十歳手前には見えない。しかし、今は歳相応のしやしぎ方をしてるので、実年齢より低く見えた。今のランスなら高校生でも十分通じるだろう。

「良かった・・・明らか学生に見えなかったらどうしようかと思っただとところだよ」

安堵の息をもらすランス。別に年齢問わない体験入学なら、学生に見える必要はないんじゃないか？と月夜は思ったがそれを口にすることはなかった。

「早速、行こうか」

「楓は着替え遅いからなあ・・・絶対待たされと思う」

「女の子はそんなもんだよ」

「そんなもんか」

二人は口々にそう言いながら、更衣室から廊下に出て楓を待っていた。

十数分後、出てきた楓はなぜか嬉しそうににこにこしていた。そんな楓の様子を疑問に思った月夜が問いかける。

「どうしたんだ？」

青いスカートに、白を基調に袖口や襟、リボンがうっすらとした緑色のセーラー服を纏った楓が口を開く。

「たくさん種類があつてね、可愛いのがいっぱいあったから、色々着てたら楽しくなっちゃって」

似合う？と一回転して制服を見せる楓。

「だから遅かったのか・・・まあ、うん、可愛いんじゃないかな」いつもの制服とは違う楓を見て、月夜は新鮮さを感じていた。だからこそ、素直じゃない月夜がいつもは滅多に言わないその褒め言葉が口から出ていた。

「うん、可愛いと思うよ」

月夜とランスの言葉を聞き、楓は満面の笑顔で、

「ありがとう」

と言った。そして、月夜とランスの格好を見てから楓も感想をもらす。

「月夜は学校の制服とあんまり変わってないね・・・ランスさんは、すごく新鮮味があるのに似合ってますね」

「ありがとう。それと、ここにいる間はランスって呼び捨てでかまわないよ、楓ちゃん」

微笑みながら返すランスに、楓も口を開く。

「それなら、私のことも楓でいいですよ。同級生みただし」

笑い合う二人を、月夜は複雑な表情をしながら見ていた。

「とりあえず教室に行こうか、僕らはこっちの教室だったかな」

歩き出すランスに二人は続く。歩きながら、複雑な表情をしていた月夜が、なんの気なしにぽつりと呟いた。

「ランスさん」

「ん？どうした月夜」

振り返って聞いてくるランスに、月夜は苦々しげに口を開いた。

「だめだ、しつくり来ないな・・・兄貴じゃ変だし、ランスだとかぞの軍人の名前呼んでるみたいで嫌だし」

「気にする必要もないと思うんだけど・・・普通にランスでいいんじゃないか？」

「んー・・・まあいいか」

「どうしたの？二人とも」

二人の会話の内容がよく分からずに、楓が疑問を投げかける。月夜は気にする風もなく、

「なんでもないよ、なんでもない」

と答えたのだった。

三人が1-Bと書かれている紙が張つてある教室に入ると、中には何人かの生徒がいた。実際には生徒ではなく、月夜たちと同じで体験入学をしている人たちだった。中学生ぐらいの子どももいれば、三十前後に見える人もちらほらといた。席は自由らしいので、三人は横に並んで座る。窓際の一番前の席から順に、月夜、楓、ランスと座った。黒板の上にある時計の針は、九時三十分を示していた。「うちの学校だったら完全に遅刻だな・・・四十分から授業だったか？」

「そうみたいだね、こんな時間から一限目受けるなんて初めてかも」

「二人の学校じゃそうなのか？僕は授業自体受けたことないからなあ」

ランスは自分の記憶にない授業風景をなんとか思い出そうとしてみるが、やはり記憶にないものは出てこなかった。少し前に夢で見た風景、それぐらいしかなかった。

「それにしても・・・なんで俺が窓際なんだよ・・・？」

早くも眠そうにうつらうつらとしている月夜。まだ午前だというのに日差しが強く熱いが、月夜にはそんなものは一切関係なかった。

「真っ先に窓際に座った人がそれを言う？寝ちゃだめだよ！」

「俺はもうだめだ・・・後は任せた」

早々に机に伏せて眠ろうとする月夜の頭を、隣の席の楓がはたく。ぺちん、といい音がして月夜は頭をさする。

「痛い」

「もしかして、月夜はいつも寝てるのか？」

「そうですねですよ、授業中いつも寝てるし、よくさぼってるし」

「いつも寝てるわけじゃないしいつもさぼってるわけじゃないぞ・  
・」

言いながらも机に突っ伏して今にも寝てしまいそうな月夜、説得力は全くなかった。ランスは説教をするように言う。

「学校で学べるということ自体恵まれてることなんだぞ？勉強したくても出来ない子ども達はこの世界にたくさんいるんだ、だから寝るな」

「きーこーえーなーい。大体から俺はそんな一般論や世間論には流されない」

聞こえないと言っている割には、しつかりと反論する月夜。楓は無言でぺちんぺちんと月夜の頭をはたいている。

「その程度じゃ俺の睡眠欲は止まらないぜ」

と言いつつ、頭を守るように両手を頭の上に乗せて突っ伏す月夜。

「やれやれ・・・楓、ちよっと」

楓ははたくのを止めて、ランスから何かを耳打ちされている。えー！？とか言いながら、何やら驚いている。月夜はそれを気にせずに眠りの世界へと羽ばたこうとしていた。顔を少し赤らめた楓が、しぶしぶと月夜に近づき、耳元で囁く。

「起きて、あ・な・た」

ぎこちない言い方だったが、夫を起こすようにそう言う楓。月夜は光の速さで顔を上げた。

「はあ！？」

月夜は鳥肌が立っている体を両手でこする。楓は顔を赤らめていた。そしてそんな二人を傍目に見ていたランスは、一人笑っていた。

「ほら、効果抜群だった」

「もう一生やりませんよ・・・こんなこと」

楓なりにランスの学校生活を応援しようとかんばってみたが、やっぱり恥ずかしいものは恥ずかしかった。完璧に目が覚めた月夜は、仄かに顔を赤くしながらランスをにらむ。

「覚えてるよ・・・」

コントをやっているような三人をよそに、教師が教室に入ってきて間もなく授業開始のベルが鳴り響いた。

一限目は英語だった。内容はそこまで難しいものではなく、精々中学生三年レベルといったものだったが・・・。

「うー、分からないよー」

今の日本の現状では、学校の授業で英語を学ぶ機会はない。それ故に、英語の基礎すら知らない楓にはどう考えても授業にはついていけなかった。教師の問題に率先して答えるランスや、だらだらしながらも的確に答えていく月夜たちを尻目に、楓は一人頭を悩ませていた。

一限目終了より十分の休み時間をはさみ、二限目が始まった。二限目は数学だった。この内容もまた難しいものではなく、義務教育を終えているものならばある程度は出来るものだった。もちろんのこと、算数や数学は日本の学校でも学べる。それ故に、先ほど全くついていけなかった楓は頑張っつて色々な質問に答えていた。負けじとランスも積極的に参加する。学校で学ぶ機会のなかったランスだったが、軍の中や自己勉強、図書館などで培ってきた知識はそこら辺にいる大学生と同等、もしくはそれ以上といったところだった。

「二人ともまじめだなあ」

積極的に参加している二人を横目に、やる気のなさそうにだらだらとしている月夜。その癖、教室にいる数十人の中では一番と言える程の頭の良さを持っているのだから始末に終えない。月夜にとつて学校とは勉強する場所ではなく、ただ、平穩・日常を楽しむべきも

のだと思っっているからだ。だからこそ、勉強にはさほど興味がなかった。

二限目終了後の休み時間、だらだらとしている月夜の横で楓とランスが喋っていた。

「月夜があれで頭いいのが納得いかない」

「それは同意するね、神は二物を与えないと言っけれど・・・馬鹿っぽいのに出来るのがなんかね」

「おいおい、聞こえてんぞ」

とは言っが、月夜はそこまで気を悪くした風でもない。人それぞれ得意不得意があることを月夜は理解していたからだ。一応人間である月夜は確かに色々なことが出来るが、料理や家事面ではランスや楓には敵わない。足りない部分は努力や人間同士で補えばいいのだ。「勉強が全てじゃないだろ・・・どんなことからでも学ぶことが出来る。それが人間のいいところだよ」

とはいえ、同じ過ちを繰り返すのも人間だけだね。と付け足してから、再度机に突っ伏す月夜。そんな月夜に、それは出来るから言える言葉だよな、というような視線をランスと楓は送っていた。

三限目は世界史だった。話は変わるが、なぜか戦争の話や銃器類の話が出ると筆舌になる人間が大抵クラスに一人か二人はいると思う。大抵そういう人物はミリタリーおたくだと思われるが、この教室にもそれに分類されそうな人間が一人いた。

「・・・要するにですね、キャタピラというのは云々かんぬん」

なぜか戦争時の武器の話をしてた赤髪のごつい長身の男は、今はキャタピラについて語っている。かれこれ五分は話しっぱなしだった。ミリタリーおたくというよりは、本物の軍人に見える。

「ランス、軍人ってみんなあんなだったっけ・・・？」

「いや違っだろ、軍人だとしてもあそこまで詳しいとひくぞ」

楓を真ん中に挟み、二人はこそこそと内緒話をしている。今までの

授業で寡黙だったその男が突然長々と話し出すのだから、世界史の教師も含め教室にいる生徒達は啞然としていた。

「・・・結果としては、戦争が起こるのは仕方のないものだと思います。以上です」

話し終えて座る男。もはや最初に話していた内容と大きく論点がずれている男の話は十分近くにも及び、教室内をしらけさせるには充分だった。

「教師も止めればいいのに・・・」  
と小さく呟いた月夜の独り言は、誰にも聞こえることがなかった。

三限目が終了し、体験入学は終わりと相成った。この後学食へ行って昼食をとるもよし、家に帰るのもよし、学校内を自由に見学するのもよしとなっていた。ただし、時刻は五時までなのでそんなに時間があるわけでもなかった。

「とりあえず、昼飯食べようか？」

月夜の意見にランスと楓は従い、教室を出て廊下を歩く。三人が廊下を歩いていると、後ろから声がかげられた。

「すみません」

その声に三人は振り返る。そこには、先の世界史の授業で熱弁をふるっていた赤髪の男がいた。

「何か？」

ランスが男に返答する。男は外見に似合わず、丁寧な口調で話しかける。

「呼び止めてしまつて申し訳ありません、もしかしてレンフォード中佐ではありませんか？」

「そうだけど、君は？」

男は姿勢を正し、敬礼のポーズをとつて答える。

「やはりそうですか。失礼いたしました、自分は第二部海軍所属、准尉のリッダ・フィーアです。以後お見知りおきを」

男とは逆に、ランスは軍人とは程遠い口調で話しかける。

「所属している軍部も違うんだ、そう畏まらなくてもいいさ。それに、今の僕は単なる学生だからね」

笑いながら言うランスに、そんな返答を予測していなかったリッダが困惑した表情を浮かべる。

「しかし・・・」

「しかしもでもないよ、今日一日僕はランス一個人であって、軍人じゃない。細かいことはおいといて、良ければ一緒に昼食でもどうだい？」

ランスのその言葉に、リッダは再度敬礼のポーズをとる。

「はい、ご一緒させていただきます」

「だから・・・堅苦しいのはなしにしてくれって」

「申し訳ありません自分はそういうのは不慣れで・・・えーと・・・」

「

困っているリッダと、明らかに意地が悪そうに笑っているランス。蚊帳の外にいる楓と月夜は、溜め息をつきながらそんな二人を見ていた。

「ところで、そちらのお二方は？」

学食にて昼食をとりながら、不意にリッダが口を開く。その言葉は月夜と楓にはなく、ランスに向けられたものだった。

「知り合いだよ」

ランスは単調にそう答え、月夜と楓に、自己紹介したら？と視線で促す。

「月夜です。よろしく」

「楓っていいいます。よろしくお願いします」

ランスの視線の意図を理解した二人は、各々に口を開く。リッダは訝しげな視線を向け、二人に返す。

「リッダ、ファイアだ、よろしく。君等は日本人なのか？」

「一応そうなるかな」

「日本人ですよ、リッダさんはやっぱりアメリカの方なんですか？」



リッダの訝しむ視線を特に気にする様子もなく、二人は返す。ランスはうどんをすすりながら、その光景を見ていた。

「アメリカの軍人だ。君等の国とは敵対関係にある者、といっても過言ではない」

その言葉に友好の念は全く含まれておらず、むしろ敵を目の前にしているかのように皮肉な物言いだった。リッダのそんな言い方に、今までうどんをすすって口を挟んでいなかったランスが口を開く。

「今は停戦状態だろ？日本が仕掛けてこなければアメリカだって仕掛ける気はないんだ。あまり誤解される言い方はやめたほうがいい」

「はっ、失礼いたしました」

ランスに言われ、即座にそう答えるリッダ。軍人氣質なリッダは、上官の言葉には逆らうことが出来なかった。月夜は溜め息をつきながら、リッダに言う。

「戦争なんて、上のやつらが勝手に決めてやってることだろ？俺ら一般人は、そんなこと本当は望んじやいないよ」

「うん・・・戦争なんて、もう二度としたくない」

伏せ目がちに、楓もそう呟く。リッダはそんな二人に何か言いたそうな顔をしていたが、ランスに睨まれ口を開くことはなかった。

多少険悪なムードになっていた昼食も、お開きになった。

「では、自分はこれで・・・」

席を立ち、自分の食器を返却口に返すリッダ。そのまま歩いて学食を出て行くかと思いきや、リッダは最後に振り返った。そして・・・

「・・・ん？」

リッダの視線に気づき、月夜が相手と視線を交える。その視線には、嘲笑するような、妬み苛立ちのようなものが含まれていた。二人が視線を交じあわせていたのは数秒のことで、再度振り返り、リッダは学食を出て行った。

「あいつ・・・まさか」

月夜は一般人より研ぎ澄まされているその感覚で、何かを感じ取っ

ていた。そして同時に、嫌悪感をともなうねばねばしたような気持ちの悪さが体にまとわりつく。様子のおかしい月夜に、ランスが声をかける。

「どうしたんだ？」

「・・・いや、なんでもない」

ランスに悟られないように、月夜はそう返答した。

(勘違い、であればいいんだけどね・・・)

自分の嫌な勘が外れたことがない月夜としては、体にまとわりつく嫌な感覚を払拭することができなかった。

「あれが、かつて最凶と呼ばれていたものだということのか？  
学校の廊下を歩きながら、リツダは一人嘆息していた。

「なぜ今すぐに排除しないのか、私には分からないものだ」

一人呟いているリツダに、突如声が聞こえた。その声は外部から耳に入る物ではなく、脳に直接響くような声だった。

『確かに彼は墮落している。でも、すぐにかたをつけてしまったら面白くないわ。目的は消去ではなく復讐、分かっているわね？』

「分かっています。だから今日は見逃したのでしょうか？」

周りから見たら独り言を言っている怪しい人間にしか見えないが、脳に響く声はリツダのその言葉にちゃんと答えを返す。

『そうよ、のうのうと生きている彼を許せない・・・時機が来るまでは、お遊び程度にかまっておあげるわ』

「あなた様も随分とお優しいことで  
脳に響く声は、急に高笑いをする。

『優しい？最高の冗談だわ。遊びでも手は抜かないわ、苦しめて追い詰めて・・・最高の舞台で彼を殺してあげる』

「それこそがあなた様らしい。このリツダ＝フィニア、一生の忠誠を誓います」

『くす、戯言はいいわ、早く帰ってくることね、リツダ』

「了解いたしました」  
その言葉と共に、リッダの姿は廊下から消え去った。不気味な静寂が、廊下一面に漂っていた。

帰りの車の中、運転をしているランスはやたらと上機嫌だった。

「今日は楽しかったよ、二人とも、本当にありがとう」

「たまにはいいんじゃないか、こういうのもさ」

「私も楽しかったから、お礼を言われるようなことじゃないですよ、ランス・・・さん」

危うくランスと呼び捨てにしそうになった楓に、ランスが笑いながら口を開く。

「ランスでかまわないよ、むしろ僕はそっちのほうがいいかな」

「えーとじゃあ・・・ランス・・・？」

学校内では自然に言えた言葉が、なぜか今は変な感じがして楓はうまく言えなかった。

「うー、なんか変な感じ」

「慣れればきつとそうでもないさ」

そんな二人のやり取りを、月夜は心半分、といった感じで聞いていた。今月夜が一番気になっているのは、リッダのことだったからだ。（あのリッダって男・・・いつか殺り合ったヘンタイと同じ雰囲気があったんだよね・・・嫌な感じだ）

確証があったわけでもないし、二人を危険に巻き込むようなまねをしたくなかったからこそ月夜はあえて手を出さなかった。結果として、それは月夜を悩ませるには十分な問題となっていた。

「どうしたの？難しい顔しちゃって」

楓は心配そうに顔を覗き込んでくる。月夜としては迷惑をかけたくなかったし、自分のように思い悩ませることはしたくなかったのでこう答えた。

「なんでもない、ちょっと疲れてるのかもな」

「つき合わせて悪かったよ」

「兄貴のせいじゃないさ」

ばつが悪そうに謝るランスに、月夜はそう答える。

（そう、誰かが悪いわけじゃないんだ・・・なら、俺が悩むのは誰のせいなんだろうな？）

もちろんそんなことは百も承知だった。生物兵器として生み出した国、そしてたくさんの人を殺してきた自分自身のせいだと、月夜は理解していた。誰かに恨まれる覚えはあっても、感謝される筋合いはないことも・・・。

嫌な感覚と、そんな自虐的なことを考えてしまう自分に嫌気がさし、月夜は疲れたように目を閉じるのだった。

別荘に着いた三人は、各自分かれてそれぞれやりたいことをやっていた。今日はもう出かけない、といったような雰囲気があり、月夜は月夜で疲れていて自室のベッドで横になる。

「あ・・・なんでこう問題ばっかりなのかな、俺の人生は」

暗鬱とした気持ちが続けずに、別荘に着いても月夜の気分は晴れていなかった。不意に、コンコン、とドアがノックされた後、月夜の反応を待たずにドアを開けて楓が入ってきた。

「月夜」

「ん？どうした」

暗鬱な気分を悟られないように、努めて明るく声を出す月夜。楓はベッドの上に腰を降ろし、寝ている月夜の横に並ぶ形となる。

「今日の月夜変だな、って思ってた。何かあったの？」

いつもは案外鈍い楓だが、なぜかこういうときは鋭い。いつも一緒にいるせい、月夜の様子がおかしいことに楓なりに気づいたのだろう。

「俺はいつでも変だぜ」

「茶化さないでよ、何か悩みがあるなら話して欲しいし」

軽い冗談で流そうとした月夜だったが、楓の真剣な表情に言葉がつまってしまふ。

「・・・言つてどうにかなる問題でもないしな」

ようやく月夜の口から出た言葉はそれだった。そんな月夜の言葉に、楓は怒つた様子もなく落ち着いて言う。

「確かに私じゃ何も出来ないかもしれないけど・・・聞くことぐらいは出来るから」

「迷惑かけたくないし、わざわざ心配させるようなことを言いたくはない」

月夜なりに楓のことを想つての言葉だったが、楓はそれで退く程素直ではなかった。

「迷惑なんかじゃないし、心配するようなことだったら知らなきゃ尚更心配になつちゃうよ」

本気で心配をしている楓の表情に、月夜は胸が苦しくなった。そして、つい口走っていた。

「単なる予感なんだ。また、嫌なことが起きる気がするんだよ」

「もしかして、あのリツダって人のこと？」

楓の言ったことは的をえていた。驚いた表情をする月夜に、楓が続ける。

「あの人、なんか怖い感じがしたから・・・人となりがそうとかじやなくて、なんていうんだらう、本能的というか純粹に怖いとかか・・・」

「そつか・・・俺もそうなんだよな」

ただし、楓と違って月夜感じた物は確証こそないものの、楓が感じた曖昧なものよりはるかに嫌な感覚だったわけなのだが。

「覚えてるか？前にいたヘンタイのこと」

「紫がさらわれた事件の時の？覚えてるよ」

「なんとなく、あいつと同じ感じがしたんだ。人間なのに、人間じゃないような感じ」

そう、まるで自分と同じ生物のような感覚。月夜は思いながら、嫌

悪感に駆られた。

「私にはそこまで分からないけど・・・また、何か起きるのかな？」  
不安そうに呟く楓。そんな表情をさせたくないから、月夜は楓に隠しておきたかったのだ。後悔の念を抱きながら、月夜は言う。

「さあね・・・考えても、意味のないことかもしれないけどね。杞憂ならいいんだけどさ」

杞憂であるはずがない、確証はないのに月夜はそう確信していた。

「うん・・・ほんとに、私って何も出来ない。月夜みたいに力があるわけじゃないし、ランスみたいに頭がいいわけでもない・・・」  
切なそうに呟く楓に、月夜は自身を嘲笑するように言う。

「力があるから、下手な事件に巻き込まれるんだよ・・・俺がいなきゃ、狙われること自体ない」

楓はそんな月夜にかける言葉が見つからずに、おろおろとしている。

「楓にも迷惑かけてばかりだ、俺がいなきゃ、もっと幸せだったはずだよ」

「そんなことない！月夜がいて今私は幸せだもん」

月夜の言葉に対して、とっさに楓が口を開いていた。そしてそのまままくしたてる。

「もし月夜がいなかったとしても、私は幸せになれなかったかもしれない、だってそうでしょ？月夜がいなくても戦争は起きてた、私は死んじゃってたかもしれないんだよ？月夜がいて私は楽しい、幸せだと思える。だから、そんなこと言わないで」

啞然としている月夜は、少ししてから笑い出した。そして言う。

「そうだな、なかったことを考えるより、今をどう生きるかだよな。俺もひどい人生送ってる割には、幸せだしね」

自分を蔑むのは、自分を大切に思ってくれている人に対して侮辱である。月夜は思い、そんな自分に反省する。

「そうだよ、問題はたくさんあるかもしれないけど・・・がんばろ？それに、月夜は私のこと護ってくれるでしょ？」

「もちろん、絶対に誰にも傷つけさせやしないさ」

晴れなかった気分が、今では晴天のような気がするのを月夜は感じた。自分がすっかりしなくては、今の状況で楓を護ることは難しい、だからこそがんばろう、と月夜は心に決めた。

「うん、私も月夜を支えられるようにがんばるよ。月夜が元気になつてよかった」

楓のその笑顔は今の月夜にとってかけがえのないものであり、命を賭してでも護りたいものだった。

「ありがとう」

月夜も微笑みながら楓に礼を言った。

不穏な動きが多く、確実なものがなく不安定な足場にいる月夜だが、それでもがんばっていこうと思った月夜だった。

そして、騒がしくもなく当たり前前の日常が終わる……。

## 「夏の思い出」(後書き)

夏です、はい。作者は間違いに気づいて寒いです、はい。  
もうフランスを楽しんでいただければ言うことは何も・・・



## 予兆、そして始まり

夏休みが終わり、新学期が始まっていた。木々は夏の緑色から、秋の紅色へと変化を遂げていく。未だに暑さは残る物の、太陽の日差しはやんわりと弱まっていき、夏の面影はゆっくりと失われていくだろう。

相変わらずのほほんと教室の窓から外の風景を眺めながら、月夜は数日前のことを思い出していた。

ハワイの空港にて、見送られる側の月夜と楓、そして見送る側のランス。

「短い間だったけど、楽しかったな」

「うん・・・また、来たいね」

名残惜しそうに呟く二人を、ランスは笑顔で送る。

「いつでも来ればいい、夏じゃなくてもここは出来ることがたくさんあるからね・・・なんて、僕もあまり来ないから確かなことは言えないんだけどさ」

苦笑気味に言うランスに、月夜が疑問を投げかける。

「そう言えば、兄貴も仕事だろ？いつまでハワイにいるつもりなんだよ」

「あの別荘を空けてる間の手続きやら何やら色々あってね・・・二日もしたら、僕も実家に戻るつもりさ。月夜の言うとおり、仕事もあるわけだし」

相も変わらず毒がある月夜の言い方に、普段どおりに返すランス。この二人にとってはそれが普通のことなのだろう。

「冬でも春でも、そっちが長めの休みがとれるようなら僕もそれに合わせるさ。戦争事がないや、結構暇なんだよ、これでもね」

「そりゃ兄貴だけの場合だろ・・・」

「ばれたか、それだけ仕事も早くて有能だつてことさ」

自分で言うことではないようなことを、笑いながら言うランス。言っている人間が人間なだけに、本音が冗談かは見当がつかないところだった。

「ほれ、喋ってる時間もそんなにないだろ？早く行かないと乗り遅れるぞ」

「はいはい、分かつてるよそんなこと・・・またな、兄貴」

「すごく楽しかったですよ、また招待してくださいね！」

促すランスに、各々別れの言葉を告げ、二人は飛行機へと歩いていった。

それが十数日前の話で、気づけば夏休みも終わり新学期が始まっているのだった。

月夜はだるそうにしながら、机に突っ伏し窓の外を見ている。時々教師に怒られるが、それも日課となつているので別段月夜もクラスメイトも気にしない。夏休み中に外国に行ったという日常外の出来事もあつたが、気づけばいつもの日常へと戻つていた。

「おーっす、相変わらずやる気がなさそうだな月夜」

三時限目の終了後に、利樹が声をかけてくる。頭についていた包帯はとっくの前にとれていて、少し伸びた茶色の髪がいつものように立っている。利樹の後ろには、いつものように紫がついてきていた。

「あー・・・お前も相変わらずだな」

机に突っ伏したままの状態でだるそうに答える月夜の頭を、隣の席に座っていた楓が軽くはたく。

「もう、久しぶりに会うんだから顔ぐらいあげなさいよ」

「うー・・・」

月夜は気だるげそうに上半身を起こして言う。

「あんまり叩くなつて、馬鹿になつたらどうするんだ？」

反応を返さない三人。無言の視線は、もうこれ以上馬鹿にはならな  
いだろうなあ、といったような意味合いが込められている。それを  
感じ取った月夜は、

「お前らなあ・・・いいさいいさ」

すねた子どものように再度机に突っ伏してしまふ。

「はいはい、子どもじゃないんだからすねないの」

一見冷たく聞こえる楓の言葉だが、声色に含まれている笑いが仄か  
に温かみを感じさせた。

「ったく・・・子どもはどっちだっつうの」

ぶつぶつと呟きながら起き上がる月夜。文句は言うものの、月夜は  
日常となっているこんなやりとりが嫌いではなかった。

「そんなことはさておき、どうするんだ？」

黙って二人を見ていた利樹が、口を開く。今日は二学期初日という  
こともあり、三時間で授業は終わりだった。その後は、学食で昼ご  
飯を食べるのも家に帰るのも生徒の自由ということになっていた。

「私はお昼学食ですませちゃおうと思ってたけど・・・月夜は？」

「楓がそうするならそうするさ、家帰ってもすることないしな」

「俺らも学食ですませるし、一緒に行こうぜ。いいだろ？紫」

「もちろんかまわないわよ、みんなで食べた方がおいしいからね」

「んじゃ、行こうぜ」

先頭に行く利樹が続いて、久しぶりに会い楽しそうに話し合う楓と  
紫。そしてその後ろをのろのろとついていく月夜ら四人は学食へと  
向かった。

「で、夏休み中に何があったんですか？君達は」

まず利樹が咳き込んでご飯粒を飛ばした。それとほぼ同時に、紫が  
箸で持ち上げていたうどんをつゆの中に落とす汁を飛ばしていた。

そんな二人を見て、カツカレーをつつきながらにやにやと笑ってい  
る月夜は、からかう様に対面側に座っている利樹と紫に言った。

「な、何をいきなり言い出すんだお前は!？」

「そうよ！月夜君つてば一体何を・・・」

焦る二人を見ながら、月夜は隣に座っている楓に声をかける。

「見りゃ分かるよなあ・・・なあ、楓？」

「そうだね、二人ともかなり親密になつてるよねえ・・・元々仲良かつたけど」

月夜に同意しながら、楓も意地の悪い笑みを浮かべている。

「どこが、いつもと違つて言うんだよ！？」

明らかな狼狽を見せながら、利樹は二人に問いかける。

「その一、ご飯食べてる間随分と仲良さそうに話してた」

「その二、椅子がとつても近い」

冷静かつからかうように二人は説明する。月夜と楓は人をからかう時だけは息がぴったりな上に、そういう時だけどちらも目聡いのである意味最低かつ最凶だった。

「もう！二人ともからかわないでよ！」

「そうだぜ、たちの悪い冗談はやめろよ」

必死で否定しあう利樹と紫。結局二人は、昼食が終わるまで月夜と楓にからかわれ続けたのだった。

「しかしまあ・・・まさかそこまで進展してたとはな」

家に着いた月夜は着替えを済ませ、リビングで椅子に座りテレビを見ながらそう呟く。隣にいる楓も、それにうんうんと首を縦に振っていた。

「びつくりだね・・・」

結局のところ、からかわれ続けた紫がつい口を滑らせてしまったのだった。

「やっぱり高校生はキスぐらいするのかな？」

「さてね、人それぞれじゃねーの」

二人は人の恋愛には目聡い割に、自分のことに関しては疎かった。お互いの距離は縮まっているものの、恋愛や恋人といった類の関係

とは遠く離れている二人だった。

「楓も、やっぱりそういうの羨ましいって思うか？」

自身の口からついこぼれた咳きに、月夜は焦った。それを聞いてしまった楓も焦ったが、しっかりとそれに返答する。

「どうだろ・・・羨ましいって言うよりは、憧れちゃうかな」

なんとなく気まずい雰囲気は二人の間に漂う。日常にはなっているものの、二人きりという状況は意識してしまえば危うい物でもある。そんな雰囲気壊すように、突然電話が鳴り響いた。

「俺が出るよ」

救いの手を差し伸べられたように、月夜が受話器をつかむ。

「はい、如月ですけど」

「月夜か？」

受話器越しから、少し前に聞いたばかりの聞きなれた声が届く。

「なんだ兄貴か。何か用？」

「少し聞きたいことがあってね・・・最近、そっちで何か変わった事件みたいなのはないか？」

「いや特に、何かあったのか？」

顔つきを変えた月夜を、楓は心配そうに見ている。受話器越しのランスは、安堵するような息をもらした。

「そうか、ならいいんだ・・・こっちじゃ最近変な事件が多くてね、もしかしたら日本でも、と思って電話したんだ」

「変な事件・・・？」

「ああ、軍内部での行方不明者が続出してるとんだ。四日程前から、もう九人の被害者が出ている」

「確かに数は異常だと思うけど、特に変わっていうわけでもないんじゃない？」

「それなんだが・・・」

ランスは悩んでいるようにしばし黙り込み、そして口を開く。

「痕跡が全くないんだ。目撃者もない、まるで人が消えたかのようにならなくなっている」

ランスのその言葉を聞いて、月夜は不意に五月の誘拐事件を思い出す。多少の違いはあったが、なんとなくそれに似ている気がしたからだ。

「もしかしたら、人間の手口じゃないかもしれないと思ってな。思い当たる節とかないか？」

「だから俺に電話してきたってわけか・・・思い当たる節はあるよ」そう言うってから、月夜は五月の事件のことを話した。目撃者のいない誘拐、現場に残された一つだけの証明品、そして、狙われていたのは自分かもしれないということと相手が人間ではなかったということ。ランスはそれを聞いて、何かを考え込むように黙った。

「どう思う？」

「・・・難しいな、似ている犯行とはいえ、日本とアメリカじゃ離れすぎているし、それにそいつはもういないんだろ？」

「うん、でもそいつの大元が日本にいるとは限らない。少なくとも、目撃者も証拠もなしに人を消すだなんて、人間には出来ない。俺の類の生物だと思うよ」

月夜はそう言うってから、アメリカの学校で出会ったリッダのことを思い出す。嫌な感覚を呼び起こさせたあの姿、月夜の疑念は確信に変わっていた。

「とにかく、何かあったら連絡をくれ。こっちはこっちで、なんとか対策を練っておくよ」

「分かった、こっちは任せろ」

「それじゃ、またな・・・気をつけるよ」

「言われなくてもな、兄貴も気をつけるよ。また」

受話器を置いてから、月夜は溜め息を吐く。心配そうに隣で見ていた楓が、月夜に話しかける。

「ランスから？何かあったの・・・？」

「また面倒ごとが起きてるみたいだよ。近いうちに、また何か起きるかもしれない」

鬱陶しさを滲ませた月夜の言葉に、楓が小さく震える。

「五月の時みたいに・・・？怖いよ・・・」

争いや戦争を恐れる楓には、あの時のことはあまり思い出したくないものだった。ましてや、自分にとって大切な人が殺し合いをしている場面など見たくもなかった。そんな楓に、月夜は優しく、そして力強く言う。

「俺が護るよ、何があっても、絶対に。俺は死んだりしない」

月夜の力強い言葉を、楓は多少複雑に感じていた。だから言う。

「無茶しないでね？・・・月夜が傷つくのは見たくないから」

「大丈夫だよ、俺は絶対平気だから」

言いながら軽く楓の頭をぽんぽんと叩く。楓は月夜にしがみつき、しばらくの間そうしていた。

それから数日間、変わった様子もなく日常が流れていた。いつもの授業風景、友達とのいつもの馬鹿騒ぎ。今の日本は戦争ボケしているなどと他の国からは言われるが、みんなみんながそうであるはずがない・・・いや、本当は心の底から争いを望んでいる者などいるはずがない、と月夜は常々そう思っていた。そんな月夜の考えを嘲笑うかのように・・・事件は起きた。

新学期開始から一週間後のことだった。時刻は十二時を少しまわった程、学校の全員が四時間目を受けている最中、突如その声は響き渡った。

「初めまして、諸君等に告げる。唐突だがこれから私が言うことに耳を傾け、冷静に判断をして行動して欲しい」

各教室に設置されているスピーカーから流れた声は女性のものであった。突然の事態に授業は中断され、教師も生徒も啞然とスピーカーを見上げている。

「この学校にいくつか爆弾を仕掛けさせてもらった、命が惜しければ各個人が今いる場所からは動かない方が良い。動きがあれば、す

ぐにこちらで爆弾のスイッチを押させてもらう」

その言葉に、学校内が騒然とした。生徒たちの中には、

「何これ？避難訓練か何かか？」

と呟いている者もいる。いたずらか本気が、その者の真意は分からない。戦争を体験している教師たちは、疑心を持ちながらも冷静に生徒たちに指示を出した。

「静かに！反日本政府のテロリストかもしれない、うかつに動いたり騒いだりするのは控えるんだ！」

その言葉に騒然としていた教室は静かになった。他のクラスは分からないけど、この教室は大丈夫っぽい・・・かな？と月夜は誰に気づかれることなく呟いた。そして、隣の席を楓見る。案の定、突然のことに何が起きたのか分からない、といった感じで不安な表情をしている。無理もない、月夜自身そうなのだから。

「大丈夫か？楓」

それを見かねた月夜が、こっそりと楓に聞く。楓は不安そうに月夜を見てから、呟き返す。

「私は大丈夫だけど・・・何が起きてるの？」

「俺にも分からない。でもテロリストにしては手際が良すぎるし、日中誰にも気づかれずに爆弾を仕掛けるなんて無理だよ」

月夜の物言いに含まれる言葉に、楓は理解した。

「また五月の時みたいに、人間離れた人・・・なのかな？」

「さてね・・・」

「おいそこ、うるさいぞ！」

教師に一喝され、二人は会話を止める。教室内部にはピリピリとした緊張感が張り詰めていた。最初の放送から、すでに三分の時間が流れていた。それから約三十秒後、再度スピーカーから放送が流れた。

「臆病なのか賢いのか・・・中々冷静な判断が出来るようですね。

それはさておき、こちらとしても無闇やたらに切り札を使うのは気がひけるので、諸君等の協力には感謝の言葉を贈ります」



全く要領を得ないその放送に、教室の全員が不審顔でスピーカーに顔を向けている。スピーカーは先ほどとは違って、間を空けずに次の言葉を吐いた。

「諸君等には人質となつてもらおう。学校中の生徒たちの命が惜しければ・・・早々に校庭に出てくると良い、インフィニティ」

その言葉に、びくりと体を震わせながら楓は月夜の顔を見る。月夜は落ち着いた様子で、心配ない、といった感じで笑いかける。放送の意味を理解できていない他の生徒たちは、周りを見渡しながら、「インフィニティ？」

と呟いている。月夜はそんな騒然としている中、一人立ち上がり窓を開ける。後ろからは、

「何をしているんだ月夜、危ないから早く席に戻りなさい！」

と教師の言葉が聞こえたが、月夜はそれに対して反応を返さずに、窓枠に手をかけ飛び降りた。きゃー、という声があがる。当たり前だ、なぜならそこは四階で、普通の人間ならまず死ぬ高さなのだから。しかし月夜にとってはさほどもない高さだった。空中でバランスをとり、膝を曲げて足から着地する。すたん、という響きの良い音を響かせ、月夜は校庭に降り立った。

「名指しで来るとは・・・迷惑な話だよな。今の俺の名前じゃないだけ、ましかけどさ」

校舎の窓から、いくつもの視線を背中に浴びながら月夜はゆっくりと歩く。広がる校庭の中には、目に付くような人影はなかった。

「自分から呼んでおいて、そっちが来てないんじゃない意味がない」

ぶつぶつと文句を独りごちながら、月夜は校庭の真ん中辺りで止まり立ち尽くす。空は青々とし、秋の空の高さを感じさせる。月夜はそんな青空を見上げながら、しばし待っていた。

「あなたがインフィニティなのね」

校舎の玄関からゆっくりと歩いてきた人間が、月夜にそう話しかける。月夜は視線をそちらに移し、待ち合わせに遅刻した友人を睨むような目で見る。

「手際が良いかと思えば、遅刻かよ。で、用件は何？」

「単刀直入に言うと、君に死んで欲しいんだ」

にこりと裏表のなさそうな笑顔を浮かべ、その女性は言う。髪はシヨートで青い。身長はそこそこ高めで肌が黒く、実年齢よりは若干若く見えそう。月夜からの初めの印象は、活発な女性、だった。

「それで、人質までとったってわけ？裏でこそそこそやられるのもうざいけど、堂々と卑怯な手段とられるのも気に食わないね」

月夜の皮肉に、女性は笑顔で答える。

「争いにも殺し合いにも、卑怯なんて言葉は存在しないでしょ？それは負け犬の台詞じゃなくって？」

「否定はしない、けど俺は負けたわけじゃない。それにしても日本語が上手なんだな。そう言えばいつか話したリッダっていう男も、なぜか日本語を話してたな」

「彼も私の仲間だもの、色々な言語が使えないようじゃ活動が出来ないわ・・・と、これ以上は喋る必要はないわね。死にゆくあなたには、意味のない話だものね」

終始笑顔で喋り続ける女性に、月夜は特に敵対心を持たなかった。

一応人間ではあるが、彼女も月夜寄りの人間なのだ。それならば、別に敵対心を持つ対象にはならない、と月夜は考えていた。そしてその考えに、いつかのヘンタイは別、と付け足すのも忘れてはいなかった。しかし、

「別にあんた自身に恨みがあるわけじゃない、同じ生物なら尚更仲間意識みたいなものもある。でも、俺は殺されるわけにもいかないし、何より他の誰かを巻き込むあんたたちのやり方は気に食わない。死ぬのはあんたのほうだよ」

敵対心を持っていなくても、殺らなきゃ殺られることを月夜は十重に理解していた。瞳が闇に染まり、相手を睨みつける。

「何を勘違いしているの？あなたはただ、いたぶられ殺される側の人間。不審な動きをしたら、人質には死んでもらうわ」

笑顔が冷淡な微笑に変わり、冷たい目で月夜を見る女性。もちろん

月夜だってそれを理解していないほど馬鹿ではなかった。だからこそ、相手が何かをする前に消してしまう気でいた。その考えも、次の言葉でかき消される。

「私が爆弾を爆発させる前に殺す気なんでしょう？やめたほうがいいわよ、そんなことをしたら全て爆発してしまうから」

月夜はそこで初めて、動揺の色を見せた。相手にばれないようにすぐに気を張るが、相手はその小さな動揺を見逃さなかった。その隙に付け入るように、女性は追い討ちをかける。

「試してみたらいいんじゃない？あなたにとって、人間なんて生きる価値もないゴミのようなものでしょう？」

「黙れ！」

月夜は感情を露に叫んでいた。思い出したくない過去をひっかきまわすような女性の言葉に、月夜は怒りを抑えられなかった。それでもなお、女性は続ける。

「かつて最強であり最凶だった生物兵器。そんなあなたが人間の心配をするなんておかしいことだと思わない？」

「黙れって言うてるんだ！」

完全に闇に包まれた瞳に力がこもる。月夜は怒りに任せ、標的である女性に空間が歪むほどの力を飛ばす。音速を超え放たれた力の奔流は、音を立てながら女性に襲い掛かる。女性はそれを避けることなく右手を前に突き出し、見えないその力をかき消す。

「この程度なの？・・・私はかつて最凶と呼ばれたインフィニティに恋をしていたわ。圧倒的な力を持ち、破壊と殺戮の超越者・・・あなたなら、この醜い世界を壊してくれると私は願っていたのに」

月夜の戸惑いの視線を受けながら女性は哀しそうに続ける。  
「なのにあなたは変わってしまった。世界に流され情に流され・・・人間に溶け込み墮落していくだけの存在になってしまった」

「違う、俺は・・・」

「違う。現にあなたは私程度を消すことも出来ない。あの頃のインフィニティはどこにいったってしまったの？」

女性の言葉に月夜は拳を握り締める。確かに今の自分は弱くなった、護るものがなく、ただただ破壊を繰り返していたあの頃に比べれば・  
・でも、それは違うのだということをも月夜は理解していた。

「破壊する力だけが強さじゃない、護る力だつて、強さなんだ」

「それでも、今のあなたじゃ護ることすら叶わない、そうでしょ？」

月夜は突然寒気に襲われた、嫌な感触が体にまとわりつく。そして次の瞬間、校舎の一部が爆発した。

「な・・・」

校舎からは多数の叫び声が聞こえる。爆発した部分は、切り取られたかのように小さな穴を穿っていた。女性は冷酷に微笑みながら、月夜に告げる。

「それでもあなたは護れるのか弱くて、すぐに死んでしまう人間なんていう生き物を」

「・・・うるっさい！」

月夜は突発的に湧き上がる怒りをなんとか抑える。自分が冷静にならなければ、学校みんなを護ることなど不可能なのだとは彼は理解していた。呼吸を整え、声を押し殺して月夜は問いかける。

「俺がターゲットなんだろう？なら、俺だけを狙えよ」

「半分正解で半分はずれ、私も私の主も、あなたを殺すことだけが目的じゃないもの」

少女のように楽しそうにいう女性は、心底楽しんでいるようだった。

「あなたが苦しんで悔しんで・・・そして死んでいくのが私たちの目的、俗っぽい言い方をすれば復讐みたいなものかしらね」

「復讐だつて？そんなものの為に、見知らぬ誰かを巻き込むのかお前達は！？」

怒鳴る月夜に、初めて女性は怒りを露に怒鳴り返した。

「あなたに何が分かるつて言うの！？あなたが悪いのよ、変わってしまったから・・・破壊と殺戮の唯一無二の存在から、平和に逃げのうのうと暮らしていたあなたが悪いのよ！苦しんできた私たちの気持ちも知らずに！」

それは単に女性個人の逆恨みからでた言葉だったが、その言葉の意図を読み取れない月夜にとっては致命傷となる程の言葉だった。恨まれていることに異論はないし、否定もしなかった。むしろそれを受け入れて生きてきた月夜だったが、彼のせいで泣き苦しんだ人が大勢いることを直接言われるのには耐えられなかった。結局・・・自分は何一つ理解していなかったのかもしれない。と、月夜は胸を痛める。それでも・・・

「それでも、俺以外を巻き込むのは許せない！・・・あんたを殺す以外にみんなを助けられないというのなら、本気でやってやるよ」後半の言葉には生気が感じられなかった。むしろ、人間のものではない響きを持っていた。女性は体を震わせ、恍惚とした表情を浮かべる。

「戻ってくれるのね？あの頃のあなたに・・・」  
月夜の背中からはゆっくりと黒い羽が生え、人としての感情を消していく。戦争終了後も幾度となく力を使ってきた月夜だったが、今までとは違い、護る力ではなく破壊する力を象徴にしたかのような重々しさを持っていた。

「すぐくぞくぞくしちゃう。・・・あの頃のあなたに殺されるのなら本望だけど、私も仕事だから本気でいかせてもらう」

女性は間合いを一瞬で詰め、肌が触れるほどの近さで力を放つ。普通の人間ならば触れただけでひしゃげる程の力が、月夜の頭部にめり込む。音はしなかった、そして月夜の反応もなかった。女性は手を休めることなく、月夜の全身を打ち付ける。しかし、そのどれもが月夜にダメージを与える物にはならなかった。月夜がゆっくりとした動作で、無感情に言う。

「・・・うざいきえろ」

近距離で女性に向けられる月夜の力は、先ほどの力をはるかに上回っていた。女性を弾き飛ばし、素早く動いて倒れた女性にとどめをさそうとする月夜。空間すら消しとばしてしまいそうな力を持った右手が女性に振り下ろされる前に、またしても校舎の一部が爆発し

た。右腕を振り上げたまま、一瞬止まった月夜を女性が下から蹴り飛ばす。しかし、岩を蹴ったかのように月夜は動くことがなかった。楽しそうに笑いながら倒れたまま月夜を見上げる女性、かたや無感情に黒い瞳で女性を見下ろす月夜。二人の視線が交わる。

「甘いわね、私を殺さないの？それともさっき言ったことを気にしているの？」

「・・・」

無言を保つ月夜に、女性は心底つまらなさそうに言う。

「そんなに人間が大事？あの頃のあなたなら、何も気にせずに、無感情に私を殺したはずなのにね」

女性は自分が死ぬ間際でも冷静だった。なぜなら、最後の切り札は彼女が持っているのだから。とはいえ、形勢が逆転したわけでもない。人質を盾に立ち上がりつつ動くことも出来るが、月夜自身に彼女の攻撃が無意味だというのならそれは全く意味を成さなかった。だから、女性は倒れたまま不適な笑みを浮かべてとつとつと語りだす。「どうして私たちがあなたと近い力を持っているか知りたい？」

「・・・」

月夜の無言を無視し、女性は続ける。

「ある人物が私たち一般人に力を与えているのよ、ただそれだけ・・・結局、先天的な力を持っているあなたには勝てないけどね」

嫌になる、といったような表情で女性は溜め息をもらす。

「私は子どもの頃からこの世界が嫌いだった。人間が嫌いだった。自分を含めた全てが嫌いだった。でもあなたを見たとき、私は初めてこの世界に存在する物を美しいと感じれた・・・絶対無二の破壊神、インフィニティを。あなたは覚えてないでしょうけどね」

「・・・サーシャ」

今まで無言だった月夜の口からそんな言葉が漏れた。女性は驚いた顔をし、そしてすぐに嬉しそうに顔を綻ばせる。なぜなら、それは今の月夜に名乗ったはずのない女性の名前だったからだ。

「覚えててくれたのね・・・本当はあいつの目的なんてどうでも良

かった、どんな形にせよ私はただあなたに会いたかっただけだった」  
「俺はもう、あの頃の俺じゃない」

無感情の兵器から、月夜はもう自分を取り戻していた。瞳は黒く、羽は生えたままだが、その体に持つ雰囲気は人のそれだった。

「それだけが心残りだけど・・・でもいい、最後に一つ良い事を教えてあげる。私が死んだら全部爆発するの、あれ嘘だから」

その言葉は彼女にとって死を決意するものだった。これで月夜が彼女を殺さない理由はなくなったのだから。目を瞑り、死を望む者独特の落ち着いた雰囲気醸し出すサーシャに、月夜が聞いた。

「本当にいいんだな？」

「最後まで甘いね、私はもう戻ることが出来ないし・・・何より死ぬことが一番望んでいたことだから」

「・・・爆弾を取り除いて、大人しく帰ってはくれないんだな？」

最後の最後に念を押すように聞く月夜に、サーシャはあどけない微笑みを浮かべて言い放つ。

「私にとっての救いは、あなたからの死しかない。それにあいつは私よりもはるかに強い、だから・・・甘えは捨ててほしい」

「・・・分かった」

それ以上口を開くことはなく、月夜は相手を見据え・・・そして、腕を振り下ろした。

それからは色々大変だった。月夜の正確な正体がばれたわけでもないが、明らかに人間外の姿形、そして人間外の戦闘、そのせいで教室内でも月夜は居心地悪そうに席に座っていた。楓や利樹は理由を知っていたからいつも通りだったが、何も知らない紫に説明するだけで昼の時間は終わってしまった。その他の特に親しくもない生徒たちは、何かを聞いたそうな表情をしていたが、自ら月夜に近づいていく者たちはいなかった。そして何よりこの事件は、月夜自身の気持ちに大きく揺さぶりをかける結果となっていた・・・。

「悪いな、俺のせいだ・・・お前らも変な目で見られるだろ？」

下校時に、いつものように月夜の周りに集まってきた紫と利樹、そして楓に月夜は謝る。

「お前が悪いわけじゃないだろ、他のやつ等はどう思ってるか知らんが、俺は気にしてない、なあ紫？」

「そうね・・・月夜君が悪いわけではないわ」

二人の友人の優しい言葉に、月夜は嬉しく思うが、それを否定したくなる。

「いや、狙われたのは俺なんだから俺のせ・・・」

「そんなことないよ！」

月夜の言葉を、楓が強く否定する。

「月夜は悪くない、悪いのは月夜を生み出した人たちでしょ？それなら月夜は悪くなんてない！」

「違う、違うんだよ！楓！」

月夜の突然の叫びに、三人は固まる。楓は啞然と口を開いたまま、そんな月夜を見つめている。

「悪い・・・でも、俺が歩んできた道は俺の物なんだ。知らなかったじゃすまされない、分からなかったじゃすまされない、俺はたくさん人間を・・・そして、俺はまた誰かを巻き込んでしまっている」

苦しそうに吐き出される月夜の言葉に、三人は黙ってしまった。分かっていたと思っていたのに、本当は全く分かっていなかったなんて・・・どれだけ皮肉だろう。と、月夜は心の底で自分を罵る。

「あんまり、関わらない方が良く。俺は俺のせいで、誰かが巻き込まれるのは嫌なんだ」

そして立ち上がり、後ろを振り返らないで教室を出て行く。残された三人は暗鬱とした表情で、しばらくそこから動くことができなかった。



「どうすればいいんだろうな・・・破壊する力もなければ、護る力もない。ただ無為に誰かを巻き込んで、犠牲を増やしていく・・・これなら、あの頃のほうがましだったのかな？」

自分の部屋で横になりながら、月夜は独り言を呟く。その独り言に、返事を返すものがいた。

「甘くなったもの、あなたは」

ノックもせずに部屋のドアから顔を出したのは、サーシャだった。

「勝手に部屋に入ってくんなよ、今は・・・誰とも話したくない」

月夜の言葉などおかまいなしに、サーシャは部屋にあがり床に座り込む。

「いいんじゃない？別に、少なくとも今のあなたは人間より人間らしいわ」

「でも人間じゃない、だから狙われるしみんなに迷惑をかける・・・本当にだめだな俺は」

自虐的に自分を責める月夜に、サーシャは冷淡に、それでも温かみのある言葉をかける。

「自分で決めたことなら、周りのことを考える前にそれを優先させなさい。私を殺さなかったのもあなたが決めたことでしょう？」

月夜はあの時、サーシャの頭めがけて腕を振り下ろした。しかしそれは殺す為ではなく、しばらくの間眠ってもらうためだった。その間に、月夜は爆弾を全て処理した。

「それに、結果としてあなたは護りきつたじゃない。誰一人死ぬことはなかった」

「あれはサーシャが甘かったからだろ、わざと人がいないところ爆破しやがって・・・そうまでして俺に殺されたかったのかお前は？」  
楽しそうに笑いながら、サーシャは口を開く。

「甘くなったあなたでもあそこまでやれば殺してくれると思ってただけだね、私の考えが甘かったなあ」

「俺はもう誰も殺したくないんだよ、約束もしたしな」

嘆息しながら呟く月夜の言葉に、サーシャは疑問を投げる。

「約束？」

「色々あるんだ、気にすんな」

月夜はそっぽを向いて押し黙る。つい先日まで命のやり取りをしていた相手に、平然と背を向ける月夜。

「ふーん・・・まあ、大事にならなかつたし良かったんじゃない？日本政府が上手く隠蔽してくれたみたいだし」

「日本でもどこでも、国にとっては俺の力は迷惑だから隠しておきたいところなんだろうな。というか、お前が人事のように言うな・・・それで、わざわざ人の部屋に何の用だ？」

部屋に来たからにはそれなりの用件があると月夜は思っていた。しかし、

「特に用はないよ。そろそろあなたが一人で考え込んでるんじゃないかって思ってた来てみただけ」

そう平然とサーシャは言っただけ。

「なんだそりゃ・・・今回の事件の首謀者に励まされたって嬉しくないぞ俺は」

「別に励ます気もないし、義理もない。とは思っけど、落ち込んでるあなたなんて見たくないもの」

飄々と言うサーシャに、月夜はむっとした様子もなく言う。

「さいで。俺の命を狙ってるやつの情報でもあればそれが一番励みになるんだけどな」

「それは無理、私が消されちゃうもの。あなた以外に殺される気はないのよ」

悪びれた様子もなく言うサーシャに、月夜は溜め息混じりに返す。

「全く・・・いつまでこの家に居る気なんだお前は」

「それはもちろん、月夜が殺してくれるまでに決まってるでしょ」

月夜は頭が痛くなるような気持ちを抱いた。自分の甘さに、いい加減反吐が出る。そんな中、部屋のドアがノックされた。

「月夜、いる？」

楓の声だった。今月夜は楓に会いたくなかったが、サーシャが勝手

に、どうぞ、と部屋にあがるように指示する。その声に驚いたように、楓はドアを開けて部屋の中に入った。

「サーシャさん、どうしてあなたが月夜の部屋にいるの？」

楓の第一声はそれだった。月夜に対して恋慕に似たような感情を持っているサーシャを、楓は快く思っていない。今回の事件の首謀者なら尚更のことだった。自然と口調もきつくなる。そんな楓に、悪びれた風もなくサーシャは言う。

「彼が落ち込んでいるときに手助けできるのは、人間じゃないもの。私が一番彼の気持ちを理解してあげられるんだもの」

よく言うよ、と小さく呟いた月夜の言葉は、二人には完全に無視された。

「あなたのせいで月夜が落ちこんでるんでしょ！これ以上私たちの生活をかきまわすようなことをしないで！」

むきになって言い返す楓に、サーシャはくすくすと笑い声をあげる。その笑い方は、新しい玩具を手に入れた子どものような笑みだった。「それならあなたに彼の何が分かるの？彼の悩みを少しでも理解してあげることができて？」

サーシャの言葉に気おされる楓だが、退くことはなかった。

「私は・・・確かに月夜の本当の気持ちを分かってあげることが出来ないかもしれない・・・でも、そばで支えることは出来るよ」

最後の言葉は月夜に向けられたもので、楓は月夜に目を向ける。切なく物哀しそうに、しかし強い意志を秘めた瞳だった。念を押すように、サーシャが問いかける。

「月夜のそばにいたら死ぬかもしれないのよ？それでもあなたは本当に言い切れるというの？」

楓に迷いはなかった。確固たる意志を持って、口を開く。

「私は死なない、私が死んだら月夜を苦しめるだけだから・・・私は絶対死んだりなんかしない」

人間は脆くて弱い生き物だ。月夜たちに比べればその体はあまりにも脆弱で、すぐに死に至ってしまう。でも楓は言う、私は死なない、

と。結局人間の強さの本質は、何者にも屈しない意志の強さなのだと、月夜は分からされた気がした。だからこそ、今まで黙っていた月夜は呟く。

「楓は強いよ、でも、意志の強さだけじゃだめなんだ・・・」

「でも・・・！」

反論しようとする楓を遮り、その瞳をまっすぐ見つめ、月夜は言う。「だから、俺が護る・・・絶対に」

月夜は落ち込みながらも、理解はしていた。確かに自分は誰かを巻き込んで怪我をさせ、死なせてしまう。それは自分が生きている社会に存在している人間が、脆弱な生き物だからだ。それでも、自分はそんな弱い彼らに助けられ、支えられてきていた。それを理解していても、実際に事件が目の前で起こってしまった今では納得することを月夜は出来なかった。でも今は違う、月夜を支えてくれる楓の存在を、月夜自身は何より嬉しく思ってしまったから・・・。だから・・・

「そばにいて支えて欲しい」

月夜は本心を口にしていた。孤独だったあの頃とは違う、もう・・・俺は戻れないから。

「言われなくてもそうするつもり、だって私は月夜のこと・・・」夏休みのあの日、月夜から遊園地でもらった星型のペンダントに触れながら楓は言葉を紡ごうとする。しかし、

「そういうのは二人きりでやってほしいなあ」

と大げさに言うサーシャによって止められた。その顔は笑ってはいないものの、嫌な表情はしていなかった。

「私が邪魔なだけかしら？それなら二人の世界が始まる前に言って欲しいなあ」

今までとはうって変わって、からかうように言うサーシャに二人は顔を赤らめた。そんな二人を、楽しそうにサーシャは交互に見ている。

「それじゃ、これ以上いても邪魔になるだけだから私はお暇させて

もらおうかな、それじゃお二人さんまたね」

サーシャは特に急ぐ風もなく、いつものままの動作でゆるやかに部屋から出て行った。月夜には、彼女の本心がよくつかめていなかった。

残された二人は、お互いに相手をちらちらと見ながら気まずそうにしていた。沈黙に耐えきれずに先に口を開いたのは月夜だった。

「どこまでやれるかわからないけど・・・がんばろうか」

「うん、一緒にがんばろう」

多少のぎこちなさはあったものの、二人は笑い合った。

この時の月夜は知らなかった、自分に力があるからこそ、気持ち以外は余裕があるのだということ・・・。

予兆、そして始まり（後書き）

ついにこの物語も佳境に・・・いくんですかね？（おい

## 覚醒

初めてそれを見た時、今までの世界が終わり、そして新しい世界の始まりを感じたのを私は覚えていてる。

とある軍事施設、科学者の娘である私は、親の研究の成果とやらを見に来ていた。当時の私は十三歳、そんな研究の成果などに全くの興味はなかった。いや、それどころか私はこの世界の全ての事柄に無気力無関心だった。絶えず争い、誰かを傷つけ殺すことでしか自分を護れない人間のことを浅ましく思い、他の人間を嫌うどころか人間である自分自身にさえ嫌悪感を抱いていた。そんな時、私は彼に出会った。初めて見たとき、それは単なる幼い子どもにしか見えなかった。それも当たり前の話だった、なぜなら彼は当時四歳になったばかりの幼い子どもだったのだから。防弾ガラス越しに見る彼は、人間味というものが全くなかった。ただ人の形をしていて、ただそこに在るだけ・・・私はこの時点で彼を好ましく思っていたのかもしれない。彼は、私と同じような生き物だったから・・・。そんな彼の訓練を見ている最中、突如異変が起きた。大きな黒い一對の羽が、彼の背中から突然生えてきた。一瞬の出来事だったが、その美しさに私は見惚れていた。そして・・・何が起きたか、私には全く分からなかった。気がついたら数百メートル離れた海岸に、私は倒れていたのだから。所々傷む体を抱き締め、私は何かを直感した。きつと、彼がやったのだろう、と。痛む体を起こし、先ほどまで街が広がっていた場所に視線を向ける。・・・何もなかった、そこは真っ平らな荒野と化していた。なぜ私が生きていたのか分からない、ただ一つ分かることは・・・今まで感じたことのなかった高揚感を、私は感じていた。きつと彼ならこの世界を壊してくれる、浅ましい人間を壊してくれる、そして私も・・・。

一週間後、私は死んでしまった両親の知人の家に預けられる前に、もう一度彼と再会を果たした。

「初めまして、私はサーシャ・・・あなたは？」

浜辺に座り、海を見ている彼に私は挨拶をする。彼は意味を理解していないようで、虚ろな瞳をこちらに向けてくる。

「サーシャ？」

「あなたは、なんて呼ばれているの？」

「インフィニティー」

そう無機質に呟いた後、彼はもう興味がないというばかりに海に視線を戻す。海すら、彼には興味がないものかもしれない。私は時間がなく、最後に一言だけ言ってからその場を離れることにした。

「分からないかもしれないけど一つ・・・次会うときがあったら、私を殺してね。それじゃ」

「・・・？」

彼がこちらを振り向いたかは分からなかった。私はその言葉を言った時点で、既に彼に背を向けていたからだ。死にたいと思っていた私なぜ次会った時に殺して欲しいと願ったか、それは・・・彼が創る世界を一度でも見たいと心から願っていたからだ。そして私は、彼と別れた・・・。

「ほんと、私は全く変わってないのに彼は変わりすぎたなあ」

昔を懐かしむように、一人呟くサーシャ。そんな彼女に、不満の声をあげた少年が一人いた。

「・・・本人前にして他人事のように言うのやめてくれない？というかなんでサーシャが俺の部屋にいるんだよ」

布団の上で眠そうに目をこする月夜。時刻はまだ朝方、休日なので学校もなくゆっくりと休もうとしていた月夜は、サーシャの独り言によって起こされていた。サーシャは機嫌を悪くした風もなく、そして悪びれた様子もなく飄々と言う。

「だって暇なんだもの、貸してもらってる部屋にいてもすることないし」



「・・・だからって俺の睡眠を邪魔すんなよ。くそ、目が覚めちまつたじゃねーか」

溜め息をつきながら悪態をつく月夜。サーシャはそんな月夜を楽しそうに見ていた。

「覚めたからにはしょうがない、電話してくる」

立ち上がった部屋を出て行くこととする月夜の後ろに、サーシャもついていく。月夜は何か言いたげな顔をしていたが、言っても無駄なことを悟っていたので特に何も言わなかった。

リビングにて、月夜は受話器をとって番号を入れる。起きてるかなあ、と呟きながら相手が出るのをしばし待つ。数秒後、聞きなれた声を受話器から響いた。

「・・・レンフォードです、新聞と宗教はお断りしてますよ」

眠そうな声を発したのは、ランスだった。無駄な電話だったらすぐにでも切ってしまったらしいような勢いをしていた。

「月夜だよ、悪いな起こしたか？」

切られないうちに早々と名前を述べ、一応気遣う声をあげる。実際は月夜も起こされた立場だったので、その声に気遣いの色はなかったのだが。

「月夜か・・・仮眠中だったんだよ、最近は何かと忙しくてな。で、なんの用だ？」

明らか声に元気がないランスが、どれだけ寝ていないのかを月夜はなんとなく察した。だからこそ、用件を手短に話す。

「この前の事件、犯人は間違いなく人間じゃない。俺のところにもその一部のやつが来たしね」

横目で見る月夜に対し、サーシャは視線を合わせないでいつもの軽い笑顔を保っている。

「やっぱりそうか・・・もしお前と同じだとすると、一体いつどこで生まれたんだろうな」

「さーな、どうやら首謀者にはかなり恨み持たれてるみたいだぜ、俺」

「ヒントあげようか？」

今まで黙って会話を盗み聞きしていたサーシャが、唐突に口を開いた。

「ん？誰かいるのか？」

疑問の声をあげているランスの声を無視し、月夜は押し黙ってサーシャを見る。その視線はサーシャの次の言葉を促していた。

「戦争が終わった後、あなたは国に追われ逃亡したのよね？もちろんそれは当たり前の話、戦争が終わったら兵器は必要ないものね。でももし、戦争が終わる直前にあなたと同じ兵器が生まれていたら？」

サーシャの言葉を聞いて、月夜はすぐに理解した。そしてすぐにまとめた文章を、ランスに伝える。

「・・・兄貴、大統領でも当時の兵器研究者でもいい、戦争直後に生まれたもう一人の生物の情報を集めてくれ。・・・間違いなく、そいつが全ての元凶だ」

それを言いながら、月夜自身信じられないような気持ちだった。サーシャの言葉ではないが、月夜は確かに唯一無二の存在で、似たような過程で生み出された生物・・・アダムやイブなどといった生物はいたが、月夜程の力は持ち合わせてはいなかった。だがしかし、月夜とほぼ完全に同じ生物がいる。それは言ってしまうえば、世界を消せる力を持っている者がいるということだった。

「まさか、そんなことが・・・？分かった、すぐに調べてみる」

目が覚めたように、ランスは了承の言葉を口にする。それに対し、月夜は言いようのない不安を感じ電話を切る前に最後に言った。

「気をつけるよ・・・死ぬな」

「そう簡単には死なないさ、らしくないなそんな言葉。それじゃ、追々連絡する」

そう言い残し、ランスは急ぐように電話を切った。ツーツー、という受話器から吐き出される音を聞きながら、嫌な感覚を拭えずに月夜も受話器を置いた。

「ランス＝レンフォードです、失礼いたします」

ノックをしてから、豪華な作りをしているドアを開け部屋にいる人物に一礼をする。男は椅子に腰掛けて、待っていた、と言わんばかりにランスを見る。

「そうかしこまることでもないだろう？急な用事とはなんだね」

威厳の中に親しさを混じえる男の言葉に、それでも丁寧なランスは口を開く。

「先ほどは電話でしたので、詳しいことを言えずに申し訳ありませんでした。・・・単刀直入にお聞きします、戦時の例の研究についてですが・・・二人目がいたのですね？」

その言葉に、男は多少顔色を変えて口を開く。

「ああ、とはいえ実は私も詳しく知っているわけではない。確かテイアーナ君がいる研究所の地下に監禁されているはずだ、気になるのならば行ってみるといい。しかしまた、どうして急にそんなことを聞くのだね？」

「インフィニティが狙われた事件は先日お話したと思いますが、もしかしたら最近我が軍でも起きている事件にも何か関係しているのではないかと思ひまして」

男は何かを思案してから、口を開く。

「なるほど・・・無責任かと思われるが、実は私もここ数年様子を見にいつてないのだよ。テイアーナ君にも、よろしく伝えてくれ」

「分かりました、それでは失礼いたします」

来た時と同じように、一礼をしてからランスは早々と部屋を出て去っていく。ランスは嫌な胸騒ぎを感じながら、それが監禁されている研究所へと急いだ。

「レンフォード中佐ですね、話は聞いています。右手の奥の部屋でお待ちください」

研究所の受付でそう指示をされたランスは、言われたとおりに奥の部屋に入る。そこには誰もいなく、こざっぱりとした部屋だった。その部屋は来客者用の接待部屋みたいなもので、ランスは多少の焦りを感じながらソファアに座った。

「失礼、遅れました」

待つこと数分、凜々しい声を響かせて部屋に入ってきたのは声と同じく凜々しい雰囲気を持った女性だった。ランスは立ち上がって挨拶をする。

「初めまして、あなたがティアーナ博士ですか？」

「そうです、ランスさんですよね？」

お互いが握手を交わし、向かい合ってソファアに座る。ティアーナは容姿端麗といった感じの美人だった。実年齢を感じさせない落ち着いた雰囲気と外見は、決して三十歳には見えず、十歳ぐらいはさばを読んでもばれなさそうだった。

「早速ですが、お話聞かせていただいてよろしいですか？」

「かまいません、二人目のことですよね？まず言っておきますが、あの子は特に変わった点はありません。牢の中という狭い場所にいるものの、大人しくしていますよ」

ランスにとって、その言葉は別段驚く程のことでもなかった。何か事が起きれば、軍人である自分の耳に入らないわけがないからだ。しかし、だからこそ怪しくもある。

「その子の生まれについて聞いて良いですか？」

「かまいません。あの子が生まれた・・・正確に言えば造られたのは1998年の一月、第三次世界大戦が終戦を迎える直前のことです。詳しい研究内容は言えませんが、最初の子・・・インフィニティとは多少違った造り方をしました」

ティアーナ博士の言い方から分かるように、一人目も二人目も彼女を筆頭に彼らは生み出された。もちろんそれを知っているランスは、その点に疑問や驚きを口にもすることもない。ティアーナ博士は続ける。

「単なる物質であるなら材料を同じにし、比率も一緒であればほぼ同じ物が出来るのですが・・・やはり生物的要素が混じっていたせいか、同じ作り方をしても一人目と同じものにはなりませんでした。それどころか、生物としての機能すら持っていないのがほとんどでした。それ故に、私たちは常に材料や比率を変えなければならなかったのです。・・・すいません、もしかして話題それてますか？」  
つい聞き入っていたランスは、

「いえ、重要なことだと思います」

と相槌をうった。その言葉に勢いづいたティアーナは、長々と語りだす。

「一人目が成功した時点でもはや奇跡でした。確かに生まれた時は、普通の人間の子とも同じです。しかし、彼がすさまじい力を持っていたことはあなたもよくご存知だと思います。多くの犠牲を生み、多くの批判を浴びていた私たちですが、彼の誕生によってそれが無駄にならなかつたと私たちは喜んだものです」

ここで彼女の言った犠牲とは、精子や卵子、普通の人間として生まれる可能性を持っていたものたちのことだ。

「私たちは自分の子どものように可愛がりましたが、成長してからは軍にとられ悔しい思いをしたのもまだ覚えていますよ。別にあなたに嫌味を言っているわけではないのでご安心を。それはさておき・・・二人目のことですよね？確かに私たちが作ったものは兵器なかももしれない、しかし人間の形をしているそれを力があるから、生まれがおかしいからといって危険物扱いし、狭い牢屋に監禁するのを私は納得できません。確かにあの子も強大な力を持っていますが、それを使うとは思いません。それは生み出した親として、研究者としての両側からの意見です」

ランスの反応も気にしないまま続けているティアーナは更に続ける。「確かに最近は軍内部で不可思議な行方不明者が出ているなどの事件もあります、あの子に関係ないと思いますよ。よろしければ、会ってみますか？柵越しになりますが」

ようやく一段したところで、ティアーナはランスにそう問いかける。「そうですね、会ってみなければ分からないこともあるので」

ティアーナの親心を分らないランスではない、だからといって彼女の言葉を鵜呑みにして疑惑を消すのは尚早過ぎるとランスは考え、その言葉を肯定した。

「ではついてきてください」

立ち上がった部屋を出て行くティアーナにランスはついていった。

研究所の地下、太陽の光が差し込まない暗い牢獄にその少女はいた。鉄格子が二重になっており、危険な肉食獣を隔離しているかのような感覚にとられるランス。

「今牢屋内の電気をつけますね」

そう言ってからティアーナは鉄格子の近くにあるスイッチに手を伸ばす。どうやらここは、牢の内側と外側で電気が分かれているようだった。中の電気がついていない状態では、鉄格子の内側は暗い闇で中を知ること出来ない。内側の電気がつけれ、ランスは息を呑んだ。ランスが目にした少女は、かつて夢の中で見た少女にそっくりだったからだ。

「目にするのは初めてですよ？一人目のあの子を黒い天使と名づけるのなら、さしずめ彼女は白い墮天使と言ったところですね」

優しいような哀しいような微笑みを浮かべながら言葉を発するティアーナの声は、ランスには全く届いてはいなかった。彼は、少女に目が釘付けになっていたので。言うなれば、闇夜に月明かりを受け輝く白き薔薇。透き通るような白い肌は牢屋の中にもなお美しいが、生物が持っている温かさは微塵も感じられない。流れるような長い銀の髪は目を惹かれるが、触れてしまえばその鋭さに指が切れてしまいかもしれない。青く澄んだ瞳は見ていると引きずり込まれそうになる程魅惑的だが、その奥には深海よりも深い闇をたずさえている。凜とした少女は、超然とそこに存在していた。

「おはようリミーナ、調子はどう？」

一人呆然としているランスを訝しげに思いながらも、ティアーナは牢内の少女に声をかける。リミーナと呼ばれた少女は座ったまま、歳相応な声で答えた。

「いつも通り、何も変わってないよ。そっちのお兄ちゃんは？」

リミーナの青い瞳がランスに向けられる。ランスは一瞬身を硬くしたが、その悪意の全く感じられない瞳にどこか気が緩んだ。

「初めまして・・・かな？ランス」レンフォード中佐です。その・・・君は・・・」

言いよどむランスに、リミーナは心底不思議そうな顔をする。

「初めまして、リミーナです。どうかしたの？お兄ちゃん」

「い、いや、なんでもないよ」

なんとかそう言い繕うランスだが、相手に対する不信感を拭うことは出来なかった。

（単なる偶然・・・なのか？知らないフリをしてるには、あまりにも自然すぎる。・・・そういえば、あれ自体が夢、だったんだよね。ならこの子は本当に関係ないのか・・・？）

考え事をしているランスの横で、ティアーナは心配そうにリミーナに声をかけている。

「体調がおかしくなったらすぐに言いなさいね、いつでも診てあげるから」

その声には母親のようないたわりがあつた。その気持ちを理解しているように、リミーナは無邪気な顔で微笑む。

「大丈夫だよ、ママに苦勞をかけさせるわけにはいかないから・・・」

国によって監禁されている彼女を下手に牢屋から出してしまえばただではすまない。リミーナとティアーナはお互いそれを理解していて、お互いが心配しあっているのが少ない会話からでも読み取ることが出来た。

「本当の親子のようですね」

つい口から出たその言葉にランス自身も驚いていたが、その光景は

確かに心配をしあう親子のようであった。ランスはそんな二人に、いつの間にか警戒心を緩めていたようだった。ティアーナはランスを見て、切なそうに言う。

「生み出した者、生み出された者・・・普通とは異なる形ではあるけど、私たちは親子みたいなものですよ」

そう思っているからこそ、ティアーナは辛いのだろう。この親と子の間には、冷たく無機質な鉄格子があるのだから。

「そうです・・・ね。残念ながら、僕はあなたたち親子の力にはなれませんが・・・」

この時のランスには、もう疑う気持ちはなかった。完璧に違うという証拠はないが、この人たちは違う、と心の底で思ってしまったからだ。

（やっぱり偶然、か・・・あれ？）

自分の気持ちに納得をつけそうになったランスは、一つだけ腑に落ちない点があることに気づいた。今回の犯人を示したのは紛れもなくあの月夜で、なんの証拠もなしに疑うわけがない。仮に首謀者ではなかったとしても、何かしら接点があればおかしいはずなのだ。危うくその場の雰囲気にもまれそうになっていたランスは、気を引き締めなおす。そして口を開いた。

「そういえばリミーナちゃん、最近変わったことはない？」

「変わったこと？」

本当に何も知らないような無邪気な顔を、リミーナはランスに向けてる。

「そう、例えば・・・」

そこでランスは気づいた、自分が告げる二の句がないことに。

（例えば・・・なんだって言うんだ？まさか直接聞くわけにはいかないし、こんなところにいたんじゃ世間的なことは何も知らないだろう・・・）

「例えば・・・なんですか？」

全く分からない、といったような表情をして、リミーナはランスに



問いかける。

「例えば・・・外に出たりとか」

「質問の意味がよく分かりません。外に出ようと思えば簡単に出来ますが、ママに迷惑かかるようなまねを私はしません」

その言葉に、矛盾や悪意は全くなかった。もちろん、何かを装っているようなこともない。上手い言葉が見つからずに、ランスは苦惱して、そしてようやく口を開いた。

「じゃあ、夢を見たりとかは？」

その言葉にリミーナは考え込み、そして頷いた。

「夢は見ます。夢というよりも、何かふわふわしたような感覚を伴う現実にいるような・・・そんな夢です」

「ふむ・・・」

(なんだろうこの感じ・・・何かが分かりそうで分からない・・・ともかく、今のままじゃだめだな。月夜の言葉も気になるけど、こんな曖昧な状況じゃ何も解決できそうにない)

仕方なしに、ランスは一度出直すことを決めた。

「変なことを聞いてごめんね・・・一度、出直させてもらいます。ティアーナ博士」

「だから言ってるでしょ？リミーナはそんなことをしないわ。でも、来たければいくらでもどうぞ。リミーナごめんね、後でまた来るから」

「ううん、私は大丈夫だよ」

母を気遣う子どものような微笑みを見せるリミーナ。それを目の当たりにするランスは、どうにもやるせなく、そして複雑な気分だった。

その頃、月夜宅にて。

楓の作った昼ご飯を食べながら、月夜を除いた二人はやんわりとけんかをしていた。

「楓が作った料理はおいしいわねえ、お店開けるんじゃない？路地裏とかで」

「何言ってるんですか、サーシャさんが今朝作ってくれた物には劣りますよ。カラスの餌みたいで」

ニコニコとしながら毒どころか猛毒を含んだその会話に、月夜は頭を痛ませていた。いつもは案外真面目な楓だが、毒を吐く時だけは容赦はない。サーシャはサーシャで、楓を敵視しているのかからかっているのか、どちらともとれずによく楓につっかかっていた。

「サーシャさんみたいな女性は憧れますよね、活動的でたくましくて・・・まるで男の人みたいですよねえ」

「そういう楓も可愛いわよ。小ぢんまりとしてて、無駄な脂肪がついてなくて羨ましいわあ」

大抵こういう時は、口を出すと被害に合うことを理解していた月夜はわざわざ墓穴を掘るようなまねはしなかった。居づらい雰囲気の中、一人静かにもくもくとご飯を食べる。もちろん、味はしない。

「あはは・・・」

「ふふふ・・・」

ランスとは差のある悩みだが、今の月夜にとっては十分頭を悩ませるものだねだった。

それから、何事もなく一週間が過ぎていた。忙殺されるように仕事と事件に関して調べ回っていたランスは、相変わらず確実な物を得ることができていなかった。それどころか、あれから数回リミーナの元に足を運んだランスは更に混乱しているのであった。

「くそ、全く分からない」

夜遅くに自室で悪態をつくランス。顔色は悪く、目の下には隈を作っている。

「人間の仕業じゃないなら、元より人間である僕が解決できるわけないんだよ・・・」

疲労と苛立ちから、ついランスは弱音を吐く。軍内での行方不明事件は確かにランスに関わりがあるものだが、月夜が狙われている件については実際は他人事なのだ。それを仕事と両立して調べなければいけないランスにとっては、かなり困難なことだった。少しでも解決が近づいているのならまだしも、月夜が言っていた犯人・・・リミーナに会えば会うほど、その答えが分からなくなっていた。ランスは何回か会ったりリミーナのことを考える。自分を犠牲にし、血がつながっていない親を大切にしている彼女のことを。

「彼女は嘘をついてない・・・外に出ることすらしていないはずだ。・・・なら、犯人は違うのか？」

そして同様に、月夜が嘘をつくはずがないこともランスは理解していた。月夜の情報源が確かなものである確証はないが、少なくとも完璧に間違っていることを月夜は言わない。リミーナと月夜、二人の間に挟まれたランスは大きく苦悩していた。

「情報が少なすぎる・・・行方不明者にしても軍以外では共通点はないし、そもそも理由はなんなんだ・・・？」

虚ろな頭でランスは考える。もちろんそんな状態で答えが出るはずがない。例え頭がしっかり働いていたとしても、答えを出すには情報が少なすぎた。

「あー・・・もう、くそ・・・」

（僕は何日寝てないんだろう・・・明日も仕事だったのに・・・つかれ・・・た）

ランスは机に頭を垂らし、いつの間にかすやすやと寝入っていた。

ドンドン、とドアを叩く音と、

「レンフォード中佐！」

という声が部屋に響き渡る。その慌しい声とは裏腹に、ランスはゆるやかに頭を起こす。瞼をこすりながら、迷惑そうにドアの方に声を投げる。

「どうした、こんな夜遅くに」

多少の嫌味を含みながらも、しつかりと返す辺りは幾分大人だろう。しかし相手は、軍の厳しい上下関係すら忘れたように慌て、ドアを開ける。

「大変なんです！大統領が・・・」

「大統領がどうしたって？」

勝手にドアを開けて入ってきたことを咎める余裕は、その言葉を聞いたランスにはなかった。

「大統領官邸が、何者かに襲撃され・・・」

その言葉に耳を疑いながらも、ランスの行動は早かった。

「重要度A1の警報ですぐに官邸前に招集をかける、装備もA1だ！僕もすぐに行く」

「了解です！」

その指示を聞いてからその兵士はすぐに部屋を出て走っていった。重要度A1とは国家レベルの問題事件対応のことで、それからA2、A3、B1、と続いていく。最低ランクはC3、対応する問題ごとにランク分けがされていた。余談だが、この世界のアメリカでは戦争はその上のS1、S2、S3に分かれている。

「問題続きだな、全く」

落ち着いた口調の割には、急いで椅子にかけてあつた上着を羽織って部屋を出る。多少の睡眠をとり、脳はそれなりに元気を取り戻したようだ。自室・・・実際は軍部にある士官各自に分けられた専用の部屋、から早々に出て、官邸前へと足を速める。

ランスは外に出て苦笑した。もう陽が顔を出し、時刻は朝方になっていたのだから。

「寝てたのか僕は・・・でも、これなら十分動ける」

ランスという一人から、ランス中佐という軍人に頭を切り替えた。

大統領官邸はランスがいた軍部から近く、走って数分もかからない場所だった。官邸前にはもう数十、数百という軍人が集まり、各々物々しい装備を携えている。ランスは官邸入り口から十数メートル

手前、最前列に出てそこにいる兵士に声をかける。

「状況は？」

その兵士は敬礼をしてから説明をする。

「はっ、内部の状況は詳しくは分かりませんが、大統領の部屋に大統領が捕らえられているそうです」

「いまちよく分からないその兵士の説明に、ランスは顔をしかめる。偵察部隊は出したのか？」

「いえ・・・捕らわれている大統領が、先ほど電話でそう仰っていたので。犯人により電話をかけさせられた様です。相手は、レンフォード中佐をご指名だとか・・・すいません、実は私にもよく分からないのです」

その兵士の言葉に余計頭を悩ませるランス。

「・・・要するに、僕に來い、そう言ってるんだな？犯人は」

「そのようです」

「分かった」

ランスは最前列から一步前に出て、並ぶ兵士達を見ながら声の大きさに注意して叫ぶ。

「最前列の数人は僕についてこい、残った者はここで様子を見ながら待機だ！」

案外てきとうな物言いだ、ランスにとっては適當でもあった。先ほど話していた兵士から銃を借り、官邸入り口に走り出す。選んだわけでもなく、最前列の数名がランスに続いて動き出す。ランスは中佐という比較的上の方の地位にいるが、決して一番上ではない。しかし、それでも彼の指示を的確に理解出来るものはこの軍の中では九割を越えている。それ程彼は有能だった。それ故にA1、A2レベルの問題事は彼を中心に軍が動く。

(全く・・・損な役回りだと思ふな)

そんなことを思いつつ、入り口を抜け大広間を抜け・・・大統領の部屋の前に着いた。もちろん、先ほど来た数人もついて来ている。ランスは既に事の奇怪さに気づいていた。そして、ぼつりと漏らす。

「なんだこの静けさは・・・？ここまで何も無いなんて、中で一体何が起こってるんだ」

ランスは背筋に流れる冷や汗に嫌な顔をし、部屋の外側から中の様子を探ろうと聞き耳を立てる。物音はしない、自分自身の呼吸の音ですらひどく耳に聞こえてしまう感覚に、ランスは嫌な予感を拭えなかった。

「こうしていても仕方ない・・・か」

ランスは自分に言い聞かせるようにした後、意を決してドアを開ける。後ろに続いている兵士達に比べれば、銃一つという心もとない装備だが、ランスにとってはそれだけで十分だった。

「命のやり取りに重々しい装備はいらぬ、戦争でなければ銃だけで十分だ」、それが、彼の持論だからだ。

ドアの向こうに待っていたのは、椅子に腰掛ける一人の男性だった。部屋は薄暗く、シルエットしか見えない。しかしランスにはそれで分かった、そこにいるのが、大統領だということ。を。

「・・・？ご無事でしたか」

ランスは部屋に入り、そしてその部屋の異常な寒さに気づいた。気温が低いわけではない、その部屋だけが異質な空間のように、現実世界から浮き彫りにされてしまったような、そんな寒さだった。張り詰めている空気の中、ランスは変な感覚を肌を感じながら、無言で椅子に座っている大統領に近づく。

「一体何があつ・・・！？」

薄暗い部屋の中、近づいてやっと視認することが出来た。瞬時に、ランスは見なければ良かったと後悔した。椅子に座った男性は、胸部を赤く染め上げ、既にこときれていたのだから・・・。その死体から、ランスは目を離すことが出来なかった。見たくないのに、目も体も動かない。

「何が・・・？そんな、そんな馬鹿な・・・」

今は亡き父の友人、そして自分によくしてくれた恩人・・・ランスは今、その男性の死体をただ見ることしか出来なかった。人の死は

いつだって見慣れない、赤の他人でも仲の良い知人でも・・・ランスは多くの人の死を見てきたが、いつだって見慣れたことなんてなかった。軍人としては失格かもしれない、しかし、それは子ども頃の純粋な夢を失ってしまった今のランスにとって、かけがえのない大切な感情だった。

涙は流さない、泣いてしまえば自分は何も出来なくなってしまうから・・・ランスは瞬時に思考を切り替え、全神経を使いその部屋を注意深く見渡す。薄暗い部屋の中、視覚ではなく研ぎ澄まされた肌の感覚で、ランスはそれを見つけた。

「出て来い、そこにいるのは分かっている」

自然体で椅子の後ろに銃を構えるランスの動作には、怒りもなく、哀しみもない。椅子の後ろに隠れていた人物は、無言でその姿を現した。

「・・・お前は」

薄暗くて顔は見えない、しかしランスにはそれが誰だかわかってしまった。そいつは超然とそこに佇み、静かに笑っていた。

「やっぱり・・・そうだったんだな？」

相手は無言でランスを見ている。その視線に含まれる物は、嫌な生暖かさだった。

「君を・・・僕は殺す。国家反逆罪だ、リミーナ！」

ランスは向けていた銃を発砲する。もちろんそんなものが通用するほど、リミーナが甘い相手ではないことをランスは理解している。

当然のように、リミーナはゆっくりとこちらに歩いてくる。弾は命中している、しかし彼女に傷はつかなかった。一歩ずつゆっくりとした足取りで間合いを詰めていくリミーナ。ランスは焦った様子もなく、弾が切れるまで撃ち続ける。リミーナが四歩程歩いた時に、ランスの後ろのドアが開き、完全武装した数人の軍人が部屋に飛び込んできた。瞬時に敵を判断し、各々が持っている武器をリミーナに叩き込む。何百発の弾が部屋を蹂躞し、破壊尽くしていく。ランス達は煙で何も見えなくなった部屋を飛び出し、とどめとばかりに

バズーカを部屋に撃ち込む。部屋は大爆発を起こし、外で待機している軍人たちは何事かとその爆発した一部を凝視する。

「これで・・・終わってくれば楽でいいんだけどね」

小さく呟いたランスの独り言は、周りにいた数人の部下が切り刻まれる音にかき消された。悲鳴はなかった。ただ、どしゃ、と物が地面に落ちた音が響いただけだった。

「やっぱり、全く無駄みたいだったようだね・・・」

ランスはそれを予想していた為、大して取り乱しもせず、すぐ近くに立つ少女に話しかける。少女は楽しそうに笑みを浮かべ、ランスを見上げる。

「分かっていたのならなぜやったの？」

「少しでも可能性があるのなら僕らはやらなければならぬ。仕事だから、な」

ただの肉片と化して地面に落ちている元仲間を、ランスは哀しそうな目で見る。

「やっぱり、あなたは違うのね。あなたは私の見込みどおりの人間だわ」

「嬉しくもない褒め言葉として受け取っておくよ」

ランスは死を身近にしても平静だった。多くの人の死は、彼自身の死の観念を大きく変化させてしまっているのかもしれない。

「そう・・・残念だけど、あなたはここで殺さない。一緒に来てもらうわよ」

「冗談、誰が一緒に行くものか」

リミーナの誘いを、ランスは跳ね除ける。リミーナは本当に楽しそうに顔を歪ませ、言う。

「冗談を言っているのはあなたでしょ？」

「僕は冗談なんて・・・な・・・？」

くらり、とランスは頭が揺れる感覚を感じる。脳を直接手で揺らされているような、気が狂いそうな感覚だ。

「どちらにしても、ここでは外野がうるさすぎるわ。行きましょう」



リミーナは倒れそうな感覚に苦しむランスに触れた。リミーナとランスの体は空気に溶けていき・・・そして姿を消した。

子どもの頃、戦争を失くしたいと心から願っていた。誰かが死ぬのが嫌で、誰かが殺すのが嫌だった。大人になって偉くなれば、人が争わない世界を作れると僕は信じていた。でも、それを叶わない幻想だと分かってしまったのはいつの日だっただろうか？

初めて人を殺したあの日？仕事に忙殺されて何も出来ないと感じてしまったあの日？その全てが、僕を変えるには十分過ぎるほどだった。何をしても人は争い、殺し合いをする。何のために？

護るために、生きるために、生物として勝ち上がるために。人は戦争の哀しみを忘れていく、人は誰かが死んでいく辛さを忘れてしまう。そして僕らはまた戦争を起こす、どうしようもなく意味のない人の死を大量にはらむだけの負の歴史を刻んでいく。

力があれば、世界を変えられる。人としてではなく、神としての力を・・・僕はいつから、そんなことを思い・・・そして、あいつに嫉妬をしてしまったのだろうか。

『なら、あなたにも力を上げるわ』  
『ならない、僕は力なんていらない。』

『でも彼は言ったわ。破壊する力だけが全てじゃない、護る力だつて力なんだ。』

僕にはそんなこと言えない、出来ない。僕は・・・きっと全てを壊してしまうだけだ。この、醜い世界を・・・。

『それでもいいじゃない。人間に生の救いがなければ、死の救いしか残っていないわ』

死ぬことはだめなんだ、生きているから・・・僕らは人間でいれるんだ。

『ならあなたの夢は一生叶わない、力なき者には夢を語る資格すら

ないわ』

僕は人間だ・・・人間なんだ・・・出来ないことは、たくさんある。

『本当に？しっかりと自分の姿を見てみなさい』

自分の・・・姿？

自分の手を見てみた、その手は多くの人の血によって濡れていた。

自分の足を見てみた、その足には多くの手が絡みついていた。それに恐怖し、手や足を振ってみたけどそれはとれなかった。いや・・・

それは自分の体の一部かと思うほど、違和感のない物になっていた。

『あなたは人間じゃない、もう人間には戻れない』

やめる・・・やめてくれ・・・。

『あなたはもうこちら側の生物なのよ』

やめる・・・やめ・・・て。

小さな子どものように泣き叫ぶ。現実には辛すぎて、自分が醜すぎて、目をつぶってそれを頑なに否定することでしか僕はもう生きれない。

『手を、とりなさい。楽になれるわ』

意思とは裏腹に、僕はそのてをつかんでいた。苦しくて哀しくて・・・助けて欲しかった。

『今は休みなさい・・・ゆっくりと、ね』

その温かい微笑みを見ながら、僕は安心感を覚えたのと同時に、もう戻れないことを自然と理解していた。

## 覚醒（後書き）

一話一話が長いせいで、まだ十話目だというのがにやたら長く感じて  
しまいますね・・・——  
いい感じに事件性が高まってきました、どうなるランス・・・的  
な  
感じで、はい（・・・）

## 迷い

十月、まだまだ暑い日もあるが夏の面影は大分薄れ、季節は完全に秋へとなりつつあった。そして温度変化の多い季節の境目といえ、体調を崩しやすい時期でもある。月夜もまた、その内の一人となっていた。

月夜は体温計の表示を見つめながら溜め息混じりに呟く。

「三十九度二分・・・なんだこりゃ」

起きた時から体の不調を感じ取っていた月夜は、その数値を見て更に気が重くなつた。別段無理をして学校に行かなければならない理由があるわけではないが、だらだらとした学校生活が結構お気に入りな月夜としては休むのもなんとなく嫌だった。

「まあ大丈夫だろ、人間じゃあるまいし」

今まで風邪をひいたことのない月夜は、体の重さを感じながらもどうにかなる、と自分を納得させ着替えて部屋を出る。月夜は体温計で温度を測ること自体がほとんどなく、その知識はテレビから取り入れたものだった。

リビングには既に着替えを終え、朝食を作っている楓がいた。

「おはよう、今日はちょっと遅いね」

リビングに入ってきた月夜に声をかけてから、朝食作りに専念する楓。

「おはよう、毎日一緒ってわけにもいかないさ」

平静を保とうとしても、月夜の声には調子の悪さが含まれていた。月夜はなんとなく楓に気づかれるのを嫌だと思ったが、幸い集中している楓はそれに気づくことはなかった。朝食はすぐにできて、テーブルの上に並べられる。月夜は食欲があまり湧かなかつたが、なんとか全て平らげた。

「ごちそうさま、っと。サーシャはまだ寝てるのかねえ」

不意に言った月夜の言葉に、楓は興味ないといった感じで返す。

「さあ？そんなこと知らないよ」

相変わらず、サーシャと楓は仲が悪かった。正確に言えば、サーシャはただからかっているだけで別に楓を嫌悪しているわけではないのだが、楓はそんなサーシャが好きではなかった。

「ごちそうさまー、ほら、月夜も片付けぐらいは手伝ってよね」  
「ああ」

使い終えた食器を洗面台に持っていき、楓と月夜は並んでそこに立つ。楓が洗い、月夜が拭く、それは日常のことなのだが・・・いつもと違う月夜は、何度か食器を落としそうになっていた。

「どうしたの？体調悪い？」

いつもと様子が違う月夜に、楓が気遣う声を上げる。案外鈍い楓だが、そういうところには結構鋭かったりする。

「いや、ちよつと手元が狂ってるだけ、大丈夫だよ」

心配させないように苦笑しながら言う月夜だが、手元も足元もふらついていて危うい感じがする。

「本当に大丈夫？何かあるんだったら私に言ってね」

楓の気遣いの言葉が心に染みた月夜は、尚のこと心配はかけさせまいと元気な素振りを見せる。

「大丈夫大丈夫、急がないと遅刻するぞ」

実際時間に余裕はあったが、楓の注意をそらす為の月夜なりの言葉だった。

「そうだね、急いで片付けちゃおう」

「おー」

片付けを早々に終わらせ、ゆっくりとリビングでくつろいでから家を出る二人。登校中もふらふらとして足元が心もとない月夜だったが、なんとか学校にたどり着いた。

それからは何事もなく日常が流れた。月夜が授業中に寝ているのはよくあることなので特に誰も気にしなかった。時折おかしい挙動や言動もあったが、誰に悟られることもなく昼休みとなった。

いつもの様に購買部で昼ご飯を買ってから、利樹・紫の二人を含めて月夜・楓の四人は屋上に向かう。その間もふらふらとしていた月夜は、

「なんかの宴会芸か？」

と利樹に突っ込まれていたりもした。

屋上についた四人はいつものように柵付近に陣取り、各々昼食をとり始める。月夜はいつもより遅くゆっくりとパンをかじっていた。

「大分涼しくなってきたよな、冬場は昼飯どうする？」

同じくパンをかじりながら利樹がみんなに言う。

「そうね・・・寒くなったら、屋上は少し辛いかもしれないわね」

「うーん・・・私たち大体ここだもんね」

困っているわけでもないが、少し悩むように言う紫と楓。

「だよなあ、しっかし時間がたつのも早いもんだよ」

高校生になってから早半年。利樹の言葉を聞きながら、短い割には色々なことがあったもんだ、と月夜は思っていた。

「いつまで俺らも一緒にいれるんだろうな・・・」

利樹のそんな嘆息混じりの呟きに、一人ゆっくりとパンをかじってた月夜が口を開く。

「いつまでも一緒だろ、別に。ただ会える時間が短くなるだけだろ」  
当たり前前のことを当たり前前に言う月夜。しかしそんな当たり前を見逃していた三人はしばし呆然とした。

「ははっ、月夜の言うとおりだよな。俺らしくもないセンチメンタルなことを言っちゃったな」

真っ先に口を開いたのは吹き出しながら言う利樹だった。

「そうだよな、別に永遠の別れになるわけじゃないし」

「よく考えなくても分かることだったわね、いつでも会えるもの」  
笑い合う三人、その中でそれを言った本人の月夜は多少複雑な思いを感じたが、悟られないようにおどけた調子で言う。

「秋は馬鹿すら詩人にする、ってとこだな」

「馬鹿とはなんだ馬鹿とは」

利樹の攻撃を避けながら苦笑する月夜、その思いは複雑だった。

（考えても仕方ないことかもしれないけど・・・人間じゃない俺は、本当にいつまでもみんなといれるのかな？）

だからこそ今を大事にしたい、と月夜は思っていた。その後はいつものように利樹の馬鹿話などにみんなでつつこんだりして、昼休みは終わりとなった。

体の調子の悪さを感じながら、月夜はなんとか五限目までたどり着いた。実はここが一番の難関だということを、月夜は理解していた。大抵の学校は、秋・冬辺りはマラソンの授業が増える体育、もちろん月夜の学校もそれに該当し、そして五限目は体育でマラソンだった。いつもの月夜にはマラソンなんて屁でもないものだが、さすがに今日は死にかけていた。

「あー・・・やべー・・・」

月夜は誰にも聞こえないように呟きながら、校庭の外周を走る。周りにはだるそうにしている生徒が数多くいるが、その中でも月夜は特にそうだった。元々授業態度の良くない月夜は、体育の教師に怒鳴られる。

「こらー！しっかり走らんか！特に月夜、お前もつと走れるだろ！？」

今にも追いかけてきそうな教師を横目で見ながら、月夜は少しだけ速度をあげる。本気を出して早く終わらせたい気持ちに駆られたが、さすがにそう何度も人間離れしているところを見せるわけにもいかない。更に今の月夜は、ここまでの授業でたまった疲労があり、立っているだけでも結構きつかった。

「これは・・・もちそうも・・・ない・・・なあ」

周囲が回っているような感覚を月夜は感じた。頭がくらくらとして、地に足がついていないような感じ。誰かの声が聞こえた気がしたが、月夜の意識は急速に闇にのまれていった・・・。

音のない世界に、小さな少年と、二十代程に見える白い白衣を着た女性がいた。女性は少年の頭をなでながら何かを言っている。遠くのように近くにいるその女性の言葉は、残念なことに俺には聞こえなかった。少年は無表情な顔をしたまま、ただ何もせずに頭をなでられている。傍目から見れば、それは親子に見えた。優しそうな女性に無表情な少年、違和感を伴う不釣り合いさがあるのに、なぜかそれはとても微笑ましく思えた。

二人は俺に気づかない、そして俺もきつと大切なことに気づけていなかったのだと思う。胸の辺りが切ない。俺は親に優しくされた覚えなんてないし、周囲の大人にだってされた思い出はない。忘れてしまっているだけなのかもしれないけど、だから、そんな微笑ましい光景が俺の胸を苦しめた。きつと夢を見ているのだろう、なら・・・もう少し、あの二人を見ていても、良い気がした。

頭をなでられている感触に、月夜は目を覚ました。

「あ・・・う・・・？」

体を起こそうとしたが、体は言うことをきいてくれなかった。

「起こしちゃった？・・・大丈夫？」

月夜の傍らに座る楓が、心配そうに顔を覗き込む。月夜はぼーっとしながら答える。

「ん・・・楓？」

自分の状況がいまいち分かっていない月夜に、楓が怒ったように言う。

「体育の時に倒れて保健室に運ばれたんだよ、覚えてないの？・・・どうして無理するかな」

ああ、そうだった、と月夜はうつろな頭で考えながら、右手で楓の



頬に触れる。

「悪い、心配かけたくなかったんだけどさ……」

「黙ってる方が心配だよ、調子悪いのは知ってたけど……言い過ぎて、前みたいにけんかするのは嫌だったから」

辛そうに言う楓を、月夜は抱き締めたい衝動に駆られた。しかし、体が思うように動いてくれずそれも叶わなかった。

「ごめん……大丈夫だと思ったんだけどね」

だから、頬に触れている手で頬を撫でながら、謝罪の言葉を月夜は言った。

「私ってそんなに頼りないかな……？体調が悪い時ぐらいは、頼ってよ」

泣き出しそうな楓に、月夜は焦りながら言う。

「そんなことない、俺はいつだって楓を頼りにしてるよ……だからこそ、心配はかけたくない」

矛盾してるな俺、と月夜は思いながら密かに嘆息する。

「たくさん心配かけさせてくれていい、私は迷惑だなんて思わないよ……月夜が辛いのは嫌だから」

「俺も楓が辛いのは嫌だな、だから……ごめん」

お互いがお互いを想い合い、それ故に二人はすれ違いが多い。近いからこそ、二人はいつでも迷いつばなしだった。月夜はなんとか体を起こし、楓を抱き寄せる。とっさのことに楓はベッドに座っている月夜の上に倒れこむ。

「月夜……？」

不思議そうな顔をする楓、その顔は赤くなっている。

「特に深い意味はないんだけどね。ただ……こうしてる方が安心する」

元より抱き締めたいと思っていた月夜は、体が多少動くようになってたのでそうしたまでにすぎなかった。

「そっか……私も安心する……かも」

言いつつも顔が真っ赤になっている楓。二人の体は密着し、お互い

の熱くなった体温が相手に伝わる。顔の距離は、十数センチもない。自然と月夜の顔も赤くなっていた。

「こんな風に近くで楓の顔見るの何回目だろうな」

苦笑しながら言う月夜。視線は楓から外さないままじーっと見ている。

「分からないよそんなの・・・子どもの頃からの付き合いだもん」  
楓も同じように月夜を見つめながら、恥ずかしそうにそう呟く。

「だよな、俺も覚えてない・・・楓」

抱き締めている月夜の腕に自然と力がこもる。月夜が何をしようとしているのか察した楓はぎくしゃくと体を動かす。

「月夜？待って・・・」

「嫌？」

お互い鼓動が高まり、その音が相手に聞こえないかドキドキする二人。

「嫌じゃ・・・ない、けど」

今までにない程顔を赤く染めながら、楓がたどたどしい声で呟く。

「けど・・・？」

月夜は落ち着いた声で聞く。内心はかなりドキドキしているが。

「心の準備が・・・それに学校だし！」

「でも、だめ」

月夜が珍しく強引に楓の言葉を遮り、顔の距離を縮める。

「あうあう・・・」

楓は言葉にならない言葉を吐き出しながら、ぎゅっと目を閉じる。

二人の唇が重なり合う、その時間は短いようで、永遠にすら感じた・・・わずか数秒間のキスの後、二人は唇を離れた。

「えーと・・・うん」

顔を真っ赤にし、俯く月夜。楓もようやく目を開け、月夜同様に顔を真っ赤にして俯く。

「・・・強引だね」

楓の言葉に、月夜はびくつと体を震わせる。汗をたらたらと流しな

がら、月夜は聞く。

「だ、だめだった……?」

その言葉に楓は頷く、月夜の汗は滝に昇格していた。

「確かにちよつと、いや強引だったかもしれないけど……楓もそんな気持ちだったのかなあなんて思っただももしかしたらそんな気持ちになつてたの俺だけだったのかもしれないけど、いやもしかなくとも俺だけだったんじゃないかなあなんて今更思うし、いやほんとごめん楓」

明らかな動揺を見せて何を言っているか分からなくなりつつある月夜を見ながら、楓は、

「くすくす、冗談だよ」

と吹き出した。

「……え?」

呆然と呟く月夜に、楓が少しだけ意地の悪い顔で言う。

「待つてくれなかった仕返し……本当は、嬉しかったよ」

満面の笑顔で言う楓に月夜は安堵し、同時に自身も嬉しくなった。でも、と楓は続ける。

「次は、もつと雰囲気のある場所だね?」

「はい、反省します……次?」

しばしの間月夜の思考が止まる。楓は赤くなって俯きながら、何も言わなかった。

「うん……そうだな、がんばる」

月夜は微笑みながら、ようやく口を開いた。二人の間に不思議な空気が流れる。それは決して嫌なものではなく、二人はそれを心地よく感じた。そういえば、と月夜が何か思い出したように口を開く。

「楓授業はどうしたんだ?」

「もう放課後だよ?月夜が起きないからここで待つてたの」

結構な時間寝てたのか……と呟きながら、楓に言う。

「帰ろうか」

「そうだね」

楓はそう返し、月夜から離れて立ち上がる。月夜の鼓動は未だに高鳴っていて、離れるのを名残惜しく感じた。まあ、誰かに見られたら大変だしなあ、と思いながら、立ち上がるうとする。

「……っ」と

まだ完全に自由に動いてくれない月夜の体は、地に足をついた瞬間によるける。

「大丈夫!？」

楓になんとか支えられて、地面との激突だけは避けた。うまく動かない体にもどかしく感じながらも、たまにはこういうのもいいか・・・、と月夜は思った。

「悪い、よければ家まで肩貸してくれない・・・?」

「全然大丈夫だよ。ほら、ちゃんとつかまってね」

楓に助けられながら、月夜は楓の肩につかまり、歩き出す。月夜より幾分細い楓の肩は、頼りなさそうだがしっかりと月夜の体を支えている。

「やっぱり楓は細いな、ちゃんと食べてるか?」

月夜はさつき抱き締めた時の感触を思い出す。別に太っているほうがいいというわけではないが、なんとなく心配になってしまった月夜だった。まあ、出るところはそれなりに出てるわけなんだけど・・・。

「月夜も十分細いでしょ・・・でも、やっぱり男の子だね。私よりがっちりしてるもん」

楓の言葉に月夜は少しだけ顔を曇らせた。

「もつと筋肉あったほうがいいかな?」

「ないよりはあったほうがいいかもしれないけど、私は全然気にしないかな。月夜は見た目頼りなさそうだけだね」

笑いながら言う楓に、月夜は、むっ、とうなる。

「でも月夜が強いことは知ってるよ、私をちゃんと護ってくれることもね」

どことなく嬉しそうに言う楓に、月夜もなんとなく嬉しくなった。

学校を出て歩きながら、月夜は不意に小さくもらした。

「筋トレでもすつかなあ……」

「何か言った？」

「いや、なんでもないよ」

中身はともかく、外見ぐらいはもう少し男らしくなりたいなあ、と思いつながらこぼした月夜の言葉は、幸い楓には聞かれていなかった。その後も特に内容のない会話をしながら、二人は家路についたのであった。

「うあー……今日は疲れた……」

月夜はぐったりとしながら自分の布団に横になっていた。家に着いた瞬間サーシャに、

「ラブラブねー」

なんてからかわれたり、その後始まった楓とサーシャとの冷ややかなのに熱い戦いに巻き込まれたり……体の調子の悪さも重なって月夜はかなり疲労していた。時刻はまだ八時、寝るにはいささか早すぎる時間だが、夕食を食べ終えた後楓に体温を測られ、出た数値が数値だけに薬を飲まされたあげく部屋に早々と放りこまれたのだった。

「いやまあ、いいんだけどさ」

実際に疲れている月夜にしたら、それはありがたいことで別に嫌なことではなかった。ただ問題があるとすれば、二人のいざこざに巻き込まれることや、朝よりも体温があがってることぐらいだ。無理が祟ったせいも相変わらず体の動きも鈍く、少し気を緩めたらそのまま寝てしまいそうだった。

「だるいだるいだーるーいー……」

別にそのまま眠ってしまってもいいと月夜は思ったが、なぜか意識はとばなかった。体は鈍くなってる割に、感覚は変に鋭くなっているのを月夜は感じる。今は寝てはいけない、何かを待たなければい

けない、そんな感覚が体を支配しているかのような感じだった。

数分後、月夜の部屋に楓がやってきた。ランスから緊急の電話が来たので、それで月夜を呼びに来たのだった。月夜はだるい体を起こし、楓の手を借りてリビングにある受話器のところまで行く。楓は重要な話を聞くわけにはいかない、と気をきかせてリビングを出て行った。そして月夜は受話器をとった。

「ほい、月夜だけど」

「ああ、ランスだけど」

月夜はこの時妙な違和感を感じた。いつも通りのランスの声だったはずなのに、その声は違う人物のように聞こえた。

「何？緊急の用事だって聞いたけど」

（風邪ひいて感覚狂ってるのかな）

きつと気のせいだな、と月夜は納得し、用件を聞いた。

「単刀直入に言うよ、大統領が暗殺された・・・それだけじゃない、その犯人にアメリカ自体が乗っ取られそうになっている。月夜の助けが必要なんだ」

言葉の重大さとは裏腹に、淡々とランスは語る。もはやそれは軍人のランスどころではなく、冷酷な機械のような寒々しさを感じさせる。

「なんだって！？・・・犯人はやっぱり、二人目、なのか・・・？」  
事の重大さに気をとられ、月夜がランスのそれに気づくことはなかった。ランスは淡々と続ける。

「やっぱりそうだったみたいだ、僕自身信じられなかったんだけどな。すぐにでも来て欲しいんだ、もちろん金は出す」

少なくとも今はお金のことなんてどうでもいいはずなのに、それを当たり前のように言うランスはやはりどこかおかしかった。

「分かった・・・明日には行くよ、その間死ぬなよ？」

「僕が死ぬわけないだろ？つまらないことを言うなよ」

その言葉を聞いてさすがにランスの言動がおかしいことに月夜も気づいた。

「・・・何かあったのか兄貴？変だぞお前」

月夜の心配と疑念の混じった言葉に返ってきたのは、数秒の沈黙だった。

「・・・何言ってるんだ月夜、僕はいつも通りだよ。じゃあ、家で待ってるからな」

数秒の沈黙を破った後に、ランスはすぐに電話を切った。ツーツーという電子音を聞きながら、月夜は嫌な予感を感じていた。

「あの兄貴が・・・まさか、な」

自分に言い聞かせるように言ったその言葉は、虚しく部屋に響くだけだった。

「楽しみにしてるよ、月夜」

笑っているような泣いているような表情をしながら、ランスは電話機を見つめていた。

次の日、まだ陽も昇らない時間に月夜は目を覚ました。町はまだ一部を除いて眠りについている。そして、月夜がいる家も例外ではなかった。

「さてと、行くか」

体のだるさはまだ多少残っているが、昨夜の薬が効いたせいか調子はさほど悪くなかった。布団から起き上がり、月夜は覚悟を決める。もしかしたら死ぬかもしれない、そんな弱気な気持ちが始まる。ほど、今回は相手が悪かった。今まで通りでいったら、確実に命はない。なぜなら相手は周囲までも巻き込み、月夜の命を狙っている。さらに国一つ乗っ取るという常識では考えられないことを平然とやってのけているのだ。だからこそ、月夜は楓を連れて行くことは出来なかった。

「ほんと、中途半端だよな俺・・・ごめんな楓、俺は君を護れない」

哀しそうに呟いた後、月夜は部屋を出た。どうしても楓に余計な心配をさせたくはなかった。黙って出て行ってしまっても、結局楓は心配することを月夜は理解していたが、楓を巻き込むぐらいならそちらの方がましだと月夜は考えていた。未練がないとは言えない、しかし早くここを出なければ出ることが出来なくなってしまう。だからこそ、月夜は胸に残る感傷を捨て玄関から外へ出ようとした。「どこに行くの？」

玄関を前にして、そんな声が響いた。月夜が幼い時から馴染みのある声・・・月夜から少し離れた位置に楓はいた。

「朝の散歩でもしようかと思つて」

振り返らずに月夜は言う。平静を装いつつも通りに出した自分の声が、月夜にはえらく無機質なものを感じた。

「・・・ちゃんと帰つて来るよね？」

「馬鹿、散歩だつて言つてるだろ？すぐに帰ってくるよ・・・すぐにさ」

楓の言葉を笑い飛ばした月夜だが、本人にはうまく笑えているかどうか自信がなかった。

「ちゃんと帰つてこないと・・・もうご飯作つてあげないんだからね」

楓の涙声を聞きながらも、月夜は振り返ることをしなかった。代わりに、困ったように優しい声で言う。

「それは大変だな。まあ待つてるよ、すぐ帰ってくる、絶対だ」

月夜は玄関の取っ手に手をかける。自然と心は落ち着いていた。

「・・・いつて、らっしやい・・・！」

切なくも、強い楓の言葉に月夜は背中を押されたような気がした。

「行ってくる・・・！」

月夜はそれ以上何も言わなかった。ドアを開けて、まだまだ暗い外へと歩き出す。ドアの閉まる音を聞きながら、楓は俯き、そして静かに泣いていた。



「どうしてお前らは、そろいもそろってこんな早起きなんだ？」

家から数歩出たところにいるサーシャに月夜は疑問の声を上げた。

「お互い、好きな人に対する女の勘、ってやつじゃないかしら」

いつもの笑顔を浮かべながら、サーシャは言う。月夜は溜め息をつきながら返した。

「ただ単に俺が単純って理由じゃなくてほつとするよ。まあいいや、楓のこと頼むよ、サーシャ」

「帰ってきたらしっかりお代はもらうからね、存分にがんばってきなさい」

「おう、またな」

サーシャはその言葉に返事をせず、代わりに片手を上げてひらひらと振る。

(全く・・・どいつもこいつも)

自然と笑ってしまいながら、月夜は走り出す。車よりも速く、風よりも疾く。そして背中から小さく生え出た羽を緩やかに羽ばたかせ、月夜は自分の故郷と呼べる地から飛び立った。

それから数時間後、月夜はアメリカの地に立っていた。場所はランス邸前、日本とは時差があるアメリカではもう陽が傾いていた。

「随分懐かしいな、こうやってランスの家を見るのも」

最後に見たのはいつの時だっただろうか？と考えながら、今はそんなことを考えている場合じゃないか、と呟きながら月夜はランスの家に入る。玄関のドアは開いていた、呼び鈴を押そうかと思ったが、月夜はめんどくさくてそれをしなかった。

「しっかし広いなあい」

中に入ったことのない月夜は中の構造が分からなかったが、そこは得意の人間離れた能力でランスがいる位置を把握してそこを指した。そしてたどり着いた部屋のドアを、一度だけノックをする。「どつぞ」

部屋の主の了解を得て月夜は部屋の中に入る。見た目は普通の部屋のはずなのに、まるで異界にでも踏み入れた奇妙な感覚を月夜は感じた。

「待ってたよ、月夜」

椅子に座り、月夜を見ているランス。その表情はどこか儂げで、愁いを帯びていた。

「・・・誰だ、お前」

月夜はとっさにそう言っていた。ランスは不思議そうな顔をして口を開く。

「どうしたんだいきなり？僕だよ、ランスだよ」

「違う、お前はランスじゃない」

目の前にいる人物は確かにランスだった。声も仕草も、姿形も全てがランスそのものだった。しかし月夜はそれをランスとは認めなかった。

「僕は僕であつて、何者でもない。気でも狂つたか？」

「確かにお前はランスだよ、でも違う！あいつはそんな・・・そんな人間じゃない」

目の前のランスを否定し続ける月夜に、困つたような表情をしながらランスは聞く。

「じゃあお前は僕の何を知っているんだ？お前は僕の何を理解して今の僕を否定している？」

「何かが違う、お前は俺が知っているランスじゃない。軍人のあいつでも、兄貴としてのあいつでもない」

怒りのこもった目で月夜はランスを見る。ランスは溜め息をつきながら、やれやれと言葉をもらした。

「じゃあ今の僕はなんなんだろうな？冷酷な自分を演じていた軍人ランス？兄貴として面倒見が良かったランス？・・・そんなものは全て表面上の僕でしかありえない、本当の僕はこの世界に苛立ちを覚えていた。何も変わらない、変えられない。そして変えようともしない人間にだって・・・。何より僕が一番嫌いだったのは、何も

変えることができない僕自身の弱さだ。・・・変えられないのなら、  
全て無くなってしまうばいい」

「誰よりも苦しんで、誰よりも傷ついて・・・それでも誰よりも人  
間が好きで、誰よりも人間を護りたいって思ってた兄貴・・・もう、  
いないんだな」

心から哀しそうに月夜は言った。そしてその言葉は、今のランスに  
対する月夜の決別の言葉でもあった。

「話はもう終わりだろ？ついてこいよ月夜、二人目がお前を待つて  
いる」

ランスは緩やかに立ち上がり、月夜の横を素通りして部屋を出て行  
こうとする。そんなランスに月夜は切なげに聞いた。

「じゃあ俺は、これからなんてお前を呼べばいいんだ？」

部屋の出口でランスは止まり、少しだけ沈黙した後、

「Ruין・・・ルインとでも呼べばいい」

それだけ言い残したま歩き出す。

「Ruין・・・破滅、か」

皮肉っぽく呟いてから、月夜はランス・・・ルインの後についてい  
った。どんな結果になるかは分からない、それでも月夜は進むこと  
しかできなかった。同じ生物として誤った道を進んでしまった二人  
目を止める為に、そして何より・・・大切な人たちを護るために。

「初めまして、でいいんだよな？」

ルインに案内された城のような大きさの建物の中、大広間の高い位  
置に作られた王座のような椅子にそいつはいた。そして王を護るか  
のように、数人の生物が隣に立っていた。

「初めまして、じゃないでしょうか？あなたと会うのは二度目よ、お  
兄様」

かつて遊園地で声をかけてきた雪のように白い女の子・・・リミー  
ナはそう言った。

「そうだな、そうだった・・・まさかあの時の子どもが二人目だったなんて、気づきもしなかった」

「気づけるはずもないわ、だってあなたは知らなかったんだから」溜め息をつく月夜に、リミーナが優しくそう言う。

「俺が気づけてたら・・・ランスが消えることはなかった。その償いっていうわけでもないけど、いつまでもお前みたいなのを放つてはおけない・・・ここで、終わらせる」

月夜の体力がこもる。瞳の色は黒く、深い闇に染まっていく。それと同時に、リミーナの隣にいる数人が身構える。もちろん、月夜の後ろで待機しているルインもだ。それをリミーナは片手で制しながら言う。

「待ちなさい・・・それに、お兄様にも少しは落ち着いて欲しいわ」自身の危機感など全く感じていないリミーナの言葉に、月夜は少し耳を傾ける。

「どういうことだ？」

「そうね、簡単に言わせてもらうわ。お兄様、私たちと一緒に来ませんか？あなたなら私の隣に並べる力がある」

リミーナの言葉に、側近の数人とルインがざわついた。もちろん月夜もだ。

「リミーナ様、あなたは一体何を・・・」

「黙りなさい、私はお兄様と話しているのよ」

側近の一人の言葉に、リミーナは冷たく言い放った。その言葉にざわめきは消え、大広間は静かになる。

「どうかしら？」

再度月夜に対するリミーナの言葉に、月夜は怒りを露にする。

「ふざけるなよ、散々迷惑かけた拳句、なんだそりゃ？」

月夜は感情のままにリミーナを狙い、そして力を放つ。目に見えない力の奔流は大気を伝わり、リミーナへと飛んでいく。しかし、それが彼女に当たることはなく、彼女の目前で何かに打ち消されたかのように大きな音を立てて消えた。

「交渉は決裂ね。それなら予定通り、あなたを苦しめて殺すだけだわ」

幼いその顔を歪めて笑い、青い瞳に力が宿る。

「私が直々に相手してあげる」

すつ、と上げた片手の先から白い光が放たれる。矢を太くしたような幾数もの光は、月夜目がけて襲い掛かる。

「ちっ、めんどいな」

何本かは避け、そして何本かは打ち消して月夜はリミーナ目がけて疾走した。背中から生えた黒い羽は、月夜の力を現すかのように大きくなっている。リミーナは座ったまま、顔色一つ変えずに音よりも速く迫る月夜を凝視した。リミーナの瞳から放たれた白い光は、音を超える文字通りの光の速さで月夜の腹部を撃ち抜いた。

「な・・・」

それに反応出来なかった月夜は、こぶし大の穴を腹から背中まで穿たれた。そして後ろに吹き飛ばされ、数十メートル離れた壁に背中を打ちつける。

「ぐっ・・・」

咳き込んだ口からは血液が吐き出され、一部の床を赤く染める。それを見ていたリミーナは、心底面白くなさそうに言った。

「全然つまらない、やっぱり殺すだけじゃすぐに終わってしまうわね」

月夜は痛みを感じていないかのように立ち上がり、両手を握り締める。

「本気でやらないと、さすがにまずそうだな」

そう呟き、全身の力を抜く。消し去りたい過去の感覚が、体に張り巡らされていく。言葉も気持ちも、そして自分を作っている人格さえも、闇にのまれていく。数秒後、そこに立っていたのは月夜ではなく、最凶と謳われたインフィニティ本人だった。

「くすくす・・・お兄様はやっぱりすごいわ、私ですら畏敬の念を抱いてしまう、でもね？」

二人は遠くから見つめ合う。月夜は無感情に、リミーナは興奮したように。先に動いたのは月夜だった。数十メートル程の距離では、今の月夜にはないも等しい。わずかコンマの間に月夜はリミーナの前に立ち、右腕を振り下ろしていた。王座どころか床そのものを抉る一撃を、リミーナは横に飛びのいて避け、呟いた。

「それじゃ私には勝てないわ」

月夜と対照に、リミーナの背中からは白い翼が生える。それを見た数人の側近はすぐさま王座から飛び退き、先ほどまで月夜がいた位置、ルインが待機している場所へと逃げる。もはや人間には見えないうい攻防、月夜は横にとんだりリミーナに横薙ぎの一撃を入れる。リミーナはそれを片手で受け止めた。しかし、月夜の手からは闇を具現化したような物が放たれていた。受け止めたリミーナの腕にそれが巻きつき、それを消滅させようとする。

「最高よお兄様！本当にあなたは！」

リミーナは叫びながら、闇が巻きついた腕を下げずに月夜の穴が開いている腹に突き入れた。そして、何も見えなくなるほどの白い光が月夜の体にまわりつき包み込む。リミーナはすぐにその腕を肩口から切り離し、瞬時に月夜から離れる。光に包まれた月夜は動かず、中の様子は全く探れなかった。

「もう、終わりよ」

不適な笑みを浮かべ勝ちを宣言したりミーナ。しかし、突然光の中から飛び出した一筋の細い闇がもう一方のリミーナの腕を肩口から切り落とした。落ちた自分の片腕を他人事のように見ながら、初めて動揺し、光に包まれている月夜を見る。

「それでも動けるなんて、なんて人……でも、これで最後」

リミーナは今までにない程の力を込めて光を凝視する。そして、強い光を放ちながらそれは爆発した。轟音と共に、眩い光の欠片が床に落ちて消えていく。立ち込めた眩い光が消え、そこに残ったのは血まみれで倒れている月夜だった。辛うじて人の原型を留めているが、呼吸はしていなく、当然のように心臓の鼓動もしていなかった。

間違はなく、月夜は死んでいた。

「ふふふ・・・腕二本なら、上出来かもしれないわね」

リミーナは背筋を流れる冷や汗に、顔を歪めた。そんなリミーナの周りに、ルインを含めた側近が集まってくる。

「大丈夫ですかリミーナ様!？」

「お怪我は!？」

「馬鹿者、見れば分かるだろ!すぐに医務室にお連れしろ!」

各々がリミーナを心配する言葉を吐く中、ルインは一人月夜だったものを見ていた。無言で見つめているルインは、怒っているような哀しいような表情をしている。それを見ていたリミーナは、先にうるさい側近たちに言い放つ。

「必要ないわ、この程度の怪我数週間もしないで治るわ。それより、少し静かにしなさい」

側近がすぐに黙ったのを確認してから、リミーナはルインに目を向ける。

「どうしたのかしら?これはあなたが望んでいたことでもあるのでしょうか?」

ルインは月夜から目を離さずに、リミーナの問いに返事をする。

「ああ、そうだよ」

「なら、どうしてそんな哀しそうな顔をしているの?」

ルインは黙っていた、それにリミーナが追い討ちをかける。

「力があるのに何もしない、世界を変えられるのに変えようとしな。そんなお兄様を、あなたは心の底では嫌っていたのでしょうか?羨ましいと感じていたのでしょうか?」

「確かに・・・そう思ってたよ、思ってたはずだった・・・月夜が、死ぬまでは!」

ルインはとっさに腕を上げ振り下ろしていた。月夜を殺したリミーナを殴るわけでもなく、かといって死んだ月夜を殴るわけでもなく・・・ただ自分を殴るために。腹部にその拳が当たる前に、その手をリミーナが横から見えない力で止めていた。

「どうして止めるんだ・・・？」

切なそうに言うルインに、リミーナは静かに言う。

「あなたの行動に意味がないからよ、あなたが死にたいのは別に私には関係ない。でもあなたにはまだ仕事が残っているんだもの、死なれたら困るわ。・・・死にたいのなら、お兄様に殺してもらいなさい」

リミーナは月夜に視線を動かす。ルインはその言葉に鳩が豆鉄砲をくらったような顔をして、リミーナにならって視線を月夜に戻す。

月夜は確かに死んでいる。体はびくりともせず、呼吸も心臓の鼓動もない。ただ一つ、あるものが動いているのに気づいてルインは驚きに目を見張った。

「羽が・・・動いてる？」

微かにだが、背中から生えた黒い羽がびくびくと動いている。

「私もそれなりに本気だったのに、お兄様はまだ生きてるわ・・・死なれてたら、予定してたことが出来なくなっただから私としては幸いだったのだけれどね」

その言葉に、ルインは嬉しいような哀しいような表情を作った。リミーナの予定してたことを、ルインは知っているからだ。

「お兄様がこれ以上苦しむのを見たくないのなら、今ここで私を殺すかお兄様を殺すかしたらいいわ。私は無理でも、今のお兄様ならあなたでもやれるわよ？」

その言葉にしばし思い悩むルイン・・・そして、口を開いた。

「どちらもお断りだ」

「そう、それならお兄様にこれをつけて、地下の牢獄にでも放り込んでおきなさい」

先の戦闘で薄汚れた服のポケットから何かを出そうとして、自分の両腕がないことに気づいたりミーナは、

「ランス、私の右ポケットに入っている物を取りなさい」

とルインに命令した。ルインは言われた通りにそれを取り出し、月夜の右手首にそれを着けた。銀のブレスレットのような形をしたそ



れは、この世の物ではない静けさを醸し出している。ルインは月夜を抱き上げ、立ち去る前に一言だけリミーナに言った。

「ランスと、呼ぶな。僕はルインだ」

「Ruinn・・・ね、今のあなたにはぴったりだわ」

リミーナの言葉に無言で返し、ルインはぼろぼろになった月夜を大切なものを運ぶかのように地下の牢獄へと連れて行った。

迷い（後書き）

すさまじく遅いながらようやくやく更新です——

希望（前書き）

注：多少グロイションもあります

## 希望

あれはいつのことだっただろうか？いつの間にか忘れてしまっていた、大切なこと……。優しい笑顔を浮かべていた女性、哀しい瞳をしながらも自分を息子のように大事にしてくれた母。そしてそんな母が、自慢げに見せてくれた生まれつきの赤ん坊……。自分にとって思い出したくない過去の中で唯一良かったのはランスとの出会いだけだとして俺は思っていたのだろう。どうして親に優しくされた記憶がないなんて思い込んでいたのだろう……。母も妹も、無感情の俺が護りたいと感じていた者たちだったのに……。

「どうして……。忘れてたんだろっな」

暗い牢獄の中で、意識を取り戻した月夜の最初の言葉はそれだった。リミーナとの戦いから一週間弱、破壊し尽くされた月夜の体はようやく元通りになっていた。

「あいつが俺を恨む理由も、なんとなく分かつちまったな……」

「ご無事で何よりですわね、お兄様」

一人呟く月夜の前に、小さな足音を響かせリミーナがやってきた。

鉄格子越しに全快した月夜を見ているリミーナの体は、まだ右腕しか治っていない。

「治り、遅いんだな」

それを見た月夜は、自嘲気味に言った。リミーナは特に気を悪くした様子もなく、淡々と言う。

「それ程お兄様が強かったということだわ、生命力もね」

「褒め言葉にもならないなそんなの。で、俺を生かしておいた理由はなんだ？お前ならとどめぐらいはさせたたる」

自分の死ですら他人事のように言う月夜に、多少温かみのある笑顔

でリミーナは言う。

「私たちと一緒にきませんか？思い出してもらえたのなら、理由は十分過ぎるほどだと思っわ」

月夜は溜め息をつきながら、右手首に着けられている銀のブレスレットに触れる。

「やっぱりお前のせいかな、勝手に人の記憶を引き出すようなことをしやがって・・・親の顔が見てみたいもんだな」

皮肉な物言いととは反面、月夜の言葉は兄妹に話しかけるような冗談混じりの言葉だった。リミーナは心外そうな顔で笑った。

「捏造したわけじゃないんだから、そう言わないでよ。それはお兄様の記憶に違いないんだから、忘れてた方が悪いんじゃない」

リミーナもまた、兄妹に話しかけるような物腰柔らかかな口調になっていた。先日殺し合いをしたばかりには到底見えない、仲の良い兄妹がそこにいた。

「まあおかげで、お前がこんなことした理由がちよつとは分かった気がするよ・・・母さんの為、か」

言い馴れない単語に、月夜は多少の感慨を覚えた。

「そうね、ママはいつだって苦しんでいる。息子は家出同然、娘は鉄格子越しにしか会えない・・・私たちを作り出した主任者だからといって、どうしてママが迫害されなければいけないの？私はママを助けない、世界を敵に回してでも」

その言葉は、決して冷酷な兵器の言葉ではなかった。一人の人間として、自分の母親を護りたいという強い願いを持った人間のそれだった。

「だからって、この国を潰すのか？そして、世界すらも」

「人間の汚さはお兄様だって知ってるでしょ？人間は学習しない・・・また戦争を起こし、そして第二、第三の私たちが作られて、また苦しむ人たちが大勢増える。それなら、全て壊してしまったほうがいい」

哀しい瞳の中に強い意志を抱いて、リミーナは言う。しかし、月夜

はそれを否定した。

「矛盾してる。確かに人は死ねば現実の辛さから解放されるかもしれない、でも、それだって結局大勢の人が哀しむ結果しか生まないんだ。自分を正当化するなよ、リミーナ」

「私と同じお兄様に言うのもなんだけど、それでも言わせてもらおうわ。兵器としての自分を捨て、のうのうと生きて来たお兄様には私たちの辛さは分からない」

「分からないし、分かりたくもない。自分が辛いからって、誰かを巻き込むことを俺は許せない」

「・・・どうしても、私と一緒に来てくれないんだね？お兄様」

青い瞳を切なそうに歪め、リミーナは呟く。

「確かに、母さんを助けたいのは分かる。人間は救いようがないのも知ってる。でも、俺はやっぱりお前とは一緒に行けない。不完全な世界が、不完全な人間が好きだから・・・そこにある日常は、大切なものだから壊しちゃいけないんだ」

自分が甘いことを言うことを月夜は理解している。自分が背負っていかねばいけない罪も理解している。それでも、月夜は人間であることを望んだ。

「そっか・・・お兄様なら、きっと分かってくれると思ってたの、でも私が甘かったんだね・・・」

落ち着いているはずなのに、抑揚のない声で言うリミーナ。その様子は、心が壊れてしまった人間のようだった。

「さようなら、お兄様・・・」

そう言い残し、リミーナはスイッチが変わったかのように、先ほどまでの兄への温かみを消した。後に残ったのは、月夜を恨んでいる冷たい雰囲気の冷たい瞳をした少女だった。

「出なさい、最高に苦しめて・・・あなたを殺してあげるから」

牢の鍵を外し、冷たい声で言い放つリミーナ。ひどい哀しさを胸に感じながら、月夜は牢を出て前を歩くリミーナについていった。

月夜は目の前が真っ暗になった、そして反面、頭は真っ白になっていた。あまりの驚きに、声が出せなくなっている。なぜなら、リミーナに連れていかれた部屋で月夜を待つていたものは、鉄製の椅子に両手両足を縛り付けられ意識を失っている楓だったのだから。

「くすくす……大切な人なんだよね？」

立ち尽くす月夜をよそに、リミーナは楓の隣に立ち、その頬に右手を当てる。人をいとも簡単に殺すことが出来る、その手を。

「やめろお！」

とっさに月夜は動いていた。しかし、その動きに速さはない。まるで、人間のような遅さだった。月夜はそれに気づくことなく、気がつけば頭を驚づかみにされ体が宙に浮いていた。

「なっ……かは……」

頭を締め付けられる力に、月夜はひどい痛みを感じる。骨がミシミシと軋み、あと少し力を加えれば潰れてしまいそうだった。

「弱いだろ、月夜……それが人間だよ」

月夜を片手で持ち上げているルインは静かにそう言った。部屋に隠れていたルインの気配を、月夜は全く気づくことができなかった。

「にん……げん……？」

ルインが言っていることは分からなかった。月夜は一応人間ではあるが、身体能力などは人間のそれを大きく上回っている。月夜はルインが掴んでいる腕を必死で掴むが、全くびくともしなかった。

「程ほどにしなさいルイン、お兄様が死んでしまっじゃないの」

冷やかかなりミーナの言葉に、ルインが掴んでいた手を離し月夜は床に落ちる。何が起きているか分からない、どうして自分は力が使えない？という月夜の疑問に答えたのは、リミーナだった。

「あなたがつけているブレスレット、それは私たちの力を抑え、ほぼ人間に戻す力を持っているわ。とはいっても、お兄様の蘇生能力は抑えられなかったようだけどね」

月夜は痛む頭を押さえながら、信じられない、といった感じでその言葉を聞いていた。だが実際に、今の月夜はルインにすら抵抗することが出来ず、惨めに床に尻餅をついている。すぐ目の前にいる、大切な人に触れることもかなわないまま……。

「くそ、こんなもの……」

月夜はとつさに右手首に着けられたブレスレットを外そうとするが、体の一部になってしまったかのようにそれは外すことができなかった。

「無駄よ、普通の人間じゃ外すことは出来ないもの」

見下すような冷たい視線、この圧倒的な力の差を今の月夜に埋めることは到底不可能だった。リミーナの手が楓の頬をゆっくりと撫で上げ、心底楽しそうな笑みを浮かべる。月夜はそれをただ見ていることしか出来なかった。捕食される寸前の動物のように、その体は恐怖に縛り付けられ動くことが出来なかった。ルインはそんな月夜を、感情のない瞳で見ている。

「力がなきゃ何一つ出来ないのに、力があっても何一つお前はしようとしなかった……それが生んだのが、この結果だよ」

吐き捨てるように言うルインの気持ち、月夜は理解することが出来なかった。それを聞きながら、動かない体に苛立ち、ただ楓を見ていることしか出来ない。

「寝ていたらつまらないわ……起きなさい」

魔法のような力をもったりリミーナの声で、楓は、

「ん……」

と小さく声をもらして目を覚ました。眠そうな顔できよるきよると辺りを見回しながら、何が起きているのか分からないといった表情をする。

「どこ……どこ？……月夜？」

月夜の姿を視認した楓は、小さくそうもらす。

「目は覚めたかしら？」

耳元から聞こえるリミーナの声に、楓はびくりとしてとつさにそち



らを向く。

「あなたは・・・誰？」

拘束されている楓の体は震えていた。今の月夜と同じように、捕食される立場なのだと本能が感じ取ったからだ。

「初めまして、お兄様がお世話になったようだからたくさんお礼をしたいと思いますわ」

「やめろ・・・やめろ！」

動かない体を懸命に動かそうとしながら、月夜はそう叫ぶ。それでも、絶対の恐怖に体は動いてくれなかった。今にも泣き出しそうな楓の頬に触れているリミーナの手が、小さく動く。

「あ・・・」

頬の痛みとこぼれる赤い雫を感じながら、楓はそう小さくうめくことしか出来なかった。ななめに切られた楓の左頬からは、生物が生きていく証の温かい液体がじわじわと溢れ零れ落ちている。

「やめろつつてんだよ！」

とっさに月夜の体は動いていた。ルインはそれを止めることをせすにただ見ていた。

「遅すぎるわ、お兄様」

リミーナは腕を横薙ぎにし、月夜の脆い体を弾き飛ばす。

「がはっ・・・」

壁に背を打ちつけ、苦しそうに嗚咽をもらす月夜。それでもその瞳は、リミーナを真っ直ぐ睨んでいた。

「月夜、月夜あ！・・・どうして、どうしてこんなことするの!？」

楓の問いにリミーナは答えない。視線を月夜に固定し、冷笑しながら言い放つ。

「くすくす、本当に弱いわねお兄様・・・この子を助けない？」

リミーナは小さな手で楓の頭をつかみ、少しだけ力をこめる。

「い、痛い・・・！やめて・・・！」

痛みに顔を歪める楓を見て、月夜の理性ははちぎれた。先ほどの痛みなど忘れ、再度リミーナに走り出す。しかし、今度はルインがそ

れを制止した。走り出していた月夜のみぞおちに軽く拳を突き入れる。それだけで、今の月夜の意識が落ちるのには十分だった。崩れ落ちる月夜を抱き支え、ルインはリミーナの方を見ないで言う。

「外に置いてくるぞ、お前の予定通りな」

「ランス！？どうしてあなたがこんなことを・・・！」

何も言わずに出て行こうとするルインに、リミーナが歪んだ笑みを浮かべて言う。

「止めたのは、私の復讐のため？それともあなた自身のため？」

「・・・さあな」

ルインは一度だけ立ち止まってから眩き、再度歩き出し部屋を出て行った。部屋に残されたリミーナは楽しそうに笑う、楓はそんなリミーナに怒りのこもった目をぶつけた。

「あなたが全ての元凶ね・・・どうしてこんなひどいことをするの！？」

「あなたには分からないわよ、それよりも自分の心配したほうがいいわ。後少しであなたは死ぬんだから」

不気味なりミーナの言葉に、それでも楓は負けじと叫んだ。

「私は死なない、月夜を哀しませないために死ぬわけにはいかない！」

両手両足を拘束され、頬から血が出ているのにも関わらず楓は気丈に言う。自分が何も出来ないと分かっているから、せめて弱気でいるのだけは嫌だと楓は思っていた。そして何より、月夜を信じているからこそその強さだった。

「お兄様が戻ってこれるかしらね・・・五日以内に、全てが決まるわ」

鳥肌が立つような歪んだ笑みを浮かべながら言うリミーナを、楓は負けるもんか、とただ見据えていた。

肌にとわりつくひんやりとした風に、月夜は目を覚ました。

「ここは・・・？いたつ・・・」

体を起こそうとして、痛みに顔を苦しそうに歪める。不意に、聞きなれた声が月夜の頭上から聞こえた。

「久しぶり、元気？」

「なんでお前がいるんだよ」

顔を上げた先には夜の明かりに照らされ、ショートの青い髪を微かに揺らしているサーシャがいた。

「先に言っておく、ごめんね。あなたたちのこと嫌いじゃなかったけど、私は私だから」

サーシャの言っていることを月夜は全く理解出来なかった。

「何言ってるんだ？いきなり」

月夜の疑問に、サーシャは伏せ目がちに答えた。

「楓をさらって来たの、私なんだ」

「サーシャが・・・？」

月夜が愕然と相手を見る。サーシャはそんな月夜と視線を合わせないように続ける。

「そうすれば、あなたが殺してくれるかな、って思った。あの子からも、そう指示を受けたしね」

あの子・・・もちろんリミーナのことだろう。月夜は全てに裏切られた気分になり、怒鳴った。

「結局お前もそうなんだな・・・ルインもお前もリミーナも、どうして自分の欲望で人を平然と傷つけられるんだ！」

「それが人間でしょ？」

少し前にリミーナが言ったようなことを、サーシャは口にする。

「だからって、何をしたっていいわけじゃないだろ！？」

「それでも私は、私だもの」

先と同じことを、サーシャは口にする。体が自由に動いていたら、月夜はサーシャに殴りかかっていただろう。

「用件は・・・それだけか？」

怒りがありありと出ている月夜の言葉に、サーシャは無表情で返す。

「まだあるわ、あの子からの伝言。時間にしたら後百十五時間後に、あなたがつけてるそれがあなたを殺すわ」

サーシャは月夜がつけているプレスレットを指し示した。銀のプレスレットは月明かりを受け、禍々しく輝いている。月夜の驚きを見、サーシャは続ける。

「そしてあなたの死と同時に、楓を殺す。伝言はそれだけ」

月夜は頭がぐらりと揺れたのを感じた。殺す・・・？誰を・・・？「それじゃ私の用件はおしまい、あなたが死ななくて私たちを殺しに来てくれることを、私は願ってるわ」

サーシャの、私たち、という意味ありげな言葉に月夜は気づくことなく、ただサーシャが去っていくのを黙って見ていることしか出来なかった。

「・・・なんだよ、それ」

一人残された月夜は、呟く。

「楓が・・・だって、俺何も出来ない・・・」

くやし涙が浮かんでくる、今の月夜には何も出来ないことを、本人が一番理解していたのだから。絶望したように表情を歪める月夜。アメリカの夜の静かな町の中、月夜はどうすることも出来ずただ一人泣いていた。

（あれから・・・どれだけたったんだっけ？）

虚ろな頭で考えながら、月夜は太陽の下一人で町を歩いていた。サーシャとの会話から約二日、残された時間は三日あるかないか程だった。月夜は自分がどれだけの間何も食べていないかもう分からなかった。ただふらふらと歩き、疲れたら路地裏で寝るだけの生活。全てが、どうでも良くなりつつあった。

「ほんと、無力だよな・・・」

自虐的な笑みを浮かべながら、月夜は楓のことを思い出す。初めて出会った時の怯える顔をした楓。二度目に出会った時は笑って話し

かけてくれた楓・・・走馬灯のように、二人が過ごした思い出が月夜の頭に思い返される。護ると言ったあの日、初めてキスをしたあの日・・・全て覚えているのに、それは現実味を伴ってはくれない。いつも横にいてくれた、彼女が今はいないから。

「大切なものを・・・本当に一番大切なものを護れないで、何が兵器だ。所詮、人を傷つけることしか出来ない」

いつでも自分を支えてくれた、元氣付けてくれた楓はもう隣にはいない。そして、それがもう永久に失われることになるのが、月夜には耐えられないことだった。

(俺は死んだつていい・・・でも、楓は護りたい)

そう思うが、今の月夜がリミーナに挑んだところで殺されて終わりだ。そしてそれは同時に、楓の死期を早めることにもなる。月夜は色々な感情と現実の苛み、死んでいるように生きている人間のごとく、ただ町を歩いていた。

これこそがリミーナの最高の復讐だった。母を忘れ、妹を忘れ、このうと生きて来た月夜に対するリミーナの復讐。そしてその復讐が終わったら、次は人間に対する復讐をリミーナは始めるだろう。

生物兵器という禁忌なものを生み出し、都合が悪くなったからといってそれを閉じ込め、誰かに責任を押し付けることによつて自分たちは何知らぬ顔で生きている人間たちに・・・。

あの時牢内で兄妹のように接してきたリミーナを、月夜は忘れることが出来なかった。強い意志を持っているくせに頼りなくて弱く、触れてしまったら壊れてしまいそうな繊細さを持ったリミーナ、あれが本当の彼女なのじゃないかと月夜は思っていた。そしてそれを壊してしまったのは、人間と・・・自分だった。色々な想いが錯綜し、色々な考えがこんがらがって迷う。月夜はそれに疲れ、まだ明るいのにてきとうな路地裏に入って眠りについた。

俺はよく夢を見る。内容は覚えているものもあれば覚えていないも

のも様々だ。明晰夢というものを知っているだろうか？簡単に言えば、自分が夢を見ている、夢の中にいる、と自覚出来ている夢のことだ。大抵俺が見るのはこの明晰夢で、それを見たときは大体どんな内容だったのか覚えていてる。だから・・・俺が今見た夢も、覚えているんだ。

「人間には救いがあるよね。死だけじゃなくて、誰かを護ることや、誰かを好きになること、日々を面白いと思ったり、自分の人生を満ち足りたものにする。そして最期に死を迎える時に、人間は積み立ててきたもので救われる。あれ？結局死が救いになっちゃうね」

馬鹿だなあ、一時の感情や一時の楽しみでも、人は救われるんだよ。不完全なものだけど、それを積み重ねてる時点で人は救われてるんだ。まあ、僕の持論だけど。

「そうだね・・・うん。じゃあさ、私たちの救って何かな？兵器にとつての救って何？人を殺す時？」

兵器に救いも何もないだろ？だって兵器は感情をもたない、何かを護ったり何かのためにどうするっていう意思がない。結果、何をしても救われない。そうだな・・・物はそれに適った使われ方をした時に、報われるんだと思うよ、救われはしないけどね。まあそれは置いといて、感情を持っている俺らは、兵器とは言い難いところだと思うぞ俺は。

「じゃあ私たちはなんなんだろう、人間でもない兵器でもない」  
感情があるなら、何かのためにどうしたいと思う気持ちがあるなら、十分人間だと思っただけだ。少なくとも生物であることに間違いはないだろ？

「そっか・・・そうだよ。じゃあ間違えちゃった時は、人間みたいにそれを正せばいいのかな？」

度合いにもよるけどな、でもやり直しは効くだろ。それが例えゼロからでも。

「本当にやり直せるかな？私は今でも、間違えちゃってるんだ」  
それが間違いかどうかは分からないけど、それなら俺がその間違いを直すよ。お前と同じ俺にしか出来ないことだしな。

「うん！じゃあ待ってるね・・・とても辛いから、早く私を止めてね」

なんか変な言い方だな・・・まあ、いいか。今まで、何もしてやれなかったからな。

「そんなこと・・・あるけど。今の私を助けてくれるなら、許してあげるよ、お兄ちゃん」

はいはい、それじゃ、またな。

「うん！またね」

それが夢だったのかすら、曖昧なものだった。辛いから止めて欲しいと願った雪のように白い少女は、幼い顔に終始切ない色を浮かべていた。

「止めて欲しい、それがお前の・・・本当の望みなんだな」

自分は今まで何を腑抜けていたんだろう・・・力がなくなってしまうても、自分が自分であることに変わりはないのに。護らなければならぬものが、いるというのに。月夜は自分に八つ当たりをするように、路地裏の壁を殴る。思いつきり強く、肉が裂け血が飛び散るほどに・・・。何度殴ったか分からなくなるほどやった後に、月夜は血まみれになった自分の手を見る。

「はは・・・やっぱり弱いな、人間の体は」

今までに感じたことのない人としての強い痛み、月夜は微かに笑ってしまふ。

「でもやっぱり、力が欲しい・・・例え兵器でも、今までそうであったように」

いらな思っていたはずの力を、今月夜は望んでいる。そんな矛盾に、月夜は笑ってしまった。それなら、やることは一つだ。月夜

は想いをかため、路地裏を出て走った。走り出した月夜を、夜空の月が冷たくも温かく照らしていた。

目当ての物を見つけ、それを携えた月夜はリミナーがいる城のような建物の前に立っていた。そのやたらでかい建物を見ながら、月夜は呟く。

「いつの間にかこんなもん建てたんだろうなあ……ってそんなこと言ってる場合でもないか」

自分のお気楽さに苦笑しながら、月夜は右手に持っていたのこぎり左手に持ち替える。

「のこぎりが見つかったのは幸いだな、包丁やナイフじゃ無理だもんなあ」

月夜はそれを右手首……ブレスレットよりやや下の部分に刃をあてがい、一度だけ深呼吸をする。覚悟は決まっていた。

「誰かが傷つくより、はるかにましだ」

その言葉に押されるように、月夜はのこぎりを動かす。刃が折れてしまわないように、慎重に、ゆっくりと……。ギザギザした刃が腕に食い込む、その痛みは月夜にとって想像を絶するものだった。

すぐに終わってしまう痛みではなく、絶えることなく続く痛み。月夜は痛みを歪めたが、それでもその手は止まらない。偶然は二度起こらない、今失敗してしまえば次はないのだと、月夜は思っている。だからこそ、止めることは出来なかった。

「中々……切れないもんだねえ」

余裕のある言葉とは裏腹に、月夜の体中には汗が噴き出していた。その激しい痛み、気を緩めたらすぐにでも気を失ってしまいそうだった。上下に刃を動かし、自分の肉を切っていく。肉が裂け血が噴き出るその様は、三流のスプラッター映画のようだった。

……切り始めてから、月夜にはどれだけの時間が経過したのか分からなかった。絶えず続く痛みは、短い時間を永久に変えてしまうのに十分過ぎるほどだったのだから。



「くうう・・・もうちょい・・・か？」

息も絶え絶えに言葉をもらす。何かを喋っていないければ、自分の気を保つことが出来なかった。一番難関だった骨は、刃に削られもう断たれている。後、わずかだった。

「やべ・・・意識が・・・」

噴水のように噴き出す血液は、人を死に至らしめるには十分だった。それでも月夜は、左手に力を入れ続ける。そして・・・どさ、という小さな音と共に、月夜の右手首から先が落ちた。もちろん、ついていたブレスレットも。

「やつとか・・・これで力戻らなかったら・・・無駄死にだな」

のこぎりを地面に落とし、力尽きたようにその場に崩れる。体や服に付着した血に、月夜は少し顔を綻ばせた。

「生きてるって感じだよな・・・いつもは、血なんて平気なのに」失われていく体温と血液が、月夜には愛しく感じられた。生きていくという感覚、死ぬことがほとんどない月夜にとっては、それはとても大切なものだった。でも・・・、と月夜は言葉をもらす。

「いつまでも・・・それじゃだめなんだ、大切なものを、失うわけにはいかないから」

もう少し生の実感を感じていたい、月夜はそう思いながらも、ゆっくりと立ち上がった。既に血は止まっている、痛みは感じて、今の月夜にとってそれは些細なものだった。死んだ魚のような目に、再び力がこもる。

「行くと、しようか・・・！」

散歩をするような足取り、しかし、その速度はすさまじいものだった。かつてインフィニティと呼ばれたものではなく、月夜という一人の生物は、強い意志の元再び生き返った。

「けりをつけにきたよ」

大広間の扉を開けて中に入ってきた、死の匂いをつれた黒い天使は

再びリミーナと対峙した。

「やっぱり、素直に死んではくれなかったんですね」

驚いた様子もなくリミーナは言う。その両側には、切なく微笑んでいるルインと笑顔のサーシャ、両手両足を拘束されたまま嬉しそうな顔をしている楓。そして、リミーナの前には数人の側近がいた。

「諦め悪いんでね、俺だけならまだしも・・・楓や、妹が壊れていくのを許すことが出来ない。おかげで、右手なくなっちまったよ」  
右腕をひらひらと顔の前で振りながら言う月夜に、リミーナは楽しそうに笑う。

「私が壊れる？何を言っているの？・・・私は、もうとつくの昔に壊れているのだもの」

「辛かっただろ・・・俺が、すぐ楽にしてやるから・・・それが、兄としての償いだ」

月夜自身が一番辛そうに言う。今の月夜には、リミーナが泣いている幼い少女にしか見えなかった。

「・・・やれるものなら、やってみなさい！」

リミーナの言葉に数人の側近が動く。各々速度は違うが、そのどれもが人間を超えた動きだった。

「邪魔、すんなよ」

月夜は歩きながら片手でそれらを薙ぎ払う。純粹な兵器の月夜と、中途半端な彼らでは、力の差は歴然だった。何より、今の月夜は心持ちが違った。一人一人確実に、無力化しながら月夜は歩き続ける。殺すことはせずに、全てを一撃で気絶させて歩くその様は、正に心を持ちえた最強の兵器だった。

「だらしないやつらだ！」

月夜とリミーナの距離が半分程縮まった時、数人いた側近は一人を残し全て倒れていた。そして最後の一人、見覚えのある男が叫んでいた。

「こうして顔を合わせるの二度目、か・・・でも、お前じゃ俺は止められないよ、リッダ＝フィーア」

「ほざけ！」

数人の中では確かに一番動きが良いリツダだが、それでも月夜に触れることは叶わなかった。リツダの攻撃を避けながら、月夜は冷たい視線を向ける。

「無駄だよ」

「貴様に何が分かる！戦争のせい、私は妻を失い子を失い……多くの戦友を失った。人は滅びなければならぬ……浄化されなければいけないんだ！」

リツダの叫びに、月夜の動きが止まる。そして、頭を狙ったリツダの拳が月夜に当たった。しかし、それは当たっただけだった。傷一つつかず、ましてや血を流すこともない。

「どうしてお前らはそうなんだ。奪われた痛みを知っている癖に、どうして奪おうとする……！」

強く言い放ち、月夜は手のない右腕を横薙ぎに振るう。ただそれだけ、しかし強い力を持ったそれにリツダは吹き飛ばされる。壁に背中を強打し、ぐったりと倒れこむ。

「確かに悪いのは人間だ。戦争を起こし、罪のない命を奪っていく……でも、それを正さなきゃいけないのは人間自身なんだ。俺やリミーナ、そして力に流されたお前らがすることじゃないんだ！」

「それでも、人間じゃ何も出来ない……」

「僕のように！」

「私のように！」

リミーナの両側にいたルインとサーシャが、月夜に襲い掛かる。月夜は軽やかにそれをかわし、叫ぶ。

「じゃあ力があれば出来るのか！？世界を変えることが、人が死なない世界を生み出すことが！？」

「力がなければ何も出来ない、お前だってそれが分かっただろ！？」  
ルインの叫びに悲痛な表情をする月夜。しかし……

「じゃあ人が死なない世界を作るために、多くの人を殺すのか？お前らが欲しかった力は、本当にそんなものだったのかよ！？」

強い意志を持つて月夜は怒鳴り返す。ルインとサーシャはめまぐるしく月夜に攻撃を仕掛けるが、その全てが当たっていない。

「私はそれでいい。私は人間が嫌い、自分が嫌い。世界なんて、なくなってしまうばいいのよ！」

サーシャの叫びに、月夜は諭すように返す。

「本当にお前は自分が嫌いなのか？人間が嫌いなのか？・・・自分や誰かを愛す努力もしないで、そんなこと言ってるんじゃない！」

「うるさい・・・止めたいのなら」

「僕を殺せ！」

「私を殺して！」

「この・・・ばかやろうどもがっ！」

かっとなった月夜は、二人を吹き飛ばした。手を使わずに、見えないう力で。もちろん殺す気は全くない、他のやつらと同じく気絶させるためだけのものだった。しかし・・・

「その程度？」

壁や床に背中を強打しても、二人は気を失わなかった。すぐに立ち上がり、月夜に執拗に食い下がる。ダメージがないわけではない、二人とも、明らかに速度が落ちていた。しかし、二人の異常さに月夜は体を震わせた。

「やめろお前ら！どうして分からないんだ！？」

「分かってないのはお前だ、人間の醜さを・・・本質を！」

「あの子を止めたいのなら、私たちを殺しなさい・・・今までそうしてきたように！」

二人の攻撃をかわしながら、月夜は見てしまった。冷酷な笑みを浮かべたりミーナが、身動きの取れない楓に手を伸ばしている姿を・・・二人は死ぬまで月夜に食い下がるだろう、時間が、なかった。

「もう・・・誰にも、楓を傷つけさせるわけには・・・いけないんだ・・・！」

月夜の中で何かが弾けた。深い闇の色をした黒い羽が大きく羽ばたく、躊躇はしなかった。一対の羽がそれぞれ月夜に襲い掛かる二人

に狙いを定める。

「だめええー！！」

楓が叫ぶ。しかし遅かった、黒い羽は確実に二人の心臓を貫き、死に至らしめた。倒れる二人を顧みることなく、月夜は走る。冷酷な笑みを浮かべた、リミーナの元へ……。

「リミーナああ！！」

月夜の叫びが建物を震わせる。疾走しながら、迷うことなく一対の羽でリミーナを狙う。

「くすくす、お兄様はやつぱりそうじゃないと」

リミーナは王座から立ち上がり、瞬時に白い羽で月夜の攻撃を防ぐ。黒い天使と白い墮天使……相反し合う二人の、最後の戦いが始まった。

「もう……楓を傷つけさせない……俺はお前を、殺す！」

月夜は体に力が湧き上がるのを感じた。その力は言うなれば、月夜の意思を持ったインフィニティだった。リミーナから放たれる光の矢を避けながら、近くにいた楓を巻き込まないようにリミーナへと力を放つ。具現化された幾本もの鋭く細い闇が、リミーナに襲い掛かる。リミーナはそれを跳び退いてかわすが、闇は意識を持っているかのように追いかける。

「くっ……どうして？私のほうが勝っているはずなのに！？」

リミーナは直感していた、その闇を防ぐことが出来ないことを。だからこそ、月夜に向かって光の矢を放ちながら逃げ続ける。しかし、その全てが月夜の前で四散していた。

「お前じゃ……俺には勝てない」

それは確かに月夜の声なのに、月夜の声には聞こえなかった。

「どうして？どうしてなの？」

リミーナは追い詰められていた、防ぐことも出来ず、かといって攻撃することも叶わない。ただ、惨めに逃げるだけ。

「鬼ごっこは終わりだよリミーナ……さようなら」

深い闇の底から聞こえるような月夜という言葉に、リミーナは恐怖した。

死ぬことよりも何よりも、その月夜に、ただただ恐怖した。動く影に、月夜は気づいていなかった。だからこそ、鋭い闇から未だ逃げ回っているリミーナに止めを刺すために、月夜は動いていた。時間の流れがゆっくりとなった気がした。リミーナをはるかに上回る速度でリミーナに疾走する月夜、恐怖に顔を歪めているリミーナ。どすっ、という嫌な音が響いた。

「……え？」

月夜は何が起きたのか理解出来なかった。月夜の腕は確かに貫いていた、細い少女の体を……リミーナの前に飛び出した、楓の体を。「……え？」

そう呟くことしか出来なかった。月夜の腕は、楓の腹を貫いて背中から出ている。ぬめりとした血の感触、温かい血の感触を、月夜は真っ白になった脳で感じていた。

「だめだよ……月夜……」

後ろに倒れる楓を、月夜はただ見ていることしか出来なかった。楓の血を被ったりリミーナも、何が起きたのか分からず呆然とそれを見ている。

「かえ……で……？」

ようやく脳が正常に思考した月夜は、すぐに楓に寄り添い抱き寄せ

る。「なんで……どうして……楓……？」

「私にも……分かんないよ……でも……あんな月夜……見ていたく……なかつた……げほっ」

弱弱しく呟く楓、その瞳はとても哀しそうな目をしている。血液が流れ出るたびに、楓の体温が下がっていくのを月夜は感じた。

「月夜……そんな哀しそうな顔……しないで……ほら、見て……私、自分で……拘束されたの……とれたんだよ」

月夜を哀しませないように、精一杯笑顔で言う楓。そんな楓の頬に、涙が零れ落ちる。

「泣いてるの……？……やだよ、月夜……ないちゃ……い

やだよ……私……死なないから……泣かない……で……」

徐々にかすれていく楓の言葉に、月夜は声を出すことが出来なかった。強く抱き締めながら、ポロポロと涙をこぼすことしか出来ない。……月夜……私ね……幸せ……だったよ……大好き……」

「楓……かえ……で……！」

月夜は必死で呼びかける。しかし、楓の口は小さく動くだけで、言葉を発してはいなかった。呆然とそれ見ていたリミーナが、我に返ったように言う。

「お兄ちゃん……どいて、早く……！この子を助けたいのなら！」

月夜はその言葉にとっさに楓から離れた、楓を助けられるのなら、なんだって出来た。リミーナの白い羽が、楓に触れる。

「うまく出来るか分からないけど……」

今にも生命活動を停止してしまいそうな楓が、小さな光に包まれる。そしてその光が大きくなるにつれて、リミーナの羽が小さくなっていった。不安げにそれを見ている月夜は、自分自身の力の無さに悔しさと哀しさを感じることに出来なかった。

ゆっくりと大きくなった光は、ゆっくりと小さくなっていった。その光が消えると同時に、リミーナの白い羽も消えてしまった。そして……楓の体は、元に戻っていた。血は出ていなく、どこにも穴は開いていない。

「良かった……うまく、いった……みたい」

咳いてから、リミーナは倒れる。月夜は混乱しながら、まず楓を抱き起こした。

「楓……楓……！？」

その声に反応するように、楓はゆっくりと目を開ける。

「つき……や？あれ……私……」

「良かった……ほんとに良かった……」

月夜は楓を抱き締める。

「そんなに強くしたら、痛いよ月夜」

楓もまた、月夜を抱き締め返す。

「あ……そうだ！リミーナ、おい、リミーナ！」

とつさのことに忘れかけていた月夜は、楓から一度体を離しリミーナを抱き起こす。心臓は動いていた、むしろすやすやと寝息をたてていた。月夜は安堵の息をもらしてから、更に忘れていたことを思い出し立ち上がる。

「ルイン、サーシャ！」

自分が殺してしまった相手の元に走りよる。自分と同じ生物なら、きっと……という淡い期待を抱いて……。

月夜の期待は裏切られなかった。サーシャもルインも、心臓を貫かれたはずが、生命活動を停止してはいなかった。しかし、二人は生き絶える寸前だった。

「サーシャ……おい！おい！！！」

返事はない、辛うじて生きている彼女には、言葉をかわす気力どころか意識がなかった。哀しそうな表情をしながら、今度はルインに走り寄り、サーシャと同じように呼びかける。

「ルイン、おい！」

「……うつせー、聞こえてる」

弱弱しくも返事があつた。月夜はルインを抱き上げ、涙をこぼす。

「何……ないてるんだよ……」

「馬鹿やろう……兄弟を殺して……泣かないやつが、いるかよ」  
月夜の声は震えている。ルインはそれを聞きながら、いつもの笑顔  
を浮かべた。

「兄弟……か……本当は……僕はこうしたかったのかも……  
しれない」

「何、何言つてんだよ！」

「僕は……あいつを止められなかった……それどころか……  
自分の意志に……負けてしまった……兄弟に手をかけたのは……



・俺が先さ・・・ごほっ」

「兄貴のせいじゃないだろ・・・！」  
弱弱しくふるふると首を振るルイン。

「お前が死んだと思ったとき・・・気づいたんだよ・・・だから・・・僕は、お前に・・・殺して欲しかった・・・僕はもう、戻れなかつたから・・・自分勝手に・・・ごめん」

それは兄弟を捨て力を得たルインではなく、かつての優しい兄、ランスの謝罪の言葉だった。

「悪いと思うなら・・・勝手に死ぬなよ、馬鹿！」

「殺しておいて・・・死ぬなよ・・・か、はは・・・」

ぜえぜえと辛そうに息をしながら、不器用にランスは笑う。

「僕の人生・・・うまくいかないこと・・・ばかりで・・・」

虚ろな目をしながら誰に言うまでもなくとつとつと語りだすランス、その目はもう見えていなかった。

「もう喋るなよ・・・すぐに病院につれてくから」

ランスがもう手遅れだということをつからない月夜ではなかったが、それでもそれを認めたくはなかった。そんな月夜の声が聞こえてないかのよう、ランスは続ける。

「いつも・・・辛かった・・・悔しかった・・・」

その瞳には涙が浮かんでいる。それは自分の人生の辛さのせいなのか、兄弟に手をかけさせた罪の涙なのか、月夜には分からなかった。

「・・・でも、違ったんだ・・・僕は・・・幸せだったんだ・・・きつと」

ランスの笑顔は、とても安らかだった。辛さの涙じゃなく、罪の涙でもなく・・・それは、

「生きてて良かった・・・お前と、出会えて・・・良かった・・・産まれてきたことへの、月夜に出会えたことへの、感謝の涙であり喜びの涙であった。

「今更・・・何言ってるんだ！俺だって、お前と出会って幸せだったんだ」

月夜も涙が止まらなかった。大切な何かを護るために、別の大切なものを失ってしまう・・・そんなのは嫌だ、と月夜は強く思った。  
「つき・・・や・・・」

だんだんとかすれていくランスの声、終わりが近かった。

「おい！勝手に・・・死ぬなよ馬鹿！」

言いたいことは山ほどある、一緒にやりたいことだってもっと見つけたい。月夜は最後の最後まで諦めなかった。

「くそっ・・・リミナーに出来るなら、俺にだって・・・！」

月夜の黒い羽が開く。やり方は分からないが、かつて日本の哀しい生物を葬った時のように月夜は羽でランスを包み込む。蘇生か抹消か、いちかばちかの手だった。闇に包まれたようにランスの姿は見えなくなる。月夜は破壊の力を行使し続けてきた黒い羽を見ながら、ただただランスの蘇生に意識を集中させ力をそそぐ。

「なんで・・・どうして、出来ない！」

直感的に分かってしまった、破壊の力を持った羽はどうあがいても蘇生の力にはなり得ない、月夜は悔しくて唇をかんだ。

かつてティアーナ博士は言った。一人目と二人目は違う生物だ、と似通った力はあるものの、二人の本質は全く違うに等しいのだから。「どうして・・・いつもいつもいつも、壊すことしか出来ない！殺すことしか出来ない!？」

「月夜・・・」

いつの間にか隣に立っていた楓が、哀しそうな目で月夜を見ている。楓の服は血で汚れているものの、体に怪我はなかった。

「月夜はいつだって・・・私のこと護ってくれた、月夜の力は破壊するだけじゃないよ」

楓のその言葉は今の月夜にはひどく痛々しかった。ランスを殺しサージャを殺し、故意にではなくとも楓すらをその手にかけて。自身自身の力に、月夜は何より憎しみを抱いた。

「護ってなんかない！俺は壊してきただけなんだ！護るなんて言葉、誰かを殺して誰かを幸せにしてきた俺の言い訳にすぎないんだよ！」

「どんなに力があつたつて・・・私たちはいつも何かを犠牲にしなきゃ護れない、自分自身ですら。そうでしょ？お兄ちゃん」

月夜の叫びに反応したのは先ほどまで眠っていたはずのリミーナだった。ゆっくりと月夜へ歩きながら、リミーナは憂いを帯びた目で言う。

「自分自身を護るために、私も・・・いつの間にか、自分を殺した」

今にも泣き出しそうなりミーナ、その表情は歳相応の小さな女の子だった。

「自分を・・・殺した？」

月夜の問いにリミーナは答えず、数秒の後に月夜の元にたどり着いた。リミーナは月夜の肩にそつと手を置き、言う。

「その話は後で、もう手遅れかもしれないけど・・・お兄ちゃんの手なら、きつと間に合うよ」

それは先ほどまでのリミーナではなく、牢屋で話したときの妹のようなりミーナだった。

「どうすればいい？」

月夜は自然と落ち着きを取り戻していた。焦ることなく、リミーナの言葉に耳を傾ける。

「切り替えの早さは戦いじゃ大事、よく分かってるねお兄ちゃん。・・・集中して、焦らず、冷静に」

リミーナの言葉に月夜は目を閉じる。視界が遮断され暗くなる代わりに、その他の感覚が鋭くなるのを月夜は感じる。

「力を抜いて、意識をランスに・・・死を、破壊をイメージしちやだめ。彼の生きている姿を強くイメージして」

月夜はランスを思い描く。子どもの頃のランスやさっきまでのランスが、走馬灯のように浮かんでは消える。

「そっか・・・」

月夜は小さく呟いた。月夜の思い出されたランスはいつだって笑っていた。哀しそうな表情をしていても、どこか、人生を楽しむよう

にそれを楽しんでいた。

「もう、大丈夫だね」

イメージは力に変わり、力は光となり広い部屋を温かく包み込んだ。数秒の後、光が消え視界が良くなる頃には、ランスも・・・そして、サーシャも生気を取り戻していた。

「・・・ここまですごいとは、思わなかった」

ランスだけではなく、サーシャすらも蘇生してしまった月夜の力にリミーナは驚きの声をあげた。

「はは、俺も・・・びっくり・・・」

安堵の息を吐き出しながら、月夜はゆっくりと崩れ落ちる。背中から生えていた黒い羽は、光と共に消滅してしまっていた。

「月夜!?!」

倒れた月夜を抱き締めながら、楓は心配そうに顔を覗き込む。先ほどのリミーナと同じように、すやすやと安らかな寝息をたてていた。

「良かった・・・」

「ほんと・・・世界なんてどうでもよくなるぐらいに、あなたはすごい子だね」

リミーナの言葉に楓は首をかしげる。

「私がやったことがばかばかしく思えちゃうよ」

楓の隣に座り、リミーナはそう続ける。楓にはその真意が分からなかった。

「どういう意味？」

「教えてあげない、私も・・・疲れちゃった」

口をとがらせながら言ったりリミーナは、座っている楓の膝に頭を乗せる。

「ええっ?・・・ちよ、ちよっと!」

楓の言葉も虚しく、リミーナは早々にすやすやと寝息をたてはじめる。

「えっ?えっ?どうすればいいの!?!」

みんなが寝ている中、一人身動きのとれない楓はおろおろと狼狽し

ていた。長いようで短かった一つの争いが、楓にはよく分からないまま幕を閉じたのだった。

## 希望（後書き）

多少曖昧（というか強引？）ですが、一つの節目が終わりました。  
まだまだ続きますがこれからは少しマツタリモードに移行します（  
・・・）マタリ

## 平穩

あれから、約二ヶ月が過ぎようとしていた。季節は秋から本格的な冬になり、生い茂っていた草木は心なしか元気がなさそうにうなだれている。厳しい寒さが始まる中、彼らは平穩な生活を送っていた。

突き刺さるような寒さに月夜は目を覚ました。

「さ、さみい・・・窓あいてんじゃねーか」

誰に言うでもなく独り言を言いながら、布団をまとったまま立ち上がり窓をしめる。

「そっぴや昨日の夜暑かったからあけといたんだっ・・・油断してたな」

またしても風邪をひくところだった、と月夜は溜め息をついたが、楓が看病してくれるしそれもありか？などと不謹慎なことも考えていた。月夜は布団に戻って寝なおそうとしたが、ふと気になったので時計をしてみる。短い針が八を少し過ぎた辺り、長い針が四ちよつとを指し示していた。

「・・・あれ？」

八時二十分、完全に学校に遅刻する時間だった。

「まじかよ・・・」

覚めきつていない目をしょぼしょぼとさせたまま、月夜は急いで身に纏っていた布団を放り投げる。

「さっさと着替えないと、いやいやその前に楓を起こしに行かないと、というか楓まだ寝てるのか？まさか置いてかれてないだろうな」慌しくタンスに走り寄りたりドアの前で悩んだり、月夜の覚めていない頭は混乱していた。

「とりあえず楓を起こそう」

自分が起こされていないということは、楓もまだ起きていないとい

う結論に達し、月夜は早々に自分の部屋を出て楓の部屋に行く。

「楓、起きてるか？朝だぞー、遅刻だぞー」

部屋のドアをノックしながら呼びかけてみるが、返事はなかった。仕方ない、といった感じで月夜はドアノブに手をかける。鍵はかかっている。ドアを勢いよく開けて月夜は中を見る。

「楓ー、あれ？いない・・・やつぱり置いていかれたのか・・・？」  
切なそうな顔をして立ち尽くしている月夜の背後から、声がかけられた。

「朝からうるさい！何やってるのよお兄ちゃん」

月夜が振り返るとそこには眠そうにまぶたをこすっているリミーナがいた。吸い込まれそうな青い瞳が月夜を睨んでいる。

「リミーナか、お前も今日学校だろ？遅刻だぞ、説教されるぞ」

月夜の言葉にきょとんしながら、リミーナは呆れた様に口を開く。

「何言ってるのよ、今日から冬休みでしょ！」

「あ・・・忘れてた」

ははは、と笑いながら月夜は楓の部屋のドアを閉める。

「じゃ、俺は寝るから」

びしっ、と片手を顔の前であげて逃げようとする月夜の腕をリミーナはつかむ。

「人を起こしといてそんなことさせないよ・・・私の睡眠を返せー」

「悪かった、悪かったって！グーはやめるグーは！」

傍目から見たら、小動物がじゃれあっているような光景だった。ポカポカと何回か月夜を殴った後、リミーナは月夜の腕を引っ張って歩き出す。

「おい、どこ行くんだ？」

「目が覚めちゃったから、ご飯食べに行くの。嫌とは言わせないよ」

「外食か？それなら金はない、しかもパジャマのままだる俺ら」

「リビングに決まってるでしょ！」

コントをやっているような二人は、早々にリビングへと歩いていっ



た。

「あ、おはよう。どうしたの？今日は早いね」

先ほど部屋にいなかった楓はリビングにいた。ご飯を食べながら、入ってきた二人を物珍しげに見る。

「お兄ちゃんが楓の部屋で騒いでるから起きちゃったの」

「ばっか！誤解を招きそうな発言するな」

「私の部屋で？何してたの月夜」

楓のいぶかしむ様なじとーとした視線に気づき、月夜は慌てて誤解をとこうとする。

「誤解だつてば、別にやましいことは何もしてない！」

「楓も早く起きてて助かったね」

からかいながら火に油をそそぐリミーナの言葉に、楓の視線は蔑みの目が変わった。

「月夜のへんたい」

「へんたいーい」

女は三人集まればかしましいというが、実際は二人でも十分だった。月夜は溜め息をつきながらすねて言う。

「いいよいいよ・・・どうせ俺はへんたいさー」

吹き出しながら二人はそれを見ている。

(こいつら・・・)

朝から月夜の疲労度が大きく上昇したのだった。

「おい、それは俺のだぞリミーナ！」

「早い者勝ちでしょ？」

「く・・・ならこのから揚げの命がどうなつてもいいんだな？」

「あ、ずるいー！」

楓が作ってくれた朝食を、二人は子どものように取り合っていた。そんな二人を見て、楓は呆れながら止めにはいる。

「はいはい、まだあるから。月夜も子どもじゃないんだから、リミ

「リミーナちゃんに譲ってあげなさいよ」

「楓の言うとおりでだよ、お兄ちゃん大人気ないよ」  
勝ち誇ったように次々と食べていくリミーナ。

「朝食は戦いだ、妹でも容赦はしない！」  
負けじと箸をのばす月夜。

「いい加減にしなさい！」

二人を止める楓の声が響く。朝から賑やかな食卓だった。

「ふー・・・食べた食べた」

「もう少し静かに出来ないの？全く・・・」

朝食を食べ終えた三人は、日当たりの良い窓際の絨毯に座っていた。  
右から、月夜・リミーナ・楓と並んでいる。

「賑やかでいいだろ？」

「お兄ちゃんの場合はうるさいって言うのよ」

「お前に言われたくないぞ」

またしてもじゃれあうようにペチペチと叩き合っている二人。呆れた様な顔をしながらも、楓はそれを微笑ましそうに見ていた。

「どうしたんだ？楓」

リミーナの腕を両手で押さえながら、楓の視線に気づいた月夜が言う。  
う。

「んーん、なんでもないよ。やっぱり兄妹って、いいなあって思っただけ」

どこか懐かしむように言う楓に、月夜は真面目な顔で言った。

「俺が、いるだろ？姉弟として・・・そして、」

「私もいるよ、楓」

月夜の邪魔をするように割って入り、声をあげるリミーナ。

「なんなら、お姉ちゃんって呼ぶようにするけど？」

月夜の恨みがましい視線をものともせず、リミーナはそう続けた。  
「二人とも・・・ありがとう。お姉ちゃんか、ちよっとむずがゆい

ね」

照れ笑いを浮かべながら、微笑む楓。こんな日常がまた戻ってきた嬉しさを感じながら、楓は幸せに思っていた。月夜もそれを感じたようで、微笑みながら遠くを見つめるような目をした。

「色々、あったよな。ほんとに……」

「うん……」

高校生になつてから一年間、正確にはまだ八ヶ月だが、二人の間には色々なことがあった。時には傷つき、時には笑い合い、そして元々あった恋慕の念は大きく成長していた。

「二人とも、年寄りくさいよ。まだまだ先は長いんだから、そんなんじゃもたないよ?」

リミーナの言葉に、月夜と楓は笑ってしまった。

「そうだな、色々あったけど、これからも色々あるんだもんな」

「そうだね……まだまだ、これからだよな」

来年になれば二人は高校二年生になる。今まであったような事件はもう起きないかもしれないが、それでもやらなければいけないことがたくさんあるのだ。リミーナも同様に、今まで失ってきたものを取り戻すかのように平穩を送っている。丸く収まったかのように見えるが、実は一つだけ、三人には問題が残っていた。

「そういえば、兄貴は?」

「まだ寝てるんじゃないかな? 起こしにいこうか?」

「私が行こうか?」

立ち上がるうとする二人に月夜が、

「いいよ、俺が行くから……姉妹でゆっくりしてなよ、俺も……ゆっくりしてくるから」

意味ありげに言った言葉に、二人は頷いた。

月夜が去った後、楓が、そういえば……と切り出した。

「覚えてる? 前にリミーナちゃんが私に言ったこと」

リミーナは不思議そうな目を楓に向けて、

「なんのこと?」

と返した。

「ほら、二ヶ月前のあの時・・・私がすごいとかなんとか」

「ああ・・・そうだね、お姉ちゃんはすごいと思うよ」

「どうしてそう思うの？」

楓は首をかしげる。この二ヶ月間、忘れていたわけではないのだが聞き出す暇もなかったのだった。

「普通の人間なら、自分を殺そうとした人を庇うのも許すのも出来ないと思うよ」

「なんだ、そんなことかー・・・うーん、言うのもなんだけど、別に庇ったわけじゃないよ？」

「知ってるよ、あんなお兄ちゃんを見ていられなかったんでしょ？でもどんな理由があつたとしても、私はお姉ちゃんに助けられた。

なんていうのかな・・・そしたら、自分がやってることがとてもばかばかしく思えたの」

自分でもなぜそう思ったのか分からない、といった感じで出されたリミーナの言葉に、楓が笑いながら返した。

「私は何もしてないよ。そう思ったのは、リミーナちゃんが人間だからだよ」

「そうかな？・・・でも結局、ママを助けたくてやったことがママを苦しめちゃった。人間失格かな」

アメリカは未だに大統領暗殺の混乱から立ち直れないでいるが、なぜかリミーナたちのことを秘密裏に隠し通した人間がいた。しかし、それを知っている一部の上の人間が、ティアーナ博士に終身刑を課したのだった。死刑ではないことが、唯一の救いだったのだが・・・

。結果として、リミーナがやったことはティアーナ博士を苦しめる形となったのだった。

「それどころか・・・私は途中から、ママのことなんて忘れていたのかもしれない。人間が許せなくて・・・ただ、私は世界を壊したかっただけなのかもしれない・・・」

泣きそうな顔で言うリミーナを、楓は抱き締めた。驚くりミーナに、優しい声で言う。

「人間だから、間違えちゃうんだよ。やっちゃったことは元に戻せないけど、反省して、次は失敗しないようにすることは出来るから・ ・ ・何が善くて何が悪いのか私には分からないけど、悪いと思つたのなら謝ればいい。そしたらいつかきつと、自分自身がそれを許せる時が来るよ」

子どもを諭す母親のような楓の声に、リミーナは涙を浮かべた。

「ごめんなさいお姉ちゃん・ ・ ・ごめんなさいママ・ ・ ・ごめんなさい・ ・ ・」

その場にいる楓、その場にはいないティアーナ博士・ ・ ・そして、巻き込んでしまった数多くの人間にリミーナは謝った。子どものように、楓にしがみついて泣いている。そんなリミーナの頭を、楓は優しく撫でた。

「辛かったんだよね？苦しかったんだよね？泣いていいよ、たくさん泣いて・ ・ ・そしたらきつと明日は笑顔になれるから」

楓の左頬にはリミーナにつけられた傷がまだ残っている。その傷は深く、一生消えることはないだろう。そんな傷をつけられてもなお、楓はリミーナを許している。両親を奪ってしまった月夜を許したように、楓はリミーナを許している。それはリミーナが言ったように、決して普通の人間にまねできることではなかった。

「うっうっ・ ・ ・」

「よしよし」

泣き続けるリミーナを、楓はただ優しく抱き締めていた。

月夜は今、ランスの部屋の前にいた。心なしか、表情が硬い。軽く深呼吸をしてから、月夜はドアをノックする。返事はなかった。本来の月夜ならばその時点で勝手に入ってしまいが、今日の月夜はそれをしなかった。仕方なく根気強くノックをしていると、中から、

「どうぞ」

と声が聞こえた。月夜はその声に、ほっと安堵の息をついてから、

ドアノブを回す。ドアの向こうにいたのは、布団から上半身だけ起こしたランスだった。

「おはよう、調子はどう？」

いつもの気兼ねない口調ではなく、どこなくよそよそしい口調で月夜は尋ねる。同様に、ランスもよそよそしい口調で返した。

「体の方は大丈夫なんですけど・・・こちらは、いつも通りです」自分の頭を指さしながら、ランスは辛そうな顔をする。

「まだ、自分自身全く分からないんです・・・弟の君には、辛いことかもしれません」

「いや、気にしないでいいよ。一番辛いのは、ランスさん、あなた自身なんでしょうから」

平静を保ちながら月夜は言う。その実、一番傷ついているのは月夜だった。

「悪いね、迷惑かけてしまってるみたいで・・・あ、どうぞ中へ」  
「それでは、遠慮なく」

月夜は心の内を相手に悟られないようにしながら、ドアを閉めてランスの少し前に腰をおろす。距離は近いのに、月夜にはなぜかランスが手の届かない場所にいるような錯覚を感じた。特に話すこともなく、居心地の悪い雰囲気流れる。

「医者の話じゃ、どこにも異常はないらしいのですぐに治るそうですよ」

その場の空気に耐えられず、月夜は今まで何度も言ってきたことを口にする。

「そうですね・・・どうして僕は、記憶喪失になんてなっちゃったんでしょうか・・・」

ランスのこの言葉も、月夜は何度も聞いてきた。

「事故じゃしょうがないですよ。こんな言い方はなんですが、怪我がないだけまだと俺は思いますよ」

月夜には自分の言葉が他人のもののように聞こえた。それどころか自分自身が他人の様に感じてしまう。今の月夜にとってランスが知

らない人であるように、ランスにとって月夜は知らない人だ。ランスには自身のことすら他人のようで、そんなランスの前にいると月夜も自身が他人のように感じてしまっていた。

「そうかな？自分の記憶がないというのは、自分の体がないよりも不安なことだと僕は思います。結局、体がなくては記憶もなくなってしまうんですけどね。．．．すいません、分からないですよね、こんなこと言っても」

「分かる気はしますよ。自分が自分じゃない感覚は、なんとなくですが分かりますから」

インフィニティの時の月夜は月夜であって月夜ではない。だからこそ、月夜にはランスの気持ちがなくなくなりが分かっていた。

「こんな自分が、どうにも齒がゆいものですね．．．」

ランスの言葉に、月夜は胸を締め付けられた。ランスがこうなってしまったのは、自分に非があると月夜は思い込んでいたからだ。蘇生は確かにうまくいった、サーシャは記憶もあり、元気そのものだった。しかし、ランスは違った。自分は散々ランスを苦しめた挙句、殺し、記憶を奪い取ってしまった。それが、月夜を大いに苦しめた。「ランスさんが悪いわけじゃ．．．ないですよ」

自分が悪いのだ、全て．．．しかし、月夜はそれを言うことができなかった。

「そうですね．．．ね。悲觀的になっても仕方ありませんよね。すいません、もう少し休みたいので．．．」

「分かりました、また来ます」

自分の家の一室なのに、月夜はこの部屋がまるで違う家のように言い残し、部屋を出て行った。ドアを閉めた後、少しの間月夜はそこから離れることが出来なかった。

「俺は．．．どうすれば、いいんだろうな？答えてくれよ、兄貴．．．」

月夜はドア越しにいる他人のランスにそう呟いた。返事はない、聞こえていないのだから、それは当たり前のことだった。

そう、一つだけ問題は残っていたのだ。ランスの、記憶障害という大問題が。

あの戦いの後、色々なことがあった。まず、事件の首謀者だったはずのリミーナは月夜たちの家に住み、歳相応の少女として平穩に暮らしている。リミーナにはもう戦いの意志はなく、月夜や人間への復讐心もすっかり消えていた。そして、リミーナによって力を与えられたものたちもまた、みな普段の暮らしに戻っていた。月夜がランスの蘇生を試みた際に出た光の力かどうかは分からないが、彼らは力を失いたただの人間に戻っていたからである。例外なく力を失ったサーシャも散々月夜に文句を言った後、記憶を失ったランスの軍除名やリミーナの学校の編入手続きなどをしつかりと手伝ってから、いつもの笑顔で本来自分がいる場所に帰っていった。その中でリツダは最後まで抵抗していたが、リミーナに懇願されしつぶと戻っていった。余談だが、戦争に巻き込まれ命を落としたリツダの娘ミリーナは、リミーナによく似た肌の白い少女だったらしい。

ここまででは特に問題はなかった。それぞれが、帰る場所に帰ったのだから。しかし、記憶を失ってしまったランスはそうもいかなかった。今のランスには、帰るべきはずの場所が分からなかった。だからこそ、血は繋がっていないが弟の月夜がランスを引き取った。もちろんこれも、サーシャの根回しのおかげだった。

戦いから二ヶ月たった今も、ランスの記憶は一向に取り戻せておらず、そして現在に至っていた。

月夜がリビングに戻ると、楓が笑顔で迎えてくれた。

「どうだった？」

「だめだった・・・」

溜め息をつきながら楓の隣に腰をおろす。月夜の顔は暗鬱としてい



て、見ている方が痛々しい。そんな月夜を励ますように、楓は強く言う。

「絶対大丈夫だよ、また前のランスに戻ってくれるよ。だからその時のために、月夜も落ちこんでじゃだめだよ?」

隣の楓を見ながら、月夜は再度溜め息をもらす。それは悪い溜め息ではなく、感嘆の溜め息だった。

「楓はすごいな」

「そうかな? すごくなんてないよ・・・私は」

楓は視線を落とし、泣き疲れて楓の膝の上で寝てしまったりミーナの頭をなでる。その姿は母親のようだった。

「十分すごいと思う、俺やリミーナを許せるんだからさ」

月夜の呟きに、楓は笑ってしまった。

「やっぱり兄妹だね、同じこと言ってる」

「そりゃ言うだろうさ、俺らには無理なことだからな」

そんな月夜を、楓は不思議そうな目で見る。

「ん? どうした?」

その視線に気づいた月夜は疑問の声をあげた。

「それなら月夜だってすごいよ、人間を許せてるんだもん。私なら、出来ないよ」

「そういえば・・・そうか、すっかり人間社会に生きてたら忘れてたよそんなこと」

実際に忘れてなどいなかったが、月夜はそう嘯く。そう言うておいたほうが、月夜としては気が楽だったからだ。

「誰かを殺したりするのは、もう嫌だしな・・・ま、今の俺じゃもうそんなこと出来ないけど」

月夜はその言葉に実感がなのまま、笑った。そんな月夜に心配な顔をしながら、楓が聞く。

「やっぱり・・・力、なくなっちゃったの?」

「そうだなあ、羽は出ないし力も出ないし・・・今までであったものがぼっかりと抜け落ちた感じ」

あの戦い以来、月夜は力を失っていた。月夜だけではなく、リミーナもまたそうだった。それが一時的なものかどうかは分からないが、別に月夜はそれを不安には思っていないかった。

「それでも、俺は俺だしね」

喜んでいるような泣いているような微妙な表情をしながら、月夜は笑う。月夜は忌々しいその力を憎んできたが、なければ自分で自身の体の一部をなくしてしまったような哀しみを抱いていた。

「そうだね、月夜は月夜だもんね・・・ちよつと頼りないけど」

からかうような楓の言葉に、月夜は胸を痛めた。なぜなら月夜は貧弱で、力がなければ確かに頼りなかったからだ。

「筋トレでもすっかなあ・・・」

悩むように呟く月夜は、多少どんよりとしていた。

月明かりの下、月夜は庭にある椅子に座っていた。その前には、いくつのお墓がある。最近はずいぶん忙しかったので、家の中とはいえここでゆっくりしている暇がなかったのだ。

「ふう・・・色々あったよな、本当に」

誰に話しかけるわけでもなく、月夜は一人呟く。月夜は特に何も考えずに並ぶ墓標を虚ろな瞳で見ながら、ぼーっとしていた。

「どうしたの？」

不意に声をかけられて、月夜はそちらを見る。月明かりにきらめく白い髪をなびかせながら、リミーナがそこにいた。

「お前か・・・いや、別に何もしてないよ」

「嘘つき、誰を待ってるの？」

月夜の隣の椅子に座り、リミーナも同様に墓標に目を向ける。

「楓もそうだけど、なんでお前らは変なところで鋭いんだよ」

核心をつかれた月夜は、別段誤魔化しもせずと言っ。

「乙女の勘、かな？」

真顔で言うリミーナに、月夜は呆れた声を出した。

「あつそ・・・そう言えば、お前は力のほうはどうなんだ？」

「全然かな、お兄ちゃんもでしょ？」

「だな、特に困ることもないけど・・・」

「私もだよ。あつてもなくても変わらぬものなら、最初からなければ良かったのに・・・」

切なそうに呟くリミーナに月夜は共感を覚えた。

「仕方ないさ、それがなければ俺らは生まれて来れなかったんだから」

月夜の前向きな言葉に、リミーナは驚いた。

「そつか・・・そういう考え方もあるんだね」

感心したように言うリミーナの言葉に、月夜は何も返さなかった。静寂の中、冬の冷たい風が二人を包む。

「そろそろ戻らないと、風邪ひくぞ」

短い静寂を破つたのは月夜の優しい声だった。

「ありがと、でもお兄ちゃんも風邪ひいちゃうよ？」

「俺も少ししたら戻るよ、だから早く部屋に帰れ」

優しい声だったが、その中には有無を言わせぬ強さがあった。

「やだ」

すねたように断るリミーナに、月夜は困ったような視線を向ける。

「兄の言うことは素直に聞いておこうぜ、大体から子どもはもう寝る時間だぞ」

「お兄ちゃんが戻るまで私もここにいる」

頑ななりミーナに頭を悩ませながら、仕方ない、とばかりに月夜は自分が着ていた灰色の上着を脱いで放り投げる。

「着てる、少しはまじだろ」

「ありがと・・・でも、寒くないの？」

リミーナは大きめの上着に袖を通しながら聞く。

「寒いに決まってるだろばか」

月夜の格好は、薄手の黒い半袖のシャツ一枚に薄手の黒い長ズボンだった。大抵は黒一色のパジャマ姿の月夜だが、今日も例外ではな

かった。

「ばかつて言う方がばかなんだよ、大体からどうして半袖なの？」

「俺は寒い方が好きなんだよ、だから結構軽装が多いんだ」

とはいいいながらも、さすがに十二月半ばの夜の寒さには月夜も震えていた。それを見たりミーナは何かに気づいたように手を打った。

「あ、ばかだから風邪ひかないの？」

「そんなに殴られたいのか・・・？俺はばかじゃないし風邪だってひいたことある」

むしろ風邪をひいたことのない人間の方が少数だろう、と言い足して月夜は両手で両腕をこする。リミーナといると、どうにも月夜は調子が狂いつぱなしかった。

「・・・くしゅん」

「ほら、上着着てても寒いんだろ？早く部屋に戻りな」

「うー」

鼻水をすすりながらリミーナは首を横に振る。

「どうして、そこまでここにいたいんだお前は？」

月夜の問いに、リミーナは少し寂しそうに言う。

「だって・・・お兄ちゃん消えちゃいそうだったんだもん」

内心どきりとしながら、月夜はそれを押し殺して聞く。

「どうしてそう思うんだ？」

「んー・・・」

頭をかしげながら考えるリミーナ。その姿は小動物のようだった。

「よく分からないけど・・・そう、思っただけ」

「曖昧だな」

それを言った月夜自身、自分が一番曖昧だということを知っていた。

（ここに俺がいるのは・・・なんでだろうな？）

別に誰かを待っているわけではない、かと言って墓参りというわけでもない。こんな寒空の下、月夜は自分がここにいる理由が曖昧だった。

「とにかく、お兄ちゃんが戻るまで私もここに居るからね！」

「はいはい、好きにしろ」

諦めたように言う月夜に、リミーナが聞く。

「そう言えば・・・ここって誰のお墓？」

「・・・家族、かな」

悩んだ末に、月夜はそう答えた。血はつながっていなくとも、確かに彼らは家族だったのだから。

「そうだったんだ・・・お兄ちゃんの家族なら、私の家族でもあるよね？」

間違っではないのだが、根本的に何かおかしいことを言いながらリミーナは手を合わせて目を瞑る。月夜は神妙な面持ちでそれを見つめていた。

「ねえ、お兄ちゃん」

合掌を終えたリミーナが、憂いを帯びた目を月夜に向けて聞く。

「大切な人を護るために、多くの人を殺すのはやっぱりいけないこと、だよな？」

「何言ってるんだ、当たり前だろ？誰かが犠牲になる幸せなんて、辛いだけだ。偽善と言われても、俺は嫌だ」

ふと、月夜は何かを思い出した。前にも、この場所で、誰かと、こんな会話を交わしたことがある。月夜のそんな様子に気づかないで、リミーナは続ける。

「じゃあどちらかを犠牲にしなきゃいけないなら、どっちを選ぶ？」

「第三の選択肢を選ぶよ、誰も犠牲にしない。自分を犠牲にしても、どちらも護り抜くさ」

嫌な汗を背筋に感じながらも、月夜は答える。

「質問の答えになってないよ・・・でも結局、自分が犠牲になっちゃうんじゃ、誰も犠牲にしないことになってないよ」

月夜は息が詰まるのを感じながら、口を開く。

「犠牲のない平和なんてないんだ・・・罪のない人間が死ぬぐらいなら、罪を持って生きる人間が出てしまうのなら・・・俺は、全て

の人の罪を背負って死ぬ」

決して驕りのある言葉ではなかった、月夜は本当にそう思っていたのだから。しかし、その言葉に月夜は思い出してしまった。かつてここで、今の自分と似たようなことを言った人物を・・・そしてその人物を、月夜はここで待っていたのかもしれない。あの時再会を果たした、この場所で。その人物はもういない、生きているのに、死んでいるようなものだった。

「論点がずれちゃって・・・どうしたの!? お兄ちゃん!」

リミーナの動揺を見て、月夜は自分が涙を流していることに気づいた。頬を伝う涙は、そっと地面にこぼれ落ちていく。

自分のせいで記憶喪失になってしまった兄貴、その姿を見て胸を痛めて苦しくて・・・気づけば自分は兄貴の面影を追っていたのかもれない。再会を果たしたこの場所にいれば、また昔の兄貴に会えるんじゃないかって、俺は思ってたのかもしれない。それは罪だ・・・今の兄貴を否定して、辛いから逃げようとしている俺の・・・どうしようもなく情けなくなって、月夜は涙を流し続ける。

「お兄ちゃん? ねえ、大丈夫!？」

寄り添って心配しているリミーナに、月夜は優しく言った。

「だい・・・じょうぶだよ。二ヶ月も気づけなかったなんて・・・俺はやっぱりばかだな」

流れ出る涙を拭い、凜とした表情をする月夜。ランスの記憶が戻らない理由なんて、月夜はとうの昔に気づいていた。涙の理由が分からずにおろおろとしているリミーナに、月夜が言う。

「戻ろうか、風邪をひくから」

月夜は立ち上がって、リミーナの冷えた手をとる。

「・・・うん」

リミーナはそれ以上深く追求せずに、月夜に従った。二人が去った庭には、小さな風の音だけが残っていた。

平穩（後書き）

宿命の兄妹対決も終わり、マツタリモードな話となりました。とうかこれから延々とマツタリモードが・・・まあそれはさておき、二ヶ月以上投稿忘れてたため、前話を覚えてくれている人がいるか・  
・むしろ見てもらえるかどうか——

## それぞれの決意

突然だが、脳が物事を記憶するために行われるシステムは大体四つに分けられている。銘記・保存・再生・再認、この内の一つでも正常に働かなくなれば、記憶障害となる。破損した箇所によって障害の名称は変わるが、どれが破損してしまっても大事には変わりない。現在のランスは過去を思い出せない状態なので、普通に考えれば再生に異常があるはずだ。しかし医者には、「脳への損傷はなく、記憶喪失といっても一時的なもの」、だと診断した。だがしかし、二ヶ月たった今もランスは記憶を取り戻せずにいる。その理由は難しくはない。なぜなら人間は、身体に異常がなくても精神に異常があれば病気になるってしまうのだから……。

「それってどういうこと？」

「つまりだな……」

リビングにある日当たりの良い窓際の絨毯に、朝食を摂り終えた月夜と楓は寝そべっていた。

「本人が心の底じゃ、記憶を思い出すのを拒んでいるんじゃないかな……」

ずっと思っていたことを口にする月夜の表情は、やや暗鬱としている。

「うーん……心の病みたいなものなんだね」

楓の言葉は間違っではないなかった。そう、簡単に言ってしまうえば心の病みたいなものなのだ。だからこそ……

「そうそう、だから医者じゃ治せないし、草津の湯でも無理だ。……俺らが、力になってやらないと」

昨日の夜に月夜は決心していた。幾度となく現在のランスと対話してきた月夜だったが、本心ではそれを嫌がっていた。自分にとって



一番親しかった者が他人になってしまった哀しみ、そして他人扱いをされる苦しみ・・・その上自分のせいだという罪悪感に苛まされ続け、月夜はいつだってランスの前から逃げ出してしまいたかった。しかし、月夜は力強く言う。

「兄貴だつて辛いんだと思う、だから・・・俺が、俺ばかりが逃げてるわけにはいかないから・・・！」

「うん・・・私も出来る限りがんばるよ、何も出来ないかもしれないけど・・・」

月夜の決意を感じ取り、楓も決心する。楓自身も、現在のランスと向き合うのは辛かった。

「楓の支えがあれば、俺もがんばれるよ。よし、早速兄貴の部屋行くか」

楓に微笑んでから、早々と立ち上がる月夜。

「私もついていくよ。辛い時は一人より二人、ね？」

ここだけの話だが、月夜が小学校から高校までの間に出来た友人の数は十に満たない、しかもその大半は楓繋がり友達だった。戦闘はともかく、不器用で対人関係が苦手な月夜としては楓の助力はありがたかった。

「ありがとう、助かるよ・・・二人きりだと場ももたないし」

「うん！行くう」

早々に二人はリビングを出てランスの部屋に向かった。

その頃、朝食を摂り終えて部屋に戻ってきていたリミーナは勉強机の前の椅子に座って悩んでいた。

「・・・はあ」

何度目の溜め息だろう、と嘆息しながらリミーナは幼い顔に暗鬱としたものを貼り付けている。月夜の家は広く、部屋が結構余っているのにリミーナも自分の部屋をもらっていた。

「私・・・この家にもいいのかな？」

あんなことをして何も気にせずこの家に入れる程、リミーナは豪

胆でも能天気でもなかった。月夜や楓がない場所では、こうしてよく一人で悩んでいる。

「帰る家があつて・・・学校に行つて友達も出来て・・・幸せなんだろうけど・・・本当に、いいのかな？」

あんなことをされた月夜と楓は、特に気にすることなくもリミーナを家に迎え入れた。しかしリミーナは罪の意識を感じ、二人を心配させないようにこうやって一人で悩んでいる。環境や感情に流されたからといって、犯してしまった罪は消えてなくなりはいしない。

『なら、死んで償えばいいんじゃない？』

耳にはなく、直接脳に響く声がリミーナに聞こえる。

「死んだつて、罪は消えないよ・・・」

『じゃあ、生きればいいじゃない。能気なお兄様や楓も、そつちのほう喜んでしよう？』

どことなく冷たさを感じる声は、平然とそう言い放つ。

「それが出来るのなら・・・こんな悩んだりなんてしないよ」

『そんなに悩むぐらいなら、また私に全てを任せてしまえばいいのに』

リミーナは首を強く横に振る。

「それじゃだめなの！私は・・・もう逃げたくないから」

先の月夜と同じように、リミーナもそう心に決めていた。

『まあ・・・あなたがそれでいいのなら私はかまわないわ。メインのあなたが決めることであつて、私が決めることじゃないもの』

「うん・・・逃げてばかりじゃ、またみんなに迷惑かけちゃうから・・・あなたにも」

冷たい声は笑いながら、それを否定した。

『迷惑？私は全然そんなこと思っていないわ。表裏一体・・・あなたが辛いと私も辛いんだもの』

「それでも・・・辛いことを全部任せるのは、嫌だから」

『ふふふ、強くなったのね・・・そうね、じゃあ私は、ゆっくり眠らせてもらおうかしら。それに、誰かに見られたら一人で喋ってい

る頭のおかしい子にしか見えないわ』

「それはやだなあ・・・うん、それじゃ・・・おやすみ、またね」

『また、があるかは分からないけど・・・おやすみ、またね』

その言葉を最後に、リミーナに声は聞こえなくなった。深層意識の中、深い眠りについたらようだ。

「うん・・・！悩んでても仕方ないよね、私は私なりに・・・がんばればいいや」

自分を元気付けるように、リミーナは言う。

「それじゃ宿題やつちやおう」

思考を早々に切り替えて、リミーナは小学校から提出された冬休みの宿題にとりかかり始めた。

人格を作る一因になるのが、環境である。環境があまりにもひどく、そこから逃れられない状況にあると、人間は大抵壊れるか逃避するかという行動に走る。リミーナの場合、その逃げ道がもう一つ的人格の作成だった。辛い環境に身を置きながら、母親を助けたいというリミーナの強い感情が、いつしかもう一人の彼女を生み、その彼女はそれを実行出来る冷酷さを持ち合わせていた。そしていつしかその感情が、月夜・人間への復讐の火種となった。しかし、結局はメインであるリミーナ的意思には彼女は勝てない。要するに、彼女がとった行動はリミーナが望んでいたものなのだ。だからこそリミーナは自分を御し、もう一人の彼女にまた全てを背負い込ますことをやめる決意をした。

不安だけど生きよう、それがリミーナの出した答えだった。

「えーと・・・」

月夜は困っていた。ランスの部屋に来てわずか五分程、ほぼいつも通りになっている定期的な会話をしてから続かなくなっていた。

（何言えばいいんだろうなあ・・・記憶を失う前の兄貴の話とか、

か？それもどうかと思うし・・・楓ー！)

月夜は横にいる楓に困ったような視線を送る。かくいう楓も、最初に部屋に入った時しか口を開いていなかった。月夜の視線を受けて、楓はゆっくりと息を吐いた後に口を開く。

「ランスさんは、記憶を取り戻したいと思っていますか？」

直球だった。その言葉に内心月夜は焦ったが、ランスは特に気にした様子もなく答える。

「そうですね・・・実は、よく分からないんですよ。僕は自分が何者なのか不安で、恐怖すら感じる時があります・・・しかし、実は不思議と落ち着いているんです。なぜでしょうね？」

「それはやっぱりランスさんのぞ・・・むぐっ」

月夜が言い切る前に、楓がその口を手で塞いだ。

「私たちには分かりませんが、何かあるんじゃないですか？」

「あなたたちにも分かりませんか・・・ところで、一体何をしているんですか？」

いきなり月夜の口を塞いだ楓を、ランスは不思議そうな目で見ていく。その目は純粹無垢な子どものような目で、いつも愁いを帯びていた目は今はもうなかった。

「なんでもありませんよ、気にしないで下さい」

にこりと笑う楓、その横では月夜が、

「むー！むー！」

とうなっていた。とうか顔が赤くなってきた。

「あの、口だけじゃなくて鼻も塞がってますけど・・・大丈夫なんですか？」

心配そうに言うランスの言葉に楓は、はっ、となつてすぐに手を離す。

「げほげほ・・・」

酸欠状態になっていた月夜はすぐにむせた。

「ごめん、大丈夫・・・？」

「何するんだよ、殺す気かっ」

「だって、仕方ないじゃない」

お互い怒り合っているが、端から見れば仲の良さを示しているような、そんな微笑ましい光景だった。

「仲がいいんですね」

月夜は楓の両頬を横に引つ張りながら、楓は月夜の頭をペチペチ叩きながら、微笑んでその言葉を言ったランスを見た。

「どうしてでしょうか・・・なぜだかとも、懐かしく感じてしまいます」

ゆつたりとした雰囲気が続けるランスに、楓が叩くのをやめて言う。もちろん月夜も手を離れた。

「その懐かしさに・・・恐怖を感じますか？」

急ぎ過ぎないように、かといって分からなさ過ぎないように、楓は言葉を選んだ。

「恐怖・・・は感じません。どちらかといえば、胸が切なくなるような、嬉しくなるような感じです」

ランスの表情に不安の色はなく、ただ何かを懐かしむような、そんな表情だった。

「そう思えるのなら、ランスさんにとってきつと良い思い出なんだと思います。断片的で不確かなものでも、少しずつ、ゆつくりと、そうやって感じて、思い出していければいいんだと思いますよ」

楓の言葉は落ち着いていて、聞いている相手を安心させるような響きを持つていた。精神面の強さでは、この八ヶ月の間に楓が一番成長していた。そんな楓の言葉に、ランスは微笑んで答えた。

「そうですね・・・正直、僕は記憶を取り戻すのを怖がっていたのかも知れません。でも、さっき感じた懐かしさ・・・嬉しさなどを取り戻していけるのなら、怖がる必要なんて全くないのかも知れませんね」

「それなら、良かった。現在のランスさんには、私たちはまだ他人のようなものかも知れませんが・・・何かあれば、いつでも言うて下さいね？」

「はい、その時は頼らせてもらいます」

他人行儀な言葉はお互い抜けないが、間違いなく楓は現在のランスを安心させ、仲良くなり、なおかつ相手の記憶障害の一番の問題となっている心さえも、回復に向かわせた。月夜は楓のすごさに魅入ることしか出来ず、口を開くことが出来なかった。

「それじゃ私たちは、そろそろ戻りますね・・・気が向いたらいいので、たまにはみんなでご飯を食べましょうね」

ランスのご飯は、実は楓がほぼ毎食部屋に運んでいた。最初の方は残しもしていたが、約二週間程から全て平らげていたので、楓は食事の心配はしていなかった。しかし、やっぱり記憶を取り戻させたいのならみんなで食べる方が良く、と楓は思ったからそう言った。

「はい、楓さんの料理はおいしいので・・・一人で食べるよりも、みなさんと食べたほうが更においしくなるかもしれませんね」

ランスの前向きな言葉に楓は微笑み、  
「待っていますね」

と言葉を残して部屋を後にした。ついつい呆然としていた月夜は、ようやく我に返り、

「っと・・・俺も戻ります。また、来るからさ」

とどうにか笑顔を残して、部屋を出て行った。

「記憶・・・か、僕は一体何を恐れているのか、君達を見ていると分からなくなるよ」

出て行った二人を見送った後も、ランスはただドアを見つめていた。

夕食時、ぼーっとしている感じの月夜と楓の二人を、リミーナは不思議そうな目で見ていた。

「どうしたの？二人とも」

「ん・・・何か言ったか？」

上の空、といった感じで月夜がリミーナに視線を向ける。楓も同様に、

「？」

といった感じの視線をリミーナに向けていた。

「なんかぼーっとしてない・・・？熱でもあるの？」

「ぼーっとなんてしてないよ、なあ楓」

「うん、そうだね」

と言いつつも、二人の手は先ほどから同じ空の皿ばかりに箸をのばし、カンカン、と音がしている。誰が見ても、心ここにあらず、といった感じだった。試しにリミーナがその皿をどかしてみると、カンカン、という音は、コンコン、という机を叩く音に切り替わった。「むー」

明らかにおかしい二人を見て、リミーナは何があつたのか想像する。

同時に、顔が赤くなった。ちなみに、リミーナが想像した単語は以下のものだった。二人つきり・仲の良い男女・拳動不審・・・これらの単語から導き出されるのは、リミーナを動揺させるには十分なものだった。

「そっか・・・そうだったんだね」

何か勘違いしているリミーナをよそに、相変わらず二人はぼーっとしている。

「奥手なお兄ちゃんには心配してたけど・・・二人がまさかそんな関係になつてたなんて！」

感極まった様に叫ぶリミーナに、月夜と楓は、

「は？」

と疑問の視線を向ける。

「妹として、私は嬉しいけど複雑な感じです・・・でも、とっても喜ばしいことだね」

一人でとつとつと意味の分からないことを語りだすリミーナに、今度は月夜と楓が不思議な視線を送る番だった。

「・・・何言ってるんだ？」

月夜の問いに、リミーナは顔を赤くして答えた。

「もう、誤魔化しても分かっているんだからね！二人が・・・その・・・

「  
リミーナは言葉を探した。さすがに直球で言えるほど、リミーナは大人ではなかった。そのリミーナの挙動不審さに、月夜はなんとなく嫌な予感を感じた。

「えーとえーと・・・結ばれた？」

ようやく言葉が見つかったリミーナがそう言う。疑問系なのは、多少の配慮が混じっているからだろう。

「は・・・？」

カラン、と箸を落とす音が二つ聞こえる。仲良く声を発した二人は、仲良く同じタイミングで箸を落としていた。そんな二人を見て、リミーナが更に誤解を深める。

「あ・・・私が口を出すことじゃないよね、二人のことだもんね」

しみじみと言い出すリミーナに、月夜は言葉にならない声をあげる。

「な、え・・・ちよ、まて」

楓は声すらあげられない様子で、そんな二人を気にせずリミーナは続ける。

「でも、男の子なんだからちゃんとお兄ちゃんがリードしてあげないとだめだよ？お姉ちゃんは強気に見えても、そういうところは弱いんだから」

「まてまてまて、まちやがれこのポケナス妹」

ようやく月夜の口から出たのは、制止の言葉だった。怪訝な顔をするリミーナに、月夜はすごい速さで喋りだす。

「お前は一体何を言ってるんだ？つーか明らかな誤解がろつかいだぞそれは、むしろどんな誤解の仕方をしやがったんだお前は？まあ落ち着け？俺らはそんなことはしてないしはつきり言ってお前がどんな誤解をしたのか知らんが、少なくともそれはお前に口出されることじゃないし、そんなことを言う子にお兄ちゃんは育てた覚えはありませんよこの野郎？」

相変わらず月夜は混乱すると何を言っているんだか分からなかった。むしろ落ち着いた方がいいのは月夜だった。



「お兄ちゃんに育てられた覚えはないよ！私が口出すことじゃなくても、二人が心配なんだからしょうがないじゃない・・・お兄ちゃんは乙女心とかに鈍いんだから！」  
結果、リミーナに月夜の言葉は伝わっていないし、更に誤解を深める形になった。

「だからそれが余計なお世話だつづの！俺は楓のことを大事に想ってるし、乙女心が分からなくても楓を哀しませるようなまねはない！って何を言わせるんだお前は！！」

混乱している月夜は誤解を解くどころか、自らどこまでも墓穴を掘っている。そこで放心していた楓がようやく我に返り、二人を止める。

「二人とも止めなさいよー！」

放心していたおかげで、月夜程混乱していない楓は、二人を止めて誤解を正そうとするが・・・。

「楓はどう思うんだ!？」

「お姉ちゃんはどう思ってるの!？」

「え?え?...私は、その...」

二人の勢いに押され、もごもごと口ごもる楓。

「私は月夜のこと好きだし・・・月夜がいいならいいけど・・・でもちよつと怖いから、二人で理解しあつていきた・・・」

そこではつ、と楓は完全に我に返った。肩をわなわなと震わせながら、顔を赤くして俯く楓。目を輝かせてそれを聞いていたリミーナ、ドキドキしながらそれを聞いていた月夜に、楓がキレた。

「だから、誤解だつて言ってるでしょ!?!どうしてそういう方向に話が進んじやうのよ!?!?」

いつもは、ペチペチ、という感じの平手攻撃をする楓だが、今回はゴスゴス、といった感じのグー攻撃だった。右手で月夜を、左手でリミーナの頭を何回か叩く。一瞬逃げようとした二人だったが、楓の迫力に圧され身動きが出来ずにただ叩かれている。

「いってえ・・・」

「うう・・・」

「はあはあ・・・落ち着いた？二人とも」

月夜とリミーナはお互い頭を両手でさすりながら、

「はい」

と楓に答えた。

「それなら、良かった」

にこりと微笑む楓を見ながら、一番落ち着いた方がいいのは誰かな・・・、などと月夜とリミーナは泣き泣き思っていた。もちろんそれを口にはしなかった、叩かれるのは誰だって嫌だからだ。

「楽しそう、ですね」

その時、リビングに落ち着いた声が響いた。声の主を見て、三人は驚いた。

「ランス・・・さん？」

その男の名前を呼びながらも、楓にはいまいち実感が湧いていなかった。それは当たり前前かもしれない、今までほとんど部屋を出ることがなかったランスが、夕食時にリビングに来たのだから。

「おはずかしながら、お腹が減ってしまいました・・・邪魔でしたか？」

照れくさそうに答えるランスに、楓はおそろおそろ時間を聞いてみた。

「あ・・・今、何時ですか？」

リビングの壁には大きめの時計がかかっているのだが、あえて楓はそれを見ようとはしなかった。

「八時を少し回ったところですね」

「ご、ごめんなさい！」

ランスの言葉に楓はすぐに謝った。いつもは七時前には、月夜・リミーナ・楓の夕食を終わらせ、その後ランスに夕食を届けるのが大体七時を少し過ぎた程度だ。今日はリミーナと月夜（楓もだが）の暴走により夕食の終わりの時間が遅れ、いつもより一時間のずれが起きていた。

「いえ、楓さんが謝る必要はないんですよ・・・本来なら、僕が食卓に赴くのが当然のことなんですから」

特に気を悪くした様子もなく、ランスは自嘲気味にそう言う。

「でも・・・」

「気にしないで下さい、それに・・・今日のことかなければ、お腹が減っていても僕はここに来れなかったでしょうから」

食い下がる楓に、どことなく寂しげにランスは微笑む。

「分かりました・・・それじゃ、すぐに用意しますね」

楓は慌しく台所に向かった。残された三人の間に、微妙な雰囲気の流れる。

「立っているのもなんですし、新しい椅子持って来るんでこれに座っててください」

月夜は自分の椅子を空いているテーブルの場所に移し、新しい椅子を取りに茶室へと歩き出そうとする。

「そこまで気をつかわれると悪い気がするんですが・・・」

「いいから、気にしないで下さい」

他人行儀な月夜の態度に、一瞬ランスは物哀しい表情を浮かべたが、すぐに、

「では、ご好意に甘えさせてもらいますね」

と言って椅子に座った。残されたリミーナは、現在のランスにどう接していいか分からずに、困っていた。

「えーと・・・」

「確か、リミーナちゃん、であつてるよね？」

困っているリミーナに、ランスが話しかける。

「は、はい、そうです」

「君とは・・・あまり話したことがなかったね」

リミーナが現在のランスと会話をしたのは、数える程しかなかった。月夜と同様に、リミーナもまた、罪の意識から自然とランスを避けていたのだ。

「あまり機会がなくて・・・」

うまい言い訳が思いつかずに、リミーナは気まずげに言う。

「君は月夜君の妹さんなんだっけ？・・・あれ？ということとは僕の妹でもあるのかい？」

反面、ランスは興味があるというようにリミーナに話しかけ続ける。リミーナは説明に困り、どうしたらいいのか悩んだ。

「えーと・・・お兄ちゃんからなんて説明を受けたんですか？」

その辺を知らないリミーナは、自分が下手に説明するのもまずいと思つてランスに聞いてみた。

「確か・・・月夜君は僕の弟で、楓さんは月夜君の血の繋がっていない姉弟で、リミーナちゃんは月夜君の・・・ああ、血の繋がっていない兄妹だったね。それなら、僕とも血が繋がっていないんだね」  
「なんともややこしい話だった。確かによく考えれば、血が繋がっていないという点を除けば、全員が兄弟なのである。どうやらランスは、月夜とランスが本当の兄弟だと思つているようだった。」

「そうですね、それで合つてます。家庭の事情が色々あつて、私もここでお世話になつていゝるんです」

さすがに本当のことは言えずに、リミーナは言葉を濁す。ランスはそれに気づかずに、

「へえ、まだ小さいのに大変なんだね」

と感嘆している。

「それでも、頑張らないといけないんですよ・・・」

リミーナの影のある言葉に、ランスは気まずそうにした。

「ごめん、触れて欲しくない話題だったかな？」

「いえ、大丈夫です」

なんとか気丈に答えるリミーナ。月夜と同様に、リミーナもランスの前では気が置けなかった。いつもは幼い口調のリミーナでも、つい他人行儀に大人っぽくなつてしまつていた。

「お待たせしましたー」

リミーナにとつて、それはある意味救いだった。台所に行つていた楓が、戻つてきたのだった。

「温めなおしただけですけど・・・」

謙虚に言う楓だが、実際楓の料理は温めなおしても相当の腕前だった。並べられていくお皿を前に、ランスのお腹が、グー、と鳴いた。「お恥ずかしいです・・・」

照れ笑いを浮かべるランスに、楓が申し訳なさそうに言う。

「遅れてごめんなさい・・・たくさん食べてくださいね」

箸をランスに渡してから、楓も自分の椅子に座り、冷えてしまっている自分のお皿に箸をのばす。

「ありがたいです、残すようなことは出来ませんね」

子どものように微笑みながら、おいしそうに次々と食べていくランス。リミーナも楓が戻ってきたことに安心し、自分の分に箸を進める。

「あれ？そう言えば、月夜はどこ行っちゃったの？」

楓の疑問に、ランスが答える。

「新しい椅子を取りに行きました。今僕が座っているのは、彼が譲ってくれた椅子なんですよ」

「そうだったんですか・・・それにしても、遅いですね」

二人の会話を聞きながら、逃げたんじゃないかなあ、とリミーナは不満気に思っていた。実際、リミーナはそのせいで困った状況になったのだから。

「つくしゅ・・・風邪か？」

その頃、当の本人、月夜は茶室で布団の山に仰向けで潰されていた。

「それにしても・・・これぐらいどかせないのか俺は」

首から下を布団に潰されながら、じたばたと両腕を動かしている様はまるで亀のようだった。しかし、布団は一向に動く気配がない。さすがに男としてのプライドからか、助けを呼ぶのはしたくないようだった。

「くそ・・・最近ここ来てなかったし、うかつだった」

元々大人数家族だった月夜の家では、月夜と楓以外がいなくなつて

から不必要な物は大抵茶室にある物置・・・正確には押入れなのだが、そこに物を押し込んでいた。そして椅子を探しに来た月夜は、押入れのドアを開けた瞬間上から落ちてきた布団に潰されていたのだった。その量は中々のもので、貧弱で小柄な月夜は動けなくなっていた。

「うー・・・だめだ、動けない」

圧死する程ではないし、誰かが気づいて来てくれれば問題はないのだが・・・月夜はどうしても楓やリミーナ、ランスに自分のこんな姿を見られたくはなかった。じたばたと今度は両腕両足を動かしてみるが・・・布団は動いてはくれなかった。

「あーもー！力がなきゃ本当に何も出来ないんだな、俺って・・・」  
自分の情けなさに落ち込みながらも、そんなことをやっている場合じゃないと無駄な抵抗を試みる。しかし、やっぱりそれは無駄だった。

「・・・だめじゃん」

他人事のように呟きながら、月夜はぐったりとする。

（力がある自分もだめで力がない自分もだめで・・・どうしてこんな俺を、楓は好きだって言ってくれるんだろうな）

そんなことを思いながら、暗鬱とした表情で落ち込む。確かに、頼りない月夜だが、それ以上のものを持っているからこそ周りの人が慕ってくれるのだと、今の月夜には理解するのが難しかった。

「兄貴みたいに、なんでも出来ればいいんだけどなあ」

うなだれながらいじける月夜。今の格好がどうかという以前に、人として情けないことに本人は気づかない。

「・・・何やってるの？月夜」

「・・・え？」

唐突に聞こえた聞き覚えのある声に、月夜は戸惑った。その人物は青いジーパンを履いている。その人物は白の長袖を着て上に茶色のジャケットを羽織っている。整った顔立ち、流れるような黒髪・・・

「あかね・・・姉さん？」

数ヶ月前に一度帰ってきてからしばらく姿を見せていなかった茜が、そこには立っていた。

「久しぶり、って程でもないかしら？」

しゃがみこんで笑顔で月夜の顔を覗き込む、その距離は十数センチもなかった。

「な・・・な・・・なんで、姉さんが？というか顔近いよ顔近い」いきなりの事態に混乱している月夜は、顔を赤くして目を閉じる。

「相変わらずつれないね、それで、何やってるの？」

「・・・聞かないで」

自分の情けない状況を思い出し、意気消沈しながらへこんだ声を出す月夜。

「動けないの・・・？もしかして・・・」

茜はふるふるすると震えている。月夜は嫌な予感しか感じなかった。次の瞬間、茜は笑っていた。

「月夜つてば可愛いー、布団に潰されて動けないなんてー！」

「うっせー！結構重いんだからしょうがないだろー！」

さっきとは違った意味で顔を赤くして叫ぶ月夜。そして、はっ、となって口を閉じる。しかし、既に遅かった。

「どうかしたのー？」

リビングから楓たち三人が月夜の叫びを聞いて茶室にやってきた。

「お、お姉ちゃん！？」

「やほ、楓。久しぶり」

手をひらひらさせて挨拶する茜。それよりそれより、と茜は月夜を指差す。

「見て見て、月夜が面白いことになってるのよ」

「最悪だ・・・」

月夜の呟きは、三人のそれぞれの言葉に消された。

「月夜？・・・亀みたいだよ・・・？あははは」

「月夜君、大丈夫ですか？」

「お兄ちゃん・・・くすくす」

(・・・誰か俺を殺してください)

月夜は恥ずかしさで死にたくなつた。茜が帰って来た時に、月夜は大抵ひどいめに合う、もちろん今日もそうだった。

その後、みんなに救出された月夜は、

「一人にしてくれ・・・」

そう言い残し、どんよりとした重い空気をまとって部屋に戻っていた。

月夜を除いた四人が、リビングのテーブルに集まっていた。結局椅子はランスが押入れから探し、一応五人分の椅子を持ってきていた。「知らない内に人が増えたんだねえ。初めまして、うちは月夜と楓の姉をやらせてもらってる茜って言います」

お酒を飲んでいないのに、やけにテンションが上がってそんな茜に楓は不安を抱いた。

「初めまして、僕は月夜君の兄・・・らしいです。ランスって言います、以後お見知りおきを」

「初めましてー、私はお兄ちゃんの・・・じゃなかった、月夜の妹のリミーナです」

楓を除いた各々が自己紹介をするが、お互い混乱し合ったようだ。特にランスと茜が。

「楓、いつの間にかこんなに兄弟が増えたの？うち分からなくなっちゃうよ・・・」

「えーと・・・茜さんが月夜君のお姉さんということは、僕のお姉さんに？いや、妹さんかな？」

「私からしたらみんなお兄ちゃんでお姉ちゃんだし・・・分かりやすいかな」

楓は溜め息をつきながら、なんとかみんなをまとめようとする。

「えーとね・・・長くなっちゃうけど、一旦全部説明したほうがい



「いよね？」

三人は頷く。かくいう楓も、順序良く説明しないと混乱してしまいそうだった。

「どこから説明すればいいかな・・・まず、この家に住んでいた人からかな？今は私と月夜と茜お姉ちゃんしかいないけど、前はもつといたんだよね・・・」

楓はランスがみんなを殺すように部下に指示を出したことを知らない。そして、現在のランスは、記憶がないためそれを全く知る由もなかった。楓は続ける。

「この家の持ち主、如月ぱぱは元軍人で、孤児の子どもたちを数多く引き取っていたの。その中に含まれるのが、私と月夜と茜お姉ちゃん。血は繋がってないけど、兄弟のようなものです。ここまでは分かりますね？」

うんうん、と三人は頷く。教師と生徒のような状況だった。楓もどことなくノリノリだ。

「次は月夜とリミーナちゃんですが、色々な事情があって二人も血は繋がってないけど兄妹です。そして最後にランスさんと月夜、二人は・・・」

そこで楓は一旦止まる。そういえば、と楓は月夜の言葉を思い出す。『兄貴を無駄に混乱させたくないから、俺と兄貴は実の兄弟、ってことにしておいてくれよ』

「僕の顔に何か？」

ついランスの顔を見ていた楓は、

「なんでもないです、続けますね」

と場を流して続けた。

「ランスさんと月夜は血の繋がっている兄弟です。どちらも生まれはアメリカらしいですけど、月夜はランスさんに似てませんね」

つい本音を口にしてしまった楓。しかし、別段誰もそこにはツッコミを入れなかった。

「要するに・・・血は繋がってなくてもみんな兄弟、でいいのかな

あ？でもそれだと分からなくなっちゃうから、好きなようにすればいいと思いますよ。私にとって茜お姉ちゃんは姉だし、だからといってランスさんやリミーナにとっては他人みたいなものだからね」  
「えー、楓ひどい」

茜が不満の声をあげたが、楓は無視して話を進める。

「そういうわけだから、少しみんなで仲良くやって欲しいんだけど・・・」

楓は落ち着かないようにそわそわとしていた。こっちも心配だが、楓にとって何より月夜のことの方が心配なのだ。それを察した茜は、

「こっちはこっちで親睦深めてるから、楓はいつてらっしゃいな」と楓を促してくれた。

「うん、ごめんね・・・じゃあ、行ってくる」

「がんばってね、お姉ちゃん」

「がんばってくるのよ、楓」

「がんばって下さい、よく分かりませんが」

三人の声援を受けて、なんとなく恥ずかしい気持ちになりながら楓は月夜の部屋へと向かった。

「月夜いる？」

楓は、コンコン、とドアをノックする。返事はなかった。

「入るよ・・・？」

ドアノブを回し、ドアを開けて中に入る。

「う・・・月夜？」

明かりがついていない暗い部屋にはどんよりとした重い空気が充満していて、先の戦いで月夜が具現化した闇の力のように重い空気が具現化されているようだった。

「なんだよ・・・」

部屋の隅っこでどんよりとした空気を醸し出している月夜が、膝を抱えて小さくなったまま楓に目を向ける。

「笑いたきや笑えばいいさ・・・どうせ布団にすら勝てない男ですよ、俺は」

今まで見たこともない程落ち込んでいる月夜に楓は近寄り、その隣に座る。

「さつきはごめんね・・・？笑ったりして」

「いいよ別に・・・自分が情けないことぐらい、分かってるから」  
月夜の覇気のないその声は、聞いてる者すら苦々しくさせるような力を持っていた。

「そんなことないよ！月夜はいつだって、私を護ってくれたじゃない」

なんとか励まそうとする楓だが、今の月夜はそんな言葉ですら心に届かないようだった。

「前の俺だろ・・・それ。楓を護ったのはインフィニティで、月夜なんかじゃない・・・」

だがしかし実際は、月夜は月夜として、力を使って楓を護ってきたのだ。それは決してインフィニティではなかった。それを知っている楓は、今の月夜を見ているのが辛くなった。

「違うよ、月夜は月夜だよ・・・」

「そうだよ、俺は俺だよ・・・なんの力もない、非力で貧弱な男ですよ」

取り付く島もない、とはこのことだった。月夜はよく鬱っぼくなるが、今日は一段とひどかった。よっぽど布団に負けたのが悔しいのだろう。

「もー・・・そんなことないってば、例え月夜に力がなくなっても、非力で貧弱だって、月夜は・・・私の、大切な人だよ？」

気恥ずかしそうに言う楓に、月夜は虚ろな目を向ける。

「・・・楓は、俺のどこが良いの？貧弱で、顔も人並み、身長が高いわけでもないし・・・運動神経がいいわけでもない、人より抜きん出たものなんて何一つない・・・しかも、すぐこんなになって、迷惑かけてばかりの俺なのに」

楓は悩むことなく、そんな月夜の瞳を真っ直ぐ見つめて、言う。

「迷惑かけたって全然かまわないよ、むしろ迷惑だなんて思わないもん！・・・月夜のどこかがいいとかじゃない、月夜じゃないと嫌なの。頼りないところだって、すごいじけちゃうところだって・・・全部含めて月夜だもん、そんな月夜を、私は好きなの」

楓の言葉は、月夜の荒んだ心を癒す。楓にとってそうであるように、月夜にとっても楓はいなければいけない大切な唯一無二の存在だった。言葉が出ない月夜に、楓は逆に問いかける。

「じゃあ聞くけど、月夜は私のどこがいいの？紫みたいに頭がいいわけじゃないし、茜お姉ちゃんみたいにきれいなわけじゃないし・・・その、胸だつてないし・・・」

どことなく悔しそうに言う楓に、月夜はつい笑ってしまった。

「わ、笑わないですよ！」

「はは、悪い悪い・・・そうだな、俺も正確に言えるわけじゃないけど・・・楓じゃないとだめなんだ。良いところも、まあ悪いところも・・・全て含めて、楓が好きなんだ」

（だからこそ、楓と違って情けない自分が嫌になるのかもしれないけど、な）

月夜は多少虚ろな目をしながらも、自分を見つめている楓を見つめ返した。暗い部屋の中、お互いがやっと見える程の視界で二人は見詰め合う。

「楓・・・」

「月夜・・・」

どちらからというわけでもなく、お互いの顔の距離が縮まっていく。そして、唇が触れそうになる直前・・・ドーン、という物音に二人は遮られた。

「な、なんだ？」

「・・・まさか」

名残惜しそうに二人は離れ、部屋を飛び出して物音が聞こえたりリビングに走る。楓の予想は的中していた。

「姉さん・・・」

「お姉ちゃん・・・」

二人は啞然としていた。テーブルがひっくり返され、上に載っていたものが散らかっている。よく見ると、二、三本の酒瓶が床に転がっていた。ついでに、リミナーとランスも転がっていた。

「やゝ、お二人さゝゝん。ちよつと、暴れすぎちゃったかな？お邪魔しちやうたかな？あははー」

全く悪びれた様子もなく、ふらふらと立っている茜。大方転がっている二人は、酒でも飲まされたのだろう、と月夜は判断した。

「相変わらずだね姉さん・・・来るたびに、毎回毎回何か壊すのはやめてくれよ！」

数ヶ月前に帰省した時も、テーブルやら何やらを壊し、しまいには後片付けを手伝わされたのを苦々しく思い出す月夜。実際あの時は飲んで暴れた月夜が破壊してたわけなのだが、本人はそれを全く覚えていなかった。

「いいじゃない、お姉ちゃんだって、暴れたい時ぐらいあるのよゝゝ！」

月夜は、いつも暴れてるじゃん、と思ったがあえてそれは言わなかった。大抵茜が暴れる時は何か嫌なことがあつた時であるのを、月夜は知っていたからだ。しかも、今日の暴れ具合とどこことなくやつれている姉を見た月夜は、何も言えなくなってしまった。しかし、「お姉ちゃん！暴れるのは勝手だけど、苦労するのはこっちなんだからね！！」ランスやリミナーちゃんまで巻き込んで・・・」

楓は容赦なかった。怒る楓に、茜はしゃがみこんで弱弱しく独り言のように呟く。

「そうよね・・・お姉ちゃんがいると迷惑よね・・・」

いつも破天荒な茜だが、今日は様子がおかしかった。仕方なく月夜は、二人の間に入りなるとかなだめようとすする。

「まあまあ・・・二人とも少しは落ち着けて」

「落ち着けるわけないでしょ！？月夜はどっちの味方なの？」

楓の食いかかるような視線と、茜のどことなく寂しそうな視線に挟まれ月夜は溜め息をつく。

「はぁ・・・味方も何もないだろ？まずはその転がってるのなんとかして、話はそれから」

楓は何か言いたそうな表情をしたが、渋々とリミーナを介抱する。

「大丈夫？リミーナちゃん」

「うにゅー、らいじょうぶらよ・・・」

リミーナは顔が真っ赤でろれつが回っておらず、明らかに大丈夫ではなかった。

「もう・・・子どもにお酒を飲ませる人がどこにいるのよ」

よいしょ、と声をあげながら楓はリミーナを抱き上げ、

「部屋につれてくね」

と言い残しリビングを出て行った。月夜も楓と同様に、ランスを介抱する。

「大丈夫？」

ぐったりと倒れているランスは、リミーナと違い返事がなかった。

「どれだけ酒弱いんだよ全く・・・」

月夜は呆れながらランスを持ち上げようとしたが、月夜より身長も体重も多いランスは持ち上げることが出来なかった。

「・・・布団に勝てない俺じゃやっぱ無理か」

虚しく呟きながら、月夜は色々と試行錯誤した。もうこの際引きずって持つてつてしまおうか、とも考えたが、さすがにそれはまずい、と思い、仕方なく一番安定した持ち方、ランスの腕を自分の肩に回して引きずっていくことにした。よるよると歩きながらリビングから立ち去っていく月夜の後ろ姿を、茜はただ黙って見ていた。

「っ、疲れた・・・」

なんとかランスを運び終えた月夜は、リビングに戻ってきた。既に戻ってきていた楓は、散らかった酒瓶や食器を片付けていた。

「あ、お疲れ様」

月夜の姿を確認してから楓はそう言う。その声も表情も、多少不機嫌そうだった。

「お疲れ、手伝うよ」

二人がてきぱきと片付けてる間、散らかした張本人は絨毯の上に寝転がっていた。月夜も楓も、今更なので特に文句は言わなかった。

床に散乱したものを片付け、最後にテーブルを立て直して後片付けは終わった。二人は疲れた表情をしながら、茜が寝転がっている絨毯に腰をおろす。

「それで、今日はどうしたの？」

「・・・」

月夜の問いに茜は答えない。あの手紙の一件を思い出すと、どうにも月夜はやりにくいようだった。

「急に帰ってきて暴れて・・・理由ぐらい話してもいいでしょ!？」

「・・・」

楓の怒りの混じった言葉にも、茜は無反応だった。決して寝ているわけではない。しかし、虚ろな瞳は部屋の天井を見つめているだけだった。

「どうしたもんかな・・・」

困ったように言う月夜。

(何も出来ない子どもじゃないんだから、ほつといっても大丈夫だとは思っただけどなあ・・・)

と、冷たいことを思ったりもするが、今日の茜の様子のおかしさに月夜は心配になっていた。

「お姉ちゃん？寝るんなら、ちゃんと部屋行って寝ないと風邪ひくよ」

どうやら楓も茜の様子のおかしさに気づいたようで、口調が多少優しくなっていた。

「・・・」

茜はただ黙って天井を見つめている。いや、その虚ろな瞳には天井すら映っていないのかもしれないなかった。

「・・・仕方ないなあ」

月夜は立ち上がり、かけれそうな物を探す。きよるきよると視線を動かすが、リビングには見当たらなかったらしく、

「ちよつと茶室から掛け布団持ってくる」

と言い残し、リビングを出て行った。残された楓は居心地悪そうに、ただ黙って様子のおかしい茜を見ていた。

程なくして、月夜が少し大きめの掛け布団を持って戻ってきた。それを茜の上にかける。

「家の中とはいえ、寒いしね」

十二月の寒さは、家の中にいてもたまに身震いする程だった。

「そうだね、私たちも早く戻らないと風邪ひきそう」

そう言いながらも、楓はそこから動こうとはしなかった。いつも茜に対して敵しい楓だが、様子の違う茜のことがやっぱり心配らしい。

「ああ、姉さんのことは俺が看てるから、楓は部屋に戻ってもいいよ」

月夜なりに楓のことも心配して言ったのだが、楓は不機嫌そうに言う。

「月夜が戻るまで私も残る」

月夜にはどうして楓が不機嫌なのか分からなかったが、意地を張り出すと楓が絶対に動いてくれないことを理解していた月夜はそれ以上は言わなかった。

「・・・」

相変わらず、無言で天井を見つめている茜。月夜と楓もお互い無言で心配そうにそんな茜を見ていたが、数分後に茜が目を閉じ、すーすーと寝息をたて始めたのを確認し、部屋に戻ることにした。

「結局、何があったんだろうな？」

月夜は立ち上がりながら、茜を起こさないように小さな声で楓に聞く。

「分からないよ、そんなの」

楓も同様に、小さな声で返す。



「明日、聞けばいいか・・・」

「そうだね」

二人は茜のことを心配しながらも、各々部屋に戻って行った。

草木も眠る丑三つ刻、リビングにある絨毯の上で、上半身だけを起こして静かに咳いている人物がいた。

「うちの居場所は・・・どこなんだろう」

その瞳に力は無い。

「この世界には・・・ないのかも、ね」

力なく咳かれたその言葉は誰にも聞こえることなく、冷えた暗闇の中に溶けていった。

それぞれの決意（後書き）

ほのぼのー（、、）

なのかどうかは置いといて、相変わらずここいつらも問題が絶えない  
よなあ、と他人事に思う今日この頃です

## 傷

最近よく夢を見る。うっすらとしている割には、とても現実味を感じさせる夢……。もしかしたら、僕が失くしてしまった記憶がそれを夢にして見せているのかもしれない。

夢の中にいつも出てくる少年は、霧がかかっているかのように姿を見ることが出来ない。うっすらと、輪郭だけ。それでも僕は彼を知っているし、彼も僕を知っている。それなのに、どうして僕は思い出すことが出来ないのだろう……。思い出そうとすると、涙が出る、頭痛がする。今の状況が不安で、思い出したいと思っているはずなのに、どこかで僕は、それを拒んでいる。それが更に僕を不安にさせる。

何があつたのだろうか？どうしてこうなつたのだろうか？考えれば考えるほど、不安は大きくなる……。それなのに、どうして僕はこんなにも落ち着いていられるのだろうか？

全てが分からないまま、今日も僕は、少年が誰だか思い出せず、朝を迎えてしまうのだろう。

カーテンから差し込む光に、ランスは目を覚ました。

「ん……？」

ズズキと頭に響く鈍重な痛みが、朝の清々しい目覚めを空の彼方に放り投げてくれた。ランスは端整な顔を苦々しげに歪め、昨日何があつたのかを思い出そうとする。

「確か……茜さん、だっけ……。？ああ、お酒飲まされたんだっ  
たな……」

思い出せても、ランスの気分は全く晴れなかった。

「二日酔いってやつかな……。？どうやら僕は、お酒に弱いみたいだ」

実際のところ、ランスはコップ一杯の半分ぐらいしか飲んでいないが、お酒に弱いランスにはそれだけでも十分だった。しかも、茜が飲ませたのは日本酒で、アルコール度数はそんなに低くない。

「こんな形で、昔の僕を思い出せても・・・嬉しくないな」

お酒に弱い、というどうでもいい点を思い出せても・・・いや、正確には身をもって味わったとしても、現在のランスには嬉しくないことだった。ズキズキとする痛みのでいで、ランスはもう一度寝る気は起きなかった。かといって、何かをする気にもならないようだ。

「うーん・・・」

ランスは、仕方ない、といった感じで、あまり脳に刺激を与えないようにゆっくりと立ち上がり、時間を確認する。時刻は八時過ぎ、この時間なら楓ちゃんにご飯を作っている辺りだろう、と予想をつけ、ランスは部屋を出て行った。

ランスがリビングを訪れると、そこにいたのは楓ではなく茜だった。昨日と同じ格好をしていて、その上にエプロンを着けている。

「あ、おはようございます」

ランスの姿を確認した茜は、人当たりの良い笑顔を浮かべる。茜の本性を知らない男なら、一瞬で恋に落ちてしまいそうな、そんな魅力的な笑顔だった。

「あ、えーと・・・おはようございます」

昨日とは別人のような茜に、ランスはびっくりしながら挨拶を返す。昨日僕は夢でも見ていたのかな？と考えてしまうほど、今の茜は落ち着いていた。

「すぐに朝食を作るので、良ければ待っていてくださいね。冷蔵庫に何かあるのか確認はしていませんけど、楓なら材料を欠かすことはしないと思うので」

「わ、分かりました」

ランスはどきまぎしながら椅子に座り、台所に歩いていく茜を見ている。どうして自分が緊張しているのか、ランス自身分かっていな

かった。分かっていることはただ一つ、頭の痛みが消えてしまう程、心臓の鼓動が早くなっている、ということだった。

「そうだ、何か食べれない物とがありますか？」

急に振り返って聞いて来た茜に、ランスは危うく舌を噛みそうになりながらもなんとか言葉を吐き出した。

「多分、ないと思います」

ランスの変な物言いに、一瞬きよんとした茜だが、

「ふふ……じゃあ、適当に作りますね」

と笑顔を残し、台所へと歩いて行った。

「ふう……どうしたんだろう、僕は……」

茜を見送った後、ランスは小さく溜め息をついた。自分の中に浮かび上がる何かが分からずに、ランスはただ困惑していた。

「どうですか？」

「すぐく、おいしいです」

楓と同等か、それ以上の料理の腕を持った茜の料理に、ランスは素直な感想をもらった。テーブルの上にはランスの分だけではなく、今ここにいない三人の分もしっかりと料理が用意されている。しかし、三つの席は空白で、ランスの真向かい側には茜が座っていた。食べる様子をじーっと見られ、ランスはつい頬を赤くしてしまう。

「茜さんは、食べないんですか？」

どうにもやりづらい調子で、ランスは茜に聞く。

「私も食べますよ。その前に、みんなを起こしてきますね」

立ち上がるうとした茜に、

「あ……」

とランスが声をかける。その声が一番驚いたのは、ランス自身だった。

「どうかしましたか？」

立ち上がるうとしたままのポーズで、茜はランスに聞き返す。

「い、いや、なんでもありません」

「くす、おかしな人ですね」

悪い意味を感じさせない茜の言葉に、ランスは恥ずかしくなってしまうた。

「それじゃ、行ってきます」

リビングを出て行く茜を名残惜しそうに見つめながら、どうして自分は呼び止めてしまったのだろうか？と、ランスは一人悩んでいた。

茜に起こされた三人（実際のところ、リミーナの部屋を茜は知らないで、リミーナを起こしたのは月夜だが）は、椅子に座って用意された朝食をすぐに食べ始めた。

「おいしい？」

茜は食べずに、みんなが食べる様子を少しの間見てから、そう聞いた。各々が素直に感想をもらす。

「うん、かなり。姉さん、腕上げた？」

「うー・・・私のよりおいしい、お姉ちゃんすごいなあ」

「すごくおいしい。お姉ちゃんのもおいしいけど、茜お姉ちゃんのもすごくおいしい！」

「そうですね・・・とてもおいしいです」

なぜか偉そうな言い方の月夜、悔しそうな表情をしながらも素直に負けを認める楓、純粹に絶賛するリミーナ、そして再度素直な感想を述べるランス。四人の感想を聞いて、茜は嬉しそうに笑った。

「良かった、昨日は迷惑かけちゃったみたいだし・・・」

いつものことだからなあ、と月夜と楓は思ったが、それを口にすることはなかった。

「ちょっと色々あってね・・・」

その言葉には、それを追求してはいけないような重々しさがあった。一番鈍感な月夜ですらそれに気づき、四人は誰一人その言葉に口を挟むことはしなかった。

「やっぱり、人数多いほうが賑やかでいいよな」

そんな場を濁すように、月夜が口を開く。

「そうだね・・・なんか、久しぶりだね」  
楓もそれに同意する。

二人のおかげで多少は場が和み、その後は特に問題もなく軽いおしゃべりをしながら朝食を終えた。

「片付けは俺がやるから」

食べ終えた月夜は、自分の食器を持って流しに移動する。既に食べ終えていたランスも、それに続いて食器を持って月夜の隣に移動した。

「僕も、手伝うよ」

何か良いことがあったかのように、ランスははにかむような笑顔で浮かべている。

「いや・・・まあ、たまにはいいかな」

一瞬断りそうになった月夜だったが、どうしてランスが嬉しそうなのかを聞いてみたくなり、手伝ってもらうことにした。でも率直に聞くのもなあ、と思いながら、何か上手い言い回しを月夜が考えていると。

「月夜君・・・茜さん、だっけ？」

ランスから話を振ってきた。その声は小さく、内緒話をしているような声だった。

「姉さんがどうかしました？」

疑問に思いながら月夜は聞く。ランスは照れた笑顔で、

「きれいですよね・・・見ているとドキドキしてしまうんです。よく分からないんですが、恋、つてもものなんでしょうか・・・月夜君？」

月夜はランスの顔を見たまま口を半開きにして呆然としていた。手に握られていた皿が落ちて、パリーン、という音をたてる。リビングからは、

「月夜ー！またお皿割ったの！？」

という楓の怒り声がとんできた。

（いやいや、俺はそんなに皿割ってないだろ？これで何枚目だった

かは覚えてないけど・・・って違う違う、落ち着け俺。恋？池にいる？ちげーよそりゃ鯉だろ！？」

月夜は混乱していた、一人ボケー人ツツコミを脳内でやってしまう程に。

「・・・変でしょうか？出会ってすぐに、こんな気持ちを持ってしまっうなんて」

本気で悩んだ顔でランスに聞かれ、月夜は我を取り戻した。

「変じゃないですよ、一目惚れはしょうがないと思いますし・・・  
相手が姉さんなら、尚更」

そついや俺もそうだったなあ、と過去のことを思い出しながら、月夜は溜め息をついた。

「そうですね？良かった・・・僕は今まで恋なんてしたことなかったので・・・あれ？」

ランスは自分の物言いを、疑問に感じた。もちろん、月夜にもひっかかる部分があった。

「僕は恋をしたことがない・・・どうしてそれが、分かるんでしょう」

ランスにとってそれは記憶ではなく、単なる直感だったわけだが、確信を持って言える程のものだった。

「他に何か、思い出しませんか？」  
期待するような月夜の言葉に、

「すいません・・・」  
とランスは残念そうに答えた。

「そうですね・・・とにかく、大きな一歩じゃないですか。そうやって、色々思い出していきましよう」

果たしてそれが大きな一歩なのかは月夜には分からなかったが、何事も一歩一歩が大切だと思った。

「そうですね、でも、もし・・・僕が記憶を取り戻したら、現在の僕の気持ちはどうなってしまうんでしょうね」

憂いを帯びたランスの言葉に、月夜は切なくなつた。



「きつと・・・大丈夫ですよ、想いは残ると思います」

だからこそ、そう強く言うことしか出来なかった。

「なんのお話してるの？」

いきなり後ろから現れたリミーナに、月夜とランスは驚いた。

「うわ、ってリミーナか・・・食器持ってきてくれたんだな、ありがとう」

「うわ、って何よ、うわ、って。それに、子どもじゃないんだから、これぐらい出来ますよーだ」

ふてくされた様に言うリミーナに月夜は苦笑する。

「まだまだ子どもだろ？」

「むー・・・これでも考え方は大人だもん！」

「大人は自分のこと大人なんて言わねーよ、子どもは子どもらしくさっさと宿題でもやってなさい」

口をとがらせて月夜をにらむリミーナ、それでも前ほどの凶々しさはなく、どちらかといえば可愛い程度の視線だった。

「二人は仲がいいですね」

今まで黙って二人を見ていたランスが、微笑みながら言う。現在のランスには、二人が殺し合ってたことなど微塵も知りはない。

「まあ、兄妹だしね。それに、昔の兄・・・」

そこで月夜は言葉を止めた。ランスは不思議そうな顔でそんな月夜を見ている。

「いや、なんでもないよ」

記憶を失って別人になってしまったランスに、月夜はその続きを言うことが出来なかった。昔の兄貴も仲良かったよ、なんて、現在のランスを苦しめるような言葉を。

「とにかく、リミーナはもう戻れ。ああ、いや・・・悪いけど、食べ終えてあるなら残り二人の食器も持ってきてくれないか？」

場を濁すような月夜の言葉に、リミーナは渋々と頷いた。

「しょうがないなあ、貸しにしておくからね」

そう言い残し、リビングに歩き出すリミーナの背中に、月夜は言葉

を投げかけた。

「そんなもんで貸しになるかつつうの・・・全く」

やれやれ、と溜め息をつきながら、月夜はランスに向き直る。

「続き、聞かせてもらっていいですか？」

「続き？」

再度手を動かしながら、月夜はランスに聞く。

「姉さんのことですよ、本性知ってますよね？」

「ああ・・・うん、お酒飲むとすごい暴れるんだよね」

ランスの言葉は半分正解で半分間違っていた。実際の茜は、お酒が入ってなくても暴れるのだから。度合いは違うが。

「常にあんな感じですけどね・・・昨日今日は、大分様子がおかしいですけど」

何があつたんだろうなあ、と月夜は心配をしていた。

「きつと茜さんは、とても弱い女性なんだと思いますよ・・・」

ランスの言葉に月夜はびっくりした。会ってすぐにそれを理解出来た人間は、月夜の知る限りじゃ一人もいないからだ。もちろん、月夜本人を除いて、だが。

「そうですね・・・本性を知らなくても、その本質を分かっているのなら、大丈夫かな。姉さんの場合、見た目で惹かれた人は、大抵すぐだめになるし」

「外見もきれいですけどね」

照れながら苦笑しているランスは、どうやら本気で茜に恋をしてしまったようだ。数ヶ月前の出来事以来、多少なりとも茜のことを引きずっていた月夜としては、複雑だが嬉しいことでもあった。

「ここらで借りを返しておくのもあり、かな」

「借り？」

月夜の独り言に、ランスが疑問の声をあげる。

「いえいえ、こっちの話です」

月夜が言っている貸しとは、楓の誕生日のことだ。あの時、ランスに手伝ってもらった月夜はその借りを返したいと思っていた。現在

のランスは全くの別人だが、ランスであることに間違いはないので、まあいいか、と月夜は勝手に納得していた。

「ちょうど今日、楓と買い物行く予定だったんですよ。ついでにリミーナも連れて行きますんで」

「え？・・・それって」

「少し姉さんとゆっくり話してもしてみたらどうですか？」

月夜の言葉に、ランスは赤くなったり青くなったりを繰り返した。月夜はそれを見ながら、笑いをどうにか押し殺している。

「いや！でもそんな、いきなり・・・」

歩行者信号のような顔芸を見せた後、ようやくランスはそう口を開いた。

「お互いを知るには良い機会だと思いますよ？姉さんもいつ帰っちゃうか分からないし・・・」

「でも・・・」

うるたえまくりなランスは、過去のランスを思わせない程、思春期まっさかりな男の子のようだった。そんなランスを見て、月夜はついついからかいたくなってしまった。

「初恋なら、尚更がんばらないと。どうせなら、やれるとこまでや・・・あいたっ」

他人をからかい始めると親父っぽくなる月夜の発言は、後ろから頭をはたかれて止められた。そんなことをするのは一人、世界を探せば何人もいそうだが、この家には一人しかいなかった。

「遅いよ月夜！いつまで洗い物してるの？」

「いや、今は男同士の親睦をだな・・・というか、お前らの食器まだ来てないだろ！」

月夜のツツコミに楓は、

「あ・・・それじゃ、またね」

と言い残し逃げようとする。月夜は楓の肩をつかんでそれを阻止した。

「待て待て、言うことはそれだけか？・・・というかりミーナはど

うしたんだ？あいつにお前らの食器持つてくるように頼んだんだけど」

「手濡れてるってば！……リミーナちゃんならリビングでテレビ見てるけど」

「……うん、あいつに頼んだ俺が馬鹿でした。反省してます……ってそうじゃないだろ、お前らも食べ終えたなら食器持つてこいよ」

「あははー、忘れてた……すぐ持つてくるね」

やれやれ、と言いながら月夜は楓の肩をつかんでいた手を離す。そそくさと立ち去っていく楓の背中を見ながら、どうやってたら忘れるんだ？と月夜は小さくこぼした。

「まあ、邪魔が入りまくりなんで……とにかく、がんばってくださいよ」

ランスに向き直りそう言う月夜。

「……うまく話せるコツとかないですか？むしろ何を話したらいいのかさえ……」

自信なく聞いてくるランスに月夜は困った。月夜自身も人間関係が得意ではなく、面識があまりない相手にそう簡単に話せる話題なんて知っているはずもなかった。

「うーん……まずは自分のこととか、相手の知りたいこととか……」

なんとかうまいアドバイスをひねり出そうとするが、ありきたりなことしか月夜は言えなかった。

「自分のこと……無理ですね」

「逆に難しく考えるから迷うんですよ、何も気負うことなく、普通に話せばいいんじゃないですか？」

更に難しいことを月夜は言っただけだ。面識が少なく、なおかつ好意を持っている相手に普通に話せる人間なんて少数だろう。特にランスは、記憶を失う前から恋愛経験ゼロなのだから。

「そうかな……うん、普通にいけばいいんですよ」

ランスは恋愛経験ゼロだからこそ、それが難しいということとは理解

していなかった。

「そうですね、流石にずっと話っぱなしなのは無理でしょうけど・・・その辺は気合で」

グツ、と親指を立てる月夜。ランスもそれをまねした。

「食器持ってきたよ・・・って何してるの？」

親指を立て合っている怪しい二人を見ながら、楓は怪訝な顔をした。

「ありがと。これは秘密」

月夜は食器を受け取ってから、ランスに向かって笑いかける。ランスもまた、月夜に照れ笑いを返した。

「????」

楓は一人、ハテナマークを浮かべていた。

「それじゃ、行ってきます」

楓とリミナーの二人を連れ、月夜は、玄関まで見送りに来たランスと茜に手を振った。最後まで茜は、

「うちも買物に行きたいー」

と言っていたが、月夜にランスの事情を当たり障りなく説明され、連れて行くのも一人置いていくのも無理だと思う、と言われた茜は、渋々と留守番をすることになった。

「すいません、僕のせいで・・・」

申し訳なさそうに謝るランスに、茜は笑顔で答える。

「ランスさんのせいじゃないでしょ？行けなかったのは残念だけど・・・次があるもの」

留守番させられている原因が、実はランスにあるのを全く知らない茜は、逆にランスを氣遣う。

「それにランスさんもうちみたいいな女と一緒にいたら、安心して休めないでしょ？」

その言葉は、どことなく寂しげな響きを持っていた。

「いえ、そんなことないですよ・・・立ち話もなんですし、リビン

グにでも行きませんか？」

「そうしましょうか、うちお茶淹れますね」

ランスの後ろに茜はくっついて歩いていく。後ろの茜に気をかけながら、ランスは緊張していた。

二人はお茶を飲みながら、テーブルを挟んで座っている。普通に、と意識していたランスだったが、緊張でうまく脳は働いていなかった。

(何を話せばいいんだろ・・・)

うまく言葉を出せない自分を、ランスはもどかしく思っていた。

「こんなこと聞いていいのか分からないんですけど・・・ランスさんって、どうして記憶を失ってしまったんですか？」

ランスが考えていると、茜から話を切り出してきた。なんとか自分を落ち着かせながら、ランスはゆっくりと口を開く。

「実は、僕にも分からないんです・・・月夜君から聞いた話によると、車との接触事故らしいのですが」

そして、偶然にも身体への損傷はない。まるで本の中のように出来すぎた偶然に、ランスは違和感を覚えていた。

「大変だったんですね・・・それで、怪我はなかったんですか？」

「運が良かったみたいで、一週間程意識を失ってたそうですが怪我はないみたいです」

ランスは自分自身、それを言ってもどうしても違和感が拭えなかった。そんなことを露知らずの茜は、

「不幸中の幸いってやつですね・・・でも、やっぱり記憶がないって不安ですか？」

とランスに聞いた。

「不安・・・ですね、でも不思議なんです。不安はあるのに、僕の気持ちはすごく落ち着いているんです」

月夜にも言ったことを、茜にも言う。不安なのに落ち着いている、その矛盾を。

「うちにはなんとなく分かるかも・・・忘れたい記憶や消したい記憶は、人間にはいっぱいありますから」

愁いを帯びた茜の瞳は、ランスをドキリとさせる。

「そうですね・・・でも、失っていい記憶なんて何一つないと思いますよ」

「どうして、そう思うんですか？」

ランスは大分緊張がほぐれてきたようで、いつもの様に落ち着いた感じで自論を紡ぐ。

「哀しい記憶も楽しい記憶も、その人を成長させるものだと思います」

「でも、全てがいい方向に働くわけじゃないですよ？辛いことがあったから・・・悪い人間になってしまいう人だっているじゃないですか」

茜はランスの言葉に異を唱える。

「もちろん、そういう人間だっていますよ。でも・・・辛いから、哀しいから、それを理由にして、僕は逃げたくない」

現在のランスにそれを言える権利があるのかどうかは、誰にも分からない。それでもランスは、強くそう言った。茜の表情が暗くなる。

「うちは・・・逃げてばかりで、でもどうしようもなくて・・・どこにも、居場所がない・・・っ」

急に様子が変わった茜に、ランスは戸惑った。それに気づかずに、茜は辛そうに続ける。

「いつだって頑張ってきたのに・・・全てが、うちの手からすり抜けていく・・・うちはもうがんばれない、あなたみたいに強くない！」

それは、言うなれば嫉妬みたいなものだった。自分より勝っている人間がそばにいと、人は自分の弱さを分からされてしまう。今の茜にとって、ランスは強い人間だった。だからこそ茜は、弱い自分が、自分の境遇が許せなかった。

「僕は・・・強くなんてありません」

ランスの凜とした声に、戸惑いはなかった。茜は今にも泣き出し  
しまいそうな瞳を、ランスに向ける。

「僕は逃げてるだけなんだ、月夜からも、楓からも・・・心を殺  
して、違う僕を作り出してしまった」

「・・・どういう意味ですか？」

自嘲気味に、ランスは笑った。

「自分がして来たことの罪から、僕も逃げてるんですよ・・・心配  
してくれている、全ての人を裏切つてまでも、ね」

ランスのその瞳に力は無い、あるのはただ、暗い闇だけだった。

「・・・もしかして、記憶を失つてなんか・・・いないんですか？」

「どうでしょうね・・・僕自身、分からないんですよ。変な物言  
いになってしまいますが、記憶があつても僕は僕で、逆に記憶がな  
くても僕は僕なんですよ」

ランスの詩人めいた言葉は、茜には理解出来なかった。

「すいません、こんなこと言つても分かりませんよね。・・・でも、  
茜さんの居場所はあると思いますよ」

ランスの唐突な言葉に、茜は不思議な顔をした。

「月夜、楓・・・血はつながっていなくても、あなたたちは姉弟で  
しょう？独りじゃありませんよ」

ランスの雰囲気はどこか超然としていた。ランスという一人がそ  
こにいるのに、その存在は希薄ですぐにでも消えてしまいそうだっ  
た。

「・・・逃げてばかりのうちが、ここにいてもいいのかな？」

ランスに話すべき理由もない本心を、茜は口にしていた。

「安らげる場所で休むのも大切ですよ、それは逃げではないんです  
から。休息は必要です」

ありえない程の苦勞と辛さを知り、それを体験してきたランスが醸  
し出す雰囲気はやんわりとしていて、茜の傷ついた心を慰めた。

「・・・あなたは、不思議な人ですね」

「よく言われます、苦勞してますから」



苦笑するランスに、茜も微笑みをこぼした。

「どうしてあなたの前だと、強がれないのかなあ・・・会って間もないのに、月夜にさえ見せれない弱さや事情を、つい口にしちやいます」

「僕も、ついあなたの前だと自分を出してしまいますよ・・・お恥ずかしいです」

二人は笑い合う。

「うちの話、聞いてもらえる？」

茜の口調に堅苦しさはなく、信頼している人に話しかけるようなものになっていた。

「いくらでもどうぞ、僕もあなたのことを知りたい」

微笑みながら了承するランス。お茶を一口だけすすってから、茜は今回この家に戻ってきた理由をランスに話し出す。

「勤めてた会社でね、上司に言い寄られたの・・・二十歳も年上で、結婚して子どももいる人なのに」

「ほう・・・人としては最悪ですが、茜さん相手なら仕方ないかもしれませんね」

「仕方ないじゃすまされませんよ・・・何回断ってもしつこく言い寄ってきますし、何回も後つけられたりとか・・・怖かったんですよ？」

茜は思い出したくないことのように、話しを進めていく。

「断り続けてたら、社内に変な噂とか流されるし・・・仕事が出来る上司だったので、社長には信頼されましたし・・・誰にも相談出来なくて」

「辛かったんですね・・・」

「うん、仕事頑張ってたのに・・・そいつのせいで、居辛くなつて会社も辞めちゃった・・・情けないよね、うち」

落ち込みながら、自分を責めるように言う茜に、ランスは優しく声をかけた。

「情けなくなってますよ、すぐには辞めなかつたんでしょ

「？」

「うん、それから三ヶ月ぐらいしかもたなかったけど・・・」

「三ヶ月ももてば十分ですよ、そんな状況でも仕事をちゃんとこなしていたのなら・・・あなたは弱くなんてありません」

茜は溜め息をつきながら、テーブルに突っ伏す。

「・・・本当は、誰かにそうやって言っただけで欲しかったのかも・・・がんばったね、って褒めて欲しかったのかも」

茜は今まで頑張り続けて来た。大好きな両親がいなくなり、好きな人がいなくなり、それでもずっと頑張り続けてきた。ランスは茜の頭をなでながら、言う。

「今まで頑張つて来たのなら、休んでも誰も文句は言いませんよ」  
ランスの手を心地よく感じながら、茜は静かに聞いた。

「ランスさん・・・あなたは、どれだけ苦労してきたの？」

「さあ・・・僕は記憶がないので分かりません」

意地の悪い笑みを浮かべながら、しかし悪意は感じられない調子でランスは言った。

「ずるいよ・・・うちだけ言ったんじゃないよ、不公平だよ。記憶喪失のフリをするなんて、どれだけ辛いことがあったの？」

「フリ、でもないんですけどね・・・実は僕、女なんですよ」

「ええ!？」

茜はテーブルからがばっと上半身を起こして、驚く。ランスは深刻そうに続ける。

「手術して今はこんなですけど・・・男になりたい女なんて、世間一般じゃ変扱いされるでしょう？」

「そ、そうだったんだ・・・すごい苦労してきたんだね・・・だから、うちも本心話せちゃったのかもしれないけど」

茜がランスに本心を打ち明けられた理由は、何かを悟った者独特の雰囲気があるにはあったからだ。言うなれば、まるで神のような存在だろう。

「だから僕は・・・くっ、あはは」

話を続けていたランスが、こらえ切れなくなったように笑い出した。それを、茜はきよとんとした顔で見る。

「ははは・・・冗談ですよ」

「え？・・・ランスさん！」

ようやく騙されていたことに気づき、茜は怒る。

「いや、すいません、まさか本気で信じるなんて思ってたなかったんで」

「もう、真剣に聞いてたうちが馬鹿みたいじゃない！・・・馬鹿」  
すねたように怒る茜に、ランスは微笑む。

「会ったばかりなのに、そっちのほうがあなたらしいと思えるのは、なぜでしょうね」

「うちは怒ったり騒いだりしてるほうが似合ってるって言いたいのです？」

口をとがらせて言う茜に、ランスは照れたように頭をかきながら言う。

「いえ、ただ単に僕が茜さんの哀しい顔を見たくないだけです」

「・・・キザだね、でも、ランスさんに言われるとなんか嬉しいな」  
お互い頬を赤く染めながら、はにかみながら微笑んでいる。出会ったばかりの二人だが、お互い惹かれ合っていた。

「そうだ・・・今日のことは、月夜君と楓ちゃんには内緒にしてもらえると助かります」

「大丈夫、言わないよ。ランスさんがちゃんと、自分から言うまではね。その時には、うちにも理由を教えてね？」

ね、と微笑む茜に、ランスも微笑み返した。

「その時は、ちゃんと言うよ。信じてもらえないかもしれないけど」  
「さつきみたいな嘘はだめよ？」

「さつきの話より嘘っぽい、ほんとの話さ」  
ランスは苦笑しながら言う。

「信じるよ・・・あなたが、本当だって言うのなら」

「ありがとう、茜さん・・・それと、誤解してるようだから訂正しておきます」

「誤解？」

困ったような顔をしながら、なんて言えばいいのだろう、といった風にランスは話し出す。

「記憶喪失のフリ、ではないんです。少なくとも、月夜・楓・リミナの前では」

案の定、ランスの言葉の意味が分からない茜は首をかしげた。

「どういう意味？」

「なんとはいいいんですかね・・・心が、拒絶しているんです。罪の意識のせいなのかどうかは分からないけど、僕は彼らの前で以前の僕に戻ることを拒絶しているんです・・・分かりませんか？」それはランスの罪の意識による心の制御みたいなものだった。大半の人間は、全ての人間に対して同じ顔・性格で振舞えるものではない。好意を持って相手にはなるべく良く接したいだろうし、逆に嫌な気持ちを抱いている相手には一歩退いてしまおうだろう。例外もあるがそれは、大抵は好きか嫌い、もしくは親しいか親しくないか、で分かれている。ならなぜ、親しいはずの月夜・楓にランスは他人の自分でしか接することが出来ないのか？答えは簡単だった。誰だって、親しい者を裏切り傷つけたのなら、気づかなくても自ずと一歩退いてしまおうからだ、例えそれを相手が許していたとしてもだ。

こうして、ランスは罪の意識により、月夜や楓たちに以前のように振舞えない。むしろ、彼らの前では他人になることでしか自分を保てなかった。言うなればそれは、心の強い自己防衛機能みたいなものだろう。

「うちにはよく分からないけど・・・月夜たちは、あなたのことを本気で心配してると思うよ？以前のあなたが帰ってくれば、きっとあの子たちは喜ぶと思う」

「出来ないんです・・・僕の、心が弱すぎてそれが出来ないんです・

「・・・！あいつらが傷ついているのを僕は自分の内側から見ているのに、自分が傷つくのが怖くて何も出来ないんだ・・・！」

「しない、ではなく、出来ない、と泣いているように叫ぶランスに、茜が落ち着いた声で優しく言う。

「安らげる場所で休むのも大切、それは逃げじゃなくて休息・・・そう言ってくれたのは、ランスさんだよ？今はだめでも、いつかは強くなれるよ、あなたなら絶対大丈夫」

理由を何も知らない茜の言葉だからこそ、現在のランスを癒すことが出来た。現在のランスにとって、恐怖の対象となるのは理由を知っている親しい人間だからだ。

「強く・・・なれるかな？こんな、僕が」

「なれるよ、絶対に・・・」

弱弱しいランスの問いに、茜は強く言う。二人が惹かれあつたのは、理由を知り合わない弱い人間同士だったからかもしれない。

「はは、茜さんが言うと、絶対そうなる気がします」

弱弱しい笑いをこぼしながら、ランスはまっすぐ茜を見つめる。

「そうかな？・・・ランスさんが言うのなら、そうかも」

茜もまた、ランスをまっすぐ見つめる。・・・どれ程の間そうしていただろうか、二人は言葉を交わすことなく、ただ見詰め合っている。突然、小さな地震が二人を襲った。

「うわっ・・・」

「きゃっ・・・」

二人はとっさにテーブルにしがみついて、地震をやり過ごす。揺れはすぐに収まり、家の中は静寂に包まれた。

「大丈夫ですか？」

「うん・・・少し驚いたけど、小さくて良かったね」

ランスの心配する顔を見ながら、茜は微笑んで返す。

「あ、もうお昼だね・・・すぐにお昼ご飯の用意するから」

壁にかかった時計に目をやり、茜が立ち上がる。地震のことなどもう頭にはなかった。

「あ、手伝うよ。茜さん程じゃないけど、それなりに出来るから」  
茜につられてランスも立ち上がる。ランスは地震に対して、妙な違和感を感じていた。

「いいの？じゃあ二人で一緒に作ろう」

「はい、任せてください」

のほほんとした会話をしながら、台所に歩いていく二人。

（なんだろうな、この胸騒ぎ・・・ただの、地震のはずなのに。まあいいか・・・）

ランスの胸中は、先ほどの地震に対する不安を感じていたが。すぐに茜と作る料理のことに気をとられ、その不安は頭の片隅に追いやられてしまった。

世界を変える三つ目の歯車が動き出したことなど、今の二人には知る由もなかった。

傷（後書き）

PCが壊れて投稿出来なかった  
—  
—

車通りはそれなりにある、しかし人通りはそんなにない。そんな街中を月夜・リミーナ・楓の三人は歩いていった。茜とランスの二人を残して買い物に出てきた三人は、歩いて駅前のデパートを目指していた。

「どうして私までお買い物につき合わされなきゃいけないの？」

家を出てから不満そうな顔をしながらも、黙ったまま月夜について来ていたリミーナが数分程してからようやくその不満を口にもらした。

「たまにはいいだろ？お前だって、家で何かするわけでもないだろうし」

茜とランスを二人つきりにするため、という理由がばれないように、そんなにリミーナに月夜はいつもの調子で答える。

「冬休みぐらい家でゆっくりしてたっていいじゃない」

「お前なあ・・・ただでさえ外見が不健康そうなんだから、少しは外出て肌でも焼かないと身体に悪いぞ？」

口をとがらせているリミーナの肌を見ながら、月夜は溜め息をつく。リミーナの真っ白い肌は、出会った時から全く変わらない。それでも悪い病的なイメージではなく、美しく儂い雪のようなイメージを見るものを感じさせるのは、美少女なりミーナだからこそだった。

「確かに肌が黒いのは健康的に見えるけど・・・日焼けは皮膚がんの危険性があるじゃない。それに私は、焼けにくい体質だからしよ  
うがないの」

「それもそうだけど、程々ならいいだろ。ま、冬の弱い日差しじゃあんまり肌が焼けるわけじゃないんだけどさ」

「大体から、お兄ちゃんに健康のことなんて言われたくないよ。貧弱で、私より不健康そうに見えるもん」



「うつせー、貧弱だつていいんだよ、その辺はもう諦めた」

「布団にすら潰される癖に・・・きゃー」

リミーナの皮肉を含んだ物言いに、月夜はリミーナの両頬を引っ張る。

「この口か、そんなこと言いやがるのは、もっかい言ってみる！」

「いひゃいひゃいひゃいー！」

大人気ない月夜と、両頬が伸ばされて面白い顔になっているリミーナを、楓は楽しそうに見ている。

「ん？どうかしたか、楓」

楓の視線に気づいた月夜は、リミーナの両頬から手を離さずに聞いた。

「相変わらず、仲の良い兄妹だと思って」

「仲良く見えるか・・・？」

「ひゃなしてー！」

ジタバタと暴れているリミーナを軽く無視して、楓は言葉を続ける。

「仲良く見えるよ、羨ましいなああって思う・・・けど」

そこで楓は一度言葉を区切った。

「けど？」

「私もリミーナちゃんのお姉ちゃんだもんね」

そう言つて微笑む楓は、前みたいにランスと月夜の兄弟間やリミーナと月夜の兄妹間の妙な親しさに対する切なさや寂しさを感じさせなかった。

「そうだな・・・どちらかと言えば、楓はお姉ちゃんというよりお母さんっていう感じだけど」

最近の楓から感じた印象を率直に月夜は述べたが、当の楓は怒ったように言う。

「私はそんなに老けてませんよー、だ」

と言いつつも、最近の楓はこの八ヶ月の間にかかなりの成長をしていた。本人にそこまで自覚はないので、否定するのも仕方のないことではあるが。

「いい加減ひやなしてー!」

「ああ、悪い悪い」

悪びれた様子もなく、月夜はリミーナから手を離した。白かった両頬は、少し赤みを帯びている。

「頬が伸びちやったらどうするのよ!」

両頬を押さえながらかみつくように月夜に怒るリミーナ。

「ハムスターみたいで可愛いんじゃないか?」

「それいいね、更に小動物っぽくなっちゃう」

からかうように言う二人に、リミーナは怒りを通り越して呆れを感じ、大きな溜め息をついた。

「はあ、全く・・・私から見たら、二人の方がよっぽど仲良く見えるよ」

その言葉に切なさや寂しさは含まれてはいなかったが、どうしてそれで進展しないの?という軽い苛立ちのようなものが含まれていた。元より鈍感な月夜と、恋愛に関して鈍感な楓は、もちろんそんなことに気づくはずもない。

「そりゃ付き合いがお互い長いからな」

「そうだね、もう十年以上かな?」

「十年以上も・・・?」

十年以上もこの二人は何やってるんだろ・・・、とちよつとだけ心配になったリミーナだった。自分が口を出すことじゃないのはこの前ので分かったし、天然二人相手にツッコミをいれる気力も起きなかったので、リミーナはそれ以上追求するのは止めることにした。

それからはずきとうに当たり障りのない世間話をしながら、三人は駅前へと歩いていった。

駅に近づくにつれ、人通りは増していった。冬休みというだけあって、学生や子連れ夫婦などが平日より数倍の数でこつた返している。デパートや駅の内部にある店などは、もう正月シーズンの売り物を並べ、正月バーゲンなども行われていた。そんな光景を見なが

ら、月夜はしばし思いふけた。

（もう正月か・・・一年つて早いもんだよなあ。そういえば、今年  
はクリスマスパーティーとか忙しくてやれなかったな）

今は戦争が起きてないとはいえ、それでも日本はアメリカと敵対し  
ている関係にあるが、年中行事などは別だった。クリスマスやバレ  
ンティンなどといった外国の行事などは、日本でも行われている。

実際は名前をまねしているだけであって、内容は国毎によって違う  
物ではあるが。

（一年に一度の日、か。そういえば・・・）

「どうしたの？」

立ち止まり物思いにふけっていた月夜に、前を歩いていた楓が振り  
返って不思議そうな顔で声をかけた。

「ああ、いや、なんでもないよ」

「変な月夜、ぼーっとしてないで早く行こうよ」

楓に促され、月夜は止めていた足を動かし前の二人に追いつこうと  
する。

（忙しかったから、しょうがない、か）

その表情は冬の空のようにどんよりとしていて、どことなく寂しそ  
うだった。

デパートの中も人混みで賑わっていた。月夜は、

「リミーナ、迷子になるなよ」

と注意を促す。

「迷子になんてなるわけないでしょ、子どもじゃないんだから」

見た目は年齢より幼く、中身は大人びてはいるが子ども、そして実  
質十歳のリミーナは怒ったように言い返した。

「子どもじゃなかったってこれだけ人がいたらはくれるつつうの、大  
体からお前はまだ子どもだろ？少なくとも今は普通の人間なんだし、  
変な人についていくなよな」

「私はお兄ちゃん程ぼーっとしてないから大丈夫だもん」

「はいはい、いつまでもお喋りしてないで。早く買い物しちやおうよ」

放っておけばいつまでも言い合いを続けてる二人を、楓が止める。この二ヶ月間で、楓が学んだことだった。

「そうだな、さくさく終わらせるか」

そして三人は歩き出した。

「・・・どうしたもんかなあ」

一時間後、月夜は二人とはぐれていた。正確に言えば、月夜がトイレに行っている間に二人が忽然と姿を消していたのだった。

「この場合は俺が迷子・・・なのか？」

納得がいかない、と言った感じで月夜は独りごちる。なんだかなあ、と思いながら、月夜は二人を捜すようにきよるきよると首を動かす。右を見ても人、左を見ても人、もちろん前を見ても人がいる。しかしどれも見知らぬ顔ばかりで、二人の姿はなかった。

「これだけ人いたんじゃ、捜すだけ無駄か・・・」

早々に諦めた月夜は、買い物袋を持って歩き出す。

「まあ、買い物ももう終わってるし、入り口で待ってればいいか」  
月夜はこの時理解していなかった。月夜がトイレに行く時、どうして二人が荷物を持つのを拒んだ理由を。

歩いて数分で月夜は目的の場所にたどり着いた。荷物を横に置いて、ベンチに腰掛ける。寒空の下、相変わらず薄着な月夜は、行きかう人々を見ながらぼーっとしていた。

「みんな楽しそうだなあ・・・」

羨ましそうに呟かれた自分の言葉に、月夜の気持ちは落ち込む。

（確かに俺も今の生活に不満があるわけじゃないけど・・・どうしてこんなに問題ごとばかり積もってるんだらうな）

行きかう人々はみな、楽しそうに笑い合っている。友達同士、家族連れ、手をつないでいるカップルなどが月夜の目に映る。

(ん・・・？もしかしてあれって)

視線の先にいる手をつないでいるカップル、月夜はその二人に見覚えがあった。同じ学校で同じクラスの友達、見間違えるはずもない。利樹と紫の二人だった。

「なんだよ・・・随分学校とは違うじゃねーか」

見慣れた二人を見て、月夜がそうもらすのも当たり前のことだった。学校では多少親密そうになったものの、煮え切らないような二人が今は誰が見ても恋人同士にしか見えないからだ。お互いに照れくさはなく、その表情は幸せに満ちた笑顔をしている。利樹はいつもの一・五倍かつこよく見え、紫はいつもの二倍可愛く見えた。そんな二人を見て、月夜はなんとなく胸に切なさを覚えた。

「・・・ちえっ、幸せそうだよな」

二人は月夜には気づいていない。月夜もまた、二人の邪魔をするわけにもいかないな、と声をかけないことにした。すぐに二人は月夜の視界から消え、人混みの中に姿を消した。

「あーあ・・・」

行きかう人々の大半は、幸せそうな、悩みのなさそうな笑顔を浮かべている。実際は悩みのない人間なんていないことを月夜は理解していたが、それでもそんな人々を見る気にならず、昼間なのに灰色の空を見上げる。朝方は晴れていたはずの空は、今はどんよりとした雲に覆われている。まるで今の俺の状態みたいだな・・・、などと詩的なことをついつい考えてしまう。

「空は必ず晴れるのにな・・・問題事多すぎて、俺の心は晴れてくれそうにない」

次から次へと積み重なっていく問題事、忙しかったとはいえ忘れ去られてしまった一年に一度の大切な日の事、失ってしまった体の一部のようなものだった力の事・・・いくつもの要素が、月夜を詩人にしていった。周りには人だらけなのに、誰もいない世界に迷い込んでしまったような寂しさが月夜に襲い掛かる。実際に月夜は迷子で、顔も知らないような他人なんてもいなくても変わらないもので

はあるのだが。

そんな変な気持ちのまま月夜が空をばーっと見つめ続けていると、  
「フーキーヤ」

と聞きなれた声が月夜に聞こえた。

「ああ、どこ行ってたんだ？」

何かを隠しているような、なおかつ嬉しそうな顔をした楓が振り返った先にいた。その隣には、どことなく悩んでいるような顔のリミナーがいる。

「ちよつと買い忘れてた物があったの。ごめんね、急にいなくなっちゃって」

「いや別にいいよ」

どうして自分の声が空々しく聞こえるのか、月夜には分からなかった。

「もしかして・・・怒ってる？」

月夜のおかしい感じ取った楓が、問いかける。

「別に怒ってないよ、買い物はもう終わったんだろ？帰ろうぜ」

月夜は投げやりな感じで言うてから、荷物を持って立ち上がる。そこでふと気になった月夜は、楓とリミナーに聞いた。

「そっぴや何買ったんだ？荷物あるなら俺が持つよ」

「え、えーと・・・軽い物だから大丈夫だよ、ね？リミナーちゃん」  
「う、うん」

変な動揺の色を見せている二人に、月夜は仲間はずれにされているような感覚を感じて更に落ち込んだ。自分を置いてどこか行ったのも、仲間はずれにするためか？などありえないようなネガティブなことまで考えてしまう。忘れ物と称してどこかへ行っていた二人は、手に荷物を持っていなかった。それが更に月夜の不審と疑惑を高めることになったわけなのだが・・・実際は、二人が買ったものは二人の服のポケットに入っている。しかし今の余裕のない月夜は、それに気づくことが出来なかった。

「そっか・・・帰るか、雨降り出しそうな天気だし」

憂鬱な気分を拭えないまま、月夜は歩き出した。立ち直りが早い月夜だが、一度落ち込み出すとどこまでも止まらない悪い癖がある。大抵はそれをフォローするのが楓の役目だが、今の楓には何かを隠しているようなよそよそしさがあった。だから特に何かを言うわけでもなく、楓とリミーナは小走りで前を歩く月夜の横に並んだ。・突然、地面が揺れだした。  
「つと・・・地震か？」

月夜は荷物を持っていたため、いきなりの地震に足元がふらついた。倒れるほどではなかったが、とっさにリミーナと楓が月夜を支える。

「大丈夫？」

「ああ、ありがと」

「いきなりだったからびつくりしちゃった、弱くて良かったね」

「だな、すぐに収まったみたいだし・・・もういいよ」

月夜は二人から体を離し、また歩き始める。二人もそれにならってすぐに歩き始めたが、いきなりリミーナがしゃがみこんだ。

「どうした？・・・!？」

地震は収まっていたはずなのに、月夜はまた足元がふらつくのを感じた。

「どうしたの!?二人とも」

月夜は倒れないようにふんばろうとしたが、ふらついて尻餅をつく。そして、異常なまでの悪寒を感じた。

「な、な・・・なんだよ、これ」

全身の毛が逆立っている。今まで感じたことのない悪寒に、月夜は体を震わせた。先程しゃがみこんでいたりリミーナも、何かに怯えるように自分の体を抱き締めながら震えている。尋常じゃない様子の二人を見ながら楓は、どうすればいいか、と右往左往している。

「きゅ、救急車呼ぶ？」

「だ、大丈夫・・・」

「う、うん・・・だ、大丈夫だよ、お姉ちゃん」

二人の声は震えていた。楓がそうであるように、二人にも何が起き

ているのか分かっていなかった。

「でも……」

「大丈夫だって、心配するなよ」

心配する楓に、平静を装いながら月夜は声をかける。それでもまだ、体は震えていた。月夜とリミーナが感じているのは、絶対的な恐怖。死という概念が薄い二人だが、今の二人が感じているものは人間にとって死の直前に感じ取るような、そんな恐怖だった。駅前にいる多くの人々は、しゃがみこんでいる月夜たちのことが目に見えていないかのように、歩き、過ぎ去っていく。そんな世間の冷たさを感じながら、楓はおろおろとしている。

「だって、どうすれば……」

様子のおかしい二人を前に、今にも泣き出してしまいそうな顔をしている。

「大丈夫、だって」

月夜は震える体を抑え、なんとか立ち上がる。荷物を地面に置いて、不安そうな顔の楓の頭をなでる。

「楓が取り乱してどうするんだよ」

強がり言いながら、月夜は笑ってみせた。頭をなでられ、楓も少しだけ落ち着きを取り戻した。

「だって、普通心配するでしょ……」

「楓は優しいもんな」

月夜もまた、自分にとって愛しい相手が落ち着いたことによつてどうにか落ち着きを取り戻した。

「……むー、私は蚊帳の外？」

どうにか震えを抑え、立ち上がったリミーナは口をとがらせた。

「あ、あはは、ごめんね。でも、リミーナちゃんのこと、心配だよ？」

楓はしゃがんでリミーナのことを抱き締める。自然と、リミーナも震えが収まった。

「しっかし……なんだったんだろうな、今の」



落ち着き、震えが収まった月夜は悩んだように声を出す。

「私にも分らない・・・なんか、怖い」

リミーナの瞳には、恐怖の色が浮かんでいる。

「地震と関係があるのかな・・・？」

「どうだろ、もし俺とリミーナだけが感じたものなら・・・」

月夜は最後まで言わなかった。しかし、それだけでもそこにいる全員が納得するには十分だった。

「とにかく、考えてても仕方ない、帰るか」

「そうだね・・・きゃっ」

突然降ってきた雨に、楓が小さな悲鳴をあげる。

「ちっ、やっぱり降ってきたか、どうする？」

舌打ちをしてから、月夜は二人に聞いた。

「少し、雨宿りしていこ。お昼ご飯食べてるうちに止むかもしれないし」

「私も賛成かな」

話してる短い間にも、雨は少しずつ強さを増しているのが見て取れる。月夜は荷物を持ち直し頷いた。

「そうするか」

そして三人はすぐに走りだし、近場の喫茶店へと避難した。

喫茶店の中は薄暗く、人が殆どいなかった。駅に数多くの人が出たせいか、喫茶店の中はまるで別世界のように感じられる。三人は店員に案内され、店の入り口近くのテーブル席に座った。窓から見える外の世界は、一段と強くなった雨が視界を遮っている。

「ふう、雨宿りにして正解だったな。そのまま帰ってたら、間違いなく風邪ひいてるな」

冬の冷たい雨に晒されたら、五分ともたず風邪をひいてしまう。今の強い雨なら、尚更のことだろう。月夜の対面側には、並んで楓とリミーナが座っている。最近リミーナは、月夜より楓になついているようだった。

「この時期にこんなに雨が降るなんて、結構珍しいよね」

楓は物憂い顔で窓の外を見つめながら、そうこぼす。実際はそんなに珍しいものではないが、月夜とリミーナの異変の後なだけあって、楓は特にそう感じられた。

「ちよつと濡れただけでも寒いね、ほんとに風邪ひいちゃう」

くしゅん、と小さくしゃみをリミーナはする。心なしか、唇が青ざめている。月夜はおもむろに着ていた上着を脱ぎ、テーブルの上からそれを投げつける。

「着とけ」

相変わらず長袖の上着の下は半袖の月夜だが、喫茶店内はそれなりに暖房が効いているため寒くはなさそうだった。

「いいの？」

「前も言っただろ？俺は寒い方が好きなんだ」

「ん・・・ありがと」

はにかんだ笑顔を浮かべながら、リミーナはその上着に袖を通す。ぶかぶかで手も出ないが、本人は全く気にしていなかった。

「とりあえず飯食おうぜ、飯」

月夜の言葉に従い各々メニューを開く。そしてその数分後に料理の注文をした。

「雨、止まないな」

運ばれてきた料理を食べながら、月夜は窓の外を見て呟く。

「通り雨じゃないっほいし、当分止まないんじゃない？」

同じく料理を食べながら、当然のように楓が言う。リミーナはそんな会話を聞きながらも、夢中でぱくぱくと食べている。

「雨宿りの意味ないな、せめて弱くなってくれればいいんだけど」

「だめそうなら、傘買って帰ればいいよ」

「まあ、それもそうか」

月夜はそれでも窓から視線を外さずに、何かを考えているような顔をしている。何かを話しかけようとした楓だったが、話しかけづら

い雰囲気を醸し出している月夜を見て、それ以上は何も言わなかった。

「はぁ・・・」

とある部屋の一室で、その溜め息はもらされた。

「はぁ・・・」

幾度となく吐き出されたその溜め息からは、苦悩の色がありありと見て取れる。三十代程の白髪青年は、眉間にしわをよせて椅子に背を預け座っている。

「絶好の機会だというのに・・・」

ぼつりぼつりと呟かれる言葉には、苛立ちと苦々しさが含まれている。かつてアダムとイブという生物兵器を使役し、月夜を襲った張本人・・・それが彼だった。

「兵力が足らん、金が足らん・・・」

物々と独り言をもらす彼は、今大きな悩みを抱えていた。

二ヶ月ほど前のリミナーの事件で、アメリカの大統領が暗殺された。未だ混乱の抜け切れていないアメリカを攻めるには今が絶好の機会だったのだが、現在の日本にはそこまで力が残っていなかった。一騎当千の生物兵器がいるのならばまだしも、財力も兵力も豊かではない日本にとって、今のアメリカですら強敵だった。

「先の大戦で負けて以来、日本国民は墮落した。死を恐れ、負けを恐れ・・・」

かつての日本国民は死を恐れることなく、己の護るべきもののために勇敢に死んでいった。国のため、家族のため、愛しい人のため・・・しかし、現在は決してそのようなことはない。

「平和を貪り、負け犬として他の国々に見下され、のほほんと生きている・・・そんなことが許されてたまるものか！」

怒りを露に、呟かれていた言葉はいつの間にか叫びへと変わっていた。彼にとって、国民は国を護る道具であり、自国に脅威となつて

いる国と戦わない者はすべからく墮落した人間だと思っている。彼の父親もかつて軍の総司令部であり、第三次世界大戦を起こした張本人だった。血は水より濃い、その父親の血は、しっかりとその子どもに受け継がれていた。

「だがしかし・・・どうすればいいものか」

どうにか落ち着きを取り戻し、ゆっくりと思考をかけめぐらせる。どんなに怒りを叫んだところで、今の現状が打破出来ないことなどすでに彼は理解していた。

「無理やり徴兵し、突撃させるか・・・いや、人がいたところで装備が足りん・・・かつての連合国をそそのかしてその機に乗じる方が得策か・・・」

「やめておけ、結果は見えている」

男の思考を遮るように、抑揚のない声が部屋に響いた。

「だ、誰だ!？」

突然の声に驚いた青年は、部屋の中を見回す。そして、壁に背を預けもたれかかっている人物を目に留めた。黒く腰ほどまでの髪にはウェーブがかかっており、瞳は赤く、鷲のように鋭い。多少伸びている髭には威厳を感じさせられる。そして何よりも一番目を引くのは、中世ヨーロッパの貴族のような服装だった。赤を基調としたその服は一言で言うのなら派手、しかし尊厳のようなものが強く感じられた。派手な服装に合わない漆黒のマントは、怪しさを彷彿させる。

「私が何者なのか、そんなことはどうでも良い。今は時機ではない」

「き、貴様は一体何を言っているんだ!？」

青年は立ち上がり、腰に下げている拳銃で即座にその男に狙いを定める。

「無駄なことだ、愚かな人間が作り出した物ではこの私に傷一つつけれない」

背筋に感じるじっとりとした嫌な汗を抑え、青年は発砲した。次の瞬間、青年は片手で頭をつかまれ持ち上げられていた。その男の身

長は、青年の身長をゆうに上回っている。

「事を急ぐな、君にはまだ君の役割がある」

「がっ……は、はなせ！」

青年は恐怖を感じ、必死で相手の腕をにぎる。しかし、効果は全くなかった。淡々と男は続ける。

「近いうちに、攻め入る時機がくるだろう。それまで、力を温存しておくがいい」

「やめ……ろ！」

徐々に力が込められていくその手は、みしみしという音を奏でる。

「残念なことに忌々しい呪いにより、私は手を下すことが出来ない。君の働きに期待している」

「あ、がっ……」

頭を離された青年は力なく床に倒れる。どうやら意識を失ったようだ。男は青年を顧みることなく、漆黒のマントを翻し空気に溶けていった。

「雨、止まないな」

月夜自身何度目か覚えていない言葉を、重々しく吐き出した。昼食を食べ終えた三人は、テーブル席から外の様子を見て溜め息をついている。雨は大分弱くなり、小雨程度にはなっていたが、それでもこの時期雨の中を帰りたいとは誰も思わない。そう、ここにいる、一人を除いては。

「たまには、いいんじゃない？雨の中歩いて帰るのも……風邪ひいちゃうかもしれないけど」

楓のその言葉は、諦め半分、楽しさ半分といった感じで紡ぎ出された。

「二十分も雨の中歩く気か？下手したら肺炎起こすぞ」

呆れたような月夜の言葉に、楓は気にした様子もなく言う。

「たまにはいいんじゃない？子どもの頃は、どんなに雨降ってたっ

て遊び回ってたじゃない」

楓のその言葉に、月夜はふと過去のことを思い出す。そういえば、あの頃は悩みなんて全くなかったな、と。雨が降っていても、雪が降っていても、あの頃はみんな面白おかしく外で遊びまわっていたなあ・・・と懐かしく感じる。

「・・・そうだな、たまにはいいかもしれない」

「二人で勝手に進めているのはいいんだけど・・・私は嫌よ？」

二人の会話を黙って見ていたリミーナが口を挟む。雪のように肌が白い癖に、リミーナは寒さに強くなかった。更に陽の光もあまり好きじゃないというわがまま娘だった。

「俺の上着貸しといてやるから、今日ぐらいは付き合えよ」

半袖の月夜は笑いながら言う。なんというか、その格好は見ているだけで寒さを感じさせる。

「じゃあいこっか」

支払いを済ませ、三人は外に出る。喫茶店内と外の温度差に、長袖を着ているリミーナですら少し震えた。

「こうすれば、少しはましかも？」

楓はリミーナの手を握った。冷たいリミーナの手を、楓の温かい手が包み込む。

「それじゃ俺はこっち」

場の雰囲気の様子、月夜は楓のもう片方の手を握る。寒い冬、その上雨まで降っているという状況なのに、月夜と楓の二人の間の温度が上昇したように感じられる。お互い、仄かに頬を赤く染め、照れた表情を浮かべている。

「むー」

とリミーナが小さくうなづいていたが、二人はそんなことを気にしなかった。

「さて、帰るとするか」

「そうだね・・・」

三人は歩き出した。ぽつぽつと雨が降る空を見上げ、月夜は小さく

眩く。

「あの頃みたいに・・・雨が全てを流して、あの頃に戻れたらな・・・」

その声には現在の月夜の状況に対する、哀しみや辛さが混じっていた。あの頃は、遊んでいる間ずっと雨が降り止まない空のように、ずっとあの頃の状態が続くと月夜は信じていた。しかしそれは、奇跡に過ぎなかった。空も、人も、日常も・・・全てが目まぐるしく変わっていくのだから。

「何か言った？」

「いや、なんでもねーよ」

だからこそ、少なくとも今の幸せを大事にしようと思いつながら、月夜は冷たい雨の下、歩いていった。

三人が家に帰ると、温かい笑顔を浮かべた茜が迎えてくれた。

「おかえりー、ってどうしたのみんなずぶ濡れになって!？」

「いや・・・まさか途中でまた強くなるとは・・・な？」

「うん・・・予想外でした。どうしてそれぐらいのこと分かってなかったんだろ私・・・」

「上着たくさん羽織ってても、全部濡れたら意味ないよね・・・くしゅん」

一番ひどいのは月夜だった。荷物を持っていた手はかじかみ、顔色も両腕も青白くなっている。楓も同様に、衣服が肌に張り付き唇は青くなっている。リミーナに至っては、月夜を含め上着を二枚重ねて着ているので、正に濡れ鼠だった。

「ごめんね・・・私のせいで」

「いいから、先風呂行って来いよ。ほれ、リミーナも一緒に」

謝る楓の背中を軽く叩き、リミーナも同様に促す。

「ちよっと待ってて、すぐタオル持ってくるから!」

駆け足でタオルを取りに行った茜は、言葉通りすぐに戻ってきた。

そして持ってきたタオルを三人に手渡す。

「軽く拭いて、楓とリミーナちゃんはすぐにお風呂に、月夜はそこで服脱いじゃないさい」

「はいはい、男はこういう時便利だな、つと」

服を脱ごうとする月夜は、自分に集まった視線に気づいた。月夜を除いた全員が、なぜかそれを見ている。

「・・・何見てんだよ！さっさと風呂行け風呂！」

ぺちぺちと楓とリミーナを叩いて促す。はっ、と我に返った二人は、家が濡れない程度に体をタオルで拭き、お風呂場へと歩いていった。月夜は二人を見送ってから、溜め息混じりに言葉を吐き出す。

「大体から、俺の裸見てなんになるつつうんだよ・・・姉さんもいつまでも見てんじゃねえ！」

「月夜の成長記録でもつけようと思ったのに・・・あの頃と比べて、今の月夜はどれだけ成長したのかな？」

からかう様に言う茜に、月夜はわなわなと震えて叫んだ。

「いいから！さっさとあっちへ行けー！！！」

「月夜ってばつれないー」

あはは、と笑いながら茜はリビングへと姿を消した。ぜえぜえと肩で息をしながら、ようやく静かになった玄関で月夜は服を脱ぎ始める。さすがにパンツだけは脱がなかった。

「濡れてただけあって、服着てないほうが暖かいな・・・」

家が濡れないようにタオルで体をよく拭いてから、茜にまたちよっかいを出される前に月夜は早々と自分の部屋に戻っていった。

月夜が着替えてリビングに行くと、楽しそうにお喋りをしているランスと茜がいた。

「お、ちゃんと着替えてきたんだね、偉い偉い」

入って来た月夜に気づいた茜は、子どもを褒めるように言う。

「子どもじゃないんだから、当たり前だろ？」

月夜は口を尖らせて、いじけるように言う。



「おかえりなさい、大変だったそうだね」

「あー、うん、ただいま・・・」

月夜はこそつとランスに顔を寄せて耳打ちをする。

「それで、少しは進展したの？」

「それなりに、かな？実は緊張しててよく覚えていないんだ」

苦笑いしながらランスも月夜に耳打ちを返す。だらしないなあ、と人のことを言えない月夜はぼやいた。

「二人して何こそそやってるの？」

「いや、なんでもないよ」

「怪しいー」

じとーとした目で茜に見られ、月夜はなんとか誤魔化する。

「男同士の内緒話ってやつだよ」

実際はあんまり誤魔化せてなかったが、

「ふーん」

と茜は興味をなくしたかのように素っ気無く返す。昨日と比べ、随分明るくなっている茜を見て、月夜は少しほっとしていた。

「案外意外な組み合わせがありだった、のかもな」

一人呟きながら、月夜は絨毯の上に寝転んだ。お風呂が空くまで、そこでだらだらする気のようにだ。ふと何かを思い出した月夜は、寝そべったままランスと茜に聞いた。

「そういえば、さつき地震あったよね？」

「あつたねー、すぐ収まったけど」

「地震なんてあつたかい？」

ん・・・？と月夜は疑問の色を浮かべる。同じ場所にいたはずなのに、どうして両者の意見が異なるのか不思議に思った。まあ、緊張してて覚えてないなら、小さな地震のことなんて気にも留めないかと自分なりに納得し、月夜はそれ以上何も言わなかった。

「それにしても・・・なんだつたんだろうな、あの感覚」

先ほどの地震の後に感じた悪寒。嫌なことが起きる前に大抵月夜はその類のものを感ずるが、今回は別格だった。しかし、月夜があ

時感じていたのは嫌なものだけではなかった。思い出してしまっていた、母に優しくされていたあの時の感覚・・・それと似通った懐かしさのようなものを、月夜は確かに感じていた。

(いいや・・・今の俺じゃ、考えるだけ無駄だし)

いや、いつでも無駄か。と苦笑しながら付け足し、月夜は疲れた体を絨毯に任せ、眠りへとついた。

相も変わらず、俺は夢を見ているようだ。夢ばかり見て・・・どれだけ俺の睡眠は浅いのか？と嘆きたくなる程だ。まあそんなことはどうでもいい。今回の夢は、今までと何かが違っていた。これまでの夢は、自分が忘れていたことを思い出す為の夢に過ぎなかった。

自分が体験してきたことが、不鮮明ながらも夢で思い返される、そんなものばかりだった。しかし今回はおかしい。俺はこんな光景を見たことがないし、現実世界ではありえないことだろう・・・。

夢の中では、人間と悪魔と天使がいた。実物は見たことがないのであくまで俺の予測ではあるけど。とにかくその三種類の生物は、戦争をしていた。見て取れる限りじゃ、人間・天使の軍対悪魔の軍といったところだった。大多数の人間、少ないながらも人外の力を持つている天使・・・悪魔は、数でも力でも押されていた。場面は早送りがされているかのようにコマが飛び、気づけば、悪魔と思われる軍は大将っぽい大きな悪魔を除き、全て倒されていた。どちら側の軍にも、多くの死体がある。俺はそれを、虚ろな瞳でただ見ているた。

最後の悪魔は抵抗したが、夢の中では数十秒・・・おそらく現実なら数十分の長い戦いを経て、戦争は終わった。言うまでもなく、悪魔の軍は負けていた。わけが分からないまま、その光景は俺から遠ざかり・・・そして俺は夢の中で、気を失った。

ざわざわとリビングから聞こえる喧騒に、月夜は目を覚ました。

(夢を見ていたってことは、寝ちまったのか・・・今、何時だ?)  
目をこすりながら、月夜は辺りをきよるきよると見回す。外の暗さから、もう時刻は夜なのだと判断した。リビングの方が何か騒がしい、それに気づいた月夜は、立ち上がってリビングを覗き込んだ。

「何やってんの?」

寝ぼけ眼で、ぼーっとながら月夜はリビングにいる全員に聞いた。テーブルの上にはケーキがあった、豪華な料理もあった。

「あ、もう起きちゃったんだ・・・」

そう呟いてから、はっ、となつて楓は口を閉じる。

「ん?よく聞こえなかつただけけど・・・」

「な、なんでもないよ。夕飯の準備中だから、お風呂はいつてきなよ!」

月夜はハテナマークを浮かべながら、よく分からないまま楓に背中を押されてリビングから追い出された。一人残された月夜は、未だによく状況がつかめていない。

「・・・遅めのクリスマスパーティーか何かか?もしくは・・・まあ、そっちは期待するだけ無駄か」

はあ、と溜め息をついて、月夜はお風呂場に向かった。鈍感な月夜は、いつだって鈍感だった。

月夜がお風呂から出てくると、それを待ちわびていたように全員が各々の椅子に座っていた。

「で、何やってんの?」

用意されたケーキに、先ほども見た豪華な料理。多少の期待を持ちながら、月夜はその場にいる全員に聞いた。

「何って・・・それよりほら、早く椅子に座りなよ」

楓に促されて、月夜は椅子に座った。そこで月夜はようやく気がついた、ケーキにはろうそくが十六本たてられていることに。

「・・・これってさ、もしかしなくても」

忘れられていたと思ってた月夜は、嬉しさよりも驚きで聞いた。実際のところ、忘れ去られていたわけなんだが。月夜が軽い混乱から覚めないうちに、ろうそくに火が灯され、そしてリビングの電気が消された。

「それじゃー月夜、ぱーっといってみよー」  
なぜかテンションの高い茜。

「早くしないと、私が消しちゃうよ?」

そしてやっぱりテンションの高いリミーナ。

「がんばって、月夜君」

何をどうがんばればいいのかわからない応援をしているランス。

「・・・」

無言で月夜を見つめている楓。それぞれ反応は違ったが、月夜はそんな彼・彼女等の気持ちを嬉しく感じた。

「そんなじゃ、やっときますか」

月夜は軽く息を溜めてから、吹いてろうそくの火を消す。そして消した瞬間。

「誕生日おめでとー」

と、みんなから祝いの言葉をもらった。すぐに電気がつけられ、各々が拍手をする。

「・・・ばっか、そんな派手にやる必要なんてないだろ・・・?ありがとう」

月夜は皮肉っぽく言いながらも、素直に感謝の言葉を口にする。今日楓が買物に行ったのも、実は月夜の誕生日のためだった。しかし・・・月夜は一つだけ納得の出来ない点があった。

「ま、俺の誕生日とつくのとうに過ぎてるんだけどね・・・忙しかったからしょうがないとは思っけど」

「十一月十五日だよね?ちゃんと覚えてるよ」

「うちもちゃーんと覚えてるよ」

「私は知らなかったし・・・」

「右に同じく・・・」

忘れられていたわけではなかった、その気持ちが月夜を嬉しくさせる。特に、楓が覚えていてくれたことが、月夜には何より嬉しかった。

「ほんと、色々あつて遅くなっちゃったけど・・・おめでとう、月夜。はい、これ」

「私からも、はい、お兄ちゃん」

楓とリミーナは月夜にプレゼントを渡す。もちろんそれは、月夜がトイレに行っている間に密に買って持ってきたものだった。あの時あんなことを考えていた自分が、月夜は恥ずかしくなった。

「ありがとう・・・開けて良い？」

二人は頷く。月夜はどきどきしながら、小さなリボンがついた小さな袋を開ける。楓がくれた袋には、薄い黄色の円いペンダントが入っていた。

「もしかしてこれ、満月？」

最初にそれを見て思ったことを、月夜は口にした。黄色くて円いものは色々あるが、月夜はなんとなくそれを満月だと思った。

「うん、月夜がくれた物ほど立派じゃないけど・・・」

月夜が以前楓の誕生日にあげたのは星型のペンダントだった。星と月のパールツク、それを意図して楓はそのペンダントを月夜に贈った。もちろん、月夜の名前と重なるものもあるからだ。

「いや、すっごく嬉しい・・・ありがとうな」

大切なのは値段ではなく気持ちだと、月夜はよく理解していた。楓に感謝の言葉を述べた後、リミーナがくれた袋も開けてみる。

「リミーナの方は何かな・・・っておい」

月夜は中の物を見て間髪いれずにつっこんだ。それも当たり前のことだ、リミーナがくれた袋の中身は、以前リミーナが月夜の力を消すために着けた、銀色のブレスレットによく似ていたからだ。

「ちよつとしたお茶目心だよ。安心して、普通のブレスレットだから」

リミーナが言うように、確かに前みたいなのは禍々しさはそのブレスレ

ツトにはない。普通の人が作り出した、単なる装飾品に過ぎなかつた。

「それでも・・・なんかなあ」

トラウマ、という程でもないが、思い出が思い出だけに、嫌な感覚を月夜は感じる。

「ま・・・ほんとに、ありがとう」

照れ笑いを浮かべながら、月夜はペンダントとブレスレットを身につける。ペンダントはもちろん首に、そしてブレスレットは以前着けられた箇所の手首、左の手首に着けた。

「似合う?」

月夜の言葉に、各々が似合うよ、と言ってくれた。楓もこっそりとペンダントを身につけ、

「おそろいー」

と言つて微笑んだ。月夜もそれにつられて、微笑む。

「星と月、夜空に輝き地上を照らす淡い光・・・幻想的で、お二人にはお似合いですね」

ランスの言葉に、二人は照れくさそうに頭をかく。

「羨ましいなあ・・・少し妬げちゃう」

そう言いながら、茜はランスをちらりと見る。それに気づいたランスは微笑み、茜もまた、微笑み返した。

「そういう姉さんだつて、まんざらでもなさそうじゃん?」

「こら月夜、からかわないですよ!」

月夜の言葉に対して怒る茜に、あはは、と笑いが起きる。そんな平和な光景を見ながら月夜は、一生これが続けばいいな、と儚い想いを胸に抱いていた。義理の兄弟で形作られた一般的ではない家族だが、今、そこには確かに平和があった。

「一生続くものなどありはしない、動物も植物もこの地球ですらも・・・」

静かに、そして厳かに、暗闇の中声は響く。

「なおのこと、人間ごときがいつまでもこの世界に居続けるなどあってはならない」

落ち着いている声は、内側に強い怒り、そして憎しみを含んでいた。「永遠にあり続けるのは、死のみ・・・私は、死を届ける運命の担い手となるう」

大昔の誰かに話しかけているように、男は静かに呟く。

「仇は必ず・・・」

そして男は、闇に溶けていった・・・。

365分の1（後書き）

のほんのほんど・・・そういえば第三次世界大戦ネタはどこに  
行ってしまったんだろう（おい



## 一年の計は元旦に

一年の計は元旦にあり、とはよくいったもので、寒空の下多くの人々が神社に賑わう中、例外なく月夜と楓の二人もそこにいた。

「なんだこの人の多さは・・・」

一月一日元日、最寄の神社に足を運んだ月夜は、人の多さに目を点にしていた。そんな月夜の服装は、元日にも関わらずいつものラフな格好だった。

「それ、毎年言ってるじゃない？」

月夜の隣に並んでいる楓は、呆れ顔で口を開いた。そんな楓の服装は、珍しいことに着物姿だった。元々可愛い顔立ちの楓は、髪こそポニーテールで多少茶の混じった髪だが、着物を着ているその姿は小さな日本人形を連想させた。

「・・・まあ、喋ってても仕方ないし、並ぶか」

「そうだね、止まったら人の邪魔になっちゃおうし」

どことなく不満気な顔で歩き出す月夜の横に、笑顔の楓は並んで歩き出す。ラフな格好の月夜、着物姿の楓、並んで歩いていても、別段違和感がないのは昨今のお国事情というやつだろう。現に、周りにいるカップルや家族連れの男性は私服が多い。

なぜ二人だけしか神社に来なかったのか、その理由は今日の朝に遡る。

月夜と楓は珍しく起きる時間が合い、廊下で朝の挨拶を交わしてから二人でリビングへと向かった。その時にはもう、リビングは大惨事と化していた。

「きゃー！やーめーてー！ー！」

「だめ〜」

その声に、リビングに入ろうとしていた二人の足が止まる。楓に促され、月夜は中からばれないようにそーっとリビングの中を覗いた。そして、月夜は小さな声で咳きながら踵を返した。

「さて、部屋に戻って寝ようか・・・」

月夜の言動に何が起きているのか察した楓は、月夜の後について歩いていく。月夜が見たものは、悲惨極まる光景だった。ランスはぐでー、と顔を赤くしてテーブルに突っ伏し、同じく顔を赤くした茜がリミナーをいじくりまわしていたのだ。帰省して来た茜は、一度家に帰り荷物をまとめ、月夜たちの家に戻ってくることになった。なるべくお酒は控えるから、と言っていた茜だったが、元日から相変わらずのぶっ通しっぷりだった。

部屋の前まで戻ってきた月夜は、いつまでも自分の後ろをついてくる楓に疑問の声を投げた。

「楓の部屋はあっちだろ？」

月夜が指差す方を見向きもせず、楓は下を見ながら何かを考えている。ん？と疑問に思ってそれを見ていた月夜は、楓の頭上にピコーン、と電球が浮かぶ幻影を見た。そしてすぐに顔を上げて、楓が言う。

「この家にいたんじゃ何にしても被害にあいそうだし・・・良ければ、みんなに内緒で一緒に初詣行っちゃわない？」

覚悟を決めてそう言ったかのような楓の言葉に、鈍感な月夜は、

「え、だるい」

と根も葉もない事を言った。

「みんながいた時は毎年行ってたけど、本当は人が多いからあーいうの嫌いなんだよな・・・ってちよつと待て、痛い痛い」

口を尖らせてペチペチと月夜の頭をはたき出す楓。なんか久しぶりだなあ、とか思いながら、月夜は特に抵抗はしないで口だけを動かす。

「分かった分かった・・・ったく、今は普通の人間なんだぞ俺は。」

少しは手加減しろよ」

「そんなに強く叩いてないもん」

ぷー、と頬を膨らませながら怒ったように言う楓。その実、たまには月夜と二人きりで・・・、と考えていた。

「行くなら早く行こうか、巻き込まれる前に」

「そだねー」

二人は一旦別れ、各々が部屋で準備をしてくることにした。早々に外行き用の服に着替え、楓からもらったペンダントを首から提げる。その後月夜は、楓が準備に遅いことを知っているため十分程部屋でだらだらとしてから、部屋を出た。

「そつえば、待ち合わせ場所決めてねーや」

月夜は軽く舌打ちした。同じ家なのに待ち合わせ場所も何もないと思うけど、現状が現状だしなあ・・・、と思いながら、こそこそと楓の部屋へと歩いていく。自分の行動に、なんとなく月夜は気恥ずかしくなった。

「おーい」

控えめな声で呼びかけながら、月夜は楓の部屋のドアをノックする。

「ちよつと待つてー・・・うー」

何やら試行錯誤するような声が部屋の中から聞こえる。月夜は不審に思いながらも、さすがにドアを開けるわけにもいかずそこでしばし待った。

五分が経過した、部屋の中からは相変わらず、うーとかむー、とか聞こえてくる。月夜は欠伸をした。

十分が経過した、部屋の中からは、もう少しー、と声が聞こえてくる。月夜は、これは一応デートなのかなあ、と考えている。

十五分が経過した時、ようやくドアが開いて中から楓が出てきた。

「おそか・・・って、うわ」

楓の服装を見て月夜はつい、うわ、とか言ってしまった。

「うわ、って何よ・・・私が着物着てちゃおかしい？」

ぷー、と頬を膨らませる楓。今日の楓はハムスターみたいだな、と

意味不明なことを月夜は混乱した頭で考え始める。

「やっぱり・・・変、かな？」

「ちよつと待て・・・ふー」

月夜はひとまず深呼吸をして冷静になってから楓を眺めた。実際のところ、月夜が楓の着物姿を見たのはこれが初めてではないが、今までとは違い、楓が好き、という感情を意識してしまった月夜には、それがとても新鮮に見え、可愛く見えた。不安そうに月夜を見ている楓に、月夜は純粋に感想を述べた。

「うん・・・似合ってるよ、それと・・・」

すごく可愛いぞ、と聞き取れない程小さな声で呟いてから、

「行こうか」

と言って照れ隠しをするように歩き出す。

「え？最後になんて言ったの？もう一回言つてよ、ねー」

月夜の後ろについてくる楓は、すごく嬉しそうな顔をしていた。本当は聞こえていたのに、もう一度・・・いや、何度でも言つて欲しいと楓は思っているのだろう。

「言わない、絶対言わない」

顔を赤くしながら歩く月夜の横に並び、楓は、ねーねー、と微笑んでいた。その首には、月夜と同じペンダントが提げられ、淡く光っていた。

二人は茜に気づかれぬようにそーっと玄関から外へ出て最寄の神社まで歩いてきた。そして現在に至る。

「なんつでこんなに人がいるんだろうな」

参拝客の列に並びながら、月夜はぶつぶつと文句をたれる。目的の場所までたどり着くには、およそ三十分はかかりそうだった。

「もう、文句ばかり・・・私と出かけるの、嫌だった？」

隣にいる楓は落ちこんだ様に顔を伏せ、上目遣いに月夜を見上げる。

「いやいや、別に楓と出かけるのが嫌なわけじゃないぞ・・・ただ待ち時間も長いし、楓が寒くないかなあ、とか。って俺、何言ってるんだろうな」

楓が見せた意外な技に、月夜はあたふたとする。いつの間にあんなの覚えたんだろう、と思いつながらなんとか冷静さを取り戻そうとする。しかし・・・

「こんなに人がいればそんなに寒くないよ・・・それに、こうすれば、ほら」

楓はそう言いながら月夜に体を寄せる。微かに触れ合う程度の距離だったが、その楓の行動によって月夜の中から冷静という文字が消えた。

「暖かいんじゃないかなあ、って」

頬を少し染めながらも、今日の楓はいつもより大胆だった。いつもの月夜なら、熱があるんじゃないか？と的外れな心配をするが、今の月夜にはそんな余裕すらなかった。楓の髪が揺れる度に香る匂いや、微かに触れ合う程度の微妙な距離が月夜の思考を遮る。いつもと違う楓に、月夜はつい見とれてしまった。

「どうしたの？列進んでるよ」

その言葉に、はっ、となった月夜は、照れ隠しをするように頬をかきながら足を進める。

「あー、うん・・・そっか」

一人で何かを納得するような月夜の呟きに、楓の頭上に今度はハテナマークがびよこんと現れてはすぐ消えた。

「変な月夜・・・」

「変って言うな」

そう言いながらも、今日の自分が変であることを月夜は理解していた。

（いや、変、でもないか・・・俺ってこんなに、楓のこと好きだったんだな）

好きだからこそ、こんなにも楓に対してドキドキする。それを再認

識させられ、月夜は苦笑した。しかし月夜も、やられっぱなしってのもな、と思いつながら、無造作に楓の腕をつかんだ。

「きゃっ、ど、どうしたの？」

いきなりのことに焦る楓に、月夜は平静を保ちながら言った。

「こっした方が、もつと暖かいんじゃない？」

急がず、けれどゆっくりすぎずに、月夜は自分の腕を楓の腕に絡ませる。傍目から見たら、腕を組んでいるカップルにしか見えない。

「え、え・・・月夜？」

顔を赤くしておろおろとしている楓を見ながら、月夜も同じく顔を赤くしていた。これでおあいこかな、と心の中で月夜は微笑んでいた。

結局二人は腕を組んだまま、数十分の後賽銭箱の前に着いた。

「楓は何お願いするんだ？」

ふと気になった月夜はそう聞いてみた。

「秘密、言ったら叶わない気がしない？」

「そっか・・・そうだな」

妙に納得した月夜の隣で、楓は組んでいる腕を一度離して賽銭箱に五円玉を投げ入れる。軽く目を瞑って手を合わせているその姿には、仄かないじらしがあった。そんな楓を見ながら、月夜は何をお願いするか考えた。単なる一行事に過ぎなく、簡単に願いなど叶うものではないが、やるからにはそれなりに真剣にやろうと月夜は思っていた。

（戦争がなくなりますように、とか？・・・真面目すぎるか。兄貴の記憶喪失が治りますように、とか？・・・いまいちっこりいなあ、大体から願って治るなら俺も苦労してないし）

あれやこれやと考えながら、さりげなく神頼みを否定している月夜は、困った顔をしていた。

「どうしたの？」

願い終えた楓が、考え込んでいる月夜の顔を覗きこんだ。軽く集中

している時に、いきなり顔を覗きこまれた月夜はちよつと焦った。  
「い、いや・・・えーと・・・」

焦りながらも、楓の顔を見て月夜は何かピンと来た。そうだな、と  
呟いてから、五円玉を賽銭箱に投げ入れる。そして軽く目を瞑り、  
両手を合わせて祈る。数秒後、目を開いた月夜は微笑みながら楓の  
腕をとって腕を組んだ。

「行こうか」

「うん」

楓もまた、微笑み返し、二人は寄り添いあつて歩いていった。

「さて、メインは終えたことだし、これからどうする？」

「んー、おみくじとか？甘酒も飲みたいし」

人込みの中を歩きながら、二人は今後のことを話し合っていた。

「そういえば、ご飯もまだだよ。うーん・・・どうしよう」

神社にはいくつかの屋台も出ていたが、主食になるようなものはな  
く、かといって綿飴やリンゴ飴などのお菓子を朝ごはんの代わりに  
するのは楓には多少の抵抗があつた。

「俺はそこまでお腹すいてないから、ゆっくり回った後ご飯でもい  
いけど？家でもいいし、外食でもいいし」

「うーん・・・じゃあ、先に回っちゃおうか」

「楓は食べなくても大丈夫なのか？」

「平気だよ、ダイエットだと思えば軽い軽い」

三食しっかり食べないと余計太るんじゃないかなあ、と月夜は思っ  
たが口には出さなかつた。

予定を決めた二人は人混みの中ぶつからないようにのんびりと歩い  
た。行き交う人々は幸せに満ち溢れた顔をし、楽しそうに笑い合っ  
たり、じゃれあつたりしている。

（平和、だよな・・・辛い現実の中でも、一時の幸せを最大限まで  
楽しめるから人間は生きていける）

「っと!？」

行き交う人々を見ながらそんなことを考えていた月夜は、前から歩いてきた人にぶつかってしまった。月夜は多少よろけたが楓に支えられたおかげで倒れなかった。しかし、ぶつかった相手は後ろに尻餅をついてしまっていた。

「ごめん、大丈夫？」

月夜は楓から腕を離し、倒れた少年に手を差し伸べた。相手はそれをとって立ち上がって申し話なさそうな顔をした。

「大丈夫です。すいません、少々よそみをしていたんで」

「いえいえ、俺もよそみてたんで・・・」

背は月夜と同じくらいで小柄。細くてきれいな白髪は鼻先辺りまで垂れ、耳を覆い隠している。顔つきはやんわりとしているのに、その赤みを帯びた目は細くて鋭い、そんな少年だった。人を寄せ付けないような雰囲気少年は、それとは真逆の人懐っこい笑みを浮かべて月夜の顔を見つめている。白い髪の間からのぞく強い視線を感じ、月夜は怪訝な顔をした。

「どうかしました？」

「・・・いえ、僕の勘違いだったようです。それでは、また」

人懐っこい笑みを浮かべたまま、少年は月夜の横を通り過ぎていった。

「もう、月夜つてば、よそみして歩いてちゃだめでしょ？」

「・・・」

叱るような楓の言葉は、月夜の耳に届いてはいなかった。何かを考えているように、黙りこくっている。

「・・・月夜？」

「・・・ん？何か言った？」

今ようやく気づいたというように、月夜は楓に顔を向ける。楓は小さく溜め息をつきながら、ペチペチと月夜の頭をはたいた。

「よそみして歩いちゃだめ、分かった？」

「ああ、うん、分かってるよ」

「もう・・・」



楓は再度月夜と腕を組んで歩き出す。月夜もそれにつられて歩くが、気持ちは上の空だった。

（なんだろ、あの子・・・どこかで会ったような、懐かしい感じがした・・・それと同時に、少し、嫌な感じも）

月夜がいつも嫌な感覚を感じるときに出る悪寒は今回はなかった。だからこそ月夜は、まあ気のせいかな、と自分なりに納得した。

月夜は心底分らない、といった表情で悩んでいた。その手元には、今さっき引いたおみくじがにぎられている。

「これは・・・どういう意味なんだろう？」

『今年のあなたの運勢は「大凶」です』。そこまでは月夜にも分かった、分からないはずがない。しかし、その下に書かれている一文に月夜は頭を悩ませていた。『運命の出会いがあるでしょう』。

（大凶なのに運命の出会い・・・？まさか楓と俺とその人の三角関係とかか？いやいやまで、そんなことあるはずもないし・・・）

「どうしたの？」

ただのおみくじ相手に真剣に頭を悩ませている月夜の隣に、楓が来た。その両手には、甘酒が入った紙コップが握られている。

「はい、これ」

「ありがとう」

差し出された紙コップを受け取って月夜はお礼を言う。それを一口飲んで、甘酒の熱さに顔をしかめてから月夜は楓に聞いた。

「楓はおみくじどうだった？引いてきたんだろ？」

楓もまた、甘酒を一口飲んでから答える。

「私は大吉だったよ、運命の出会いがあるって書いてあって少しびっくりしたよー」

「・・・全部に書いてあるとかいうオチじゃねーだろうな」

「え？」

不思議そうな顔をしている楓に、月夜は自分が引いたおみくじを見せる。

「なにになに・・・大凶、運命の出会いがあるでしょう?・・・何これ」

「なんかおかしいだろ、大凶なのに運命の出会いって。でも、全部もしくは半分ぐらいのおみくじに書かれてるのなら、そういうこともあるよな」

「そだねえ・・・運命の出会い安売りだね」

「だなあ、なんか運命も霞むよな」

二人は甘酒を飲みながら、しみじみとぼやいていた。月夜にとって「大凶」の出会い、楓にとって「大吉」の出会い、運命というものは、その全てが良いものとは限らないということをこの時の二人は深く考えていなかった。

「そろそろ、帰る?」

空になった紙コップを何の気なしに見ながら、月夜は楓に聞いた。

「んー・・・どうしよっか」

楓もまた、空になった紙コップを手でいじりながら返答した。

「家出てから大分経ってるし、そろそろ平気だと思っただよな」

楓が帰るかどうか悩んでいるのは、酔って暴れている姉さんのせいだろうなあ、と思った月夜はそんな言葉を口にした。

「うーん・・・」

それでも楓は何かを思い悩んでいるようだった。

「どうかしたのか?」

鈍感な月夜は気づかない。冬休みの大半を家で過ごしていた二人は、周りに人がいるとはいえこんな風に二人つきりになることが数少なかった。だからこそ、楓はもう少しこの状況のままだったのだ。

「そだね・・・帰ろうか」

どこことなく落ち込んだ声を出す楓に、月夜はハテナマークを浮かべていた。

元日ということだけあつていつもより交通量や人の流れが多い道を、二人は歩いていた。もちろん、家に帰るためだ。相変わらず腕を組んでいるが、神社を出た時辺りと同じく楓の表情はあまり晴れてはいなかった。心配になった月夜は、楓に聞く。

「ほんと、大丈夫か？なんか元気なさそうだけど」

「なんでもないよ、大丈夫」

素っ気無く返す楓に、月夜は軽く頭を悩ませた。諺にも、結果良ければ全てよし、というものがあるが、今回はむしろ、過程が楽しかったのに結果はいまいち、といった感じだった。月夜としては、それが嫌だった。月夜にとつても、楓と二人の時間は大切なものなのだから。

だから月夜は頭を働かせて考えた、どうして楓は機嫌（もしくは体調？）が悪いのか、ということとそれの解決策を。

（・・・わっかんねーなあ）

考えてみても、特に恋愛ごとに関してはうとい月夜には分からなかった。仕方なく、月夜はてきとうな話題をふつてみた。

「そういえば、冬休みの宿題終わった？」

「まだ終わってないよ」

「そっか、じゃあやらないとな」

「うん」

それで会話が終わった。わずか十秒程度の短い会話だった。いつもの楓なら、月夜は？などの切り返しがあるのだが、今の楓はやっぱり素っ気無かった。

（・・・どうしろと？）

不機嫌そうな楓の隣を歩きながら、月夜は切なくなつた。楽しくなかったのかな・・・、などと嫌な考えすら頭に浮かんできってしまった。元日から、重々しい雰囲気が二人を包む。月夜は諦めたように溜め息を吐き出し、仕方がないので今自分が気になっていることを聞いた。

「そういえば、結局楓は何をお願いしたんだ？」

「教えないよ？」

先ほどから一文を超えない楓の素っ気無い返答にめげずに、月夜は続ける。

「別に知りたいわけでもないんだけど・・・」

その言葉に、楓の体が震えた。どうやら怒っているようだ。しかし、月夜の次の言葉に楓は首をかしげた。

「同じ願いだったらいいな、って思っただけ」

「同じ願い？月夜は何をお願いしたの？」

楓も気になっていたので、興味をひかれて月夜に聞き返した。

「当ててみ」

月夜はいたずらっぽい笑みを浮かべてそう言った。楓は少し悩んでから、口を開いた。

「ランスの記憶が戻りますように、とか？」

「それも考えたけど、結局それにはしなかったなあ」

再度考え、楓は口を開く。

「戦争がなくなりますように、とか？」

「それも考えたけど・・・って俺が考えてたこと当てられまくりだな、そんなに分かりやすいのか、俺は？」

「付き合い長いからね、月夜のこととはなんとなく分かっちゃっよ」

もっと私のことも分かってくれたいな、と心の中で思ったことは口にはしなかった。付き合いの長い二人でも、恋愛面のお互いの感情を理解するのは相変わらず鈍感だった。

「俺も楓のことは分かっているつもりなんだけどなあ・・・」

少し哀しそうに言う月夜の瞳には、愁いの色が浮かんでいた。

「それで、結局月夜は何をお願いしたの？」

「ん・・・」

照れくさそうに頬をかきながら、月夜は小さな声で言った。

「楓とずっと一緒にいれますように、かな」

何度も言うが、月夜は恋愛ごとに関しては鈍感だ。鈍感というよりもはや天然で、その一言のおかげで楓の機嫌が良くなったことなど

気付きもしなかった。

「同じだったらいいなあ、なんて思うんだけど・・・自信過剰かな？」

照れ笑いを浮かべている月夜だが、内心は結構不安だった。軽く頬を赤に染め、楓はうつむいている。その表情は、嬉しそうだった。

「私も、月夜と同じだよ・・・月夜と、ずっと一緒にいたいってお願いした」

小さな声で恥ずかしそうに言う楓に、月夜も顔を赤くした。

「そっか・・・なんか、照れるな」

月夜もまた、嬉しそうに微笑んでいる。

「うん・・・恥ずかしい」

そう言いながらも、楓は組んでいる腕に少し力をこめた。ぎゅっ、と月夜の腕にしがみついている。月夜はそんな楓を愛しく感じながら、わずかに身を寄せた。傍目から見たらいちゃいちゃしているバカップルだが、いや実際バカップルみたいなものなんだが・・・照れ臭さがあり、それでも幸せそうな表情をした初々しさの残る二人は、微笑ましかった。

「少し、公園でも寄ってかない？」

二人が家の近くに来た時に、月夜が唐突にそう言った。

「行く行く」

楓は喜んでそれに頷いた。楓の気持ちを察して言ったわけではなく、ただ単に月夜も楓ともう少し二人つきりであったからだ。

「それじゃ行こう」

真っ直ぐ進めば幾分もかからずに家にたどり着く道を、二人は途中で右に曲がった。そして少し歩いた先には、さほど広くもない公園があった。公園といってもそこまで遊び場があるわけでもなく、精々ブランコと滑り台、そして入り口付近にベンチがあるだけだった。

「人、いないな」

月夜は公園内にあるベンチに腰掛け、辺りを軽く見回してからそう

言った。

「小さい公園だもん、仕方ないよ」

その隣に寄り添うように腰掛け、楓はそう返した。

「そうでもないだろ？俺らが子どもの時は、もっと人がいたと思うぞ」

昔を懐かしむようにしみじみと言う月夜に、楓は考えながら言う。

「今の子どもはあんまり外で遊ばないんじゃないかな？」

「時代の流れを感じるねえ」

年寄りくさい月夜の言い草に、楓は笑ってしまった。

「年寄りくさいよ月夜・・・でも、そうだね。あれから、大分経つんだもんね」

楓もまた、昔を懐かしむように呟く。二人が子どもの時からあったこの公園に昔の面影はなく、当時二人が子どもだった時遊んでいたブランコの鎖は錆付き、寂しそうに風に揺られて動いている。

「よし、ブランコ乗るかー」

突然立ち上がってそんなことを言い出した月夜は、とことことブランコへ歩み寄る。そんな月夜の行動に楓は少し驚いたが、すぐにその後を追った。

月夜はブランコに座ったが、小さなブランコは今の月夜にはこげそうになかった。

「こんな、小さかったんだな・・・仕方ない」

行儀悪いなあ、と思いつつ、月夜はブランコの上に立ち上がった。

いつか月夜が見た風景よりも一段と高い風景が、月夜の目に映る。

「もう、月夜つてば・・・」

月夜よりやや右側にあるブランコに座り、楓はそんな月夜を見ている。言葉とは裏腹に、その表情は楽しそうだった。

「楓もやってみれば？案外、とつ、楽しいよ？ほっ」

徐々に速度を増し、振り子のように月夜は振られている。

「着物が汚れたらいやだから、やらないよ。それに・・・」

あの頃みたいな月夜を見ているだけで、私も楽しいから。と、心の

中で呟く。そういえば、と楓は考え込んだ。月夜は幼い頃に一度、隣で楓が見ている中こんな風にブランコを強く揺らしていた。あの時・・・どうなったんだっけ？と楓の中に嫌な不安がよぎった。

「うつひゃー！」

月夜の突然の叫びに楓ははっと気づいた。隣にいたはずの月夜はそこにいなく、激しく振られているブランコだけがそこにあっただ。月夜は鳥に・・・なったわけもなく、ブランコより数メートル離れた位置に転がっていた。楓はそれを見てようやく思い出した。その時も、月夜は・・・

「鳥になっただっけ・・・」

と呆れたように楓は呟く。もちろん羽ばたく翼がないので、引力に引かれて落下する。忘れていたことを思い出した楓は喉のつつかえがとれたかのような安堵の息を吐いてから、それどころじゃない！と思い月夜に走り寄った。

「大丈夫!？」

「大丈夫・・・じゃないかも」

なんとか手をついたものの、上半身から地面に突っ込んだ月夜は弱弱しく答える。着地後もころころと転がった月夜とその着ていた服は、土で汚れていた。

「もう、馬鹿！怪我したらどうするの!？」

倒れたままの体勢で楓に抱きかかえられた月夜は、もう十分怪我してるんだけど・・・、と聞こえないようにぼやいた。実際、月夜の体にはいくつもの擦り傷があっただ。

「いたたた・・・ん？前も、あつたよな？こんなこと」

月夜は痛みを感じながらも、昔のことを思い出す。そういや、あの時も飛んで怪我して・・・ああ、こんな風に楓に抱きかかえられたっけ。俺何も変わってないなあ、と月夜は落ち込んだ。

「ほんと、月夜は何も変わってないね・・・あの時と、同じままで心配そうに顔を覗きこむ楓は、決して悪い意味でそれを言ったわけではなかったのだが、勘違いした月夜はすねたように言う。

「子どものままで悪かったな」

「そういう意味で言ったんじゃないよー」

つついっいそんな月夜を見て、楓は笑ってしまう。楓からしたら月夜はかっこいいというよりも、可愛い存在だったからだ。

「笑うなー！」

「ごめんごめん・・・立てる？」

「どうだろ、うっ・・・」

体を起こそうとした月夜は、痛みに顔を歪める。着地（正確には落下）した時に頭は守ったものの、他の部分は擦り傷だらけだった。

ついでに打撲もしており、月夜は体を少し動かすだけでも痛かった。

「大丈夫？痛いなら、もう少しこのままにしとく？」

「着物、汚れちゃうだろ？」

月夜を抱きかかえている楓は膝をついている、もちろん地面に触れている部分の着物は土で汚れていた。

「着物よりも・・・月夜のほうが大事だよ」

楓はためらうことなく地面に座り、月夜が楽になるようにその頭を膝の上にのせた。

「馬鹿、そんなことしたら・・・」

「月夜のほうが大事なの！・・・心配なんだからね」

尚も食い下がろうとする月夜だが、楓の剣幕に押されて口を閉じた。楓の気持ちを嬉しく感じると同時に、なんとなく情けなく感じて月夜は落ち込んだ。着物を汚させてるのは、結局俺だもん・・・、と心の中で呟く。

「月夜は分かりやすいね・・・怒ってる時も落ちこんでる時も、すぐ分かる」

そんな月夜の気持ちを察した楓は、そう言いながら月夜の頭をなでる。公園の、しかも地面に直接座ってそんなことをしている二人だったが、それを冷やかすような観客はいなかった。

「俺が単純なのか、楓が鋭いのか、それとも・・・」

好きだから分かるのか、月夜はそれを口にはしなかった。口にしな



くても楓には伝わるだろうな、と確信的な自信が月夜にはあつたからだ。案の定、楓は特に追求せず、頬を仄かに染めながら微笑んでいた。体の痛みを感じながらも、月夜は妙に晴々とした気持ちで心地の良い安心感に身を委ねていた。

「そろそろ、帰ろうか」

どれだけの時間そうしていたのか分からない、しかしある程度痛みをひいた体を月夜は起こした。

「こんなところでいつまでも寝っ転がってちゃ、変な人にしか見られないしな」

苦笑しながら言う月夜に、楓は、

「そうだね」

と遠慮なく言った。立ち上がった月夜は楓の手をとって立ち上がりせる。

「ごめんな、結局着物、汚れちゃった」

自分の服はそつちのけで、月夜は楓の服をはたく。砂や埃と違って表面上の土はとれても服に染みこんだ土の色はとれなかった。

「洗えばいいんだもん、気にしないよ」

「さつきと言ってること違うな」

からかうように言う月夜の頭に、いつものように楓の平手が・・・飛ばなかった。その代わり楓は月夜の服の裾を軽くつかんでいった。

「もう、危ないことしないでね？」

「わ、分かってるよ」

いつもと様子が違う楓に、月夜は面食らってどぎまぎしながら答えた。

（なんか今日は、調子狂うなあ・・・）

神社で楓が見せた女の子っぽい（失礼）仕草やちょっとした大胆さ、そして優しさ（楓は元より優しいが）、それらが今日の楓はいつもとなんとなく違つと月夜に感じさせた。

「じゃあ、帰ろう」

「だな」

今日はずっとそうしてきたように、腕を組んで歩き出す二人。月夜が、今日の楓なんかおかしくないと聞こうかどうか悩んでいる間に、家までの短い距離はもうなくなっていた。

人間の幸せの時間とは短いもので、もちろん人間である月夜と楓の幸せの時間も短かった。二人が家を空けている間、家の中は朝方よりも惨状を呈していた。茜・ランス・リミーナはリビングの床に転がり、意識を失っている。酒瓶はそこかしこに転がっており、テーブルは穴だらけになっていて無残な姿になっている。四本ある足も半分が折れ、斜めに傾いている。その周りがある椅子さえも、無事な姿で残っているのは五つの内二つだけだった。

「・・・さて、外食しようか」

月夜は痛くなる頭を抑えながら、何も見ていないかのように先ほど入ってきた玄関へと足を向ける。

「・・・うん、そうだね」

楓も同様に、すぐさま踵を返した。元日からこれでは先が思いやられる、と二人は頭を悩ませながら、家を出て行った。

「どうしたもんかね・・・何食べる？」

隣を歩く月夜の言葉は、楓には届いていなかった。心ここにあらず、といった楓に、月夜は不思議そうな顔をしてもう一度声をかけた。

「おーい、聞いているか楓？」

「え！？な。なに？」

それedyouやく気づいた楓は、月夜に聞き返した。

「何食べるの？」

「えーと・・・月夜の好きなものでいいよ」

と、特に関心なさそうに言った楓は、また何かを考えているような顔を始めた。

「俺の好きな物・・・ねえ。それにしてもどうしたんだ？なんか様子が変わだぞお前」

「そんなことないよ」

空々しく出されたその言葉に、月夜はハテナマークを浮かべながらも黙った。とりあえず、何を食べるのか決めようと思ったからだ。そんな月夜をよそに楓は、朝自分が決めたことを思い出していた。一年の計は元旦にあり、その諺通りに、自分は今日うまく出来ていただろうか？と考えている。

茜が戻ってきたことによつて、楓はやきもきしていた。当の茜がランスといい雰囲気なのは重々理解していた楓だったが、いつまた月夜にその気持ちは向くかどうか、楓にとっては重大なことだった。茜からの月夜宛ての手紙を知らない楓は、そのことで悩んでいた。そして、決めたのだ。茜に負けないように、月夜に対して大胆に接しよう、と。

お姉ちゃんはきれいだけど、絶対に負けたくない。その気持ちが、今日の、そしてこれからの楓を後押しする結果となっていた。そしてその行動は、しっかりと月夜の気持ちをつかんでいた。元より月夜の気持ちは楓にあるのだが、いつもと違った楓に、月夜の心は更に楓に惹かれていた。

両想いの癖に何やってるんだこいつら？と思う人もいるかもしれないが、恋する乙女なのだから好きな人により振り向いて欲しいと思うのは、仕方のないことかもしれない。

うまく出来たかな？と悩んでいる楓の横で、それを露知らずの月夜は、何にしようかなあ、と昼ご飯のことを考えていた。

微笑ましくも天然な二人は、お互い違うことに考えを巡らせながら、歩いていった。

上空から、月夜たちが住んでいる町を見下ろしている人影がいた。

正確には、人の形をしているが人間ではない。その証拠に、その男

は飛行機や気球などの人が飛ぶための道具を使わずに、まるでそこに床があるかのように、地面から数百メートル程離れた空に立っているのだから。

「目覚めてより幾度となく見てきたが、やはりこの世界は変わってしまったのだな……」

男は望郷の念を含んだ哀しみの声で呟く。貴族のようなりをしたその男は、かつて日本軍に籍を置く白髪の青年の前に現れた人物だった。

「あと少し……あと少しなのだ……」

近い未来を感じさせるその言葉には、今に対する悔しさや齒がゆさのようなものが混じっている。男の目には強い怒りと、深い哀しみがあつた。

「現在の世界に神がいらないと言うのなら、私が神になろう。この世界に、破滅と創造をもたらす神に……！」

空々しさのある声で叫び、男は青い空に吸い込まれるようにその姿を消した。

## やきもき

月夜たちにとつて、長いようで短い冬休みが終わった。日数だけ見れば夏休みよりもはるかに短い冬休みだったが、茜が帰ってきてからというものの、二人は振り回されっぱなしだった。

「学校のほうが落ち着くつて、どうということだろうな・・・」  
窓際の席に座り、机に突っ伏しながら月夜は今にも死にそうな声をあげる。昨晩も酔った茜に振り回され、寝たのは陽が昇る直前だった。

「それ、私も同じ・・・」

月夜の隣の席に座っている楓も、疲れてぐったりとしている。家から逃げ出すように飛び出してきた二人は、疲れを増しながらも学校には早く着いていた。

「こりゃ始業式寝るな、間違いなく」

「よー、どうしたんだ？元気なさそうだなお前ら」

疲れている月夜と対照的に、元気がありあまってそんな利樹がどよんとしている二人に声をかけた。その後ろには、紫もいる。

「あんまり寝てないんだ・・・」

眠たそうな月夜の言葉を聞いて、利樹は、にや、と含み笑いをする。  
「そうかそうか・・・」

「今はお前の下ネタに突っ込む気力もないからな」

利樹が何を言おうとしているのか今までの経験で分かっている月夜は、続きを言わせる前にそれを遮った。

「おいおい、俺が下ネタなんて言うわけないだろ？なあ・・・」

利樹はそうつぶつぶいて後ろにいる紫に振り向いた。紫は、じとー、とした目で黙って利樹を見ている。月夜も楓も、それに続いて、じとー、とした目で利樹を見た。

「な、お前らなあ・・・つたく」

一瞬だけばつが悪そうに顔をしかめた利樹だったが、何かを思い出したように笑みを作る。

「そうそう、そんなこと言い合ってる場合じゃなかった。二人とも朗報だぜ朗報」

「朗報？」

月夜と楓は胡散くさそうな目を利樹に向ける。疲れている二人には、それがどんな内容でも興味がなかった。

「今学期から転校生が来るそうよ、しかもこのクラスなんだって」

「ああ、俺が言おうとしたのに！」

やけにテンションが高い利樹を、紫は無視して続ける。

「どんな子なのかはまだ分からないけど、朝先生にそう言われたのよ」

「へえ、転校生ねえ・・・」

興味なさそうに月夜は言う。

「ん？そのどこが朗報なんだ？」

「何言ってるんだよ月夜、可愛い女の子かもしれないだろ？」

嬉しそうに言う利樹のわき腹に、紫の肘てつが炸裂した。げふ、と打たれたわき腹を押さえる利樹に、紫は冷ややかな声で言う。

「そんなとこだと思ってたわ、男なのか女なのかも分からないのに、何うかれてるのよ、馬鹿」

そんな紫の意外な一面を見て、月夜と楓は、うわぁ、と声をもらしている。普段は結構おしとやかで、優しい紫だが、利樹のことになると容赦はなかった。

「今のは利樹君が悪いよ」

「全くだな」

痛がっている利樹を見ながら、二人は溜め息を吐いた。

「言うだけならいいじゃねーかよ・・・じゃあ何か？もしかっこのい男が転校して来ても、お前らは気にしないんだな？」

紫と楓の顔を交互に見ながら、ふてくされたように利樹は言う。

「私は・・・月夜がいるし」

楓は、ちら、と一瞬だけ月夜を見て、恥ずかしそうに目をそらす。月夜も気恥ずかしそうに、頬をかいていた。

「はいはい、仲がよろしいことで・・・で、紫はどうなんだ？」

それが一番聞きたい、というように利樹は紫を真っすぐ見つめる。

「わ、私は別に・・・そんな興味ないし」

紫の返答を聞きながら、相変わらずこの二人は学校じゃ素直じゃないなあ、と月夜はしみじみ思っていた。その脳裏には、楽しそうに手をつないでいた二人の姿が思い出されている。

「本当だな？」

「ほ、本当よ」

結構しようもないことを真剣に聞いてくる利樹に、紫は視線をそらした。真剣な表情をしている利樹は、軟派さがなくかつこいいからだろう。

「つーかさ、どうでもいいんじゃないの？そんなたかが転校生ぐらいのことで大騒ぎしなくてもさあ」

月夜はぐったりと机に突っ伏しながら言う。疲れている時に騒がれるのは勘弁、といった感じだった。

「そうだねー、私もどうでもいいと思うよ」

ふあ、と欠伸をしながら楓も眠そうに言う。投げやりな感じの楓も珍しかった。

「夢がないなあお前らは、美少女転校生との恋愛とか、王道だろ？」

「だから、そんなのありえないって言ってるでしょ！」

アフォなことを言い出した利樹に、紫が怒ってそう言う。その紫の言葉に、利樹もむっ、ときた。

「なんでありえないって決めるんだよ？」

「それは・・・」

利樹は言ったことを否定されて怒り、紫は他の女の子のことを考えてる利樹に怒っていた。なんか矛盾してねーか？と思いつながら、月夜は、俺が口出したら余計こんがらがりそうだよなあ、と考え黙っていた。

「だって、もしそんな可愛い子が転校して来ても、利樹の相手なんかするわけないじゃない！」

あ……、と、紫は言ってから自分が言ってしまったことに気づいた。

「……なんだよ、それ」

利樹は拳を握り締めた。

「まあまあお前ら、落ち着けよ、な？」

さすがにやばいかな、と思った月夜は二人の間に割って入る。軽いいざごきはあっても、まさかここまで本気のけんかになるとは月夜も思っていなかった。教室内に険悪な空気が流れ、何人かの生徒が、何かあったのか？というような目で三人を見ている。

「どけよ月夜、今の言葉にはさすがに頭にきたぜ」

「だからやめろっつうの！」

月夜がどいたら、紫を殴りそうな勢いの利樹を月夜はなだめる。

「女を殴るなんてお前らしくもない、少しは頭を冷やせよ」

そして紫の方に視線を移し、月夜は言う。

「紫ちゃんも、言いすぎじゃない？確かに利樹の冗談は冗談に聞こえないかもしれないけど……どっちでもいいから、譲歩して先に謝ればすむことだろ？」

「わ、私は……悪くないわ」

「俺だってそうだ、謝る必要なんてない」

月夜は頭を悩ませながら多少の期待を持って楓の方をちらりと見た。月夜よりもこういうことに関しては何がうまい楓は、一人幸せそうに寝息を立てて寝ていた。月夜は溜め息をつきたい気持ちを押しさえ、どうにか口を開いた。

「じゃあ謝らなくてもいい、とりあえず、少し時間をおけよ。それに、そういうのは二人つきりでやってくれ、教室でやるなよ」

後半は冷たいような言い草だが、二人に頭を冷やす時間をとらせるための口実だった。

「ふん、もういい。俺始業式ふけるわ」



興が冷めた、というように二人に背を向けて教室を出て行く利樹、その表情は怒りというよりも、どこことなく哀しそうだった。

「やれやれ……」

ふう、と月夜はようやく一息ついた。紫は泣きそうな顔で、立ち尽くしている。

「紫ちゃんもさ、もう少し素直になったほうがいいんじゃないの？」

「だって……」

弱弱しく言う紫に、月夜が微笑みながら優しく言う。

「分かってるよ。付き合ってる相手が他の異性のことばかり言ったら、誰だって嫌だもんな」

「うん……」

さりげなく付き合ってることを肯定した紫は、なおも落ち込んでいる。どうしたもんかなあ、と月夜は考える。

「まあ、利樹もそうだけど、紫ちゃんも少し落ち着いたほうがいいよ。あいつの冗談に付き合ってたら身がもたないし」

「そう、だよな」

それでもまだ元気がなさそうな紫は、そう言うてからふらふらと自分の机に戻っていった。

「大丈夫かなあ……あの二人」

そんな風に心配をしている内に、教室のドアを開けて担任の教師が入ってきた。月夜は悩みながら席に座り、隣の楓がまだ寝ていることに気づいて叩き起こした。

短いホームルームの後、体育館にて始業式が始まった。校長の無駄に長い話（高校生としてうんぬんかんぬん）や教頭の意味のない自慢話（車を買ったとかなんとか）、色々な話がされていく中、月夜は一人思い悩んでいた。もちろん、紫と利樹のことだった。

（けんかする程なんとやらとは言うけど……さすがに手あげるの  
はなあ、俺が口出すことじゃないんだろうけど……心配だよな）

疲れている月夜だが、友達二人の問題ごとを放置しておくわけにも  
いかなないので、どうにか頭を働かせていた。月夜は悩みながら軽く  
左を見る、そこには眠りこけている楓の姿があった。男女混合四列  
で座っている席の一番右側に月夜が座っていて、その二つ左隣の席  
で楓はすやすやと寝ていた。

(・・・人の気も知らないであいつは)

一瞬怒りを覚えそうになった月夜だったが、座ったまま眠っている  
楓の頭は軽く上下に揺れ、時たま、びくっ、と体を震わせている。  
そんな姿を見て、ついつい笑いがこぼれてしまいそうになった。

(そうだな、楓に頼ってばかりなのもだめだし、たまには俺がが  
んばらないと)

人間関係がそこまで得意ではない月夜は、妙に冴えた頭を再度働か  
せた。

その結果、月夜は約一時間という貴重な睡眠時間を無駄にすごした。  
教室に戻ってきてからも、そんな自分の情けなさから月夜はどんよ  
りとしている。結構能天気な月夜だが、根は真面目で、友情には厚  
いところがあるのだが・・・考えすぎる悪い点もあった。

(仲直りさせるって言うてもなあ・・・どっちも素直じゃないし、  
特に利樹は子どもだし・・・何かいい手はないもんか)

ここぞという時にいい案を出せない自分の頭に、月夜ははがゆさを  
感じていた。

言葉通りに始業式をさぼった利樹の姿は、今もまだ教室内にはない。  
紫もあれ以来落ちこんでいるようだった。そして月夜の隣に座って  
いる楓は、寝たりない、という感じでいまだにうつらうつらと舟を  
こいでいる。

「おい、楓、いい加減起きろー」

いつまでも寝ている楓に、さすがに我慢の限界を感じた月夜は頬を  
ぺちぺちしながら起こそうとする。

「うーん・・・」

「俺だつて眠いんだぞ」

呻き声をもらす楓に、月夜も本心をもらした。しかし、

「おねーちゃんやめて・・・」

ぼそぼそと苦しそうに呻く楓を見て、月夜は起こすのをやめた。夢の中でまでご苦労様・・・、自分と同じ境遇にいる楓にそう思いながら、月夜は机に突っ伏した。月夜もまた、茜が帰ってきてからは夢でうなされることがしばしばあったのだ。

月夜は寝ることも出来ず、さりとて良い案が浮かぶこともなく、担任の教師が教室に入ってきて来ることによつてその思考は一時中断された。

「あー、今日は転校生を紹介する」

教壇に立った教師は、突然みんなにそう告げた。何も聞いていなかった生徒たちは、八割程が期待の声をあげ、残りの二割は興味ないと言わんばかりの様子だった。もちろんそれを知っていた月夜は、多少興味があるものの別段驚きはしなかった。

(紫ちゃん、どう思ってたろ)

それよりも紫のことが気になった月夜は、右後ろのやや離れた席に座っている紫をちらりと見た。正直、見なければ良かったと月夜は後悔した。紫は、来るなら来なさいよ、といった感じで怒りのオーラを放っていた。利樹に対する不満やら怒りやらが、多少の原因にはなったものの実際全く無関係の罪のない転校生に向けられていた。見なかったことにしよう、うん。と月夜は一人納得し、前に顔を戻す。ちょうどその時、教師が入ってきたドアから、噂の転校生が入ってきた。

(ん・・・?)

月夜はその転校生に見覚えがあった。やんわりとした人懐っこそうな顔に、人を寄せ付けないような鋭く赤い瞳と雰囲気を持ち合わせた矛盾のような少年。元日、月夜が神社でぶつかった少年だった。

「はい、静かに!」

きやーきやー、と黄色い悲鳴を上げている女子と、なんだ男かよ、とつまらなさそうな声をあげている男子はその教師の一言で黙る。

「彼は色々な事情があったらしく、始業式には出れなかったそうだ。仲良くしてやれよお前ら・・・それじゃ、まずは自己紹介辺りから始めてくれ」

前半はクラスの生徒に、後半は隣に立つ転校生に教師は言った。少年は気後れした様子もなく、チョークを取って黒板に名前を漢字で書き始めた。

「葉月 玉はづき たまです。みなさんよろしくお願いします」  
名前を書き終えた少年は、振り返って丁寧に頭を下げた。

「髪の色と目の色はこんなんですけど、これでも一応ちゃんとした日本人です。両親の都合でこちらに転校してきました。みなさんと仲良くなれたら、嬉しいと思います」

そんな風に自己紹介をしている葉月を見て、月夜はあの時感じた変な違和感を感じていた。懐かしさを感じる反面、嫌悪するかのような嫌な感覚・・・葉月の本心ではなさそうな空々しい挨拶を聞くたびに、その感覚は強くなっていった。

（なんなんだよ・・・これ）

それは嫌な予感を感じ取って出る体にまとわりつくねっとりとしたものではなく、月夜自身の本能が感じ取っているものだった。こいつは危険だ、という人としての生物としての本能と、懐かしい、という月夜の生物ではない本能が混ざり合ってぐちゃぐちゃになっている。

今までの疲れや、友人の悩みが全てそれによって吹き飛ばされた感覚に、月夜は震えた。よく分からないけど、怖い・・・、それが月夜の出した結論だった。

「くす、また会えたね」

月夜はその声を聞いてようやく我を取り戻した。自己紹介を終え、窓際の一番後ろの空いている席、月夜の三つ後ろの席に座るために月夜の横を通り過ぎた葉月が、そう呟いたのだ。その後の教師の言

葉やクラス内で起きた笑いなどは、鳥肌が立っている月夜の耳には何一つ聞こえなかった。

短いホームルームが終わり、この日の学校日程は終わりとなった。クラスの何人かの女子が転校してきたばかりの葉月を取り囲んでいたが、月夜はそれに目もくれず帰り支度を行う。葉月のことを気になつてはいたが、ただならぬ恐怖がそれに勝り、月夜を動かしていた。

「楓、帰るぞ、いつまで寝てるんだお前は」

月夜は隣の席でいまだ寝ている楓をつついて起こす。うーん、と小さく唸った後、楓は机に突っ伏していた上体を起こしてまぶたをこする。

「もう終わったのー？」

眠そうにとぼけた声を上げてる楓を、月夜は急かした。

「早く帰るぞ」

「何で急いでるの？家にはお姉ちゃんがいるのにー」

大きく伸びをしながら欠伸をしている楓を見て、月夜は多少苛立ちを覚えた。それほどまでに、葉月のいる教室から逃げ出したかったのだ。

「理由は後で話すから、急いで・・・」

「やあ」

その声に月夜は、びくつ、と体を震わせた。いつの間にか月夜の横に立っていた葉月が、柔らかな笑みを浮かべながら話しかけてきていた。

「君と会うのは二度目だよな？珍しい偶然だと思わないかい？」

柔らかな笑み、落ち着いた口調・・・それらとは裏腹に、射抜くかのような鋭い眼光が月夜を見つめている。月夜はとっさに、

「お前は・・・何者なんだ？」

と聞いていた。その声は、微かに震えている。

「いきなりどうしたんだい？そんな質問をするなんて。ああ、自己

紹介を聞いてくれていなかったのかな？葉月　玉、葉月でも玉でも、好きな方で呼んでくれてかまわないよ」

おどけた調子で言う葉月に反応したのは、月夜ではなく楓だった。

「もしかして転校生の子？初めましてー」

いまだに目が覚めきつてない楓は、緩んだ笑顔で挨拶をした。

「初めまして、でもないかな。この前神社で、僕が彼とぶつかった時確か君は横にいた子だよな？」

「あ、あの時の人だったんだね。じゃあ二度目まして？」

頭のねじが緩んでいるようなことを言う楓に、

「くす、面白い子だね」

と葉月は笑みをもらした。

「良ければ、君達の名前を教えてもらえないかな？」

「如月　楓です。よろしくねー」

「・・・如月　月夜、別に覚えなくていいから」

にこやかに自己紹介する楓と対照に、月夜はぶっきらぼうにそう言う。もう、月夜ってば・・・と楓が横でぼやいていたが、今の月夜にはそんなことは気にならなかった。

「同じ名字なんだね、兄弟とかなのかい？」

「兄弟みたいなものかなあ、血は繋がってないんだけど」

「へえ、色々事情がありそうだね」

「私たちは如月っていう名字の人の養子なの、だから名字も一緒なんだよー」

ほのぼのとした雰囲気話している二人を、月夜はどうにも落ち着かない気持ちで見ている。先立っていた恐怖みたいなものもあるが、それとはまた別の感情が月夜の内に芽生えていた。

「そうなんだ。養子だなんて、色々苦労してきたんじゃない？」

「そうだね・・・苦労も多かったけど、楽しいこともいっぱいあったから」

「それは良かった。君みたいな可愛い子が不幸な人生を送るぐらいなら、そんな世界はいらないよね」

「い、いきなり何を言ってるんですか、もう……」

月夜をそっちのけで喋っている二人に、月夜は軽い苛立ちを覚えた。まんざらでもなさそうに頬を軽く染めている楓の姿が、それに拍車をかけた。葉月と楓が二人で喋っているのを微妙な距離から見ている女子たちも、月夜と同様の気持ちを抱いていた。

「くす、本当のこと言っただけさ。そうだ、良ければ、学校を案内してくれないかな？」

キザなセリフのはずなのに、葉月が言うとなんかそれをキザとは思わせなような紳士っぽさがあった。それが、楓の調子を狂わせていた。

「えと……でも」

楓は横にいる月夜を、ちらり、と軽く見た。

「いいんじゃないの？案内でもなんでもしてくれば」

月夜はぶっきらぼうに、心にもないことを言った。月夜はそれがなんの感情から生まれた言葉だったのか、分かってはいなかった。

「いいの？早く帰りたいんじゃないじゃなかったの……？」

「別に、もうどうでもいいし。大体から楓と一緒にじゃなかったって、一人で帰れる」

「何怒ってるの？」

月夜と同じ位、楓も鈍感だった。純粹にそう聞いてくる楓に、月夜は自分でも分からない怒りを感じていた。

「とにかく、案内でもなんでもしてやればいいじゃん。俺帰るから月夜は早々に鞆をひつつかんで、二人に背を向けて教室から出て行く。」

「もう、今日の月夜はなんか変な感じ……」

学校にいる間寝ていた楓は、月夜が今日どれだけ苦労したのか知らずに、そんなことを呟く。

「さあ、きつと何か勘に触ることもあつたんじゃないかな？」

くすくす、と何かを理解しているような笑みを作りながら、葉月はそう言った。

「む……いつか、機嫌悪い時もあるよね、それじゃない？」

恋愛ごとに関して鈍い楓は嫉妬混じりの女子の視線に気づくこともなく、葉月と教室を出て行った。

屋上に通じる扉を開け、肌寒い一月の空気を感じながら、月夜は屋上の手すりに寄りかかった。

「あー・・・さみいなちくしょう」

一度は帰ろうとした月夜だったが、屋上でも行くか、と思い、四階から三階通じる階段を下りている時に引き返してきたのだった。

「そりゃ寒いだろうよ、一月だからな」

月夜の隣で手すりに背を預け座っているのは、新学期早々始業式をさぼった利樹だった。

「そうか・・・そうだな」

そう言いながら、月夜は溜め息をついた。

「なんだ、何かあったのか？」

「紫ちゃんの気持ちがあった気がするよ・・・転校生、男だったぜ」

「あつそ・・・」

興味ないと言わんばかりに、利樹は素っ気無く返す。

「しかもかつこいい男だった」

実際はかつこいいと可愛いの間部類に入りそうな顔立ちの葉月だったが、月夜は葉月のことを説明するのが嫌だったのでそれだけですませた。

「ふーん・・・それで、紫はどうだったんだ？」

興味なさそうに言う利樹だが、内心かなり気になっていた。

「紫ちゃんは別段普通だったんじゃないかな。何人かの女子が困んでいたのは見たけど、紫ちゃんは気にしてる素振りもなかったし」

そう、紫ちゃんはいいんだよなあ・・・と心の中で嘆息しながら、月夜は利樹を軽く睨む。

「だから、お前も冗談ばっか言ってるんで、少しは紫ちゃんに優し



くしてあげたらどうだ？」

「知るかよ、あいつが勝手に怒り出したんだろ。わざわざ説教たれにこんなとこまで来たのか？」

呆れ混じりに言う利樹の頭を、月夜は軽くはたいた。

「つて、何すんだよ！」

「言つていい冗談と悪い冗談があるだろ。それに、わざわざお前に説教たれにきたわけでもない。たまたまここに来たら、お前がいたんだよ」

まあ、いるのは予想ついてたけどな、と付け足してから、月夜は再度溜め息をつく。

「分かつちやいるんだけどよ・・・やつぱり性格なんつうのは直らないもんだよな、元がこんなんだからよ」

気まずそうにぽりぽりと頭をかいている利樹は、本人なりに反省しているようだ。

「で、お前は結局何しにここに来たんだ？」

「聞くな・・・俺も少し頭冷やしたくなっただけだ」

どんよりと答える月夜を見て、利樹は理解した。

「ああ、もしかして楓ちゃんがその転校生に恋したとかか？」

からかい半分で言つたつもりで利樹の言葉は、当たらずとも遠からずといった感じで、月夜の胸を切なくさせた。

「別に・・・恋したわけでもないだろうけど、妙に馴れ馴れしくて見ててなんか・・・」

「なんだ、嫉妬してるのか。安心しろよ、楓ちゃんとお前はラブラブだろ」

にやにやと嫌な笑いを浮かべている利樹の顔を、月夜はつい殴りそうになったがなんとか押し留めた。軽く深呼吸してから、口を開く。「嫉妬とか、そういうのじゃない・・・ただ、なんていうのかな・・・」

月夜は言葉に迷った。恋愛経験が少ない月夜には、今の自分の気持ちがあつまく言葉に出来なかった。

「不安か？」

「不安・・・なのかな」

利樹の言葉を使ってみたが、いまいち月夜はしっくりこなかった。月夜のそばに楓がいるのは当たり前前で、それはもはや水と魚人と空気、それ程身近で大切な存在になっていた。だからこそ、不安や嫉妬、といった言葉で月夜はしっくり来なかった。

「わかんねーな・・・今までずっとそばにいた存在が、ふといなくなる感覚なんてもんはよ」

「そりや確かに、不安なんてレベルじゃないな。こんな言葉を知ってるか、月夜」

「なんだよ？」

「人にとって空気は当たり前前の物だけど、それがなくなったら人は生きていけないんだ」

当たり前前のことを当たり前前に言った利樹の言葉だったが、なんとなく今の月夜にはそれが理解出来た。

「とある本の受け売りだけどな、空気を友人・恋人・家族に置き換えりゃ、分かりやすい言葉だと思うぜ。元より、その本だと友達以上恋人未満の女性に使われてた言葉だけだな」

「そうだな・・・もし楓がいなくなったら、俺は生きていけないかもな」

そんなことはまずないのかもしれないが、今の月夜にはそれが当たり前前のような気がした。

「だから、離さないようにしろよ。後悔するぐらいならな」

利樹の言い草に、月夜はつい笑ってしまった。

「お前に言われたくねーよ、どっちもどっちだろ、俺らはさ」

「違いねえ」

利樹も笑った。悩んでいる性格の部分は違うが、悩みの種はほぼ一緒の二人は、寒空の下お互い笑い合っていた。

利樹との軽い雑談を終えた月夜は、校内で楓を探すことなく真っ直ぐ帰宅した。月夜と利樹が話していたのは約三十分、それなら家に帰ってきてるだろう、とあたりをつけていた月夜の期待は裏切られた。

「ただいまー・・・って」

玄関先に置かれている見慣れた楓の靴がなかった時、月夜は落ち込んだ。そしてそれはすぐに軽い苛立ちに変わる。

「なんだよ、まだ帰ってきてないのか」

リビングに向かう月夜の脳裏には、先ほど学校で見た葉月の顔が思い出される。人懐っこい柔らかな顔立ち、それを否定するかのような鋭い目・・・葉月に対する恐怖や嫌悪感が薄れ、多少の怒りを覚えながらも冷静になった月夜は葉月のことを分析してみた。

（身長は俺と同じくらいか？見た感じ華奢で線が細いって感じだよな・・・顔はまあ、俺よりいいのは認めるけど・・・）

しかし、それだけではクラスの女子にきゃーきゃー騒がれる理由にはならない。葉月には、見るものを惹きつける何かがあった。それを感じ取っていた月夜ではあったが、それが何かは分からなかった。「おかえり月夜、どうしたの？」

突然の声に、ビクツ、と体を震わせて、月夜の思考は一時中断した。考え事に夢中だった月夜は、自分がリビングに入っていたことに気づいていなかった。

「いや、なんでもないよ・・・ただいま」

月夜は気まずそうに挨拶を返し、目の前にいる茜から軽く視線を外す。

「何か考え事でもあるの？」

心配そうに顔を覗き込んでくる茜に、月夜はどきまぎした。最近はずっている茜ばかり見ていたせいか、素の茜に対する免疫が薄れていたのである。しかも最近の茜は特にきれいで、普段十分すぎるほど持っている大人の魅力に、恋をしている乙女特有の魅力が加わり、見る異性全てを惹きつけるような力があつた。男と女、という点を

除けば、茜は限りなく葉月に近いのかもしれない。

「いやほんと、なんでもないから・・・」

もし今の茜が、自分と同じ歳で自分の学校に転校してきたら、その魅力に惹かれて好きな人への気持ちは揺らいでしまうかも・・・なんて考えた月夜は、そんな自分の考えに後ろめたさと虚しさを感じた。

「そついえば、楓は一緒じゃないの？今日は早いつて聞いてたから、今お昼ご飯用意してるんだよ」

茜がどことなくうきうきとしている理由は、すぐに月夜の前に顔を出した。

「お、月夜君おかえり。楓ちゃんは一緒じゃないのかい？」

台所からひよっこりと姿を現したのは、エプロンをつけたランスだった。全体的に線が細いとはいえ、月夜よりも身長が高く男らしいのにエプロン姿が妙に似合っているのは、ランスだからこそだった。

「楓は・・・ちょっと用事があつたから、先に帰ってきたんだよ」  
二人にはほぼ同時に楓のことを聞かれ、月夜は元氣なくそう答えた。

「月夜が楓と一緒にじゃないなんて、珍しい」

「うんうん、確かに珍しいことだね」

お互い頷きあっている茜とランスに、月夜はつい文句を言おうとしたがなんとか押し留めた。自分が惨めになる気がして、言いたくなかった。

「いつも一緒ってわけじゃないさ・・・まあ、二人の邪魔するのも悪いし、ご飯出来るまで部屋にいるよ」

半分は本心で、半分は嘘だった。今の月夜にとって、仲の良い二人を見ているのは辛かったからだ。

「月夜も手伝いなさいよー、と言いたいところだけど、なんか元氣なさそうだし、ゆっくり休んできなさい、ね？」

「うん、なんか疲れてるみたいだし・・・ご飯できたら呼びに行くから、ゆっくりしてたほうがいいよ」

自分の感情を表情には出さなかつた月夜だったが、年齢を重ねてる

分月夜よりは数段鋭い茜とランスには通用しなかった。

「ああ、うん・・・お言葉に甘えさせてもらうよ。それじゃ、また後で」

表情ではなく、仕草や声が落ち込んでいるということに、今の月夜は気づく余裕はなかった。とぼとぼと驕りをまとい、リビングを去っていく月夜を、二人は心配そうな顔で見送った。

部屋に戻ってきた月夜は、どつと押し寄せてきた疲労感に身を任せ、着替えもせずに布団の上に倒れこんだ。あー・・・、と小さく呻きながら、身動き一つしないその姿は死んだ昆虫のようだった。

「なんでこう・・・次から次へと・・・」

問題事ばかりなんだ？と溜め息をもらす。しかしその声に疲労の色はあっても、かつて月夜自身の力によつて悩んでいたあの頃とは違い、人としての充実感のようなものがあつた。今布団の上で倒れている少年は、恋に迷い、友人同士のけんかに迷い、怒りや哀しみなどの感情に振り回されている紛れもない一人の人間だった。

「はは・・・ほんと、嫌になる・・・疲れた」

考えることはたくさんある・・・いや、考えたいことがたくさんある。それでも、今は・・・、どんよりとした表情に微かに笑みを浮かべながら、月夜は考えることをやめ、睡魔に身を任せた。

「・・・きや」

「ん・・・」

軽く頬を叩かれている感覚と、聞きなれた声に月夜は目を覚ます。虚ろな瞳と頭で、月夜は目の前にいる少女の名前を呼んだ。

「・・・こんなところでどうなされたんですか？フュリア様」

「何寝ぼけてるの・・・？」

月夜の目の前にいる少女、楓は呆れたような顔で月夜を見つめる。

「ん・・・？俺何か言った？」

頭に薄い靄が張っているかのような感覚に、月夜は頭をかしげた。

「いつまでも寝ぼけてないで、ご飯食べに行こうよ」

「ああ・・・うん、分かった」

と言いながらも、月夜の行動は全く別のものだった。早くもなく、さりとして遅くもない緩やかな動きで、目の前にいる楓を抱き締めたのだった。

「きゃっ・・・ど、どうしたのいきなり？」

驚く楓の声を聞きながら、月夜もなぜ自分がそうしたのか分かっていなかった。初めは驚いた楓だったが、月夜が微かに震えてるのを感じ、そつとその背中に腕を伸ばす。

「自分でも・・・分らない、けど、こうしなきゃいけない気がした。護らなきゃ、いけない気がした」

つい、と頬を流れ落ちる涙が、音もなく楓の肩を濡らしていく。楓はそんな月夜を、ただ優しく抱き締めた。

「俺が・・・護らなきゃいけないんだ、だから・・・」

だから、なんだと言うのだろうか？涙の意味も言葉の意味も、そして行動の意味さえも、今の月夜には何一つ理解出来ていなかった。それでも、服越しに感じる楓の体温を愛しく思い、月夜はしばらくの間楓を抱き締めていた。

賑やかな昼食を終えた月夜は、他の四人と軽く会話を交わした後、一人部屋の布団に寝っ転がっていた。冬場とはいえ、まだ陽が沈むには少し早い二時頃、まだまだ若い癖に月夜はこれといってすることもなく、だらだらと暇な時間を過ごしていた。

「暇だねえ・・・ふああ」

欠伸をしながら、うーん、と伸びをする。学校に帰ってきてから、昼食までの間三十分程しか寝ていなかったため、まだ多少の眠気が残ってる月夜だったが、寝れるような気分ではなかった。

「葉月玉……か、なんなんだろうな、あいつ」

神社でぶつかった時、学校で会った時……二度の出会いも単なる偶然といえればそれまでに過ぎないが、月夜が感じた恐怖などの感情を付け加えると、それは決して偶然とはいえない気がした。しかし、今の月夜にとって一番重要なことは変な恐怖や懐かしさよりも、楓と葉月が出会ったばかりなのに良い雰囲気になりつつあるのでは？という点だった。

「あんなキザっぽいこと言うやつはどこがいいんだよ……確かに顔が良いのは認めるけど」

月夜はぶつぶつと文句を呟いた。そしてふと気づいたことに頭を悩ませ始める。

(そついや……なんであいつにだけイライラするんだろ)

実のところ、楓は結構友好関係が広い。もちろん男女関係なく、友達が多いほうだ。今まで楓が月夜以外の男子と仲良く喋っている場面を月夜は幾度となく見ているが、葉月に対するイライラのようなものを月夜は感じてこなかった。

「なんでだろうなあ……？」

月夜が考え続けていると、部屋のドアがコンコンと音を立てた。

「お兄ちゃん、いるー？」

ドア越しから聞こえてきた声に、月夜はだるそうに返す。

「いないよ」

そう言った直後、バーン！とドアが壊れそうな勢いで開けられた。

そこには、怒った顔をしているリミーナが立っていた。

「いなかっただら返事があるわけないでしょー！」

「軽い冗談だろ、そんなに怒るなよ」

やれやれ、と言った感じの月夜の言い草に、リミーナはキレそうになるが、ぶるぶると体を震わせながら深呼吸をし、どうにか落ち着きを取り戻した。

「それで、どうしたんだ？」

ドアを閉め、月夜の横にちょこんと座ってから、リミーナは答える。

「特に用事はないんだけど・・・たまにはお兄ちゃんとゆっくりしたいな、と思つて」

月夜はそんなリミーナをありえないものを見るかのような目で見てゐる。月夜のそんな視線に気づき、リミーナは、むー、と口を尖らせて言う。

「何よ、悪い？」

「いや・・・悪い物でも食べたのか？もしくは熱でもあるのか？」

月夜は上半身を起こして、リミーナの額に手を当てる。仄かに温かい体温を感じ、熱がないことを確認した月夜は顔をしかめた。

「熱はないな・・・あいたつ」

リミーナに頭をはたかれて、月夜ははたかれた箇所をなでる。

「何すんだよ!？」

「それはこつちの台詞でしょ!」

普段と違い、変にしおらしいリミーナに違和感を抱いたからこそその月夜の行動だったが、結果としてそれはリミーナを怒らせた。

「私だつてね、たまにはお兄ちゃんとゆっくりしたいのよ!最近は茜お姉ちゃんに振り回されっぱなしでそんな時間もなかったし・・・何よ何よ何よ、楓お姉ちゃんとはっぴり二人つきりになつてー!」

それは妹としての嫉妬なのか、異性としての嫉妬なのか、月夜には分からなかった。もちろん、リミーナ本人も分かつてなどいない。

言い終えたりミーナは、自分が言ったことに気恥ずかしくなったのか、少しだけ顔を赤くしてそっぽを向いた。

「・・・分かつた分かつた、全く」

リミーナの迫力に多少押されはしたものの、月夜は溜め息をつきながらそう答えた。

「まだまだ、子どもなんだな、お前も」

苦笑しながら軽く頭を撫でると、リミーナは月夜の膝に頭を乗せて横になった。それでも、そっぽを向いたまま顔を合わせようとはしない。そんなリミーナがなんとなく可愛く思え、月夜はしばらくの間頭を撫でていた。



「ねえ、お兄ちゃん」

「なんだ？」

唐突に深刻そうな声でリミーナは月夜に呼びかける。数分の間頭を撫でられていたせいで、髪が少しだけ乱れていた。

「お兄ちゃんは、不安にならないの？」

「不安？」

リミーナの言葉の意味が分からない月夜は、それを聞き返した。

「私ね、時々思うの・・・私たちのような存在が、本当に人間に作れるのかな、って」

不安気に呟くりミーナの表情は暗い。そんなリミーナとは逆に、月夜は軽く笑いながら言った。

「作れるも何も、実際俺らはここに存在してるだろ？それが、答えだよ」

「そうだけど・・・もしかしたら、人間以外の違う何か、私たちのような存在の元となる何かが、いるんじゃないかって、思うの」

なおも不安気に食い下がるリミーナ。今日部屋に来た理由はそれかと月夜は思いつつ、真剣に悩んでいる妹のために少しだけ真面目に考え、そして口を開いた。

「まあ、ありえない話じゃないかもしれないけど・・・そうするといくつか疑問点があるよな」

月夜は指を立てながら疑問点をあげていく。

「一、まず理由だよな、もし大元になる何かがいるとするのなら、その理由が分からない。二、その何かがいるとしたら、それは人間ではないだろうけど、その正体が分からない。三、といってもこれは推測だけど、その何かが俺らを作り出せるような力を持っているのなら、そんな回りくどいことをしないで自分自身の力でその理由になるべき目標を達成出来るんじゃないか？・・・大体から、いきなりどうしたんだよ、そんなこと思うなんて」

人外の力を失ってもなお、月夜の頭の回転はそこそこだった。月夜

が学校での成績が良いのは、元より力は関係ないのかもしれない。

「私も、本当はよく分かってないの。そんなの考えるだけ無駄だつて分かってるけど・・・お兄ちゃんがあげた疑問点も全部分からないけど、私がそう思うのは勘みたいなものなんだと思う」

不安そうな声、しかしその反面、その声には多少の自信が含まれていた。

「まあ、いるかいはいかはともかく、確かに今はそんなこと考えるだけ無駄だな。何も分からないんじゃないか、いたとしても俺らが出来ることがないだろ？それに・・・」

月夜は言葉を切って自分の背中を撫でた、今は生えることのない黒い翼に、少しだけ思いを馳せる。

「元より、今の俺らじゃ何も出来ないだろ」

あれだけ嫌がっていたはずの力を、今の月夜は失ってしまった体の一部のように切なく思えた。

「そうだよね・・・でももし、そいつの望みが人類の滅亡とかだったら・・・私は・・・私が、止める」

元々人類を滅ぼそうとしていたリミーナにとってそれは矛盾している言葉だったが、今のリミーナはそれを強く言い切った。

「だな、俺らみたいな兵器を作り出す理由なんか、それぐらいしかなさそうだしな・・・」

その何かがいるとしたら、その目標はそれだと月夜はなんとなく納得した。

「しかしまあ、お前が人間の為に戦うだなんて、随分考えが変わったもんだよな」

笑いながら、からかうように言う月夜に、リミーナは怒ったように言う。

「昔は昔、今は今！・・・贖罪とか、そんな気はないけど・・・それでも私は、間違っていたから」

そんなリミーナの頭を、月夜は少し強めに撫で回した。

「お前も成長したなあ、兄として嬉しいぞ」

「痛い痛い、髪が抜けるでしょ！」

そんなリミーナの言葉などおかまいなしに、月夜は頭をがしがしと撫でる。もはや撫でていいのか擦っているのか分からなくなっていた。

数十秒の後、ようやく手を止めた月夜は優しく言う。

「だから最近、睡眠不足なんだろ、お前」

誰に言うことも出来なく、人知れず悩んでいたリミーナの気持ちを月夜は理解した。

「それだけじゃ、ないけどね」

口を尖らせて言うリミーナに月夜は苦笑した。言うまでもなく、それは茜のせいでもあるのだから。

「少しここでゆっくりしてけよ、たまにはな」

「元々そのつもりだよ、楓お姉ちゃんのそばも安心するけど、お兄ちゃんもつとだもん」

珍しく子どものような・・・実際の歳はまだ子どもなのだが、とにかくリミーナは、そんな甘えた声を出した。

「安心ね・・・俺はよく頼りないって言われるけどな」

苦笑しながら言う月夜に、リミーナは言う。

「そんなの関係ないよ」

例え頼りない兄でも、リミーナにとって月夜はそばにいと安心出来る存在だった。

「そうかねえ・・・まあ、なら、安心して休めよ」

いい加減足が痛いなあ、と思いつつも、月夜はそれを言わず、なおさらリミーナをどけることもしなかった。

「うん・・・」

そして、数分足らずでリミーナは寝息を立て始めた。そんなリミーナを、月夜は微笑みながら見つめる。

「もしそいつが人間を滅ぼそうとしても・・・もう、お前を戦わせたりなんてしないよ。例えそれが、お前の意志でも」

その呟きには、堅い決意があった。

(もしその時になったら、俺が全力で護る、お前も、楓も・・・もう、誰にも傷つけさせやしないさ)

自分にとって大事な人間が、罪に苦しむのも死に晒されるのも、月夜には耐えられない事だった。

(罪を背負うのも、死ぬのも、俺だけで十分なんだ)

それがどんな結果を生むのか、月夜は理解していなかった。ただ優しい目つきで、眠っているリミーナを見つめ続けていた。

「月夜、ご飯だよー」

夕飯の支度が終わった楓は、そう言いながら月夜の部屋のドアを開けた。

「あれ？」

部屋の中を見て、最初に楓は少しだけ目を丸くし、その後軽く微笑んだ。

「・・・もう少し、寝かせておいてあげよっかな」

そう小さく呟いて、そそくさと部屋を出て行った。部屋に残されたリミーナと月夜は、兄妹仲良く寝息を立てて寝ていた。見るものを和ませる一枚の絵のような、そんな微笑ましい光景だった。

やきもき(後書き)

またまた不穏な感じになってまいりました。  
今まで日和っていた分、月夜もまた忙しくなりそうですねえ

## 青春？

葉月が転校して来てから二日目の昼休み、屋上には楓を除いたいつもの三人が集まって雑談しながら昼食をとっていた。昨日ケンカしていたはずの利樹と紫は、昨日のケンカが嘘だったかのようにいつも通りだった。

「・・・で、妹が言うわけよ。兄貴、少女コミック買って来て。ってさあ、恥ずかしいつつうの」

「ふふ、確かに利樹が少女コミックなんて柄じゃないわよね、想像したら笑えるわ」

「笑うなよ・・・店員と周りの視線がいてーんだって、あれはまじ恥ずかしいぜ。っておい、月夜聞いているか？」

月夜はそんな二人を前にしながらも、心ここにあらずといった感じではーっとしていた。遠い目をしながら、その顔には怒りとも切なさともなんとも言えない負の感情が入り混じった色を浮かべている。時々ジュースに刺さっているストローを吸っているが、数分前からその中身は空だった。

「おい、こら、月夜」

利樹に肩を揺さぶられても、月夜は無反応だった。

「そっとしておいてあげれば？あんなことあった後じゃさすがに・・・」

心配そうに言う紫に、利樹は困ったように頭をかいた。

「とは言っても、このままにしとくのもなあ・・・少しぐらいは、元気付けてやりたいじゃない？」

「そうだけど・・・うーん」

月夜のことと悩んでいる二人のことなど全く気づかない月夜は、相変わらず上の空だった。

月夜がこんな風にぼーっとしているのはいくつか理由があった。まず始めに、登校中、月夜は昨日の葉月のことをそれとなく楓に聞くつもりだったのだが、それをうまく切り出せずにいた。聞く、と言っても、精々楓が葉月をどう思ってるかぐらいのことだったのだが、月夜にとってそれは何より重大なことだった。

（昨日は結局聞けなかったしなあ・・・）

リミーナが部屋に來たり、いつものように茜に振り回されたりと、昨日は色々あつて聞くことが出来ていなかった。

（といつても、どんな風に聞けばいいんだろうなあ・・・）

返答が怖い、という点にも悩みながら、月夜が考えていると・・・、

「やあ、おはよう」

人懐っこそうな顔に意味ありげな笑みを浮かべ、月夜の悩み事の本人が姿を見せた。

「あ、おはよー」

「おはよ」

昨日の自己紹介と同じように、にこやかに挨拶する楓と対照的に、月夜はぶっきらぼうに言った。

「こんなところで会うなんて偶然だね、いや、三回も続いたらそれは必然と呼ぶべきものかな」

葉月は楓の隣を歩きながら、そんなことを言った。家が近ければ別に会つても不思議じゃないだろ、同じところ向かつてるんだから・・・、と月夜は思ったが、

「必然じゃなかったら奇跡かもね」

と楓が笑いながら言ったので、月夜はそれを口に出せなかった。

「じゃあ僕らの出会いそのものが、奇跡なのかもしれないね」

キザな台詞を平然と言つてのける葉月に、月夜は虫唾が走った。だからつい、言葉がきつくなつてしまった。

「そんな簡単に奇跡なんて起きるかよ、安売りでもしてんのか」  
ぼやくように言った月夜に、楓が少し怒つたように言う。

「そんな言い方ないんじゃない？奇跡つて言葉、私は好きだよ」

葉月をかばうような楓の言葉に、月夜はかなりむっ、ときたが、楓とケンカするのも嫌なのでそれ以上は何も言わなかった。

「ごめんね、月夜機嫌悪いみたいで・・・口は悪いけど、いつもはこんなこと言わないから」

月夜の代わりに謝る楓に、葉月は微笑み浮かべて言った。

「気にしてないよ、今日の僕はすごく幸せな気分だからさ」

「何か良いことでもあったの？」

ハテナマークを浮かべて聞いた楓に、葉月は少しだけもったいぶつてから口を開いた。

「朝から、君に会うことが出来たからね」

聞いている方が恥ずかしくなりそうな言葉を、にこやかな笑みと共に口にした葉月を月夜は色々な意味ですごいと思った。

（あー！殴りてえ！！）

湧き上がる怒りと鳥肌に体を震わせながら、月夜は楓の反応をうかがった。さすがの楓も嫌悪を示すだろう、と考えた月夜は、すぐに自分の考えが甘かったことを分からされた。

「な、何言ってるの・・・でも少し嬉しいかも」

まんざらでもなさそうに少し頬を赤くしている楓を見て、月夜は啞然とした。もし言ったのが月夜だったのなら、「何言ってるの？」、「と笑われるか頭を軽くはたかれるかのどちらかだろう。どんなキザな言葉でも、かっこいい男がさりとて言う分には良いようだ。何より、交友関係が広いとはいえ、恋愛に疎い楓には十分な威力だった。」「・・・けっ」

やさぐれたように月夜は足元の石ころを蹴っ飛ばした。相当の怒りと、葉月に対する劣等感が入り混じって月夜は冷静さを失っていた。「君が嬉しいのなら、僕も嬉しいよ」

「もう・・・葉月君って誰にでもそんなこと言ってるの？」

多少落ち着いた楓が、少し疑わしげな目で葉月を見る。お？お？と月夜は期待したが、さすがの葉月も一筋縄ではいかない。

「僕が誰にでも言っているように見えるかい？」



葉月の返答に、楓は、うーん、と少し考える。

(誰にでも言っただよな。言っちゃえ言っちゃえ、楓)

「分からないけど、そんな風にぼんぼん言葉が出るとそう思っ  
ちゃ  
うよ」

(そっだよなー)

楓の言葉にうんうんと頷く月夜。正直、情けなかった。

「そっか・・・そう思われちゃうなら仕方ないかな。でも信じて欲  
しい、僕は君の前でだけ詩人のようになってしまうんだ」

哀しそうな仕草と、愁いを含んだ瞳は全ての異性を惹きつけてしま  
いそうな力を持っていた。茜の男番みたいな感じだが、周りを惹き  
つける不思議な何かは、茜のそれを上回っていた。

「そ、そんなこと言われても・・・」

再び楓は揺らいだ。もじもじと両指を合わせて困ったように頬を染  
めている。月夜は色々な楓を見てきた、もちろん恥ずかしがってる  
楓だっで見慣れている。しかし、今の楓は月夜が知らない楓のよう  
な気がした。それを見るのが耐えれず、月夜はとっさに駆け出して  
いた。

「月夜？いきなりどうしたの!？」

楓の呼び止める声に返事をせず、月夜は走った。二人が仲良く話し  
ているのが嫌だった、別人のような楓が嫌だった、月夜はただ、そ  
こから逃げ出したかった。

「どうしたんだろう?」

遠ざかっていく月夜の背中を、心配そうに楓は見つめていた。鈍感  
も、ここまで来ればもはや罪だろう。

「さあ、どうしたんだろうね」

葉月は見るものを戦慄させるような残酷な笑みを一瞬浮かべ、そし  
てすぐにいつものにやかな微笑みに戻った。

登校時の出来事で既に半死人化した月夜に、学校で更に追い討ち  
がかけられた。新学期二日目ということで、一時間目はクラスの係

決めや席替えの時間だった。一学期・二学期と、月夜は変な運の強さで窓際と楓の隣をいつもキープしていたわけなのだが・・・、

「・・・」  
席替えが終わった後、月夜は五つ前の席、最前列の席を睨むように見ていた。席替えはくじ引きで、月夜は確かに窓際の席を取れた。最後尾なので、寝るには適しているかもしれない。しかし、隣に座っていたのは楓ではなく利樹だった。

「珍しいな、お前の隣なんて」

月夜の隣の席に座っている利樹が、笑いながらそう言った。しかし、今の月夜にはその声すら耳に入らなかった。窓際の最前列に座っている葉月、そしてその隣に座っている楓を凝視していたからだ。何やら葉月が楓に話しかけているが、席が離れているため会話の内容が月夜には聞こえなかった。

「おーい月夜、聞いているのか？」

利樹の呼びかけも虚しく、月夜は微かに口元をひくひくさせながら一点だけを凝視している。こりやだめだ、と思った利樹は、月夜と逆隣りに座っている女子に話しかけた。持ち前の軟派さを發揮して面白おかしく話していた利樹だったが、利樹の席から二つ前と一つ右の中央寄りの席に座っている紫に睨まれすぐに大人しくなった。こうして、窓際最後尾付近はとても静かになった。

そして、とどめとなったのは昼休みに入ったばかりの頃だった。いつもの様に四人で昼食をとろうとしたところ、葉月が楓を昼食に誘ったのだ。楓は最初、それなら五人で、と提案したが、月夜が頑なに嫌がった。利樹と紫がとりなしはしたものの、死んでも嫌だ、と月夜が断言した。すると楓が、

「どうしてそんなに嫌なの？」

と月夜を問い詰めた。葉月と楓が仲良くしているのを見るのが嫌、と本音を言えるわけもなく、

「嫌なものは嫌なんだ！」

と子どもが駄々をこねるようなことを月夜は言った。月夜のそんな言葉にさすがに呆れた楓は、

「じゃあ、月夜だけ一人で食べればいいじゃない!」

と容赦のない言葉を言った。月夜は何か言おうとしたが、諦めたように、とぼとぼと一人で教室を出て行った。

「本当にいいの?楓」

紫にそう言われはしたが、楓もどうやら頭に來てたらしく、

「ほっとけばいいのよ」

と冷たい態度をとった。困ったように利樹と紫は顔を見合わせて、そして頷きあつた。

「俺ら、月夜と飯食うよ」

「そうね、一人じゃ寂しいもの・・・」

二人の言葉に、楓は少しだけ動揺した。

「それじゃ・・・まるで私が悪者みたいじゃない」

「月夜も月夜だけだな、まあ、たまには別々でもいいんじゃないか?」

利樹も利樹なりに言葉を選び、楓にそう告げた。楓が少し考えている間一瞬だけ場の空気が止まり、静かになったが、今まで黙っていた葉月が口を開いた。

「早くしないと昼休みが終わってしまふよ?行くこつ」

多少強引に、楓の手を引いて葉月は歩き出した。一瞬何かを言おうと顔を上げた楓だったが、すぐに視線を落とし、葉月と一緒に教室を出て行った。

そして屋上で一人死にそうな顔でぼーっとしている月夜に、利樹と紫の二人が合流し、今に至る。

「さてさて・・・どうしたもんか」

月夜は二人が来たことにすら気づいていない。上の空どころか、蟬の抜け殻のように月夜の形をした物がただそこにあるだけのような

感じに、利樹は頭を悩ませた。

「それにしても、楓ってば急にどうしたんだろ・・・すぐに他の男の子になびくような子じゃないのに」

確かに葉月はかっこいい、月夜と比べれば八割以上が葉月を選ぶだろう。しかし、月夜と楓の仲はそんな簡単に壊れるようなものじゃないことを紫は知っていた。だからこそ、今の状態はあまりにもおかしく感じられた。

「心境の変化・・・ってやつかもな、人の気持ちはすぐ変わるもんだしな」

利樹が言うのと妙に説得力があった。そんな利樹だが、なんだかんだで紫一筋だったりするわけなのだが。

「そうかな・・・楓はそんなんじゃないと思うけど」

「確かにな、楓ちゃんはそのような子じゃないと思う・・・でも、万が一ってこともあるし」

溜め息をついている二人に、今まで抜け殻だった月夜がぼそつと呟いた。

「なあ、空って飛べるかな」

無表情でそんなことを言い出す月夜は、自殺予告をしているようですさまじく怖かった。

「おいおいおい、いきなり何を言い出すんだお前は」

無表情なのに切羽詰った雰囲気、月夜に、利樹が焦って言う。

「飛べるわけないだろ、っておいこら待て！」

ゆっくりとした動作で立ち上がって、屋上の柵に手をかけ始める月夜を利樹は止める。

「大丈夫、ほら、俺人間じゃないから」

虚ろに言う月夜だが、今は力を失っているため普通の人間と同じだ。学校の屋上から落ちたら、間違いなく死ぬだろう。もちろんその事情を利樹は知らないが、死なないとは言え友人が屋上から飛び降りるだけは阻止したかった。

「そんなもんは関係ないだろうが！」

月夜を柵から引き離し、反対側に放り投げる。どしゃ、と力なく月夜は倒れ、弱弱しく呟く。

「痛い……」

体よりも、心が……、腕を切った時よりも、ランスが記憶をなくした時よりも、月夜は痛かった。感情が麻痺しつつある中で、その痛みだけは鮮烈だった。

「お前もな、卑屈になったり嫉妬したりするのもしようがないとは思うが……何も行動しないで、いいのか？」

利樹はしゃがみこんで月夜の顔を覗きこむ。その顔は、珍しく真剣そのものだった。

「何もしないまま、楓ちゃんとられちゃってもいいのか!？」

利樹の変な迫力に押され、月夜はたじろいだ。しばし黙った後、弱弱しい声で呟く。

「とられるも何も……別に楓は俺のものでもなんでもない、付き合ってるわけでもない……だから、楓があいつのほうが良いっていうんなら、俺は……」

言い終える前に、月夜は利樹に横っ面を殴られた。死体のように身動きすることなく、月夜は殴られた方向に転がった。

「利樹!少しやりすぎじゃ……」

紫は慌てて月夜のそばに駆け寄った。倒れている月夜の上半身を起こそうとしたが、まるで地面に張り付いているかのように月夜は持ち上がらなかった。

「お前昨日言っただろうが!楓ちゃんがいなくなったら生きていけないとか超恥ずかしいことを」

昨日月夜が利樹に言ったこっ恥ずかしい言葉を紫の前で暴露されても、月夜はみじろぎ一つしなかった。反面、紫は驚いた顔で月夜を見ている。月夜が楓に好き以上の感情を持っているのは知っていたが、そこまでだとは思ってはいなかったのだろう。実際は死ぬはずもないのだが、真面目な紫は真に受けていた。何より、今の月夜は本当に死んでいるみたいだからだ。

「月夜君、死んじやだめよ！」

ゆさゆさと揺さぶられても、月夜は無言を保っていた。

「はぁ・・・いつまでそうやって、落ち込んでるつもりなんだ、お前は？」

利樹は溜め息をつきながら、無反応の月夜を見下ろす。いつも馬鹿ばっかやっている二人だけに、月夜の調子が悪いと利樹も調子が狂うようだった。

「こんなこと言いたくないけど、今のお前、最高にかっこ悪いぜ」殴ったり挑発したり、色々なことを試した利樹だったが、それでも月夜は動かなかった。仰向けに倒れている月夜の瞳は、ただ虚空を見つめている。

「・・・少し、放っておいてあげたほうがいいんじゃない？考える時間も、必要でしょ」

紫の言葉に、利樹はばつが悪そうに頭をかいた。

「それそうだけだよ・・・こいつがこんなだと、俺も調子狂って嫌なんだよ。それに、月夜には色々貸しがあるしな」

「利樹の気持ちも分かるけど、辛い時に無理やり元気付けても逆効果でしょ」

紫の言い分はもつともで、利樹は月夜に対する自分の行動を恥じた。あまりにも情けない月夜に対する怒りもあつたが、利樹は何より月夜のことを心配に思つてとつた行動だったが、結局それが裏目に出ってしまったのでは意味がないからだ。

「仕方ない・・・か。月夜、結局お前がどうするかはお前が決めることなんだ、落ち着いたら、色々考えてみるよ」

月夜に聞こえているかすら分からない言葉を、利樹は続ける。

「それと最後に一つ、あの葉月つてやつが楓ちゃんに好意を抱いてても・・・あいつを選ぶかお前を選ぶかは、楓ちゃん次第なんだからな。大体から楓ちゃんはお前のこと好きなんだろうからもう少し自信を持つべきなんだよ。分かったか？」

そう言い終えてから、もう言うことはない、というように利樹は屋

上を去っていった。

「とにかく・・・元気出してね」

そう言い残し、紫も利樹の後を追って屋上から出て行った。二人とも去り際に、何度か月夜を振り返ったが、それでも月夜の反応はなかった。

利樹と紫が去ってから数分の後、午後の授業を知らせるチャイムが鳴り響いたが、月夜はそれでも仰向けに倒れたまま動かなかった。

「楓次第・・・か」

楓が自分のことを好きなのは、言われるまでもなく月夜は知っていた。しかし、葉月にキザなことを言われてまんざらでもない風に頬を染めている楓の姿が、月夜を揺らがせた。

「あんな顔すんなよ・・・馬鹿」

月夜は今まで嫉妬という感情とは無縁だった。自分の力を嫌がり、平凡な人間を羨ましいと思ったことはあるが、ここまで月夜を落ち込ませるほどではなかった。しかし今、月夜は葉月に嫉妬し、苦しんでいる。自分が世界を壊せるほどの力を持つ兵器だという悩みなど、恋に悩み苦しむ今の月夜には、些細な問題だった。

「そばにいるのが当たり前過ぎて、失うことなんて・・・忘れてたな」

かつて一度だけ、楓を失った瞬間を月夜は思い出す。真っ赤に染まった腕、生暖かい感触・・・リミナーを殺すために突き出された腕が、楓の体を貫いたあの瞬間を、月夜は今でも鮮明に覚えている。そして・・・その時の気持ちも。

「二度と・・・あんな気持ちは、ごめんだ」

微かに震えながら、月夜は呟く。

「さて、どうするかね」

溜め息をつきながら、ようやく立ち上がった月夜はどこことなくすっきりとした顔をしていた。利樹に殴られて赤くなっている左頬を軽くなでながら、微かに笑った。

「いてーな、少しぐらい加減しろよ、全く・・・」

言葉とは裏腹に、どことなく嬉しそうな声だった。

（ありがとな、二人とも）

自分を心配してくれた二人に心の中で礼を言いながら、月夜は屋上を後にした。

「遅れましたあ」

軽い調子で言いながら教室に入ってきた月夜に、教室にいた生徒殆どの視線が集まった。

「なんだ、またさぼってたのかお前は？」

さぼりが多い月夜に、怪訝な顔をしながら教師は言った。

「やだなあ違いますよ、お腹の調子が優れなくてトイレ行ってたんですよ」

「ふむ・・・それなら仕方ないな、さつさと席に着け」

教師は特に追及はしなかった。なぜなら、五限目の現国を担当している教師は月夜のクラスの担任であり、月夜が朝から調子が悪そうなのを見て知っていたからだ。

「うーっす」

月夜はのろのろと歩きながら、自分の席に向かった。途中、心配そうな目で月夜を見ていた楓の頭を軽くぽんぽんと叩いてから、席に着いた。

「おい、もう大丈夫なのか？」

隣の席に座っている利樹が、ひそひそと聞いてきた。利樹は利樹なりにかなり心配だったのだが、いきなりこんな風に元気になることに、あまりのことに気が狂ったか？と心配になった。結構ひどいやつである。

「いちいち悩んでられるかよ」

さつきまで死んでいるかのように悩んでいた割りに、平然と月夜はそんなことを言っただけだ。

「お前なあ・・・まあ、元気になったならいいか」



「悪いな、心配かけて」

月夜は月夜なりに二人に反省と感謝をしていたが、恥ずかしくて言えず、そんな軽い言葉でいっぱいいっぱいだった。

「気にすんなよ、ダチだろ」

月夜のことを知っている利樹には、それだけで十分月夜の想いは伝わった。

「こらその二人、お喋りは後にしろ後に」

「はーい」

教師に注意され、二人の会話はそこで終了した。

「それで、どうするんだ？月夜」

放課後、利樹は帰り支度をしながら月夜に聞いた。もちろん、紫も月夜のそばに来ていた。

「ん？どうするも何も、俺は俺が考えるように行動するつもりだぞ」その行動が分からないこそ、利樹は聞いたのだったが、月夜はそんなことを意に介した様子もなく歩き出す。

「ま、そんなわけだから、またな」

右手をひらひらとさせながら、月夜は歩いていった。向かう先はもちろん、楓の席だった。

「あいつ・・・本当に大丈夫なのか？」

「大丈夫なんじゃない？元気になったみたいだし」

二人は特に追うこともせず、そんな月夜の背中を見ていた。

帰り支度をしている楓の肩を後ろから軽く叩き、月夜は言った。

「おい、帰ろうぜ」

いきなりのことに一瞬びくつ、とした楓は、振り返って月夜の顔を見るなり笑顔になった。しかし、すぐにその顔に翳りが帯びる。

「あの・・・さっきは、ごめんね」

さっきは言いすぎたと思い、楓は素直に謝った。

「いや、俺も少し大人気なかったし。お互い様だよ、ごめんな」

月夜もまた、素直に謝った。お互いケンカをする時はすぐ意固地になる割りに、謝る時は素直だった。そんな二人だからこそ、ケンカも多いが長年仲良くやっているのかもしれない。

「おやおや、二人ともケンカしてたのかい？」

天然、とも言えるような言葉で二人の間に割って入ってきたのは、ほぼケンカの原因と言える葉月本人だった。相変わらず、人懐っこい顔に微笑を浮かべている。

「お前、気づいてなかったのかよ・・・」

月夜はケンカの原因となった張本人を睨みながら、呆れた声で言う。「僕はどうにもそういうのには疎くてね」

自分が原因だと全く気づいていない葉月は、当然悪びれた様子もない。

「それにしても、ケンカなんてしちゃいけないなあ・・・何が原因なんだい？」

よくもまあぬけぬけと・・・、と思いながらも、月夜はなんとか自分を落ち着かせる。

「そんなもん、お前には関係ないだろ？」

「関係ない？本当にそうかな？」

まるで全てを見透かすような目で見てくる葉月に、こいつはただ単に知らない振りをしているだけなんじゃないのか？と月夜は思わされた。

「ああ、関係ないね」

素っ気無く返す月夜だが、その目には微かに怒りが渦巻いていた。

「・・・帰らないの？月夜」

放っておいたらいつまでも言い合いを続けていそうな二人に、楓が口を挟む。そこでようやく我に返った月夜は、楓に向かって頷いた。

「ああ、うん・・・帰ろうか」

葉月が相手だと、楓と同様に月夜も調子が狂った。一見感情的に見える月夜だが、キレることさえしなければ案外冷静に物事に対処することが多い。そんな月夜ですら、なぜか葉月が相手だと怒りが先

に立ってしまった。

「途中まで僕もご一緒させてもらおうかな。だめかい、月夜君？」  
わざとらしい素振りもなく月夜に聞く辺りが、天然なのかどうか月夜には理解しがたかった。

「嫌・・・いや、まあ別にいいけど」

一瞬本音が出そうになった月夜だったが、先と同じ失敗をしないように、月夜はなんとかそう言い直した。

「それじゃ、みんなで帰ろうか」

月夜の気持ちも知らずに、楓がのほほんと言う。なんだかなあ、と思いつながら、楓とケンカするよりはましか・・・と思いつながら、月夜は楓と葉月と一緒に教室を出て行った。

学校からの帰り道、楓を真ん中に挟み、右側に月夜、そして左側に葉月と横に並んで三人は歩いていった。二人が和気藹々と話している横で、相変わらず月夜は無言を保っている。

（むう・・・楓のやつ、葉月とばかり喋りやがって・・・）

心中穏やかじゃない月夜だったが、楓と葉月が喋ってばかりなのは仕方のないことだった。そもそも、月夜はあまり喋る方ではない。利樹やランスや茜といった身近な人間といる時はそれなりに口を開く方だが、今は葉月がいる。楓ともよく喋る方ではあるが、その場合は回りに他人がいない時ぐらいだ。

「そうなんだ、葉月君って面白いね」

「いやあ、間が抜けてるだけだよ」

葉月が過去にやった面白失敗談などを聞いて、楓は楽しそうに笑っている。その都度落ち込みそうになったりイライラしたりする月夜だが、どうにか自分を落ち着かせた。月夜は月夜なりに、色々と考えているのだ。しかし、特に解決策も見当たらないので、今はただ黙っていた。

それから数分間、

「あ、僕家こつちだから、またね」

と葉月が立ち去るまで二人は話し続けていた。どうやら葉月の家は月夜たちの家と近いようで、歩いて数分とかからない場所にあるようだ。

「あー、面白かった。・・・どうしたの、月夜？」

月夜がぐったりとうなだれている様子に今更気づいた楓は、月夜に心配の眼差しを向けた。

「別に・・・考え事が多くて疲れてるだけだ」

「だから最近怒ってばかりなの？」

月夜がやきもちを焼いていることなど全く気づかない楓は、さらりとそんなことを言う。恋愛ごとに関して鈍いのは知ってたけど、これ程までなのか？と月夜は思い悩む。

「お前なあ、なんで俺がイライラしてるのか分かんないの？」

だからこそ、つい月夜も口調がきつくなってしまった。

「・・・もしかして、私が葉月君とばかり話してるから怒ってるのか？」

なぜか自信なさげに言う楓に、月夜はどうしようか迷った。素直に肯定するのも癪だが、かといって変に否定してまたケンカをするよくなまねだけは避けたかった。・・・結果、月夜は軽くそっぽを向きながら答えた。

「そつだよ、悪いかよ」

月夜の答えに、楓はしばし沈黙した。どうしたのか、と気になった月夜は横目で楓を見てみた。その顔が妙ににこにこ嬉しそうだったので、月夜は再度目をそらした。そんな月夜に、楓は寄り添う。

「ごめんね・・・でも私が好きなのは、月夜だけだよ？」

恥ずかしそうに、しかし気後れすることなく言う楓に、月夜はすねたように言う。

「じゃあどうして、あいつとばかり話してるんだよ」

すねた子どものような月夜の言葉に、楓は、うーん、と考えながら答える。

「葉月君ってなんか話しやすいんだよねー。あ、別に月夜が話しにくいってわけじゃないよ？ただなんていうのかな・・・友達としては、付き合いやすくて面白い人なんだよね」

「友達としては、か。その割りには、キザなこと言われて頬を染めたりしてたくせに」

自分でもなぜこんな風にしつこくつかかってしまうのか、月夜には分からなかった。ただ、葉月と楓が仲がいいことへの不安と、不満から自分のそんな言葉が出ていることは理解していた。

「確かにちよつとキザかもしれないけど、かつこいい人からあんな風に言われたら誰だって嬉しいと思うよ？私だって、普通の女の子なんだから・・・」

楓がそんな風に思うのは無理もない。月夜は語彙は豊富だが、異性を褒めたりすることが苦手だからだ。利樹も時たま楓に対してキザな褒め言葉を言ったりしているが、元が軟派な性格っぽいので、葉月に比べれば紳士さが足りずそこまで胸が躍るようなものではなかった。だからこそ、楓は葉月の言葉について頬を赤らめてしまった。

「・・・俺には無理だな、恥ずかしいもん」

第一、俺が言っても似合わない。と月夜は嘆息するが、楓にとってはどんな拙い褒め言葉でも、好きな人から言われればそれが一番嬉しいということには気づかなかった。

「そうだね、付き合い長いから分かるけど、月夜には絶対無理だね」  
楓にそう言われ、月夜はかちんときた。そこまで言うなら言ってるんじゃないか、と思ったが、気恥ずかしさと、考えても中々適当な言葉が思いつかず、月夜は黙ってしまった。

「あ・・・ごめん、怒った？」

月夜の沈黙を怒ったから、と解釈した楓は、とつさに謝った。しかし、その言葉は月夜の耳に届いていなかった。なぜなら今、月夜の頭の中では色々な言葉が渦巻いていたからだ。

（楓のいいところを褒めるのが妥当なんだろうけど、可愛いかき

れいじゃ、ありきたりだよなあ・・・)

月夜は隣に楓がいるのにもかかわらず、脳内に楓を思い描く。顔は可愛い、髪はさらさらと言うほどでもないが、ちょこんとまとまっているポニーテールは楓の可愛さを引き立てている。体型はやせ型で、手足は細いがどこことなく女性としての柔らかさがある。胸はあまりある方ではないが、楓の身長からしたら適当なところだろう。思い描いてみても、第一印象は、やはり可愛いだった。

「おーい、月夜ー？」

ぺちぺちと頬を叩かれて、ようやく月夜は我に返った。

「な、何か言った？」

「もう家着いてるよ」

どうやら、考えている間に家の前に着いてたようだ。玄関の前でぽつと立ち止まってた月夜を、変に思ってた楓が頬を叩いたのだ。

「ああ、じゃあ、うん・・・入ろうか」

楓はいまいち齒切れの悪い月夜を変に思いながらも、怒ってるのかな・・・？と考え、それ以上は特に追求せずに家の中に入っていた。

その日の夜、夕食を食べ終え軽い雑談の後、各々が部屋に戻ったのを見計らって月夜はそれぞれの部屋を歩いてまわった。もちろん、どうにか楓を褒めるための言葉調査だった。

まずは同性の意見を求めるために、茜の部屋を訪れた。

「・・・というわけなんだ、どうすればいいと思う？」

茜に事情を説明した月夜は、真剣な面持ちで聞いた。ランスと茜が最近とても仲のいいことを知っている月夜には、手紙の件で生まれた微妙な気まずい気持ちは、既になくなっていった。

「うーん、簡単なことかもしれないけど、難しい話だね」

珍しく酔っていない茜は、月夜の相談に真剣に考えてくれた。

「思うんだけど、別にそこまで褒めることやキザな言葉にとらわれ

る必要もないんじゃないかしら？」

茜の言葉に、月夜は頭を悩ませた。絶対、と楓に言われたからには、なんとか見返したい気持ちがあったからだ。

「そうなんだけどさあ・・・」

「月夜は月夜らしく、不器用なままのほうが可愛いと思うけど」

月夜は複雑な気持ちになりながらも、なんとなくその言葉を嬉しく感じた。楓も、葉月に言われた時こんな気持ちだったのかな？と軽く考える。

「大体から、キザなこと言うんだったら、恥ずかしさなんてもってちやだめよー」

「・・・それはごもつとも」

言い慣れないキザな言葉を、恥ずかしそうに言うのもそれはそれでありだと思いが、今の月夜は楓に、自分は出来る。というところを見せたかったため、それはしたくなかった。

「まあ逆に、臆面もなく堂々とキザなこと言ってる奴のほうがうちは恥ずかしいと思うけどね」。どうしても言いたいのなら、楓が寝ている間にこっそりと言えればいいんじゃない？」

「それじゃ意味ないよ」

とは言ったものの、それもあつか？と月夜は心の中で納得した。もはやなんのために言うのか、分からなくなりつつある月夜だった。

次に訪れたのはランスの部屋だった。恋愛経験は月夜並みで、しかも今は記憶喪失の状態にあるランスだが、それでも月夜より長く生きているランスの意見を聞いてみたかったからだ。

「・・・で、どうすればいいかな？」

ランスに事情を説明した月夜は、先ほど茜に聞いた時と同じく真剣な面持ちだった。

「うーん・・・難しいことかもしれないけど、単純に考えれば簡単な話かな」

先ほどの茜と逆の言い方をするランスに、月夜は少しだけ期待した。「下手にひねるよりも、真っ直ぐな言葉の方が相手には伝わると思うよ。いつでも真っ直ぐな君には、簡単なことじゃないかな？」

そう言いながら、ランスは柔らかな微笑みを浮かべる。最近のランスは、何かを悟ったように落ち着いている。記憶を失ったばかりの頃の、弱い弱い感のあるランスでもなければ、昔のような冷徹さを持つランスでもなかった。そんなランスの変化に最初は多少驚いた月夜だったが、最近は他人行儀さもなくなり、昔の関係とまではいかないが仲のいい兄弟といった感じになっていた。

「真っ直ぐ過ぎて、それだけで終わっちゃいそうでなんか嫌なんだよね」

どうせなら、相手の心に残るような言葉を、月夜は言いたいと思っていた。

「シンプリーズザベスト、じゃないかな。本気の想いがこもっている言葉なら、人は誰だって人の心を動かせるものだよ」

「本気の想い・・・ね。それもそれで、恥ずかしいんだけどなあ」  
困ったように頬をかく月夜に、ランスは言った。

「それなら、楓ちゃんが寝ている時にでも言ってみたら？意味はないかもしれないけど、練習にはなるんじゃないかな」

先の茜と同様に、ランスはそうすすめてきた。寝ている時に言うのが流行なのか？と月夜は不思議に思ったが、やっぱりそれがいいのかなあ、と思い悩んだ。

最後に訪れたのはリミーナの部屋だった。月夜よりも幼く、恋愛経験なんてまずないリミーナだが、今までの辛い人生経験から来る言葉に月夜はほんのちよっとだけ期待した。何より、リミーナは結構ませているところがあるのだ。

「・・・というわけなんだ、どうすりゃいいと思う？」

リミーナに事情を説明した月夜は、それなりに真剣な面持ちだった。



実際、自分より五つも年下の妹に真剣に相談している様は、かなり情けなかった。

「そんなの、簡単じゃない」

はつきりとそう言い切ったりミーナに、月夜はあんまり期待しなかった。真剣な顔で相談してる割りには、結構失礼な奴である。

「お兄ちゃんは楓お姉ちゃんと付き合い長いんでしょ？なら、楓お姉ちゃんが言われたら嬉しい言葉とか知ってるんじゃないの？そういうの繋げ合わせたりして、お兄ちゃんだけの言葉を作ればいいじゃない」

予想していなかったりミーナの言葉に、月夜は驚いた顔をした。

「なによ、その顔は！」

「いや、期待してなかった分、ためになったから驚いた」

全くもって失礼な月夜の頭をりミーナは小突き回した。

「いたたた、悪かったって」

「全く・・・お兄ちゃんは言葉を飾る前に、もっと乙女心を勉強したほうがいいんじゃない？」

その言い分はもつともだった。月夜は恋愛経験が少ない分、乙女心には疎い。だからこそ、楓の誕生日の時なども回りくどかった。楓が喜んでいたので、実際のところは結果オーライだが。

「乙女心つってもなあ・・・俺男だし、そもそも人間かどうかあやふやだし」

男云々はともかく、月夜は案外人間より人間らしいが、本人はそれに気づいていなかった。

「男も人間も関係ないよ、好きな人のことを理解してあげられないんじゃない、人間どころか生物失格だよ」

りミーナの手厳しい言葉に、月夜はうなだれた。りミーナの言うこととはいちいちもつともなので、月夜は反論のしようがなかった。

「分かっちゃいるけど・・・難しいもんは難しいんだ」

だから俺は葉月に勝てないんだよなあ、としよんぼりする。

「とにかく、考えてる暇があるなら行動したほうがいいんじゃない

「？」

リミーナにそう言われ、月夜はそれなりに覚悟を決めた。何より、楓に絶対無理、と言われたのがきいていたからだ。

「それもそうか、んじゃ、邪魔したな」

「しつかりしなさいよー」

妹にそう言われ、月夜はなんとなく情けない気持ちになりながら、リミーナの部屋を後にした。

月夜は一度自分の部屋に戻り、色々とまとめてみた。

「ひねらずに真っ直ぐ、なおかつ楓が言われて喜びそうな言葉……か」

そう言ってみたものの、すぐには思い浮かばなかった。恋愛ことに關しては、月夜の頭も回転が緩くなるようだ。

「そもそも、なんでこんなことになったんだろうな……」

溜め息をつきながら、そう呟く。元より、誰かを褒めるなんていうのは言葉を選ぶ物でもないし、宣言してから言う物ではない気がした。

「いいや、当たって砕けるか。言葉には出来なくても、俺が楓を思う気持ちは……葉月なんかには負けない」

月夜は一度だけ深呼吸をし、何かに動かされるように部屋を出て行った。

「起きてるかー？」

楓の部屋のドアをコンコンとノックしながら月夜はそう呼びかける。数秒待っても、返事はなかった。

「……入るぞー？」

勝手に部屋に入るのをよくやる月夜だが、なぜか今日はドキドキと鼓動が強くなるのを感じた。ドアに鍵はかかっておらず、ノブを回

して軽く押すだけでドアは開いた。

「なんだ・・・寝てるのか」

月夜はほっとしたような、残念なような気持ちになった。電気がつけっぱなしという点を変に思った月夜だったが、あまり足音をたてないように楓の布団に近づく。第三者が見たら警察を呼びそうな光景に見えなくもないが、第三者はいないので月夜が逮捕されることはなかった。

「人が悩んでるつつうのに、能天気な寝やがって・・・」

それは実際楓が悪いわけでもないのだが、月夜はそう呟きながら楓のすぐ近くに腰をおろした。時刻はまだ夜の十時、元々寝るのは早い楓だが、今日は一段と早いなあ、と月夜は思った。

「でも、まあ・・・やっぱり可愛いよな」

すーすーと寝息をたてながら寝ている楓の顔を見ながら、月夜は呟く。丁度寝てるし、練習だと思ってるなんか言ってみるか、と月夜は思った。しかし、言葉が出てこなかった。元々思い浮かばない上に、楓の顔を見ていたら更に言葉が出なくなってしまった。頬を少しだけ赤くしながら、月夜は楓から目をそらす。

「あー・・・だめだ、俺、何やってるんだろ」

なんだか自分が情けなくなり、月夜は弱弱しく呟く。変に高鳴る胸を押さえながら、月夜は再度深呼吸をした。

「・・・ふうー」

少しだけ落ち着いた月夜は、特に意味も目的もなくとつとつと喋りだした。それは独り言のようで、楓に話しかけているようでもあった。

「確かに俺はさ、あいつみたいな言葉は言えない。・・・不器用だし、恥ずかしいっていうのもあるからさ。でも、それがすごい悔しいんだ。情けないけど、あいつと楓が仲良く話してるの、嫌なんだよね。そんな風に思う自分が、なんか辛くて・・・楓からしたら、いい迷惑だよな」

何も考えずに月夜は喋り続ける。ただただ、自分が思っていること

を、言葉にする。

「葉月の言葉で、楓が嬉しそうにしてると、すごく切なくなるんだ。俺だって、楓を喜ばせたい。あいつなんかより、何倍も・・・何億倍も俺のほうが楓への想いが強いんだから・・・なんて、自信過剰かもしれないけどさ」

苦笑しながら、月夜は言葉を・・・想いを紡いでいく。

「あーというのがいいなら、努力する。あんなキザなこと言ってる俺の姿が、自分自身想像出来ないけどさ。楓が好きだから、楓の色んな表情が見たいから、恥ずかしいのもきつと我慢できる・・・だから、ずっとそばにいてほしい。・・・はは、俺結構、独占欲強いんだな、今まで気づかなかったよ」

そばにすぎで、忘れてしまう大切な気持ち。ずっと一緒にいたいと願う、大切な気持ち。いつもそばにある大切なもの、いつもそばにあった大切なもの・・・。

「失ってからじゃ、遅いんだもん・・・言えなくなってからじゃ、遅いんだもん・・・だから、たくさん言いたいんだ、楓が、好きだってことを。たくさん伝えたいんだ、好きだっていう想いを」

月夜は胸が熱くなるのを感じた。葉月が来てから短いはずの間に、楓への想いは何年も何十年も月夜の心にたまっていった気がした。それが、胸を熱くさせる。

「・・・って、何言ってるんだろうな俺は」

急に気恥ずかしくなったのか、月夜はすぐに立ち上がった。

「寝てるのに言っても意味ないよな、まあ・・・」

寝てなきや、言えるわけもないか、と小さく呟いてから、月夜はそそくさと部屋を出て行った。月夜は気恥ずかしさのせいで、喋り続けてからずっと楓の顔を見ていなかった。だから、気づかなかった。寝ているはずの楓の顔が、真っ赤になっていることに。

「・・・なんだ、もう朝かよ」

あの後楓の部屋から戻ってきた月夜は、楓が寝ていたとはいえずさまじい恥ずかしさを感じ、すぐに布団の中へともぐりこんでいた。しかし、変に興奮し切っていた頭は中々落ち着かず、結局ほとんど寝ていない状態だった。

「眩しいし、寝れそうにもないな」

カーテンを突き抜けて窓から差し込む光を、月夜は忌々しげに見つめた。

「いや、寝れる気がしないし・・・どうせ今日は休みだしな」

だるい体を起こし、台所で何か漁ろうと、と思った月夜は部屋を出て行った。

「あ、おはよー」

まだ七時だというのに、やけに元気な楓が台所にはいた。うきうきとした感じで、料理を作っている。

「・・・おはよ」

昨日のことを思い出し、恥ずかしくなって月夜は楓から顔を背ける。昨日の事情を知らないはずの楓は、月夜の様子が変でも特に追求しなかった。

「待っててね、すぐ朝ごはん出来るから」

「随分手際がいいな」

まるで月夜が起きてくるのを知っていたかのような楓の行動に、月夜はいぶかしんだ。

「早く起きちゃったし、みんなの分作っておこうと思ってたから・・・もちろん月夜の分もね」

楓の声は、いつもと違いやけにうきうきとしていた。まさかな、と思った月夜は、リビングの椅子に腰掛ける。しかし、どうにも楓のことが気になり、かといって聞くわけにもいかず、そわそわとした態度で料理が出来るのを待っていた。

「おまーちー」

どごその料理屋のようなノリで、楓は料理をテーブルの上に運んだ。

先ほど楓はみんなの分、要するに五人分といったが、なぜか運ばれてきた料理はその倍はありそうな気がした。しかも、なぜか朝からやたら豪勢だった。

「・・・今日なんか祝い事でもあったっけ？」

変に思った月夜は、声が震えそうになりながら楓に聞いた。

「ううん、ちよっと調子にのって、作りすぎちゃっただけだよ」

その顔はすごく晴々とした笑顔だった。その笑顔とは反対に、月夜の顔はどんどんひきついていった。

「あかさ、」

「ねえ月夜」

月夜の言葉を、楓が遮った。昨日とはまた別の意味で心臓の鼓動が早くなるのを感じながら、月夜は、

「何？」

と聞いた。楓は頬を赤く染めながら、満面の笑顔で言った。

「好きだよ」

突然の楓の言葉に、月夜は啞然とした。そしてすぐに、顔を真っ赤に染める。

「大好き」

真っ赤になつた月夜は何か言おうとしたが、言葉にならない言葉が口からもれる。そんな月夜を、楓はにこにこ見つめていた。

月夜は自分の過ちに気づかなかつた。茜とランスとリミーナに相談した時点で、月夜がこうなる運命は決まっていた。月夜が部屋に戻った後、相談を受けた三人は各々楓の部屋を訪れ、楓に言ったのだ。「寝たふりしてれば、面白い物が見れるかもよ」

こうして、月夜にとって大切な楓との愛は深まったが、その代わりに何かを犠牲にした気分になつた月夜だった。

青春？（後書き）

この物語の男連中はキザか恥ずかしいやつばかりだなあ・・・

## 終焉の始まり

葉月が転校して来てから、既に二週間が経過していた。多少の問題はあったものの、平穩無事に時は流れた。

月夜にとって悩みの原因となっていた葉月は、持ち前の天然さと、社交的な物腰の良さでクラスに大分打ち解けていた。最初は葉月を毛嫌いしていた月夜も、今ではそれなりに仲良くなっていた。

「それで、何の用なんだ？」

放課後、屋上に呼び出された月夜は呼び出した当の本人にそう尋ねる。

「君と大事な話がしたくてね」

葉月はいつもの人懐っこいような雰囲気ではなく、見るものを震えさせるような冷気をまとっていた。いつもと様子のおかしい葉月に、月夜は警戒心を抱いた。最近はそれなりに仲良くなったとはいえ、初めて会った時の恐怖や違和感を、月夜は忘れていなかった。

「君は、楓のことが好きなんだよね？」

おもむろにそう言う葉月に、月夜は警戒心を緩めないまま、

「ああ、そうだよ」

と答えた。葉月はそれを、当たり前だ、というように頷きながら、言葉を続ける。

「それなら、君は彼女のどこが好きなんだい？顔？性格？」

唐突な葉月の質問に、月夜は、こいつはいきなり何を言っているんだ？と疑問を持ちながらも、考えた。

（顔は結構好みだし、性格も好きだ。一緒にいると安心するし、楽しい・・・あれ？でも、なんだろう。どこが好き？って言われると、分からなくなる・・・何よりも、俺が楓を好きな理由がある気がするのに、それが分からない）



そこまで考えてから月夜は、はっ、となつて口を開く。

「なんでそれを、お前に言わなきゃいけないんだ？」

クスクスと冷たい笑いを浮かべながら、葉月は楽しそうな口調で言う。

「そうだね、言う必要なんて全くないんだよ。なぜなら僕には、君が彼女に惹かれる理由が分かるからさ」

自分でも明確には分からない答えを、なぜ葉月が知っているのか、月夜は不審に思いながらも、それが気になった。

「分かる・・・？」

「顔よりも性格よりも、一緒にいて安心したり楽しかったりするのとよりも、君が彼女に惹かれてる理由・・・僕と一緒になんだよ、君は」

葉月は、月夜が考えていたことを言いながら、何かを思い出すような遠い目をする。

「なんなんだよお前は・・・何が言いたいんだよ!？」

葉月のよく意味の分からない言動にしびれをきらした月夜は、そう叫ぶ。

「君は輪廻転生を信じるかい？一度死んだ者の魂が霊界に還り、そして現世に戻り再びその魂を持った肉体が生まれる・・・所謂、生まれ変わりというものだね」

月夜の叫びなど気にも留めず、遠い目をしながら自分のペースで話を進めていく葉月。突然切り替わった話題に、月夜はイライラとしながらも答えた。

「そんなのわかんねーよ、死んだことなんてないんだからよ」

「それもそうだね、何も知らない君に分かるはずがない」

月夜を馬鹿にしているようなその言葉には、深い怒りのようなものが混じっていた。しかし、その怒りは月夜に向けられたものではなかった。なぜか、月夜にもその怒りの矛先が自分ではないことが、分かった。

「気を悪くしないでくれよ、僕が話しているのはあくまで、君と僕

が彼女に惹かれる理由だ。関係ない話に聞こえるかもしれないけど、少し我慢してくれ」

いまだ遠い目をしながらも、葉月はそう言った。関係ない話じゃない、と言われたら、気になる月夜としては黙ってる他なかった。

「続けるよ。例えば、前世・・・つまり今の肉体より前の肉体に魂が入っていた時のことだね。前世で好意を抱いていた人、魂といった方が分かりやすいかな？前世の魂が好意を抱いた魂は、その肉体が滅びて次の肉体に移っても、かつて好意を抱いていた魂に惹かれるのさ。そこまでは分かるかい？」

葉月のいまいち分かりづらい説明に、月夜は頷いた。頭の回転が早い月夜は、葉月の言いたいことは理解できていた。

「要するに、前世で夫婦だった人たちは、生まれ変わっても夫婦になる可能性がある、ってことだろ。それは、お互いの魂が惹かれあってるからな」

「全てがそうなるわけでもないけど、そうだね」

そこまで聞いて、月夜は最終的に葉月が何を言いたいのか理解できた。葉月の説明を長々と聞くのもめんどくさいと思い、月夜は結論を述べる。

「お前が言いたいのはこのことだろ？俺の魂が、前世で楓の魂を持った人に好意を持っていたから、現在、惹かれている」

「半分正解で半分はずれだね。なぜなら・・・」

そこで葉月は言葉を区切った。少しだけ考え込んでから、再度口を開く。

「いや、今日はここまでにしておこうか」

「は？そこまで言うておいて、いきなりなんだよそれ！」

詰め寄ろうとする月夜を、葉月は諫めるように両手を前に出しながら、まあまあ、と言う。

「すぐに分かるさ、今はまだ、時機じゃない。今全てを話せば、君は僕に攻撃してくるかもしれないからね」

目の前でそう言われて、攻撃しない人間は少数だろう。月夜もその

少数に該当せず、葉月のその言葉と煮え切らなさに強い怒りを抱いた。兵器としての力を失ったただの人間になっっている月夜でも、距離を詰め葉月を殴ることは出来る。そして月夜は、それを実行に移そうとした。数歩分の距離を走り、月夜は葉月を殴ろうとした。しかし、葉月を殴るために突き出された拳は、何かに遮られるかのように葉月の顔に当たる直前で止まった。

「君と僕は仲間なんだ・・・だから僕は、君を殺したくない」

拳を目の前に突き出されても、葉月は顔色一つ変えることなく、おぞましい程の冷たい声でそう言い放った。

「仲間だつて・・・？ふざけんな！」

そう怒鳴った月夜の声は、微かに震えていた。それは怒りからの震えではなく、恐怖によるものだった。何かにつかまれているかのようにな動かない腕に、数十本のナイフが突きつけられているかのようにな冷たい感触に、月夜は強がりと言うことしか出来なかった。

「仲間なんだよ、僕たちは・・・君の考えも、きつと変わるさ」

冷えた声、冷えた目、冷えた表情。それなのにその全てが無感情に見える・・・そしてそれは、かつてインフィニティと呼ばれていた頃の月夜にそっくりだった。

「それじゃ、僕はもう行くよ・・・」

絶対的な恐怖に、体がすくんで動けない月夜を屋上に残し、葉月は去って行った。もはや強がりと言うことすら、今の月夜には出来なかった。

「なんだよ・・・あいつ・・・」

その場にへたれこんだ月夜は、少し前にリミーナが言っていた言葉を思い出す。

私たちの存在の元となる何かが、いるんじゃないか、って・・・今の月夜には、それが実感出来た。もし俺の力が失われてなくても、あいつには勝てない・・・そんな絶望的な考えが、今の月夜を支配していた。

「目的は・・・？あいつは・・・？俺と楓は・・・？」

答えが見つからずぐるぐると思考する頭を抑えながら、月夜は屋上で一人うなだれた。

結局、月夜が家に帰ったのは陽が完全に沈んでからだだった。校内の戸締りをするために屋上に見回りに来た教師に怒られ、追い出されるように校内から出された。それがなければ、月夜は屋上から一歩も動かなかったかもしれない。それ程、葉月に突きつけられた力量さと疑問が大きかったのだ。

家に帰ってきてからも、心配そうに声をかけてきた楓やリミナに心ここにあらずといった感じで返事をし、今は自分の部屋で布団の上で寝転がりながら悩んでいる。

「何が・・・起きてるんだ・・・？」

時折そう呟きながら、頭の中ではいまだにぐるぐると答えが見つからない問題を考えている。今の月夜には、完全に冷静さが欠けていた。元より深く考える性格で、なおかつ深く考え出すと周りのことが見えなくなる月夜だが、今回のことはそんな月夜には絶望的な状況だった。考えても答えが分からず、答えが分からないから諦めよう、と笑い飛ばすことも出来ない。考えれば考えるほど分からなくなり、どんどんと深みにはまっていくのだった。

そんな風に月夜が悩んでいると、部屋のドアがコンコンとノックされた。音に気づかない月夜がしばらくの間無言でいると、ドアが開いて楓が姿を現した。

「大丈夫？月夜」

帰ってきてから様子のおかしい月夜のことを、楓は心配だった。楓が部屋に入ってきてても、月夜は気づいていなかった。

「どうしたの月夜？おーい」

楓は仰向けに寝転がっている月夜の頬をペチペチと叩くが、それでも月夜の反応はない。その様は、目を開けたまま寝ている、もしくは目を開けたままの死人、といった感じだった。

「もう、また考え事・・・？」

どうすればいいかな、と楓は軽く思案した後、おもむろに月夜の耳を引っ張りながら耳元で鼓膜が破れない程度に声を張り上げる。

「フーキーヤー！」

「おわっ!？」

ビクッ、と体を震わせ、それでようやく月夜は楓に気づいた。

「なんだ楓か・・・びっくりさせるなよ」

「だって全然月夜気づかないんだもん・・・それで、何かあったの？」

心配そうに顔を覗き込んでくる楓に、月夜は話していいかどうか迷った。何一つ確かなものがない状態で、楓を不安にさせるのが月夜は嫌だった。かといって、何も教えないわけにはいかないよな・・・、と月夜は迷った。葉月の言い方は、明らか楓にも関係があるといった感じだったからだ。

「ちよつと待ってね・・・」

月夜はそう言っただけではなく、楓に言うことを決めた。不安にさせるかもしれないが、なるべく葉月とは距離をおくようにして欲しかったからだ。

「実はさ・・・」

そして、今日の出来事を楓に話した。前世や魂のこと、葉月が月夜を仲間だと言ったこと、そして・・・月夜が葉月を感じた、絶対的な恐怖のこと。月夜の事情を色々知っていて、なおかつ月夜のことを信頼している楓だからこそ、月夜が話してる間変な顔一つせず、無言で真剣に話を聞いた。

「・・・というわけなんだよ」

月夜の長々とした説明を聞き終えた楓は、神妙な面持ちで、

「うーん・・・」

と唸った。その顔には、疑問の色はあったが不安の色はなかった。

「信じれないか・・・？」

その表情を見た月夜は、どことなく哀しそうに楓に聞いた。

「うん、信じるよ。だって、月夜が言うことだもん・・・でもよく分からないよね、葉月君は、何者なんだろう？」

不安な感じを全く出さなずにそう言う楓に、つい月夜は弱弱しく聞いた。

「楓は、不安じゃないのか・・・？」

「え？どうして？」

不安になる理由が分からない、といった感じの楓を月夜は疑問に思いながら再度聞いた。

「だって、あいつは楓に関係のある話をしてた。しかも最後まで言わないまま・・・どうして、それで不安に思わないんだ？」

葉月との実力差を見せ付けられ、月夜はひどく弱弱しくなっていた。もし葉月が楓に手を出した場合、月夜は楓を護りきることが出来ないのを理解させられたからだ。そんな月夜とは対照的に、楓は微笑みながら強く言った。

「だって、月夜がそばにいてくれるもん。絶対に、護ってくれるって信じてるから」

月夜はその言葉で、胸が熱くなるのを感じた。確かに今の月夜は弱い、布団にすら勝てない。しかも相手は布団ではなく、かつてインフィニティと呼ばれていた月夜以上の力を持っているかもしれない葉月なのだ。葉月は仲間と言っていたが、その目的が月夜や楓・・・家族に害を及ぼすものなら、二人の衝突は避けられないだろう。そうなった時、今の月夜では万が一にも勝ち目はない。だからこそ、今まで月夜は考え、悩んだ。しかし、楓のその言葉で月夜の気持ちには変わった。

「・・・そうだよな、うん。絶対に護るよ、何があっても、絶対に楓からの強い信頼は、月夜に力を与えてくれた。葉月と月夜の力量差は、気持ちの力で埋められる程の問題ではないが、それでも今の月夜は、誰にも負けない気がした。

「うん・・・！」

楓も、そんな月夜を見て強く頷いた。

「・・・私ね、いつも月夜に護ってもらってばかりで、何も出来ない自分が嫌だった・・・」

でも、と楓は続ける。その言葉には、強い決意があった。

「私だって月夜のために何かしたい、だから・・・何があっても、月夜を信じるよ。それしか出来ないけど、私はいつだって、月夜のそばで月夜を支えるよ」

月夜の瞳を真っ直ぐ見つめながら言う楓の瞳は、純粹で、そしてとてもきれいだっただ。

「楓・・・」

今までであった月夜の中の不安が、全て流れ落ちたように月夜は感じた。月夜は上半身を起こし、楓を優しく抱き締める。楓の温もりは月夜にとってかけがえないもので、月夜を安心させた。だが、落ち着いたはずの月夜の心が突然ざわめき始めた。

「な、なんだ・・・？」

心のざわめきはすぐに体を震わせ、尋常じゃない量の汗が月夜の体から吹き出る。

「ど、どうしたの？月夜、ねえ!？」

月夜の激しい異常を感じ取った楓は、月夜を強く抱き締める。しかし、月夜の震えは一向に収まらない。そしていきなり月夜の頭に、地獄から響くような声が聞こえた。

『始まる！始まる!!! ついに始まる!!!』

「やめる・・・」

月夜は震える声を出す、頭に響く声は収まらない。

『ずっと待っていたんだ！私は!!! 私はある!!!』

「やめる・・・やめろおお!!!」

月夜は両手で頭を押さえながら叫ぶ。聞いているだけで発狂してしまいそうな憎悪の声は、なおも止まらずに月夜の頭に響き続ける。

『お前もだ！戻って来い!!! 私のために、インフィニティと呼ばれし悪魔よ!!!』

「やめろ！俺を・・・その名で・・・呼ぶな・・・!!! やめろ・・・」

やめろやめろおおおおお!!」

「月夜!? 月夜つてば!?!?!」

正気を失い、狂ったように叫ぶ月夜のその瞳は、かつてインフィニティと呼ばれていたあの頃より深い闇に覆われていた。頭を押さえながら、その苦しみから逃げるようにもがく月夜の体を、楓は振りほどかれないように強く強く抱き締めた。

「月夜!! 落ち着いて、何があつたの!?!」

少しでも気を緩めたら弾き飛ばされてしまいそうな月夜の体を、楓は精一杯抱き締めた。

「あああああ! ああああああああああ!?!?!」

それでも月夜は正気に戻らなかつた。それどころか、月夜の体に異変が現れる。背中の服の部分が徐々に盛り上がり、そしてそれはすぐに服を破つて姿を現した。漆黒の闇に染まつた一對の羽、月夜が力を行使する際に現れるそれが、久方ぶりに姿を見せた。

「月夜! やだよ... 月夜あ!!」

今手を放したら、今までの月夜がいなくなってしまうような気がした楓は、必死で月夜の体にしがみついた。

「どうしたんだ!?!」

月夜の叫びを聞きつけたランスと茜が、部屋に飛び込んできた。

「月夜が! 月夜が!!」

楓は二人の方を振り返る余裕すらなく、今にも振り落とされそうになりながら月夜の体にしがみついている。二人は一瞬月夜の羽に目を奪われたが、すぐに楓と同じようにもがく月夜の体を押さえた。

「うああああ... うううう!!」

徐々に力を増していく月夜は、三人がかりでも押さえるのがやっとだった。

... どれだけだけの時間そうしていたのか分からない。しかし、三人の疲労が頂点に達するかと思われた時、月夜は急に糸が切れた操り人形のように倒れこんだ。背中から生えた羽は急速に縮み、そして月夜の背中へと消えた。



「はあ・・・はあ・・・」

三人は汗だくになり、その場にへたりこんだ。茜と楓は髪がぼさぼさになっていて、ランスに至ってはシャツの第三ボタンまで外れて微かに胸元が露出していた。

「これは一体・・・どういう・・・こと？」

肩を上下に動かしながら、息をするのも一苦労といった感じでランスが楓に尋ねる。

「私にも・・・分かりません」

「楓に分からないんじゃない・・・うちらにも・・・分からないね」

三人同様に、部屋もひどい有様だった。布団は敷布団と毛布と掛け布団が各方向に散乱し、一部の布が破れ中身が露出している。元々物が少ない月夜の部屋は、そこまで散らかったわけでもなかったが、布団一つとってみてもどれだけ月夜が暴れたかは十分すぎるほどだった。

「ねえ、楓・・・」

疲れきった様子で、茜が楓の名前を呼ぶ。

「何？お姉ちゃん」

茜は聞くのをためらうように少しだけ逡巡した後、思い切って口を開いた。

「・・・今までも何度か思ってたんだけど、家族だから、余計な詮索しないで楽しくやればいいやって聞かないでいたの・・・でも、今を見て、あなたと月夜のことのがすごく心配になったわ。だから、教えて欲しいの。月夜は・・・その・・・」

月夜を表現するうまい言葉が思いつかず、茜は最後の言葉だけ濁した。

「月夜は、人間だよ」

考えることなく、それが当たり前だというように楓は答える。

「ただ、少しだけ不思議な力を持っているけど・・・それでも月夜は、人間だよ」

楓は、茜に本当のことを隠すためにそう言ったわけではなかった。

月夜は確かに人間とは言えない、生物ではあっても、その半分は兵器……いや、兵器として生み出されたからにはその存在全てが兵器なのかもしれない。それでも、楓は月夜のことを兵器だと思ったことなんて一度もない。楓にとって月夜は数多くいる人間の一人であり、そして同時にかけがえのない大切な人だった。

「そつか……色々な人間がいるもんね、不思議な力を持っている人間がいてもおかしくないよね」

楓の言葉を鵜呑みにしたわけではなく、楓の言葉の裏にある気持ちを汲み取り、茜はそう言った。月夜がどんな物であっても、茜にとって月夜は大切な家族の一人なのだ。

二人が話している間、ランスは一人何かを考えるように俯いて黙っていた。そんなランスの様子に気づいた楓は、気まずそうに声をかける。

「あの、ランスさん？」

「……はい？呼びました？」

考えることをしている最中だったランスは、多少の間を空けてから楓に言葉を返した。楓を見ているランスの目に、どことなく翳りがあるような気がして楓は言葉につまった。そんな楓に助け舟を出すように、茜が口を開いた。

「ランス、何を考えてたの？」

「いや、何かを考えてたわけじゃないんだ……ただ、変な感覚があったんだ。いきなりこんなことを言うのは自分でも変だと思うんだけど……聞いてくれるかい？」

焦っているような口ぶりのランスだが、つい長々と前置きを入れたのは自分が感じた何かに自信がないからだろう。月夜に異変があった時点で本来なら真っ先に気づかなければいけない楓は、え？、と呆けた表情でランスの言葉を待った。茜はランスを促すように、頷きながらその言葉を待つ。ランスはいまいち自信なさに、自分が感じたことを短く言う。

「リミーナちゃんは、大丈夫でしょうか？」

「あ!？」

月夜のことだけでリミーナのことにもまで気が回らなかった楓は、そう言われてすぐに立ち上がった。

「ど、どうしたの楓？」

楓は茜の言葉に返答をせず、代わりに、

「月夜のこと、お願いね！」

と言い残し、月夜の部屋から駆け出していった。残された二人は何が起きているのか分からず、しばらくの間呆然としていた。

(そうだ、月夜に何かあったなら、リミーナちゃんにだって何が起きてもおかしくはない!)

どうして自分はそれに気づかなかつたのだろうか?、と楓は自分に軽い苛立ちを考えながら、リミーナの部屋へと走った。部屋がいくつもあり、一般家屋に比べれば多少広い如月の家だが、月夜とリミーナの部屋はさほどはなれてはいない。月夜の部屋を出て十秒とかからずに楓はリミーナの部屋の前についた。

「リミーナちゃんいる!？」

焦りながら部屋をノックするが、中から返事はない。楓はすぐにドアノブを手で回し、ドアを開けて中へと飛び込む。鍵は開いていた、しかし、その部屋の中には誰一人いなかった。

「リミーナ・・・ちゃん？」

楓は部屋の中を見回す。部屋は整然と片付けられていて、暴れたような痕跡は何一つない。ただ、暗い夜の闇に通じる窓だけが開かれていた。楓はすぐに窓に走り寄り、そこから顔を出して辺りを見回す。暗い闇の中、リミーナどころか人つ子一人周囲にはいなかった。「そんな・・・どこに行ったの・・・？」

暗然とした表情で、楓はそこにへたり込んだ。自分を姉と慕ってくれたリミーナ、そんな彼女がいなくなってしまったことに、楓は深い哀しみを抱いた。楓自身何が起きているか分からない。しかし、何か良くないことが起き始めているのだけは理解が出来た。

しばらく呆然としていた楓は、おぼつかない様子で立ち上がる。月夜が心配・・・、とうまく働かない頭で考えながら、ふらふらと歩き出す。それは本当に偶然だった。足がもつれて転びそうになった楓は、手近にあった机につかまりなんとか体を支えた。そして、それを見つけた。机の上に何か硬い物で彫られた字に・・・。

「ごめんね、ばいばい・・・？」

楓は声を出してそれを読み上げる。時間がないような感じで稚拙に彫られたその文字には、死ぬ間際に残されるダイイングメッセージのような雰囲気があった。

「何が・・・何が、起きてるの？」

耐え切れない不安と嫌な予感から眩かれた楓の言葉に、返事をする者は誰一人としていなかった。

月夜に異変が起きる約三十分前のこと。

「ふう・・・」

薄暗い部屋に、溜め息が漏れる。質素な作りの椅子に腰掛けながら疲れた表情をしているその人物は、かつて月夜を襲った日本軍のトップである白髪の青年だった。しかしその顔は、以前とは違い老けて見える。

「本当に・・・これで大丈夫なのだろうか？」

最近は特に忙殺されていた青年は、不安気に呟く。多大な不安と忙しさ、それが青年を老けて見えさせた。

「準備は整っているのだろうか？」

突如部屋に響いた他者の声に、青年は、ビクツ、と体を震わせる。「準備は万端だ・・・です」

声が聞こえた方に軽く視線をやりながら、恐縮して青年は答える。その視線の先には、相も変わらず中世ヨーロッパの貴族のような服装をした長身の男が立っていた。まるで最初からそこにいたかのよう、男の存在感はうっすらとしている。

「ただの人間にしては中々な早さだな」

偉そうに言う男に、青年は反論したい気持ちが浮かんだが、すぐにその気持ちは消えた。この男に逆らってはいけない、と青年の本能が反応しているからだ。

「いくつか、お聞きしてもよろしいでしょうか？」

青年は静々と疑問の声をあげる。

「それなりに役にたった君には、私への質問を許可する。なんでも聞くといい、ただし、全てのことには答えられない」

男から質問の許可をもらった青年は、まず真つ先に聞きたいことを口にする。

「私がこの約一ヶ月の間にした行動が、これからのことにどう繋がるのかお聞きしたい」

青年はそう言いながら、あまりにも忙しかったその一ヶ月のことを思い出す。裏ルートで無理やりに捻出した費用を使い、軍備をある程度整えたこと。一週間に一回、自らが親善大使としてアメリカに出向いたこと・・・その他様々なことをした一ヶ月だったが、そのどれもが屈辱を味わい、危険な橋を渡ることとなった。逆らえない男の指示だったとはいえ、その理由を青年は知りたかった。

「いいだろう。君がこの一ヶ月の間にしてきたことは、君の望みを成就させるためには必要なものだ。しなくても可能性はあったが・・・私は慎重なのでね、確実性は多い方が良い」

男の声は無機質なようで、その実言葉の中には熱い何か秘められていた。

「私の望みというと・・・やはりアメリカのことですね？」

慎重に青年が言うと、男は軽く頷いた。

「では二つ目です。なぜあなたは私の望みが叶うのを手伝うのですか？」

男と青年が出会ったのは約一ヶ月前のことだ。接点は何一つないし、男にとって利益がありそうでもない。そう青年は思っていた。しかし、

「利害が一致しているからだ。ただ、それだけだ」

男はそう淡々と答えた。男の正体もしたいことも分からない青年にとつて、それはよく分からない返答だった。

「では……」

「待て、タイムアウトだ」

青年の言葉を遮り、男は言う。

「どうやら始まるようだ、これから私は忙しくなる。君に最後の指示だけ残す。それが、君の望みを叶える最後の一手だ」

そして、始まりだ。と男は誰にも聞こえないような声で付け足した。「ま、まってくれ……」

いきなりの男の言葉に青年は焦るが、男はそれを気にせずに続ける。「これより二十分後、彼の国で悪魔の祟りが起きる。それを機に攻めるのだ」

「悪魔の祟り……？」

男の言わんとしていることが全く分からない青年は、そう聞き返した。しかし、その言葉への返答はなかった。男の姿は闇に溶けて行ったかのように、いつの間にか消えていた。

「くそ！あの男は何が言いたいのだ！？ここまで来て手詰まりでは、全く話にならないか！！」

男がいなくなつた早々、青年は声を荒げて机を叩く。

「くそ、くそ！」

その動作を数回繰り返した後、青年はどうにか落ち着きを取り戻した。

「……悪魔の祟りだと？」

皆目見当がつかない青年は、頭を悩ませ始めた。……そして、すぐに答えは出た。

「そうか、直接アメリカに電話を入れればいいのだな。親善大使として、それとなくその祟りとやらを聞き出せば良いのではないか」彼の国がアメリカだということに青年は気づいていた。

「なるほど……この一ヶ月間は、無駄ではなかったようだな」

一ヶ月間の成果が始めからこの様子ならば、あの男が言ったように私の望みが叶うかもしれんな、と青年はほくそ笑み。二十分という時を楽しみ七割、不安三割で待ち続けた。

そして時間はリミナーが消えた以降に戻る。

「首尾はどうだ？」

うつそうと木が生い茂り、暗い闇に包まれた山の中、先ほどまで白髪の青年のそばにいた男が、隣にいる一人の少年に声をかける。

「四分の一は成功、といったところかな。やはり、黒の翼はだめだったようだね」

失敗に近い数値の言葉を発した少年は、言葉とは裏腹にその表情はどこか楽しそうだ。

「あちらに彼女を残したまま実行に移したのが失敗の原因のようだな・・・まあいい、いずれは全て我が手中に収まるのだからな・・・君の働きが良ければ、この時点で全てが終わっていたのだがね」  
男も失敗を悔やむようなことはしなかった。しかし、失敗の元凶となった少年に嫌味を言うのは忘れない。

「それだけ彼らの絆が深いということですよ。それに、高みの見物しかしてないあなたに、僕を責める権利はありませんよ」

飄々とした態度で男の嫌味を受け流す少年は、全く悪びれた様子がない。

「それに、敵として来る白い翼をこちら側に引き込まなければいけないのは僕なんですから。しかも、人目がつくのが嫌だからと真夜中にこんな場所に来させられたんですから、文句ばかり言わないで下さいよ」

「ふん、所詮簡単な仕事だ」

「それでも、あなたには出来ないでしょう？」

少年の反論をくらい、男は閉口した。少年の言うことはいちいちもつともだったからだ。

「さて、来ますよ」

気だるげに少年は視線を斜め上にあげる。うつそうと生い茂る木の間に、暗い夜空が映った。夜空にばらまかれた星のような一つの白い点か、徐々に二人に近づいてくる。

「女の子を傷つけるのは僕の趣味じゃないんだけどなあ・・・」

やれやれ、と呟いた少年の前に、その白い点は降り立った。その様は、天使が地上に舞い降りたかのような光景だった。

「・・・あなたたちが、元凶でしょ？」

長く白い髪を冬の冷たい風にはためかせ、少女・・・リミーナは呟いた。

「よくあれに一人で耐えられたね」

感心したように、少年は拍手をする。リミーナは先ほどの狂いそうな感覚を思い出した。強い憎悪に自分を失ってしまいそうな感覚、深い哀しみに自分が壊れてしまいそうな感覚・・・そして、それと同時に失ってしまったはずの力が徐々に戻り、かつての力さえも凌駕していく・・・正に、力の暴走だった。しかし、リミーナはそれに耐え切った。リミーナにとって、幽閉され独りで苦しみ続けてきたあの頃の辛さの方がよっぽど耐え難いものだったからだ。

リミーナは相手を睨みながら、強く叫ぶ。

「ふざけないで！あれは一体何？あなたたちの目的はなんなの！？」

「失敗作の君に、それを聞く権利はない。ただ、その力だけは返してもらおう」

淡々と語る男を、リミーナは睨み続ける。

「勝手に与えて、今更になって返せですって・・・ふざけないですよ！」

リミーナの声が震える。それは強い怒りによるものだった。

「はいはい、そんなに怒らない怒らない。それに、君の相手は僕だよ？ねえ、可愛いお嬢さん」

状況を理解してないんじゃないか？と思えるほど、悠長な言葉を少年は言う。



「人を馬鹿にするのも・・・いい加減にしなさいよ!？」

リミーナは少年に向かって駆け出した。失っていた力が戻った今のリミーナにとって、数メートルの距離などないに等しい。

「くらえ!」

目の前に来たリミーナを見ながら、それでも全く動こうとしない少年目がけて、リミーナは腕を振るった。しかし、その腕は少年ではなくただ空を切っただけだった。

「危ない危ない・・・僕としては、穩便にことをすませたいんだけど、だめかな?」

「な・・・!?」

少年はいつの間にかリミーナの背後に立ち、その華奢な首を軽くつかんでいる。

「残念だけど、君じゃ僕には勝てないんだ。だから、やめない?」

「や、やめるもんですか!例え勝てなくても、私は・・・」

強気な姿勢を崩さないリミーナだが、その声は怒りではなく恐怖によつて震えていた。たったの一度交えただけで、リミーナの賢い本能はお互いの力量さをはつきりと理解していた。首を軽くつかまれているだけのはずなのに、まるで心臓を鷲づかみにされているような恐怖をリミーナに与える。

「分かっているだろうが、殺すなよ」

そんな光景を目の当たりにしながら、男は淡々と注意を促す。

「分かっていますよ、一応ね。・・・ただ、ほら、相手が強情だとして、僕の手が滑りやすくなっちゃいそうなんですよね。こんな風に」

歌うように言った少年は、つかんでいたリミーナの首の後ろ半分を握りつぶした。

「ーーーー!!」

リミーナは声にならない悲鳴をあげた。血が吹き出る様を見ながら、少年は薄い笑いを浮かべる。

「抵抗しなきゃ、痛い思いさせずに気絶させてあげようと思ってた

「ただけどなあ」

崩れ落ちるリミーナを見下しながら、少年は血に染まった腕をリミーナの腹部に振り下ろす。

「っーーーーー!!!!!!」

まるで豆腐を貫くかのように容易く、少年の腕はリミーナを貫いて地面に刺さった。飛び散る返り血に薄ら笑いを浮かべながら、少年は言う。

「まだ、抵抗する？」

リミーナは震え、涙を流しながら首を横に振った。強い死への恐怖は、男や少年に対する憤りを飲み込み、一瞬でリミーナをか弱いだだの少女に変えてしまっていた。白い髪や服はリミーナ自身の血によって真っ赤に染まっている。

「最初から無駄な抵抗しなきゃいいのに」

少年は薄ら笑いを浮かべたまま、血をだらだらと垂れ流しているリミーナの体を抱き上げた。

(・・・ごめんねお兄ちゃん・・・お姉ちゃん・・・私じゃ・・・何も出来なか・・・った・・・)

月夜と楓が被害に合う前に、自分一人でなんとかしようと思い、元凶を叩きに来たりリミーナだったが、自分の力の無さに悔しさと哀しさを強く感じながら、ぐったりと意識を失った。普通の人間なら即死の傷だったが、半分兵器のリミーナはなんとか死だけは免れた。それでも、放っておけば数時間もしない内に絶命するだろう。

「それじゃ戻りましょうか、四分の一の成功は、二分の一になりましたしね」

「お前はやりすぎだ」

一部始終を見ていた男は、少年を咎める。

「くすくす・・・満たされないんですよ、こんなんじゃ」

返り血で赤く染まった顔に、少年は子どものような無邪気な笑顔を浮かべる。そこには、悪意も他意も何一つなかった。

「黒い翼が、少しは楽しませてくれるだろう」

少年の行動に諦めがついたのか、男は気だるげにそう言った。

「くすくす・・・彼がどれほどやれますかね。所詮は一枚の失敗作に・・・それよりも僕は、」

少年はそこで言葉を切った。男は少年を睨みながら、淡々とした調子を崩さずに言う。

「私とやり合う、とでも言うのか？」

「そんなことしませんよ」

今は、ね。と小さく呟いた少年は、リリーナを抱えたまま、闇の中へと溶けていった。

「ふん、狐め。だが、所詮偽者。私には、勝てはしない」

男の呟きは暗い闇に消え、そして同時に男の姿も闇の中へと溶けていった。

終焉の始まり（後書き）

ようやく物語が動きだ・・・すのか？

## 殺戮の宴

「ん・・・ここはどこだ？」

広い荒野に、いつの間にか立っていた月夜は疑問の声を上げた。辺りを見回しても、見覚えが全く無い場所・・・それなのに、月夜はなんとなく懐かしさを感じた。辺り一面は台風が過ぎ去った後のように、草一本生えておらず、ひび割れた不毛な大地がただただ広がっている。よく見ると、至る箇所に穴があいていたり抉られていたりした。

「また、夢でも見てるのかな？」

よく夢を見る月夜は、そうぼやいた。けど、これはなんの夢だろうか？そう思案していると、不意に後ろから声をかけられた。

「正確には、夢じゃないぜ」

「誰だ？」

後ろを振り返ると、人の形をした真っ黒い何かがあった。それは例えるなら、闇を集めて人の形にしたもの・・・立体化した影のようなものだ。

「よお、久しぶり・・・といつても、お前には分からないかな？」

表情がなく、それどころか顔すらない影だが、月夜にはそいつがなんとなく笑っているように感じた。

「・・・ああ、分からない。でも、俺はお前を知ってるよ」

「知っているのに分からない、か。随分矛盾してるんじゃない？」

「生物として矛盾してるお前には言われたくない。まあそれも、俺ら人間が勝手に決めた生物学理論だけだな」

「お前、分からないとか言った割りには分かかってんじゃないか。そうだな、俺が矛盾してるなんてのは、人間が勝手に決めたことだ」  
「分からない、と言った月夜を責めるような口ぶりの影に対し、月夜は軽く鼻で笑いながら言う。

「俺が分からないって言ったのは、お前が言った久しぶり、ってい

う言葉のことだよ。久しぶりも何も、ずっといただろ」

からかうような口調の月夜に、影は怒るところか嬉しそうな声で言った。

「それもそうだな！よく分かってるじゃないか、お前は」

「付き合いたいからな、お前が素直に消えるたまじやないことぐらい知ってるよ・・・とはいえ、そうだな。うん、久しぶり」

何かが矛盾しているような月夜の言葉だったが、影はそれについてとやかく言わなかった。

「こうしてお前と話すのは、初めてだよな・・・」

「そうだな、ずっと一緒だったのに、話すのが初めてなんて、ほんとおかしい話だな」

本当におかしい話だ、と月夜は自分の言葉について苦笑してしまった。そういえば、と月夜は思い出したかのように影に聞いた。

「夢じゃないなら、ここは一体どこなんだ？」

「半分は夢みたいなものだよ。ただ、人間っていうのはレム睡眠の時に夢を見て、ノンレム睡眠の時に夢を見ない生き物だろ？お前は今、脳がぐっすり寝ているノンレム睡眠の状態だぜ？」

影の言おうとしていることがなんとなく分かった月夜は、その言葉をまとめてみた。

「要するに、これは体が見ているものなのか？レム睡眠の時は体が、ノンレム睡眠の時は脳が休むものだから」

その理論に従っていけば、確かにこの不思議な夢みたいなものは体が見ているということになる。しかし、体には脳と違い考える力や記憶がないのだから夢を見るはずもない。

「違う・・・そうだな、簡単に言うなら、ここはお前の深層心理の世界、ってとこかな」

「なるほどね、そう言われればなんとなく分かる。だからお前も、具現化出来る、ってことか」

影の言いたいことに納得した月夜は、不意に座りだす。

「お前も、座ったらどうだ、立ち話もなんだし・・・って言っても、

座れるかどうか知らないけど」

影は緩やかに動き、人が座っているかのような形になる。

「お前が出来ることは俺も出来るさ、何せ同じなんだからな」

「同じではあるけど、一緒にして欲しくはない。一応、俺は人間だからな」

それもそうか、と苦笑するように影は言う。

「で、なんの用だ？こんなところに人を呼び出しておいて」

月夜は座ったまま辺り一面を指し示す。相変わらず、何もないうだつ広い荒野が広がっている。この場所に全く見覚えのない月夜だったが、辺り一面荒野というのは、月夜に嫌な既視感を与え、不快にさせた。

「特に用っていう用はないんだ、ただあれのせいで、俺の本来の力が大分戻ったみたいでね。そのおかげでお前とこうやって話せる。

だから話せる時に、ただお前と話したいと思っただけだよ」

「あれ・・・？何かあったっけか？」

あれのせい、と言われても月夜はいまいちピンと来なかった。

「覚えてないとは言わせないぜ？お前昨日、相当苦しんだだろ」

「昨日？なんのことだよ？」

（昨日は確か、葉月のせいでへこまされ、その後家に帰ってきて楓に慰められて・・・あれ？変だな、その後俺はどうなったんだっけ？）

それ以降の記憶が曖昧な月夜は、頭を悩ませる。

「昨日何があったんだ？思い出せない・・・夢を見ているってことは、今俺は寝てる、ってことだろうし」

月夜の言葉に一瞬顔をしかめたように見えた影だったが、すぐに何かを悟って呟く。

「なるほど・・・そう言えば、それがいつでもあの人の望みだったもんな・・・いや、俺が忘れてないってことは、無意識によるあの子の想い、か」

何かを思い出しながら懐かしく呟く影は、大人になった人間が青春

の日々を思い出すような、そんな雰囲気醸し出していた。

「思い出に浸ってる最中に悪いんだけどさ、俺にも分かるように説明してくれない?」

影の言いたいことが全く分からない月夜は、説明を求めた。

「ああ、悪い悪い・・・とは言え、あの子の想いを無駄にするのもな」

影は困ったように頭を傾げた。しかしすぐに、まあ仕方ないか・・・、と呟いた。

「どちらにせよ、もう手遅れだし。知っておかないと困るのはお前だしな」

「そんな前置きはいいから、早く説明してくれ」

いちいちじれたい影を、月夜は急かす。月夜は知りたかった、昨日自分に何が起きたのか、そして影が言う意味の分からない言葉の意味を。

「急かすなよ、お前には全てを知る権利はあるけど、知らないでいた方がいいと俺は思ってるんだ。多少強い力を持つてる人間、その程度の解釈で、お前にはずっと普通に暮らしてもらいたかった・・・普通に生まれてきた人間ならまだしも、何かしらの用途で生まれてきた人間は、その理由なんて知りたいとは思わないだろ?」  
グダグダと前置きが長い影の言葉だが、その言葉には本当に月夜を心配しているような気持ちがあった。そんな気持ちを感じ取りながらも、月夜は皮肉気に言う。

「今まで十分普通に暮らせてきたわけじゃないんだ。今更だと思つよ」

人を殺す兵器として望まれて生まれてきた月夜は、本当に今更だと思っていた。同じ望まれて生まれてきた子どもでも、一般の家庭とはその意味合いが全く違うだなんて、皮肉だよな。と月夜は自嘲する。

「まあ、確かに今更かもしれないな・・・そうだなあ、俺が一から説明するよりも、お前が質問してきたことに俺が答える方が、俺も



困らないし、お前にもいいかもしれない」

影のその提案に、月夜は頷いた。実際、月夜が知りたいことは影が言う全てではないし、影にとっても全てを話すのは嫌だった。

「それじゃ早速、昨日俺の身に何か起きたのか？全く覚えてないんだ」

「なんて言えはいんだろうな・・・お前は昨日、発狂しそうになつたんだよ」

「発狂？」

「ああ、強い憎悪とか哀しみとか感じると、人は狂いそうになるだろ？お前はそれを感じて、壊れそうになつたんだ。そして、力が戻つた」

「どうしてそれで、力が戻つたんだ？大体から、その強い憎悪とか俺自身のものなのか？」

影が月夜の質問に答えるたびに、月夜にとって分からないことが増え質問が増えていった。

「お前のものでもあるしお前のものでもない。強いて言うなら、お前的一部・・・俺自身のものだよ。そのせいで、完全に寝てたのに俺が起こされちまつたんだよ」

「なるほどね、なんとなく分かつた」

月夜は影の気持ちに巻き込まれ発狂しかけ、そしてその憎悪などのせいで寝ていた影が目を覚ました。確かに、それなら理は叶っている、でも・・・。

「腑に落ちない点が二つある。俺がそれを忘れたことと、寝ていたはずのお前がなんでそんな気持ちを抱いたんだ？」

「お前が忘れた理由は、あの子、楓のせいだよ。あの子は、お前に人間でいてほしいんだ。だから翼を生やして発狂してたお前を見て、無意識下で、忘れて欲しい、そう願つたんだ。まあ、俺自身が対象じゃなかったおかげで、俺は忘れなかったんだけどな」

先ほど影が言つた、想いを無駄にしたくない、という意味の理由をようやく月夜は理解した。

「それと、憎悪やらの気持ちを抱いたのは正確には俺じゃない。俺はお前の一部だけど、なおかつ違う奴の一部でもあるんだ。そいつが発した物が、俺やお前に影響を与えたんだよ」

「なるほどね・・・ってちよつと待て、そいつは誰なんだ？」

月夜の質問に、影は黙った。まるで、月夜とそいつを引き合わせるのを嫌がっているように見えた。

「お前、さつき手遅れって言ってただろ？なら、話してもいいんじゃないか？」

黙っている影を月夜は促す。数秒の後、影は諦めたように呟いた。

「・・・前に、リミーナが言ってただろ？あの時は俺は寝てたけど、お前の記憶として俺の中にある。お前やリミーナの中にある兵器、その大元がそいつなんだ」

「そいつが俺やリミーナを作り出したのか？・・・兵器として」

「いんや、お前らを作り出したのは人間だよ。ただ、最強の兵器としてある物を付け加えたのがそいつだ」

「ある物・・・それが、お前か？」

「そうだが、リミーナの中にも、俺みたいなのがいるはずだ」

月夜は自分の記憶の中のリミーナを思い出した。妹としてのリミーナ、兵器としてのリミーナ・・・確かに、二重人格と思えるほどの温度差がかつてのリミーナにはあった。

「・・・なんのために、俺らは生み出されたんだ？」

「人間を殺すためさ・・・それが、そいつの望みの一つだからな」

月夜やリミーナが苦しむことになった全ての元凶、月夜は名前すら知らないそいつに強い殺意を抱いた。そんな月夜の気持ちを知り、影は釘をさすように言う。

「下手なことを考えるなよ？お前じゃそいつには勝てない・・・それに、楓の気持ちが無駄になる」

「分かっている、居場所が分からないんじゃ、殺しに行きたくても行けない」

月夜の言い方は、居場所さえ分かっているなら殺しに行く、そう受

け取れた。

「だから、話すの嫌だったんだよ・・・お前が楓と普通に幸せになつてくれれば、俺はそれで良かったんだ。まあ、俺にも利点はあるし」

意味深な影の言葉に、月夜は疑問の声を上げた。

「利点？」

「いや、なんでもない・・・質問はもうないか？」

無理やり話題をそらすような影の言葉に、月夜は顔をしかめたが、まあいいか、と自分を納得させた。

「聞きたいことは山ほどあるけど、埒があかなそうだし・・・もういいかな」

「分かった、そんじゃそろそろ、起きたらどうだ？」

「言われるまでもないよ・・・お前は、どうするんだ？」

「俺は軽く寝てる、といつても深い眠りじゃないから、お前が力を使つてた頃と同じような感じになるだろうよ」

「なら、いつも通りか・・・」

「そういうことだな」

ああ、と呟いてから、最後に影は言った。

「最後に一つ、絶対に楓のこと護れよな・・・それじゃ、またな」

そう言い残し、影は瞬く間に月夜の横からいなくなつた。一人残された月夜は、立ち上がって何一つない荒野を遠い目で見渡した。

「何があつても護るさ・・・絶対に」

呟いた後、月夜は不意に抗い難い眠気に襲われその場に崩れ落ちた。

「ん・・・」

とろんとした目をしながら、月夜は目を覚ました。体のだるさと瞼の重さを感じながらも、上半身を起こして軽く伸びをする。

「あ・・・あれ？」

伸びをしながら、月夜は隣にいる楓の存在に気づいた。月夜に寄り

添いながら、楓は横になっている。

「おーい、何寝てるんだ楓」

今まで寝ていたので人のことを言えない月夜だが、そう言いながら楓の頬をぺちぺちと叩く。

「うー……ん」

小さく呻きながら動く楓がなんとなく面白いと思い、月夜はしばらくの間ぺちぺちと頬を叩いた。

「むー……」

数分後、ようやく楓は目を開けた。起きたばかりの月夜同様に、その目はとろんとしている。

「おはよう」

そんな楓の顔を覗きこんで、月夜は言った。

「おはよー……って、月夜!？」

いきなり上半身を起こそうとした楓は、月夜の頭に自分の頭を思いつきりぶつけた。月夜はいきなりのことに後ろに倒れた。

「いってえ!いきなり何するん……どうした、楓?」

すぐに上半身を起こして月夜は文句を言おうとしたが、楓の様子が変なことに気づいて言葉を止めた。楓は小さく震えながら、その目に涙をためている。そしてすぐに、楓は月夜に抱きついた。

「月夜……!?!」

「うわっ!」

いきなり楓に抱きつかれた月夜は、再度後ろに倒れこんだ。

「心配したんだよ!？」

「待て、落ち着け!死ぬ、まじ死ぬ!」

楓の腕はがっちりと月夜の首を締め上げていた。密着する楓の体にドキドキする暇もなく、月夜はジタバタと暴れる。

「起きないかと思った、本当に良かったー!」

しかし、楓に月夜の声は届いていない。本気で締め上げてくる楓の腕を月夜はなんとか外そうとするが、体勢が悪いためうまく力が入らなかった。

「やべ・・・まじ・・・死ぬ」

徐々に体から力が抜けていくの月夜は感じながら、意識を失いそうになる。そこでようやく、楓は我に返った。

「あ・・・ごめんね、ごめんね・・・」

楓は腕を外し、苦しそうな月夜から少しだけ離れて申し訳なさそうに座った。

「いや、いいけどさ・・・」

実際殺されそうになった月夜としては何一つ良くは無かったのだが、楓の泣き顔を見てしまった月夜にはそんなことが言えるはずもなかった。

「だって・・・目を覚まさなくて、私すごく心配で・・・」

いつもと違い、すごく弱い感じの楓に違和感を感じながら、月夜は倒れたままの体勢で聞く。

「目覚まसानかったって、俺どれだけ寝てたんだ？」

「三日ぐらい・・・」

「三日!?!」

楓の言葉に驚いて月夜は上半身を起こした。

「う、うん・・・だから、心配したんだよ・・・?」

三日間も目を覚まさなければ、そりゃ心配するよなあ・・・と月夜は思った。しかし、楓がやけに弱弱しそうな感じなのは、それだけが理由ではなかった。そしてその理由は、すぐに楓本人の口から吐き出される。

「月夜が寝てた間に、たくさんのことが起きて・・・リミナーちゃんがいなくなったり、また、戦争が始まったり・・・」

「え・・・?」

一瞬、月夜は楓の言っていることの意味が理解出来なかった。リミナー、戦争、その二つの言葉が、月夜の頭の中をぐるぐると回る。

「どうしたの・・・?」

呆然としている月夜のこと心配になった楓は、その顔を覗きこむ。楓の顔には、疲労と苦悩の色が強く出ていた。そんな楓に、事情が

分からないからと説明を求める気に月夜はなれなかった。だから、  
気遣うように優しい声を出した。

「いや、なんでもない。そっか・・・大変だったな」

月夜は楓の頭を撫でた。

「うん・・・」

楓もまた、月夜と同じでよく今の状況を理解していなかった。そしてなおかつ、ほとんど寝ていない楓は疲労と混乱で冷静ではなかった。普段の楓ならば、月夜が聞くよりも先に事情を説明してくれるだろう。

「少し休んだらどうだ？そばにいるからさ」

今何が起きているかよりも、月夜は楓のことが心配だった。

「私は・・・大丈夫だよ、ご飯作らないといけないし」

ふらふらと立ち上がるうとする楓の腕を、月夜はつかんで引き寄せた。

「いいから、ほとんど寝てないんだろ？」

先ほどたた寝をしていた楓を起こしてしまった罪悪感も入り混じって、月夜は強引に楓を横にした。さつき首を絞めていた時と違い、力なく楓は横にされた。

「だって・・・寝たら、月夜までいなくなっちゃいそうで・・・怖くて」

涙交じりに呟く楓は、まるで幼い子どもようだった。それも当たり前のことだった。なぜなら、戦争によって両親を殺されている楓にとって、戦争が起きるといことは何よりも怖いことなのだから。それを知っている月夜は、胸が締め付けられるような感覚を感じながらも、月夜は優しく言う。

「どこにもいかないよ、絶対だ」

そう言っつて、楓の手を握り締めた。

「ずつと、こうして握ってるからさ・・・な？」

今の楓を見ているのは、月夜には耐え難いことだった。かけがえのない大切な人が、疲労と苦惱でボロボロになっている姿を、見たく

はなかった。

「ほんとに・・・？絶対だよ、嘘ついちゃだよ？」

「嘘なんてつかないよ」

しばらくの間、うーとかむーとか唸って寝るのをためらっていた楓だったが、月夜がそばにいることに安心し、疲労も相まってスヤスヤと小さな寝息をたて始めた。そんな楓を見ている月夜の表情には、暗い翳りがあつた。

「戦争・・・か。リミーナもいなくなつたなんて、本当に、何が起きてるんだ・・・？」

突然起きた自分の発狂と昏睡に関わっているかのようなリミーナの失踪と戦争の始まり、月夜にはその答えが分からなかった。ただ一つ分かつていたことは、何かとんでもない事態が起きているということだけだった。

「結局、自分の運命からは・・・逃れられないってことか」

月夜やリミーナの生まれにその元凶があるのなら、それは確かに、逃れられない運命だった。それでも・・・、と月夜は呟く。その言葉には、強い決意と自嘲が含まれていた。

「楓と家族だけは絶対に護りぬく、だって俺は・・・インフィニティなんだから」

かつての自分の名前を口にしながら、月夜はどうにもやるせない気持ちのまま楓の手を握り締めていた。

薄暗い部屋の中に、三人の男女がいた。三人の内の一人、中世ヨーロッパ貴族のようないでたちをした男は椅子に座って何かを考えている。そして三人の内の二人目、白髪の爽やかそうな少年はベッドで寝ている少女の傍らに座り、時たま少女の額に載せてある手ぬぐいを水に浸して載せ替え、手厚く看護している。そして最後の三人目、少年同様きれいな白髪をした少女・・・リミーナはベッドの上で意識を失ったまま横たわっていた。

「お前はやりすぎだ」

「はい？」

男の唐突な言葉に、少年は疑問の声を上げた。その言葉自体何度も言われている少年は、特に気にした様子もない。しかし、男はグチグチと文句を言い出す。

「本来なら、この戦争に白い翼も参戦させる予定だったのだ。それをお前がやりすぎたせいで、後一週間は白い翼も役に立たないではないか」

「はあ・・・しつこいですねあなたも。いいじゃないですか、結局はあなたの望む通りの展開になっているんでしょ？なら、多少の誤差は諦めてくださいよ」

リミーナを捕らえて以来、こんな風に唐突に男に文句を言われるのがしばしあった少年は、投げやりに言う。

「多少の誤差だと？確かにそれ自体は微々たる物だ。しかし、今はその少しの時間ですら惜しいのだよ私は・・・あちらの国も馬鹿ではない、今は混乱状態でやられっぱなしではあるが、すぐに反撃に出るだろう。だが、白い翼がいればその余分な時間すらかけることなく、なおかつ効率的な数字を出せていただろう。そのはずだったのに、な？」

今更そんなことを言われなくても分かっている少年は、その嫌味を平然と受け流し、なおかつ反撃する。

「はいはい、分かっていますよ・・・それにしても、他人に任せてばかりで、自分は何もしてないくせによくそうやって文句ばかりでますね？感心しますよ」

飄々とした態度を崩さない少年を、男は鋭い目で睨みつける。男の表情には別段強い感情が浮かんでいたわけではないが、その実、その中は強い怒りで溢れかえっていた。

「他人だと？自分は何もしてないだと？所詮私の一部にしか過ぎない貴様が、本体である私に逆らうつもりか？」

「誰もそんなこと言っていないでしょう？そうやって怒ってばっかり



だと、頭の血管ぶち切れますよ・・・それに、あなたと僕は今はほぼ対等でしよう？なら、動ける分だけ僕のほうがまだと思いますけどね」

「対等なものか、一部にしか過ぎない貴様にはあれらを取り込むことなど出来はしない。いいか、所詮貴様など捨て駒にしか過ぎないのだ」

「捨て駒・・・ね。さしずめあなたは将棋の王将ですね、一人では何も出来ない」

少年の言うことは的を得ていた。しかし、男はただの力がない王将ではなかった。歩が金に成るように、男は本来の力を取り戻したのなら、さしずめその名前は神に成るだろう。

「ふん・・・まあいい、今だけは精々自由にやらせてやろう。近い未来、貴様も私の中へと戻るのだからな」

「自由ですか・・・ふふ、笑えてしまいますね」

心の底から楽しそうに、少年は笑った。生まれてこの方、少年は自分を自由だなんて思わなかった。使われるだけの便利な物としての世に存在を許され、その用途が終わってしまえばその存在すら消されてしまう。生まれながらにして牢獄、それが少年の人生だった。それでも笑っていられるのは、それが、当たり前のことだからだ。

「なら、精々あなたが言う自由とやらを、僕なりに楽しませてもらいますよ」

だから、あまり文句言わないで下さいね、と最後に付け足した。そして、もう関心がないとばかりに少年は閉口する。少年が待ち望んでいるのは、短い人生の渴きを潤す、ただ二つの存在だけだった。

楓が寝てから約三時間が経過していた。それでも一向に、楓が目を覚ます気配はない。

「ふぁー・・・」

月夜は欠伸をしながら、楓が起きるのを待ちわびていた。

「眠いわけじゃないけど・・・退屈だと欠伸がでるなあ・・・」

最初の方は色々と考えをめぐらせていた月夜だったが、結局のところ現状を理解するには楓なりランスなりに、少しでも事情を聞かなければ全く意味が無いということを理解した月夜は、退屈しのぎに相変わらず独り言をダラダラと言っていた。もちろん、月夜は自身の中にいる影にも声をかけてみたが、返事がなかったため本当に月夜は暇だった。

「暇だねえ・・・」

落ち着いていられる状況じゃないにも関わらず、月夜は十分過ぎるほど落ち着いていた。いつもはこんな状況になると、一人で考えごとばかりしていて、あまりゆっくりと休むことをしない月夜だったが、今は休まなければいけない気がして、頭を切り替えていた。

「あー・・・なんかだるいなあ、お腹も減ったし」

三日間も寝ていた月夜は、異常な気だるさを感じていた。もちろん、お腹もすいている。そんな風に体調のよろしくない月夜だったが、楓のそばからは離れなかった。いまだに片方の手は、楓の手を握ったまま。まだまだ寒い時期とはいえ、ずっと握られていた手は汗ばんで湿っていたが、月夜にはその感覚はどことなく心地のいいものだった。

「とはいえ・・・うーん、暇だな」

月夜が一人で暇を持て余していると、唐突にドアをノックする音が響いた。

「開いてるよ」

月夜の返事に応えて部屋に入ってきたのは、ランスだった。その顔には、楓同様に疲れの色が濃く浮かんでいたが、月夜の声と姿を確認して安堵の笑みを浮かべていた。

「良かった、目を覚ましたんだな・・・」

ランスは月夜のすぐそばに座り、嬉しそうに声を出す。

「ああ、おかげさまでね。心配かけたみたいで、悪いな」

楓同様に、自分のことを心配してくれていたランスの気持ちが、月

夜にはなんとなく嬉しかった。

「大変だったんだぞ？ 暴れる君を押さえつけるのは、なかなか」  
責めるような言葉に聞こえなくもないが、その口調は全く責めるよ  
うなものではなかった。

「悪い悪い……」

月夜は苦笑しながら返す。しかし、すぐにその顔からは笑みが消え、  
真剣な面持ちになった。

「なあ……今、何が起きてるんだ？」

そんな月夜の疑問に、ランスも真剣な面持ちになって答えた。

「僕にも分からない……君が倒れ、リミーナちゃんが失踪し、そ  
して、日本は再度アメリカに戦争を仕掛けた……良くないことが、  
次々と起きてる」

今回の戦争のこと自体全く知らない月夜にとっては、日本から仕掛  
けた、ということすら知らなかった。だから、またこの国は仕掛け  
たのか……と苛立ちを感じる。

（ん……？ ちよつと待てよ……）

月夜はランスが発した言葉の限りない小さな矛盾に気がついた。普  
通の相手ならば、それは全く気にもならないことだった。しかし、  
その言葉を言ったのは、記憶がないはずのランスだった。

「ランス、今、日本が再度アメリカに戦争を仕掛けたって言ったよ  
な？」

喜びと期待が入り混じった気持ちを押さえながら、月夜は聞き返し  
た。

「ああ、ニュースでそう言っていたから、間違いはないよ。それが  
どうかした？」

ランスの隠しも含みもない言葉に、月夜は微かな期待を裏切られて  
胸を痛めた。

（やっぱり……単なる勘違いか……今のランスに慣れてきたは  
ずなのに、やっぱり俺は……）

月夜は現在のランスに対して罪悪感を感じた。記憶がなく別人のよ

うな現在のランスは、それでも月夜にとって大切な家族だ。しかし、それでも過去のランスに戻って欲しい、という気持ちだが、月夜にはあった。そしてそれは同時に現在のランスを否定することであり、月夜は胸を痛めた。

「・・・何か気になることでもあるのか？」

急に黙りこくった月夜を心配するように、ランスは再度同じことを聞いた。

「いや、なんでもないよ、うん・・・そうだ、ランスが知ってる範囲で、今起きてる戦争のことについて教えてくれないか？」

場を濁すために言った言葉だったが、実際月夜はそれを気にはなっていた。

「僕が知っていると言っても、ニュースと新聞で知った限りのことだけど・・・君が倒れる前後、アメリカで大きな地震があったそうだ」

説明を始めるランスの言葉の続きを、月夜はじつと黙って待った。

「被害は結構なものらしくて、今までにほとんど例のない大都市がある各州で起きた大地震らしい」

「各州？ってことは、何箇所で一気に地震が起きたのか・・・」

「そうみたいだね。それで、地震で相当の被害があったアメリカに、日本が真っ先に復興の援助を申し出たらしいんだ」

「日本が・・・？随分珍しいな。あれ？でもそれじゃ戦争になる理由が・・・」

そこまで言ってから月夜は気づいた。苦い顔をしながら、さすがにそこまでは・・・、と言った感じで自信なさげに言う。

「まさか・・・混乱してるアメリカに援助っていう名目で、攻め入ったのか？」

ランスも月夜同様に苦い顔をしながら、頷いた。

「食糧などの支援助資を載せてると思わせて、その実大量の爆薬などを積んでみたいだね・・・地震と突然の攻撃のせいで、あの国は今かなり混乱に陥ってるみたいだ」

一瞬青い顔になった月夜だが、すぐにその顔は怒りによって赤く染まる。

「なんて汚い手口使いやがる……!!」

「それは僕も思う。でも……戦争なんて、そんなものなのかもしれない」

妙に何かを悟ったように言うランスに、月夜はつい声を荒げた。

「だからってやっていいことと悪いことがあるだろ!? それに、あの国には……」

月夜は言葉を切り、物憂げな表情で俯く。

(忘れていられれば良かった……でも、思い出しちまったから……)

月夜は過去の思い出を振り返る。月夜とリミーナを生み出した、優しい母の姿を。

「だから、俺がどうにかしないと……戦争を、止めないと」

力が戻った今の月夜であれば、簡単とはいえないが、それは無理な話ではなかった。だからこそ、月夜は自分ができることをしたかった。しかし、そんな月夜にランスは冷えたような口調で言う。

「それで、またお前は……人を殺すのか?」

月夜はその言葉に、頭にのぼっていた血が冷めるのを感じた。ランスの雰囲気、記憶を失う前のかつての彼に戻っていく。

「お前は……それでいいのか?」

「違う、俺は……もう、誰も殺したくない」

「誰も殺さないで戦争を終わらせるつもりか? それは無理だ。どんなに大きい力を持っていても、それが力である限り戦争を終わらせることなんて、失くすことなんて出来やしない。僕は……それが分かったから」

悲痛な声をあげながら、ランスは俯いた。

「それでも……何もしないで後悔するよりは、ましなんだ。だから、兄貴もがんばってきたんだろ?」

目の前にいる、自分の兄に月夜は強く言う。

「頑張れば頑張るほど・・・僕は深みにはまっただけさ、所詮僕らはこの世の中の小さな歯車の一つにしか過ぎない。戦争という、この世の理の一つを失くすことなんて出来やしないんだ」

苦しそうに言う今のランスはまるで、厳しい現実を突きつけられた少年のようだった。徐々に大人になるにつれ、子どもの頃の夢を失い、社会の歯車に取り込まれながらも心の奥底では自分は違つと否定している・・・しかし、いつしか誰もが自分は所詮数十億いる人間の一人だと分からされる。夢と現実の狭間で苛まされ、結果、傷ついた末に戦争という世の中の間違つた理にすら、屈してしまつた。それが・・・今のランスだった。

「・・・戦争が世の中の理だつて？寝ぼけたこと言つてんじゃねぞ！？」

しかし、ランスより幼い月夜にはそれが理解出来なかつた。墮落してしまつたランスに、月夜は怒鳴る。月夜の怒りの声に寝ている楓が、うーんうーん、と苦しそうに呻いていたが、月夜は気づかなかつた。

「人が人を殺すのが当たり前なのがこの世界なのか？違つたら！？」  
「そうじゃない、人が人と争いを続けるのが、この世界の当たり前なんだ。スポーツだつて勉強だつて、形は違えど僕らはいつだつて争つて生きている。違つか？」

ランスが言っていることはいちいちもつともだつた。しかし、月夜はそれでも納得しない。

「違つ、そんなのは間違つてる！争いだけの人生なんて、それがこの世界の理だなんて、俺は認めない！！」

「お前にもいつか分かるさ・・・いや、分からないでいた方が、幸せか」

ランスの一言一言には、深い哀しみのようなものがあつた。それは軍人として生きて来たランス故の、深い哀しみだつた。

「・・・じゃあ、兄貴は何もしないで、今の状況をただ受け入れるだけなんだな？」

「何もしないんじゃない、何も出来ないんだ」

ランスの諦めの言葉に、月夜は強い苛立ちと共に、涙が出てしまいそうな程の切なさを感じた。弱くなってしまった自分の兄を見ているのは、月夜には耐えられないものだったからだ。

「そうか・・・なら、茜姉さんが死に掛けても、兄貴は何もしないんだな？」

無表情で月夜は言う。そこには、感情の色は一つとして含まれていなかった。

「いきなり、何を言い出すんだよお前は」

ランスが一瞬だけ表情を曇らせたのを、月夜は見逃さなかった。

「だってそうだろ？戦争という間違った物を受け入れているのなら、人の死を・・・例えそれが大切な人の死でも、受け入れなきゃいけない」

無感情に言う月夜は、まるで機械のようだった。そんな月夜の様子に、ランスは背筋に寒気を感じながら、答えた。

「僕だって元軍人だ・・・数多くの人間を殺し、そしてその死を見てきた。その一つ一つの死を、僕は受け入れてきた。今もこれからも、僕はそんな風に生きていける・・・生きていけるさ」

最後の言葉を二回言ったランスは、認められないものを無理に認めようとしているようにしか聞こえなかった。

「俺は、人の死なんて受け入れられない。ただ人が死んでいく姿なんて、黙って見ることが出来ない。それは偽善だって、そんなことと分かってる、でも・・・」

月夜が言っていることには大きな矛盾があった。兵器として作り出された月夜は、ランスよりもはるかに数多くの人間を殺している。

それでも、現在の月夜は人が死ぬのを黙って見ていることは出来なかった。しかし、月夜にとってそれは過去の贖罪でもなんでもなく、ただ単に・・・

「俺には力があるからさ、いや・・・人には誰だって、力があるだろ？その範囲内だけでも、護れるものは護りたい。最初から諦める

なんてまねは、絶対にしたくない」

自分に救える命が目の前にあるのなら、誰だって手を差し伸べたくなる。人としての、当たり前前の感情だった。そしてその感情は、紛れもなく兵器としての彼ではなく、一人の人間としての月夜のものであった。

「自分出来る範囲・・・か。そんな謙虚な物言いをしながら、戦争を止めるなんて言つてのけるのはお前ぐらいだよ、ほんと」

ランスはいつの間にか、自分が微笑んでいることに気づいた。

「仕方ないだろ？こんな、大層な力を持って生まれてきちゃったんだからよ」

微笑んでいるランスを見て、月夜も微笑んでいた。わずか数ヶ月ぶりの再会が、まるで数年ぶりの再会のように月夜は感じた。

「そうだな・・・それは、しょうがないかもしれないな」

ランスも月夜同様の気持ちだった。ランスの考え方の変化により、離れていた間に溝が出来てしまったように見えた二人だったが、結局はお互いが信頼しあっている仲の良い兄弟だった。

「今更だけど、久しぶりだな兄貴」

小難しい話をしていたため、再会の挨拶を後回しにしていたのを月夜は気づいてその言葉を言った。

「ああ、久しぶりだな、月夜。こうしてまたお前と会えたことを、僕はいるかどうか分からない神とやらに感謝するよ」

ランスの言葉に、随分大げさだな、と月夜はもらしたが。ランスにとってそれは大げさでもなんでもなかった。もしランスの心が記憶を取り戻すことに拒否をし続けていたら、半永久的にランスは月夜の前には戻ってこれなかったかもしれないからだ。今回の事件は、今のところ二人にとっては良い方向に進んでいた。

「それにしても、なんでいきなり記憶が戻ったんだ？」

なんとなくその理由は分かっていた月夜だったが、一応ランスに聞いてみた。

「さあな？放っておいたら勝手に飛び出して行きそうな無鉄砲な弟



が、心配になったからかもな」

笑いながら言うランスだったが、あながちそれは間違いでもなく、元よりランスの記憶は失われていたわけではなく、心の壁により覆われていただけだった。しかしその壁も、弟を心配する兄としての思いやりの前ではさほど意味もなかったようだ。

「まあ・・・なんだ、うん・・・その・・・」

突然歯切れが悪くなったランスに、月夜は意地悪そうにわざとらしく言う。

「なんだよ？いきなり歯切れ悪くして、何か言いたいことがあるならはつきり言ったらいいぞ？・・・そうじゃなきゃ、許してやんねーから」

ランスが心に壁を作っていた理由を、なんとなくとはいえ理解していた月夜だからこそ、険悪な雰囲気にならないようにわざとおどけた調子でそう言ったのだ。

「・・・そう言われると、素直に謝るのも癪だな」

ランスもランスで、月夜の言葉に苦笑しながら返す。もしかしたらこの二人に言葉などいらぬのかもしれない。そう思ってしまうほど、二人の心は繋がっていた。

「ルインは素直じゃないな」

「誰がルインだ！誰が！」

からかう様に言う月夜に、ランスは怒ったように言い返すが、その実、その言葉にもランスの心にも、怒りの色は一つとしてなかった。

「あつはつは・・・さて、お腹も減ったし、お喋りはここら辺にしてご飯にしようか。色々、話し合わなきゃいけないこともあるしな」  
今回の戦争のこと、月夜より強い力を持ったいまだ謎めいた葉月のこと、リミーナの失踪のこと・・・そのどれもが月夜の心を重くしたが、ランスがいて、茜がいて、そして楓がいる。それだけで、今の月夜は頑張れる気がした。

「そうだな・・・僕が作るうか？」

ランスの提案を、月夜はあっさり断った。

「こつちは何日間も寝てたままだったんだ、たまには楓の料理が食べたい。なあ、楓？」

急に矛先を向けられて、寝ていたはずの楓が、ビクツ、と体を震わせた。

「いつまで寝たフリしてんだお前は、さっさと起きろ」

「や、ちよつと難しい話してたから起きるタイミングつかめなくて・・・いつから気づいてたの？」

のろのろと体を起こしながら、楓は月夜に聞いた。

「俺が無表情になってた辺りからかな、あの辺からある程度俺も落ち着いてたし」

「僕も少しは気づいてたけど・・・確証はなかったから黙ってたんだけど」

二人に気づかれていた楓は、少しだけ恥ずかしくなって怒ったように言う。

「その時点で言うてくれれば良かったのに・・・難しい話してるからって、黙ってた私が馬鹿みたいじゃない」

「いや、十分馬鹿だろ」

容赦も気遣いもない月夜の言葉に、楓は、むー、と唸る。

「誰が馬鹿よー！」

「口元、よだれの後ついてんぞ」

月夜にそう言われ、楓はとっさに口元を手で押さえた。

「嘘に決まってるんだろ」

そう言った瞬間、月夜は楓に思いつきり左頬をぶん殴られた。グハツ、と大げさに言いながら、慣性に従い殴られた方に倒れこむ。

「馬鹿馬鹿！月夜の馬鹿ー！」

「待て！俺が悪かった！起きたばかりの怪我人を殴んな・・・痛い痛い！」

「どこが怪我人なのよ！？」

倒れたまま追い討ちをかけられている月夜を見ながら、ランスは笑っていた。

こんな日常が、ずっと続けばいいのに・・・と、ランスは心の奥底からその光景を見ながら強く願っていた。

しかし、はるか昔から続く運命の歯車は、既に動いていたのだった。

殺戮の宴（後書き）

物語が動いてねええええええ  
ORZ

## 激流

その光景は直視しがたいものだった。整然と建ち並んでいた多くの建物は、そのほとんどが崩れ、ただのがれきの山と化している。きれいに舗装されていた街道のコンクリートは、いたるところに穴があき、無残な姿と成り果てている。少し前までは、建物の中に、街道に、数多くの人々の笑いや哀しみ、怒りなどが無数に存在していた。しかし今は、それが全く感じられなかった。がれきと同じ様に、いたるところにこころがっている何か・・・そのほとんどに、もはや感情というものは存在してはいなかった。元は人間だったそのものたちは、そのほとんどがもはや人間の形をしてはいない。あるものは腕がなく、またあるものは足がなく・・・見るも無残な死体と化していた。少し前までそこにあつた数多くの命・・・そのほとんどが、焼き払われ、殺戮されていた。

「そうかそうか！うまくいっているか！」

白髪の青年は、今までにない程の笑顔を浮かべ、満足そうに頷いている。

「では、また何かあつたらすぐに連絡したまえ」

そう言いながら、青年は手に持っていた電話を受話器に戻した。その顔は、電話している間も、そして今も、終始笑顔のままだった。

「まさかここまでうまくいっているとは・・・あのお方には感謝しなくてはな」

腕を組みながら、椅子に背を預け嬉しそうな声で青年は独り言を言う。部屋には青年以外の人間はおらず、彼の言葉は文字通り独り言だった。

「急ごしらえ程度の兵器でも十分いけるとは、やはり悪魔の祟りとやらは名前の通り恐ろしいものだな」

悪魔の祟り、青年に指示を出した男が言った何かを比喻していた言葉だ。その正体は、人間では完全な予測は不可能とされている大地震のことだった。いきなりの大地震に襲われ、混乱しているところに騙まし討ちをする。それが男の計画であり、青年が男の指示で動いていたのはその為の下準備だった。アメリカでも、日本程ではないにせよ地震はある。しかし、大地震のほとんどは首都や街を遠く離れた海などで起きている。その為、その混乱の程は大きいものだった。

「我が軍の被害はいまだにほとんどない、この戦争、私の勝ち……いや、日本の勝ちが決まったも同然だな」

攻撃を始めてから既に二日ばかり日にちがたっている。その間に青年に報告された内容は、そのほとんどが相手国の被害状況ばかりだった。しかし、事態は青年が考えている程甘いものではなかった。

日本のあまりにも汚い手口に、アメリカと親交の深い国々はすでにそちら側について動き始めている。もちろん、かつて連合軍として日本と共に参戦していた他の国々も、日本側について動き始めている。この短絡的でなおかつ汚いやり方に、多くの国々を巻き込んだ世界戦争が起きるのを理解出来ない青年ではなかったが、今の彼は目の前の仇敵を倒せることに有頂天になり、それに気づくことは出来なかった。

大きな教会のような場所に、中世ヨーロッパ貴族のような服装をした男がいた。男は片膝をついた状態で、目を瞑りながら両手を胸の前で合わせ、何かを祈っているかのようにじっと黙っていた。男の雰囲気は、いつものように憎悪を感じさせる重苦しい物ではなく、哀愁のようなものを感じさせる切なさ、ほんの少しの嬉しさのようなものをまとっていた。彼にとって、その時間は何よりも心安らく物だった。

「こつちにいたんですか」

男の唯一の落ち着いた時間を邪魔する声が、男の後ろから聞こえた。声をかけたのは、リミーナを呆気なく打ち倒した白髪の少年だった。「なんの用だ？私がここにいる時は、緊急時以外では邪魔をするなと何度も言っているはずだが？」

自分の時間を邪魔された男は、明らかな不快を隠すことなく少年に振り向いた。それも当たり前前で、少年は男のその時間をちよくちよく邪魔をすることがあったからだ。

「またお祈りをしているんですか？あなたも飽きませんか  
やれやれ、と溜め息をつく少年を、男は鬼の形相でにらみつける。

「それを言うためにわざわざ邪魔をしに来たのか貴様は？」

「いちいちそんなことの為にあなたの邪魔をするわけないでしょう？この僕が。あなたに生み出された、忠実なこの僕が」

平然と笑いながらうそぶく少年は、誰が見ても相手に嫌味を言っているかからかっているようにしか見えなかった。

「ふん・・・三度目の正直、という言葉があるが、貴様にはそれすら意味を成さないようだな」

男は相当の怒りを抑えながら、どうにか嫌味を返す。しかし、完全に抑えきれないようで、その言葉は少しだけ震えていた。

「よくそんな言葉知ってますね、さすがオリジナルと言うべきでしょうか？まあ、失敗例を見る限りオリジナルも優秀ではなさそうですけどね」

「貴様は・・・本当に減らず口を・・・」

ピリピリとした怒りを醸し出す男に対し、少年は飄々とした態度を崩さなかった。

「この場所を汚すわけにはいかぬ、表に・・・」  
「ああ、そうそう。それですね」

男の言葉を遮って、わざとらしく今思い出した、といった感じで少年はここに来た用件を告げた。

「どうやら、他の国が動き出したみたいですよ。予想してたよりも結構早いですよねえ」

「・・・そうか」

男はやり場の無い怒りに震えながら、小さくそう答えた。実際その怒りは少年に向けられるもののだが、相手が飄々としているため怒りをぶつけるだけ無駄だと男は諦めた。更に、男は少年の報告を優先させたいため、怒っている場合でもなかった。

「白い翼を使うまでもなかったみたいですね・・・それと、黒い翼の方にはまだ動きがありませんね。ただ無能なだけなのか、それとも僕らが来るのをわざわざ待っているのか・・・どちらでしょうね」

少年の声は楽しそうだった。まるで、黒い翼と呼ばれている者が早く来るのを待ち望んでいるかのように。

「ふん、どちらでもかまわぬ。どちらにせよ、すぐにここに来てもらうことになるのだからな。白い翼のように、貴様に任せていたのでは彼女にまで被害が及ぶ可能性があるからな」

男は鋭い目つきの中に、一瞬だけ心配の色を浮かべた。それはまるで、離れ離れになってしまった初恋の相手を心配するような、そんな純粹無垢な子どものような目だった。

「僕だって彼女を傷つけるようなまねはしませんよ？僕にとっても、彼女は大切な存在ですから」

「万が一ということもある・・・何より、私は貴様を信用してない」

男の脳裏には少年を生み出してから散々な目にあつたことが思い出されていた。最初の任務での失敗に続き、白い翼を無傷で捕らえることの失敗、更にことあるごとに男の時間を邪魔する・・・そんな少年を、信じるといのが男には無理な話だった。

「だから、あなた自身が動くというわけですか・・・確かにこの中なら、あなたは自らの力を存分に振るえますもんね」

そう言ってから少年は、あれ？と首をかしげた。

「ちよっと待つてくださいいよ、黒い翼は僕にやらせてくれるって言うてたじゃないですか。嘘だったんですか？」



「ふん、心配せずともやつは貴様にくれてやる。私は私の力を使つて、ただ彼女を護るだけだ。貴様に巻き込まれないようにな」

男の言葉に、少年は溜め息をついた。

「相変わらずやり方が回りくどいですね・・・それにしても、随分僕の扱いひどくないですか？人をまるで殺人狂みたいに言わないでくださいよ」

「回りくどいのではない、万が一にも失敗することを私は恐れているのだよ。それに貴様は、殺人狂など生ぬるいものではない」

「じゃあ、なんだって言うんですか？」

少年の問いに、男は即座に答えた。

「殺戮狂だ」

男のその答えに、少年は大声で笑い転げた。

「あはは、あつはつは。い、いいですね、殺戮狂とききましたか。くすくす、お笑い種ですよ・・・あーっはつはつはつは」

その声は、心から楽しそうで嬉しそうで・・・そして、何より辛そうだった。少年の声は、しばらくの間ずっと教会のような場所にこだまし続けた。

「それにしても、ランスさんの記憶が戻って良かったね」

「うんうん、もーふあな（ソーだな）」

楓の言葉に頷きながら、月夜は一心不乱に楓が作った料理を食べていた。

「食べながら喋らないの！汚いでしょ」

楓に怒られながらも、月夜は次から次へと料理を口に運んでいた。そんな光景を見ながら、ランスと茜は笑っている。

昼過ぎ頃の少し遅めの昼食。食卓には、茜とランスと月夜と楓の四人がのんびりと（月夜は除く）お昼ご飯を食べていた。そこには、三ヶ月ほど前からずっといたリミーナの姿はない。

「それにしても、よくあんだだけ寝てたのにそんなに食べれるなお前

は・・・」

ランスの呆れたつつこみに反応したのは楓だった。

「ランスさん、月夜が昏睡してたのを知ってるってことは、記憶を失っていた間のことやっぱり覚えてるんですか？」

んー、とランスは頭をかきながら困ったように言う。

「覚えてるといつか、他人の記憶が頭の中に残ってるみたいで・・・なんかごっちゃになってるって感じかな」

それと、とランスは続ける。

「ランスさん、じゃないだろ、楓」

楽しそうに言うランスに、楓は、あつ、というような顔になった。

「そうだった・・・えーと、ランス？」

最初にランスと呼んだ時のように、楓の呼び方は齒切れが悪かった。

「なんか久しぶりだから・・・変な感じがする」

「じゃあ、また慣れてもらわないと困るなあ」

楽しそうに笑うランス。そのランスの二つ二つの行動が、月夜と楓には懐かしく感じた。

「じゃあ、代わりにうちがランスさん、って呼びなおそうか？」

出会ってすぐにランスと親しい間柄になった茜は、ランスをいつの間にか呼び捨てにしていた。そんな茜が、からかうようにそう言った。

「それはやめてほしいな、茜がそう言うなら、僕も茜さん、って呼ぶよ？」

茜同様、ランスも茜のことをいつの間にか呼び捨てにしていた。

「それはやめてー」

と言いながら軽くランスの背中を叩く茜。そんな仲睦まじい二人を見ながら、楓は、むー、と唸った。楓にとって大切な家族であるランスと茜が仲良いのは素直に喜べることだったが、楓はそれを少し羨ましく思った。月夜が意識を失っていた三日間、楓はランスと茜に励まされてはいたが、心の底の不安と寂しさは消えなかった。だから、楓はチラリと月夜を盗み見た。

「ふいー、食べたー・・・ん？どうした楓」

食べることに夢中になっていた月夜は、楓の様子に全く気づいていなかった。何も気づかずに満足そうな顔をしている月夜になんとかイラツときた楓だったが、月夜じゃ仕方ないか・・・と諦めて肩を落としながら言った。

「なんでもないよ・・・」

「んー？」

月夜は相変わらず鈍感だった、しかし、天然っ気もあるのでたまに行動が予測不能なところがある。そしてそれは大体、楓を嬉しくさせるものだった。月夜は肩を落とした楓の頭を、唐突に撫で始めたのだ。

「ど、どうしたの急に？」

いきなりのことに、楓は動揺しながら声を出した。月夜の行動が突然なのはいつものことだが、今楓は落ち込んでいたので全く予想していなかったのだ。

「いや、ご飯おいしかったからありがとう、ってな。嫌だった？」

それ以外に他意のない月夜の言動だったが、楓はそれだけで十分嬉しくなった。月夜にそうされただけで、不安や寂しさが溶けてなくなるような感覚を、楓は感じた。実際キスマまでしてる二人の関係だが、一つ一つのそういった行動に初々しい感情やイメージを与えるのは、二人がまだ若いからだろう。

「嫌なんかじゃないよ・・・ありがとう」

はにかんだ笑顔で礼を言う楓に、月夜は胸をドキドキさせながら、うん、と答えた。今度は逆に、そんな二人を茜とランスが微笑みながら見ているのに気づいて月夜は少しだけ視線をそらした。二人に何かを言おうとした月夜だったが、まあたまにはいいか、と自分を納得させ、何も言わなかった。

「そうだ、そろそろ・・・本題に入ったほうがいいんじゃないか？」

急に真剣な顔をして出されたランスの一言で、その場の空気は緩やかなものから固いものに変わった。

「そうだな・・・本当は、小難しい話なんてしたくないんだけどさ・・・しょうがないよな」

月夜の言葉には、多少の未練のようなものがあつた。この場にいた四人は、リミーナのことも戦争のことも忘れていたわけではなかった。しかし、せめて食卓ぐらひは賑やかにしたいと、誰もが思っていた。

「とりあえず、一旦リミーナのことは置いておこう。助けに行こうにも、さすがに情報が少なすぎるし」

広範囲探索はお手の物の月夜だったが、精々その距離は五キロメートル程で、探す範囲が広ければ広くなるほど時間がかかるのだった。戦争が起きているという今の現状、最後になるかもしれない食事の時間はともかく、無駄になるかもしれない時間を費やす気にはなれなかった。

「それじゃ、戦争の方の話をしようか・・・とは言つても、大体みんな分かつてはいると思うけど」

ランスの言葉に、それぞれが頷く。意識を失っていた月夜以外は、自分でニュースや新聞を見たりなどして知っていたのだった。

「でも、まだ大丈夫なんじゃない？日本が相当押してるから国内は安全、みたいなことはテレビで言つてたと思うけど・・・」

もつともな茜の言葉だったが、月夜とランスがそれを否定した。

「例えここが安全だとしても・・・俺は戦争をなんとかして止めたいて思つてる。それに関しては、みんなを巻き込むつもりはないし、俺が一人で動くよ。後、それに・・・」

「テレビでは言つてないけど、他の国もすぐに参戦してくるだろうね。そうなら近いうちに、ここも危なくなる」

月夜の言葉の続きを、ランスが引き取つて説明した。

「そう、なんだ・・・」

近いうちにこの辺りも戦争に巻き込まれるという事実を知つた茜は、辛そうに納得した。茜もまた、戦争の被害者の一人であり、それに対するトラウマが強いのだ。

「だから、すぐに俺は行かないといけないんだ・・・戦争を、止めに」

月夜のその言葉に茜と楓は驚いていた。ランスはなんとなくそれを察していたのか、沈痛な面持ちで黙っている。

「・・・どうして、今すぐ行かないといけないの？」

楓は驚きながらも、強い口調で月夜に聞いた。その内心は、穏やかではない。確かに戦争が長引けば死者の数も増えるが、だからといって今すぐ止めに行く、という明確な理由が楓にはわからなかった。「他の国が完全に参戦してからじゃ遅いんだ。その理由は二つ。一つ目は、ほとんどの大国が戦争に参加したら、もう取り返しがつかなくなる。今でも十分まずそうだけど・・・それでも、俺はまだなんとかかなると思ってる。二つ目は、ここが安全じゃない内じゃないとまずいんだ・・・俺が、動けなくなる」

その理由は的確だった。四度目の世界大戦を迎えてしまったら、下手したら地球そのものが核によって無くなる恐れがある。例えそれを免れたとしても、無事な国は一つとしてなくなる上に、国同士の関係は今まで以上に険悪なものになるだろう。そして、戦争が激化してしまえば、月夜もまた、ここにいる他の三人を護るために動くことが出来なくなる。時間が経てば経つほど、不利な状況にしかないのであった。

「まあ、止めるって言うても・・・どうすればいいかなんて、分からないんだけどさ」

強大な力を持つ月夜だが、その糸口はいまだつかめていなかった。ランスが言ったように、戦争を止めるなんていう月夜の考えは甘いのもかもしれない。それでも、月夜は力を持ちながら、ただそれを見ていることは出来なかった。

「なんとか、してみるよ・・・うん・・・さて、行かないと」

そう言っ、月夜は立ち上がった。他の黙っていた三人は、辛そうな目で月夜を見つめた。

「今更だけど・・・本当に、行くのか？」

一番初めに口を開いたのはランスだった。

「行かなきゃ、話にならないだろ？二人のこと、頼むよ。ああ、リミーナをさらった奴らなら多分大丈夫、俺とリミーナが狙いなら、俺がいなくなつた時点でここは安全になるだろうからさ」

心配させないように、月夜はその他の不安要素の安全性を説明した。

「こつちのことは心配するな、僕が・・・命にかけても護る」

「うん、任せた。・・・やっぱり、兄貴はそうじゃないとな」

月夜の言葉に、ランスは、うん？と疑問の声をあげた。

「さつきみみたいな弱音や諦めは似合わないんだよ、だからこそ、二人を任せられるんだ」

月夜は別に、ランスが戦争を肯定したから怒つたわけではなかった。不甲斐ない兄を見るのが、月夜はただ嫌だったのだ。

「ああ、気をつけて・・・帰って来いよ」

「当たり前だよ」

「ほんと・・・ちゃんと、帰って来るんだよ？」

次に口を開いたのは茜だった。心配そうに、月夜を見つめる茜は、目の端に涙がたまっていた。

「心配いらないうって、俺のことより、姉さんもさ・・・今度は、ちゃんと幸せにならないとだめだよ？」

茜が月夜を心配するように、月夜も茜が心配だった。相手が兄貴なら間違いなく大丈夫だろうと月夜は思うが、万が一ということもある。人一倍中身が弱い茜を知っている月夜は、実はこの中で茜が一番心配だった。

「うちは・・・大丈夫だよ、だから、月夜もちゃんと・・・帰って来るんだよ」

茜の目の端にたまっていた涙が、こらえきれずに頬を伝って床に零れ落ちた。それでも、姉として、気丈に月夜から視線を外さずに送る言葉を紡いだ。

「がんばって・・・」

「うん、がんばるさ」

月夜は胸に熱いものが灯るのを感じた。なにがなんでも、この三人を護ろうと強く誓った。

「・・・月夜」

最後に口を開いたのは楓だった。意外なことに、茜と違って楓は涙ぐんではいなかった。

「・・・楓」

「私・・・何も出来なくて・・・ほんと自分が情けなくて・・・でも・・・」

月夜はとつさに楓を抱き締めていた。弱弱しく喋る楓が、月夜には辛くて見ていることが出来なかったのだ。

「待つてる・・・から。月夜のこと、絶対待つてるから・・・！」

「うん・・・うん・・・！」

月夜は楓を強く抱き締めた。このままずっと、離したくなかった。

「帰って来たら・・・ご飯作るから・・・そうしたら・・・また、頭撫でてよね？絶対だよ・・・？」

楓の言葉はいつの間にか涙混じりの声になっていた。月夜に強く抱き締められながら、大粒の涙をぼろぼろと流す。

「うん・・・分かってるよ、楓」

月夜も泣いてしまいそうになった。しかし、なんとかそれをこらえた。今泣いてしまえば、行くことが出来なくなってしまいそうで、月夜は怖かった。いくら月夜といえど、誰も殺さずに戦争を止めようなんて暴拳に出れば、死ぬ可能性がある。今の状況では、司令官を脅しても戦争が止まることは無いだろう。それでも月夜は、自分が戦場の中を、飛び交う砲弾や爆撃の中を、駆けずり回ることになるうとも戦争を止めるつもりでいた。

「じゃあ、行って来る・・・」

そう言いながらも、月夜は楓のことが離せなかった。月夜だって単なるお人よしではない。知らない人の為に死ねるか？なんて馬鹿げた質問にはノーと答えるだろうし、ましてや救世主や偽善者を気取るつもりなんてさらさらない。それでも月夜が一人で戦争を止める

なんていうとち狂ったことに突き動かされる理由は・・・生まれ持つてしまった力と、優しさ・・・良い点にも悪い点にもとれるその優しさのせいだった。そして何よりも、結果としてそれが楓を護ることになるからだ。

「月夜・・・」

しかし、月夜は震えていた。日頃、護るために死ぬ、誰かのために死ぬ、と言っている月夜だったが、それでもまだ十六歳なのだ。歩んできた道は人より重く苦しいものでも、月夜は単なる高校生にか過ぎなかった。

「なさけねーよな俺・・・時間ないっていつのにさ」

震える月夜を楓は強く抱き締めようとした。しかし、楓は少し考えた後・・・月夜を後ろに突き飛ばした。それはその場にいた全員にとつて予想外のことで、場が驚きの雰囲気にも包まれた。

「・・・っ月夜には、やらなきゃいけないことがあるんでしょ!？」

強い剣幕で叫ぶ楓を、月夜はポカンと口を開けて黙って見ている。

「今行けなかったら、月夜はきつと後悔する・・・時間が、ないんでしょ?」

弱弱しくも、芯の通った強い声だった。月夜は死にたくない、でも行かなければいけない・・・それを、楓は後押ししたのだった。

「・・・ごめん、俺、ほんと情けないな」

少しの間呆然としていた月夜だったが、その言葉から先は早かった。「行って来る、何がなんでも、止めてくる」

見守る三人を背に、月夜はすぐに走り出した。靴をはく時間すらもつたいないというように、玄関のドアを突き破るような速さで月夜は外へと走り去って行った。

「本当に・・・あれで良かったの?楓」

立ち尽くしながら月夜が出て行った先をずっと見つめていた楓に、茜がそう尋ねる。

「いいの・・・ああでもしないと、月夜はきつと行くことが出来な



かった・・・から・・・」

涙をぼろぼろとこぼしながら、せめて嗚咽だけはもらさないように、と楓は唇をかんで耐えながら答える。

「そっか・・・じゃあ、仕方ないよね」

他にかける言葉も見つからず、ランスと茜は黙った。

（無事に帰って来てね・・・絶対、だよ）

楓はただ、その場で祈り続けた。

「ほんと、なさけねーよ俺・・・」

走る月夜は、胸元に下げられているペンダントを片手で握り締めながら、辛そうに呟いた。楓がどんな気持ちであんな言動をしたか、月夜はよく分かっていた。あの状況で一番辛いのは、月夜ではなく楓だったに違いない。自分の弱さのせいで楓が傷つくことになったことに、月夜は自分自身に強い苛立ちを覚えた。

「ちくしょう・・・ほんと、俺は・・・」

「やあ、そんなに急いでどこに行くんだい？」

高速、いや、光速で走る月夜はいきなり声をかけられて不意に止まって振り向いた。それが普通の人間であるのなら、月夜は止まることなくその場を通り過ぎていたはずだった。月夜が止まった時には、相手ははるか後方にいて顔は見えなかったが、それが誰であるかなんて月夜には分かっていた。月夜の体に嫌な感覚がねっとりまとわりつく、その相手の名前を、月夜はぼつりと呟いていた。

「葉月・・・」

「そうだよ、友達を通り過ぎていくなんてひどいなあ」

「っ!？」

先ほどまで顔すら肉眼でとらえきれなかった葉月が、月夜が気づかないうちにいつの間にかその横に立っていた。月夜は吹き出る嫌な汗を抑えながら、どうにか口を開く。

「何の用だよ、今、お前にかまつてる暇はないんだ」

「それは困るなあ、僕は君に用事があるのに。いや、正確に言えば、

君と楓、かな」

相変わらず人懐っこい笑みを浮かべながら言う葉月だったが、髪の間から覗く鋭く赤み帯びた目はにこりとも笑っていないかった。

「お前……！」

月夜は敵意のある目を葉月に向けるが、葉月はそれを気にした様子もなく平然と言う。

「でも、君が忙しいのなら仕方ないかな？それなら、せめて楓ぐらいは付き合ってもらわないと」

葉月の言葉は、月夜にとっては致命的だった。要するに葉月は、楓のことを人質にしているのとなんら変わりはなかった。その言葉に、月夜はどす黒い物を放ち始める。

「楓に手を出してみろ、俺は絶対にお前のことを殺す」

そんな月夜の脅迫じみた言葉と雰囲気ですら、葉月は軽やかにかわしてのけた。

「誰も手を出すなんて言っていないんだけどなあ、むしろ楓は、特別待遇だよ」

葉月のいつもと変わらぬ何かを隠しているようなおっとりとした物腰に、ついに月夜はきれた。

「いい加減にしるよ……？ここで決着つけて俺の憂いごとお前の存在を断ち切つてやろうか！？」

急いでいる状況に加え、相手が気に入らない葉月ということもあり、月夜の口調はいつもよりかなり刺々しい物になっていた。

「へえ……僕に勝てるの？本当に？」

月夜の言葉に、葉月は雰囲気が一転した。今までのつかみどころのない飄々とした態度から、近くにいたる全ての生き物を威圧するような重々しさを体から放ち始める。以前とは違い、月夜はしり込みせずにかぶる。

「当たり前だ！」

二人の距離は一メートルと少し、普通の人間ですら一歩踏み込んで腕を突き出すだけで当たる距離だ。それでも普通の人間であるなら

一秒前後の行動を、月夜はコンマ一秒より早くこなした。肉眼ではとらえきれない程の速度で、右腕を思い切り横に振る。しかし、かつてのリミナーと同じ様にそれはただ空を切っただけだった。

「白い翼よりは速いかな。でも、やっぱりそれじゃつまらないな」  
葉月の声だけが響く。その姿は、まるで瞬間移動でもしてしまっただかのように月夜のそばにはいない。月夜は目で見るとよりも早く体で感じ取り、左腕を後ろの斜め上に振るった。空気を切り裂く音と共に、手の先から現れた闇を具現化したような黒い何かが、月夜の後ろにあつた電柱の頭頂部を飲み込み無に変えた。幸い辺りに人はおらず、月夜は誰かに目撃される前に葉月を消すつもりだった。しかし、そこにはまたも葉月の姿はない。

「くすくす、怖いね・・・全てを破壊、いや、無に還すその力。力が格段に上がっているのが分かるよ」

葉月は月夜の攻撃をなんなくかわしながら、余裕の言葉を吐き続ける。数十秒の間に行われた月夜の攻撃は、十数回に及んだがその全てを葉月は避けきっていた。その間、葉月は一度たりとも月夜に攻撃を仕掛けなかった。

「・・・そろそろ、やめにしない？」

「うるせえ！」

そう叫んだものの、月夜は次の攻撃を仕掛けなかった。諦めたわけでも、疲れ果てたわけでもなく、ただ、相手の隙をうかがっていたのだ。

「時間がないんだろ？僕の用事は早く終わるから、さ。諦めてついておいでよ」

今まで瞬間移動とも言える程の速度で逃げ回っていた葉月は、最初と同じ様にいつの間にか月夜の横に立っていた。その雰囲気は、いつものおっとりとしたものに戻っている。

「お前の言葉が、信用出来るとおもってんのか？」

確かに時間がない月夜としては、あまりここで時間をかけるわけにはいかなかった。しかし、葉月の言葉を素直に受け入れることも、

月夜には出来なかった。

「くすくす・・・ほんとき、僕って信用ないなあ・・・なんでだと思っ？」

月夜に向けられた葉月の顔に、一瞬だけ哀しみのような、今までの葉月が見せたことのない人間のような表情が浮かんだ。

「・・・そんなの、知るか」

その一瞬の表情に、毒気が抜かれた月夜は素っ気無く呟きながら、なんなんだよ、こいつは・・・と心の中で小さく独りごちる。

「誰に信用されてなくても、友達に信用されないのは哀しいことだと思わないかい？僕は・・・哀しいなあ」

それはいつもの演技がかかった葉月の言葉ではなく、心からの言葉のように月夜は聞こえた。

「だからしらねー、つつうの」

葉月の違う一面にどきまぎしながらも、月夜はそつぶつきらぼうに言った。いや、そう言うしかなかった。葉月の事情を知らない上に、実質敵である葉月に、月夜は慰めの言葉や優しい言葉なんてかけることが出来なかったのだ。

「まあいいんだ、そんなことは・・・それより、付いて来てくれるね？」

いつもの雰囲気に戻った葉月の言葉に、月夜は少しだけ、ほんの少しだけ悩んだ。

（どうしたもんか・・・倒すことも出来ない、かといって俺がいな  
い間に楓に手を出されても困る・・・仕方ない、か）

やむを得ない事情に、葉月の見せたことのない哀しみへの複雑な気持ち  
持ちが加わり、月夜は仕方なく頷いた。

「ただし、二つ条件がある。早くその用事とやらを終わらせること  
と、楓を連れて行くのはだめだ」

月夜の言葉に、葉月は渋みを含んだ顔をした。

「うーん・・・君だけでもだめだし、楓だけでもだめなんだ。一生  
のお願いだよ、楓も一緒に、ね？」

深々と頭を下げる葉月は、そのまま土下座でもしてしまいそうな勢いだっただ。その態度に崩されそうになる月夜だったが、それでも月夜はそれをよしとはしない。

「だめだ、それだけはだめ」

葉月の言う用事というものを月夜は分かっただけではいなかったが、少しでも危険性のありそうなものに楓を付き合わせるのはごめんだ。そんな月夜の態度に、葉月は諦めたように首を振る。

「そこまで言われたら仕方ない・・・かな」

そう言い終わった瞬間、葉月はニヤリと不適な笑みを浮かべたかと思っただ直後月夜の前から姿を消した。

「なっ・・・!？」

月夜は嫌な予感を感じ、とっさに今まで自分が駆けて来た道に視線を動かす。そこには既に黒い点に見える程小さくなっていた葉月の後姿があった。

「あ、あの野郎!!」

葉月の行動が何を意味するのか即座に理解した月夜は、すぐにその後を追った。

「おい、みんな大丈夫か!？」

月夜は少し前に出て来たばかりの家の玄関を、勢い良く開け放ってそう叫んだ。あれだけしんみりした状況で家を出て来た割に、あっさり戻ってくるのもいかなものかと思うが、月夜にはそんなことを考えている余裕はなかった。

「ど、どうしたんだ月夜、忘れ物か？」

慌しく出て来たランスにまくしたてようとした月夜だったが、そのすぐ後ろに、どうしたの?と言いなから顔を出した楓の姿を確認し、月夜は安堵の溜め息を吐き出した。

「どうしたんだ?何か・・・あったのか？」

心配そうに見つめるランスとその後ろにいる二人に、月夜は苦い顔で言った。

「いや、どうにも予想が外れたみたいだ・・・くそ、あの野郎」

月夜は、葉月が楓を狙うことを予想していたのだった。そうなれば、月夜は葉月の言うことを聞かざるをえなくなる。月夜は自分の予想が外れたことにほっとした。しかしそれもすぐに、後ろから響いた声にかき消された。

「僕がそんなことするわけないじゃない？ほんと、信用ないなあ」

月夜はその言葉を聞いてすぐに振り返った。葉月君・・・？と楓の呟きもれる。月夜より先に行っただはすの葉月が、相変わらず人懐っこい笑顔でそこに立っていた。

「お前、どうして・・・？」

葉月の意図が全く分からない月夜は、自分でも気づかない内にそう聞いていた。葉月は楽しそうに笑い、月夜の問いに答えた。

「楓を連れて行くのは簡単だよ、でも彼女を人質にとって君に言うことを聞かせるようなまねはしたくないだけさ」

葉月の言葉は口調とは裏腹に、真摯なものがあつた。それでも月夜は納得がいかず、鋭い視線で葉月を睨みながら聞く。

「お前程の力があるならなんで俺らを無理に連れて行くこととしない？」

「理由は簡単だよ、確かに君らを連れて行くのは命令されたことだ。でも、僕は僕のやりたいようにそれをこなすだけ、ただ、それだけだよ」

「全く理由になってない、俺が聞きたいのは、どうしてお前がそうしたいのか、だ」

もはや二人の世界で話し合っている葉月と月夜を、事情が全く分からない三人はただ黙って見ていた。正確には、口を挟める余裕がないほど、二人の間にある空気は別次元のようなものに感じられたからだ。

「・・・詳しくは言えないんだ。ただでさえ、僕は信用がなくて疎まれてるからね。大方今も監視されてるはずだろうし」

「監視・・・？」

「だから、何も言わずに付いて来て欲しいんだ。それが、君らのためで・・・この世界のためなんだ」

葉月の言わんとしていることは、相変わらず月夜には理解出来なかった。しかし、その言葉は本当に真摯なものだった。月夜と楓の身を案じ、この世界すらを案じる、そんな強い想いが、ひしひしと伝わる。

「・・・分かったよ、信用してやる。でも、もし楓に危害が加えられるようなら・・・俺は本気でお前もろとも、お前の後ろに立つその存在をかき消してやる」

葉月の真摯な態度に折れながらも、それだけは譲れないと強く言う。月夜のその言葉に、葉月は心の底から安堵したような微笑みを見せた。

「良かった・・・早速行く、君に時間がないように、僕も時間がないんだ」

そう言つて、葉月はすぐに月夜に背を向け歩き始めた。付いて来て、意思表示を表すその仕草は、葉月から月夜に対する信用の証でもあった。

「というわけだ、楓、おいで」

「え？え？ちよつと待つてよ、どういうわけなの？」

楓の混乱も当たり前のことだった。一切説明なしに二人の会話を聞いていれば、誰だつてそうなるだろう。案の定、ランスと茜も呆然とした顔をしている。

「いいから、説明は行きながらするから・・・」

「す、少しだけ待つて！すぐ行くから！」

楓はそう言い残し、どたとたと自分の部屋へと走っていく。まさか用意するのにまた何十分もかからないだろうなあ・・・、と月夜が不安に思っていると、楓はすぐに戻ってきた。

「お待たせ！」

服装は先ほどと変わらない楓だったが、その胸元には月夜が贈ったペンダントが下げられていた。楓のペンダントに気づいた月夜は、

一瞬だけ頬を緩めた。しかし、すぐに真面目な顔になり言う。

「ああ、それじゃ行くか・・・あいつに置いてかれちゃう」

少し速めに歩き出す月夜の後ろを、楓は小走りで追っついていく。後に残されたランスと茜は、呆然とした表情のまま呟いた。

「うちら・・・蚊帳の外だね」

「ああ、なんか、寂しい」

慌しい状況とはいえ、せめて説明ぐらいは欲しかった、と二人は思いながら、しばらくの間その場につっ立っていた。

葉月は親切なことに、家を出てすぐの場所で二人を待っていた。

「やあ、遅かったね」

実際はほとんど時間が経ってないが、時間がない葉月にはそれすらも遅く感じたようだ。

「悪かったな、で、そこは遠いのか？」

時間がないという葉月は、その言葉とは裏腹にゆっくりと歩いていった。

「歩いたら四十分程、走れば二十分程、君と僕なら一分もかからないだろうね」

そんなに遠いのか、と月夜は嘆息した。言葉と行動が全く一致しない葉月を月夜はいぶかしんだが、隣を歩く楓に服の袖を引っ張られ思考は中断された。

「ねえ、説明してくれるんでしょ？」

「あ、そついやそつだったな」

少し前のことすら忘れていたかのような月夜の言葉に、楓は少しだけ、むー、と口を尖らせた。しかし、現状を考えれば月夜が忘れてしまうのも無理はないのかもしれない。

「僕が説明しようか？・・・そついえば、遅くなったけど、楓、おはよう」

いつの間にか前を歩いていた葉月が、楓の隣を歩いていた。

「えーと・・・おはよう」



どことなく余所余所しい楓に、一瞬葉月は顔を曇らせたが、すぐにまたいつもの笑みを浮かべる。

「今日も一段ときれいだね、君を照らす太陽でさえ、ただの引き立て役に見えてしまうよ」

そう言う葉月のキザなセリフも一段と大げさだった。

「おい、お前は前を歩け前を、誰が案内してると思ってたんだ。そんなでもって楓に近づくな」

月夜の言葉は、葉月が危険だからそう言ったわけではなく、ただ単に嫉妬からきたものだった。ある意味月夜にとっては危険なわけなのだが。

「つれないこと言わないでほしいなあ」

そう言いながらも渋々と葉月は前を歩き始める。そうしていると、誰が見ても普通の人間にしか見えなかった。

「とりあえず、説明して」

「はいはい、えーとだな・・・」

月夜が楓に説明している間、何回か葉月が楓の横に並んでは月夜に文句を言われるということを繰り返した三人だった。事情を知らない者が見れば、それは仲のいい友達同士にしか見えなかっただろう。

「・・・と、いうわけなんだ」

葉月の邪魔がなければ十分もかからない説明を、月夜は二十分程かけて楓に説明した。葉月の意図を理解していない月夜の説明は曖昧な部分が多かったが、ある程度は楓も理解したようだった。

「そうなんだ・・・」

その表情には不安のような翳りがあった。月夜ですら不安なのだ、楓は更に、といったところだろう。

「大丈夫だよ、絶対俺が護るし・・・それに、」

月夜は言いにくそうに前を歩く葉月を一瞥し、そして続きを言った。

「あいつも、信用しろ、って言ったしな」

意外な月夜の言葉に、楓は驚いた。

「月夜が葉月君のこと信用するなんて・・・悪いものでも食べた？」  
「失礼なやつだな、大体から食べた物なんて楓の料理ぐらいで・・・  
痛い痛い」

楓はペシペシと月夜の頭をはたく。

「それは私の料理が悪い物って言いたいの？」

「いやそんなこといってねーだろ」

全くもって緊張感のない二人だったが、そんな会話を聞きながら前を歩いていった葉月は更に緊張感を感じさせない嬉しそうな微笑みを浮かべていた。

「・・・信用、ね。ありがとう、月夜」

葉月がもらした呟きに、月夜が疑問の声をあげた。

「何か言ったか？」

「いや、何も言っていないよ」

「・・・？変なやつだな」

月夜はこの時、葉月がどんな気持ちでその言葉を言っていたかなど全く理解していなかった。それ以前に聞こえていなかった。

葉月が誰よりも重いもの心に抱えていることなど、誰一人として、知る者はいなかった。

## 激流（後書き）

よーっやく展開が動き始めました。

またしても苦手な戦闘シーンが始まるのかと思うと胃が痛くなりま  
すが・・・

## 断罪

大きな教会のような場所で、中世ヨーロッパ貴族のような服装をした男は、以前と同じように祈りを捧げていた。片膝をつき、目を瞑りながら両手を胸の前で合わせている。祈りを捧げるその形は一般的なものではないが、その形は彼にとって最上級の敬愛を意味していた。

「後少し・・・後少しで、全てが終わります。いえ、始まるのです・・・だから、成功するように、見守っていてください」

男の前には、男の二倍半程の像が建っていた。それは人間の女性に羽が生えたような造りをしていた。男の祈りと呟きはその像に捧げられたが、もちろん、返事があるはずもない。

「あの時、私は何もすることが出来ませんでした・・・それはいつだって、私の心を苦しめています」

普段とは違った、男の丁寧な言葉には、様々な感情が含まれていた。その中でも一際強く読み取れるのは・・・後悔の念だった。

「どうか・・・弱い私に、力を・・・」  
今まで誰にも見せたことのない弱弱しさを、男は像の前でだけ、見せていた。

葉月が言った通り、家を出てから四十分程で月夜たちはその場所に着いた。

「ここだよ、中は薄暗いから十分注意して」

葉月に案内され、月夜たちは今、森の中にある洞穴の前にいた。うつそうと生い茂る木々は陽の光を遮断し、まだ陽が沈むには早い時間にも関わらず辺り一帯は薄暗い。

「どうしたんだい？変な顔して」

洞穴をじっと見たまま動かない月夜と楓を不思議に思った葉月は、

そう尋ねる。月夜は視線を動かさずに、葉月に聞き返した。

「この場所に・・・何があるって言うんだ？」

「何・・・と言われてもね、言うなればここは一つの聖域、かな。もしかして、ここを知ってるのかい？」

「知ってるどころか・・・なあ？」

楓を見ながら、月夜はなんととも言えないような顔をした。

「うん・・・そうだね」

二人にとって、その洞穴は思い出の深い物だった。幼い時、今は亡き家族とよく遊んだこの森・・・そして、月夜と楓の二人はよくこの洞穴の中で遊んだりした。二人にとっては秘密基地みたいなものだった。

「それもまた、何かの因果だろうね。気づかない内に、君達はここに引き寄せられていたのかもしれないね」

「どういうことだ？」

「ふふ・・・行こうか。その答えを・・・いや、君達の全てを、教えてくれる人が中で待っているからさ」

不敵な笑みを浮かべながら、葉月は洞穴の中へと入っていく。そんな葉月を不審に思いながらも、月夜と楓はその後に続いた。

中は薄暗く、足場は岩が多く安定していなかった。

「足元に気をつけるんだよ」

「また転ばないでね、月夜」

「いやいや、そう何度もつまずいたりしないから・・・っと」

葉月と楓に注意を促されたものの、月夜は以前と変わらず岩につまずいて転びそうになる。月夜の後ろでそれを見てた楓は、つい口元が緩んでしまった。それは嘲るようなものではなく、以前と何一つ変わっていない月夜への懐かしさからくるものだった。

「月夜、ここに来るたびにいつも転んでるよね」

笑いながら言う楓に、月夜は振り返らないで言う。

「転んでないだろ？ちよつとつまずいただけだって」

気恥ずかしそうに言い訳する月夜に、楓同様葉月も笑っていた。

「笑うなお前ら！」

「いやあ、ごめんごめん……でも、笑えるなら今の内に笑っておいた方がいいよ。……ここから先に行ったら、少なくとも僕はもう、笑えない真剣な葉月の言葉に、月夜も真剣な表情になり、そして聞いた。」

「俺らを待っている奴……お前に命令してる奴、そいつは、誰なんだ？」

「……ほら、もう出口だよ」

葉月は月夜の問いに返事をせず、少し前に広がる多少開けた空間を指差した。別に月夜の声が聞こえていなかったわけではなく、すぐに分かる、と思った葉月は答えなかっただけに過ぎなかった。

葉月がそう言ってから間もなく、三人は多少開けた場所に出た。とは言っても、広さは十畳程もない。先ほど通ってきた薄暗い道に比べれば、幾分中は明るい。

「君達はこの場所を知っているんだろ？」

立ち止まったままの葉月の唐突な質問に、二人は頷いた。

「ああ、とはいっても最近は来てなかったけどな」

「そうだね、一年ぐらい前に一回来たぐらいで、それ以降は全然来てないし」

月夜と楓はここに来た時のあの事件を思い出した。高校に入学してから間もなく、日本の軍人に狙われ追い回された時に逃げた場所がここだったのだ。幼い頃はよく来た場所だったものの、今では何かがない限りここにはとんと来ることがない二人だった。

「今までおかしいと思わなかったかい？こんな場所が、自然に出来るはずがない、って」

「そりゃ思ったこともあるさ、例えば最奥にある石なんて椅子っぽいし……でも、それなら壁とかもつと人工的にするんじゃないか？」

確かに、その中は不自然な箇所も多々ある。しかし、人が手を加えたという決め手はなかった。平らな椅子のような石もあれば、反面

壁は普通の洞窟のように岩が尖っている箇所がある。人が手に加えたにしては、いまいち不自然さが残るのだった。

「ここは人が作った場所だよ・・・いや、正確には君や僕の原点となる存在が、手がけた場所なんだ・・・だから、こんな仕掛けがある」

葉月はそう言い、最奥にある椅子のような石・・・かつて月夜がよく腰掛けていたその石の平らな部分を下から持ち上げた。

「目を閉じていたほうがいいよ、眩しいから」

葉月のいきなりの言葉に、二人はいぶかしみながらも目を閉じた。

「それじゃ、行こうか」

葉月は数センチ持ち上げたその石を、右に半回転、左に一回転させた後石を下ろした。直後、すさまじい光が三人を包んだ。その光は数秒もかかることなく消え、同時に三人の姿も消えていた。

「・・・？どこだ、ここ」

光が消え、おそろおそろの瞼を開けた月夜は辺りを見回した。先ほどの小部屋のような場所より十数倍は広い場所に、三人は立っていた。部屋はそれなりに明るく、石で作られた長椅子がいくつも平均感覚で置かれ、月夜たちのいる場所のちょうど反対側には高さ四メートルはあるつかという像が建っていた。両側の壁には平均感覚でドアが並び、その一つ一つが各部屋に通じている。そして何よりも印象深いのは、この場所の雰囲気だった。神秘かつ神聖なる雰囲気・・・そこは言うなれば、まるで教会のようだった。

「随分と、遅かったな」

像の前に立っていた男が、三人を見据え口を開いた。

「ゆっくりと歩いて来たんですよ、彼らにだって、死を前にゆっくりとする時間も必要でしょう？」

葉月のその言葉に、月夜は一瞬戸惑ったが、すぐに怒りの表情に変わる。

「どついうことだよ葉月、お前、信用しろって言ったよな？」

「葉月・・・君？」

葉月は二人に返事をする事も振り返ることもなく、男の方へと歩いた。

「ふん、なんと行って連れて来たかは知らぬが・・・信用だと？貴様のような奴が、よく信用されたものだな」

男の蔑むような言葉に、葉月はつまらなさそうに答えた。

「僕は演技がうまいんですよ、特に月夜辺りは単純ですから・・・簡単なことです」

その言葉に感情は一つとしてなかった。

「よつするに俺は・・・騙された、つてことだな」

「そうだ、そしてお前はまんまとここにおびき出された。・・・彼女を連れて、な」

男は憂いと喜びを含んだ目で、楓を見た。まるで驚のような目の男に見られ、楓はとつさにビクツと体を震わせた。

「そう怯える必要はない、君はただ、本来の自分の姿を取り戻すだけだ。危害を加える気はさらさない」

「本来の自分・・・？何を言ってるんだ、お前は！？」

月夜は男に向かって怒鳴った。全ての元凶が、その男にあると月夜は理解したからだ。

「説明しないんですか？たまには、昔話もいいかもしれませんよ」

「する必要はない。もし貴様に勝てれば、話は別だがな」

「ご褒美みたいなもんですか？また一段と、条件が厳しいですね」男の数歩手前まで歩いた葉月は、今まで歩いて行った時と同じ様にゆっくりとした動作で月夜と楓に向き直った。

「そういうわけだから、さ。説明して欲しいなら、僕を倒さないといけないみたいだよ」

人懐っこい顔に、わざとらしい笑みを浮かべて葉月は月夜を見る。

その表情には、先ほどのような哀しさは一片たりともなかった。月夜には、そちらの顔のほうが演技に見えた。

「なんだかわかんねーけどよ・・・お前らを倒せば、人間の問題事



以外の憂いは断ち切れる、そういうことか？」

「そうだね、戦争が今更止まるとは思わないけど、少なくともそれ以外の物はなくなるね」

「話が分かりやすくいいね・・・時間がないんだ。本気で行かせてもらおう」

月夜の背中から黒い翼が生える。その大きさは、今までにない程の大きさだった。それと同時に、月夜の体の周りに人間の手首程の太さの黒い帯が幾本も浮かび上がる。その帯はまるで、月夜自身の怒りを表しているかのように禍々しく蠢いている。

「月夜・・・」

そんな光景を心配そうな顔で見ている楓に、月夜は振り向いて笑った。

「すぐ終わるから、そんな顔すんなよ」

「無茶しないでね・・・？私何も出来ないけど、月夜が死ぬのは嫌だから・・・本当は・・・傷つくのだって、見たくない」

今の楓は、月夜を突き飛ばした時の勢いは全くなかった。楓だって本当は、月夜が傷つく姿なんて見たくないのだ。

「時間がないんじゃないのかい？」

葉月のゆったりとした声が、二人の間に割ってはいる。月夜は睨むように葉月に視線を移し、聞いた。

「お前は、その姿のままでもいいのか？」

月夜と同じ類のリミナーも、本気を出すときは翼を生やす。ということは、月夜と同じ葉月も、本気になる時は翼が出るのだと月夜は思っていた。

「さあね、君の実力次第、かな・・・始まるんで、楓のこと、しっかり護ってくださいよ？」

後半の葉月の言葉は、後ろにいる男に向けられたものだった。

「貴様に言われるまでもない」

男はそう言った瞬間。目を瞑り何かを念じた。

「きやつ！？」

「楓!？」

男と楓の周りに、円形の透明に近い色をした薄い膜のようなものが現れる。

「心配はいらないよ、あれは楓が巻き込まれないように張られた防壁みたいなものさ」

「彼女を傷つけられてはたまらないのでな」

そして男はすぐに再度念じた。今度はこの建物を護るかのようになり、壁や椅子、この場にある床と月夜と葉月を除いた全ての物に防壁を張り巡らす。こちらの防壁は男や楓の周囲にあるようなものではなく、物そのものに張り付いて周囲を覆っている。

「これで貴様ら以外に被害はない、貴様も存分に楽しめるのではないか？」

男の言葉に、葉月は不敵な笑みを浮かべた。

「彼次第ですよ」

二人の距離は約二十メートル程、二人には無いも同然の距離だった。「僕の渴きを満たしてくれるかな？」

「知るかよ」

月夜はなぜか落ち着いていた。力を発揮するときはその力に飲まれているかのように強い怒りを発する月夜だったが、今の月夜は内なる静かな怒りを進らせている。その瞳は闇に染まっておらず、いつもの月夜だった。それは月夜が、完璧に力をコントロールすることが出来ているからなのか、この聖域と呼ばれてる空間の中だからなのか、それは分からない。

「無駄話はもう終わりにしようぜ・・・行くぞ」

言葉を言い切ると同時に、月夜は動き出した。それはゆっくりとした動作に見えた。しかし、その一瞬後には葉月が立っている場所に月夜の腕が振り下ろされていた。しかし、そこに葉月の姿はなく、ただ地面を抉っただけに過ぎなかった。

「さつきより速くなってるね、でも、まだ本気じゃないだろ？」

余裕の態度を崩さない葉月は、微笑を浮かべ月夜から数歩離れた場

所に悠然と立っている。

「そういうお前も、攻撃したらどうだ？」

「もう少し君の力を見ないと、下手したら殺してしまうからね」

「その余裕、すぐに後悔させてやるよ」

月夜はすぐに次の攻撃に移った。しかし、突き出された拳はまたも空を切る。

「それじゃつまらないよ、もっと速く動けないのかい？」

月夜の攻撃を避け、悠然と立っている葉月のその顔に少しだけ残念めいたものが宿る。

「残念だな・・・見えてなかったのか？」

「何を・・・ぐっ!？」

完全に月夜の攻撃を避けきっていたはずの葉月に異変が起きた。まるで何かに斬られたように、葉月の右肩が裂け、真っ赤な血を飛び散らせる。葉月は確かに月夜の拳は避けていた、しかし、月夜の周囲に浮かんでいる帯からの一撃を見切れていなかったのだ。その光景を、男は嫌な笑いを浮かべながら、楓は震えながら見ていた。

「早く本気とやらを出した方がいいんじゃないか？そうじゃないと、次で終わる」

それが月夜からの最後通牒だった。これ以上は、時間をかける気にならない、それが月夜の気持ちだった。

「・・・安心したよ、やっと、君と本気でやりあえそうだよ」

今までにない程の笑みを浮かべた葉月だったが、やはりそれもどこか嘘臭さのある笑顔だった。

「生まれてきたからには、何か意味がなくちゃいけない・・・僕の場合、それが、戦いなんだと思う」

葉月の纏う雰囲気、徐々に重さを増していく。月夜によってつけられた傷が、治っていった。

「でも、弱い者いじめはつまらないんだ・・・本当に、つまらないんだよ」

月夜と同様に、葉月の背中から翼がその姿を現した。しかし、それ

は違和感を伴うものだった。左右黒の月夜とは違つ、また、左右白のリミーナとも違つ。葉月の翼は、右が黒、左が白の不自然なものだった。

「珍しいな、それ」

それでも、月夜は冷静さを失わない。月夜やリミーナの力の源は、実のところ翼によるところが多い。出さなくても力はそれなりに使えるが、それでは力が半減以下になってしまう。結局、白と黒の珍しい翼でも、その力はあまり変わらない。そう、月夜は思っていた。「ふふ、お気に入りなんだ、これ。まるで……」

僕を現しているみたいで

そう呟いた瞬間、葉月の片側の白い翼から放たれた拳大程の閃光が月夜の立っている空間を貫いた。速過ぎるそれは、空気を切り裂く音すら聞こえさせない。月夜はそれをとっさにかわそうとしたが、避けきれずにわき腹を少しだけ抉り取られる。

「がっ……なかなか、やるじゃないか……」

しかしそれは致命傷にはならない。むしろ、その程度の傷ならば月夜は即座に再生出来た。しかし、その再生の時間すら許さないかのように、次々と葉月の翼から閃光が飛び交う。今度は月夜はそれを避けようとせずに、片っ端から闇の帯で叩き落していく。それはもはや普通の人間には見えないほどの、異常な応酬だった。

「ち……くそ……」

月夜は防戦一方だった。防ぐだけでもいっばいっばいのはずの月夜だが、それでもなぜか頭は落ち着いていた。

「結構がんばるね……でもさ、前だけ見てたんじゃ、他がお留守だよ？」

「何……？」

その言葉に嫌なものを感じた月夜は、閃光を防ぎながらとっさに後ろに飛び退いた。その直後、月夜が立っていた場所の上から黒い大粒の弾が降り注いだ。その弾はなんなく地面を砕き、後ろに飛び退いた月夜に土煙と無数の石つぶてを飛ばす。

「ほら、隙だらけだよ？」

石つぶてはさほど傷にはならない、しかし土煙によって遮られた視界、それは月夜にとって致命的な隙となった。土煙の合間から、無数の閃光が月夜を狙い撃ちにする。

「これはちと・・・やべ・・・くっ！」

それでもいくつかは叩き落とし続ける月夜だったが、太ももに一発くらってからは、一気にくらい始めた。肩に、足に、腹に、胸と頭を除いたほとんどの箇所、拳大の穴が開いた。

「ちく・・・しょう・・・」

月夜は様々な箇所から血を吹き出しながら、前に倒れる。倒れてはいけないと思いつつも、足が踏ん張ってくれなかった。月夜が倒れると同時に、葉月からの攻撃は停止した。ようやく土煙が晴れ、月夜の視界はクリアになった。しかし、既に意識は遠のき始めている。月夜の意識が途切れる寸前、その目に映ったものは、物足りなさそうな顔をしている葉月だった。

「もう終わりかな？ 案外呆気なかったね・・・」

これなら、本気を出さない方が良かったかな、とぼやきながら、葉月は事の成り行きを見守っていた男に視線を向ける。

「終わりましたよ」

「ご苦労、早かったな」

「つき・・・や・・・？」

愕然としている楓は、月夜の元に走りようとした。しかし、楓を包み込んでいる防壁が邪魔で進むことが出来ない。

「つきや・・・月夜！」

必死でその防壁を壊そうとする楓だが、叩いても蹴っても体当たりしても、その防壁は傷一つつかず、そこにあり続けた。

「嘘だよ、月夜・・・起きてよ、ねえ・・・」

防壁にすぎりつくように、楓は膝をついて震えながらポロポロと涙をこぼし始める。付き合いが長い楓は、今まで月夜が怪我をしている姿など幾度となく見てきた、しかし、今楓の目に映っている月夜

は、怪我をはるかに通り越して死体にしか見えなかった。楓の中に、怒りと哀しみと・・・そして自身にも分からぬ何かが、こみあげてくる。

「無駄だよ、楓」

そんな楓に、葉月は冷たく告げる。

「殺してないとはいえ、もう動くことも、喋ることすら出来ない」

「そんなことない！月夜は・・・月夜は・・・！」

嗚咽をもらしながら、楓は叫ぶ。しかし月夜は楓がどんなに叫んでも、返事をしないどころか、ピクリとも動かなかった。月夜の体はひどいという言葉すら生温いほど、おぞましいものになっていた。傷がほとんどついていない顔と胸は、月夜自身の血で赤く染まっている。主に攻撃を受けた足や腹には拳大以上の穴がいくつか開き、肩に至っては腕と体が繋がっているのが不思議なほどに千切れかかっていた。そんな月夜の体を中心に、円状に赤い液体が広がっていく・・・。

「・・・やつ・・・いや・・・いやあああああ！」

楓は気が狂ったかのように叫ぶ、それでも視線は月夜から外さない、いや、外すことが出来なかった。

「ほら、早く回収しないと、死んじゃいますよ？」

いつも通りのゆったりとした口調で、葉月は男に言う。

「まだだ、回復されて抵抗されてはめんどくさいからな、もう少し弱らせる必要がある・・・念には念を、だ。死んでさえいなければ良い」

「そうですね、後数分も放っておけばさすがに死にますけど、二、三分なら問題ないですね」

二人の会話のやり取りを聞いて、楓は今までに見せたことのない程の怒りを帯びた表情で二人を睨んだ。それはもはや、怒りを通り越して、殺意のこもった瞳だった。

「お前らが・・・お前らが・・・！許さない！絶対に許さない！！」  
怒りに任せ、荒々しい口調で楓は叫ぶ。強く握り締めた拳は、爪が

皮膚にめり込み、血が流れ出ている。

「ごめんね、楓・・・でも、こうするしかなかったんだよ」

コウスルシカナカタツタ？コイツハ、ナニヲイツテイルンダロウ。

「僕の望む形にするには、こうするしかなかったんだ」

カタチ？ソナノハシラナイ・・・ワタシハシラナイ。ソレダケノ  
タメニ、コイツハツキヤヲ・・・

楓の中で、何かが大きくうねり始めた。強い怒りと哀しみが、体中を巡り、それが何かを呼び起こすような、そんな感覚が、楓を包み込む。いち早くその異変に気づいた男が、叫ぶ。

「そんな馬鹿な！同族の私の力なくして、彼女が呼び起こされるはずが！？」

ウルサイダメレ、コロスゾ。

そんな思考が、楓の頭を支配する。楓は震えながら、強く体を抱き締める。自分の内側から起ころうとする何かに、ひどく恐怖する。

「くそ！彼女が呼び起こされているのではない、あの女に彼女の力が吸い取られているのか！？そんな、そんな馬鹿なことが！」

男はすぐに防壁を解き、楓の元に向かおうとした。直後、男の体は数本の何かによって貫かれた。

「なっ！？」

前のめりに倒れる男を、葉月は心の底から楽しそうな表情で見下ろした。

「やっと、隙が出ましたね。ずっと待ってたんですよ、こういう時を、ね」

「き、貴様！？」

倒れたまま、男は鋭い目つきで葉月を睨む。葉月はいつもの飄々とした態度で、その視線を受け流した。

「くすくす・・・あなたともあるうお方が、惨めなもんですね。そうやって地面に這いつくばって・・・くすくす、はは、ははははっ」  
笑い続ける葉月。しかしその声には、喜びも哀しみも怒りも・・・  
感情が何一つなかった。

「貴様・・・一体、何が目的だ!？」

普通の人間なら間違いないく即死の傷を負っているはずの男は、気丈な態度を崩さずに倒れたまま葉月を睨み続ける。

「目的・・・? さあ、なんででしょうね?・・・少なくとも、僕が描く夢の中に、あなたはいませんよ」

「分をわきまえぬ愚か者が・・・夢だと? 所詮偽者風情の貴様が、この私に齒向かおうと言うのか!」

男は叫び、すぐに何かを念じた。倒れた男の周囲に、サッカーボール程の大きさのいくつかの黒と白の球体が浮かび上がる。しかし、それは力を発することなく、葉月が発した眩い何かに押しつぶされて消えた。男は多少の驚きを見せたが、それでも葉月を睨み続ける。「偽者偽者って・・・いい加減うざいんですよ、僕はあなたの駒じゃないしましてや捨石でもない。意思を持つ一人の人間なんだ」いつもの落ち着いた口調とは裏腹に、その言葉には強い想いが込められていた。

「ふん、何度でも言うてやる・・・貴様は所詮偽者だ。私に作られただけの、分身にすぎない」

気丈な男の言葉に、葉月はもはや何も言わなかった。ただ、右手を前に突き出し、それを男に向ける。直後、男の上に小さな黒い球体が浮かび上がった。それは徐々に大きく、そして禍々しい黒い光を放ちながら、男の体を飲みつくそうとする。

「ふん、黒い月か・・・貴様にこれ程の力が、あつたとはな・・・だが・・・」

自分の死を前にしながらも、冷静だった男の声は途切れた。葉月が発生させた黒い球体は男の体を覆いつくし、そして忽然と消えた。黒い球体と共に、男の姿も、それに触れた地面も、空間ごと抉りとられてしまったかのように、その場から消えてなくなっていた。

「・・・さて、手遅れになる前に、なんとかしないといけないね」男がいた空間を少しの間眺めていた葉月はそう言って、今も苦しそうに身を震わせている楓の元に歩きだす。否、歩くという表現はあ



てはまらない。その歩みは速く、数十メートルの距離を一秒とかならず詰めたのだから。

「あ……ああ……っ」

己の中の何かと葛藤している楓に、葉月は手を触れようとした。しかし、楓はその手を払いのける。

「わた……しに、さわる……な……!」

それは楓の声であり、楓の声ではなかった。何かが混じったようなその声を聞いて、葉月は時間がないことを理解する。

「……辛いでしょ？君の中の力が、目覚めようとしているんだ……  
・本当は、ここまでする気じゃなかったんだ……ごめんね」

葉月は辛そうに呟きながら、楓の額を右手でつかむ。楓は抵抗するように両手でその手を握るが、それは全く意味を成さなかった。

「はな……して、はな……せ!」

「すぐに、いつもの楓に戻してあげるから……信じて」  
切実に呟く葉月に、楓は途切れ途切れ否定の言葉を口にする。

「しんじれ……ない!……お前が……月夜を……!」

葉月は悲痛な表情を浮かべた。葉月がしてきたことを顧みれば、信じられない、と言われるのは仕方のないことだが、それでも葉月は耐えられない、といったように哀しみの表情を浮かべる。

「それでも……僕は、君を……」

葉月の体に力が灯る。それは肩、腕を通り、楓をつかんでいる右手に流れていく。それは破壊の力ではなく、抑止の力。先ほど男が口にしたように、楓の内側に眠る力と男の力が同族的なものであれば、それを目醒めさせることが出来る。そして逆に、それを抑えることも理論上は可能だった。男の分身のような存在である葉月には、それを可能にする力を持っていた。

「くあ……やめ……ろ……」

それは楓が言っているものなのか、それとも楓の内側にある眠っている何かが言っているものなのか、それは分からない。それでも、葉月は止めることなく抑止の力を楓に送り続けた。楓は、自分の中

の熱く大きい何かが、徐々に治まっていくのを感じた。数十秒後、葉月により内側の何かを抑えられた楓は、いつもの楓に戻っていた。

「葉月・・・君」

「戻ったみたいだね、良かった・・・」

右手を離し、心底安心したように葉月は微笑む。

「どうして・・・？どうして、こんなことしたの・・・？」

葉月の真の意図が分からない楓は、葉月にそう問いかけた。葉月は困ったように頭をかきながら、仕草と同様に困ったように言った。

「僕も随分不器用だね・・・こんなやり方しか、見つけれなかった。・・・君もそう思うだろ？ねえ、月夜」

葉月は振り返ってはまだ倒れているはずの月夜に呼びかけた。楓も視線を葉月から月夜に移す、最初は哀しみに満ちた虚ろな瞳だったが、その瞳はすぐに驚きを含んだ物に変わり、そして安堵と嬉しさを含んだ物に変わった。

「全くだな、つたく・・・いてーよばかやろう」

二人の視線の先には、血まみれになりながらも、体の傷はほとんどふさがりつつある月夜が立っていた。

「・・・え？つき・・・や？どうして・・・」

混乱に陥りながら、安堵と嬉しさで涙は出るが言葉をつまみ出せない楓が、そんな月夜を見つめている。

「そんなもんはそいつに聞いてくれよ。つか、俺にも説明してもらおうじゃないか」

「そうだね・・・一応全て終わったことだし、説明しようか」

その前に・・・と葉月は呟きながら、二人の疑問の視線を飄々と受け流し、歩いてすぐ近くのドアのノブに手をかけた。中へと消えていく葉月を二人は呆然と見ている。葉月はすぐに戻ってきた。その両腕には、二人がよく見知った人物が抱きかかえられている。

「リミナー！？」

「リミナーちゃん！？」

二人の顔は驚きの表情に変わった。

「寝ているだけだよ。身体的損傷は、もうほとんど回復してるしね」  
葉月はリミーナを手近な長椅子に横たえ、二人に、おいでおいで、と手招きをした。二人は葉月の言動に混乱しながらも、リミーナが横たわる長椅子へと歩いていった。

「まあ、座りなよ。ゆっくり・・・している時間もないけど、話をしようじゃないか」

葉月はリミーナの隣に座り、そう言った。月夜と楓は心配そうな顔でリミーナを見ながら、楓はリミーナの頭側に、そして月夜は楓の反対側、葉月が座っているすぐ横に腰掛けた。左から順番に言っていると、楓・リミーナ・葉月・月夜の順番だ。

「・・・リミーナは、本当に大丈夫なんだろうな？」

「問題ないよ、今は眠らされているだけさ。あいつも死んだことだし、すぐに目を覚ますと思うけど」

月夜の心配と怒りが混じった声に、葉月は意に介した様子もなく答える。

「・・・ああ、そういえば彼女も関係があるんだったね、良ければ今すぐ起こしちゃうけど？」

「そういうことが出来るなら、さっさとやれ」

はいはい、と葉月はめんどくさそうに言った後、少しだけ身を乗り出してリミーナの頬を軽く叩いた。

「起きろー」

場の雰囲気合わない葉月の行動に、楓は驚いて心配そうな顔をした。そして月夜はこけそうになった。

「お、お前なあ・・・なんだそりゃ」

葉月の行動は、ただ普通に起こしているようにしか見えない。月夜の疑問の声も当たり前のもだった。しかし・・・

「ん・・・んう？」

リミーナは目を覚ました。

「おはよう、調子はどうだい？」

目を覚ましたリミーナに、葉月はいつもの微笑を浮かべながら声を

かける。

「おはよー・・・って、あなたは!？」

目をこすりながらぼんやりとした声で挨拶を返したりミーナは、自分の目の前にある顔に驚いて目を大きく開け、とっさに体を起こした。ぶつかりそうになったりミーナの頭を、葉月は、ひよい、となんなくかわす。

「この前はよくも!・・・きゃっ!？」

葉月に飛び掛りそんな勢いのリミーナを、楓が後ろから抱きしめた。

「良かった・・・無事で・・・」

「え?え?・・・楓おねーちゃん?」

状況を全く理解していないリミーナは、あたふたと混乱している。

そんなリミーナを、楓は、良かった・・・と呟きながら抱き締め続けている。

「やれやれ・・・全く」

そんな二人を眺めていた月夜は、口調とは裏腹に、その表情はとてもにこやかだった。

二人がある程度落ち着いていた頃合いを見計らって、月夜はリミーナに事情を説明した。

「・・・へえ、そんなことがあったんだね」

「ああ、実際俺も分からないことばかりなんだけどな・・・」

「私も・・・だから、早く説明して欲しい」

三人の視線が葉月に集中した。月夜がリミーナに説明している間、何かを考えるように黙っていた葉月はその視線を受けて嫌味っぽく言った。

「彼女を起こすように言ったのは君だろ、僕の説明が遅れたのは僕のせいじゃないよ」

「それは否定しないけど・・・元を辿ればお前、いや、お前らのせいだろうが」

その言葉に月夜も嫌味っぽく返した。その場の雰囲気、学校にい

る時のような物に変わりつつあった。

「僕だつて好きでやっていたわけじゃないんだよ？僕はあいつを殺す隙を狙っていたのさ」

悪びれた様子もなく言う葉月に、月夜は溜め息をついた。

「とりあえず、早く説明してくれ・・・世界が、手遅れになる前に」  
「そうだなあ・・・どこから説明すればいいかな・・・」

ゆつたりとした葉月の態度に三人は、じれったいなあ、といった表情をする。しかしそれでも、誰一人口を開きはせずに、葉月の言葉を待った。

「・・・まずはあの男の正体、かな」

葉月はそう切り出し、俯いて説明し始めた。

「あいつの名前はルシファー、今の世の中だと最高位の墮天使として有名かな」

葉月の言葉に、三人は一瞬固まった。しかしすぐに、各々がいぶかしむ声をあげた。

「ルシファー？確かに神話とかだと有名だけど、現実存在するわけないだろ？」

「うん、私も名前は知ってるけど・・・それがあの人だったなんて信じられないよ」

「本人じゃなくてただ単に名前が一緒なだけとか？・・・どちらにしても、ただの人間じゃないのは分かるけど・・・」

各々の反応に、葉月は困った表情を浮かべた。

「うーん・・・まあ信じられなくても仕方のないことかもしれないけど、本当のことなんだよ。あの男は・・・」

そこで葉月の言葉は途切れた。三人は葉月の次の言葉を待ったが、いくら待っても続きの言葉はその口から出てくることはなかった。ついに痺れを切らした月夜は、葉月の顔を下から覗き込んだ。

「おい、どうした・・・え？」

どしゃ、という音を立てて、葉月の体が前に倒れこんだ。突然の事態に、月夜は葉月を支えることが出来なかった。

「お、おい、どうしたんだよ？」

「しばらくの間、体の自由を奪ったただけだ。そう案ずることはない」  
広い部屋に、四人以外の何者かの声が響いた。少し前に聞いたばかりのその声に、月夜は体を震わせて辺りを見回した。

「どこにいるんだ！？」

「私は、ここだ」

部屋中に響くように聞こえていた声は、いつの間にか一箇所の場所から声を発していた。三人は一斉にその場所を凝視する。

「お前・・・どうして・・・？」

「嘘・・・だって、あなたはさつき・・・」

「あなたは・・・！」

三人の視線の先、先ほど男が立っていた大きな像の前に、葉月に消されたはずの男、ルシファー本人が超然と立っていた。

「死んだはず、とでも言いたいのかね？残念ながら、あの程度では私は死なぬ・・・この聖域の中であるのなら、それは尚更のことだ」

それは紛れもなくルシファー本人だったはずなのに、その声と姿は、先ほどよりもはるかにすさまじい重圧感を醸し出していた。

「・・・お前は、なんなんだ？」

強烈な重圧感に圧されながらも、月夜は震える声でそう尋ねた。月夜のすぐそばにいるリミーナと楓は強烈な重圧感に圧され、声をあげることすら出来なくなったようだ。

「私はルシファー、愚かしい全ての人間に・・・神の裁きを与える者だ！」

ルシファーが叫んだ瞬間、月夜は自分の心臓が鷲つかみにされる感覚を覚えた。今まで感じたことのないような圧倒的な恐怖が、月夜を包み込む。月夜は震えるどころか、指一本動かすことすらできなかった。楓とリミーナも同様に、自身の時が止まってしまったかのように、微塵の動きも見せなかった。

「ふん・・・私が怖いか？最初から大人しくしておれば、そんな目

にあつことなく終われたというのに……さて、終わらせるとしようではないか」

怖い。確かに月夜は、ルシファーが怖かった。それは理性的なものではなく、本能がそう告げている。それでも……、と月夜は、湧き上がる恐怖を無理やり抑え、口を開いた。

「……怖い？そんなわけ、ないだろ」

言葉とは裏腹に、月夜の声は震えている。それでも、月夜は精一杯の嘘をついた。相手にではなく、自分自身に勇気を与えるために。もし自分が動けなかつたら、相手が攻撃を仕掛けてきた時にリミナーと楓を護ることが出来ない。そう考えた月夜の、必死の抵抗の証だった。

「ふん、嘘を貫き通すのならば、まずはその震えをどうにかしたらどうだ？」

ルシファーの言葉に、月夜は強く拳を握り締めた。情けない……俺、ほんと、情けねえな……。自身の情けなさから湧き上がる想いが、恐怖を徐々に塗りつぶしていく。

「……嘘？嘘だと思ふなら、信じられるまで何度だって言うてやる。お前なんか怖くない……怖くねえんだよ！」

最後の言葉を言った時には、月夜の声はもう震えてはいなかった。超然と立っている男を、強く睨みつける。

「大した意志の強さだ……ふん、よかろう。貴様のその心意気に免じて、私自ら説明してやるうではないか」

どこことなく哀愁のような、そしてなおかつ嬉しさのようなものを含んだ声で、ルシファーは言う。

「ああ、説明しやがれ！こっちは何も分からない状態で、お前らに振り回されるのはごめんなんだよ！」

月夜の叫びに、ルシファーは笑い出した。

「ふっ……はっはっは……そうだな、死に行く者……いや、消える者にも、それ相応の説明が必要だな……たまには、昔話も良いかもしれん」

どことなく嬉しそうなルシファアの声に、もしかしたら、こいつ昔話しかかっただけなのか？と月夜の中に緊張感の欠片もない疑念が膨らんだが、今はそれを考えている場合ではなかった。

「それでは、話を始めるとしよう。この場にいる人間、全てに関係がある遠い過去の話だ」

懐かしい故郷を思い出すような口ぶりで、ルシファアは話し始めた。



断罪（後書き）

物語もそろそろ佳境に・・・なるのだろうか？

あいつかわらず戦闘シーン腐ってますが、うまくかけるようになれたらいいなあ・・・

## 終わらない因果

それは今から四千万年前の話。恐竜が生きていた最後の時代、中生代の白亜紀が終わりを告げてから二千五百万年の月日が流れた頃。時は新生代、第三紀の中の古第三紀、始新生と呼ばれている時代に、哺乳類が繁栄をとげた時代の話だ。

哺乳類とは言っても、今の世界に栄えている人類の姿は影も形もないとされている。しかしそれはあくまで、今の人間が化石などから推測しただけのものに過ぎないのだ。そう、今から四千万年前、本当は人類はこの地球上に存在していたのだ。

「・・・待て待て待て、いきなり何を言い出すんだお前は」

何かの演技をしているかのような仕草と言い方で、意味の分からない説明を始めたルシファーに月夜は口を挟んだ。

「なんだ、黙って話を聞けないのか貴様は？」

明らか不機嫌そうな顔をしたルシファーは、月夜を睨みつける。その鋭い瞳に威圧されることなく、月夜は睨み返した。

「俺は、俺らはお前のことを聞いてるんだよ。そんな意味の分からない偽歴史を聞くために俺らは黙ってるわけじゃない」

実際のところ、月夜以外の二人、楓とリミーナはいまだ強い重圧感により口を開けないだけなのだが、月夜は違うのでそう言った。

「ふん・・・偽歴史、とな。その目で過去を見てきたことがない貴様は、なぜそれを決め付ける？」

ルシファーの口ぶりは、まるで四千万年前を見てきた者のそれだった。それでも月夜は動じることなく、言い返す。

「俺にそれを決め付けることは出来ない。でも、ならお前にだって決め付けられることが出来るわけないだろ？」

月夜の言葉に、ルシファーはしばらくの間口を閉ざした。しかし、その表情は不敵な笑みを浮かべている。

「私には出来るのだ。なぜなら私は・・・その時代に生きていたのだから」

ようやく口を開いたルシファアの言葉に、月夜は言葉を失った。四千万年前から生きている？そんなことがあるはずがない、と月夜は考えをめぐらす。目の前に存在している相手は人間ではない、その事実が月夜を黙らせた。

「ふん・・・信じるも信じないも貴様の勝手だ。しかし、貴様の考えなど関係なしに、時は流れている。その時に起きた事柄は、全て事実なのだ」

もはや、言い合いをする気もない、というように、ルシファアは月夜の言葉を待たずに説明を再開した。

四千万年前に存在していた人類。それはチンパンジーやゴリラのように類人猿と呼ばれているものではなく、今この世界に存在している人間そのものだった。唯一違うのは、鍛え上げたわけでもないのに素手で岩を持ち上げ、象程の大きさの動物すら素手で狩る、異常なまでの筋力だ。数は多くはなかったが、それでも数千という人間が村を起こし、そこに住んでいた。

そしてその時代には、人類の他にも歴史に残っていない種族が、二つ存在していた。一つは黒い翼を生やした悪魔族、そしてもう一つは・・・白い翼を生やした天使族だ。今あげた三つの種族、そのどれもが起源と発祥は分からない。しかし、確かにその三種族は地球上に存在していたのだ。

「黒い翼に・・・白い翼だつて？」

それは月夜にとって、身に覚えがある単語だった。それどころか、月夜自身、黒い翼が生えている。リミーナと楓も何かを感じたらしく、微かに首を動かして月夜を見る。

「そうだ、そして私は、白い翼を持つ、天使族だった」

事情を知らない者が聞けば、笑うか呆れそうなお突拍子のない話だっ

だが、月夜の中では何かが繋がりそうになっていた。そして、じゃあ、俺は・・・？という疑念が浮かび上がってくる。

「悩むのは貴様の勝手だ。しかし、話を最後まで聞けば、貴様にもその力の元が分かる」

「どういうことだよ・・・？」

「続けるぞ」

月夜の言葉を無視し、ルシファーは説明を再開した。

天使族と悪魔族はすさまじい力を持っていたが、その数は人類と比べるとはるかに少なく、十分の一度だった。この三種類の種族は、とある一つの大陸に、それぞれ分かれて暮らしていた。種族間同士の交流は何一つなく、それどころか、仲は険悪で小競り合いが絶えなかった。

特に、人間は異形の生物を嫌う癖がある。人間の姿形をしているのに、背中に翼が生えている・・・なおかつ、すさまじい力を保有している。それだけのことで、人間どもは天敵のように我ら天使や悪魔を忌み嫌ったのだ。

「なるほどね・・・なんとなく、話は読めてきた」

月夜の脳裏には、かつて見た不思議な夢が思い出されていた。人間、天使、悪魔・・・それらの単語は、月夜が見た夢にすっかりと繋がっている。月夜の言葉に、楓とリミーナは、まだよく分からない、といった表情で月夜を見た。

「聞いてれば分かるよ。ほら、さっきから中断されっぱなしで今にもキレそうなやつがいるからさ、少し黙って聞いてようぜ」

ルシファーの話を中断している主な原因の月夜は、悪びれた様子もなくルシファーを指差しながら、二人に言う。もはや月夜には、恐怖や緊張感など欠片もなかった。

「そう思うなら、まずは貴様が口を慎め。物語で言うのなら、まだプロローグに過ぎないのだぞ」

何度も中断され、今にもキレだしそうなルシファアは、それでも余裕を見せ付けるように落ち着いた声で言う。しかし、その声と体はわずかに震えている。まだプロローグとか・・・こいついつまで話す気なんだろうなあ、とある程度話の予測がついてる月夜は嘆息した。そんな月夜の気持ちに気づくはずもなく、ルシファアは説明を再開した。

人間は天使と悪魔を嫌い、悪魔は人間と天使を嫌った。しかし、天使だけは違った。元々温厚な彼らは争いを嫌い、身に降りかかる火の粉を払いはしたが、自らが積極的に争いに参加することはしなかった。そうして、小競り合いは絶えなかったものの、数百年という平穏な時が流れた。しかし・・・ある事件がきっかけで、平穏無事に保たれていた均衡が一気に崩れることとなったのだ。

ルシファアの表情は、怒りとも哀しみともとれない表情だった。しかし、その表情の奥底には、湧きあがるような強い怒りが静かにうごめいていた。そんなルシファアを見て、月夜は己の中にいる闇が自然とざわつくのを感じた。

きっかけとなったその事件・・・当時の天使族の長の娘、フュリア様が人間どもに誘拐されたのだ。

フュリア、という名前を聞いて、月夜はわけの分からない懐かしさと・・・そして強い哀しみを抱いた。己の内から突然現れた強い哀しみに、月夜は胸が張り裂けそうになる。

「ふん・・・どうやら貴様も覚えているようだな。いや、それも当たり前前の事か・・・私は彼女を忘れたことは一度たりとてなかった。貴様の中にある我が魂の一部も、しっかりとそれを記憶しているよ。うだな」

俺の中にある、お前の魂の一部？ルシファアの気にかかる言葉に月

夜は口を開こうとしたが、口からその言葉が出てくることはなかった。代わりに、自分を襲う哀しみと切なさから、嗚咽が口から漏れた。

「どうしたの月夜!? ねえ、大丈夫!？」

月夜の様子が突然おかしくなったことに気づいた楓は、自身を縛り付けていた恐怖に打ち勝ち、月夜のそばに寄り添いその顔を覗きこんだ。

「・・・月夜? 泣いてる、の?」

楓にそう言われて、月夜は始めて自分が涙を流していることに気づいた。せきをきったように溢れる涙は、頬を濡らし、幾粒の雫となつて地面へと落ちて行く。子どものように嗚咽を漏らしながら涙を流す月夜を、楓は優しく抱き締めた。なぜそうしたのか、楓自身にもよく分かつてはいない。それでも、なんとなくそうしなければいけないような気がして、楓は月夜を抱き締めた。そんな二人を見ながら、ルシファーもまた、月夜と同じ様に辛そうな表情を浮かべたが、月夜と違い涙が流れることはなく、そして寄り添ってくれる者もいなかった。

「・・・続けるぞ」

感情を押し殺したような声で言った後、ルシファーは続きを口にした。始めた。

フュリア様をさらった人間どもは、彼女を人質に脅しをかけてきた。悪魔を根絶やしにするために、協力をしろ、とな。我らは、仕方なくそれを受け入れたのだ。彼女には、例え種族そのものが絶滅することになったとしても、護らなければいけない価値があったのだ。しかし、すぐに我らはその決断を後悔することとなった。なぜなら・・・それは協力などという生易しいものではなかった。前線に立つ者はその全てが天使で、人間どもはただ後ろで両者が弱る機会を窺っていただけなのだからな。

ルシファーが説明を始めてから、今まで多少とはいえ緩んでいた空気がこの時一気に張り詰めた。息が出来なくなるような重圧感とおぞましい程の怨恨の念が場を支配したが、それでも三人はルシファーの話に耳を傾けた。いまだ嗚咽を漏らし続けている月夜は、そんな状態なのにも関わらず、聞かなければいけない気がして、全神経を集中させてそれを聞いていた。

当時、まだ十八歳だった私は、戦に参加する権利を与えられてはいなかった。種族が滅んでも彼女を護ることが絶対、しかしその決まりすらも、初代の長、亡き後も絶対神と崇められていたその長が定めた法に背くことは許されていなかったのだ。・・・彼女を救う権利すらない自分自身に、私は強く苛立ちを覚えた。

天使と悪魔の戦いは熾烈を極めた。数に大差はなく、力も系統が違ふとはいえほぼ同じ・・・両者を快く思わない人間にとって、それは好都合だっただろう。しかし、相打ちになることを望んでいた人間の期待は、裏切られることとなった。フュリア様を救うため、という天使側の強い士気と、数だけ見れば圧倒的な差に気が弱くなった悪魔側・・・両者の力が同等であれば、どちらが勝つかなど誰にでも分かることだった。それでも半数以上の天使が犠牲になり、人間側は全くと言っていいほど被害がないまま、その戦争は幕を閉じ、悪魔族はこの世界から滅び去ったのだ。

そこで一度ルシファーは言葉を切り、大きく息をついた。しばしの間、その場にいた誰もが無言を保っていたが、耐え切れなくなったように楓が口を開いた。

「・・・それで、結局その人はどうなったの？」

楓の言葉に、ルシファーは一瞬だけ気を緩めたような表情をした。

「無事に帰ってきた。しかし・・・」

だが、すぐに陰しく怒りを孕んだ表情に切り替わる。

「悪魔との戦争で弱った我らを、人間どもが見過ごすはずもなかっ

ただ。やつらは彼女を返した後、すぐに矛先を我らに向けた」

楓はその言葉に絶句した。人質をとっていたとはいえ、協力してもらった相手に唾を吐きかけるようなその行為に、知らずの内に震えていた。結果は聞くまでもなかった。元より十倍程の数の差がある上に、悪魔との戦争により天使側は半数以上を失い、疲弊していた。ほぼ無傷とも言える人間に攻め込まれば、それはもはや争いではなく、単なる虐殺にしか過ぎない。

「我らは一日と経たずして全滅の危機に追い込まれた。最後の最後まで勇敢に立ち向かった者、死ぬことを恐れ逃げ出した者……そのどれもが、虐殺されていたのだ」

ルシファアの強い怒りがまるで具現化されたかのように、彼の周りにドス黒いオーラが浮かび上がる。普通の人間ならば、その強い負の感情に当てられ、その場にいただけで発狂し、精神が崩壊してしまいそうだった。それでも楓は、ルシファアを強く見据えていた。その瞳には、同情や哀れみの念がこめられている。

「……じゃあ、どうしてあなたは生きているの？」

楓が感じていた疑問は、無論リミナと月夜も感じていた。静かにそして切なそうに、ルシファアは答えた。

「……彼女が、私を逃がしてくれた。最後の最後、生き残った数人の中に私はいた」

その時のことを忘れられない、といったように、ルシファアは愁いを帯びた声で続ける。

「数百の人間に囲まれ、もはや死を待つばかりのあの時……私は、せめて一矢報いてやろうと、敵陣の中に飛び込んだのだ。他の残った同胞も、私と同じ気持ちで付いて来てくれた」

ルシファアはとつとつとその時のことを語る。その声には先ほどまでの怒りはなく、哀しみの感情とやるせなさだけがこもっていた。

「同胞たちが倒されていく中、私にもついにその時が来た。動かずにぼろぼろになった体で、目の前で振り上げられた剣を、私はどうすることもなく黙って見ていた。……死ぬのは、怖くなかった」



しん、とした冷えた空気が場を支配する。ルシファー以外の三人は口を挟むことなく、ただ黙ってそれに耳を傾けていた。

「振り下ろされる瞬間、死を確信した私は目を閉じていた。しかし・・・いつまで待っても死はやってこなかった。おそろおそろ目を開けた私の前には、彼女が立っていた・・・我らが命を賭して護るべきはずの、彼女が・・・。フュリア様は、振り向いて私に微笑んだ後、何かを口ずさみ始めたのだ。それは歌のようであり、詩のようだった」

月夜の中で、一際大きく鼓動が跳ね上がった。それを聞いてはいけない、それを言わせてはいけない、そんな感情が、月夜の中に浮かび上がる。一度は止まった涙が、再度流れ出そうになる。

「人間どもは彼女が発した神秘的な何かに、一瞬動きを止めたが、すぐに彼女に向かって攻撃を仕掛けた。彼女の頭上で振り上げられた剣が振り下ろされる瞬間、彼女は微笑んで私に言ったのだ」

さようなら・・・、ルシファーが発した最後の言葉が、月夜には違う誰かの声に聞こえた。その声は女性のもので、どことなく、楓に似ている声の響きだった。月夜は哀しみを超えた何かを感じ、大粒の涙をこぼし始めた。そんな月夜を楓は驚くこともなく強く抱き締めた。ルシファーはそんな光景を目にしながら、ゆっくりと続きを口にした。

「彼女の死を目の当たりにする瞬間、私は体が軽くなるのを感じた。いや、重力という概念すら、その時の私は感じてはいなかった・・・。そして、気づいた時には私はここにいた。一瞬のうちに視界が切り替わった私は、初めは混乱したものだ」

後悔の念を含んだ声で、ルシファーは次へ次へと言葉を吐き出す。「しかし、すぐに正気を取り戻した私は、この場所から出ようとした。しかし、何をしてもこの場所から出れることはなかった・・・。彼女を護れなかったことへの後悔の念で、ここでどれだけ涙を流したかはもはや覚えておらぬ」

静かに・・・そしてゆっくりと、静まっていたルシファーの怒りが

沸々と蘇ってくる。

「だから私は、深い眠りについたので。この身が朽ちることなく、人間への復讐の心を忘れることなく・・・体と気持ちを維持したまま、復讐の機会をただ待たただけに」

強い芯の通った声でルシファーは言う。目的がなんであろうと、意志を持ちそれに対して動く人間の心は強く気高い。人間ではない彼だが、その心の強さは誰にも崩せないだろう。

「そして私は目覚めたのだ・・・いや、目覚めさせられたのだ。人間の死への恐怖、憎しみ、哀しみ、それらの多くの負の感情が、私を呼び起こした、復讐の機会と共に、な」

「・・・分からないことと聞きたいことが、いくつもある」

ようやくわけの分からない哀しみが大分治まった月夜は、楓から体を離し弱い声でルシファーにそう尋ねた。

「なんだ？」

「お前とそのフュリアって人、どんな関係だったんだ？お前の様子を見る限りじゃ、ただの偉い人の娘とその下っ端、って感じじゃない」

月夜の疑問はもつともだった。フュリアの名前を口にする時のルシファーの声や表情は、まるで死んでしまった恋人に想いを馳せる者のそれだったからだ。しかしルシファーは、冷やかな目でそれに答えた。

「私と彼女が恋仲だった、とでも言いたいのか？くだらん、貴様ら人間のつまらない感情と一緒にするな・・・確かに、私は彼女に恋慕の気持ちを抱いていた、しかし、それ以上に」崇敬の念が強かったのだ。彼女を護れなかったことに何よりも後悔し、そして彼女を殺した人間どもに復讐するのは当たり前のことだ」

冷やかな態度を崩さずに言い切ったルシファーだったが、月夜にはそれが嘘だと分かった。崇敬よりも何よりも、想いを馳せた人が殺されたから、それがルシファーを復讐に駆り立てるのだと、先ほど自分が感じた強い哀しみから月夜は理解していたからだ。

「ふーん・・・崇敬、ね。まあいいや。次、お前の話の中に出てきた、俺の中にあるお前の魂の一部、あれはどういう意味だ？」

問い詰めても恋慕の念からによるものだとルシファーは認めないだろう。それを分かっていた月夜は、次の質問に移った。

「そのままの意味だ。人間ごときに貴様や白い翼などの兵器が作れると思うか？本来ならば人間にすらなれなかつた貴様らに、生を・  
・私の力の一部を与えてやったのは、この私なのだよ」

予想がついていたルシファーの言葉に、月夜は戸惑うことなくその続きを聞いた。

「なんのために？」

「それも文字通りの意味だ。兵器が人間を殺さないでなんとする？結果は失敗だったようだがな」

人を殺すために生み出された。ルシファーのその言葉に、月夜は怒りを通り越し笑ってしまいそうになった。それは楽しいからではなく、自分を嘲るために笑ってしまう自嘲的な笑み。人を殺すために生み出されたことなど、元より月夜は理解していたが、人から、天使から、二重で同じ意味を持つその理由に、月夜は自分の存在理由を再度分からされた。

「・・・人を殺すため、か。結局どこまでいっても、俺の生まれた理由はそれなんだな・・・」

切っても切れない因果な運命に、月夜は顔を曇らせた。それは、泣いているように見える顔だった。

「・・・違うよ！月夜は、そんなんじゃないよ！」

黙って二人の話を聞いていた楓が、強く叫んだ。月夜に寄り添い、その顔を覗きこんで言う。

「月夜は、兵器なんかじゃないよ・・・？私が知ってる月夜は、ちよつと馬鹿で、間が抜けてて・・・でも、優しく、頼りになる普通の男の子だよ。生まれた理由なんて関係ない、月夜は月夜だもん」  
その言葉は、月夜を純粹に想う楓の気持ちがかもっていた。理屈や理論、例えこの世の全ての理を否定していたとしても、楓の言葉は

いつだって月夜を励ましてくれた。月夜はいつだって、そんな楓を護ろうと思っていた。

「・・・っほんと、なさけねーよ、俺」

「ほんとに、情けないよお兄ちゃん」

自分の情けなさを恥ずかしく思いながらそれを口にした月夜に、今までルシファアの強い重圧感に圧され口を開いていなかったリミーナがようやく口を開いた。

「・・・お前にだけは言われたくない」

そんなリミーナを横目で見ながら、月夜はいつもの調子で言った。

「ど、どういう意味よ!？」

「あいつのプレッシャーごときで喋れなくなってたお前には言われたくないって言うてんだ、大体から久しぶりに口を開いたかと思ったらそれかよ？」

「しょうがないでしょ!」

いつもの調子で緊張感の欠片もなくぎゃあぎゃああと喚く二人に、ルシファアが呆れたような声で言う。

「馬鹿騒ぎもいい加減にしろ。・・・そろそろいいかね？」

聞きたいことはもうないのか、という意味合いで言われた言葉に、月夜は異を唱えた。

「待て、あと二つ。一つは、どうして強い力を持つてるお前が、わざわざ俺らに人間を殺させようとしたのか。そして二つ目、どうしてお前は四千万年も眠っていたんだ？」

実際のところ、今更それを知る必要はないと思っただ月夜だったが、これから起こるであろう壮絶な殺し合いの前に、多少のモヤモヤはすっきりさせたいと思っただそれを尋ねた。

「ふん、良い質問だな」

良い質問だったのか?と、月夜は疑問に思いながらもルシファアの次の言葉を待った。

「まず、なぜお前らを使役しようとしたのか、原因と理由は一つだ。・・・なぜかは分からぬが、私はこの場所以外で天使の力を使うこ

とが出来ないのだ。だからこそ、人間になりえる前の貴様らを使おうと決めたのだ。人の死への恐怖、絶望、憎しみ、哀しみ・・・これらの負の感情は、私に力を与える。眠っている間の数千万年の時に、私は多くの力を取り戻したが、それでもかつての私に戻ることは出来なかった。・・・理由は、全く分からんがな。失敗作ではあったが、貴様らの働きは見事だった。おかげで、私は一瞬で力を取り戻すはず、だったのだからな」

最後の言葉を皮肉気に行ったルシファーは、ふん、と鼻を鳴らした。「要するに、お前はお前自身の力を取り戻すために俺らに細工したんだな？」

長い割りにはいまいち要点を抑えてない説明をしたルシファーに、月夜はそう聞いた。

「そういうことだ。最後の最後、あの戦いで私は力を使い尽くしてしまっていたのでな」

納得した、というように月夜は頷いた。ルシファーの説明に腑に落ちない点はいくつもあったが、それを言わないということはルシファー自身も知らない、ということだろう、と月夜は思い、次の質問の答えを促した。

「次、機会はたくさんあったはずじゃないか？どうして今更になつて起きちまつたんだよお前は」

月夜の皮肉気な物言いを意にも介さず、ルシファーは答えた。

「知らん」

「は？」

ルシファーの毅然とした態度と全く反対方向に向かっているような言葉に、月夜は思わずそう呟いていた。

「先ほど、私はこう言ったはずだ。人間の負の感情が私を呼び起こした、と。それは正確には違うのだ。私は、己の力がある程度戻つたら目を覚ますように設定したのだ。しかし、なぜか私は四千万年・・・正確には、三千九百九十九万九千九百八十三年もの間を眠り続けていたのだ。この十数年で多くの力が戻ったというのに、なぜそ

の長い間に戻らなかったのだろうか？」

知るか、と思つた月夜だったが、とりあえず考えてみた。そして、頭に浮かんだ言葉を正直に述べた。

「知るか」

「ふむ・・・まあいいでしょう、彼女に直接聞いてみればいいだけのことだ。心当たりがあるかもしれないしな」

彼女に直接聞く？その言葉を聞いて、月夜は自分が重大なことを忘れていたことに気づいた。月夜が倒れている間に起こった楓の豹変、微かに保たれていた意識の中で、月夜はそれを覚えていた。

「さて、では始めるとしよう・・・貴様らを私の体に戻せば、私は完全な力を取り戻す。そうなれば、人間に力を行使することもおそらく叶うであろう」

「待て待て待て！ちょっと待て！！」

月夜の抑止の言葉に、身構えようとしていたルシファーは不愉快そうに顔を歪めた。

「まだ何かあるのか？それとも、今更になって命が惜しくなったか？」

「楓のことだ、どうしてあの時、楓は豹変したんだ？」

月夜の言葉に、楓は体をビクンと震わせた。どうやら、思い出したくもないようだ。

「ふん、簡単なことだ。その女の中には、我が主、フュリア様の魂があるのだから」

「・・・?!?!?!」

ルシファーの言葉に、三人は驚愕の表情を浮かべた。全く予想もしていなかったその言葉に、リミーナと楓は血の気が失せて呆然としている。そんな中、月夜はかつて葉月に言われた言葉を思い出していた。

『前世の魂が好意を抱いた魂は、その肉体が滅びて次の肉体に移つても、かつて好意を抱いていた魂に惹かれる』

俺が楓を好きな理由は・・・それなのか？自分が考えたことに一瞬

愕然とした月夜だったが、すぐに頭を振ってその考えを振り払った。そんなことは、絶対にない、そう、強く思いながら。

「私の力が戻ったあかつきには、人間を滅ぼし、その強烈な死のエネルギーを以ってして彼女を蘇らすつもりだ！私には、それが出来る」

そして、ルシファーが言うその時はもはや目前だった。歓喜に打ち震えるように、己を祝福するように、ルシファーは両手を頭上に掲げ、今は見えない空を仰ぐ。

「・・・させねーよ、絶対に」

ルシファーのかたい決意に真っ向から挑むように、月夜も強い覚悟でその言葉を口にした。

「うん、私だって、そんなことさせない。あなたの好きなようになって、絶対にさせない」

幼いながらも、リミナーもまた、強い覚悟でその言葉を口にした。

「ならば、力づくでも止めてみせよ。貴様らにそれが、出来るのならな！」

絶大な自信を持って、ルシファーは叫んだ。場の雰囲気は、重苦しい物に切り替わる。そこには、今までのしんみりとした空気は微塵もない。譲れない信念をかけて、今、壮絶な戦いが始まるうとしていた。

(さて、どうすっか・・・)

月夜ははまだ倒れている葉月に目配せした後、目の前にいる敵を睨み付けた。葉月にまだ聞きたいことがあった月夜は、なるべくなら葉月への被害は避けたかった。しかし、どうにもそういうわけにはいかない。仕方なしに、考えられる範囲で最善の方法を月夜は口にした。

「楓、葉月を抱えて部屋の隅に避難してくれ」

「うん」

即座に頷いて葉月のそばに駆け寄ろうとした楓を、ルシファーは声で制止した。

「その必要はない。なぜなら私はここにいる全員を殺す気はないのでな。貴様ら二人には、巻き込まれぬよう防壁を張っておく」

余裕の態度、と見てとられてもおかしくない言葉を言い放ち、ルシファーは軽く目を瞑って何かを念じた。先ほどのように、楓と葉月の周囲に透明の薄い膜が張られる。見た目はいまいち頼りないが、その効果のすごさは傷一つない壁や長椅子を見れば分かる。

「随分と余裕なんだな、二人を護りながら、俺ら二人を相手にしようなんて」

「うん、その余裕の態度、たつぷり後悔させてあげないだめだね」  
睨みつけながら言う二人に、ルシファーは侮っている気持ちを隠し  
もせずに言う。

「あの男に勝てぬようなやつらが、己の力量を見誤るな」  
「なら、その体で味わってみなさいよ！」

リミーナは言い終えるよりも早く、右手をルシファーに向けて突き出していた。リミーナの背中からは真つ白い一對の翼が姿を現す。そして、翼から流れ出る強い力は肩を通り腕を通り・・・突き出した右手の前に収縮されていく。右手の前に現れた小さな光輝く玉は、徐々に大きさを増し・・・そして、それ自体が敵を貫く弾丸となりルシファーに撃ち出された。距離は十数メートル程、そんな距離は無いにも等しく、わずかコンマ数秒でルシファーに弾は襲い掛かった。しかし、その弾が届くよりも早く腕を突き出していたルシファーは、自分の手よりも幾分大きいそれを受け止め握りつぶした。弾は、ばら撒かれたた宝石のように光りを放ちながら地面に落ちて消える。

「この程度か？」

「言ったでしょ？後悔させてあげる、つて！」

リミーナが叫んだ次の瞬間、ルシファーの体は数十、数百もの光の針に襲われていた。消えるはずだった弾が撒いた粒は、その一つ一つが小さく鋭利な針に変わり、磁石に吸い寄せられるかのようにルシファーの体に突き刺さる。



「つぐ・・・」

今まで出したことのない乾いた嗚咽をもらしながら、ルシファーはひざをついた。一つ一つの威力はルシファーにとってさほどでもない。しかし、あまりの多くの針はそんなルシファーにもダメージを与えた。それでも、彼の体からは血が一滴たりとて流れることはない。

「へえ、お前結構強かったんだなあ」

お気楽な口調の月夜だが、ルシファーを見据えるその瞳は全くと言っていい程笑ってはいなかった。

「当たり前でしょ？だって・・・生まれてこの方、私は一度も本気を出したことがないんだもの」

リミーナもまた、月夜同様にルシファーから視線を外さずに言う。

その瞳も、笑いの色は微塵もなかった。二人の瞳に宿っているのは、怒りでも哀しみでもなく、ただ目の前の敵を排除する、機械的なものだけだった。

「出したことがないんじゃない？俺も、そうだしな」

「そうだね・・・私は、私自身の力がどこまで行くのか知らない。知りたいとも思わない」

敵を前にして、悠長に会話している二人だが、その間に流れる雰囲気には隙など全くなかった。

「ふん・・・随分と、余裕の態度では、ないかね？」

ルシファーは、息も絶え絶えに二人にそう言った。ひざをつき、かなり弱っている感じが見て取れたが、威厳や重圧感は失われてはいない。

「余裕？馬鹿言うなよ・・・こえーんだよ、お前が」

「そうね・・・あっさりやられて惨めな姿を晒すほど、あなたも馬鹿じゃないでしょう？卑怯な手を狙ってないで、本気を出したらどう？」

ルシファーが何かを狙っていることを見破っている二人は、各々そ

う口にした。

「ふふふっ・・・貴様らのことを侮っていたのは、素直に謝るうではないか」

笑いながら、ルシファーは立ち上がった。そこには、今までの弱った素振りは一つとしてない。

「この聖域は、元より凄まじい程の強度を誇っている。しかし・・・今の私が本気を出したのなら、傷つけてしまうおそれがあるだろう」  
「だから、俺らが飛び掛ったところを狙って一瞬で終わらせようとしたんだろ？」

月夜の問いに、ルシファーは笑った。心の底から楽しそう笑うその姿は、体に突き刺さったままの光の針とあまりにも似合わず、見る者全てを恐怖に叩き落すようなものだった。

「よく分かっている、よく理解している。さすがは人間の中での最強兵器だ、だが・・・」

所詮、人間の血が混じった紛い物だ！

己の中にある力を全て搾り出すかのように、ルシファーは叫んだ。ビリビリと空気が振動し、同時に強い死の匂いを辺りに撒き散らす。己の中の力が自身を食い破るかのように、ルシファーの姿は徐々に変貌をとげる。背中を食い破って出てきたかのような白と黒の一对の巨大な翼は、見る者を絶望に落とすような禍々しい光を放っている。赤い瞳は、血を連想させるほど怪しく光り輝き、鋭いという言葉さえ陳腐に聞こえてしまうほど、その瞳は鋭利なナイフのようにとがる。それは一言で言うのなら、獣だった。人の形をし、禍々しい巨大な翼を生やした人の形をした血に飢えた獣・・・その姿を前に、月夜とリミーナは息をすることすら忘れ、身動き一つすることができなかった。

「・・・さて、お望み通り、殺し合いを始めようじゃないか！」  
理性すら残っていないかのように、抑揚のない声でルシファーは叫ぶ。その叫び声だけで、二人は心臓を抉り取られたかのように感じた。

「どうした？来ないのならこちらから行くぞ」

瞬時にルシファアの姿が揺らぐ、やばい、と考えながらも、二人は強すぎる恐怖に縛りとられ、動けずにいた。しかし、ルシファアは動かない。二人の視線の先にいるルシファアは、いまだ超然とそこに立っていた。どさ、という何か重い物が、床に落ちる音だけが二人の耳に届いた。

「あ……いや……いやあああ！」

不意に、楓の叫び声が聞こえる。その言葉によろやく我を取り戻した月夜とリミーナは、突然強い痛みで顔を歪めた。

「随分と鈍いな、これならば、様子を見る必要もなかったか」

月夜はルシファアから視線を外さずに、痛みを感じた右腕に左手を伸ばした。しかし、そこには今まで確かにあった右腕がない。肩口から先が、抉り取られたかのように体についていなかった。リミーナも同様に、左肩から先がなくなっていた。腕という名の詮がなく、なった肩からは、一息遅れて噴水のように血が噴きだした。

「なん……だよ、これ……？」

何が起きたのか分からずに、月夜はぼつりと呟く。その声は、震えていた。腕がなくなっただけでは、二人にとって致命傷にはならない。しかし、気づかない内に腕を切り落とせることが出来るのなら、気づかない内にその命すらも消せる、それ程の力量差に、二人はただ愕然とした。

「無益な争いはやめようではないか、抗うだけ無駄というもの」

呆然としている二人に、ルシファアは最後通牒を告げた。これ以上やるのなら、死ぬ一歩手前までやる、そう脅しているのだった。

「あ……ああ……」

リミーナはただ呆然とそう呟くだけだった。声は震え、実年齢通りの幼さでその身も恐怖に震えている。

「……っざけんな！」

対照に、月夜はそう叫んだ。体を覆いつくしてしまいそうな恐怖を無理やり抑え付け、強く叫ぶ。リミーナがまともに戦えない今、兄

である自分がやらなければいけない、月夜は自分に強く言い聞かせた。

「腕の一本がなんだ・・・力の差が、どうしたっていうんだ!？」  
月夜は残った左腕を上げ、手をルシファーに向ける。リミーナが先ほど放った様な弾、光の弾ではなく黒い弾を作り上げ、それをルシファーに向けて放った。

「温いわっ!」

ルシファーが叫んだ瞬間、空気が歪む程の気迫とも超音波とも言えない不思議な何かが発生した。それは月夜が撃ち出した黒い弾をかき消し、その奥にいた月夜とリミーナさえも吹っ飛ばした。

「うあっ・・・」

「がっ・・・」

数メートル吹っ飛ばされ、受身をとることが出来なかった二人は地面に叩きつけられ嗚咽を漏らした。そんな二人を、ルシファーはつまらなさそうに見下している。それは、絶大な力を持つものだけが許される、はるかな高みからの蔑みの目だった。

「終わりだ、もう、抵抗する気力すらあるまい」

ルシファーの言葉通り、二人は起き上がることをせず、その顔には深い絶望の色が浮かんでいる。抵抗をするだけ無駄、そんな思考が二人を支配していた。

「最後の短い時間を、精々惜しむが良い」

ゆっくりとした歩みで、ルシファーは二人の元へと歩いていく。彼が歩く度に、周りの空気はまるで塵気楼が起きているかのようにゆらゆらと揺らいでいる。それは神秘的に見えると同時に、絶対的な恐怖を見る者に与えた。

「来ないで・・・やだ・・・!」

倒れたまま、リミーナはそう呟く。それは意識して出したものではなく、死を感じた全身が本能的にその言葉を出したのだ。カツ、カツ、と、ルシファーの足音が一步步近づく度に、リミーナは震え、涙を流した。楓もそんな光景を見て、何かを叫びながら自分を覆う防

壁を叩いているが、効果の程はない。死と絶望が場を支配する中、一人だけ、不意に口元を歪め、笑った男がいた。

「ははは・・・あつははは！」

仰向けに倒れたまま、虚空を見つめていた月夜が突然笑い出し、ルシファーは怪訝な顔をした。

「なんだ、ついに気が狂ったようだな」

「つき・・・や？」

「・・・おにいちゃん？」

三人の声を無視し、月夜は笑い続けた。その光景は、傍目から見ればルシファーの言うとおり、気が狂ったかのようにしか見えない。

「ふん、死の間際だ、狂ってしまった方が楽であろうよ」

だがしかし、とルシファーは続ける。その姿は、既に月夜のすぐそばに立っている。

「醜いな、貴様から終わらせてやろう」

ルシファーの手が月夜へと伸びる。もはや声を上げることすら出来ず、楓とリミーナは震えながらその光景をただ見ていることしか出来なかった。それは永遠に感じられるような時間で、一瞬でもあるような時間だった。ルシファーの手が月夜に触れる瞬間、楓とリミーナはとっさに目を閉じた。殺されることはない、しかし、月夜がルシファーに取り込まれて消えてしまふ、二人はそれを見るに耐えなかったのだ。

「ぬ！？」

パンツ、と乾いた音が響いた。狂ったように笑っていた月夜が、ルシファーが自身の体に触れる前にその手を叩いたのだった。突然の出来事に、ルシファーは一瞬だけ動きを止める。しかし、すぐに煩わしげに顔を歪めた。

「この期に及んで、まだ抵抗を・・・」

そこで、ルシファーははつとした顔になった。狂うように笑っていた月夜は、もはや笑ってなどいない。それどころか、その表情には人間味というものすらなかった。機械のような無表情の顔、それに

貼りつけられた異常なまでに闇に包まれた瞳……ルシファーは知らずの内に、恐怖を抱いていた。私が恐れている……だと？

「そんな馬鹿なことが、あるはずがない！」

ルシファーは叫びながら、月夜の頭目がけて手を振り下ろした。それは先ほどのように触れようとするものではなく、叩き潰すかのような鋭さを持っていた。ドゴン、というすさまじい音が響く。しかし……それは月夜の頭を砕いた音ではなかった。

「なん……だと？」

ルシファー自身、何が起きたのか理解できていなかった。気づいたら、彼は十数メートルも離れた石像に強かに背をぶつけ、倒れていたのだから。激しい音に、楓とリミナーはおそろおそろ目を見開く……そして、驚愕の表情を浮かべた。

「……え？」

二人の声が重なる。二人の視線の先に立っていたのは、紛れもなく月夜だった。しかし、その体から立ち昇る霧囿気は、どす黒い闇に覆われている。いや、それは闇などという言葉が通じるほどの物ではなかった。広大に広がる宇宙の中の、更に深い闇の部分……言わば、無限を孕んだ凶悪過ぎる程の物体、ブラックホールのような霧囿気がそこにはあった。

「おはよう初めましてそしてさようなら」

抑揚のない声で月夜は言った。それは月夜の口から発された言葉だったが、まるで違う誰かが言っているものにしか聞こえなかった。

「つきや……？ねえ、どうしたの？ねえ！？月夜！？」

自分が知っている月夜とあまりにも遠くかけ離れた今の月夜を見て、楓はとつきにそう叫んでいた。月夜は楓を一瞥したが、すぐにその視線をルシファーに戻した。一瞬だけ目が合った楓は戸惑いながらも悟った。そこにいるのは月夜ではない、と。インフィニティと呼ばれていた頃の月夜と、一度だけ顔を合わせたことがある楓だったが、今の月夜はインフィニティと呼ばれていたあの頃ですら可愛く見えてしまう程凶悪で……そして、人間味がなかった。

「ひっ……ああ……っ」

近くにいるリミナーは、先ほどルシファーから感じた重圧感よりもはるかに重い物を感じ、ガタガタと震え続けている。

「貴様は……貴様はなんだ!？」

吹き飛ばされたルシファーは、自身の恐れを認めようとせずに問うた。月夜の声で、そいつは答える。

「分からないどうしてここにいるのかそんなことは分からない」  
抑揚のない声で、そいつは続ける。

「でも僕は生まれてしまった生み出されてしまっただから無くさないといけない全てをだつて僕は無だから限りある全ての有限を無に変えないといけないから」

終わらせよう。まるで全ての生き物に、全ての存在に告げるように、そいつは超然と言い放ったのだつた。

## 終わらない因果（後書き）

・・・懇切丁寧に説明してくれる敵つつつのもいかなものかと思  
いますし、それに対して問答無用でツッコミ入れまくってる主人公  
つつつのもどうかと思いますが・・・それはさておき、いよいよ大  
詰めの感じがしてきました。どっかの誰かさんの台詞、句読点な  
くて読みにくいと思いますが、気にせずに読んでいただければ幸い  
です。



## 止むことのない雨の下で

この世界には、対になる言葉がいくつもある。例えば光と闇、光がなければ闇はなく、闇がなければ光はない。では、有と無だとうなるだろうか？考えるまでもなく、有る、ということがなければ、無い、ということもない。しかしそれはあくまでも、人間の観点から物事を捉えた結果でしかない。もしこの世界が始まっていなければ？初めから無しか存在しない世界であったのなら？その世界に有はなく、ただ無しかない世界、完全なる無の世界だっただろう。有が存在するこの世界で、完全なる無など存在してはいけない、有るわけがない・・・はずだった。

「無・・・だと？」

ルシファアの漏らした言葉に、自分自身を無だと言い放った月夜の姿をしたそれは、ただ黙って頷いた。

「笑わせてくれるではないか・・・なら、なぜ貴様は存在している？」

ルシファアが言ったことはもつともだった。無が存在している、それは矛盾以外の何者でもない。

「分からないと言ったでも僕はここにいる」

抑揚のない声で無と名乗る少年は続けた。

「元より僕が生まれた理由なんてあったとしてもいらないそれならば僕の存在自体無いということに等しい」

存在理由がなければ、存在していないことと同じ・・・残酷とも言えるようなことを、無は平然と言ったのけた。

「・・・ならば貴様は、私には勝てぬ！」

ルシファアは強く叫んだ。その言葉は驕りからでたものではなく、ただ単純に、明確な意志を持つ者と持たない者の差がそこにあるこ

とを知っていたからだ。時として、強い意志を持つ者は、己より強者に打ち勝つこともある。

「貴様ごときに・・・存在理由すら否定する貴様なんぞに、私は負けない！」

ルシファーは言い終えるよりも早く、立ち上がり、そして無に對して攻撃を放つ。ルシファーの両手から撃ち出された眩い光と漆黒の闇の太い帯が、螺旋を描きながら真つ直ぐ無へと伸びる。常人には見えない速度、おそらく月夜ならば避けれない程の攻撃・・・無はそれを避けることもせず、ただぼんやりと立ってそれを見ていた。二本の帯が無に当たる、そう誰もが思った直後、二本の帯は突然姿を消した。まるで初めからそこに何もなかったかのように、唐突に消えたのだった。

「無を消すことなんて出来ないなぜなら僕は最初から無いのだから」三人が・・・ルシファーですら、呆然としている中、無機質な無の音が響く。その声には、はつ、としたルシファーは、すぐさま次の攻撃を放つ。しかし、結局それも無駄に終わった。

「くっ・・・ならば、直接叩くのみ！」

二度目の攻撃が消された瞬間、ルシファーは一瞬の内に距離を詰め殴りかかった。その拳には先ほど放った光と闇の帯が巻き付き、地面ですら軽がると決れる威力を持っていた。

「無駄だつて言ってるのに」

拳が当たる瞬間、そう呟いた無にルシファーは恐怖した。しかし、速度のついた拳は止まるはずもない。振り下ろされた拳は無に当たった。月夜の体の心臓の部分を、抉り抜いた、はずだった。無に触れた瞬間、ルシファーはなんとも言えぬ奇妙な感覚に襲われた。拳が、腕が、無に触れた部分が飲み込まれるような感覚・・・ルシファーは肩口程まで胸に腕を差し込んでいた、そのはずが、月夜の体は後ろに突き抜かれてはいない。

「下手に触れると大変なことになるの先に言っておけば良かった？」  
「貴様、何を・・・!？」

奇妙な感覚を携えたまま、ルシファーはとつさに腕を引き抜いた。引き抜いたその腕を見て、ルシファーは絶句した。無に突き入れた腕が、なくなっていたからだ。切られたわけでもなく、千切られたわけでもない。文字通り、肩から先が消えていた。骨や内側の肉などが肩から覗くにも関わらず、出血はなかった。

「僕は争いを好まないでも消さないといけないだからさようなら」ルシファーが我を取り戻し、無から離れようとした時には既に遅かった。ルシファーの周囲に、薄い水色の膜が張られる。それは先ほどの防壁に似ていて、外からは決して破れない。しかし、用途は全くと言っていい程逆だった。

「な、なんだこれは!？」

ついに焦りの色を浮かべたルシファーが叫ぶ。

「名前なんて無い」

無機質な無の声、しかし、それは笑っているようにも泣いているようにも聞こえた。膜に包まれたルシファーは、自分の体に起こりつつある異変に体を震わせた。

「出せ！私をここから出せ！」

ルシファーは威厳も何もない声で叫ぶ。無は黙って首を振る。徐々に、ルシファーの体が透明になっていく……それはまるで、空気に溶け込む煙か何かのようだった。

「こんなところで……私は、私はあ……!」

それがルシファーの最期の言葉だった。文字通り、彼は消えてなくなった。異能の力も、夢も理想も、ただ初めからそこに何も存在していなかったかのように、彼は残酷な終わりを迎えた。

「次は何に消えてもらおうかな」

無が吐き出した言葉はそれを更に超える程の残酷さだった。自分がさつきまで対峙していた男などもはや知らない、とでもいうように言っただけ、そして次の目標を探すように首を動かす。一部始終を黙って見ていた楓とリミーナは、無に見られるたびにその表情を緊張に染めていく。

「一人ずつ消すのもめんどくさいしこの世界ごと消しちゃおうか」  
抑揚のない声で、無はそんなことを呟いた。近くににいるリミーナは、あまりの恐怖で失神寸前になっている。

「怖がる必要はないよどうせ全部消えるんだから」

リミーナを見ながら、無表情で無は言う。しかし、そこで何かに気づいたようにポツリと言う。

「怖いなら一足先に消してあげたほうがいいかな」

「・・・っや！」

リミーナはとっさに逃げようとした、しかし、あまりの恐怖に足が動かなかった。無は、そんなリミーナに近づいて触れようとする。そこには、優しさも憎しみも、感情というものが何一つなかった。

「いや・・・やめて、やだ・・・やだあ!!！」

「待ちなさいよ！」

子どものように震えながら泣いているリミーナは、突然割って入ったその声の主を呆然と見つめた。無も、自然と声の方向に目を向ける。声の主・・・楓は、毅然とした態度で立つて無を見つめていた。「リミーナちゃんを消すぐらいなら・・・先に、私を消せばいいじゃない！」

震えながらも、凜とした声で楓は言う。

「結局消えることに変わりはない順番なんて無いも同然」

でも・・・と、初めて言葉を区切った無は、続ける。

「お前がそう言うなら先にお前を消す」

既にリミーナに興味をなくしたかのように、無は楓に向かって歩き出した。距離は数十メートルもなく、楓が消されてしまうまで数十秒もかからないだろう。

「私は・・・お前なんて名前じゃない、楓。如月楓だよ」

恐怖で足が震えそうになりながらも、楓は強くそう言った。なぜそんなことを言ったのか、楓自身にもよく分かってはいなかった。ただ・・・月夜の姿をしたそいつに、他人のように呼ばれることが耐えられなかったからかもしれない。

「名前なんて・・・必要無い」

歩きながら、無は答える。月夜の声で、月夜の姿で、感情もなくただそつ口にする。

「名前は必要だよ・・・だって、名前がなかったら私は・・・もう二度と、好きな人を呼ぶことが出来ないから・・・」

楓の声は、あまりにも切なく、あまりにも哀しい感情が、ひしひしとこもっていた。それを全く意に介さず、無は歩きながら言う。

「そんな心配はすぐに消える・・・存在と共に」

楓に対する無の口調は、ルシファーやリミーナにかけられていたものとは明らかな違いがあった。しかし、無自身それには気づいていない。

「どうせ消えてしまうのなら・・・私は、最後まで好きな人のことを考えていたい・・・その人の名前を、呼んであげたい」

強い意志を持って、楓は言う。その声には、目に見えない強さがあった。それは誰もが持てる強さではなく、同時に誰もが持っている強さだった。

「勝手にすればいい・・・僕はお前を、楓を消す」

楓の名前を呼びながら、無は楓の目の前で立ち止まった。手を伸ばせば、すぐに触れられる位置だった。

「それでも、いい・・・でも、最後に聞かせてよ・・・あなたの、名前は？」

切なくも強い瞳で、楓は無を見つめる。

「名前・・・僕は無だから、そんなもの存在しない」

無機質な声、それでもその中には今までの無とは違った何かが含まれている。手を伸ばせばすぐにでも消していけるはずなのに、無は手を伸ばさなかった。

「嘘・・・聞かせてよ、あなたの名前を・・・私が好きな人の、名前を」

楓の瞳から、涙が一筋流れ落ちる。それでも、顔をそらすことも目をそらすこともせずに、真っ直ぐ無を見つめ続ける。

「名前・・・名前・・・？ないんだよ・・・僕には、無だから、存在してないから、名前なんて・・・ないんだよ・・・！」

無は取り乱したように答える。まるで責められているかのように、無いはずの存在を否定されているかのように、無感情に無表情に・・・自身の中の何かを押さえつけているかのように、叫ぶ。

「あなたの名前は・・・」

「うるさい！うるさいうるさいうるさい！」

無は腕を振り上げた、その腕の周りにはうっすらと薄い膜がまとわりついている。振り下ろせば、無の目の前にいる楓は間違いなく消えるだろう。

「月夜、如月月夜。私が・・・私が・・・」

「うるさいんだよ！！！」

腕が、振り下ろされる。楓は微動だにせずそれを見ながら、叫んだ。「私が愛してる人だよ！」

ズガンツ、という音が響いた・・・楓を消すはずだった腕は、そのすぐ横に振り下ろされ、地面を大きく削った。リミナーも、覚悟を決めていた楓すらも、その光景を呆然としながら見入った。

「・・・楓・・・月夜・・・なんだよ、それ・・・わかんねーよ・・・わかんねーよ！」

無は叫ぶ。その表情は、泣いているように見えた。

「月夜・・・泣かないで・・・」

「その名前で呼ぶな！僕は泣いてなんか・・・」  
再度腕を振り上げようとした無を、楓は抱き締めた。自分が消えてしまうよりも、例えそれが月夜じゃなかったとしても、月夜の姿をしたそれが、哀しそうな表情をしていることに楓は耐えられなかった。強く、強く・・・ただ、抱き締める。無はわずかに動いたが、すぐに止まり・・・そして、呟いた。

「・・・生まれて来なければ良かった。ずっと独りで・・・そう思ってた・・・でも・・・ありがとう・・・さよう、なら」

最後の最後に涙を流し、無は別れの言葉を告げた。するり、と力が

抜け、無が倒れそうになる。倒れないように、楓は精一杯、その体を支えた。愛する人の体を、愛しく思いながら、ただ支え続けた……。

戦いを終えた四人（月夜と葉月は意識を失っている倒れているが）は、ぐったりとした感じで長椅子に腰掛けていた。左から順に、葉月、月夜、楓、リミーナと並んでいる。楓は月夜の頭を膝に乗せ、心配そうな顔で覗き込みながら、時たま頭を撫でている。月夜の腕は既に再生しているため、そちらにはあまり気を向けてはいなかった。

「やっぱり、楓お姉ちゃんはすごいと思う……」  
そんな楓に、突然リミーナはそう言った。その声には、純粹に感嘆の色が含まれている。

「そんなことないよ、月夜やリミーナちゃんが戦っている時に、私は何一つ出来なかったんだから……」

それは謙遜の念から出た言葉ではなく、本当にそう思ったからこそ楓の言葉だった。

「うん、楓お姉ちゃんは戦ってたよ……なんていうのかな、目に見える力とかじゃなくて、気持ちの戦い。心配したり、信じたり……それが人としての真の強さだと思う」

無と名乗る少年に対しての啖呵、あれは月夜を信じていなければ出来なかったことだとリミーナは思った。しかし……

「私は弱いから、それぐらいしか出来ないの。何よりも、私が優先したのは私自身の気持ちだから、全然大したことじゃないよ」  
楓はそれを否定した。

「お姉ちゃんの気持ち？」

「うん、月夜が泣いているのが嫌だった、傷ついているのが嫌だった……死ぬのは怖いし、逃げだしたかったけど……あんな哀れそうな月夜、私には耐えられなかった」

リミーナの目から見た無は、決して哀しそうではなかった。それどころか、感情そのものがなかった。それでも、楓にはそれが哀しそうに見えたらしい。どれだけ絆が深ければそんな芸当が可能なのか、リミーナには不思議でたまらなかったのと同時に、それは羨ましく思えた。

「やつぱり、すごいことだと思う・・・ちよつと、妬げちゃうな」  
ポツリと呟くりミーナを、楓は何も言わず空いている腕で抱き寄せた。一瞬気恥ずかしそうな顔をしたリミーナだったが、すぐに表情を崩し、甘えている子どものように楓に寄り添った。そこで、突然声が響いた。

「随分と仲が良くて、羨ましい限りだね」

楓とリミーナは一瞬ビクツとしてから、声の主を見遣る。月夜を挟んだ楓の反対側、そこには、いつもながらの微笑みを浮かべた葉月が座っていた。

「あの男がいないってことは、月夜がやってくれた、ってことではないのかな？」

のんびりとした口調で言う葉月に、リミーナは皮肉気に返した。

「そうよ、あなたが寝こけている間に全部終わったわよ」

「やれやれ・・・随分と嫌われたみたいだね」

首を振りながら言う葉月は、言葉とは裏腹に相変わらず微笑みを崩さない。

「葉月君、色々聞きたいことがあるんだけど・・・いいかな？」

楓の言葉に、葉月は頷いた。

「楓にならなくても答えるよ、スリーサイズ以外ならね」

どこで覚えたのか、そんな冗談混じりの微笑みは、次の楓の言葉にすぐに打ち消されることとなった。

「無つて、知ってる？」

「・・・ああ、知ってるよ。そうか、目覚めちゃったんだね」

真顔になった葉月は、微笑んでいるよりもはるかに美形で一瞬ドキツとした楓だったが、今はそれどころではなかった。



「葉月君は知ってるの？あの人、ルシファーっていう人は知らなかったみたいけど・・・」

「それはそうだよ、僕はあいつの分身であると同時に、調律者に遣わされし者でもあるのだから」

「調律者・・・？」

楓の問いに、いけないいけない、と言った様に葉月は口元を押さえた。

「僕としたことが、つい口を滑らしてみたいだね・・・調律者、またの名を超律者。それ以上は、僕の口からは言えない」

「こんなところまで来て隠し事？私が無理にでも喋らせてあげようか？」

そんな態度の葉月に、リミーナは脅すように言う。しかし、葉月はそれを気にした様子もなく言う。

「君には無理だと思うよ。まあ、知らないほうがいいこともたくさんあるよ・・・何より、月夜を含め、君達にはこれ以上足を踏み入れて欲しくないんだ」

その声には、焦りや心配、といった色が強く浮き出ていた。気になりはした楓とリミーナだったが、なんとなく、聞けるような雰囲気ではなかった。

「・・・じゃあ、葉月君の目的は何？」

話題をそらす様に楓は聞いた。あの時、葉月は説明をする直前で気絶してしまったのだ。楓はそれも、ずっと気になっていた。

「それならいいかな・・・そうだね、僕の目的はあの男を殺すことさ。その為に、君達を利用してもらったよ」

悪びれた様子もなく、葉月は平然と言う。

「だから私達をここに連れて来たの？月夜を殺さなかったのもその為？」

「ああ、そうだよ」

パンツ、と乾いた音が響いた。楓が、葉月の頬を引っぱたいた音だった。突然の出来事にも関わらず、葉月は顔色一つ変えず、そして

避けることもしなかった。

「あなたは私達を利用するために、月夜にひどいことをしたの？こんな危険な所に誘い出したの！？」

楓の脳裏に、先ほどの月夜の哀しそうな姿が思い出される。それは無であり月夜ではなかったが、体が一緒なのであればそれは月夜自身なのだ。楓の糾弾に、葉月は顔色一つ変えることなく、声を荒げることなく、平然と、いつも通りに言った。

「そうしなければ世界が滅んでいた。まあ、アレがいる限りはその可能性は極めて低いけど・・・」

「世界が何！？あなたは世界のことなんて思ってもいない癖に、自分自身の為に月夜を利用した癖に！」

自分自身のことよりも、月夜のことに対して怒る楓に、葉月は、それがどうした？と言わんばかりに言う。

「悪いかい？」

パンツ、と、その言葉に、楓の二度目の平手が飛んだ。

「悪いに・・・決まってるでしょ！？」

世界よりも何よりも、楓は月夜が大事だった。それは我がままなことなのかもしれないが、人間にとって当たり前の感情なのかもしれない。結局のところ、世界を救うという非現実的なものより、好きな人という身近なものの方が、人間にとっては大事なのだから。「本当は、あいつが隙を見せた時点で僕が終わらせるつもりだったんだけどね・・・少し、見くびっていたみたいだ」

そこで初めて、葉月は反省したような声を出した。それは葉月の本当の気持ちだったようだ。

「だからって・・・」

「すまないとは思ってるよ。何より、僕自身、まさか無が目覚めるとは思っていませんでしたから」

葉月の言葉に、楓は胸が締め付けられるような感覚を抱いた。

「・・・無って、一体何？」

「あれは、偶然にもこの世界に生まれてしまった異分子さ。有限の

力を持つ人間と、ほぼ無限の力を持つ天使を混ぜ合わせた結果、あれが生まれてしまったんだ」

葉月の言葉に、楓とリミーナの二人は固唾を呑んで聞き入った。

「有限の肉体に無限たる物を入れてしまえば、それは矛盾にしかならなくなる。・・・言葉つてのは不思議な物でさ、彼の昔の名前はインフィニティ、正に、無限」

息を軽く整えながら、葉月は続ける。

「月夜は完全なる無を生み出す最高の状況で生まれてしまったんだよ。故に、矛盾を多く孕んだ体の内に、無純を生み出してしまったんだ。・・・偶然にも彼の中に生み出された完全なる無、あれは世界どころじゃない、銀河系だろうが宇宙だろうが、有るものを全て無に還す力があるんだ」

言葉や名前には力がある。言わばそれは言霊だ。有限の人間に、無限である天使を混ぜ、そして生まれた子の名前はインフィニティ・無限。言霊、矛盾、無限、無純・・・全ての要素が複雑に絡み合い、偶然にも生まれてしまった、それが完全な無という存在だった。しかし、それならば・・・？

「リミーナちゃんにも、その可能性はあつたってこと？」

楓のもつともな疑問に、葉月は首を振った。

「それはまずないね。同じ造り方をしたところで発生する確率は皆無に等しいし、何よりその彼女と月夜は同じ造られ方をしていないのだから」

かつて、ティアーナが言っていた言葉、

『単なる物質であれば比率が一緒であれば問題ない。しかし、生物ならそれは違う』

葉月の言葉は暗に、無も生物だ、と言っているようだった。

「まあ、過ぎたことは終わりにしよう・・・おそらく、無はもう目覚めることはないと思うし」

「・・・？どうして？」

楓の疑問に、葉月は微笑みながら返した。

「無は、一度目覚めたら最後なんだよ。それこそ、世界が終わる。でもそれがもう一度眠りについたってことは、何かに満足した、ってことなんだろうね」

おそらく、世界を無くしても、全てを無くしても、無が満足することなどなかっただろう。それならば、なぜ・・・？楓の疑問を感じ取った葉月は、答えた。

「無は感情を持たないものだよ、何かを考えることはあってもね。だからこそ、一度でも感情を持つてしまえばそれは無じゃなくなる・・・よほどのことが無い限りは、それは無いんだけどね」

生まれてこなければ良かった、無は確かにそう言った。考えることはあっても感情はなく、泣く事も絶望する事もなく、ただ在っただけの存在・・・それに感情を与えたのは、独りは哀しいと思わせたのは、紛れもなく楓だった。

「私のせいで・・・彼は消えちゃったのかな・・・？」

殺されそうになったにも関わらず、楓は相手を想う様に呟く。

「それは違うよ。無は殺戮するために存在してたわけじゃない、存在理由すらなく、正しく全てを無に還す為にただ、そこに在っただけだから・・・解放された、みたいなものかな」

在ることに縛られていた無、どこまでもその存在は矛盾していたが、もしかしたら彼は存在そのものを拒否したかったのかもしれない。

「っと・・・ゆっくり話してる暇、ないんだった」

思い出したように、急に葉月は表情を切り替える。そこには、先ほどまでの気落ちしたような表情は一つとしてない。楓とリミーナのいぶかしむ視線を受けながら、葉月は言う。

「僕にはまだ、やるべきことがあるんだ」

「やるべき・・・こと？」

「まさか、また良からぬことを企んでるんじゃないでしょうね!？」二人に言われ、葉月は困ったように頭をかく。

「君らには、決して害がないことだよ。それは約束する」

真摯な物言い、しかし表情は微笑んでいる。その笑みのうそ臭さに、

楓はなんとなく不安な気持ちになった。

「葉月君・・・一体、何をやる気なの？」

「説明してる時間はないんだ。一言で言えば、仕事、かな・・・道具としての、部品としての、最後の仕事」

にっこりと微笑む葉月。その言葉の裏にある何かを感じ取った楓は、葉月に声をかけようとした。

「最後の仕事って・・・」

「それじゃ、お別れだ。ああ、月夜には無の事とか言わないでいたほうがいい、彼も傷つきやすい繊細な・・・人間だからね」

じゃあ、ばいばい、最後にそう告げた葉月は、いまだ何かを言おうとしている楓とリミナーに手をかざした。ゆっくりと、空気に溶け込むかのように楓とリミナー、そして月夜は葉月の前から姿を消していく。名残惜しそうに三人が消えた空間を見ながら、葉月は呟いた。

「・・・ほんと、僕はどこまで行っても、所詮道化師でしかないんだよね」

葉月はしばし沈黙した後、唐突に高らかな声で笑い始めた。それは、哀しみ切なさ怒り憎しみ・・・人間にとって全ての負の感情を詰め込んだような笑いだった。葉月の微笑みの下に隠された、あまりにも醜いそれらの感情、しかしそれは、うそ臭さが一つとしてない人間としての葉月にも見えた。

「・・・くす、それじゃ、行こうか・・・地獄へ」

ひとしきり笑った後、すぐにその表情はいつもの物へと戻る。負の感情を押し殺した、微笑みという仮面を被った葉月は、三人同様に空気に溶け込むかのように姿を消した。

怒号や罵声、砲弾が飛び交う戦場に、一人の人間が姿を現したのはそれからすぐのことだった。いや、それは人間というよりは、醜く争う人間に神の鉄槌を下す為に降り立った、殺戮の天使のようだった。

た。外見は美しく純粹無垢な天使、されどその瞳は血のように赤い。背中には白と黒の一对の翼を生やし、神秘的な雰囲気と・・・そして、死を予感させる絶望を、見るものに与えた。

「今すぐ、戦争をやめるんだ！・・・さもなければ、僕は破壊の限りを尽くす！！」

一瞬、その生と死を孕んだ矛盾の天使の姿と、その声に殺し合いをしていた両軍は動きを止めた。しかし、我に返った彼らはすぐに目の前の敵を討つべく、各々が武器を構えた。日本軍とアメリカ軍、両者の間に降り立った天使を二つの軍はいぶかしむ心を持ちながらも、攻撃の手を緩めることなく、もはや宿敵となった相手の軍を攻撃する。

「やめろと言ってるのが・・・なぜ、分からない!？」

砲弾や怒号に勝る声で天使・・・葉月は叫びながら、両軍に向けて両手を振り上げ、そして振り下ろす。その光景は、まるで指揮棒を振るう指揮者のようだった。刹那、常人の目には見えぬ速度で、戦車や大砲などの兵器が粉々に破壊されていく。なるべく人間への被害を最小限にしようとした葉月だったが、破壊対象の数が多すぎるため、塵程の大きさまでは破壊できなかった。故に、壊れた兵器の破片や消しきれなかったは砲弾などは、自然と周囲にいる人間を巻き込む。ある者は腕が千切れ、またある者は爆発にその身を吹き飛ばされ、無残にも人から死体へと成り下がる。地獄絵図のようなその光景を、葉月は目を瞑ることなく見続けた。その瞳に狂気や歓喜などは微塵もなく、ただ死に逝く人々を見送るような、自身の罪を認めるような、そんな瞳だった。

「もう一度言う！争いをやめるんだ!!」

泣き叫ぶ者、怒り叫ぶ者、それら全ての人間を見回し、葉月はただ叫ぶ。一時の静寂、しかし、それを打ち破るように葉月の上空を幾数機もの戦闘機が空を飛び交う。そして、戦闘機からは数十もの物体が落下してくる。言わずもがな、それは爆弾であり、爆撃だった。数十もの爆撃を、葉月は避けることもなく腕を掲げ防壁を張り

巡らせ、防ぐ。数十もの爆撃は、爆音を放ちながら、葉月の周囲の人間を薙ぎ払う。そこには容赦も情けも、人としての感情も何もないように見えた。大量の煙で視界を覆われる中、今自分が身を置く場所がどのような場所なのか、はつきりと肌を感じた・・・それでも、その瞳は強く揺るがない。

「僕は・・・やめると、やめると言ってるんだ！」

煙が晴れる間もなく葉月は叫ぶ。しかし、返答は数百にもものぼる砲弾だった。空からの援護に便乗し、周囲で呆然としていた両軍はとどめと言わんばかりに煙に覆われた葉月目がけて攻撃を開始したのだった。数分もの間、煙が晴れることはなく、永遠に続くかと想われた攻撃はピタリと停止した。そして、両軍は煙が晴れる様を固唾を呑んで見守る。・・・そこには、多少の傷がついたものの、致命傷となるものは一つとない葉月が立っていた。

「もう一度言う、やめなければ・・・手当たり次第消しつくす！」

その声は、人が発することが出来る声量をはるかに凌駕し、広範囲に渡って届いた。

「ば、化け物だぁー!!!」

一人がそう叫び、葉月から逃げるように武器を放り出して逃げ始める。その後は簡単だった。なし崩し的に、我先にと、両軍は逃げ出していく。葉月はそれを追撃することをせず、すぐに次の戦場へと飛び立った。

「こんなもんで・・・いいか、な」

疲弊した声を上げた葉月は、倒れるようにしてその場に座り込んだ。合計、十数箇所起きていた争いを、ほぼ最初のやり方と同様に葉月は止めていた。

「前線を混乱・・・させれば・・・後は・・・情報がいつてる・・・司令部を叩いて、終わり・・・か」

我ながら、無茶なことしてるな・・・と葉月はぼやいた。十数箇所もの戦場を駆け巡った葉月の体は、ボロボロなどという表現が陳腐

に思えるほど凄惨だった。白く細いきれいな髪には血や鉄の粒などが混じり、赤く煤けてぐしゃぐしゃになっている。端整な顔は、血と泥に塗れ見る影も無い。そして何より酷いのは、その体だった。右腕は既になく、残った左腕は今にも千切れかかっている。腹部の四分の一程が抉り取られていて、こびりついてドス黒くなった血液を上書きするかのようになっている。足は無事なほうではあったが、それでも膝や太もも、脛といった箇所は無数の切り傷や火傷を負っている。目を閉じて倒れていれば、それは誰の目からも見ても単なる死体に過ぎないほど、葉月は深く傷を負っていた。

「ははは・・・天使だっていても・・・こんなもん、か」

確かに天使の力は無限に等しい、しかし、それは有限の体・・・人間の体を持っている限りは、完全な無限とは言えない。矛盾を無純に昇華してしまった完全なる無、はもはや別物だが、葉月はそのレベルまで行つてはいない。今の葉月の怪我では、再生と回復には時間がかかるが、それをしている余裕は無かった。

「さて・・・いきますか・・・はは・・・嘘・・・だよな？」

立ち上がり、不意に上を見上げた葉月はそう呟いていた。空を埋め尽くすほど・・・には程遠い数の戦闘機が、上空を飛んでいた。数は百にも満たない、しかしその数は、今の葉月には手に余りすぎる数だった。

「はははは・・・」

力なく、葉月は笑う。しかし、その瞳に諦めの色はない。無数にいくように思える戦闘機は、葉月に対し爆撃を行った。着弾、爆発、着弾、爆発・・・数十機から撃ち落とされる爆弾は、まるで雨のようだった。そう・・・止まない雨のようだった。

「血の雨・・・砲弾の雨・・・いつになったら・・・人間は、それを・・・止めようと・・・思う・・・のかな」

爆発の衝撃から辛うじて身を護りながら、煙によって見えなくなつた空を仰ぐ・・・もはや自身を護りながら動くことすら叶わない葉



月は、ただ煙と衝撃の中、空を仰ぎ続けた。

日本の司令部は、突然の化け物の乱入により騒然となっていた。

「ええい！何を慌てているんだ馬鹿者どもが！？相手が化け物であるのなら、迂回し、混乱している敵軍を叩けばいいだけだろが！」

司令官・・・白髪の青年は、机を叩きながら周りにいる人間を叱咤した。突然の報告を受けた青年は、自室からすぐさま総司令部である基地に移動していたのだった。

「し、しかし・・・兵器の大半は損傷、兵の被害も少なくありません、何よりも、兵の士気が・・・」

「黙れ黙れ黙れ！さては貴様、非国民だな！？」

焦ってどうにか弁解しようとする将校を青年は怒鳴り散らした。

「な・・・あなたは何を・・・があつ！」

反論を許さずに、青年は腰に下げていた銃を将校にぶつ放していた。胸・・・心臓の部分から大量の血を噴き出しながら倒れた将校を、他の将校は身震いしながら見ていた。

「どいつもこいつも・・・使えない使えない使えない！！！！こいつのようになりたくなければ、早く行け！敵軍を殲滅、今の貴様らに、それ以外の用途はないんだ！！！」

狂ったように叫ぶ青年、それは誰が見ても、発狂しているようにしか見えなかった。他の将校は一瞬戸惑ったが、それが上官からの命令であるのなら従わなければならない。それが、軍人というものだった。

「どうした！？早く行けとっている！」

追い立てられるように部屋から出ようとした将校達、しかし、それを許さないかのように、天井を突き破って降って来た者がいた。将校達は驚きで、その場に踏みとどまった。青年はそれを見た瞬間、鳥肌が立ち、かつて自分を殺す寸前までいった少年のことを思い出した。

「き、貴様は……インフィニティ！貴様……貴様貴様貴様！貴様だったのか！！！」

青年が葉月をインフィニティと間違えたのは仕方のないことかもしれない。なぜなら彼は今、もはやぎりぎり人としての形を保っているだけなのだから。両の翼は、醜く折れ歪み、赤に染め上げられているのだから……。

「何度も何度も私の邪魔ばかり、邪魔ばかりしおってえ！！」

青年は憎悪を込めた瞳で睨み、銃を突きつけ連発した。弾がなくなり、カチカチ、と撃鉄を叩く音だけが聞こえても、青年は指を決して止めない。青年が撃ち出した弾は、葉月に命中した。しかし、元がグシャグシャになっている葉月は、それが当たってもさほど変わってはいないように見えた。

「軍を………退け………」

蚊が鳴くような声で、葉月は呟く。それでも、部屋に響くような音を発していた。

「うるさいうるさいうるさいうるさい！！！！！」

青年は銃の指を動かしながら、ボロ雑巾のような葉月を蹴り飛ばす。青年が思ったよりも葉月は軽く、数メートル離れた壁にたたきつけられ、ビチャ、と水をつまったビニールのような音をたてた。

「はははははは！！なんだその、無様で惨めな姿は……そうか！わざわざ私に殺されに来たのだな、そうだな！？そうに違いない！」  
青年は思考があまりにもねじれた解釈をし、葉月に近づき何度も何度も蹴りを放った。蹴るたびに、血が飛び、肉が飛び、青年の顔や服を汚していく。しかし、それすらも快感のように、青年は蹴り続けた。

「………僕………は………」

葉月はもう既に声すら出なくなっていた。アメリカの司令部は、既に潰れてきてある。要するに、ここが最後だった。だからこそ、葉月は安心感からか、既に体中の力が抜け始めて来ていた。

「はははは！さしずめ水のサンドバックと行ったところか！！いや、

水であるのならば、ウォーターバッグか！」

楽しそうに蹴り続ける青年を、将校は止めることも、この場を立ち去ることも出来ずに、目の前の異常な光景から目を逸らしていた。

（ここを潰さないと・・・もう、手加減は、できない）

瞬間、部屋全体を異様な冷気が包んだ。いや、それは冷気などという生易しいものではない。全身にナイフの冷たい切っ先を当てられたような、そんな感覚が部屋全体満ちる。

「な・・・な・・・!？」

あまりの恐怖に、震え、青年は腰を抜かし倒れそうになったが、その体が地面に着く前に全てが終わっていた。音も無く、色も無く、部屋にいた全ての者の致命傷となる箇所が、貫かれていた。止まっただかに感じられた時間は、呆気なく終わり、部屋中を赤いスプリンクラーで真っ赤に染め上げた。葉月に血が降りかかるが、もはやその感覚すらない。しかし、なぜか思考だけは研ぎ澄まされていた。

どうして僕は、こんな力を有して、そしてこんな境遇に生まれてしまったのだろうか？道化を演じて、微笑みの仮面を被って・・・己を殺し、自らを殺し・・・あの男の手足となり、あいつの手足となり・・・僕は、本当に僕、だったのかな？

そんな葉月の脳裏に、短いながらも一緒に過ごした仲間たちの顔を思い出した。月夜、楓、利樹、紫・・・その他、クラスメイトのみんな。あの場所では、誰も葉月を道具などとは思わなかった。誰もが、普通に接してくれた・・・。既に感覚のない顔が、笑ったように、葉月は感じ、多少の驚きを持った。

仕方ない・・・か、仕事だったし・・・いや、あいつの手の平で転がってただけなんて・・・僕は、思いたくない。だって僕は・・・護りたい人たちのために、戦ったん、だから。彼じゃ・・・僕みたいなやり方・・・死んでもやらないだろうし、ね。

月夜では葉月のように、多少の犠牲を認めてでも止める、それが出来ないと分かっていた。だからこそ、葉月は今、この場所にいる。

既に体は回復も再生もしないほど、傷つき消耗していた。待つてい  
るのは、死のみ、怖かったが、なぜかそれはとても意義があるもの  
のように思えて、葉月は自分なりに満足した。

僕が・・・普通に・・・生まれていれば、今も、彼らの隣にいれた  
だろうか？つまらないことで笑い、泣いて、怒って・・・本当の自  
分をさらけ出し、生きていけたのだろうか？

最後の最後、葉月は、自身の想いを、疑問を、存在しない何かに問  
い続けた。

日常・・・つまらなくも、当たり前の日常・・・僕も、欲しかっ  
た・・・本当の僕の気持ちで、月夜・・・僕は、君と、勝負がした  
かったよ・・・。

感覚はない。しかし、幾粒の涙が零れ落ちるのを、葉月は感じた。  
実際、それはただ葉月の頬を伝う、血の雨だった。

そっか・・・僕・・・死ぬ・・・のか・・・。

研ぎ澄まされていた思考すら、もはや徐々に失われつつあることに、  
葉月は恐怖を覚えた。最後に・・・最後に・・・。葉月はそう思い  
ながら、自分自身が本気で好きになった相手・・・与えられた役割  
も何もかも捨て去って、一緒にいたいと思った相手・・・そんな、  
もう会うことすら出来ない相手の顔を思い浮かべた。

楓・・・楓・・・僕は・・・君の・・・ことが・・・。

そこで、葉月の意識は途切れた。否、もう何も言うこともすること  
も考えることも出来ない・・・死体と、化した。

ビクッ、と楓は体を震わせた。誰かに呼ばれたような、そんな気が  
したのだった。

「どうしたの？お姉ちゃん」

「具合・・・悪いのかい？」

「大丈夫？楓も、少し休んだら？」

リミーナ、ランス、茜に心配され、楓は首を振った。

「ううん、なんでもないよ！ただ・・・誰かに呼ばれたような気が、  
しただけ、だから・・・」

月夜と楓とリミーナの三人は、葉月に手をかざされた後、気がついたら自宅の前にいたのだった。そして今、月夜の部屋に月夜を運び込み寝かせ、みんなで心配そうに周りを取り囲んでいるのだった。

「本当に大丈夫？お姉ちゃんまで倒れたら・・・」

「大丈夫だよ！私は全然平気だから、ね？」

口ではそう言った楓だったが、実際は色々なことが起き、心身共に疲れていた。それでも、何よりも月夜が心配なこの少女は、そのそばに居続けた。

（葉月君・・・大丈夫、かな？）

唐突に割って入ったように生まれたその思考に、楓は少しだけ首を振ってそれを飛ばし、今は目の前に眠る月夜のことだけを考え続けた。

止むことのない雨の下で（後書き）

タイトルとサブタイトルが一緒じゃん！とかつっこまれるとへこみます。

無駄に長かった物語もここらでようやく一区切り、後少しだけ、お付き合い願いますよう

## 通じる想い

いつしか己の闇と会話した時に見たことがある、ただ荒野が広がる  
だっ広い空間。そこに今、月夜はまた立っていた。

「・・・また夢か・・・最近ほんと、夢ばかり見てる気がするよな  
あ・・・」

なんだかなあ、と呟く月夜。実際それは夢というよりは、現実に近い  
感覚を伴うもののだが、同時に、ここは夢の中、という強迫観  
念じみたものが先立つため、月夜にとって所詮夢は夢だった。

「で・・・今日の話相手は、お前か？」

月夜は後ろを振り返ることすらせずに、後ろにいる長身の男に声を  
かける。

「ふん・・・今更貴様と話すことなどないのだがな」

威厳や威圧感といったものはない、しかし相も変わらず偉ぶった声  
で、ルシファーは答えた。月夜はゆっくりと振り返り、数歩程度し  
か距離のない相手を見つめる。その瞳に、敵意や殺意はこめられて  
はいない。ただ、本当に分からない、といった感じで疑問を口にす  
る。

「俺もお前と話すことなんかないと思うけど・・・なんで、お前が  
ここにいるんだよ？」

それがただの夢の中であるのなら、月夜もそんなことを口にはし  
なかつた。しかし、ここは以前己の内に住む闇と会話した時の場所。  
・・・言うなれば、月夜の深層意識の中、と言えるような場所だ。

「ふん、私とてこのような場所にいたいとは思わぬ。しかし、無に  
消されて・・・無に触れて、初めてその実態を理解させられた。原  
理さえ分かっただけじゃ、私がここに理由も領けるといっもの  
だ」

一人で納得しているルシファーに、月夜は純粹な疑問の声をあげた。  
「無ってなんのことだよ？大体、途中から記憶が曖昧になって覚

えてないんだ、説明しろよ」

覚えていないとはいえ、殺した相手にそれまでの流れを聞いている月夜の言動は、周りから見れば何かがおかしいように感じられた。もちろん、それはルシファーも例外ではない。

「覚えてないのか？・・・ならば、言う必要もない。一つだけ言うとなれば、私はお前にもみこまれ、そして今徐々に消えつつある、それだけだ」

ルシファーが無に触れて理解したこと。それは、結構意外な事実だった。無は相手をただ消すのではなく、無限に広がる己の中に取り込む。言わば体の一部にするようなものだが、結局のところ取り込まれたものの意識も存在も希薄になっていき、最終的には無になってしまう。無限故の、完全なる無、それが無の本質だった。しかし、己の内に眠る無を知らない月夜には、ルシファーが言ったことは理解出来ていなかった。

「意味がわかんねーよ、ちゃんと説明しろよ」

「言う必要はないと言ったはずだ。その代わりとってはなんだが、貴様には私の記憶を見せてやろう。私の一部を有し、なおかつこれからは私の代わりを努めなければいけない貴様への、私から最後の手向けだ」

代わり・・・？一瞬悩んだ月夜だったが、それは楓に関係することだとなんとなく悟った月夜は、頷いた。

「別にお前の代わりをする気はないけどな。まあ結果として、俺が楓を護ることはお前の出来なかつたことにつながるわけだし、な」

「そういうことだ。さて・・・この世界なれば、口で伝えるよりも鮮明に記憶を、そのものを見せることが出来る。準備はいいか？」  
準備もくそもねーだろ、と月夜は呟きながら、頷いた。そこは月夜の世界であるにも関わらず、主導権を握っているのはルシファー、という矛盾点を月夜は別段気にも留めなかつた。

「ふうう・・・」

ルシファーは集中し、何かを念じ始める。自分の中にある記憶を実



体のある物に変え、尚且つそれを外へと具現化する。普通の世界であるのならそれはまず不可能なことだが、肉体よりも精神が重視される夢や深層心理の中であれば、それは十分可能だった。

なんだからぁ・・・、と月夜は思う。興味なさそうにルシファーを見ている月夜だが、ルシファーの表情は真剣で、なおかつ哀愁のようなものを醸し出している。

(どれだけこいつが、それに執着してたのか・・・今は、痛いほど分かつちまうな)

それはこの世界だからなんだろうな、と月夜は呟く。現実では分からない気持ちや感情が、この世界では自分のことであるかのように月夜には感じられた。

「ふん！」

徐々に、月夜たちを取り巻く風景が形を変え始めた。殺風景なただ広いだけの荒野は、緑の草が生い茂る草原に変わり、遠くには様々な形をした山々が見える。雲一つないのに灰色だった空は、青い空へと変わっていく・・・ルシファーが具現化した世界は、のどかな田舎のような風景だった。

「・・・こんなものだな」

周りを見渡しながら、懐かしそうにルシファーは声を上げる。その瞳には怒り復讐などといったものはなく、ただ子どものような無邪気な色を浮かべていた。

「結構良い所なのは認めるけど・・・ここまで勝手に人の深層心理の世界を変えられるのもなぁ」

鳥のさえずりや草原に吹く風を体で感じながら、月夜はぼやく。

「すぐに元に戻る。どんなに私が望んだところで、ここは貴様の世界なのだからな」

「はいはい、分かってるよそんなことは・・・さつさと説明しろよ」「貴様はどこでも変わらん、説明説明と。少しは落ち着いたらどうだ？」

ルシファーにそう言われ、月夜は溜め息をつきながら答えた。

「お前に言われたくない。・・・まあ、そうだな、最近はずっくりする暇も、なかったしな」

本来月夜はのんびり屋でマイペースな性格だ。それでも事情が事情なだけに、ゆっくりする暇はなかった。

「・・・どっかの誰かさんたちのせいで、そんな暇がなかったわけなんだけどね」

皮肉を言いながらも、どこかゆったりとした雰囲気は草の上の腰をおろした。

「ふん・・・運命というやつだ、諦める」

同様に皮肉気に返すルシファーだったが、やはり月夜と同じでゆったりとした雰囲気醸し出していた。敵同士である以前に、二人は同じ種類の生物であるため、戦う理由がなければ相容れることも難しいことではなかった。

「それで、俺に何を見せてくれるんだ？愛しい愛しいフュリア様のお姿でも見せてくれるのかい？」

「それは違つて言っているだろうが馬鹿者！」

仲の良いクラスメイトをからかうような口調の月夜に、ルシファーは怒つたように言う。しかし、その顔はまんざらでもなかった。

「そんなことばっかり言つてると、愛しいフュリア様が泣いちゃうんじゃないか？」

「だから違つと・・・まあいい、貴様には言うだけ無駄だな」

諦めたようにルシファーは言つた後、月夜の隣に腰をおろした。

「そろそろ、流れ出すはずだ。黙つて見ているといい」

自分の記憶なのに微妙に曖昧な言い方だなおい、と月夜は思ったが、口を挟むことはしなかった。なぜなら、映画が始まるのを今か今かと待っている子どものような表情をしているルシファーに、文句を言うのも気がひけたからだ。ほんの少し前に殺しあつたはずの二人が並んで何かを見ている、そんな奇妙な光景の中、周囲の景色が動き始めた。

まず月夜の目に映ったのは、きれいな女性だった。年の頃は二十手前といったところだが、その表情には幼つぼさが残っていて、若干幼く見える。腰ほどまでの金色の髪、エメラルドのように透き通った薄い緑色の瞳、雪の様な儂さを思わせる白い肌・・・そのどれもが魅力的であり、なおかつ調和がとれていた。更に背中から生えている一对の白い翼、その姿はまるで、地上に舞い降りた天使のようだった。

(いや、実際天使なんだっけか・・・)

そんなことを思いながらも、その美しさに見惚れるように、月夜は女性を眺めていた。隣に座っているルシファーもまた、同じだった。

「フュリア様、ここにおられたのですね」

透き通ったきれいな声をした青年が、女性の前に姿を現した。前触れもなく突然現れるその様子は、まるで瞬間移動のマジックと劇を合わせたような不可思議な物だった。現れた男の姿を見て、月夜は驚いた表情をする。

「あれは・・・葉月？」

そう、その男の姿は、葉月だった。正確には葉月には似て非なるもので、葉月を成長させたらあんな感じになるだろうと思われる。

「違う、あれは私だ。若い頃のな」

「・・・は？」

ルシファーの言葉に、月夜は先ほどよりもはるかに驚いた表情で隣にいる男を見た。だらしのない、とまではいかないが、伸びた髭に伸びた黒い髪、その視線で小動物ぐらいなら殺せそうな鋭い瞳。正直いかつくて怪しいおっさん。対する葉月似の男は、爽やかそうな雰囲気によく合う爽やかで細く短い銀髪、柔和な顔、体は線の細さこそあるものの筋肉はそれなりにたくましい。一見爽やかな好青年。

「・・・え？」

信じられない、といった表情で両者を見比べる月夜の頭を、ルシファーははたいた。

「いてえ・・・」

「相当に失礼なやつだな貴様は・・・ふん、葉月が私の分身である時点で気づいてもいいはずだ。なぜなら、あれは過去の私を模して造られたのだからな」

「へえ・・・」

そう説明を受けても、いまいち釈然としない月夜だった。ルシファ―はそんな月夜に気づいていないのか、気づいていても追求しないだけなのか、ただ黙って目の前の光景を懐かしそうに見ていた。月夜もそれ以上は何も言わず、目の前の劇に目を戻す。

「様なんて、つけなくてもいいっていつも言ってるじゃない」

「そういうわけにはいきません。フュリア様はみんなにとって特別な存在なのですから・・・」

伏せ目がちに言う過去ルシファ―に、フュリアは寂しそうに言う。

「そうですね・・・結局はあなたも、彼らと一緒に私を特別扱いなものですものね」

「っ！それは・・・」

何かを言いかけた過去ルシファ―を遮り、フュリアは先ほどの寂しそうな表情ではなく、全ての天使にとつて特別な存在、現長の娘である威厳を持ちえる存在として口を開いた。

「もついいのです。それで、私をここに呼びに来た理由はなんですか？」

過去ルシファ―は一瞬切なそうに顔を歪めた後、すぐに真剣な表情で言った。

「最近、この辺りで人間どもが狩猟をしているのは知っておいででしょう？」

「知っています。今朝方、父から話は聞きましたから」

「ではなぜ、あなたは危険な場所だと知っているのここにおられるのですか？」

過去ルシファ―の問いに、フュリアは恋する乙女のような表情でし

ばらく悩んだ後、告げた。

「・・・ここは、私にとって特別な場所だからですよ。・・・あなたにも、その意味が分かるでしょ？」

過去ルシファーは少しの間呆然とし、そして顔を赤らめた。

「分かります・・・分かりませんが、ここは危険なのです」

「危険なのは重々承知しています。でも・・・私だって、全ての天使にとって特別な存在にいるのは疲れるのです。私が安らげる場所はここ・・・幼かった時、そんな悩みなど何一つなかった時、遊んでいたここぐらいしかないのですから」

物憂げに言うフュリアに、過去ルシファーは辛そうに言う。

「・・・成長してしまえば、嫌でも見たくないこと、聞きたくないことが自身に影響を及ぼします。それから耳を塞ぐことも目を逸らすことも叶いませぬ・・・私たちは成長してしまっただんですよ、フュリア様」

二人の間に、一瞬とも永遠ともとれる沈黙が流れる。不意に、フュリアは歩き始めた。

「・・・では、戻りましょうか。ルシファー」

「・・・はい、フュリア様」

そして二人は唐突に消え、周りは暗い闇に包まれた。

「まるで劇、だな。しかも青臭い恋愛劇」

暗転をしている最中の劇場内のような暗闇の中、月夜は呟く。

「私にも、若い頃があった、それだけだ」

「今も十分、相手を想う気持ちだけなら若いだろうよ。悪い意味でも、良い意味でもな」

辺りは暗い、それでも月夜にはルシファーの気持ちや表情がよく読み取れたため、そう言った。

「・・・あの草原はな、私が幼い頃、彼女とよく遊んだ場所なのだ。彼女はそれを覚えていてくれて、あそこにいたのだろうな・・・戻れぬ、過去を想ってな」

「ふーん・・・お偉いさんってのも大変なんだな」  
それはいつの時代も一緒か、と月夜が思っていると、周囲が明るくなり先ほどとは違う風景を映し出した。

テントのような空間に机のようなものが並べられ、白い翼を生やした数人の老人が座っていた。何やら慌しい様子で、ああでもないこうでもない、と話し合っている。

「フュリア様がいなくては、我々は滅んでしまう、なれば、とるべき道は一つでしょう!？」

老人の中でも、一番歳若そうな・・・とは言っても、初老程の男性だが、彼が、声を荒げてそう叫ぶ。周りはその意見に賛成するわけでもなく反対するわけでもなく、難しい顔をしながら何かを悩んでいる。

「どちらにしろんでも、一緒じゃよ・・・やつらの言うとおりにしたところで、わしらは衰退の道をたどるじやろうて」

次に声をあげたのは、その中では最年長と思われる女性だった。その声は落ち着いているが、やはりどこことなく焦っているような色がある。

「なればこそ、成功する確率がある方を選ぶのは道理ではないのでしょうか？」

最初に言った男の次の言葉で、場は重苦しい雰囲気にも包まれた。

「・・・そうじゃな、可能性があるならば、そちらをとる」

重苦しい雰囲気も破ったのは、上座に座っている老人だった。その姿は一言で言えば厳肅、威厳があり、多少の堅苦しさがある真面目そうな老人だった。

「しかし、それでは自分の娘可愛さに戦を引き起こすと、民に思われることがあるかもしれん。確かに娘は聖女だ、それはみな理解していると思う。しかし、しかしだ。少しでも疑問や不満を抱く者がいれば、それが広がり、戦に多大な影響を及ぼすことになるだろう」  
老人の言葉に、再度場は沈黙に包まれた。この話し合いの理由と重

苦しい雰囲気理由は、人間にさらわれたフュリアにある。フュリアの命が惜しければ、我らに味方し悪魔を打ち滅ぼせ、それが人間が出してきた条件だった。余裕で倒せる相手ならば、このような話し合いはしなくてもかまわない。しかし、相手は悪魔であり、力も数もほぼ対等、だからこそ、天使の民が多少の揺らぎを持ってしまえば、勝利することさえ難しい、そんな状況だった。

「・・・確かに、不満を持つものは多くはないでしょうが、反面少なくともないでしょう。ですが、状況が状況なのです。民に説明すればきつと・・・」

「何を説明するというのだね？彼らはみな、彼女がいなくなれば我々が滅ぶことを重々理解している。それを既に知っている彼らに、何を説明するといふのだ？」

一番歳若い初老の男に、その次ぐらいに若い老人が口を挟んだ。

「それは・・・」

「何を説明するのかと私は聞いているんだ。彼女がいなくなったら滅びる、だから本気で殺しあえ、そう彼らに説明するのかな？馬鹿げてる、それは説明ではなく命令だ」

「違う！」

声を荒げて机を叩きながら、初老の男は立ち上がった。

「何が違うといふのかね？君が言っていることは、そういうことだろう？あの愚かな人間どもが彼女を人質に戦を扇動しているのと同じ様に、君も彼女と存亡を人質に、民を戦に向かわせる。どこに違いがあるのだね？」

今にも食って掛かりそうな初老の男を制するかのように、上座の男性が立ち上がって声をあげた。

「いい加減にしろ！身内で言い合いをしても何も始まらない！」

その言葉で、両者は静かになった。難しい顔をしながら、上座の老人は言葉を続けた。

「戦はする。しかし、神の定めた法になぞり、二十歳を過ぎていない未成人の者は戦には向かわせぬ」

場が騒然とした。初老の男が、上座の老人に質問をする。

「なぜですか？今回のことは一番重要視されることであり、その法ですら例外になるはずですが……」

「それは心得ている。しかし、全ての民を戦に送り出したとあつては、不満が募る恐れがある。戦力としてはやや不安な面もあるが……  
・完全な滅亡を避けるには、それが一番良い手だ。今も、そしてこれから対してもだ」

上座の老人はそう言った後、各々の老人に指示を飛ばし始めた。戦争の準備や民に対する法になぞつた言い訳、それぞれの命令を下した。

そして、また場面は暗転を迎えた。

「彼女が誘拐された、って話ね。偉い人にもそれなりの苦勞があるんだねえ……」

と呟いた後、月夜は隣に座っているルシファーから得体のしれない何かを感じとつた。それは、怒りや失望といった、ここではほとんど見せていない負の感情だった。

「どうしたんだ？おい」

異常を感じた月夜は、ルシファーに話しかける。

「なんだ……これは？」

「なんだこれは、って……お前の記憶だろ？」

ルシファーは体を震わせながら、叫ぶ。

「違う！これは私の記憶ではない！！……なぜ気づかない？どうして私がいけない場所に、私の記憶があるというのだ？」

ルシファーの言葉に、月夜は、はっ、となった。他人の劇を見ているような感覚だった月夜は、その不審な点には気づいていなかったのだ。

「言われてみれば……確かにそうだ。じゃあ、あれは一体……？」

「分からぬ……だが、やつらはなんと言った？法は例外だった、



そう言った・・・私は、それを知らなかったのだ！」

怒りに震えながら、狂ったようにルシファーは叫ぶ。

「私には彼女を助けに行く権利があったのだ！それを・・・それをやつらは・・・！！！！！」

ルシファーの心をざわつかせている、怒り、哀しみ、それらの強い想いが、月夜に伝わる。

「分かる・・・分かるさ、好きな人を助けに行く権利がなかったんじゃないかって、その権利を隠されていた気持ち・・・痛いほど分かるでも、と月夜は続ける。

「やっぱり、仕方なかったんじゃないか、って、思う」

「仕方なかっただと・・・？貴様に、何が分かるというのだ!？」

矛先を自分に向けたルシファーに、月夜は哀しそうな顔で告げた。それはまるで、死刑宣告をするかのように。

「じゃあ、何でお前は行かなかったんだ？」

「なん、だと・・・さっきのを見ていただろ、私には・・・」

「行けば良かっただろ。法も何も関係ない、本当にお前がその人のことを好きなら、愛していたのなら・・・どうして、全てを捨てても、禁を犯しても助けに行かなかったんだ!？」

月夜は語尾を荒くして叫ぶ。辛さは分かる、それでもルシファーの気持ちを理解することなど月夜には出来なかった。

「私は・・・私は・・・」

「本当は怖かったんだろ？最初の場面を見て思ったよ。相手はお前のこと想ってくれていた、でもお前はなんだ？成長したから、大人になったから。身分の違い？地位の違い？そんなクソみたいなものに惑わされて、相手と自分の間に壁を作っていたのはお前だろ!？お前は怖くて逃げたんだよ、ただの臆病者なんだよ!!!」

そう言われ、ルシファーは怒ると思った。もちろん、月夜もそう思っていた。しかし・・・

「ああ、そうだ・・・私は、臆病者だ」

月夜の予想を裏切り、ルシファーは弱弱しく呟いた。

「彼女が好きだった。愛していた・・・でも彼女は特別で、それは何も私からだけではなく、全ての者から等しく特別で・・・そんな彼女の隣に並ぶことが、私は怖かったんだ」

身分の違いから生まれる卑屈な心、二人の今の関係の変化・・・様々な要因が、ルシファーを臆病にさせた。もしかしたら、ルシファーは気丈な顔の裏で、後悔の念に苛まされ続けていたのかもしれない。

「後悔するぐらいなら、護り抜けよ、ぼけ」

言葉は悪いが、月夜はルシファーを責めるような口調ではなかった。反対に、その後悔に共感しているかのように、涙声になっていた。

「・・・そうだな、だが、それも今となっては、もう手遅れだ。私はもう何も出来ない」

諦めてはいないと強く思いながらも、それでも諦めた声を、ルシファーは出す。現実であれだけ気持ちを出していたルシファーがこの世界で気持ちを露にしなかったのは、諦めの気持ちが既に支配していたからかもしれない。

「ああ、そうだな・・・」

ルシファーを殺した張本人の月夜は、そう呟く。ルシファーのやり方は間違っている、と思い、止めた月夜だが、今はどうにもやりきれない気持ちで一杯だった。

「・・・過ぎたことを言っても、始まらぬ・・・そろそろ、続きが始まりそうだ」

過ぎたことは言わないでも見るんだけどな、と月夜はどこか冷めた部分で思ったが、それを口にする気にはなれなかった。そしてまた、周囲が明るくなり始める。

映し出された風景は、今までとは打って変わって悲惨なものだった。建ち並んでいたはずのテントは無残にも潰され、そこかしこで火の手が上がっている。先ほどの場所に似た草原に、数多くの死体が転がっている。生き残っている者はいても、ただ呻き声をもらすだけ

で、すぐにその声も止む。殺戮と破壊に飲みつくされたような場所・  
・そこは、戦場によく似ていた。

「くそ……！もう、だめか……」

その場にいた数人の内の一人が、悪態をつきながら絶望の表情を浮かべる。

「やっぱり、あいつらの目的はこれだったんだ……汚いやつらめ！」

他の一人が怒りを露に叫ぶが、その状況は何一つ変わらなかった。

その数人の内の二人には、見覚えがあった。言うまでもなく、過去ルシファーとフュリアだった。フュリアを護るように数人は周りを囲っている。

「嘆いても、何も始まらない！……せめて、彼女は、彼女ぐらいは護り抜いて見せようじゃないか！」

絶望に飲まれかけてた全員に、過去ルシファーは強くそう言った。

生き残りは数名、対する人間は数百、ここにいない分を除けばその何倍もの数がまだ残っている。勝つことは不可能、そして護り抜くことすら、不可能だった。それでも、そんな状況に負けないように各々は声を絞り出す。

「そうだな、やつらみたいな愚かな生物に、我々の女神をむざむざ殺させるわけにはいかない！」

「ああ、愚かな人間どもに、天使の最後の力、見せてやろうじゃないか！」

「上等だ、何十でも何百でもかかってこいつてんだ！」

生き残った数名は、みな歳若く、二十歳前後といったところだった。それでも、誰一人震えなどは見せなかった。フュリアを護る、妄信にさえ近いほどの考えが、今の彼らを決死の行動に突き立てていた。その中で、唯一妄信ではなく本気で愛しているからこそ、護りたいと願っている人物がいた。言うまでもなく、過去ルシファーだ。

「みな、天使に生まれたことを誇りに思い、最後の最後まで暴れてやろう！……フュリア様は、我々が時間を稼いでいる間にお逃げ

ください・・・！」

渦中の本人は、澄んだ緑色の瞳に、哀しそうな愁いの色を浮かべていた。

「今更、どこに逃げるといいますか？彼らは最後の最後まで、天使の生き残りである私を追いかけて、そして殺すでしょう・・・私は逃げません。最後まで、あなたたち共にあり続けます」

退くことをよしとしない、確かな強さが彼女にはあった。

「ですが・・・」

「死を見届けることも、死を共にすることもせず、何が女神ですか？何が特別なんですか・・・!?」

なおも食い下がろうとする過去ルシファーに、フュリアは強く言う。特別な存在として崇められて来た彼女、しかし、彼女は誰一人救うことが出来ずに、ここまで逃げ延びてきた。それが、許せなかったのだらう。

「なんと言おうと、私は退きません、私がみな言うように本当に女神であるのならば、私は勝利の女神となりましょう」

頑なな意志を感じ、それ以上過去ルシファーは何も言うことが出来なくなってしまう。切なそうな表情をした後、すぐに周りの数人に号をかける。

「みな、聞いたか！？勝利の女神は我らのそばにいる！こんなところでは終われない、何がなんでも護り抜くんだ！！」

おう！という力強い声が返ってくる。

「敵はすぐそこまで来ている、みな、続け！」

うおおおおお、という数人の叫び声と共に、彼らは敵陣へと走り出した。槍のように縦に連なり、一点集中を基本とし正面突破をはかる。フュリアもそれに続こうとしたが、足が震え、足が動いてはくれなかった。

「どうして・・・こんな時・・・なのに」

フュリアは自分の弱さに怒りを覚えた。彼女が言ったことは嘘ではない。退くぐらいならば、最後まで戦う、それに迷いはない。しか

し、体は動いてくれなかった。囲まれているため、フュリアが居る場所も決して安全とはいえない。しかし、自分の身よりも何よりも彼女の声で動いてしまった数人に申し訳がなく、彼女はさめざめと涙を流した。

そこから先は、見るに耐えない惨劇だった。突撃していった天使たちは、一人二人と、殺されていく。何人も人間を巻き込みながら、最後の最後まで戦うことをやめなかった彼らは、英雄とも無謀とも言えた。

「突っ切るんだ！必ず勝機は……!？」

突撃してから数分、過去ルシファーが叫びながら後ろを振り返った時には、そこには誰一人いなかった。死体が道のように連なり、過去ルシファーもそこに誘っているかのように見えた。

「……フュリア様は……?彼女は……!？」

過去ルシファーの後ろには、文字通り誰一人いなかった。それは、護るべき対象のフュリアさえ、例外ではなかった。

「そんな……まさか……ぐあっ!？」

戦場では、一瞬の油断が命取りになる。十八歳という若さではかなり強い力を持っていたルシファーだったが、哀しいことに彼には戦の経験はなかった。隙を見せた過去ルシファーは、二メートルを超える人間に頭を強打され地面に伏した。辛うじて気絶は避けられた。しかし目の前では剣を振り上げている人間が見える。力を発しようにも、既に限界が来ていた過去ルシファーは、何も出来ずにただ呆然とそれを見上げた。振り下ろされる瞬間、過去ルシファーはとっさに目を瞑った……しかし、すぐに来ると思っていた死は、中々こなかった。

「……フュリア、様？」

おそるおそる目を開けた過去ルシファーの前に、金色の髪をたなびかせ、悠々とフュリアが立っていた。剣を振り上げていた人間は音もなく倒れ、地面に伏す。

「……遅いよ、今更……こんな力があつたって……遅いんだ

よ

呟くように言った後、フュリアは過去ルシファーに振り向いた。そして、微笑んだ。その微笑みは、哀しいものであると同時に、愛しい人への最高の微笑みだった。そして、フュリアはすぐに何かを口ずさみ始めた。それは歌っているようで、そして詩っているような哀しい音だった。周りの人間は、唐突に現れ、そして神秘的な何かを放っているフュリアを見て一時的に動きを止めた。しかし、それも長くはなく、ようやく我に返った一人が剣を再度振り上げた。

「フュリ……」

「さようなら……」

あまりにも哀しい声、永遠の別れを告げる響き……場面は一度暗くなつたかと思うと、今度はすぐに明るくなつた。

「フュリア様!!……な、ここは、どこだ……?」

過去ルシファーは、気づくと教会のような場所にいた。少し前に月夜とルシファーが戦つた場所、その場所に。

「それより、彼女はどうなつたのだ!？」

我に返つた過去ルシファーは、慌てた様子で周囲を探つた。一つ一つの部屋を確認したり、壁や像の裏を確かめたり、など。しかし、彼女はどこにもいなかった。

「……なん、で……そんな……」

弱弱しい呟きを漏らしながら膝をつく過去ルシファー、その姿はあまりにも哀れで、そして痛々しかった。

「そんな……そんな馬鹿な、ことが……ある、わ、わけが、ない、ないんだ」

動揺しながら、過去ルシファーは何かを念じ力を放つ。しかし、限界を既に超えている彼からは何も発せられはしなかった。

「フュリア様……どこに、どこにおられるのです、か?」

涙を流しながら、虚ろな様子で手近な壁を叩き始める。ガンガン、と鈍い音が響くが、壁は壊れるどころか、傷一つつきはしなかった。

「フュリア様……フュリア様、フュリア様ああ!!」

悲痛な叫びと共に、場面は暗闇に閉ざされた。

「……」

「……」

月夜とルシファーは、目の前で起きていた事に、何も口を開けなくなっていた。あまりにも哀れで悲しい、その結末……二人は共に涙を流しながら、嗚咽をもらしている。

そのまま、しばらくの時間が流れた。周囲が明るくなる気配はない。それも当たり前のことだった。なぜなら、過去ルシファーの記憶はそれで終わりなのだから。

「なんだよ、これ……まんま、悲劇そのものじゃないか……くそっ」

やり切れない思いで、月夜は地面を叩いた。ルシファーが狂ってしまった理由が、気持ちが、月夜には明確に分かってしまったのだから。

「……これで、終わりだ。私はこの後、深い眠りについた。復讐という気持ちを胸に、な」

その声に怒りの色はない。あるのは、絶望と虚しさという空虚な響きだけだった。

「目が覚めて、私は時間の流れに驚きを感じた。そして同時に、この翼にも驚きを禁じえなかったのだ」

「翼……?」

「過去の私の翼は、白の一对の翼だったはずだ。しかし、目覚めた私の背に生えていたのは、白黒三対の六枚の翼だったのだ」

「六枚……だと?」

六枚の黒と白の三対の翼……それではまるで……神話に出てくる墮天使ルシファー、そのものではないか?

「私の怒りがそうしたのか、私には分からぬ……私は人間を恨み、そして同時に、何も知らなかった私は法を作った神を恨んでいた」  
月夜の考えなど意にも介せず、ルシファーは淡々と続ける。

「彼女は、初代長、神が記した予言の書に書かれていた女神だったのだよ。だからこそ、我々は彼女を特別扱いしていた。そして、そこにはこうも書かれていた。女神を有すれば滅びはなく、無くすれば滅びの道、とな」

神をも恨み、己が気づかぬうちに墮天使となっていたルシファーは、消え入りそうな声で呟く。

「神など・・・いなければ良かったのだ、そうすれば私は・・・彼女と、共に時を過ごすことが・・・出来たのかもしれないのだから」  
「そう、か・・・」

その人間自身の気持ちにならなければ、何も分からない。それは例え、世界を自分の為に滅ぼそうとした、世間では悪者と呼ばれる存在であったとしてもだ。月夜はそれを分かかってしまい、罪悪感に苛まされた。

「何を・・・悩んでいる、お互い譲れないものがあつた、ただ、それだけだ・・・同情は、許さん」

月夜のそんな気持ちを察したのか、ルシファーは言う。その声には、覇気も生氣もなかった。

「そうだ、な・・・俺は、譲れなかった、譲るわけにはいかなかったんだから・・・」

ルシファーに言うというよりは、自分自身に言い聞かせるように、月夜は言った。

「・・・」

「・・・」

しんみりとした沈黙が、再び流れる。しかし、突然二人にとって予想外のことが起きた。明るくなることはもはやないと思っていた周囲が、明るさを取り戻したのだ。

「「な・・・!?!?」」

二人の声が重なる中、場面は先ほどの戦場に移る。立ち尽くすフュリア、振り下ろされる剣、その瞬間から、記憶にありえないはずの物語が再び動き出した。



フュリアは振り下ろされた剣を、なんなくかわした。しかし、反撃をするでもなく、声を張り上げる。

「無駄な争いは・・・もうやめにしましょう！」

無益な血が流れた戦い、フュリアを護ろうとした戦い・・・彼女はどんな気持ちで、それを無駄と言ったかは分からない。フュリアの重圧感におされ、周りにいた人間は呆然と彼女を見る。

「私は・・・力を手にしました、あなた方を、一瞬で消す・・・世界すらを、消せるほどの力です。しかし、私は仇討ちなどしません。そんなこと・・・出来る権利が、私には、ないのです」

自分の為に死んでいったものたちのために仇討ちする権利は、彼女にはないと言った。

「もう誰一人、我ら天使は残ってなどいません・・・だから、剣を収めてください！」

しばしの間呆然としていた人間は、我に返った順に、すぐにフュリアへと襲い掛かる。しかし、どんなに鋭く速い幾数幾十の剣戟でも、彼女にかすりもしなかった。

「・・・退いては、くれないのです、ね」

哀しそうに言った後、彼女を取り囲んでいた十数人の人間が音も無く、消えた。正確には、飲み込まれ、消えた。常人ではとらえきれないほどの速さの光が、彼らを覆いつくして消滅させた。その事実には、彼女は小さく震えた。己の力に、恐怖を抱いているのだった。

「私の力は・・・抑えられそうに・・・ありません・・・だから、」  
「退け！」と彼女は別人のように叫んだ。その瞳には、言い様のない死を孕んだ光が宿っている。人間たちはその光に恐れをなし、我先に逃げ出した。彼女の周りから、人気がなくなるのはすぐのことだった。

「・・・ごめんね・・・みんな・・・ごめんなさい・・・ごめんなさい・・・」

人気がなくなつた瞬間、フュリアは少女のように泣きじゃくった。

自分のために散っていった命、その一つ一つが、彼女の上に重くのしかかった。そして場面は、また暗くなる。そしてすぐに、明るくなった。

「・・・安らかに・・・そんなこと言う権利は・・・私にはないけれど・・・それでも、安らかに・・・」

いくつもの墓標が、草原に並んでいた。おそらくフュリアが作ったものだろう。その表情には強い疲労と、哀しみが浮かんでいた。

「ごめんね・・・ルシファー・・・でも、あなたにだけは・・・死んで・・・欲しくなかった」

死んでいった者たちに、逃がした一人の青年に謝りながら、涙を流しとつとつとフュリアは言葉をつむいでいく。

「忘れて欲しい・・・遠い・・・想像もつかない・・・遠い未来で・・・幸せに・・・なって、欲しい」

うあ、うあああ！と、フュリアは子どものように泣きじゃくる。その場にいない男にすぎるように、愛しい人に、すがりつくかのよう

に。  
ひとしきり泣いた後、フュリアは虚ろな瞳で立ち上がった。

「私は・・・罪を・・・償わない・・・と」

何かを覚悟したような、そんな鬼気迫るような雰囲気か今の彼女にはあった。

「本当は・・・一緒にいたかった、ずっと・・・ずっとずっと一緒に、いたかった・・・でも私は・・・」

生きていくには、罪が深すぎるから・・・、そう呟いた後、フュリアは自分の体に光を打ち込んだ。そして一瞬の間もなく・・・彼女の姿は、光に飲まれ消えていた。そしてまた、場面は暗闇に飲まれた。

周囲が暗闇に包まれた瞬間、月夜とルシファーの中にフュリアの気持が流れ込んできた、様な気がした。それは自分のせいで死んで

いった人たちへの懺悔、赦し・・・そして、ルシファーに対する、とりとめのない恋慕の念だった。二人はそのあまりにも辛く切なすぎる気持ちに、声もなく涙を流した。

数分にも永遠にも感じられた時間は、幾分落ち着いた月夜の声で終わりを迎えた。

「なんか・・・やるせない、な」

「・・・ああ」

己が信じて戦ってきたものが、全て無駄になったような気がして、ルシファーは力なくうなだれた。何千万年という眠りには、そんなフュリアの想いの秘密があったことを、ようやく二人は理解した。

「私がやってきたことは・・・一体、なんだったのだろう、な」

心を失った人間のように、ルシファーは虚ろな瞳をしている。何か励ます言葉を言おうとした月夜だったが、言葉が思い浮かばず、また、それは意味のないものだろうと、思いやめた。

「フュリア様・・・いや、フュリア・・・私は・・・君の気持ちを無駄に、した」

「無駄になんかしてないだろ」

自分の口から出た言葉に、月夜は驚いていた。驚きながらも、頭に浮かんだ言葉をルシファーに伝える。

「確かに、お前は彼女の気持ちを無駄にしてしまったのかもしれない。でも、お前は彼女のためにがんばったんだ。彼女が、お前を逃がし、死という辛い選択肢を選んだように、お前も辛い選択肢を選んだんだ・・・復讐という、間違ったもののためではあるけど、お前は、生きることを選んでいったんだから」

虚ろな瞳のまま、ルシファーはかたまった。その表情はあまりにも深い哀しみと切なさを湛え、今にもあふれ出しそうになっている。

「だから無駄なんかじゃない、お前の残りの人生は、彼女のためだけに使われた、といっても過言じゃないんだから」

「・・・本当に、そうなのだろうか・・・」

今までの自信は吹き飛び、弱弱しくルシファーは呟く。それは、長

年押し殺してきたルシファアの中の、幼い部分だった。

「それを決めるのは、俺じゃない。お前自身だよ、ルシファア」

「私・・・自身」

ルシファアの気持ちを知った月夜は、彼がどれだけ後悔し、どれだけフュリアのことを想っていたのか分かっている。本当は、ルシファア自身もそれを知っている、分かっている。だからこそ、月夜はルシファアに答えを任せた。

「私は・・・後悔している・・・なぜ、なぜ！あの時フュリアと呼ばなかったのか、幼い時のように、何も縛るものがなかったあの頃のように、彼女と笑い合うことが出来なかったのか・・・それが、それだけが私を縛り付けているんだ！」

逃げ出した自分、それが何よりも、ルシファアは赦せなかった。

「失敗したのなら、やり直せば良い。手遅れだなんて言葉、お前には似合わなすぎるんだよ」

やり直すも何も、ルシファアは既に死んでいる、そしてただ消えることを待つのみ・・・月夜が言いたいのはそういうことではなかった。要は、気持ちの問題、何かをする体は無くても、今は考えることは出来る。それならば、やり直すことも、決して不可能ではない。気持ちがいり直せば、例え消える運命でも、その魂は救われるはずなのだから。

「ふん・・・簡単に、言ってくれるでは、ないか」

「所詮、他人事だからな」

「それも、そうか」

しんみりとしながらも、お互い笑い合った。涙で濡れ、不器用な笑いであったものの、二人は心の底から、笑い合えた。

「さて、ではお別れだ。私には時間がない。短い時間を、精々大事に使わせてもらおうでしょう」

哀しみの色は残っている、しかし晴々とした表情で、ルシファアは言った。

「ああ、そうだな。俺も、もうお前の顔なんか見たくもねーよ」

「ふん、こちらまだ馬鹿者・・・それでは、」

「あばよ」

最後の最後に声を合わせた二人は、暗闇の中お互い別の方向へと歩いて行った。

通じる想い（後書き）

登場人物すくねええええええええええorz

## それぞれの帰るべき場所

日常・・・それは退屈なものであり、何よりも大切なものだとは俺は思う。退屈な今を抜け出して、スリルや夢のある心躍る冒険に身を投じたいと、誰もが一度は思うかもしれない。それでも、やっぱり帰る場所は日常であり、退屈な日々・・・そんな、変わらずに迎えてくれる日常があるからこそ、俺は頑張れるし、笑っていられるんだ。

「あー・・・さみいなちくしょう」

夢から覚めた月夜は、自分の部屋の天井を見ながら呟いた。その顔には、うつすらと涙の跡が残っている。

「今回はどれだけ寝てたんだろうな・・・留年になんてなったら、笑い話にもならないな」

のろのろと体を起こし、大きく伸びをする。色々なことがあったにも関わらず、月夜はなぜかひどく落ち着いていた。修羅場経験が長い月夜だからこそ、全てが終わったことを、どこかで感じたのかもしれない。

「さて・・・腹減った」

のほほんとマイペースに呟きながら、月夜は自分の部屋を後にした。

「おはよー」

月夜がリビングに行くのと、今この家に住んでいる月夜以外の四人がご飯を食べているところだった。

「あ、おはよー・・・って、月夜！」

月夜のいつも通りの雰囲気にもまれ、普段通りに挨拶してしまった楓は、すぐに現在の状況に気づいて月夜に飛びついた。

「おわー！」

倒れそうになりながらも、どうにか楓を支える月夜。しかし、  
「おにーちゃん！」

更にリミーナの追撃が加わり、月夜は豪快に後ろに倒れた。後頭部を強かに床に打ちつけたものの、気絶は免れた月夜だったが、楓とリミーナに強く抱きつかれ身動きがとれなくなっていた。

「もう・・・！ほんとに心配ばかりかけるんだからあー！」

「そうだよお兄ちゃんは！」

「いや・・・ちょ・・・待て・・・首、首しめんな！」

じたばたと暴れるが、二人の心配パワーの前に虚しくもその動きは意味を成さなかった。

「あつはつは、おはよう月夜。相変わらず賑やかだなお前は」

「おはよー、そうだね、両手に花でもてだね」

そんな三人を見ながら、のほほんとした声で言うランスと茜を月夜は睨む。

「そこ、ゆったりしてんな！助ける！」

慌しい月夜の声をよそに、ランスと茜は遠い目で答える。

「僕らはすっかり蚊帳の外だしなあ・・・」

「そうだねえ・・・」

もしかしてこの二人、説明すらせずに連れて来なかったこと怒っているのか・・・？

月夜の中でそんな疑念が浮かんだが、それに突っ込んでる余裕も弁解する余裕も今はなかった。

「月夜ー！」

「おにいちゃんー！」

「分かったから、分かったからいい加減はなせー！」

切なくも虚しく、月夜の声は家に響くだけだった。

落ち着いた楓とリミーナが、月夜を解放したのはそれから数分後のことだった。危うく呼吸困難でまた気絶しそうになった月夜だった



が、またやられてはたまらない、という意気込みでそれだけはなんとか避けた。

「で・・・お前らは俺を殺す気ですか？」

いまだにぜえぜえと肩で息をしながら、月夜は椅子に座って四人を見る。落ち着いた一行は、各々の席についていた。

「だって・・・月夜倒れてばかりだし・・・私だって、心配なんだよ？」

そんな風に楓にしおらしく言われては、月夜も怒る気力がなくなっってしまった。

「いや、倒れるのは不可抗力っていうか・・・大体から記憶ないし俺のせいじゃないし」

「お兄ちゃんつてば、ほんと楓お姉ちゃんには甘いんだから」

言い訳をするように弱弱しく言う月夜に、リミーナの鋭い指摘がとんだ。

「うつせ、やられてはっかの癖に」

「何よー!」

ペチペチと相も変わらず、じゃれあうように叩き合ってる二人の間に、ランスの声が割って入った。

「ほら、そんなことしてる場合じゃないだろう?」

「ん?」

ランスの言葉の意図が分からず、月夜は疑問の眼差しをそちらに向けた。

「うちらにも、分かりやすいように説明して、ってことかな。楓とリミーナちゃんから、全然説明されてないんだよ?」

「そうそう、いきなり帰ってきたと思ったらいきなり出て行って、しまいにはお前が気絶して帰ってきて・・・さっぱりだよ」

仲間外れにされたような含みがあるランスと茜の言葉に、月夜は苦笑した。

「悪い悪い、でも状況が状況だったんだよ。関係のない二人を、危険に巻き込むわけにも行かなかったし」

月夜のそんな言葉に、ランスと茜は切なそうに目を伏せた。

「関係ない、ってことはないだろ？確かに・・・僕らじゃ何も出来ないかもしれないけど」

「うちら姉弟でしょ？関係ないなんて、ちょっと寂しいよ・・・」

二人の言葉に、場が静まった。こんな風に本当に心配してくれる二人だからこそ、月夜は尚更危険に巻き込みたくはなかった。

「そうだな・・・関係ない、なんて言つて悪かったよ。でも、兄貴と姉さんが心配してくれるように、俺も二人が心配なんだよ・・・二人は、かけがえのない、大切な兄弟なんだからさ」

月夜の本気の想いが込められた言葉に、場がしんみりとする。月夜にとつて大切なのは何も楓だけじゃない、ここにいる全ての人間が、兄弟が、何ものにも代えがたい大切な人たちなのだから。

「まあ、だから事後報告つて形になつても、許してくれよ、な？」  
しょうがないな、とランスと茜は微笑みながら言った。

「んじゃ、どこから説明したもんかね・・・」  
悩みながらも、ルシファーに関する一連のことを二人に説明する。その間二人は、信じられないようなことも文句を言わずただ黙つて聞いていた。

「・・・まあ、そういうわけだ」

「天使と悪魔・・・か。本当に存在してたとは、いやはや驚きだね」

「うん、聞いてた限りじゃ・・・やっぱり、人間つて何も変わつてないんだね」

二人は頷き合いながらそう口にする。

「誰が悪かったなんて、一概には言えないよね」

楓の言葉に、全員が頷いた。特にその中でも、ルシファーの気持ち自身のことのように感じさせられた月夜の気持ちは、複雑だった。

「何が悪くて何が良いのかなんで、誰にもわからないさ。だから、俺ら人間は、自分が信じるものの為に・・・争い、殺しあうんだ、そうだろ？」

「いつだって戦争戦争・・・ほんと、嫌になるよね」

兵器として人に造り上げられた月夜とリミーナの言葉は、誰よりも重いものがあつた。

「あ、そういえば」

ふと気づいたように、月夜は声を上げる。

「戦争はどうなったんだ？」

本来ならば何も知らない月夜は焦るはずなのだが、なぜかその声は落ち着いていた。まるで、結果を知っているかのように。

「戦争は無事・・・でもないか、とにかく、終わったみたいだよ」

「過去に類を見ないほど早く終わった、ってニュースで騒いでたね」  
ランスと茜が答える中、楓とリミーナは愁い顔で俯いている。

「葉月、か」

月夜の言葉に、楓とリミーナがビクツ、と震えた。やっぱりそうかと月夜は嘆息する。

「なんとなく、そんな気がしたんだよな・・・それで、あいつ今どこにいるんだ？」

礼の一つぐらいは言ってみよう、と思った月夜は、楓とリミーナに尋ねた。

「・・・分からないよ」

楓が、弱弱しくそう呟く。月夜は一瞬不思議そうな顔をしたが、すぐにその表情を険しくする。

「分からないって、まさか・・・？そんなこと、あるはずないよな？」

自分が考えてしまったことを認められないように、月夜は聞く。しかし、楓とリミーナは答えない。

「戦争を止めたのは、葉月っていうやつなのか？ニュースで聞いた限りじゃ、翼の生えた人間のような生物が、争う両軍の何割かを壊滅させた拳銃、総司令部を潰したらしいけど・・・そう言えば、そいつは、日本の総司令部で死んでいたらしいな・・・」

黙っている二人の代わりに、ランスがそう説明した。

「え……?」

ランスの言葉を聞いて、月夜は驚きを隠せなかった。死んだ? 誰が? ……葉月が?

「な、何言っただよ兄貴、あいつが……あいつが、死ぬわけないだろ?」

「そ、そんなこと僕に言われても……」

取り乱している月夜に、今まで黙っていた楓が口を開いた。その声は、とても弱弱しい。

「多分……本当だよ、月夜」

「どうしたんだよ楓? お前まで……あいつが、死ぬようなたまじやないことぐらい知ってるだろ! ?」

言葉を荒くして叫ぶ月夜に、楓はどこまでも……どこまでも落ち着き払った哀しさを湛えて言う。

「私だつて、そう思いたい……思っていたいよ……でも、最後のお別れの時……彼は、すごく寂しそうな顔をした……まるで、自分の未来を知っているかのような……そんな、寂しそうな顔……」

その言葉で、月夜も思い出す。いつも笑っていた嘘みたいな顔……信用ないなあ、と言った時、一瞬だけ見せた哀しそうな顔……あいつは、あの時から、こうするつもりだったのではないか? という疑念が、月夜の中に浮かび上がる。

「……ふざけんなよ」

月夜は、言う。葉月に対する、怒りと哀しみを込めて。

「……ふざけんなよ! 決着もつけてないのに、勝手に人が倒れる時に勝手にそんなまねして……しまいには、死んだって……? あいつは、どこまで、人を馬鹿にすれば気がすむんだよ! ?」

「違うよ! 葉月君は……」

「分かってるよ! あいつは、最初からそのつもりだったんだろ? あいつは俺らを裏切っただよなにかいなかった、最後の最後まで……悪者演じて、誰にも何も言わず……馬鹿だよ、大馬鹿やろうだよあ

いつは・・・！」

信用してもらえないと、哀しそうに言っていた葉月。人を騙すのは得意だと、嘯いていた葉月・・・その全てに、月夜は強い苛立ちを覚えた。

「葉月君、言ってたよ・・・本当は、ルシファーが隙を見せた時点で終わらせるつもりだった、って。月夜の手を、汚させるつもりはなかった、って・・・！」

利用した、葉月はそう言った。しかし、結局月夜に何かをさせる気はなかったのだ。戦争を止める犠牲になることも、ルシファーを殺すことも、結局は全て、自身で片をつけようと葉月はしていたのだから。あの時、葉月に対して怒った楓も、今はそんな気持ちは欠片もなかった。

「・・・結局あいつは、何がしたかったんだろっな？」

「分からないよ・・・そんなこと」

うなだれながら呟く月夜に、楓もうなだれながら答えた。葉月がどんな気持ちでその道を選んだのか、本当の葉月はどんな人物だったのか、今となっては、二人には知る術はなかった。

「・・・僕には、よく分からないけどさ。一応、全て片付いたんだ、少しは・・・元気出して、いかないか？」

今まで黙っていたランスが、見かねてそう言った。

「・・・そうだよ、二人がそんな調子じゃ・・・その、葉月、って人も嫌な思いをしちゃうんじゃないかな？」

励ますように、茜もそう言った。

「・・・そう、かな？・・・いや、そうかも、な」

疲れきった様に、月夜は声を絞り出す。結局のところ、悩んでいたって何も分からないし始まらないのだ。

「・・・とりあえず、ご飯、食べるか。悪いんだけど、何か作ってくれないか、楓」

「・・・うん、ちょっと待っててね」

台所に消える楓の後姿を見ながら、月夜は大きな溜め息をついた。

月夜が目を覚ましてから一日経った後、それぞれがこれまでの生活に戻った。月夜と楓とリミーナは学校に、ランスと茜は家で家事をするという、いつもの日常が始まった。

「なんか、懐かしい気がするな。全然、日もたつてないのに」  
二月という寒空の下、見慣れてるはずの通学路を月夜は楓と並んで歩いていた。

「そだね・・・色々なことが、あつたからね」  
二人は、まるで何ヶ月ぶりかのように、通学路を歩いた。実際は、一週間もたつていないはずなのに、それはとても懐かしく、そして新鮮に感じられた。

「結局さ・・・あいつには、助けられたな」  
「うん・・・」

二人は思い出す、葉月という少年を。短い間に、二人の関係を、生活を引つ掻き回しまくった少年のことを・・・。

「あいつは、俺には出来ないことばかりやってのけたよな」  
女の子へのキザなセリフ、面白い話・・・そして、戦争を短時間で止めるということ。なるべく犠牲を出したくない月夜には、葉月がやったことは決してまねできない。それが良いか悪いかはともかく、グダグダな長期戦にすることを、世界を巻き込む戦争にするのを止めたのは、純粹にすごいことだった。

「でも、彼は彼で、月夜は月夜だから・・・」  
うん、と月夜は頷く。今楓の隣にいるのは葉月ではなく月夜で、そして戦争を止める為に死んだのは月夜ではなく葉月・・・それは、変わり様のない事実だった。

「俺さ・・・みんなを護るためなら、死んでもいいって、ずっと思ってたんだ」

月夜は、とつとつと語り始める。

「でも・・・それってやつぱり、間違いなんだよな。哀しむ人が・・・辛くなる人が、いるから」

人は人として生まれた限り、死を正当化することは難しい。意味のある死も、意味のない死も、結局残された誰かを哀しませるものにはかならない。

「私は、月夜が死んだりしたら嫌だよ？」

「でも、だからといって代わりにあいつが死ぬなんてことも間違ってるんだ」

だって、人の命は平等なんだから。そう呟いた月夜は、誰よりも人間らしさを持っていた。

「私・・・嫌な子かもしれない」

楓は、哀しそうにそう言った。

「どうして？」

「だって・・・葉月君が死んで、哀しいと思う反面。月夜じゃなくて、良かったって思ってる・・・」

そう言う楓にも、同様に人間らしさがあった。矛盾を孕み、その矛盾に試行錯誤する。それが、人間なのかもしれない。

「それで、いいんじゃないかな」

「え・・・？」

「全てを想ったり、掴み取ったりすることなんて出来やしないさ。

何かを、諦めないといけない時もあるさ・・・なんて、単なる詭弁なんだけどね」

月夜は、ばつが悪そうに頬をかきながら言う。

「楓がそう思ってくれて嬉しい、って俺は思ってるよ。あいつには、悪いけどさ・・・」

月夜のその言葉には、理屈も何もなかった。ただ純粹に、楓がそう思ってくれるのが嬉しい、そういう気持ちだけだった。

「うん・・・ずっと、一緒にいてね？」

屈託のない微笑みを浮かべながら言う楓に、月夜は顔を赤らめた。

「ああ、任せろ」

「ふふ」  
色々なことがあった、それでも一緒にいられる幸せをかみ締めながら、二人は学校へと歩いていった。

久しぶり（に思える）の学校にも関わらず、月夜は相変わらず授業中に寝息をたてていた。いつもは静かに寝ているため、大体の教師が諦めて放っておくが、今日は勝手が違った。うーんうーん、とうなされていたり、ぐおーぐおー、といびきをかいたりしている。疲れているのか？と教室の全員が思う中、さすがにうるさいので教師が月夜をゆすつて起こそうとする。しかし、一向に起きる気配がない。教師が諦めようとした時・・・ペチン、といい音が教室に響いた。教室のほぼ全員の視線が集まる中、ペチペチと続けて音が響き、最後に、ゴスツ、という鈍い音が響いた。

「・・・痛い」

ようやく目を覚ました月夜は、頭をさすりながら口を尖らせる。

「何すんだよ、楓」

「何するんだ、じゃないでしょー。寝るのは勝手だけど、みんなに迷惑かけちゃだめよ」

月夜の頭を叩きまくっていたのは、いつの間にかその隣に立っていた楓だった。サーシャの件で、何かとやばい噂がたっている月夜の動向を教室のみんなは息を吞んで見守った。

「うーむ・・・うるさかった、俺？」

「ああ。楓、楓！って寝ながら叫んでたぞお前」

隣の席の利樹がからかうように言う。楓は容赦なくその利樹の頭もはたいた。

「利樹君？」

そう言う楓は、なぜか笑顔だった。

「嘘です、ごめんなさい」

なんとも言えない威圧に気圧され、利樹は素直に謝った。



「どこぞのコントみたいだな・・・あいたたたた」  
ぺちぺちと再度頭をはたかれる月夜。

「月夜のせいでしょうが！」

「悪かった悪かった、うるさくしてすいませんでしたごめんなさい」

「もう寝ちゃだめだからね」

「はいよ」

そう言われ、楓は満足気に席に戻っていった。楓の隣の窓際の席に座っていた女生徒は、楓すごいね、と呟き。楓はそれに対し、いつものことだよ、と返していた。

その後の授業も、月夜がうるさく眠っているたびに、楓は四回ほど続けてやり、そして一日が終わった。一日の間に、楓の位置づけが、猛獣使い、になっていたことに本人は知る由もない。

放課後、月夜の席付近に、いつもの面子がそろっていた。月夜を始め、楓、利樹、紫の四人だ。

「なんか今日は、やけに攻撃的じゃないか、楓？」

何十回と叩かれた頭をさすりながら、月夜は不満の声をあげる。

「月夜が寝てるからでしょ？進級できなかったらどうするのよ・・・」

「  
楓は楓なりに、月夜のことを心配しての行動だったが、実はもう一つ理由があった。月夜と学んだり、一緒の時間を共有したい、というものだったが、それは楓にとつてわがままなことで、恥ずかしいことでもあったので口には出さない。」

「月夜はともかく・・・俺も被害多いんだけど・・・」

「利樹は自業自得ね。余計な軽口ばかりたたいてるから悪いんでしょ？」

月夜と同じく頭をさすっている利樹に、容赦なく紫は言い放つ。

「ちよっとしたお茶目じゃなか、なあ、月夜」

「俺に振るなよ」

「みんな冷たいなあ、クスン」

クスン、とか言ってる時点で、もうなんだかなあ、といった感じの利樹だったが、いつもこんな感じなので誰もつっこまなかった。

「まあ、さっさと帰ろうぜ」

月夜はそう言いながら鞆を持って立ち上がるが、誰も動こうとはしない。

「ん？どうしたんだ」

「えーとね、今日は私、紫と本屋に寄ってから帰るから、一緒に帰れないの」

「なんだ、そういうことなら先に言ってくれりゃいいのに。んじゃ、先に帰ってるわ」

月夜は特に気にした様子もなく、言う。

「俺も部活だからな、悪いなー月夜」

「お前は俺と方向違うだろうが」

ノリが悪いなあ、と笑いながら利樹は月夜の肩をバンバン叩く。

「悪いわね、月夜君。楓、お借りするわ」

「ああ、気にしないでよ紫ちゃん」

そんじゃ、お先ー、と言いながら、手をひらひらさせて月夜は教室を出て行った。

「それにしても、珍しいわね。楓が本屋に誘うなんて」

「んー・・・なんでだろ？別に欲しい本があるわけじゃないのに・・・なんとなく、そうしなきゃいけない気がしたの」

本当に分からない、といった感じで首をかしげる楓を見ながら、利樹と紫も首をかしげた。

「ま、とにかく行って来ればいいんじゃないかね。俺もそろそろ行くわ、またなー」

そう言い残し、利樹も教室を去って行った。

「じゃあ、私たちも行こうか」

「そうね、ついでに、色々見てまわりましょ」

残された二人も、話しながら教室を出て行った。

「寒いなー・・・」

灰色の空を見上げながら、月夜は帰り道を歩いていた。月夜は灰色の空を見て、自分の深層心理の世界のことを思い出す。曇った冬の景色のように、灰色の世界、見渡す限りは荒野で、まるで死んでしまっているかのような世界。そして、そこで再会したルシファー・・・彼の記憶を見て、気持ち共有して、結局、何が正しくて何が間違っているのか、月夜には分からなくなりつつあった。

（愛する人のために・・・か。もし俺が、同じ状況に置かれたら、俺はどうするんだらうな・・・）

何もものにも代えがたい愛しい楓。もし楓を護るために、人類を全て殺さなきゃいけないようになったら？月夜には、答えが出せなかった。

（いや、前提そのものが矛盾してるし、ありえないこと、だもんなあ）

一人の人間と、世界の人間全てを秤にかけること自体がおかしい。そう思いながらも、その疑問は月夜を悩まし続けた。

「月夜」

月夜が悩んでいると、誰かに声をかけられた気がした。

「ん？」

辺りを見回しても、そこには誰もいない。

「気のせい、か・・・」

気のせいとは思いながらも、その声が聞き覚えのある声だったため、月夜は戸惑った。

「まさか、なあ・・・そう簡単に、死ぬたまじゃないとは、思ってたけど・・・」

そう呟く月夜に、再度声が聞こえた。

「公園」

公園？そう言われ、月夜の頭に真っ先に浮かび上がったのは、幼い頃よく遊んでいた家の付近にある公園だった。

「まどろっこしいやつだな・・・ここで姿を見せれば、いいのによ  
そう言いながらも、月夜の声にはどことなく嬉しさが込められてい  
た。死んだと思っていたばかりに、その感動は大きかった。

「仕方ない、行ってやるか」

月夜は急ぐように足を速め、公園へと向かった。

数分足らずで、月夜は目的の公園についた。相変わらず、幼い頃と  
違って人はおらず、園内は静寂に包まれている。月夜は公園の中に  
足を一步踏み入れた、その時、妙な感覚が体に走った。まるで薄い  
水の膜を通り過ぎたような、そんな感覚だった。

「なんだ?・・・まあ、いいか」

月夜はそう言いながら、公園にある数少ない遊び場、ブランコに腰  
掛けた。鞆を地面の上に置き、前のめりになりながら膝の前で両手  
を組んだ。

「さて、いい加減姿を見せたらどうだ?なあ、葉月」

「折角の感動の再会なんだ、もう少し雰囲気を出してくれても良い  
んじゃないかな?」

いつの間にか月夜の隣、もう一つのブランコに腰掛けていた葉月が、  
いつもの軽い笑みを浮かべて言う。どことなく、幽霊のような、そ  
んな感じにうつすらとしている。

「馬鹿言え、なんでお前相手にそんな演出しなきゃならないんだよ」  
呆れたように月夜は言う。しかし言葉とは裏腹に、まるで久しぶり  
に会った友人に言うような、そんな声だった。

「君はいつだつてつれないね、そんなことじゃ楓に愛想尽かされち  
やうんじゃない?」

「ないない・・・多分、ない」

いまいち自信なさげに言う月夜に、葉月は笑った。

「くすくす、君は相変わらずだね・・・」

「うっせ、そういうお前は、どうなんだよ?」

「どう、って何がだい?」

聞き返されて、月夜は軽く悩んだ後口にした。

「学校とかだよ、来ないと進級できなくなるぞ」

「学校・・・ね」

「ああ、確かにお前はあいつに言われて編入して来たのかもしれないけど、高校ぐらいは出ておいたほうがいいんじゃないか？みんなも、色男のお前がいないと寂しがるだろうよ」

葉月の様子がおかしいことに気づかず、月夜は皮肉気にそう言う。

葉月はしばらく何かを考えた後、言いくそうに言った。

「誰も、寂しがりなんてしないさ。君は、気づかなかったのかい？

ああ・・・寝てばかりいたんじゃない、気づきようもないかな」

「は？何言つてんだよお前・・・？」

月夜の疑問を尻目に、葉月は続ける。

「いや、君達にももう影響が出てる、ということかな・・・」

寂しそくに、葉月は笑みを浮かべる。

「どういうことだよ・・・？」

「今なら、まだ分かるかな？学校で・・・教室で、変に思ったことはなかったかい？」

「変に・・・思ったこと・・・？」

そう言われ、月夜は元々回転の良い頭をフルで動かした。そして、すぐにいつもと違った異常な光景を、思い出した。

「あれ・・・そんな、なんで？」

「気づいた？・・・良かった、まだ完全に忘れられたわけじゃないみたいだね」

「待て、おかしいだろ？なんで・・・」

お前の席に、違う誰かが座っているんだ？

自分の声が、月夜には他人のものに感じられた。それ程、自分が言っていることがおかしく、信じられないことだった。

「でも、誰もそれを気にもとめていなかったはずだよ」

確かに葉月が言うとおり、誰もそれを気にはいなかった。周りの人間も、自分の席だと言わんばかりに座っていた人間も、月夜や

楓でさえ、その異変に気づけてはいなかった。

「僕は・・・この世界にはいけない存在なんだ。ルシファー云々じゃない、もっと大きな、そう・・・世界そのものの道具として、使われる限りは、ね」

呆然としている月夜に、葉月はそう言った。いてはいけない存在・・・？そんなの、おかしいだろ・・・？

「道具つて・・・なんだよ？世界そのもの？お前は・・・何を言ってるんだ!？」

「知らない方がいいよ、どうせ、言ったところで君は全てを忘れてしまうのだからうけど・・・」

「なんなんだよ・・・忘れるとか、一体お前は・・・」  
「ありがとう」

月夜の言葉を遮り、葉月は突然感謝の言葉を口にした。

「は・・・?」

「だから、ありがとう。それだけを言いたくて、僕は戻ってきたんだよ。・・・楓には、未練を残してしまいそうで、会えなかったんだけどね」

いつもと違った微笑み、心からの笑顔を浮かべて、葉月は困惑する月夜に続ける。

「君達が忘れてしまう前に・・・言いたかったんだ。短い時間だったけど、僕は・・・君や楓、クラスみんなと知り合うことが出来て、楽しかった。僕の短い命は、それだけで・・・意味を、持てたんだ」

うつすらと、葉月の姿が薄くなっっていくような感覚に、月夜は身震いをした。

「何・・・言っただけやがる!?感謝の言葉だ?そんなものいらねえ!そんなもの・・・そんなものは、これからも、ずっと先も、言えるようなことだろうが!？」

今にも消えてしまいそうな葉月を引き止めるために、月夜はそう怒鳴る。

「君には分かるだろ？僕はもう・・・だから、最後に、言いたかったんだ・・・」

徐々に、空気に溶け込むかのように、葉月は薄くなっていく。まるで、最初から葉月玉という人間が、存在しなかったかのように。

「わかんねーよ！わかりたくもねーよ！」

分からなくても、いい。君には、そんな感覚、理解しなくてもいい。もはや、人の声なのかどうかすら怪しいほどに、葉月の言葉は現実味を失っていく。

「おい・・・葉月、待てよ・・・」

君達に会えて、本当に良かった。ありがとう・・・そして、さようなら。

その声は、月夜の耳に残る。

「おい！葉月・・・？おい！返事しろよ、おい！！」

それっきり、葉月の声はもう月夜には聞こえなかった。どんなに名前を呼んでも、叫んでも、葉月からの返答は一つとしてない。

「馬鹿やろう・・・この、大馬鹿やろうが・・・！！」

涙を流しながら、月夜は叫ぶ。

「俺は・・・お前にまだ・・・ありがとうって、言っていないんだぞ・・・！助けてくれて、みんなを護ってくれて・・・自分を犠牲にまでして、戦争を止めたお前に、俺はまだ・・・自分だけ、好き勝手言ってる・・・消えちまいやがって！！」

どうしようもない気持ちになりながら、月夜は地面を殴る。どんなに涙を流しても、どんなに殴っても、葉月は月夜の隣にはいない。いや、もう世界に存在すらしていない。

「ありがとう・・・って・・・言わせるよ・・・！！」

葉月が消えるまで、月夜はその言葉を口にするのが出来なかった。言ってしまったら、もう二度と会えない気がしたからだ。それが、最後の言葉になってしまふと、思ったからだ。しかし、結局月夜は葉月に礼を言うことは出来なかった。だからこそ、泣いた。虚しくて、切なくて・・・。ピキン、

「・・・な!？」

そんな月夜の気持ちを壊すかのように、何か割れるような音がした。それは月夜だけに聞こえたようで、世界全てに聞こえたようでもある。時間にして、僅か一秒足らず。

「・・・あれ?俺、何してたんだっけ?」

僅か一秒足らずで、葉月の存在は・・・この世界から消え、そして、完全に忘れ去られた。

「なんで俺・・・泣いてるんだろ?」

月夜は、今どうして自分が泣いているのか分からなかった。それでも、忘れてはいけない何かを失ってしまったような・・・そんな気がした。

「なんだよ・・・どうして、こんなに・・・」

胸が痛いんだ?

涙は止まることを知らず、月夜はしばらくの間、胸を押さえ独り涙を流し続けた。

わけの分からない憂鬱を抱えたまま、月夜が家に帰ると、見慣れない靴が玄関先にあった。来客か?と思いつながら声がするリビングに行くと、そこにはランスとリミーナ、そして、この家の住人ではない見慣れた顔がいた。

「サーシャ!？」

「やつほほー、月夜、元気してる?」

突然の再会に、月夜は驚いた。

「やあ月夜、おかえり」

「おかえりなさい、お兄ちゃん」

「あ、ああ、ただいま・・・で、何でサーシャがいるんだ?」

月夜の言葉に、サーシャはむくれたように言う。

「何よ、私がいちゃいけないの?」

「いや別にいちゃいけないわけじゃないけど・・・俺は、なんでお



前がここにいるんだ？つて、理由を聞いてるんだよ」

「理由、それはねえ」

サーシャはランスとリミーナの二人に目配せをした。二人は、なんとなく困ったような顔をする。

「上からの命令でね、その二人をうちの国に再びスカウトしにきたのよ」

「え・・・？」

「そういうこと、らしいんだよね」

「ばつが悪そうに、ランスは頬をかく。」

「色々あつてさ、今は多くの国が不安定な状況なの。特に、その中でも日本とアメリカはね。お互い戦う意志はもうないし、平和協定やらなんやらの話が持ち出されてるみたいなんだけど・・・それでも国は混乱してる。だから、現役時代・・・いや、今も現役ね。優秀な人材であるランスを、軍に戻したいっていう要望が出るのよ」

「今更？一度軍を辞めた兄貴を戻したいって、どういうことだよ」

サーシャは溜め息をつきながら、怒ったように言う月夜をとりなすように言う。

「それだけ、人材が不足してるってことなのよ。リミーナは、ティアーナ博士からの要望なんだけどね」

ティアーナ、その名前を聞いて、月夜も懐かしさを感じた。

「母さん、ね。服役中じゃなかったのか？」

「今はそんなこと言ってる場合じゃないのよ。彼女も優秀な人材の一人だからね、急遽牢の中から出れた、つてわけ。リミーナの場合は、国からというよりも、ティアーナ博士個人から、と思っってもらえればいいかしら」

「話は分かったよ。でも、スカウトしに来たってことは、強制じゃないんだろ？」

「一応ね、でも、二人は多少乗り気みたいよ？」

サーシャのその言葉に、月夜は驚いた顔で二人を見る。どちらも、ばつが悪そうな感じに答える。

「確かに、今の生活も悪くないんだけどさ・・・いつまでも、ただらしてゐるわけにも、いかないかな、と思うんだよね。それに、なんだかんだで、あの国は僕の母国なわけだし」

「私も・・・友達やお兄ちゃん、楓お姉ちゃんと離れるのは寂しいけど・・・ママに、会いたい」

申し訳なさそうに答える二人だったが、同時に、かたい決意を感じさせるものがあつた。

「二人が良いって言うなら、止める権利は俺にはないけどさ・・・少しぐらい、相談してくれてもいいんじゃない？」

「悪いな、その話自体急だつたんだよ。僕もさつき、彼女に聞いたばかりさ」

当の本人、サーシャはゆつくりとお茶をすすっている。

「やれやれ・・・本当に、急な別れが多いな、今日は・・・」

自分が言った言葉に、月夜は疑問を感じた。多い？何で俺は、そんな風に思つんだろう？・・・まあ、いつか。答えが出なかつたため、月夜はすぐに諦めた。

「決まりで、いいのかしら？」

「ああ、思い立ったが、吉日つてね」

「そういや兄貴、姉さんのことはどうするんだ？」

月夜の指摘に、ランスは少し言葉を詰まらせた。

「あー・・・良ければ、一緒に来て欲しいんだけど・・・」

「なんで俺のほうを見て言うんだよ！大体から、姉さん今どこにいるの？」

「茜お姉ちゃんなら、さつき買い物行つたよ」

ランスの代わりに、リミーナがそう答えた。

「ということは、まだ何も知らないってわけか・・・姉さんなら、ついていきそうな気はするけどね」

月夜は大きな溜め息をついた。ランス、茜、リミーナ・・・三人がいなくなれば、また楓と二人きりということになる。それは月夜にとって嬉し恥ずかしいことではあるが、同時に寂しいことでもあ

った。

「随分と、寂しくなるな……」

そう呟く月夜に、ランスは笑顔で言う。

「何言ってるんだよ、永遠の別れ、つてわけじゃないだろ？いつだって、遊びに来いよ、前みたいにさ」

「とはいっても、ねえ……俺も学校あるし」

距離や休みを考えれば、精々、一年に一、二回会えればいい方だろう。月夜にはブラコンやシスコンの気はないが、それでもなんとなく寂しかった。

「私も寂しいよ……でもやっぱり、人間には帰らなきゃいけない場所っていうのがあると思う。私やランスは、本来ここにいて人間じゃないんだよ」

ここにいてはいけない人間、存在してはいけない人間……突然胸を締め付けられるような感覚に、月夜はその場にしゃがみこむ。

「ど、どうしたんだ？月夜」

「お兄ちゃん？大丈夫？」

心配そうに覗き込んでくる二人に、月夜は息も絶え絶えに言う。

「人間は……どこにだって、いても良いに……決まってるだろ？アメリカが……お前らの本来の居場所かも……しれない。でも、ここだって、お前らの居場所なんだから」

この場にはいない誰かに言うように、もう言うことが出来ない誰かに言うように、月夜はゆっくりと言葉を続ける。

「だから、なんか会ったら、また帰って来いよ。お前らは大切な家族だし。それに、少なくともここは、安らげる場所だったはずだぜ？」

月夜の言葉に、ランスとリミーナは照れたような笑みを浮かべる。

「お前がそんなこと言うなんて……驚きだよ」

「私も、びつくりしちゃった」

「俺のことを、いつもどんな目で見てんだお前は……」

俺だって、みんなのこと大切に思ってるんだぞ。と言いながら、照

れたように月夜はそっぽを向く。

「はは、悪い悪い・・・まあ確かに、お前は優しいやつだもんな、うん」

笑いを押し殺すように言うランスに、月夜は、うつせ、と呟く。

「はいはい、別にすぐお別れってわけじゃないんだから、そんな感動の家族劇なんてやらないでいいから」

ぱんぱん、と手を叩きながら、今まで黙って見ていたサーシャが言う。心なしか、怒っているようにも見える。

「まーったく、少しは帰る場所がない者の立場にもなりなさいよね・・・とにかく、飛行機のチケットやらなんやら色々手続きもしないといけないから、三日はかかるわよ」

サーシャの言葉に、月夜は胸が痛むのを感じた。サーシャの帰るべき場所をなくしたのは、紛れもなく月夜本人だからだ。

(親のことか、気にして無い風に見えて・・・結構、考えたりしてるのかも・・・な)

何か言うべきかどうかを迷ってる月夜をよそに、ランスが疑問の声を上げる。

「民間の飛行機で移動するのかい？軍の飛行機じゃなくて？」

「今は民間人であるあなたたちを軍の飛行機で運ぶわけにも行かないでしょ？・・・まあそれは本当は建前で、ただ単にそんなものを出す余裕もお金もないのよ」

やれやれ、といった感じで、サーシャは溜め息を吐き出す。結構、苦労しているようだ。

「私も少し、ここで休ませてもらおうかしら。あなたたちが出発する、三日後ぐらいまでだけだね」

その言葉と共に吐き出された暗鬱な何かを見て取る限り、結構どこるではなく相当苦労してるようだ。

「部屋は余ってるし、少しゆっくりしていけよ」

そんなサーシャの気持ちを汲み取ってか、月夜はそう言う。

「ん、ありがと。それじゃ私は早速・・・寝るわ。元々泊まる予定

で荷物は持つてきてるしね」

椅子の横には、そこそこ大きめの鞆が置いてある。準備がいいやつだなぁ、と月夜はぼやいた。

「夕ご飯はいらないから、明日の朝にでも起こしてね。それじゃ」  
てきぱきとした動作・・・の中に気が緩んだ怠情感を見せながら、サーシャはさつさとリビングを去っていった。

「あいつも色々大変だなぁ・・・」

「戦争後なんてそんなもんだよ、平和が戻ったところで、事後処理やら何やら追われて当分は暇なし、といった感じさ。今は、人手不足だろうし尚更ね」

他人事のように言うランスだが、幼い頃より軍に所属している彼には、それが日常的なものなかもしれない。

「そう言えば、楓お姉ちゃんは一緒じゃないの？」

「ん？ああ、紫ちゃんと一緒に本屋に行くとか言ってたけど・・・  
そう遅くならない内に帰ってくるだろ」

リミーナの問いに、月夜は心ここにあらずといった感じで答える。

「どうしたの？お兄ちゃん」

そんな月夜の様子を見て取ったりミーナは、心配そうにそう尋ねた。

「いや・・・うん、なんでもないよ・・・なんでも・・・」

そう答えた月夜だったが、頭はサーシャのことでいっぱいだった。

(結局どこまで行っても・・・俺が犯した罪は、消えないんだよな・・・)

初めて兵器としての力を発揮したあの頃のことを、月夜は鮮明に覚えていて。そのみならず、今までの破壊・虐殺を一つとして忘れたことはなかった。月夜自身がどんなに変わったところで、その罪は消えることなく、常に月夜の心に居続け、そして縛り続けているのであった。

その日の夜、月夜はサーシャの部屋の前に来ていた。色々悩んだ結

果、月夜は謝ろうと思っていた。謝罪をしたところで何かが変わるわけでもないし、罪が消えるはずもない。それどころか、月夜自身のもやもやとしたものをただ払拭したいだけの、自己満足にしか過ぎないのかもしれない。それでも、月夜はサーシャのあの言葉に動かされ、今ここにいた。

「起きてるわけ・・・ないよな？」

軽くノックをしながら、月夜はそう呟く。しかし、月夜の予想を裏切るように、中からは、どうぞ、という声が返ってきた。月夜は軽く緊張しながら、ドアを開けて中に入る。

「よう、起きてたんだな」

「疲れてるんだけどね・・・どうも、寝付けなくって」

部屋は薄暗く、窓から差し込む月の光だけが部屋を照らしていた。布団の上で上半身だけ起こしているサーシャは、月の光を受け淡く輝き、どこことなく幻想的な雰囲気醸し出していた。月夜は軽くどきまぎしながら、サーシャの近くに胡坐をかいて座った。

「それで、どうしたのこんな時間に。夜這いなら、かける相手が違うんじゃない？」

「からかうような口調のサーシャに、月夜は困ったように言う。

「茶化すなよ・・・本当は分かっているんじゃないか？お前もさ」

「なんのことかしら？」

サーシャはとぼけるように言った後、真剣な月夜を見て溜め息をついた。

「はあ・・・そんな性格で、苦労しない？」

「苦労しっぱなしだよ、でもまあ・・・それでも嫌なものは嫌なんだ」

月夜の言葉に、サーシャは一度だけくすりと笑うと、少しだけ真面目な顔をして口を開いた。

「ほんと、私があんなく漏らした言葉で、わざわざ謝りに来るなんて、ね」

サーシャは、あの時の月夜の不自然さを見逃してはいなかった。ラ

ンスとは違った軍人としての鋭さ、女の勘が混じったそれは中々のものだった。

「あんなこと言ったけど、別に私は気にしてないのよ。そりゃ、親がいなくて不自由だった時もあつたけど、今更そんなことどうでもいいし。何よりあなたは、私にそれ以上のものをくれたんだから」

「でも、俺がサーシャの帰る場所を無くしたのは事実だろ？ いや、帰る場所だけじゃない・・・なんていうのかな、家族とか友達とか・・・心のよりどころ？ みたいな、そういうやつ」

もちろん月夜は、意図してやったわけではない。しかしそれでも、失われた多くの命があり、失われた多くの絆が確かにあつただから。

「確かにそうかもね・・・あの頃の私はね、全ての物事に対して無気力無関心だったの。自分を含めて人間が嫌いで、世界の終わりをよく望んでいたのを今でも覚えているわ。それは、今でもそうかもしれないけど・・・」

とつとつと、サーシャは昔のこと踏まえながら、誰にも見せたことのない心情を語っていく。

「全ての人間が、つまらない生き物だつて思ってた。でも、あなたは違ったわ・・・あなたは私に見せてくれた。変わることがないと思っていた世界が、一瞬にして変わる様を」

その言葉に、月夜は胸がズキンと痛んだ。

「前にも言ったわよね？ あなたなら、この世界を壊してくれる、人間を壊してくれる、って。両親も友達も、誰一人何一つ私に与えてくれなかったものを、あなたは私にくれたわ。それは本当に感謝してるわ・・・私に、生きる意味を与えてくれたのは、あなたなんだから」

違う、それは違う。月夜は、そう言いたかった。しかし、月夜が望んでいるいないに関わらず、彼がもたらした結果は多くの人間に影響を及ぼした。その事実が、月夜に口を開かせなかった。

「でも・・・でもね？ 最近よく思う時があるの、もしあなたがいな

ければ、あなたが私の世界を変えなければ、私はどうなっていたんだろう、って」

そんなこと今更考えても、仕方のないことなんだろうけど・・・と、サーシャは続ける。

「両親がいて、友達がいて・・・つまらない生活があって・・・でもそれは、とても大切なもので・・・いやね、歳とると、そんなことばかり考えちゃって。今更、どうなるわけでもないのに」

月夜の体に、嫌な汗が噴き出る。覚悟はしているつもりだった、責められるのも恨まれるのも・・・しかし、本当は覚悟なんてしていなかったのかも知れない。月夜が犯した罪の大きさは、生半可なものではない。殺してしまった人、生き残った人、その一つ一つの全てを受け入れてしまっていたら、人は人であることなんて出来はしない。罪に押しつぶされないように、心のどこかで自分を納得させる。それは人としての、精一杯の抵抗であった。

「・・・どうして、泣いてるの？」

「え・・・？あ・・・」

月夜は言われて初めて、自分が涙を流していることに気づいた。それは罪の意識からなのか、それともただ単に哀しかったからなのか、月夜には分からなかった。

「泣かないでよ・・・あなたの弱いところなんて、私は・・・見たくない」

首に腕を回し、サーシャは月夜を抱き締める。サーシャは月夜の細さに驚いてしまった。それは外見だけではなく、中身も含めてだ。

触ったら折れてしまいそうな、そんな月夜の弱い部分に初めて触れ、サーシャは切なくなってしまった。神、とまではいかないにせよ、自分が特別だとずっと思い込んできた少年・・・しかしそれは単なる幻想だった。今ここにいる月夜という少年は、インフィニティと呼ばれていたあの頃とはもはや別人であり、弱くて脆いただの人間だった。そう、所詮はただの人間なのだ。サーシャの腕に、不意に力がこもる。



「殺したいか？俺のこと」

消え入るような月夜の声で、サーシャは我に返った。自分は何をやっているんだろう、と思いつつも、サーシャは気持ちとは裏腹な言葉を口にする。

「ずつとあなたは特別だと思ってた。世界を変えられる人間だと思ってた……でも、あなたはこんなに弱く、脆い人間……ただの、人間なのね」

相手に自分の理想を押し付ける。それは単なるわがままだと、サーシャは分かっていた。それでも、どうしても許せなかった。

「俺は……人間じゃない。その気になれば、世界だってなくせる、変えられる。そんな生物は……人間じゃ、ない」

「じゃあどうして、泣いているの？あなたが人間だからでしょ、弱くて脆くて……でも、生きていこうと、強い意志を持っている。それを人間といわなくて、なんていうのよ」

サーシャの心に、崇拜や尊敬とは違った、別種の感情が浮かび上がっていた。弱い月夜を護りたい、励ましてあげたい、という、一言で言えば恋慕に近い、そんな感情だった。本当はその気持ちは、昔からあったのかもしれない。ただ、尊敬などの恋慕とは違う種類の感情が邪魔をし、サーシャ本来のその気持ちは、見えなくなっていた、だけに過ぎないかもしれない。

「私は……あなたに落胆したわ。でも、そんなあなたも……私は好き、なのかもしれないわ」

先ほどとは違う意味で、サーシャは腕に力をこめる。支えたい、そんな気持ちは、強かった。

「……俺は、」

「良ければ、私たちと一緒に来ない？」

月夜の言葉を遮って、サーシャの声が響く。サーシャ自身、それを口にしたのは自分でも驚いていた。

「もちろん、危険なまねはさせないわ。私があなたを護るもの……一緒に来れば、みんなともお別れせずにはすむわよ？」

それは月夜にとって、悪くないものだった。それでも、月夜には絶対にそれをよしとしない理由があった。

「・・・それも、悪くないかもしれない。でも、俺はさ・・・今の状況が気に入ってるし・・・何より、」

「分かっている、それ以上言う必要はないわ」

どうあがいても、サーシャに勝ち目はない。それは誰よりも、サーシャ自身が分かっていることだった。月夜には楓が必要で、そして楓には月夜が必要なだから。

「あーあ・・・妬けちゃうなあ」

サーシャはそう言った後、ごめんね、と呟き、月夜にキスをした。突然のことに、月夜は驚いて身動きが出来なかった。

「な・・・っ」

ようやくそう言った時には、既にサーシャの唇は月夜から離れている。月夜は先ほどの落ち込んだ様子も見せないほど、顔を赤くしてまくしたてた。

「お・・・お前、何してんだよ！そういうのは好きな人とやるもんであって・・・」

「アメリカじゃ、これぐらいは挨拶よ？」

真っ赤になってる月夜とは対照に、サーシャは至って冷静だった。

「それに、私はあなたのこと好きみたいだし・・・まあ、あなたは私のことなんてなんとも思っていないでしょうけどね」

「いや別になんとも思っていないわけじゃないけど・・・」

しどろもどろになっている月夜は、今時の学生には珍しく、初心で可愛げがあった。

「さ、難しいお話はもう終わりにしましょ。とにかく、私は気にしてないわ。あなたには、気にするなって言う方が無理かもしれないけど・・・あんまり、考え過ぎて落ち込んだめよ？どんなことだって、過ぎて歳をとっちゃえば良い思い出になるんだから、ね？」  
優しく、励ますようにサーシャは言う。真っ直ぐに見つめてくるサーシャの瞳から、いまだに恥ずかしがっている月夜は顔をそらした

がら、言う。

「良い思い出には・・・絶対にならないだろうけどな」

「そんなもの、個人の考え方次第よ。忘れる、なんて言わない。でも、それをいつまでも引きずり続けたんじゃ、いつか壊れちゃうわよ？」

サーシャの言っていることはもつともだった。過去や思い出は、現在や未来の自分を作り上げるのには大切なものだ。それは良い影響になることもあり、反面悪い影響になることもある。

「分かつては、いるんだけどさ・・・それでも、やっぱり、ね」

月夜の心の闇は、晴れない。サーシャは業を煮やし、月夜の顔を両手で挟んだ。

「年上の言うことは素直に聞いときなさい。大体から、あなたがそんなんじゃあの子も哀しむわよ？」

「痛い痛い・・・んなこと・・・分かつてるよ」

切なそうに言う月夜だが、両側から顔を挟まれているため面白い顔になっている。

「まあ、それでもうまくやれて来たみたいだし・・・大丈夫そうね」  
サーシャは月夜の顔を離し、ふう、と溜め息をつく。

「もうほんと、言っても埒があかないし。今日は終わり、私は寝る。それじゃおやすみ」

きっぱりとそう言い放ったサーシャは、月夜がいるにも関わらず横になって布団を頭まで被った。

「ああ・・・邪魔して、悪かった。おやすみ、良い夢を」

多少気持ちは晴れたが、月夜の心はいまだ暗鬱としている。元より気持ちの切り替えが早い月夜だからこそ、そこまで心配する点はないのかもしれないが。月夜が部屋を出て行った後、サーシャはピョコ、と布団から顔を出した。その瞳は、微かに潤んでいる。

「あーあ・・・ふられちゃったなあ・・・私だって、初めてだったんだけど・・・ね」

いまだ熱い感触が残る唇に指で触れながら、サーシャは呟く。

「どうして・・・出会ってすぐ、言えなかったんだろ・・・馬鹿・・・ほんと、馬鹿・・・」  
言えなかった理由なんて、本当は分かっているサーシャだったが、後悔するようなまねは、したくなかった。そして、誰にいうでもなく、馬鹿、と呟き続け、そして深い眠りに落ちていった。

サーシャが来てからは、それこそ毎日が嵐のようだった。お別れ会という名目上、每晚毎晩のめやさわげやの宴会続きだった。茜が飲んで暴れ、サーシャが飲んで笑い転げ、ランスが飲んでぶつ倒れ、リミーナが飲んで騒ぎ、楓が飲んでみんなを小突き回し、そして月夜が飲もうとすると茜と楓が、絶対にだめ、と言って止めた。結局、手続きやらなんやらが長引き、ランスたちが家を出るのはサーシャが来てから五日後になるらしいとのことだった。

そして、最後の夜。月夜を除いたみんなは、酔って暴れていた。

「やあ〜月夜〜飲んでる〜？」

一人素面の月夜は、被害に合わないように壁際に座ってちびちびとジュースを飲んでいた。

「のんでねーよ、そろいもそろって止められるし」

酔っ払い同士の壮絶な光景に笑いをもらしながらも、隣に来た茜にやや不機嫌そうにそう答えた。

「だって〜〜月夜はのんじゃめっなんだよ〜〜？だって〜高校生だもんね〜〜」

けらけらと笑いながら月夜の肩を叩く茜、どうやら相当酔っている様だ。

「楓も高校生だしリミーナに至っては小学生だぞ・・・つか、酒臭いよ」

「なにお〜〜うちは臭くなんてないも〜〜ん、そんなこと言うなら〜〜かいでみなさいよー」

酔っ払いには常識が通用しなかった。しかしどうでもいいことには過敏なようだ。服がはだけてる茜が抱きつくように体を寄せてきたので、月夜は赤くなつた顔を背けながら体を押し戻そうとした。

「よ、酔っ払いに興味はねーつつうの、つか服ちゃんと着るよ」

「あによ～～あ～～、もしかして～～照れてるの～～？」

ふふふ、と嫌な笑いを浮かべながら、茜は更に体を寄せてこようとする。

「ちげーつつうの!!」

「あー！おにいちゃんが浮気してるー！！」

月夜がそう叫んだ瞬間、リミーナが月夜を指差しながら叫んでいた。ひどく嫌な予感がする・・・月夜は本能で感じ、とつさに逃げようとした。しかし・・・

「月夜ー！！」

逃げる前に、楓が叫びながら月夜に体当たりをかました。酔っっている為力の調整が出来ず、それは本気の体当たりだった。

「ぐはっ・・・」

引っ付いてた茜と本気で突っ込んできた楓共々、月夜は吹っ飛んだ。背中を打った痛みで、月夜が呻きながら転がっていると。

「浮気なんて、ぜえったいゆるさないんだからねー！！」

痛みを感じていないのか、楓が月夜にしがみついた。

「ばっか！誤解だ誤解！！」

どうにか釈明しようとする月夜だが、茜と楓につかまってる拳句、酔っ払いには常識が通用しないため意味を成さなかった。どうにか助けを求めようと、首だけ回して辺りを探る月夜だったが、ランスは倒れ、サーシャとリミーナは何やら月夜の方に向かってきている。今までにない程の絶望が、月夜を包んだ。ああ、これはまじ・・・死ぬかもなあ・・・。

「月夜は私と、ずーっとずーーと一緒にいるんだからねー！！」

「楓ばかりずるい～～～！！」

「むー！私もおにちゃんと一緒にいるの〜！」

「私だつてー！」

月夜は四人にくつつかれた。正確には、潰されている。女四人に男一人、ある意味羨ましい状況だが、当の本人はそれを考えている余裕は欠片もない。

「はなせー！つか、ちょ！？お前ら！誰だ、服脱がしてんのは誰だ！？」

それぞれが何やら口々に言いながら、月夜の服を剥いでいく。酔いに濁った八つの瞳、そこには正気の文字は一つとしてなかった。

「やめろつってんだー！ー！」

ズボンを半脱ぎにされ、シャツは完全に脱がされ貧弱な上半身が外気にさらされている。さすがにまずいと思つた月夜は、そう叫びながら容赦なく力をぶつ放した。小規模な爆発が起こり、煙がたちこめる。キヤー、と各々が悲鳴をあげ、次いでバタバタ、と何かが倒れる音がした。煙が晴れると、月夜を除いた全員はみんなのびていた。

「やれやれ・・・ほんと、こいつらは・・・」

ぜえぜえと息をしながら、月夜は顔を赤くして呟く。そして、すぐに素早い動作で脱がされた服を身に付け、一息ついた。

「酒癖悪いのなんのつて・・・ったく」

どうしよもうないなあ、と呟きながらも、その表情には柔らかな笑みが浮かんでいる。明日にはお別れか・・・そう思うと、こんなドタバタした騒ぎですら、月夜には愛しい時間のように思えた。

「だからつって、服脱がされるのは勘弁だけだな・・・」

皮肉気に言いながら、月夜は立ち上がる。布団かけてやらないとな、そう思いながら、月夜は各々の部屋へと足を運んだ。

「ふい・・・」

各々の部屋から回数を分けて布団を運んできた月夜は、散らばって倒れてる一人一人に丁寧な布団をかけた。部屋からとってくるぐら

いなら、茶室にある布団を使った方が早いが、月夜は前に押しつぶされた経験があるためそれはしなかった。

「ほんと、迷惑なやつらだよ・・・全くさ」

最後の一人にかけ終えた後、月夜も壁際に座り持ってきた布団を自分にかけて。どうにも、一人で部屋で寝る気にはなれなかったからだ。

「はあ・・・」

小さな溜め息をつきながら、月夜は惨状を呈しているリビングを見回す。その心情は、誰が片付けると思ってるんだ？ではなく、修理代がなあ・・・でもなく、ただ純粹な気持ちで、楽しかった。ただそれだけだった。短い時間ではあった、しかし、この家で作られた数々の思い出・・・ろくな目にあつてない場合のほうが多かったが、今では月夜にとって良い思い出である。

「サーシャが言ってたように・・・いつか、俺が犯した罪も、良い思い出になるの・・・かな？」

それは分からない。月夜自身にも、誰にも、その答えを出すことは、今は出来ない。

「それでも・・・うん、そうだな」

生きていこう、生きていたい・・・月夜は、そう強く願う。

サーシャのように、自分を責める人がこれからも出てくるだろう。

この力のせいで、また敵対しなきゃいけないやつも出てくるだろう。その度に悩んで傷ついて・・・でも、また、立ち上がって笑いながら、生きていこう。そう思う月夜は、誰よりも人間らしく・・・そして、人間だった。

次の日の朝、学校のために月夜と楓が家を出る少し前。お別れの時間がやってきた。

「それじゃ、今まで世話になったな、月夜」

「ああ、ほんと、世話させられっぱなしだったな」

玄関先で、別れることの哀しさを微塵も感じさせないランスに、月夜は笑いながら言った。

「うー・・・元気でね、お兄ちゃん・・・楓お姉ちゃんも」

「お前に言われるまでもないさ」

「リミーナちゃんも・・・元気でね」

ランスとは裏腹に、寂しそうに言うリミーナに、月夜は素っ気無く、楓は寂しそうに言った。

「二人とも仲良くやるんだよー？またねっ」

「姉さんも、ランスと仲良くね」

「お姉ちゃんも、あんまりランスに迷惑かけないようにねー」

朗らかに別れの言葉を口にする茜に、月夜は微笑みながら、楓は子どもに注意するような態度で言った。

「さて、別れの挨拶も一通り終わったのなら・・・行くわよ？」

ランス・リミーナ・茜、それぞれが口を開いた後、三人の後ろに控えていたサーシャはそう言った。

「ああ、それじゃ行こうか」

サーシャが開けたドアを、ランスは何の未練も見せずにくぐり抜けた。茜も、またね、ともう一度言ってから、その後ろに続く。

「むー・・・」

リミーナだけが、その場から動こうとしなかった。

「どうしたの？早くしないと飛行機に乗り遅れるわよ」

サーシャが促すが、それでもリミーナは動こうとはしない。

「だって・・・だってえ・・・」

今にも泣き出してしまいそうなりミーナを、楓は抱き締めた。

「大丈夫、いつでも会えるよ・・・お母さんに、会っておいで、ね？」

「・・・うん」

少しの間だけ、リミーナも楓を抱き締め返した後、その体を離れた。

「聞き分けの良い妹で、兄として嬉しいねえ」

「・・・ふんだ、お兄ちゃんの馬鹿」



リミーナはそう言った後、またねー、と言い残し、ドアから外へと出て行った。外にはタクシーが待機しており、リミーナは乗り込む。先に行っていたランスと茜は、既に乗っていた。

「さて、私もおいとまさせてもらっわ」

出て行くこうとするサーシャの背に、月夜は言葉を投げた。

「おい！」

「何？」

振り向かずに答えるサーシャに、月夜は言った。

「お前も、一休みしたい時は・・・いや、それ以外の時でも、暇にでもなつたらここに来いよ？」

その言葉に、サーシャの体は一度だけビクン、と震えた。そして、サーシャは振り向いた。

「言われなくても、いつだってお邪魔させてもらっわよ」

その表情は、とてもにこやかで、晴れ渡っていた。見つめ合う二人の間に、ちよつとした熱っぽい雰囲気が流れる。

「ああ、待ってる。じゃあ、またな」

「うん、またね」

そう言い残したサーシャは、もう月夜を見ることをせずに、ドアを閉めて、去っていった。

「静かに・・・なっちまったなあ」

閉められたドアを見ながら、月夜はそう呟く。

「そうだね・・・でも、永遠の別れじゃないから・・・大丈夫だよ、うん」

そうは言っているものの、一番寂しそうな顔をしているのは、誰でもない楓だった。

「んじゃ、気を入れ替えて、学校行こうか」

一度リビングに引き返そうとした月夜の袖を、楓が引っ張って止めた。

「どうしたん・・・だ？」

振り向いた月夜は、楓の顔を見て言葉につまった。泣いてるわけ

もない、ましてや笑ってるわけでもない。なぜか、楓は不機嫌そうな顔をしていた。

「サーシャと、何かあったの？」

突然の楓の言葉に、月夜は動揺した。

「な、何かつて、なな、なんのことだよ？」

明らかな動揺を見せた後、月夜は、まずい、と思ったが、どうやら手遅れだったようだ。

「何したの？」

月夜の動揺を見て取った楓は・・・にこやかに笑っていた。しかし、それが逆に怖い。

「さあ、学校遅刻しちゃうから急がないと・・・」

わざとらしく言いながら、月夜はリビングへと向かおうとする。しかし、しっかりと袖を握られているため、動けなかった。

「さつきは、とっつても仲良さそうだったよね？」

月夜はもう振り向けなかった。だって怖かったから。

「気のせいだよ、うん・・・」

しばしの沈黙。二人の間に流れる空気は、重苦しいなんていう表現じゃ現せないほどのものだった。

「・・・ごめんなさい」

耐えられなくなった月夜は、謝った。

「どうして謝るのかな？ちゃんと理由を言ってくれないと」

その後、月夜の弁解やら楓の攻撃やらが続き、二人が遅刻したのは言うまでもない。

ぼろぼろになった月夜は、今日も元気に寝ていた。もちろん授業中である。毎晩毎晩のどんちゃん騒ぎに、疲れたのは言うまでもなく、更に楓からの精神攻撃と肉体攻撃のダメージで、月夜はすっかり参ってしまっていた。

その日、一日の授業の八割程眠っていた月夜は、気づいたら放課後

になっていた。

「・・・寝すぎたっばい？」

「うん、寝すぎだね」

寝ぼけ眼で月夜は辺りを見回す。隣の席、利樹の席に楓が座っているが、他には誰一人いなかった。

「起こしてくれば良かったのに・・・」

「気持ち良さそうに寝てたんだもん、起こしたら悪いかな？って」  
朝はやりすぎたかな・・・なんて思った楓の気遣いだっただが、月夜はそれに気づかなかつた。

「ずっと待つててくれたのか？悪いなあ・・・」

「いいよ、月夜の寝顔見てるの面白かつたし」

楓にそう言われ、月夜は仄かに顔を赤くしながらそっぽを向いた。寝顔を見られるのは恥ずかしいことだと思ったからだ。この二人にしたら、今更かもしれないが。

「んじゃ、帰るか」

鞆を持って立ち上がるうとした月夜を、楓は止めた。

「あ、月夜。ちょっとこっち向いてよ」

「何？」

そっぽを向いていた月夜が楓の方に顔を向ける。

「よだれの後、ついてるよ」

「え、まじか!？」

とつさに制服の袖で拭こうとした月夜の手を、楓がつかんで止めた。

「だめだよ、汚くなっちゃうから・・・私が、拭いてあげるね」

「ああ、うん、悪い」

ポケットからハンカチを取り出して、月夜の顔を拭くために楓の手が顔に触れる、と思った瞬間、月夜は顔を両手で挟まれた。

「え？何を・・・むぐっ」

月夜が言葉を口にする前に、唇が塞がれた。すぐ目の前には、楓の顔がある。唇と唇が触れ合う感触・・・月夜が、キスされた、と理

解するまでに、数秒の間があった。月夜の顔はすぐに真っ赤に染まるが、楓は手も、唇も離さなかった。楓もまた、真っ赤になっている。

どれだけそうしていたのかは分からない。十秒にも満たない時間にも感じられたし、永遠にさえ感じられた。ようやく二人の顔が離れた後も、お互いゆでだこのように真っ赤になっている。

「か、帰ろうか」

照れ隠しをするように、楓が言う。

「そ、そうだな」

月夜もまた、照れ隠しをするように言う。今までで何回かキスをしている二人だが、する度にどんどん恥ずかしさが増えているように見えた。

「なあ、楓・・・」

そそくさと教室を出ようとする楓の背に、月夜が呼びかける。

「何？」

振り返った楓は、夕焼けの光に照らされ、赤く輝いている。そんな姿を見て、月夜は自分が何を言おうとしたのか忘れてしまった。

「えーと・・・うん、これからも、よろしく」

その場しのぎで出した言葉だったが、それは月夜が一番言いたかったことを単純にまとめたものなのかもしれない。

「うん、これからも、よろしくね」

仄かに顔を赤くしながら、微笑み、うたうように言う楓は、何よりも誰よりもきれいだっただ。この少女を護りたい、ずっと、そばにいたい。月夜はそんな想いを胸に秘めながら、照れ笑いを浮かべ、楓と一緒に教室を出て行った。

常にめまぐるしく変わりゆく日常・・・時には厳しく、時には楽しく・・・そんな日常を、これからも月夜は、楓とともに歩んでいくのだろう。

## それぞれの帰るべき場所（後書き）

・・・なんかようやく終わりましたorz

と言っても第二部があるんですが、個人的にはあれは黒歴史なんで正直アップする気はあつたりなかつたり・・・。

こんな無駄に長いものにここまで付き合ってくださいった方々には感謝の言葉を捧げます。

二部をあげない場合当分は大人しくしてる予定ですが、もしまた投稿することがありましたら、その時は再度よろしくお願いいたします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5311e/>

---

止むことのない雨の下で

2010年10月17日06時54分発行